

青森県埋蔵文化財調査報告書 第351集

野尻(1)遺跡 V

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2003年3月

青森県教育委員会

野 尻 (1) 遺 跡 V

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

2003年3月

青森県教育委員会



遺跡遠景と調査区域（東上空から）



B区 BC-18グリッド 基本土層



B区 東側北壁土層堆積状況



A区全景 西から



B区東側全景

第518号建物跡竪穴部炭化材出土状況



第518号建物跡竪穴部炭化材出土状況 (全体)



出土土師器



出土須惠器



出土ミニチュア土器



出土土製品



鉄生産関連遺物



土師器転用漆容器



固化した漆液（部分拡大写真）

序

浪岡町に所在する野尻(1)遺跡は、国道101号線浪岡五所川原道路建設事業の実施に伴い、国土交通省青森工事事務所の委託を受けて、平成8年度から当センターが発掘調査を実施しております。本報告書は、第5次調査となる平成13年度の発掘調査の成果をまとめたものです。

浪岡町では平安時代の遺跡が数多く調査されておりますが、今回の調査でも、平安時代の住居跡を含む集落跡や土師器・須恵器すえきなどが見つかっています。また、縄文時代の遺構、土器・石器も発見されており、土器の中には北海道の土器の影響を受けたと思われるものも含まれています。

これらの調査成果が今後の調査研究に役立ち、また、当地域の歴史学習の一端を担い、埋蔵文化財への関心をよりいっそう深めるものとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の発掘調査並びに報告書作成にあたり、ご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

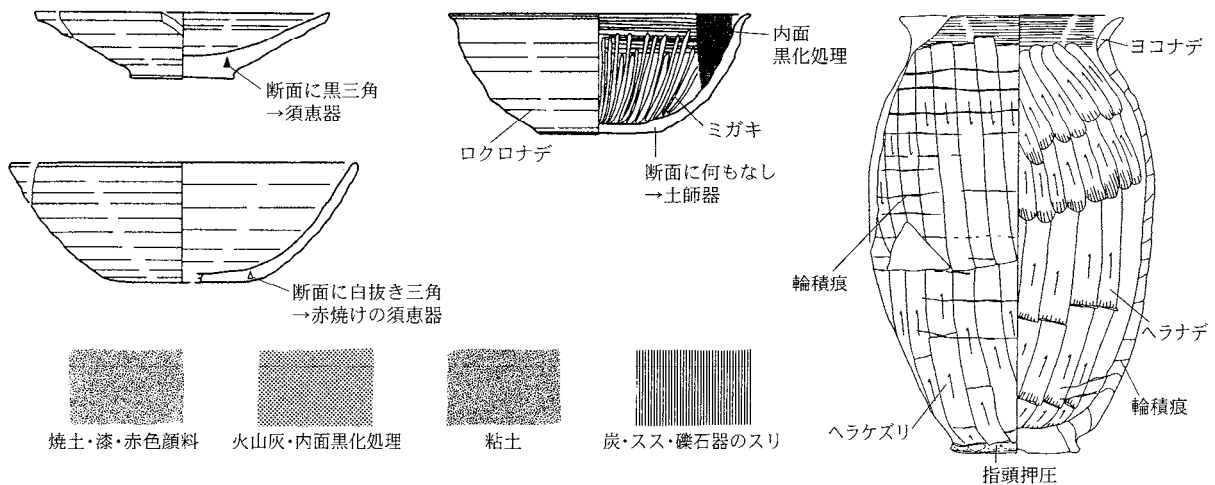
所長 佐藤良治

例 言

- 1 本報告書は、平成13年度に発掘調査を実施した国道101号浪岡五所川原道路建設事業予定地内に所在する浪岡町野尻(1)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、平成10年3月に青森県教育委員会が編集発行した『青森県遺跡地図』に遺跡番号29060として登録されている。
- 3 本報告書の執筆は茅野・佐藤が協議し行った。依頼原稿に関しては文頭に執筆者を記した。
- 4 資料の分析、鑑定については、以下の方々に依頼した（敬称略）

出土石器の石質鑑定	青森県立八戸南高等学校教諭	佐々木 辰夫
出土炭化物の放射性炭素年代測定分析	(株)地球科学研究所	
出土炭化材の樹種同定分析	木工舎「ゆい」	高橋 利彦
出土鉄製品の成分分析	(財)岩手県文化振興事業団 岩手県立博物館	赤沼 英男
第511号建物跡外周溝出土漆の科学的分析	漆器文化財科学研究所	四柳 嘉章
第501号並列溝状遺構のプラント・オパール分析	(株)古環境研究所	
遺跡内採取土壌のテフラ分析	弘前大学 理工学部	柴 正敏

- 5 本書で利用した地形図は、国土地理院発行の5万分の1の地形図「青森西部」を複写したものである。
- 6 挿図の縮尺は、各図ごとにスケールを付してある。なお、写真の縮尺は統一していない。
- 7 遺構・遺物の分章・挿図中での表現は、原則として次の様式・基準によった。
 - (1) 遺構内外の堆積土の注記には、『新版標準土色帖』（小山、竹原；1994）を用いた。
 - (2) 遺物には観察表・計測値を付した。計測値の単位は観察表に記している。
 - (3) 図中で使用したスクリーントーンの表示及び遺物の凡例は指示のない限り以下の通りである。



- 8 引用・参考文献については本文末に収めた。
- 9 出土遺物・実測図・写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターで保管している。
- 10 本報告書作成に際して、下記の諸氏より御協力、御助言を受けた（敬称略）
石井 淳、角張淳一、菅野文二、木村淳一、児玉大成、小林 克、櫻田 隆、新海和広、高杉博章、高橋 学、土岐耕二、西澤正晴、藤原宏明、横山英介

目 次

序

例言

目次

第I章 調査に至る経緯と調査要項

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 調査要項…………… 1

第II章 調査方法と調査経過

第1節 調査方法…………… 2

第2節 調査経過…………… 2

第III章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の位置…………… 4

第2節 遺跡の地形および地質…………… 4

第3節 周辺の主な遺跡…………… 5

第IV章 検出遺構と出土遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1 柱穴群…………… 9

2 土坑…………… 9

3 焼土遺溝…………… 10

4 遺物集中地点…………… 12

第2節 平安時代の遺構と出土遺物

1 建物跡…………… 14

2 土坑跡…………… 119

3 溝跡…………… 129

第3節 時期不明の遺構と遺物

1 土坑跡…………… 139

2 溝跡…………… 143

3 焼土遺構…………… 148

4 並列溝状遺構…………… 155

5 柱穴跡…………… 159

第V章 遺構外出土遺物

第1節 縄文時代の遺物…………… 167

第2節 古代の遺物…………… 168

第VI章 自然科学的分析結果

第1節 放射性炭素年代測定結果…………… 177

第2節 野尻(1)遺跡出土材・炭化材の樹種…………… 180

第3節 野尻(1)遺跡出土鉄関連資料の金属考古学的調査結果…………… 185

第4節 青森県浪岡町野尻(1)遺跡出土漆の科学分析…………… 196

第5節 青森県浪岡町野尻(1)遺跡における植物珪酸体分析…………… 199

第6節 野尻(1)遺跡出土火山灰の火山ガラス分析…………… 203

第VII章 考察とまとめ…………… 205

引用・参考文献…………… 227

遺物観察表…………… 228

写真図版

報告書抄録

図版目次

図1	野尻(1)遺跡調査区	3	図61	第518号建物跡炭化材出土状況	100
図2	野尻(1)遺跡基本土層	5	図62	第519号建物跡	101・102
図3	周辺の主な遺跡	6	図63	第518・519号建物跡出土遺物 (518竪穴部・518・518外周溝部分①)	105
図4	野尻(1)遺跡遺構配置図	7	図64	第518・519号建物跡出土遺物 (外周溝部分②)	106
図5	第五次調査区遺構配置図	8	図65	第518・519号建物跡出土遺物 (外周溝部分③)	107
図6	縄文時代の柱穴群、第527・528号土坑、 第501号溝状土坑	11	図66	第519号建物跡出土遺物(外周溝北側)	108
図7	第B区東端Ⅲ層縄文土器出土状況図	13	図67	第520号建物跡	109
図8	第501号建物跡	15・16	図68	第520号建物跡出土遺物	109
図9	第501A号建物跡	19・20	図69	第521号建物跡	111・112
図10	第501・501A号建物跡出土遺物	21	図70	第521号建物跡出土遺物 (竪穴部①・外周溝①)	115
図11	第502号建物跡	23・24	図71	第521号建物跡出土遺物(外周溝部分②)	116
図12	第502号建物跡出土遺物	25	図72	第521号建物跡出土遺物 (外周溝部分③・541号土坑①)	117
図13	第503号建物跡①	27	図73	第521号建物跡出土遺物(541号土坑②)	118
図14	第503号建物跡②	28	図74	第507・508・511・513・518号土坑、 第510～519号ピット	120
図15	第503号建物跡出土遺物	29	図75	第520・522・523・525・526号土坑	123
図16	第504号建物跡	31	図76	第529～533・537号土坑	126
図17	第504・504A号建物跡出土遺物	33	図77	第542・544・548・549号土坑	128
図18	第505号建物跡	35・36	図78	平安時代の土坑出土遺物	129
図19	第503・504・512・514号土坑、第509号溝跡	38	図79	第513号溝跡	130
図20	第509号土坑・第509号溝跡・ 第506～508・520号ピット	39	図80	第515・516・525号溝跡	133
図21	第505号建物跡、第503・504・ 509・512・514号土坑出土遺物	42	図81	第526号溝跡	135
図22	第506号建物跡	43・44	図82	第513号溝跡出土遺物①	136
図23	第506号建物跡出土遺物(竪穴部①)	46	図83	第513号溝跡出土遺物②	137
図24	第506号建物跡出土遺物(竪穴部②)	47	図84	第525・526号溝跡、 第16・27号溝跡出土遺物	138
図25	第506号建物跡出土遺物 (外周溝・517号溝部分)	48	図85	第501・502・519・524・ 536・539・543号土坑	141
図26	第507号建物跡	50	図86	第545～547号土坑	142
図27	第507号建物跡出土遺物	51	図87	第501・502・505・506・511・518号溝跡	144
図28	第508号建物跡①	52	図88	第519・520号溝跡	147
図29	第508号建物跡②	53	図89	第510・514・521～523号溝跡	149・150
図30	第508号建物跡出土遺物(外周溝部分①)	54	図90	第501～506号焼土遺構	152
図31	第508号建物跡出土遺物(外周溝部分②)	55	図91	第507～512号焼土遺構	154
図32	第509号建物跡	57・58	図92	第501～504号並列溝状遺構	156
図33	第509号建物跡出土遺物	59	図93	第505～507号並列溝状遺構	158
図34	第510号建物跡①	61・62	図94	第501～505号ピット	159
図35	第510号建物跡②	63	図95	第522～524・526～531号ピット	163
図36	第510A号建物跡①	66	図96	第543～545・551・552・ 554・555号ピット	164
図37	第510A号建物跡②	67	図97	第558～564号ピット	165
図38	第510号建物跡出土遺物(竪穴部分①)	68	図98	古代以降の遺構出土遺物	165
図39	第510号建物跡出土遺物(竪穴部分②・ 外周溝部分①)	69	図99	第C区火山灰(B-Tm)範囲	166
図40	第510号建物跡出土遺物(外周溝②)	70	図100	遺構外出土遺物①	169
図41	第510号建物跡出土遺物 (外周溝③・508号土坑)	71	図101	遺構外出土遺物②	170
図42	第511号建物跡①	73	図102	遺構外出土遺物③	171
図43	第511号建物跡②	74	図103	遺構外出土遺物④	172
図44	第511号建物跡出土遺物(竪穴部分①)	75	図104	遺構外出土遺物⑤	174
図45	第511号建物跡出土遺物 (竪穴部分②・外周溝部分)	76	図105	遺構外出土遺物⑥	175
図46	第512号建物跡	78	図106	遺構外出土遺物⑦	176
図47	第512号建物跡出土遺物	79	図107	縄文後期土器出土エリア	206
図48	第513号建物跡	81・82	図108	野尻(1)における縄文時代後期の土器 共存関係図	207
図49	第513号建物跡遺物出土状況	84	図109	建物跡の分類図	211
図50	第513号建物跡出土遺物	84	図110	竪穴部の規模分布	212
図51	第515号建物跡	85・86	図111	竪穴部主軸方位の分布	212
図52	第515号建物跡出土遺物①	88	図112	土師器・須恵器の形状分類図	217
図53	第515号建物跡出土遺物②	89	図113	墨書・刻書集成図①	221
図54	第515号建物跡出土遺物③	90	図114	墨書・刻書集成図②	221
図55	第515号建物跡出土遺物④	91	図115	墨書・刻書集成図③	221
図56	第516号建物跡	93	図116	墨書・刻書集成図④	221
図57	第516号建物跡出土遺物	94	図117	墨書・刻書集成図⑤	222
図58	第517号建物跡	96			
図59	第517号建物跡出土遺物	97			
図60	第518号建物跡	98			

第 I 章 調査に至る経緯と調査要項

第 1 節 調査に至る経緯

一般国道101号津軽自動車道浪岡五所川原道路は、浪岡町を起点とし五所川原市に至る、自動車専用道路である。平成3年度に青森県の事業として着手され、平成5年度から建設省（現 国土交通省）の事業へ移行し、平成11年度から工事に着手され現在に至っている。青森県教育委員会では、平成3年度に本計画道路と埋蔵文化財保護の調整を図る基本資料を得るため、計画路線内及び周辺の遺跡分布調査を実施した。野尻(1)遺跡はその際新たに確認された遺跡である。関係機関との協議の結果、平成8年度から調査を開始することになり、平成10年度まで3次にわたる調査を実施した。また、第4次調査は平成12年度に実施した。それらの成果は報告書として刊行されている。（青森県埋蔵文化財調査報告書 第234・259・277・320集）

今回報告となる第5次調査は平成13年4月20日に調査を開始した。当初の予定では4月20日から10月30日までの期間に野尻(1)遺跡（4,000㎡）と、山元(1)遺跡（5,000㎡）の2遺跡を調査する予定であったが、7月16日に国土交通省青森工事事務所の要請があり、山元(1)遺跡に代わり、より緊急性の高い野尻(1)遺跡の別地点（C区）を7月23日より調査することとなった。

第 2 節 調査要項

- 1 調査目的 国道101号浪岡五所川原道路建設事業の実施に先立ち、当該地区に所在する野尻(1)遺跡の発掘調査を行い、その記録を保存して、地域社会の文化財の活用に資する。
- 2 発掘調査期間 平成13年4月20日～平成13年10月30日
- 3 遺跡名及び所在地 野尻(1)遺跡（県遺跡番号29060）
青森県南津軽郡浪岡町大字徳才子字山本175-141外
- 4 調査面積 9,400㎡
- 5 調査委託者 国土交通省東北地方整備局青森工事事務所
- 6 調査受託者 青森県教育委員会
- 7 調査担当機関 青森県埋蔵文化財調査センター
- 8 調査体制

調査指導員	村越 潔	青森大学教授	(考古学)
調査員	工藤 一弥	青森県総合学校教育センター指導主事	(地質学)
"	工藤 清泰	浪岡町教育委員会生涯学習課文化班長	(考古学)
調査担当者	青森県埋蔵文化財調査センター		
所長	中島 邦夫 (現県立郷土館館長)		
次長 (調査第一課長兼務)	成田 誠治 (平成14年3月定年退職)		
総務課長	西口 良一 (現労政・能力開発課総括主幹)		
調査第一課	文化財保護主幹	櫻井 有一	
	文化財保護主事	佐藤 純子	
	文化財保護主事	茅野 嘉雄	
	調査補助員	松原 朋子 (平成14年3月退職)	
		工藤真優子 奈良岡詩織 長谷川蓉子	

第Ⅱ章 調査方法と調査経過

第1節 調査方法

1 グリッドの設定

野尻(1)遺跡のこれまで5か年に及ぶ発掘調査では、平成8年度の調査で設定されたグリッドを基準とし、それを延長して使用していることから、平成13年度の調査にあたってはそれを踏襲した。

平成8年度の調査で、道路建設用の中心杭ENo.3とENo.7を結ぶ東西の線をグリッド設定の基準線とし、CRラインと呼称した（CRラインは座標北から東に88度傾いている。第1次調査報告書においては磁北から2度と記載されているが、座標北すなわち真北の誤りである。記して訂正する。なお、図版中の方位マークは真北を示している。）。このCRラインにENo.7で直交する点を基準とし、南北のラインに4m単位でアルファベット2文字の組み合わせ、東西のラインに同じく4m単位で算用数字を付して設定した。4m×4mの各グリッド名は、南北と東西のラインの北東隅の交点で表示した。

今回の調査区は、A区・B区がBA～BG（南北）・12～61（東西）のライン、C区がBU～CN（南北）・15～33（東西）のラインに囲まれた範囲となる。

測量原点（ベンチマーク）は、道路工事に用いる3級水準点から原点移動を行い、調査区内に3点設定した。

2 遺構の調査

検出遺構は、原則として確認順・遺構の種類別に、第5次の調査であることから、500番台の番号を付して精査した。セクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的に4分割ないし2分割で設定した。遺構内の堆積土層には算用数字を付して、ローマ数字を付した基本土層と区別した。遺構の実測図は、簡易遣り方測量によって、原則縮尺20分の1で作成した。0

3 遺物の調査

遺構内外の遺物については、必要に応じて、縮尺20分の1ないし10分の1で実測図を作成し、それ以外については、遺構及びグリッド単位で種類別・層位ごとに一括して取り上げた。

4 写真撮影

基本的に35ミリのモノクローム、カラーリバーサル2種類のフィルムを使用し、必要に応じて6×7版カメラ、35mmカラーネガ及びポラロイドフィルムを併用した。撮影にあたっては、主に土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況を記録し、必要に応じ、作業状況等の記録にも努めた。

第2節 調査経過

4月20日、調査機材等を現地に搬入し、環境整備後、平成12年度に遺構確認を一部行った区域（A区）から発掘調査を開始した。また同時に町道を挟んで東側の区域（B区）についても、調査を開始した。4月26日からは一部重機を使いながら表土の除去を行い、遺構確認を行った。その結果A区・B区には14軒の建物跡、26基の土坑、18条の溝跡、5基の焼土遺構が確認された。

5月22日には国土交通省・県文化財保護課・遺跡発掘担当者の3者により山元(1)遺跡の調査範囲を確認し、境界杭の打設を国土交通省に依頼。7月3日には杭の打設が終わり、地表面に残る立木の処理を残すのみとなったが、7月16日に国土交通省青森工事事務所から、急遽野尻(1)遺跡の別地点を先に調査してほしいとの要請を受けた。関係機関と協議の結果、山元(1)遺跡の調査は見送りとなり、野尻(1)遺跡（C区）の調査を行うことになった。

A・B区の調査はやや遅れながらも、平安時代の生活面である第II層までの精査を8月21日までに終了し、順次C区の調査に移っていたが、B区の東端部のIII層を掘削中に同層中に縄文時代後期の包含層があることが判明、その精査に約4日間費やしたため、A・B区の調査は8月29日をもって終了した。C区には8月6日～9日に重機を使用して表土を除去し、遺構確認を行った。その結果C区からは建物跡5軒、土坑22基、溝7条、焼土遺構8基、並列溝状遺構7箇所等が確認された。C区北端は黒色土（III層）が厚く堆積しており、遺構確認もその面で行う必要があり、やや時間を要した。また、同区域には遺構がまとまって検出されたことから、これらの精査にも時間を要した。10月17日にはラジコンヘリによる空中撮影を行った。10月29日にはすべての遺構の精査を終了し、10月30日には平成13年度の発掘調査を終了した。

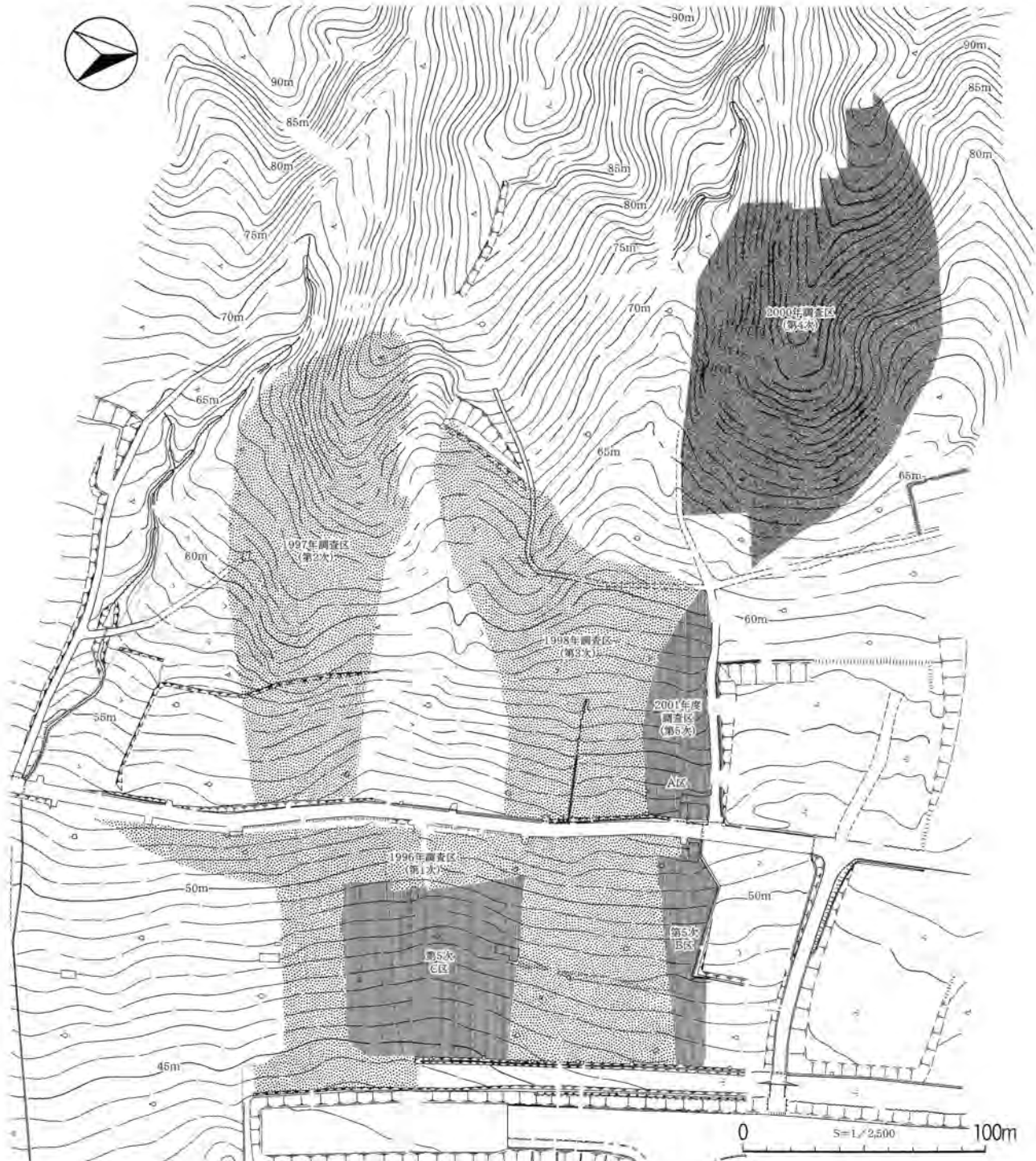


図1 野尻(1)遺跡調査区

第三章 遺跡周辺の環境

第1節 遺跡の位置 (図3)

野尻(1)遺跡は、津軽半島南部の梵珠山から南に下る大釈迦川の右岸にあり、東に向かって傾斜する河岸段丘上を中心に広がっている。JR奥羽本線大釈迦駅から南西へ直線距離で約1.2kmの地点にあり、周囲をリンゴ園に囲まれている。なお、大釈迦川はさらに南下し、浪岡町の女鹿沢付近で浪岡川に合流する。野尻(1)遺跡は総面積50,000㎡を超える広大な遺跡であるが、今回の調査区は第1～3次調査同様、地形的に中位段丘面に相当する標高45m～60m程に位置する。第5次調査区はA～Cの3区域に分かれる。近年までリンゴ園や畑地として利用され、土層に改変を受けている箇所が多い。

第2節 遺跡の地形および地質

1 調査区内の基本土層について (図2)

第5次調査区域の基本土層は基本的に隣接する第1・3次調査区と大差はない。ここでは調査区内の基本層序についてこれまでの報告との対比を行い、その後調査区内の微地形について説明する。

○ 基本層序について (図2)

遺跡内の各地点 (図5) において土層断面を観察した。各地点の層位対比は図2のとおりである。遺跡北側に向かってⅡ～Ⅲ層がしっかりと堆積するようになっている。後述するが、特に今回調査区のB区北東側 (土層G) 付近ではⅡ層中に砂質土・粘質土が顕著に混入している。

○ 遺跡内の微地形について (図4)

第5次調査区は前述のとおりA～C区の3地点にわかれている。そのうちA区とB区は東西方向にほぼ隣接しており、A区からB区へ傾斜している。両地区共に黒色土 (Ⅱ～Ⅲ層) がやや厚めに堆積する。特にA区南半 (第501号建物跡付近) ・B区東端 (第513号建物跡付近) ではⅡ層の堆積も部分的に見られる。A区内には第4次調査区南脇から流れてくる沢 (沢①) が続いており、そのままB区の北側に流れ込んでいる。第513号溝跡はこの沢の一部である。沢1は山本遺跡と野尻(1)遺跡を隔てる沢である。A区と第3次調査区の間にも小規模ではあるが、沢地形が見られる (沢②)。第501号建物跡付近から第507号建物跡南脇付近を通過している。第3次調査で第301・302号溝跡としたものと、第1次調査で第15号溝跡としたものはこの沢の流水の影響でできた溝状の地形であると考えられる。B区東端の黒色土層については、第Ⅴ層面が沢① (調査区外) に向かってやや傾斜し始めているため堆積が厚くなったと考えられる。C区は第1次調査区に挟まれる形で設定されている。この区域内では北側に向かって徐々に黒色土が厚く堆積するようになる。C区内の標高は最も高い部分で標高49m、最も低い部分で標高44m (Ⅴ層上面) となっており、南西から北東方向に緩く傾斜していることがわかる。特に第506号焼土遺構付近では遺構外に白頭山苦小牧火山灰が堆積しているのが確認されている。この付近も小規模な沢地形であり (沢⑤)、第3次調査区の第318号建物跡・第317号建物跡付近からそれぞれ始まった沢地形 (沢④) が合流し、第6号土坑・第525号溝跡付近を通り第506号焼土遺構付近で調査区外へ続いている。このように調査区内には東西方向に細かく沢が横断しているが、特にB区東端には図2に示すとおり、第Ⅲ層上位に第Ⅱ層が層厚20～30cmで堆積する。この付近ではⅢ層から縄文時代後期前半の土器群がまとまって出土し、そのⅢ層とⅡb・c層を掘り込んで平安時代の遺構が構築されている。その上位にはⅡa層が堆積し、それを掘り込んで第511・518号溝跡等、平安時代より新しい時期の遺構が構築されている。これらⅡ

層に類似した層はA区（第501号建物跡付近）でも狭い範囲で確認された。

第3節 周辺の主な遺跡（図3）

周辺の遺跡については第1次調査報告書（青埋分報234集）、第4次調査報告書（青埋分報320集）等に詳しいので、今回は遺跡位置図を示すにとどめる。

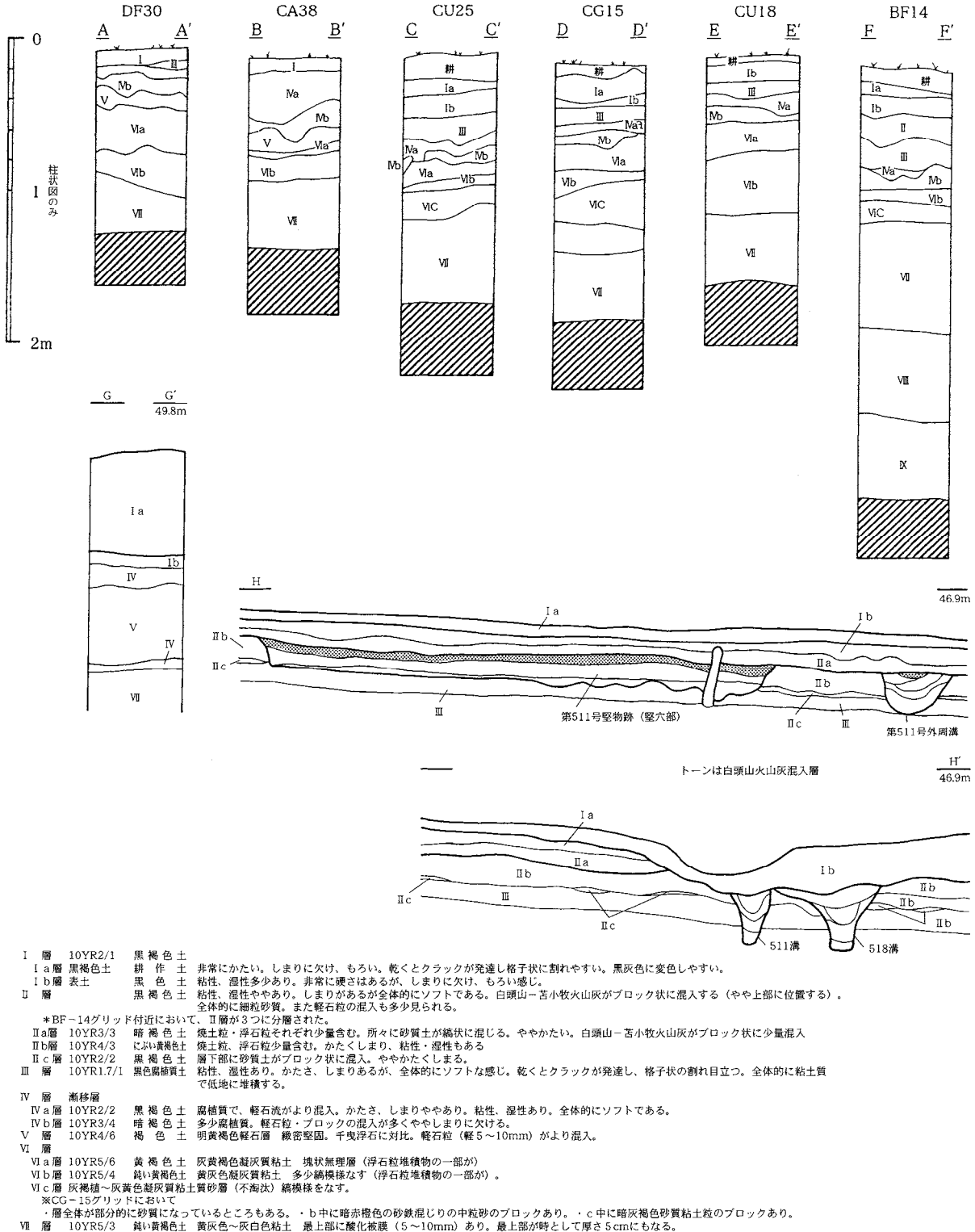
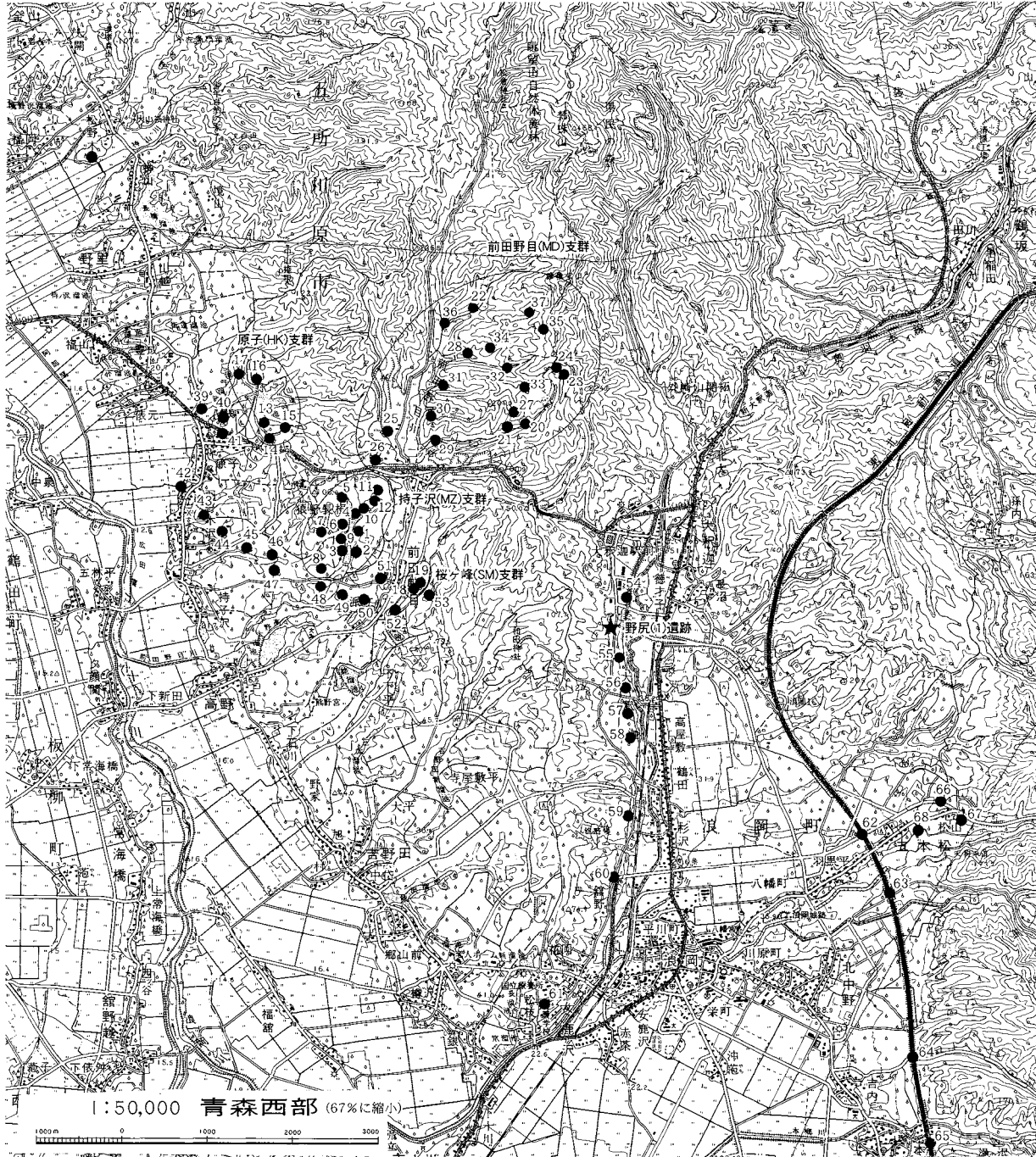
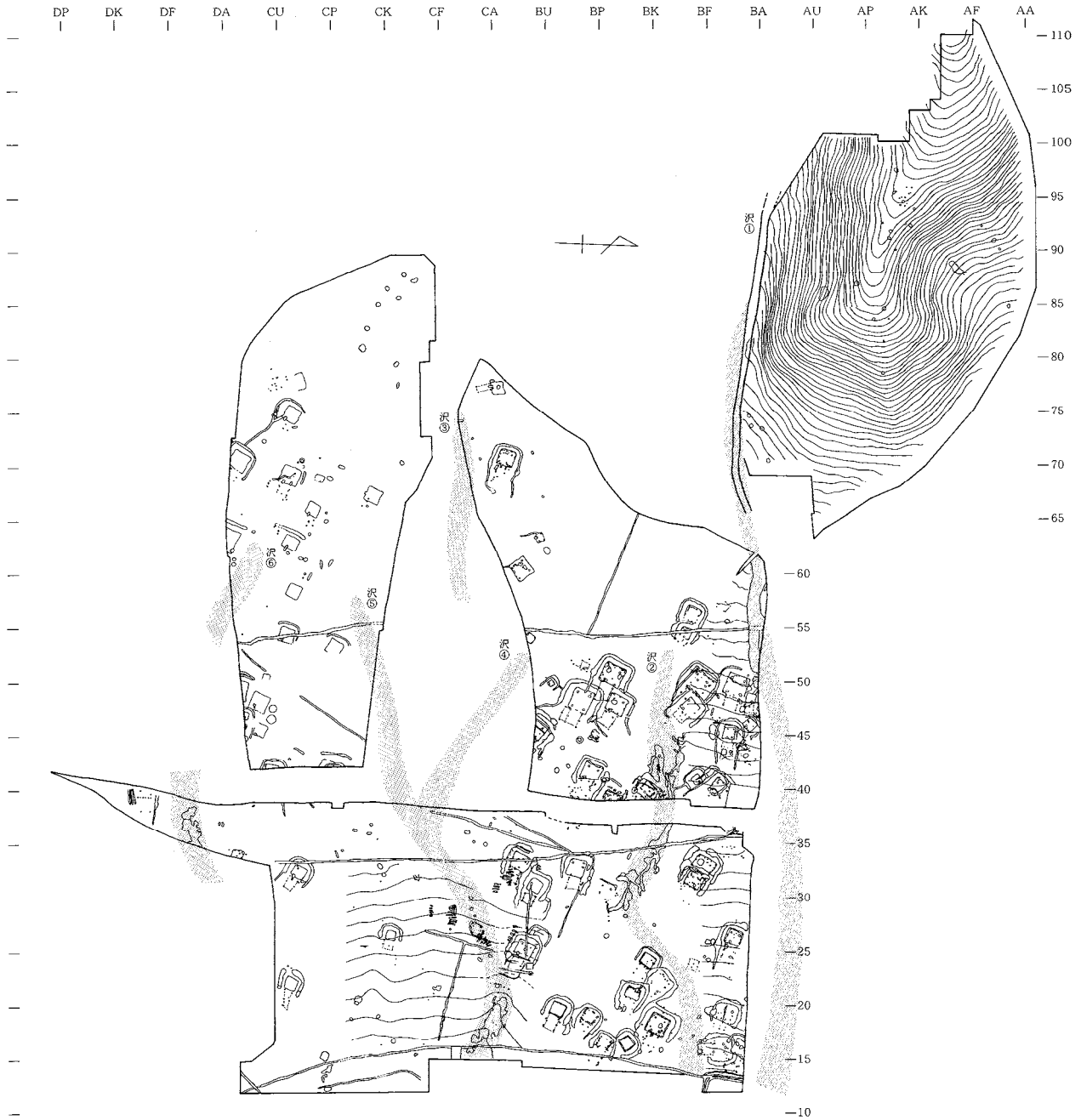


図2 野尻（1）遺跡基本土層



番号	遺跡名	市町村	遺跡番号	番号	遺跡名	市町村	遺跡番号	番号	遺跡名	市町村	遺跡番号
1	MZ1号竪 (持子沢A遺跡)	五所川原市	0.5.0.2.1	24	MD5号竪 (砂田D-2号竪)	五所川原市	0.5.0.1.5	47	隠川(11)	五所川原市	0.5.0.7.1
2	MZ2号竪 (持子沢B遺跡)	五所川原市	0.5.0.2.2	25	MD6号竪 (鞠ノ沢竪)	五所川原市	0.5.0.1.7	48	隠川(12)	五所川原市	0.5.0.7.2
3	MZ3号竪 (持子沢C遺跡)	五所川原市	0.5.0.2.3	26	MD7号竪 (犬走竪)	五所川原市	0.5.0.9.1	49	隠川(4)	五所川原市	0.5.0.6.4
4	MZ4号竪 (持子沢D遺跡)	五所川原市	0.5.0.2.4	27	MD8号竪 (砂田B遺跡)	五所川原市	0.5.0.1.1	50	隠川(3)	五所川原市	0.5.0.6.3
5	MZ5号竪 (隠川(13)遺跡)	五所川原市	0.5.0.9.2	28	MD9号竪 (野尻遺跡)	五所川原市	0.5.0.1.5	51	隠川(2)	五所川原市	0.5.0.6.2
6	MZ6号竪 (隠川(1)遺跡)	五所川原市	0.5.0.2.0	29	MD10号竪 (砂田F遺跡)	五所川原市	0.5.0.9.3	52	真言船跡	五所川原市	0.5.0.4.3
7	MZ7号竪 (隈無(?)遺跡)	五所川原市	0.5.0.7.9	30	MD11号竪 (砂田G遺跡)	五所川原市	0.5.0.9.4	53	桜ヶ峰(2)	五所川原市	0.5.0.5.9
8	MZ8号竪 (隠川(10)遺跡)	五所川原市	0.5.0.7.0	31	MD12号竪 (前田野目山(1)遺跡)	五所川原市	0.5.0.9.7	54	山本	浪岡町	2.9.0.4.9
9	MZ9号竪 (持子沢C遺跡)	五所川原市	0.5.0.2.3	32	MD13号竪 (前田野目山(2)遺跡)	五所川原市	0.5.0.9.6	55	野尻(4)	浪岡町	2.9.0.6.3
10	MZ10号竪 (持子沢D遺跡)	五所川原市	0.5.0.2.4	33	MD14号竪 (前田野目山(2)遺跡)	五所川原市	0.5.0.9.6	56	野尻(2)	浪岡町	2.9.0.6.1
11	MZ11号竪 (持子沢C遺跡)	五所川原市	0.5.0.2.4	34	MD15号竪 (前田野目山(3)遺跡)	五所川原市	0.5.0.9.7	57	野尻(3)	浪岡町	2.9.0.6.2
12	MZ12号竪 (持子沢D遺跡)	五所川原市	0.5.0.2.4	35	MD16号竪 (前田野目山(4)遺跡)	五所川原市	0.5.0.9.8	58	高屋敷跡	浪岡町	2.9.0.0.3
13	HK1号竪 (山道溜池遺跡)	五所川原市	0.5.0.1.0	36	MD17号竪 (砂田C遺跡)	五所川原市	0.5.0.1.3	59	山元(2)	浪岡町	2.9.0.5.5
14	HK2号竪 (山道溜池遺跡)	五所川原市	0.5.0.1.0	37	MD18号竪 (前田野目山(5)遺跡)	五所川原市	0.5.0.9.9	60	山元(3)	浪岡町	2.9.0.5.6
15	HK3号竪 (山道溜池遺跡)	五所川原市	0.5.0.1.0	38	観音林	五所川原市	0.5.0.0.2	61	長溜池	浪岡町	2.9.0.1.4
16	HK4号竪(原子下溜池(4)遺跡)	五所川原市	0.5.0.3.9	39	原子溜池(5)	五所川原市	0.5.0.4.0	62	羽黒平(1)	浪岡町	2.9.0.1.7
17	HK5号竪 (紅葉遺跡)	五所川原市	0.5.0.1.2	40	原子城	五所川原市	0.5.0.0.6	63	源常平	浪岡町	2.9.0.2.7
18	SM1号竪 (桜ヶ峰(1)遺跡)	五所川原市	0.5.0.0.9	41	原子溜池(1)	五所川原市	0.5.0.0.3	64	杉ノ沢	浪岡町	2.9.0.3.8
19	SM2号竪 (桜ヶ峰(1)遺跡)	五所川原市	0.5.0.0.9	42	実吉	五所川原市	0.5.0.9.0	65	松元	浪岡町	2.9.0.4.4
20	MD1号竪 (砂田B-1号竪)	五所川原市	0.5.0.1.1	43	隈無(2)	五所川原市	0.5.0.7.4	66	平野	浪岡町	2.9.0.5.7
21	MD2号竪 (砂田B-2号竪)	五所川原市	0.5.0.1.2	44	隈無(4)	五所川原市	0.5.0.7.6	67	松山	浪岡町	2.9.0.2.6
22	MD3号竪 (砂田C遺跡)	五所川原市	0.5.0.1.3	45	隈無(1)	五所川原市	0.5.0.7.3	68	羽黒平(3)	浪岡町	2.9.0.1.9
23	MD4号竪 (砂田D-1号竪)	五所川原市	0.5.0.1.4	46	隈無(6)	五所川原市	0.5.0.7.8				

図3 周辺の主な遺跡



グリッド坑	X	Y
BK 45	82620.398	-21043.431
BP 40	82600.991	-21022.830
BP 50	82599.787	-21062.808
BP 56	82599.068	-21086.809
BU 40	82581.029	-21022.229
BU 50	82579.794	-21062.207
BU 60	82578.635	-21102.200
AK 70	82717.399	-21146.428
AK 80	82716.204	-21186.411
AK 90	82715.008	-21226.393
AK 100	82713.813	-21266.375
AP 70	82697.408	-21145.831
AP 80	82696.213	-21185.813
AP 90	82695.017	-21225.795
AP 100	82693.822	-21265.777
BW 10	82576.635	-20902.113
BW 15	82576.037	-20922.104
BW 20	82575.440	-20942.095
BW 25	82574.842	-20962.086
BW 30	82574.245	-20982.077

座標値は旧日本測地系 (Tokyo Datum) に即す

図4 野尻(1)遺跡遺構配置図

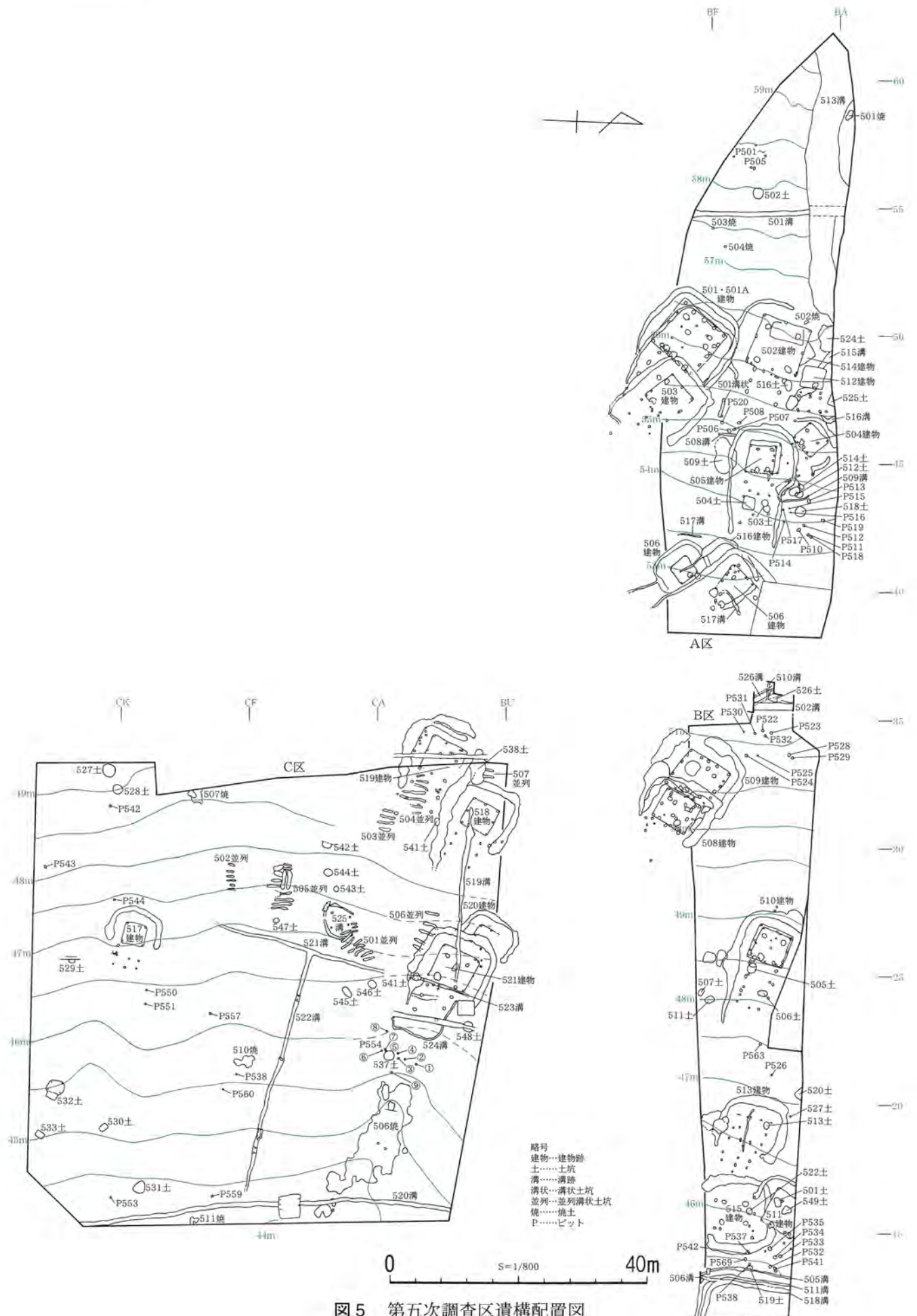


図5 第五次調査区遺構配置図

第IV章 検出遺構と出土遺物

はじめに

平成13年度の調査（第5次調査）では縄文時代から近現代の遺構・遺物が発見された。

縄文時代に帰属するものは柱穴群1箇所・土坑2基・溝状土坑1基・焼土跡2基・遺物集中地点3箇所であり、段ボール箱で5箱の遺物が出土している。出土遺物の時期は縄文時代前期初頭から晩期であるが、主体を占めているのは、縄文時代後期前半のいわゆる十腰内1b式土器である。

古代に帰属するものは建物跡25軒（建て替え含む）・土坑31基・溝跡8条である。建物跡については、竪穴部・掘立部とそれを囲む外周溝のいわゆる3点セットで構成されるものが大部分を占める。これらの帰属時期については、その全てが白頭山-苦小牧火山灰よりも古いことが判明した。

古代以降近現代については時期決定の根拠に欠ける遺構が多いが、土坑9基・溝跡14条・柱穴跡15基・焼土遺構10基・並列溝状遺構7基が発見されている。

第1節 縄文時代の遺構と出土遺物

1 柱穴群

第533～542号柱穴跡群（図6）

〔位置・確認・形態〕 B区東側、BC～BD-13～14グリッドに位置する。周辺の第Ⅲ層から出土している縄文時代後期の土器を取り上げた後、Ⅳ～Ⅴ層面で確認した。周囲は第515号建物跡・第505号溝等により一部Ⅴ層まで掘削を受けているが、それ以外ではⅢ層の残りは良好であった。およそ直径6mの範囲から10基の柱穴が発見された。その中でも、ピット534～539はややいびつであるが細長い亀甲状に配置されていると見ることも可能である。またはピット540等も考慮するならば、BD-14グリッド杭付近を中心とした円形の配置の可能性もある。

〔重複〕 ピット540が第515号建物跡外周溝と重複関係にあり、ピット540の方が古い。

〔堆積土〕 Ⅲ層起源の黒色土主体の土層である。

〔出土遺物〕 ピット541からは縄文土器が出土している。（図102-31a）また、ピット539から出土した炭化物(NOJI-6)は放射性年代測定にかけられ、補正14C年代で 3570 ± 40 ybpの値を得た。（第VI章第1節参照）。

〔小結〕 本遺構群は確認状況と出土遺物等から縄文時代後期以前の柱穴群と考えられる。

2 土坑

第527号土坑（図6）

〔位置・確認〕 C区南西端、CK-32・33グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。

〔重複〕 無し。

〔形態・規模〕 平面形は上場の長軸2.1m、短軸1.98mのほぼ円形である。確認面からの深さは66cmである。

〔壁・底面〕 壁・底面はⅤ層を掘り込んでいる。壁はやや斜めに立ち上がり、底面は概ね平坦である。

〔堆積土〕 5層に分層された。Ⅲ層起源の黒色土とⅤ層起源の浮石流の混合土を主体としている。2層中央部では炭化物粒が集中して検出されている。この炭化物の一部(NOJI-7)は放射性炭素年代測定を行っており、補正14C年代で 2860 ± 40 ybpの値を得た。（第VI章第1節参照）

〔出土遺物〕 無し。

〔小結〕 堆積土の様子・形状等から縄文時代の土坑である。

第528号土坑 (図6)

【位置・確認】 C区南西端、CK-32グリッドに位置する。V層上面で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模】 平面形は長軸1.44m、短軸1.38mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは36cmである。

【壁・底面】 壁・底面はV層を掘り込んでいる。壁はやや斜めに立ち上がり、底面は概ね平坦である。

【堆積土】 3層に分層された。ほぼ人為堆積と考えられる。

【出土遺物】 覆土中位西側からは礫が数個出土しているが、石器と判断されるものはなかった。

【小結】 堆積土が第527号土坑と類似しているため、本土坑は縄文時代に帰属すると考えられる。

第501号溝状土坑 (図6)

【位置・確認】 A区中央、BE-44グリッドに位置する。IV層上面で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模】 平面形は長軸3.06m、短軸0.3mの細長い楕円形を呈する。確認面からの深さは66cmである。長軸方向は等高線にほぼ直角である。

【壁・底面】 壁・底面はV層を掘り込んでいる。長軸方向の壁はオーバーハングしている。短軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面は若干東側に向かって傾斜している。

【堆積土】 4層に分層された。Ⅲ層の黒色土を主体としている。ほぼ自然堆積と考えられる。

【出土遺物】 無し。

【小結】 本遺構は形状等から縄文時代の落とし穴として使用された土坑と考えられる。この種の遺構は本遺跡においてこれまでに6基調査されている(第1次調査2基、第2次調査4基)。その全ての主軸方向は本遺構と同様に等高線に直行している。

3 焼土遺構

第506号焼土遺構 (図90)

【位置・確認】 BX-19・20、BY-17~20、CA-17~19、CB-15~17、CC-15・16の各グリッドに位置する。調査区の西から東へかけて下っていく沢状地形のくぼ地で確認された。白頭山-苦小牧火山灰を含むⅡ層を取り除いたところ、Ⅲ層上面に一部が露出したためさらに掘り下げて確認した。

【重複】 第539号土坑跡・第520溝跡・火山灰集中範囲と重複する。いずれも本遺構より新しい。

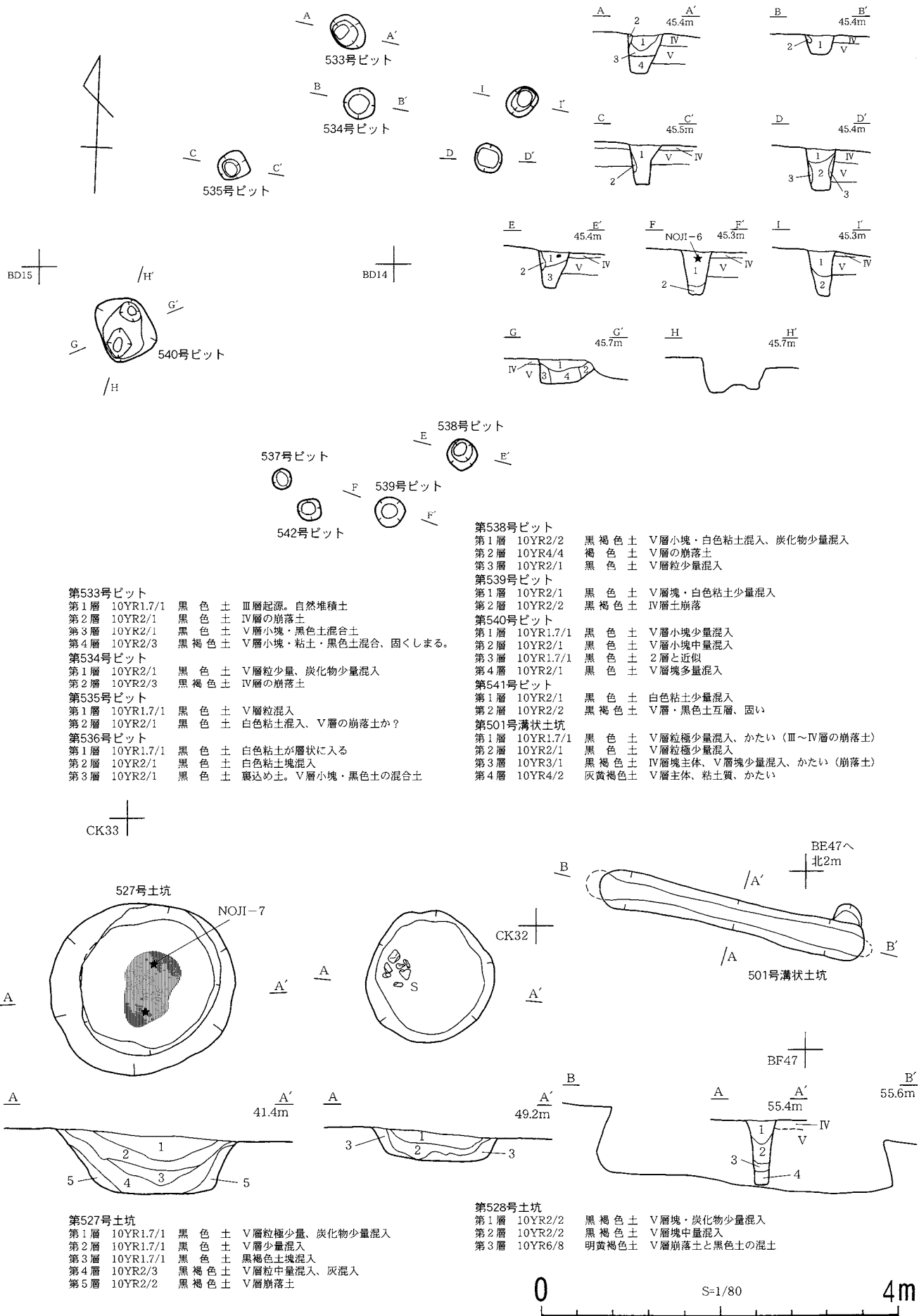
【形態・規模】 長軸35m×短軸9mの不整な形をしている。赤化の深さは約6~14cmである。

【壁・底面】 はっきりした立ち上がりは見られない。底面はなだらかに起伏する。Ⅲ層上位からⅣ層を底面とする。

【堆積土】 Ⅲ層が赤化した赤褐色土を主体とする単層である。赤化部分と付近の基本土層第Ⅲ層の土を採取・分析したところ、2つの土壌の成分はほぼ同じという結果であった(第Ⅵ章第6節参照)。ただし赤化の理由は不明である。

【出土遺物】 なし。

【小結】 本遺構は縄文時代後期の遺物を含むⅢ層中で確認されていることから、縄文時代に帰属すると考えられる。



- 第533号ピット**
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 III層起源。自然堆積土
 第2層 10YR2/1 黒色土 IV層の崩落土
 第3層 10YR2/1 黒色土 V層小塊・黒色土混合土
 第4層 10YR2/3 黒褐色土 V層小塊・粘土・黒色土混合、固くしまる。
- 第534号ピット**
 第1層 10YR2/1 黒色土 V層粒少量、炭化物少量混入
 第2層 10YR2/3 黒褐色土 IV層の崩落土
- 第535号ピット**
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 白色粘土混入、V層の崩落土か？
- 第536号ピット**
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 白色粘土が層状に入る
 第2層 10YR2/1 黒色土 白色粘土塊混入
 第3層 10YR2/1 黒色土 裏込め土。V層小塊・黒色土の混合土

- 第538号ピット**
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層小塊・白色粘土混入、炭化物少量混入
 第2層 10YR4/4 褐色土 V層の崩落土
 第3層 10YR2/1 黒色土 V層粒少量混入
- 第539号ピット**
 第1層 10YR2/1 黒色土 V層塊・白色粘土少量混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 IV層土崩落
- 第540号ピット**
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 V層小塊少量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層小塊中量混入
 第3層 10YR1.7/1 黒色土 2層と近似
 第4層 10YR2/1 黒色土 V層塊多量混入
- 第541号ピット**
 第1層 10YR2/1 黒色土 白色粘土少量混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層・黒色土互層、固い
- 第501号溝状土坑**
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒極少量混入、かたい(III~IV層の崩落土)
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層粒極少量混入
 第3層 10YR3/1 黒褐色土 IV層塊主体、V層塊少量混入、かたい(崩落土)
 第4層 10YR4/2 灰黄褐色土 V層主体、粘土質、かたい

図6 縄文時代の柱穴群、第527・528号土坑、第501号溝状土坑

4 遺物集中地点 (図7)

[概要] B区内に大小4箇所の縄文時代後期の遺物集中地点が確認された。それぞれに西側のものから1～4の番号をつけている。いずれの集中地点もおおまかに現在の編年でいう十腰内I b式の時期の遺物が出土している。また、遺物図版については遺構外出土遺物として図100～103に掲載している。

遺物集中地点1

[位置・確認] B区中央東側、BC-16グリッドに位置する。直径約1.5mの範囲内から100点近くの遺物が出土した。

14・15・23・28・30の個体が出土している。23と28は集中地点3の破片と接合している。

遺物集中地点2

[位置・確認] B区東側、BD-15グリッドに位置する。直径約6mの範囲内に百数十点の遺物がややまとまって出土した。範囲内では17・22・26・29・30・32が出土しており、17・29は集中地点3の、26は集中地点4の破片とそれぞれ接合した。

遺物集中地点3

[位置・確認] B区東側BC・BD-13・14グリッドに位置する。第515号建物跡外周溝と第505号溝の間において、およそ5×10mの範囲内に300点近くの遺物が集中して出土した。出土層位はⅢ層中である。13・15・17・19・20・21・23・24・27・28・29・31・33・34・35・36が出土している。内17・29は遺物集中地点2の、23・28は遺物集中地点1の破片とそれぞれ接合している。出土した土器のほとんどは包含状況のためか、表面がぼろぼろなものが多く、文様の識別や接合は困難を極めた。遺物の下位からは柱穴群を検出した。

遺物集中地点4

[位置・確認] B区東側BC・BD-12グリッドに位置する。Ⅲ層中において、直径約5mの範囲から数十点の遺物が出土した。範囲内からは16・18・20・26が出土し、内26が集中範囲2の破片と接合した。

これらの集中地点出土遺物及び遺構外出土遺物については後ほど第Ⅴ章と第Ⅶ章で詳述するが、B区では遺物集中地点1を境にして、ほぼ東西で出土遺物の特徴が異なっている。集中地点1の西側遺構外からはほぼ十腰内I b式と捉えられる土器が出土している。これらは器面調整が丁寧で表面が滑らかであること、沈線の幅が細いこと、磨消縄文的な技法（縄文施文後沈線施文）が見られない、等の特徴が見られる土器群である。対して東側（遺物集中地点1～4）の土器群では、（包含状況のせいも多分にあるが、）器表面の調整が粗雑、沈線幅が広く、先の丸い工具を使用している、磨消縄文的技法（縄文施文後沈線施文）が多用されている、沈線間に条線が見られる、等の特徴が見られる。これらは十腰内I b式の範疇で捉えられるが、同時期の別系統（大津第7群）の土器もかなりの量で混在している。

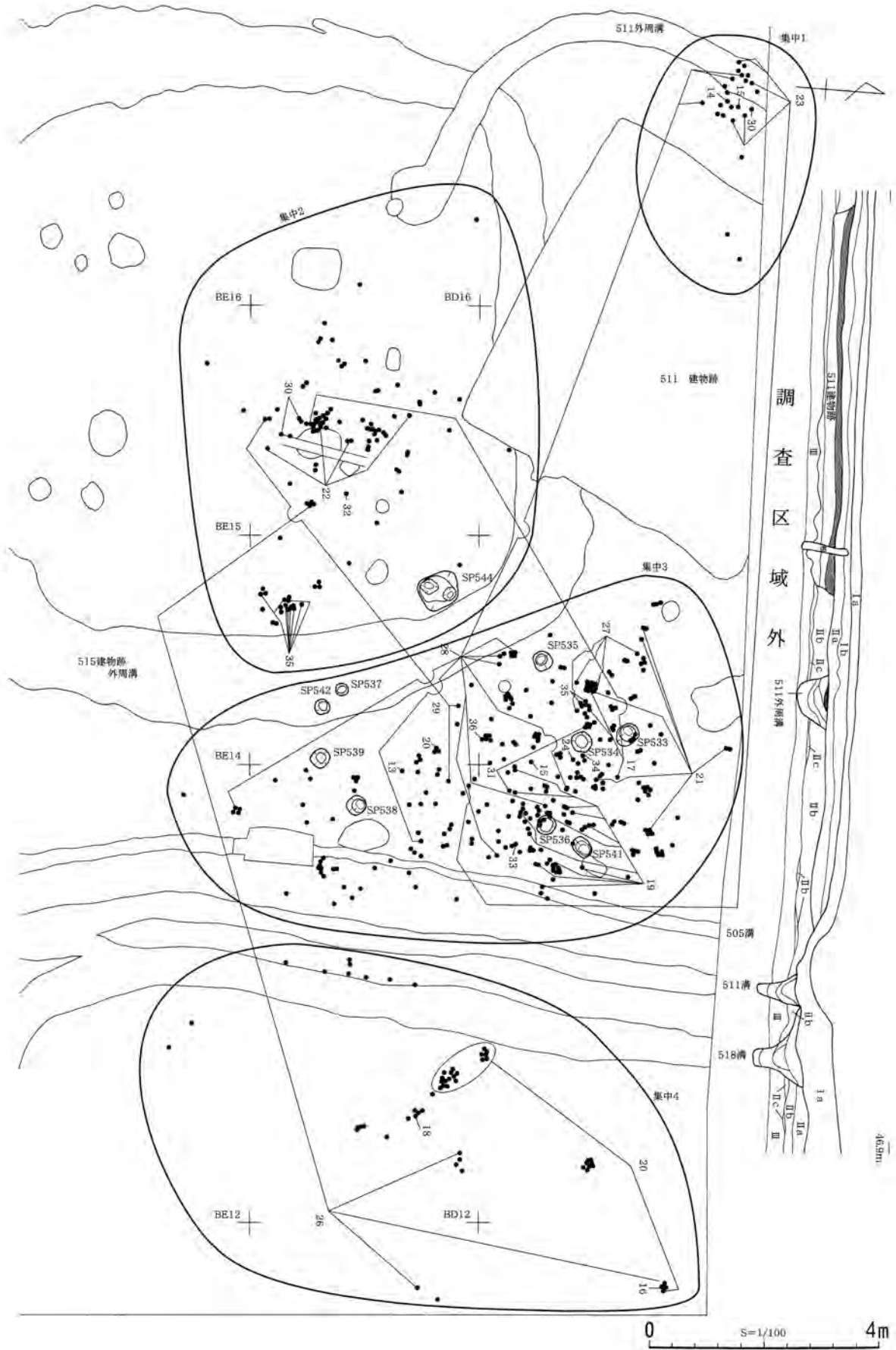


図7 第B区東端Ⅲ層 縄文土器出土状況図

第2節 平安時代の遺構と出土遺物

1 建物跡

第501号建物跡（図8・10）

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。南側約1/3は第3次調査における第315号建物跡として調査されている。

【位置・確認】 A区中央部BE～BI-48～52グリッドに位置する。Ⅲ層～Ⅳ層上面で暗褐色の落ち込みを確認した。

【重複】 第501A号建物跡・第502号建物跡・第503号建物跡と重複関係にあり、これら全ての遺構より新しい。また、第501A号建物跡は本遺構が拡張する前段階の建物跡である。

竪穴部

【形態・規模】 1辺約9.1mの正方形を呈する。主軸方向はN-135°-Eである。

【壁・床面】 壁は北西～西側は約0.32m残存し、ほぼ垂直に立ち上がっている。東側は後世の削平のため残っていない。床面はⅣ層～Ⅴ層を掘り込みほぼ平坦に構築されている。硬く踏みしめられているが、明確な貼り床等は見られなかった。

【堆積土】 12層に分層された。基本層序第Ⅲ層起源の黒色土を主体とする。一部に後世の攪乱がみられる。堆積土3層には白頭山-苦小牧火山灰がブロック状に混入している。2層以上は基本土層第Ⅱ層類似の土層が自然堆積したと考えられる。

【柱穴・土坑】 床面には4本の支柱穴が確認された。竈側2本は推定壁ラインに接しており、竈対辺側の2本は中央寄りである。壁際にも柱穴が等間隔に並んでいる(ピット5・6間と竪穴部東隅では削平のため検出されず)。支柱穴の間隔は軸方向が5.8m。横軸方向が5.0mである。壁柱穴の間隔は2.0mである。なお、ピット1・2等では柱痕・裏込め土が確認された。

【竈】 南東壁南寄りに確認されている。右袖がピット4にややかぶるように構築されている。(詳しくは第3次調査報告書参照)

【出土遺物】 土師器坏・長胴甕・須恵器皿・坏・長頸壺・甕が出土している。3は須恵器皿である。内面には光沢があり、硯として二次利用されている。

掘立部

【形態・規模】 5基の柱穴により構成されている。削平等により発見できなかった柱穴を勘案すると1間×2間の長方形と推定される。柱穴間隔は竪穴部主軸方向で2.4m、横軸方向で4.0mである。

【堆積土】 (第3次調査の報告書参照)

【付属施設】 無し。

【出土遺物】 無し。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部を「コ」の字状に囲むように南東方向(竈側)に開口する。幅は最大1m、最小0.28m、深さは最大0.8mである。底面には北西辺で特に鋤痕が見られた。

【堆積土】 覆土中・上位に約4～5cmの厚さで白頭山-苦小牧火山灰が層状に堆積している。その上位は第Ⅱ層の自然堆積である。白頭山-苦小牧火山灰の下位に関しては、最下層に特徴的に見られるⅤ層ブロックの多量混入を人為堆積と捉えるか自然堆積と捉えるかで堆積状況の解釈が変わってくるが、ここでは自然堆積と捉えたい。この最下層の堆積土は、外周溝によく見られるのもであり、極浅い部分や土坑状に掘り込まれた部分以外に顕著に見られるのが特徴である。(第3次調査時にも

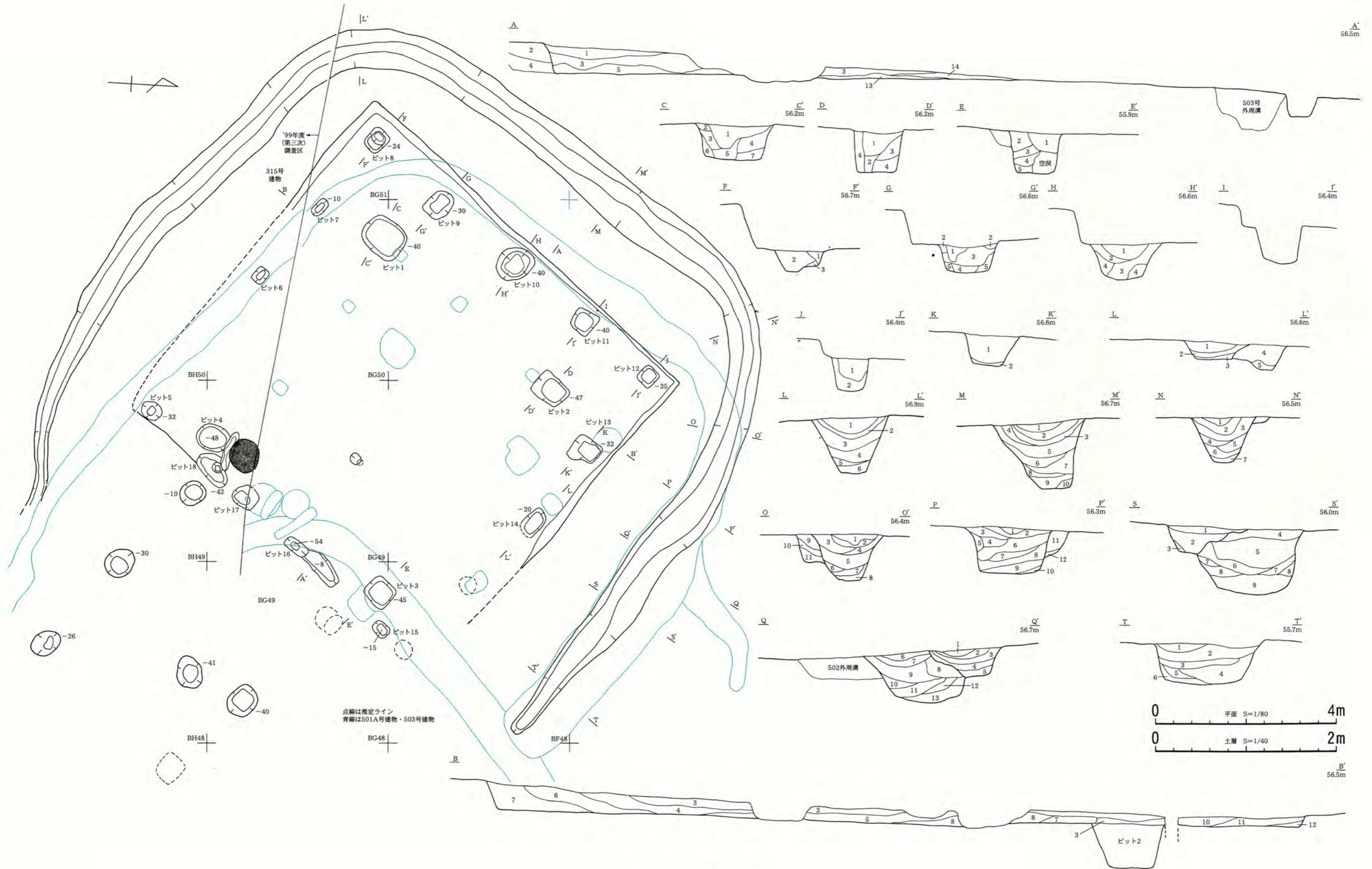


図8 第501号建物跡

同様の状況であったと担当者から聞いている。) また、外周溝の底面には構築当時の工具の痕跡(いわゆる鋤痕)が明瞭に残っている。したがって本土層は外周溝掘削時の残土(V層ブロック)と後から流れ込んだ土層(Ⅲ~V層)とが混合した土層の可能性がある。

[付属施設] 無し。

[出土遺物] 501号建物跡竪穴部の遺物参照。

第501号建物 竪穴部A・Bライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊中量混入
第2層	10YR5/8	黄褐色土	V層塊主体、暗褐色土少量、焼土粒・炭化粒極少量混入(501A外周溝埋め土)
第3層	10YR2/1	黒色土	V層粒・塊少量、B-Tm塊状に少量混入、焼土粒極少量混入
第4層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入(501A外周溝堆積土)
第5層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒・塊まばらに混入、焼土粒極少量混入
第6層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊極少量混入、IV層塊少量、焼土粒極少量混入
第7層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒・塊少量、焼土粒極少量混入
第8層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊状に中量、焼土粒極少量混入
第9層	10YR4/4	褐色土	Ⅲ層とIV層の混土、V層少量、焼土粒極少量混入
第10層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量混入
第11層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊少量混入
第12層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量、焼土粒少量混入
第13層	10YR2/3	黒褐色土	V層粒中量混入
第14層	10YR3/3	暗褐色土	V層粒少量混入

第501号建物 竪穴部Cライン

第1層	10YR1.7/1	黒褐色土	上部にV層粒混入(柱痕)
第2層	10YR6/8	明黄褐色土	V層と黒色土の混土、掘形覆土、かたい
第3層	10YR3/4	暗褐色土	IV層と黒色土の混土。裏込め土
第4層	10YR4/6	褐色土	V層主体、黒色土との混土、裏込め土、かたい
第5層	10YR3/4	暗褐色土	Ⅲ層に近似、裏込め土の崩落か?、かたい
第6層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量混入、裏込め土、かたい
第7層	10YR4/2	灰黄褐色土	IV層と黒色土の混土、裏込め土、かたい

第501号建物 竪穴部Hライン

第1層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒少量混入
第2層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊中量混入、かたい(裏込め土)
第3層	10YR4/4	褐色土	V層塊主体、かたい(裏込め土)
第4層	10YR5/6	黄褐色土	V層塊主体、かたい(裏込め土)

第501号建物 竪穴部Kライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	上部にV層塊が濃い
第2層	10YR5/6	黄褐色土	V層塊(崩落)

第501号建物 外周溝Lライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒・B-Tm小塊極少量、焼土粒極少量混入
第2層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量、B-Tm(層状)多量
第3層	10YR2/1	黒色土	V層粒・V層塊極少量、焼土粒極少量混入
第4層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒・焼土粒極少量混入
第5層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入
第6層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒・焼土粒極少量混入

第501号建物 外周溝Nライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒・焼土粒極少量混入
第2層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒極少量、B-Tm層状に中量混入
第3層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量
第4層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒少量、V層塊極少量混入
第5層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒・V層塊極少量混入
第6層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量混入
第7層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒極少量混入

第501号建物 外周溝Oライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量混入(1~5層は501号外周溝堆積土)
第2層	10YR2/3	黒褐色土	V層塊少量、炭化粒極少量混入
第3層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量混入
第4層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊、炭化粒極少量混入
第5層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊中量、水成堆積
第6層	10YR6/6	明黄褐色土	焼土粒少量混入(6~13層は501A外周溝堆積土)
第7層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入
第8層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊中量混入
第9層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量混入
第10層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入
第11層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量、炭化粒極少量混入
第12層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊中量混入、焼土粒少量混入
第13層	10YR6/6	明黄褐色土	黒色土との互層、焼土粒点在

第501号建物 外周溝Pライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊少量(1~3層は501号外周溝堆積土)
第2層	10YR3/3	暗褐色土	Ⅲ層土・V層塊少量混入
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層の崩落土
第4層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒・炭化物極少量(4~9層は501A号外周溝堆積土)
第5層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊状少量混入
第6層	10YR2/1	黒色土	V層塊状に少量混入
第7層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入
第8層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊極少量混入
第9層	10YR2/1	黒色土	V層塊状少量混入

第501号建物 竪穴部Dライン

第1層	10YR1.7/1	黒色土	柱痕
第2層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊主体、黒色土との混土(裏込め土の崩落土)
第3層	10YR4/6	褐色土	V層塊主体、黒色土との混土(裏込め土)
第4層	10YR4/4	褐色土	V層主体(裏込め土)、かたい

第501号建物 竪穴部Eライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量混入、締りなし(柱痕)
第2層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊少量、炭化粒極少量混入、かたい(裏込め土)
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、かたい(裏込め土)
第4層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量、炭化粒極少量混入、かたい(裏込め土)
第5層	10YR4/4	褐色土	V層主体、かたい

第501号建物 竪穴部Fライン

第1層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒少量混入
第2層	10YR7/8	黄褐色土	V層塊
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊中量混入

第501号建物 竪穴部Gライン

第1層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒少量混入(柱痕?)
第2層	10YR5/4	にぶ黄褐色土	V層塊主体、黒色土混、かたい(裏込め土)
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒多量混入、かたい(裏込め土)
第4層	10YR2/1	黒色土	V層粒多量混入、かたい(裏込め土)
第5層	10YR4/6	褐色土	V層塊主体、かたい(裏込め土)

第501号建物 竪穴部Jライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層塊混入
第2層	10YR5/6	黄褐色土	V層主体、かたい

第501号建物 竪穴部Lライン

第1層	10YR3/2	暗褐色土	V層塊層状に少量混入、黒色土混、かたい(Pit10堆積土)
第2層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、かたい(Pit10堆積土)
第3層	10YR2/1	黒色土	V層塊中量、炭化粒微量混入(Pit10堆積土)
第4層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊中量混入(Pit11堆積土)
第5層	10YR4/4	褐色土	V層塊中量混入、粘性やや有り(Pit11堆積土)

第501号建物 外周溝Mライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒・焼土粒極少量混入
第2層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒・焼土粒極少量混入
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒極少量、B-Tm(層状)多量
第4層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒・焼土粒極少量、B-Tm(ブロック状)少量混入
第5層	10YR3/1	黒褐色土	黒褐色土との混土、V層粒少量、V層塊極少量
第6層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入
第7層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒がマール状に混入、焼土粒極少量混入(水成堆積)
第8層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量混入
第9層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒・塊極少量、粘土質
第10層	10YR5/4	にぶ黄褐色土	浮石混入

第501号建物 外周溝Pライン

第1層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒・炭化物極少量
第2層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒・焼土粒極少量、B-Tm塊状に混入
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒少量、焼土粒極少量混入
第4層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒少量、V層塊・炭化物粒極少量混入
第5層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量混入
第6層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒少量、V層塊・炭化物極少量混入
第7層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量、V層塊・焼土粒極少量混入
第8層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒中量、V層塊・炭化物極少量混入
第9層	10YR3/2	黒褐色土	黒色土との混土、V層粒少量、V層塊極少量混入
第10層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入
第11層	10YR2/1	黒色土	V層粒・焼土粒極少量混入
第12層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒少量、V層塊極少量混入

第501号建物 外周溝Tライン

第1層	10YR2/1	黒色土	焼土粒極少量混入
第2層	10YR2/1	黒色土	V層塊中量混入
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊極少量混入、水成堆積
第4層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒中量混入
第5層	10YR2/1	黒色土	
第6層	10YR2/2	黒褐色土	黒色土互層に混入、水成堆積土

第501A号建物跡 (図9・10)

【概要】 竪穴部・外周溝から構成される。掘立部は検出されなかった。外周溝南側は第3次調査時に第303号溝跡として調査されている。

【位置・確認】 BE～BI-48～52グリッドに位置する。第501号建物跡調査中に重複関係を持つ遺構として確認した。掘り込み面はⅢ層上面であると考えられる。

【重複】 第501号建物跡・第502号建物跡(外周溝部分)と重複関係にあり、第501号建物跡より古く、第502号建物跡より新しい。

竪穴部

【形態・規模】 第501号建物跡竪穴部の床面に柱穴・竈を確認した。6.6m×6.7mのほぼ正方形である。軸方向は第501号建物跡と同じくN-135°-Eである。

【壁・床面】 壁は確認されなかった。床面は第501号建物跡竪穴部と同一レベルである。

【堆積土】 無し。

【柱穴・土坑】 床面中央寄りに4本の主柱穴、壁際にはほぼ等間隔に柱穴が確認された。主柱穴の間隔は主軸軸方向4.6m、横軸方向3.6m。壁柱穴の間隔は1.8mと2.3mが見られた。主柱穴ピット2・4の底面には細長い長方形の掘形が見られた。このような長方形の掘形は、柱材に板材を使用していたためと考えられる。

青森市岩渡小谷(2)遺跡(県埋分報300集)第7号竪穴住居跡ピット4、八戸市岩ノ沢平遺跡B区第69号竪穴住居跡P1等では、実際に板状の柱材が出土している。両例共に白頭山-苦小牧火山灰以前の遺構であることは重要である。そして岩ノ沢平例では底面に長方形の掘形が見られ、その部分に柱材が収まって出土している。また、本遺構の主柱穴堆積土には、ピット4の1・2層などのように、明らかに柱の裏込め土と見られる土層が確認されている。

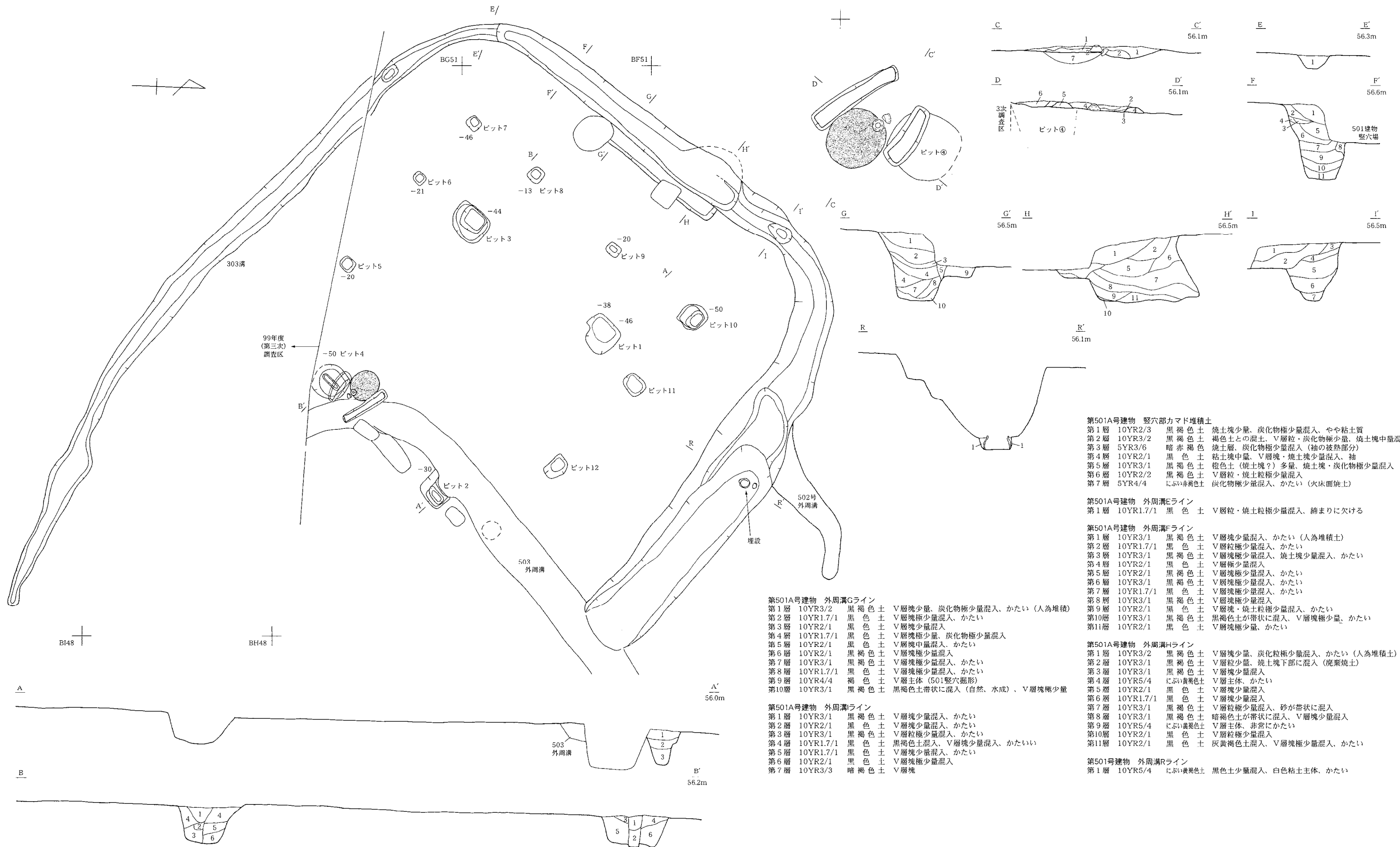
【竈】 竪穴部南東壁南寄りに確認された。袖は粘土により構築されているが、竈廃棄時の破壊行為が激しく、高さ3～5cmほどしか残存していない。また、右袖はピット4にかぶるように構築されていた。火床面は厚さが最大10cmであり、推定壁ライン(ピット2と4の上場端部を結んだライン)から0.4m離れている。火床面上には土師器坏(11)が逆さになった状態で出土した。おそらく支脚として使用されたものであろう。

【出土遺物】 確実に本遺構に伴うものとして、竈より出土した土師器坏(11)・甕(12)がある。11はロクロ成形の内面黒色土師器坏である。内面はミガキが施されているが、竈の支脚として用いられていたために黒化処理がとんでいる可能性が高い。12は土師器長胴甕である。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部を「コ」の字に囲むように開口する。北西・南西辺は第501号建物跡外周溝により上部を削平されている。確認面からの深さは最大(北東辺)で0.8m、最小(西コーナー)0.14mである。北東辺端部はさらに南東方向に延伸すると考えられるが、掘り込みが浅かったせいかわ確認されなかった。底面には特に北西辺において鋤痕が見られる。

【堆積土】 人為堆積と自然堆積の両者が見られる。特に北西辺付近では堆積土の上位にV層起源の土が厚く堆積している。これは第501号建物跡竪穴部分の北西辺を構築する際に外周溝に蓋をした土であると考えられる。



第501A号建物 堅穴部Aライン

第1層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊少量混入
第2層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入、締まり弱い
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、締まり弱い

第501A号建物 堅穴部Bライン (ピット4)

第1層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊少量、焼土塊・炭化物極少量混入、締まりなし(柱痕)
第2層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、締まりなし(柱痕)
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入
第4層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒・焼土粒極少量混入
第5層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量、ややかたい(裏込め土)
第6層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量、焼土粒極少量混入、ややかたい(裏込め土)

第501A号建物 堅穴部Bライン (ピット3)

第1層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊少量、焼土粒・炭化物極少量混入(柱痕)
第2層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、締まりなし(柱痕)
第3層	10YR3/3	暗褐色土	V層粒極少量混入、かたい(裏込め土)
第4層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量、炭化物極少量混入(裏込め土)
第5層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊少量混入(裏込め土)
第6層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒少量混入、かたい(裏込め土)

第501A号建物 堅穴部カマド堆積土

第1層	10YR2/3	黒褐色土	焼土塊少量、炭化物極少量混入、やや粘り質
第2層	10YR3/2	黒褐色土	褐色土との混入、V層粒・炭化物極少量、焼土塊中量混入、かたい
第3層	5YR3/6	暗赤褐色土	焼土塊、炭化物極少量混入(袖の被熱部分)
第4層	10YR2/1	黒色土	粘土塊中量、V層塊・焼土塊少量混入、袖
第5層	10YR3/1	黒褐色土	橙色土(焼土塊?)多量、焼土塊・炭化物極少量混入
第6層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒・焼土粒極少量混入
第7層	5YR4/4	にぶい赤褐色土	炭化物極少量混入、かたい(火床面焼土)

第501A号建物 外周溝Eライン

第1層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒・焼土粒極少量混入、締まりに欠ける
-----	-----------	-----	----------------------

第501A号建物 外周溝Fライン

第1層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊少量混入、かたい(人為堆積土)
第2層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第3層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊極少量混入、焼土塊少量混入、かたい
第4層	10YR2/1	黒褐色土	V層塊少量混入
第5層	10YR2/1	黒褐色土	V層塊極少量混入、かたい
第6層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊極少量混入、かたい
第7層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊極少量混入、かたい
第8層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊極少量混入
第9層	10YR2/1	黒色土	V層塊・焼土粒極少量混入、かたい
第10層	10YR3/1	黒褐色土	黒褐色土が帯状に混入、V層塊極少量、かたい
第11層	10YR2/1	黒色土	V層塊極少量、かたい

第501A号建物 外周溝Hライン

第1層	10YR3/2	黒褐色土	V層塊少量、炭化物極少量混入、かたい(人為堆積土)
第2層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒少量、焼土塊下部に混入(廃棄焼土)
第3層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊少量混入
第4層	10YR5/4	にぶい赤褐色土	V層主体、かたい
第5層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量混入
第6層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入
第7層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量混入、砂が帯状に混入
第8層	10YR3/1	黒褐色土	暗褐色土が帯状に混入、V層塊少量混入
第9層	10YR5/4	にぶい赤褐色土	V層主体、非常にかたい
第10層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入
第11層	10YR2/1	黒色土	灰黄褐色土混入、V層塊極少量混入、かたい

第501号建物 外周溝Rライン

第1層	10YR5/4	にぶい赤褐色土	黒色土少量混入、白色粘土主体、かたい
-----	---------	---------	--------------------

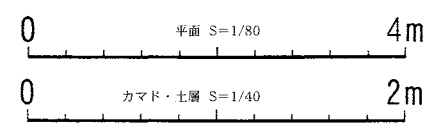


図9 第501A号建物跡

[付属施設] 北西辺中央部には土坑状の掘り込みが見られる。この付近の堆積土中位には廃棄された焼土がみられる。北東辺中央部底面には図10-16の土師器甕（上半部のみ）が正立状態で埋められていた。同一個体の下半部は見つからなかった。

[出土遺物] 溝底面に埋設されていた土師器甕以外には図示できる遺物は出土していない。

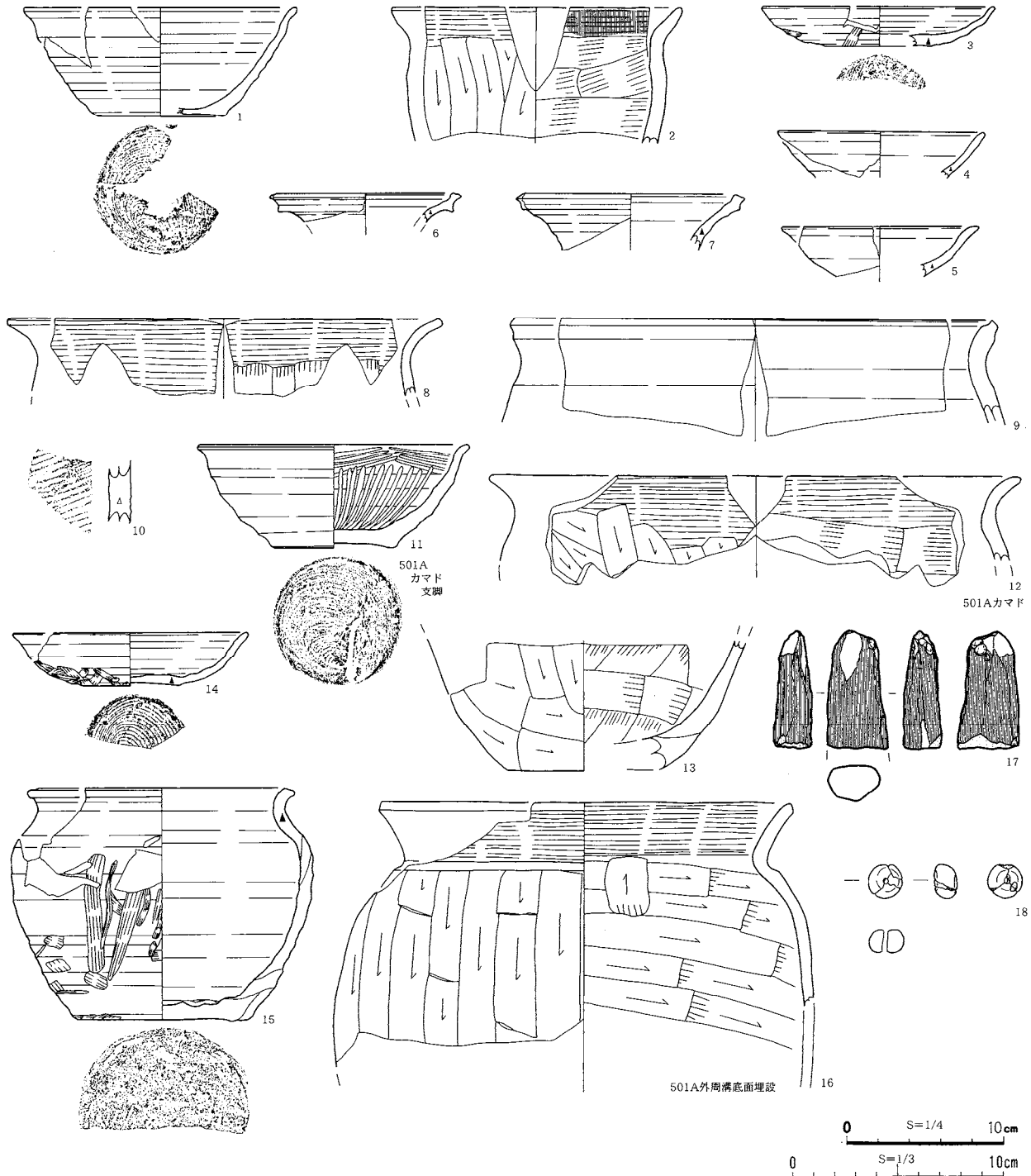


図10 第501・501A号建物跡出土遺物

第502号建物跡 (図11・12)

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝・土坑から構成される。

【位置・確認】 A区中央部、BB～BF-47～52グリッドに位置する。第IV層～V層中で確認した。

【重複】 第514号建物跡・第501号建物跡・第501A号建物跡と重複しており、第501号建物跡よりも古く、その他の遺構より新しい。

竪穴部

【形態・規模】 平面形は1辺約8mのほぼ正方形である。主軸方向の辺の長さは南北で検出した長さの違いがあり、南辺の方が短い。主軸方位はN-110°-Eである。北東辺では第514号建物跡と重複している。

【壁・床面】 北西側で30cm残存しているが、全体的に削平を受けている。床面はIV～V層を掘り込んで構築されている。掘形の覆土を固めて構築されている。貼り床は確認されなかった。床面ほぼ中央部には直径40～50cmの焼土が確認された。約2cmの厚さで皿状に床面が赤変していた。また、北西壁際には、2.4m×5.6mの範囲で1段下がった掘形が見られた。この範囲では床面の締まりが弱い。

【堆積土】 III層起源の黒色土を中心とし、27層に分層された。24～26層は掘形覆土、15～22層は壁周溝及び壁柱穴堆積土である。床面より上位の堆積土は概ね自然堆積と考えられる。

【柱穴・土坑】 床面中央寄りに4本の支柱穴が、壁際には4隅とその中間に壁柱穴が、それをつなぐように壁周溝が見られた。但し、竈の付く辺には壁周溝は確認されなかった。支柱穴の間隔は主軸方向で5.6m、横軸方向で約5mである。このうち、ピット3と4は掘形の観察から2本の柱穴が重複している可能性があるため、竪穴部の建て替え等が行われた可能性もある。

【竈】 削平のため火床面しか残存していない。推定壁ラインから0.6m離れている。また、火床面南端とピット3上場との距離は32cmと短い。

【出土遺物】 土師器坏・長胴甕・須恵器甕・凹み石が出土した。図示し得たのは11点である。特に5は先に述べた1段下がった掘形上位から出土している。

掘立部

【形態・規模】 竪穴部南東辺東側に位置する。平面形は1間×2間の長方形であり、軸方向は竪穴部と同じである。柱穴間隔は軸方向が約2m、横軸方向が約5mである。竪穴部側の辺には、小規模な柱穴が3基並んで見られる。そのうちピット13には規模の小さい溝が付随している。

【堆積土】 削平のため残りが悪いが、概ね第III層の土を主体とした土層である。柱痕や裏込め土は見られなかった。

【付属施設】 付属するか確実ではないが、ピット6に隣接して第515号土坑が存在している。

【出土遺物】 ピット7からは須恵器大甕の口縁部(8)が出土している。

第515号土坑 (図12)

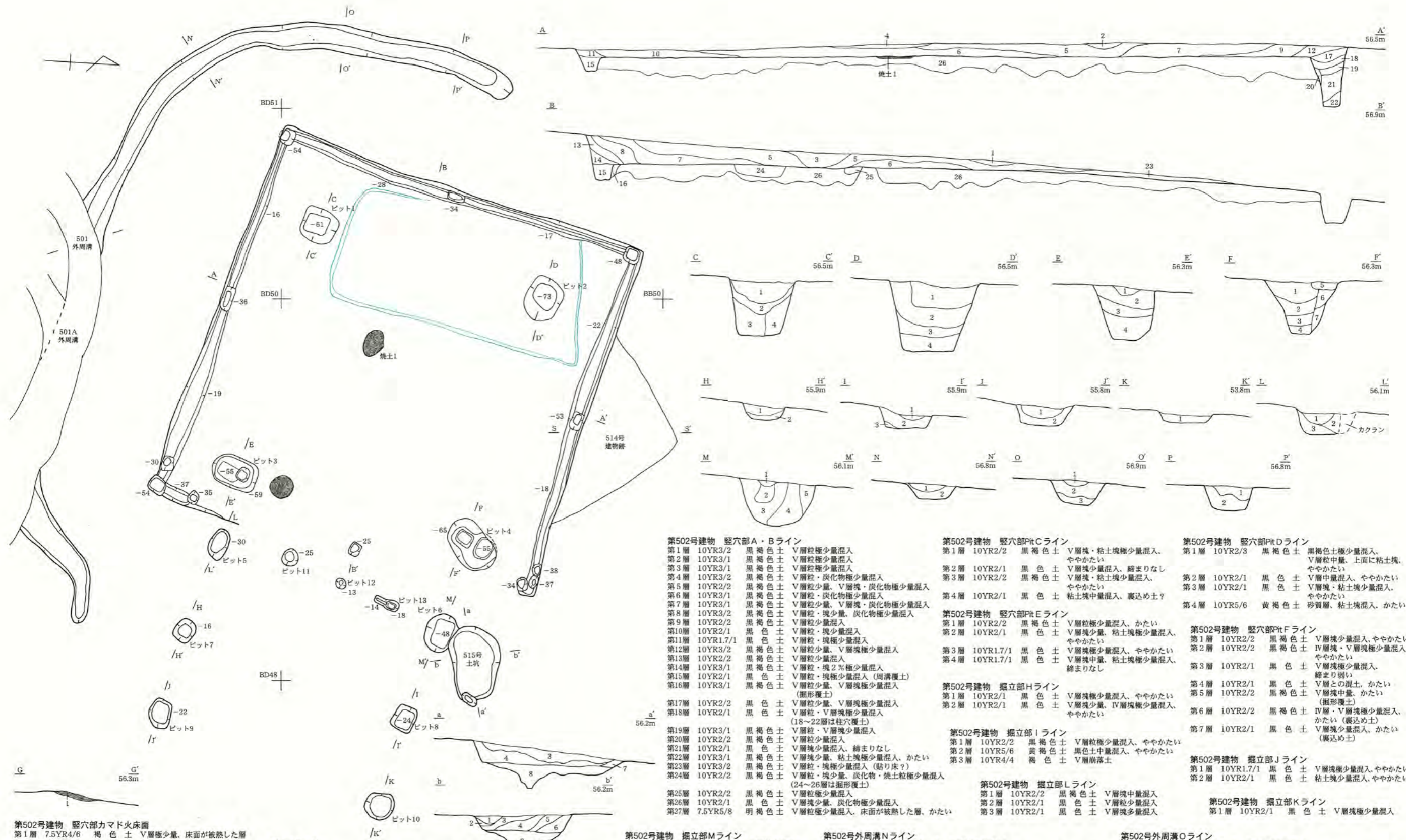
【確認】 V層上面で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模】 長軸1.6m、短軸1.0mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは最深0.4m、8層上面までは0.2mである。

【壁・底面】 底面から壁はV層まで掘り込まれており、浅い箱形を呈する。底面は8層上面では平坦であるが、その下位に竪穴部等の掘形覆土に近似した土層が見られ、最底面は凹凸が激しい。

【堆積土】 堆積土中からは土師器片・焼土ブロック等が検出されている。8層以外はそれらを廃棄した際の人為的な堆積土である。8層はIV・V層等のブロックと黒色土が混在した土層であり、上面



第502号建物 堅穴部カマド火床面
第1層 7.5YR4/6 褐色土 V層極少量、床面が被熱した層

- 第515号土坑**
- 第1層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊・焼土塊極少量混入
 - 第2層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入
 - 第3層 10YR2/1 黒色土 V層粒・炭化物極少量混入
 - 第4層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊少量、炭化物・焼土塊極少量混入 (廃棄土、遺物出土)
 - 第5層 10YR2/1 黒色土 V層粒・炭化物極少量混入
 - 第6層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊・炭化物極少量混入
 - 第7層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒・炭化物少量、焼土塊少量混入
 - 第8層 10YR4/3 黄褐色土 V層塊・黒色土の混入、貼り床様の土層、かたい

- 第502号建物 掘立部Mライン**
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒少量混入
 - 第2層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒中量混入
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 V層粒少量混入
 - 第4層 10YR3/2 黒褐色土 2層に近似
 - 第5層 10YR3/2 黒褐色土 4層に近似
- 第502号建物 掘立部Nライン**
- 第1層 10YR2/1 黒色土 V層粒極少量混入
 - 第2層 10YR2/1 黒色土 黒褐色土との混入、V層塊下部に斑状に混入 (自然堆積)
- 第502号建物 掘立部Pライン**
- 第1層 10YR2/1 黒色土 V層粒・塊極少量混入
 - 第2層 10YR6/6 明黄褐色 黒色土、褐色シルト質土塊 (硬く締まった土) 混入 (自然堆積)

- 第502号外周溝Nライン**
- 第1層 10YR2/1 黒色土 V層粒極少量混入
 - 第2層 10YR2/1 黒色土 黒褐色土との混入、V層塊下部に斑状に混入 (自然堆積)
- 第502号外周溝Oライン**
- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊極少量混入
 - 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒極少量、IV層塊極少量混入 (自然堆積)
 - 第3層 10YR1.7/1 黒色土 黒褐色土との混入、V層塊中量混入 (自然堆積)

図11 第502号建物跡

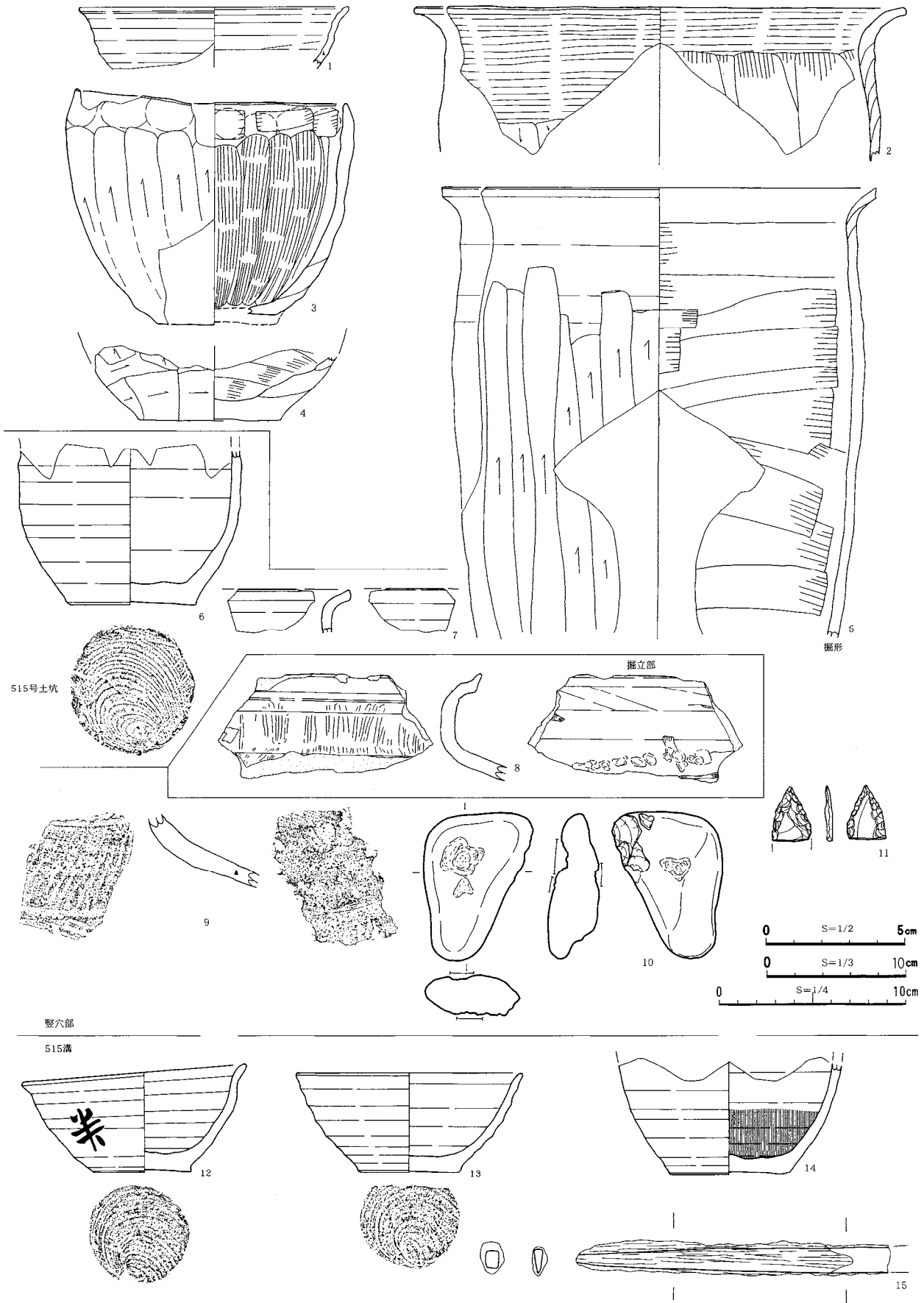


图12 第502号建物跡出土遺物

はやや硬く締まって床面のようにであった。

【出土遺物】土師器小型長胴甕が出土している。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部の南側半分を囲むように存在している。東側先端部でやや屈曲し主軸方向に若干延びる。幅は約50cmであり、確認面からの深さは最大26cmである。南側の一部は第501号・501A号建物跡外周溝により壊されている。また、底面には鋤痕が見られる。

【堆積土】 第Ⅲ層の黒色土を主体としている。Oラインの3層にはV層ブロックと黒色土の混合土が見られる。概ね自然堆積と考えられる。

【付属施設】 なし。

【出土遺物】 図示し得るものは出土していない。

第503号建物跡（図13・14・15）

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。南側約半分は第3次調査時に第305号建物跡として調査されている。

【位置・確認】 A区中央部、BF～BJ-46～49グリッドに位置する第Ⅲ層上面で確認した。

【重複】 第501号・501A号建物跡と重複する。いずれの遺構よりも古い。

竪穴部

【形態・規模】 平面形は1辺約5.4mの正方形を呈する。軸方向はN-144°-Eである。

【壁・床面】 今回の調査区では床面にかなり近いレベルでの確認であったため、壁は北西側で約10cm弱残存するのみである。床面は、Ⅲ～Ⅳ層の上面を掘り込んだ掘形の覆土を固めて構築されている。貼り床は確認されなかった。

【堆積土】 Ⅲ層の黒色土を主体とする土が堆積している。堆積状況は不明である。（第3次調査分では自然堆積と判断されている。）

【柱穴・土坑】 柱穴は4隅の壁際に確認され、一部その中間にも見られる。柱穴を結ぶように壁周溝も確認されたが、竈の付く辺と北東辺では確認されなかった。

【竈】 第3次調査区に存在する。粘土で袖を構築しているが、残存状況は悪い。火床面は推定壁ラインから40cm内側に存在している。詳しくは第三次調査報告書を参照されたい。

【出土遺物】 土師器・土製品が出土した。図示し得たのは4点である。覆土及び床面から土師器杯・双耳壺耳部、土玉等が出土している。

掘立部

【形態・規模】 1間×2間の構造とする。主軸方向の柱穴間隔は竪穴部方向から約2.9m・4.2mとなり、横軸方向は約2.3mとなる。

【堆積土】 第3次調査報告書参照。

【付属施設】 無し。

【出土遺物】 第3次調査報告書参照。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部と掘立部の一部を囲むように南東側に開口している。但し、南東側先端には南西辺に直行するように短い溝が確認されている。幅は最大0.92m、最小0.2m。確認面からの深さは最大0.74m（土坑部分）最小で0.24mである。北西辺～北東辺北西側約半分では底面には鋤痕が見られる。底面は北東辺から先端方向に向かって徐々に傾斜している。北東辺先端では土坑状に一部

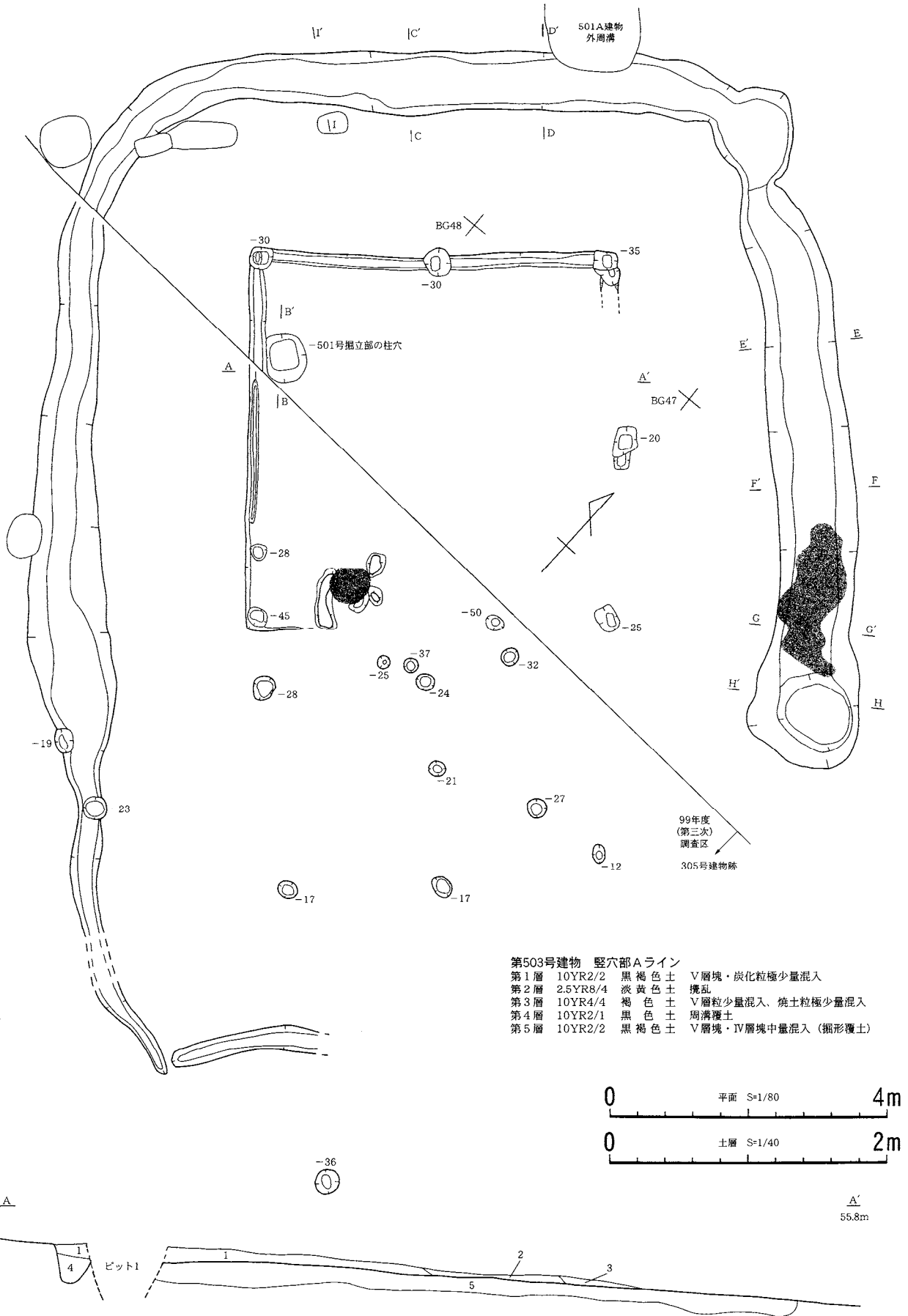


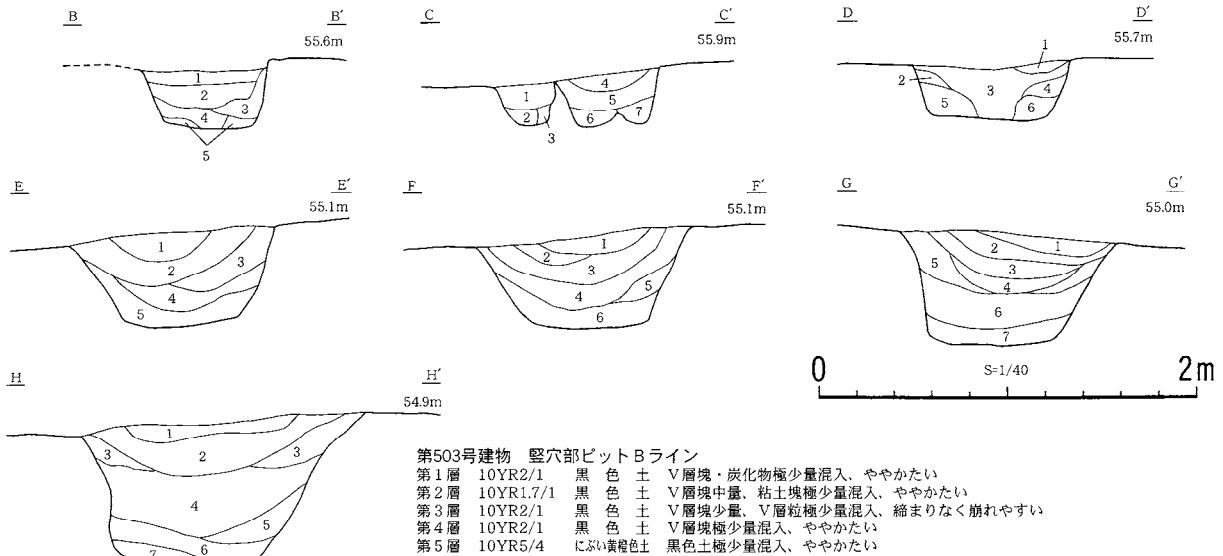
図13 第503号建物跡①

深くなっている。南側先端部分は幅・深さ共に規模が縮小している。

[堆積土] Ⅲ層を主体とする黒褐色土で構成される。最下層には第501号建物跡等で見られたV層ブロックと黒色土の混合土が見られる。また、北東辺中央から先端部分にかけてには焼土・粘土等が廃棄されており、遺物の出土量も多い。

[付属施設] 無し。

[出土遺物] 図示し得たのは21点である。土師器杯・甕・須恵器杯・大甕等が出土している。



第503号建物 堅穴部ビットBライン

- 第1層 10YR2/1 黒色土 V層塊・炭化物極少量混入、ややかたい
- 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊中量、粘土塊極少量混入、ややかたい
- 第3層 10YR2/1 黒色土 V層塊少量、V層粒極少量混入、縮まりなく崩れやすい
- 第4層 10YR2/1 黒色土 V層塊極少量混入、ややかたい
- 第5層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 黒色土極少量混入、ややかたい

第503号建物 外周溝Cライン

- 第1層 10YR2/1 黒色土 V層塊少量、炭化物極少量混入、ややかたい (1~3層は503号外周溝堆積土)
- 第2層 10YR2/1 黒色土 V層塊・粒極少量混入、ややかたい
- 第3層 10YR6/4 にぶい黄褐色土 V層塊中量、ややかたい (自然堆積)
- 第4層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊極少量混入、ややかたい (4~6層は501A建物堅穴部Pit②堆積土)
- 第5層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊極少量混入
- 第6層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊中量混入、ややかたい

第503号建物 外周溝Dライン

- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒極少量混入、ややかたい
- 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊極少量混入、ややかたい
- 第3層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊少量混入
- 第4層 10YR2/1 黒色土 V層粒極少量混入、ややかたい
- 第5層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊・粒少量、黒褐色土極少量混入、ややかたい
- 第6層 10YR5/6 明黄褐色土 V層塊極少量混入、ややかたい

第503号建物 外周溝Eライン

- 第1層 10YR2/1 黒色土 V層塊状極少量、炭化粒極少量、硬く崩れやすい
- 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒・焼土粒極少量混入、ややかたい
- 第3層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒極少量混入、縮まりなし
- 第4層 10YR1.7/1 黒色土 IV層小塊極少量混入、ややかたい
- 第5層 10Y1.7/1 黒色土
- 第6層 10YR1.7/1 黒色土 V層・IV層混土中量混入、ややかたい

第503号建物 外周溝Fライン

- 第1層 10YR2/1 黒色土 V層塊少量、炭化粒極少量混入、ややかたい
- 第2層 10YR1.7/1 黒色土
- 第3層 10YR2/1 黒色土 V層塊少量、炭化粒・粘土塊極少量混入、やや硬く粘性あり
- 第4層 10YR1.7/1 黒色土 粘土塊・V層粒・炭化粒極少量混入、やや硬く粘性あり
- 第5層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊極少量混入、縮まり弱い
- 第6層 10YR2/1 黒色土 粘土塊・V層塊が薄く層状に混入、縮まり弱いが粘性あり

第503号建物 外周溝Gライン

- 第1層 10YR3/1 黒褐色土 粘土粒少量混入
- 第2層 10YR2/2 黒褐色土 粘土塊少量混入 (遺物出土)
- 第3層 10YR2/2 黒褐色土 焼土・粘土塊中量混入
- 第4層 10YR2/3 黒褐色土 粘土塊少量、砂質土中量混入
- 第5層 10YR2/1 黒色土 砂質土混入 (水成堆積)
- 第6層 10YR1.7/1 黒色土 砂質土混入 (水成堆積)
- 第7層 10YR2/3 黒褐色土 V層塊・黒色土塊の互層、かたい (水成堆積)

第503号建物 外周溝Hライン

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊極少量混入、かたい
- 第2層 10YR2/1 黒色土 IV層塊・V層粒極少量混入、ややかたい
- 第3層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊・黒褐色土塊・焼土粒極少量、暗褐色砂質土塊少量混入、ややかたい
- 第4層 10YR2/1 黒色土 V層塊・黒褐色土塊・焼土粒極少量混入、ややかたい
- 第5層 10YR2/1 黒色土 V層塊・焼土粒極少量混入、ややかたい
- 第6層 10YR2/1 黒色土 V層塊・焼土粒・炭化粒極少量混入、ややかたい
- 第7層 10YR2/1 黒色土 暗褐色砂質土・V層塊少量、炭化粒極少量混入、ややかたい

図14 第503号建物跡②

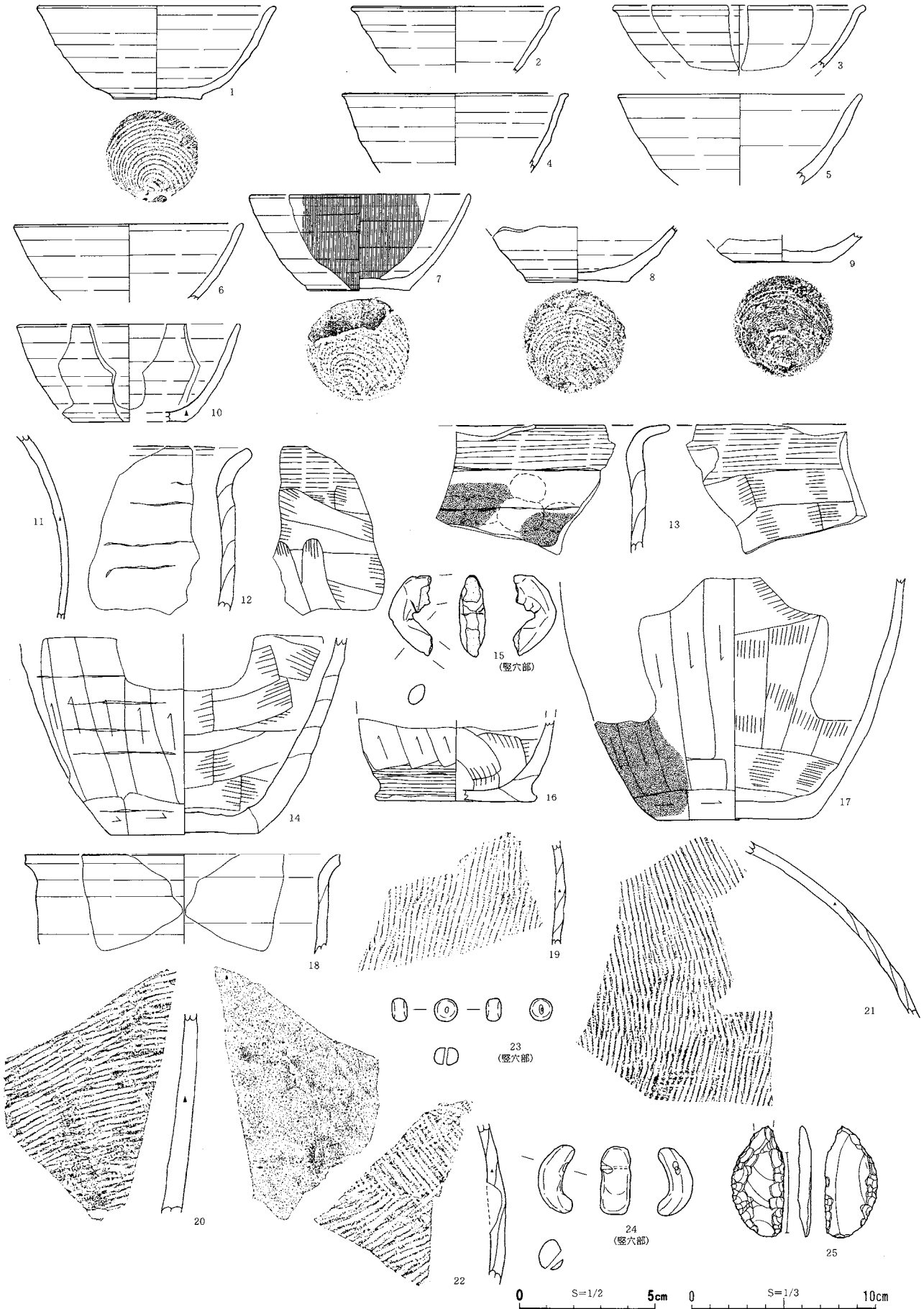


図15 第503号建物跡出土遺物

第504号建物跡 (図16・17)

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。外周溝の一部は調査区域外にかかっている。

【位置・確認】 BA～BC-45～47グリッドに位置する。第IV層で確認した。

【重複】 第504A号建物跡・第505号建物跡・第512号建物跡と重複関係にあり、第512号建物跡より新しく、第505号建物跡より古い。なお、第504A号建物跡は本建物跡竪穴部の拡張前の姿である。

竪穴部

【形態・規模】 平面形は4.16m×3.84mのほぼ正方形を呈する。軸方位はN-136°-Eである。

【壁・床面】 III～IV層を壁としている。精査時に堆積土の粘土層と床面との区別を誤り、一部掘りすぎている。よって竪穴主軸線より北東側の床面は断面での確認である。床面は第504A号建物跡竪穴部覆土と、第V層を掘り込んだ掘形の覆土を固めて構築されているが、一部に貼り床も見られる(14層)。

【堆積土】 22層に分層された。14層と16層の上面が505号の床面である。15層は505号の壁周溝堆積土である。16・17層は掘形覆土と考えられる。第3層は白色粘土層である。一部被熱した部分も見られるため、竈構築材として使用された粘土が廃棄されたと考えられる。

【柱穴・土坑】 柱穴は4隅に確認された。それぞれの間に壁周溝も確認されたが、竈付近では途切れる。

【竈】 破壊が激しく、袖として確認したものも、既に壊されている可能性がある。袖は粘土のみで構築されている。先述したように竈付近において壁周溝がとぎれている。火床面は壁から32cm内側に入っており、直径約40cm、厚さ約10cmの範囲が赤変している。

【出土遺物】 図示し得たのは7点である。土師器長胴甕、土玉、環状鉄製品、流状滓が出土している。2はかなり大型の甕と考えられるが、破片の為、埴等他機種の可能性もある。

掘立部

【形態・規模】 7基の柱穴で構成され、平面形は先端がやや撥型に開く1間×2間の長方形となる。柱穴の配置は図16のとおりであるが、ピット1～5までを対象にすると、軸方向が約2.4m、横軸方向が約3.3mである。

【堆積土】 黒色土を主体とした自然堆積を呈する。

【付属施設】 無し。

【出土遺物】 無し。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部を「コの字形」に取り囲み南東方向に開口しているが、北側の一部で途切れている。また、見かけの開口方向と竪穴部の主軸方位にずれがある。西側先端部は削平されている。東側先端部からは、小規模な溝が枝分かれしている。確認面からの深さは最大0.5m(東側先端部)、最小0.2m(北側先端部)である。底面には鋤痕が見られ、東側の溝では北側から南側にかけて徐々に深くなっている。

【堆積土】 東側では第1層に白頭山-苦小牧火山灰が堆積している。北西側においては削平のためか火山灰は見られなかった。

【付属施設】 無し。

【出土遺物】 土師器坏・長胴甕、須恵器坏・甕が出土している。

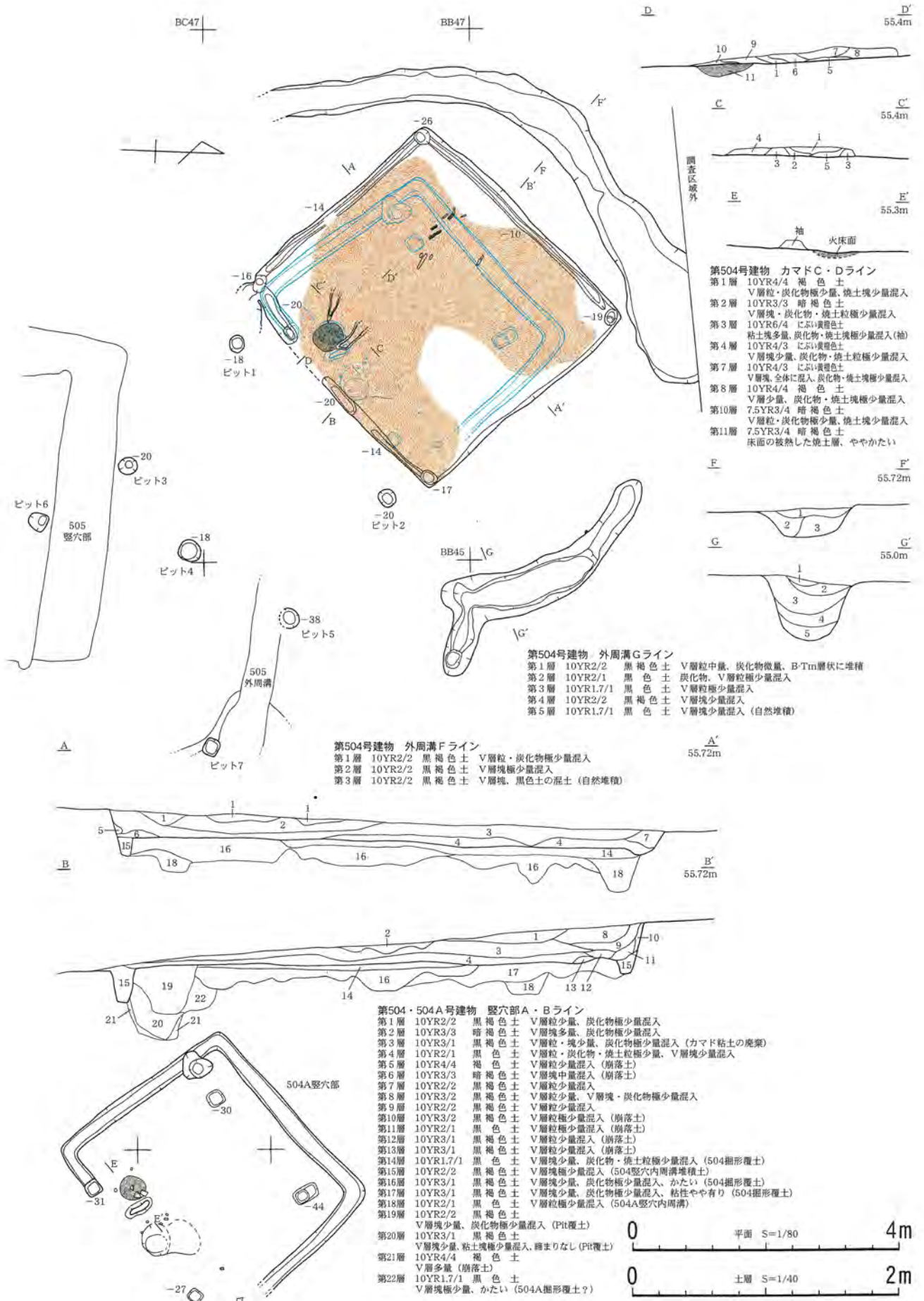


図16 第504号建物跡

第504A号建物跡 (図16・17)

【概要】 竪穴部のみ確認である。

【位置・確認】 第504号建物跡と同位置である。

【重複】 第504号建物跡と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

竪穴部

【形態・規模】 平面形は3.2m×3mのほぼ正方形である。主軸方向は第504号建物跡と同じである。

【壁・床面】 壁は第504号建物跡竪穴部に壊されているためほとんど確認できない。床面は竈付近のみ確認できただけである。V層まで掘り込まれている。明確な貼り床はなく、掘り方覆土を固めて床面としているようである。

【堆積土】 18・22層が相当する。22層は掘形覆土である。

【柱穴・土坑】 中央寄りに4本の支柱穴が確認された。柱穴の間隔は主軸方向2.2m、横軸方向2mである。また、壁際には竈付近を除き壁周溝がめぐる。

【竈】 粘土を利用して竈を構築しているようであるが、廃棄時の破壊行為により詳細は不明である。火床面は推定壁ラインより20cm内側にある。

【出土遺物】 土師器甕が出土している。3と4は掘形覆土からの出土で、共伴するものか不明である。3は土師器広口壺と分類される。口縁部は「コ」の字形に屈曲している。3bは同一個体の底部付近であるが、底部は角の取れた方形を呈する。底面はケズリが施されている。胴部付近の破片が接合しなかったため全体形は不明である。

第505号建物跡 (図18～21)

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。また、範囲内には第503・504号土坑が存在しており、本建物跡に関係する遺構である可能性がある。

【位置・確認】 A区BB～BF-42～47グリッドに位置し、第IV～V層で確認した。周辺は耕作による攪乱が確認面近くまで及んでいる。

【重複】 第509・512・514号土坑、第508・509号溝と外周溝部分において重複関係にあり、第509号土坑・第508号溝が本遺構より古く、その他の遺構は本遺構より新しい。また、第508号溝西側付近には小規模な柱穴(第506～508・520号ピット)が散在している。また、竪穴部は拡張が1回されており、古段階を第505A号建物跡竪穴部としている。

竪穴部 (505号)

【形態・規模】 平面形は正方形に近いものの、各辺の長さがそれぞれ違うためややいびつな方形を呈している。各辺の長さは西辺5.0m、北辺4.64m、東辺5.2m、南辺5.2mである。西辺と北辺だけはほぼ直角に交わっている。軸方向はピット1・2間に直交するラインで求め、N-95.5°-Eである。

【壁・床面】 V層を壁とし、西辺で20cm残存している。床は掘形覆土を固めて構築されており、明確な貼り床は見られない。掘形はV層まで掘り込まれている。竈付近には明瞭な硬化面が見られた。

【堆積土】 10層に分層された。第Ⅲ層等を主体とした黒褐色土で構成される。第1層中には白頭山-苦小牧火山灰がブロック状に体積している。概ね自然堆積である。

【柱穴・土坑】 柱穴は床面中央寄りに4本が確認された。柱穴間隔は軸方向北側3.44m、南側3.52m、横軸方向東側2.8m、西側3.52mである。支柱穴配置においても北辺と西辺だけがほぼ直角に交わっている。もし全てが直角に交わっていたとしたらピット3は竈の真下に来ることになる。したがって四本の柱穴を得るために無理矢理柱穴の位置をずらし、壁もずらしたと考えられる。その他には

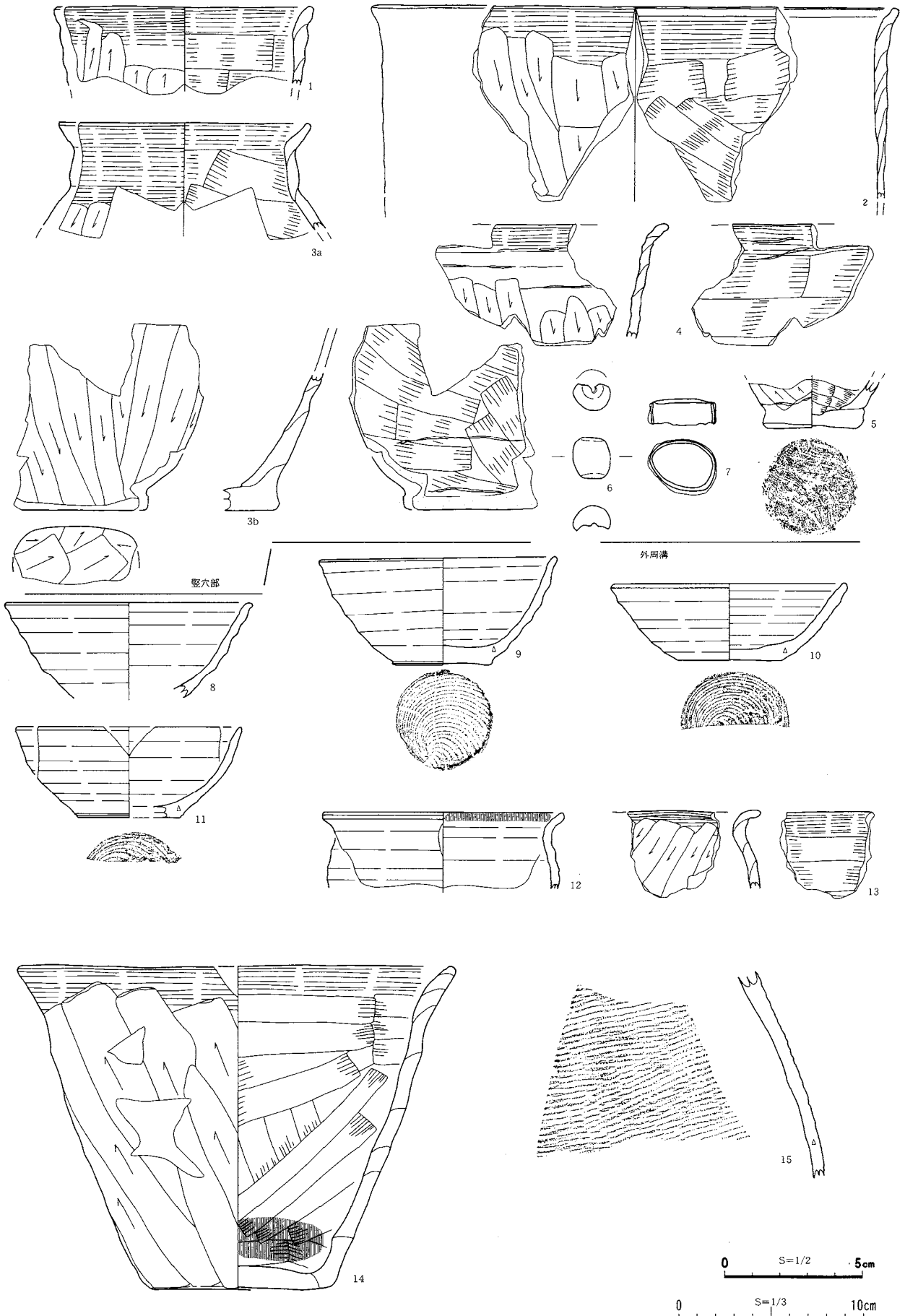


图17 第504・504A号建物跡出土遺物

竈側の1部を除く壁際に壁周溝がめぐっており、ピット5横には土坑が確認された(ピット4)。ピット5付近の壁からは竪穴外部に向かって幅約16cmの溝が1.1m延びている。

【竈】 竪穴部東辺南寄りに位置する。粘土を構築材として使用しているが、廃棄時の破壊行為により上部を失っており、袖が一部分残存しているのみである。火床面は推定壁ラインから内側に約32cm入ったところにある。

【出土遺物】 土師器坏、須恵器坏・壺・甕、土玉、砥石、刀子等が出土している。11は仕上げ砥と考えられる。13はピット4から出土した刀子である。取り上げ時に破損してしまったが同一個体である。

竪穴部 (505A号)

【形態・規模】 505号同様平面形は正方形に近いものの、各辺の長さがそれぞれ違うためややいびつな方形を呈している。各辺の長さは西辺4.24m、北辺4.52m、東辺4.4m、南辺4.2mである。西辺と北辺だけはほぼ直角に交わっている。軸方向は505号と同じである。

【壁・床面】 床面は確認されず、掘形と壁周溝のみが残存している。壁と掘形底面は共にV層である。竈は確認されなかった。

【堆積土】 7層～10層が相当する。7層と9層は掘形覆土(505号のもの?)、10層は内周溝堆積土と考えられる。

【柱穴・土坑】 柱穴は4隅とその中間の壁際に確認された。

【出土遺物】 無し。

掘立部

【形態・規模】 竪穴部東側に位置する。ピット8が飛び出ているが、概ね1間×2間の長方形を呈する。この掘立部の範囲内に土坑3基が存在する。

【堆積土】 一部の柱穴に柱痕や裏込め土が見られた。遺物の出土は見られなかった。

【付属施設】 第503A・B号土坑、504号土坑が付随すると考えられる。

第503A号土坑

【確認】 第505号建物跡掘立部内、IV層～V層面で確認した。

【規模・形態】 直径約1.2mのほぼ円形を呈する。深さは最大25cmである。

【重複】 第503B号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が古い

【底面】 V層を底面・壁とし、断面はやや凹凸のある丸みを帯びた形状である。

【堆積土】 5層に分層された。Ⅲ層起源の黒色土を主体とし、自然堆積と判断された。

【出土遺物】 18は確認面から出土した須恵器坏である。この個体は第506号建物跡竪穴部から出土したものと接合した。体部に篋記号が見られる。

第503B号土坑

【確認】 第505号建物跡掘立部内、IV～V層面で確認した。

【規模・形態】 直径約0.96mのほぼ円形を呈する。深さは最大10cmである。

【重複】 第503A号土坑と重複関係にあり、本土坑の方が新しい。

【底面】 V層を底面とし、浅い皿状を呈する。底面中央部は被熱により赤変している。

【堆積土】 5層に分層され、自然堆積と判断した。

【出土遺物】 無し。

第504号土坑

【確認】 第505号建物跡掘立部内、IV～V層面で確認した。

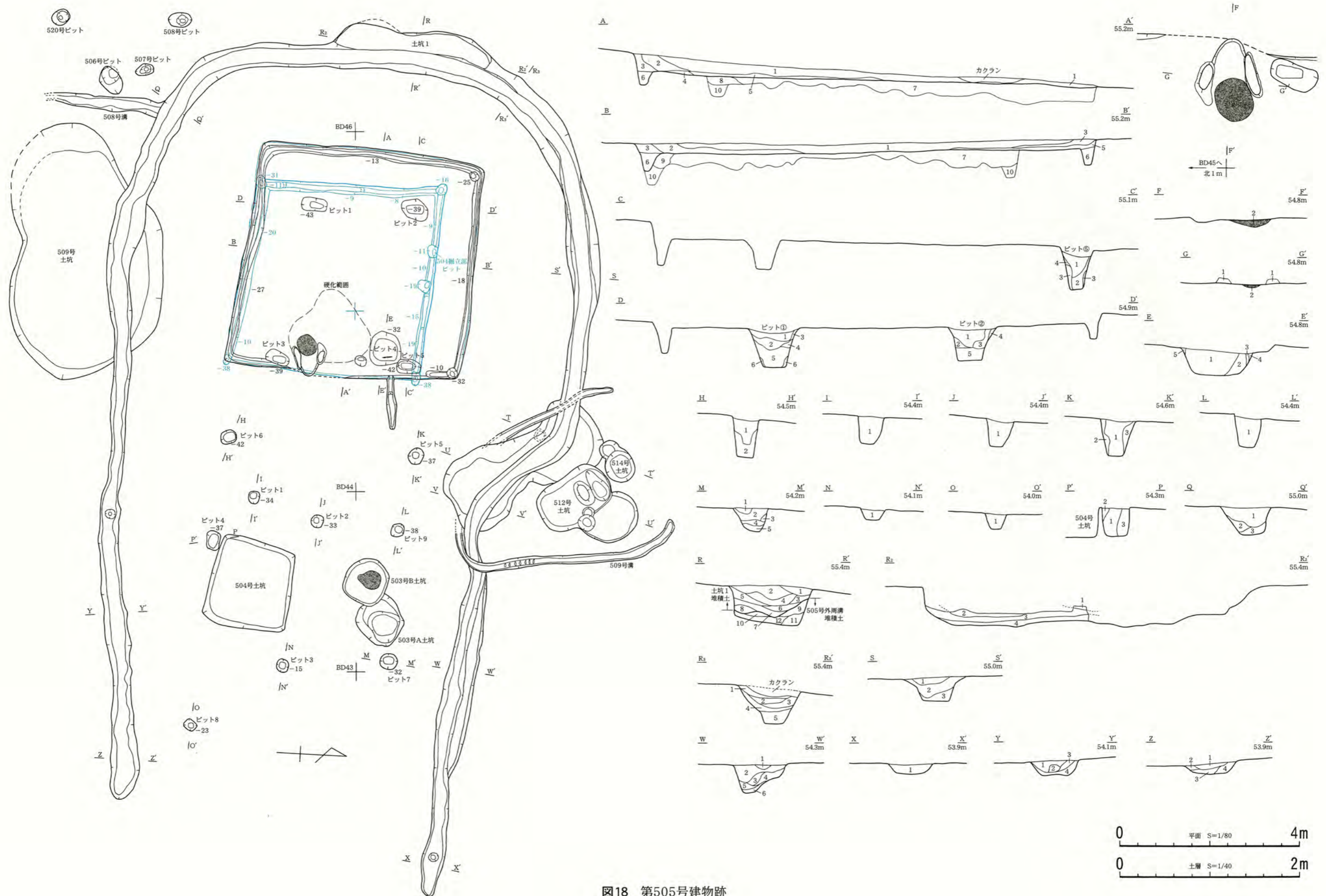


図18 第505号建物跡

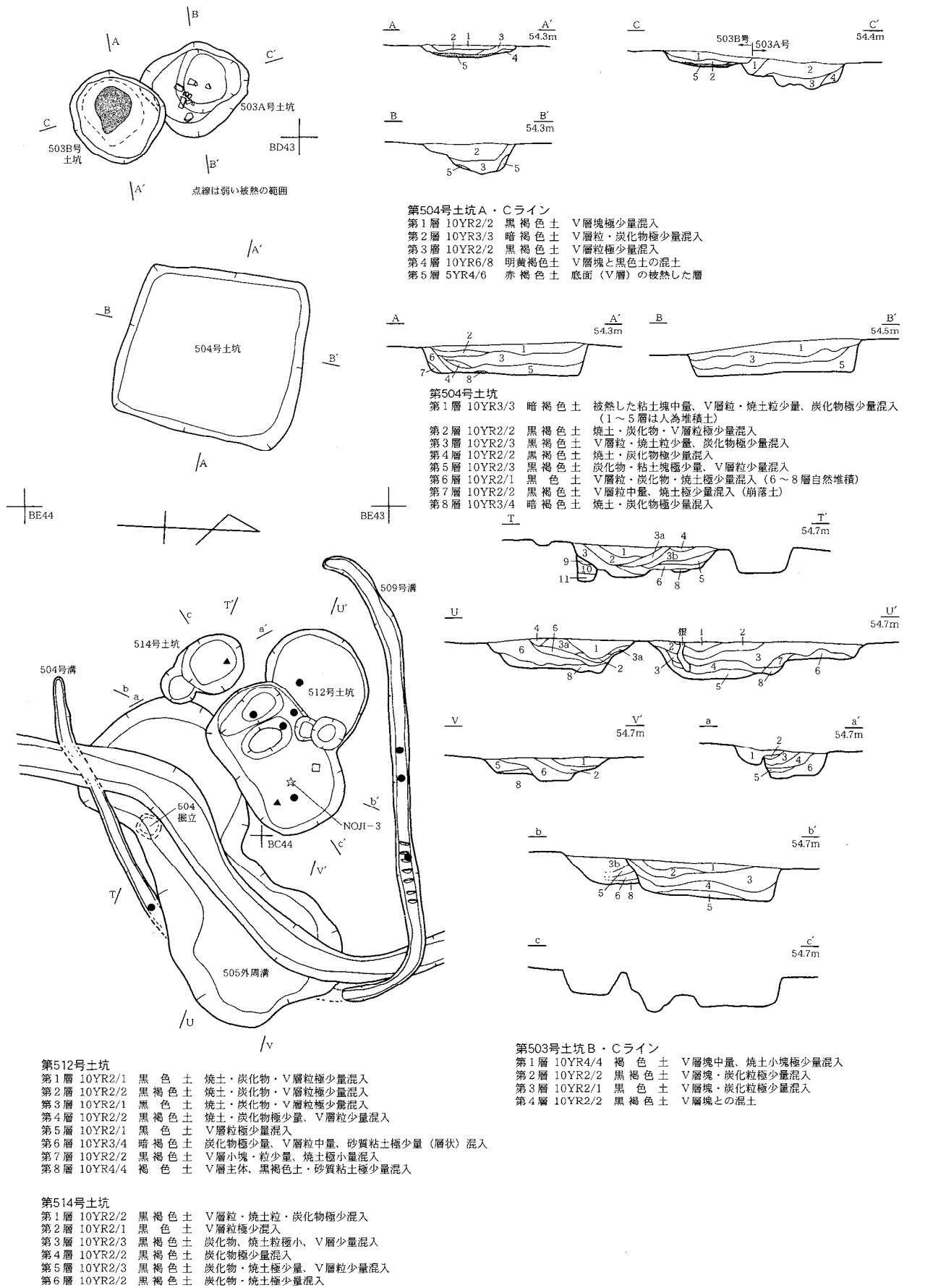


図19 第503・504・512・514号土坑、第509号溝跡

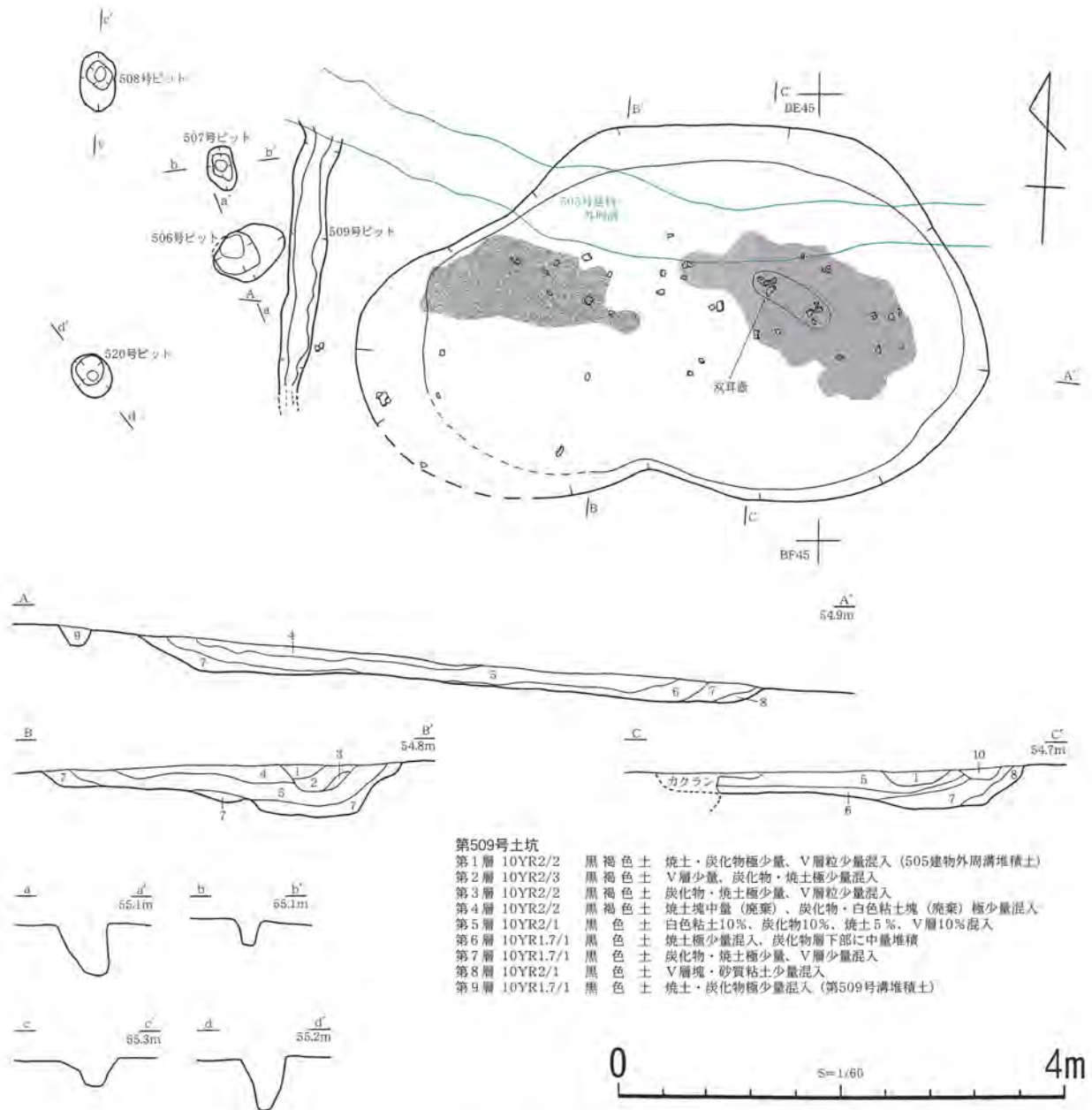


図20 第509号土坑・第509号溝跡・第506～508・520号ピット

【規模・形態】 1.9m×1.68mの方形を呈する。深さは最大30cmである。

【重複】 無し。

【底面】 V層を底面とし、ほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり断面は箱形を呈する。

【堆積土】 8層に分層された。V層の細かい塊や焼土を含む土層から構成される。人為体積と判断した。

【出土遺物】 覆土中より須恵器甕(19)の口縁部破片が出土している。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部と掘立部を「コ」の字形に取り囲むようにほぼ東側に開口する。深さは最大40cm (西辺) 最小10cm (南北辺先端部) である。底面には全体的に鋤痕が見られる。また、西辺中央部付近には細長い土坑状の張り出しが、北辺中央付近では土坑状の広がりが見られる。

【堆積土】西辺の土坑状張出部分では堆積土上位に白頭山-苦小牧火山灰が層状に堆積している。その他の部分では、最下層にV層ブロックと黒色土の混土が堆積している。ブロック状堆積の上位は概ね自然堆積であると考えられる。したがって西辺土坑部分は外周溝がある程度埋まっている状態で新たに掘り込まれ、そこに火山灰が堆積したと考えられる。この土坑状の広がりや縦穴には火山灰の堆積が確認できることから、最終段階で建物跡を廃絶する際に掘り込んだ部分である可能性が高い。

【出土遺物】西辺の土坑付近において土師器坏等が少量出土している。14・15がそれにあたるが、これらは土坑部分に廃棄された焼土と同一レベルでの出土であり、同様に廃棄されたものと考えられる。また、流れ込みではあるが、古墳時代に帰属すると考えられる古式土師器（図21-16）が1点出土している。器種は広口壺と考えられるが、細片のためはっきりしない。外面口縁部にはヨコナデが施され、胴部には細かいハケメが見られる。内面口縁部・胴部もヨコナデの後胴部にハケメが見られる。

【付属施設】先に述べたように多くの遺構と重複関係にある。以下にそれらの遺構について記述する。

第509号土坑

【確認】第505号建物跡外周溝部南辺中央付近、Ⅲ～Ⅳ層面で確認した。

【規模・形態】長軸5.6m、短軸3.28mの概ね楕円形を呈する。深さは最大50cmである。

【重複】第505号建物跡外周溝と重複し、本土坑の方が古い。

【底面】Ⅳ～Ⅴ層を底面とし、東側に向かって緩く傾斜している。壁は斜めに立ち上がっている。

【堆積土】9層に分層された。1～3層は505号建物跡外周溝堆積土である。西半分には堆積土中に焼土が確認され（4層）、東端では底面近くに炭化物の範囲を確認した（6層中）。堆積土中（5層）には須恵器・土師器等の遺物が混在しており、この層以下は人為的に埋められたものと判断した。4層はⅡ層起源の黒色土が主体となっており、自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】覆土中より土師器坏・甕・双耳壺・須恵器大甕等が出土している。20の双耳壺は粘土紐輪積み成形の後、胴部にケズリ、口縁部にはヨコナデが施されている。内面のヘラナデはハケメ状の痕跡が見られるものである。耳部はケズリ用の工具等により接着部が外面からのみ押さえられている。耳部の面取り整形などは見られない。底面はいわゆる砂底である。付近の遺跡においてこのような遺物は、本遺跡第三次調査の第301号溝跡、浪岡町山元(3)遺跡第19号住居跡等で出土している。また、少し離れるが、青森市朝日山(2)遺跡第103号縦穴住居跡（須恵器製）、青森市安田(2)遺跡第30号縦穴住居跡等でも出土している。これらは成形・整形技術等によって大きく二つに分離できる。一つはロクロ成形で耳部の作り・接着が丁寧なもの。もう一つは非ロクロ成形で耳部の作り・接着が粗雑なものである。前者は山元(3)遺跡・朝日山(2)遺跡・安田(2)遺跡例に見られ、後者は野尻(1)遺跡例に見られる。この差が時間差を表すのかどうかは今後の課題である。

第512号土坑

【確認】第505号建物跡外周溝部北辺中央付近、Ⅳ～Ⅴ層面で確認した。

【規模・形態】長軸1.6m、短軸96cmの小判型の土坑の横に長軸1.1m、短軸88cmの土坑が付属した形態を呈する。確認面からの深さは前者が40cm、後者が17cmである。

【重複】第505号建物跡外周溝と重複し、本土坑の方が新しい。

【底面】Ⅴ層を底面とし、両者ともほぼ平坦であるが、前者の中央部付近では0.5×0.35mの範囲で約15cmの盛り上がりが見られる。壁は両者ともほぼ垂直に立ち上がっている。

【堆積土】8層に分層された。第Ⅲ層を主体とした黒色土と、Ⅳ層とⅢ層の混土からなる黒褐色土が

交互に堆積している。全体的に細かい粒子で構成されている。概ね自然堆積と判断した。

【出土遺物】 覆土中より須恵器坏・ミニチュア土器?・流状滓1点が出土している。また、堆積土4層中から出土した炭化材は放射性炭素年代測定にかけられ、補正14C年代で $1,110 \pm 50$ ybpの値が得られた。流状滓も分析にかけられている(第VI章第3節参照)

第514号土坑

【確認】 第505号建物跡外周溝部北辺中央付近、IV～V層面で確認した。

【規模・形態】 長軸0.72m、短軸0.64mのほぼ円形の土坑に上場直径32cmの柱穴状の掘り込みが付属している。深さは前者が30cm、後者が15cmである。

【重複】 第505号建物跡外周溝と重複し、本土坑の方が新しい。

【底面】 V層を底面とし、前者はほぼ平坦であり、壁はやや斜めに立ち上がる。

【堆積土】 6層に分層された。第512号土坑と近似した土層である。自然堆積と判断した。

【出土遺物】 須恵器坏口縁部破片が1点出土している(26)

第509号溝跡

【確認】 第505号建物跡外周溝部北辺中央付近、IV～V層面で確認した。

【規模・形態】 幅約20cm、深さ約5～10cmの溝が、途中途切れるが、おおよそ「コ」の字形に第512・514号土坑を取り囲み北西方向に開口している。

【重複】 第505号建物跡外周溝と重複し、本土坑の方が新しい。

【底面】 V層を底面とし、底面には鋤痕が見られる。

【堆積土】 第Ⅲ層を主体とした黒色土で構成されており、自然堆積と判断した。

【出土遺物】 土師器片が出土しているが、図示し得ない。

第508号溝跡

【確認】 第509号土坑西側付近、Ⅲ～IV層面で確認した。

【規模・形態】 幅約28cm、深さ約15cmの溝が南北に約2.4m続いている。

【重複】 第505号建物跡外周溝と重複し、本土坑の方が新しい。

【底面】 V層を底面とし、鋤痕等は見られない。壁面はⅢ～IV層で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

【堆積土】 第Ⅱ層を主体とした黒色土で構成されており、自然堆積と判断した。

【出土遺物】 無し。

第506～508・520号柱穴跡

【確認】 第508号溝跡西側付近、IV～V層面で確認した。

【堆積土】 すべて第Ⅱ層を主体とした黒色土で構成されており、自然堆積と判断した。

【出土遺物】 無し。

以上の遺構はいずれも外周溝との重複関係から、外周溝と同時に存在したものではないことがわかる。このうち、第512・514号土坑は、堆積土の状況等から同時存在の可能性が考えられる。また、それを取り囲む第509号溝跡も位置的な関係から土坑2基と関係した遺構であると推測できる。

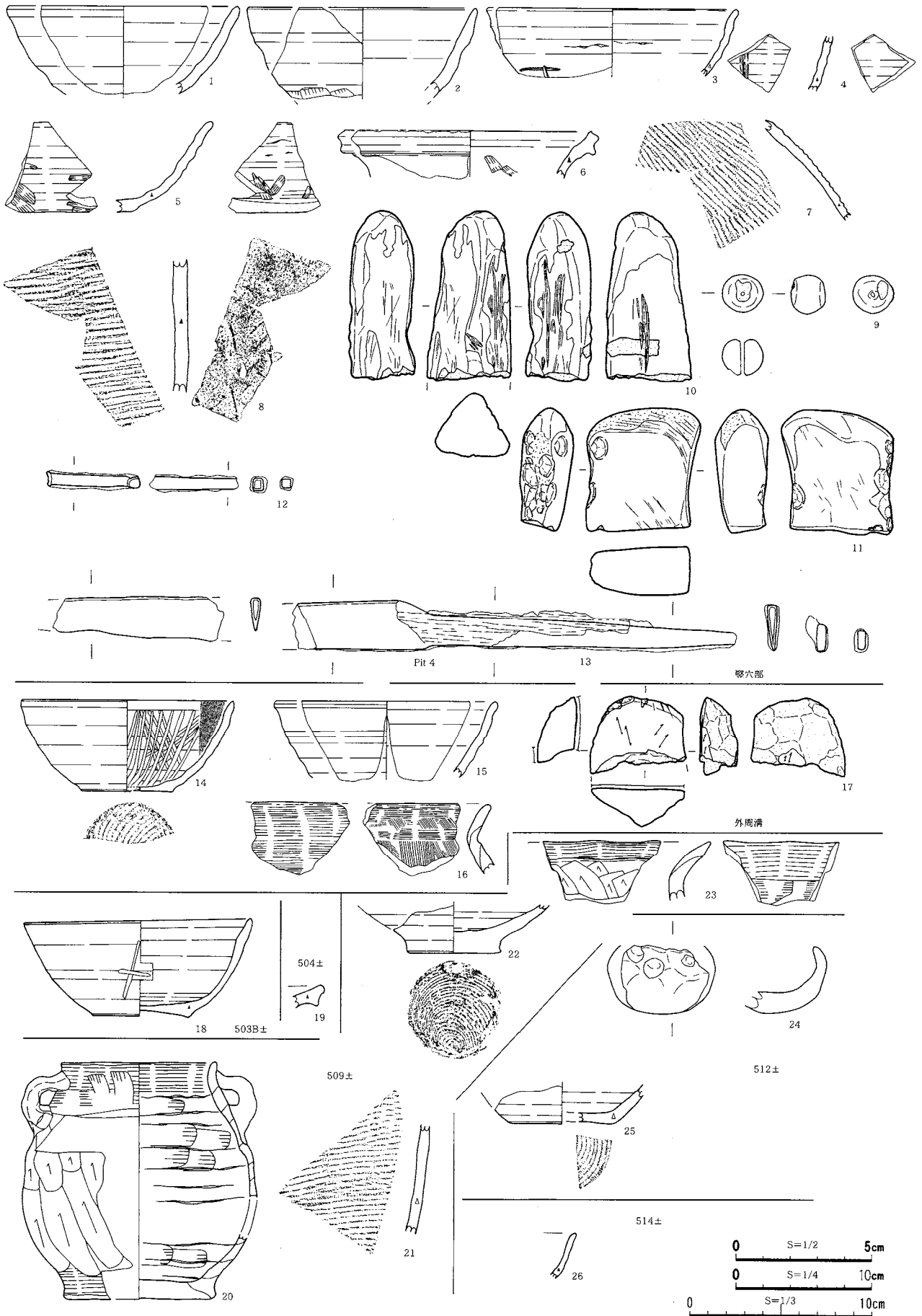
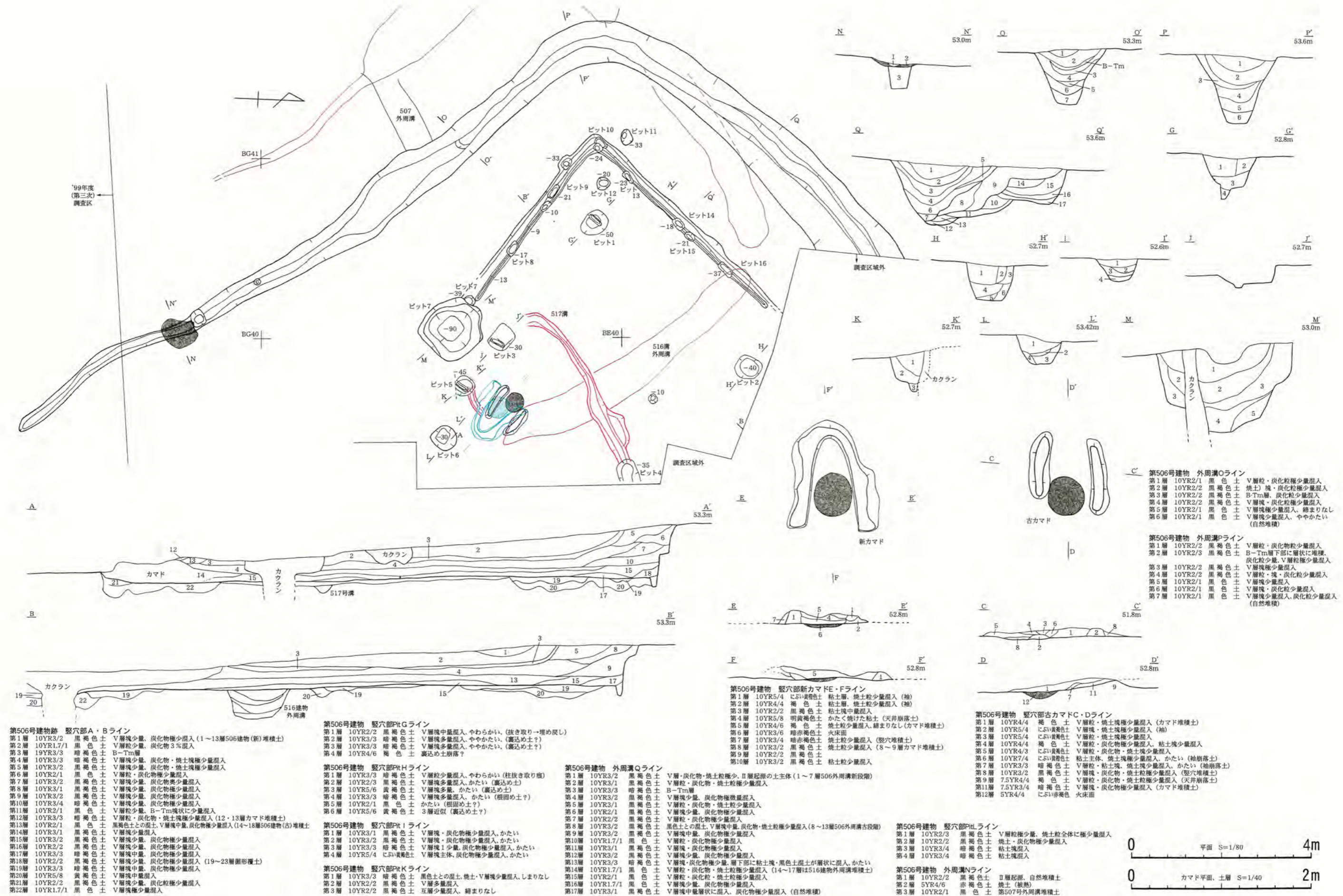


图21 第505号建物跡・第503・504・509・512・514号土坑出土遺物



- 第506号建物跡 竪穴部A・Bライン**
- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒少量、炭化物極少量混入 (1~13層506建物(新)堆積土)
 - 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒少量、炭化物3%混入
 - 第3層 19YR3/3 暗褐色土 B-Tm層、炭化物・焼土塊極少量混入
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊少量、炭化物・焼土塊極少量混入
 - 第5層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物・焼土塊極少量混入
 - 第6層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第7層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第8層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第9層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第10層 10YR3/4 暗褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第11層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第12層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊少量、炭化物・焼土塊極少量混入 (12・13層カマド堆積土)
 - 第13層 10YR2/1 黒褐色土 黒褐色土との混入、V層塊少量、炭化物極少量混入 (14~18層506建物(古)堆積土)
 - 第14層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊少量混入
 - 第15層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第16層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第17層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第18層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入 (19~23層崩形堆積土)
 - 第19層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第20層 10YR5/8 黄褐色土 V層塊少量混入
 - 第21層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第22層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊少量混入

- 第506号建物 竪穴部PtGライン**
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊少量混入、ややらかい。(抜き取り→埋め戻し)
 - 第2層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊少量混入、ややかたい。(戻込め土?)
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊少量混入、ややかたい。(戻込め土?)
 - 第4層 10YR4/6 褐色土 戻込め土崩落?
- 第506号建物 竪穴部PtHライン**
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊少量混入、ややらかい(柱抜き取り後)
 - 第2層 10YR2/3 黒褐色土 V層塊少量混入、かたい(戻込め土)
 - 第3層 10YR5/6 黄褐色土 V層塊少量、かたい(戻込め土)
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊少量混入、かたい(根固め土?)
 - 第5層 10YR2/1 黒褐色土 かたい(根固め土?)
 - 第6層 10YR5/6 黄褐色土 3層近似(戻込め土?)
- 第506号建物 竪穴部PtKライン**
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 黒色土との混入、焼土・V層塊少量混入、しまりなし
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊少量混入
 - 第3層 10YR2/2 黒褐色土 互層少量混入、しまりなし

- 第506号建物 外周溝Qライン**
- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 V層・炭化物・焼土極少量混入、II層起源の土主体 (1~7層506外周溝新段階)
 - 第2層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・炭化物・焼土極少量混入
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 B-Tm層
 - 第4層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第5層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第6層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第7層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第8層 10YR3/2 黒褐色土 黒色土との混入、V層塊少量、炭化物・焼土極少量混入 (8~13層506外周溝古段階)
 - 第9層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第10層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒・炭化物・焼土極少量混入 (14~17層506外周溝堆積土)
 - 第11層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第12層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第13層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入、下部に粘土塊・黒色土混入が層状に混入、かたい
 - 第14層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒・炭化物・焼土極少量混入
 - 第15層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第16層 10YR1.7/1 黒色土 V層塊少量、炭化物極少量混入
 - 第17層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊少量混入、炭化物極少量混入 (自然堆積)

- 第506号建物 竪穴部PtLライン**
- 第1層 10YR2/3 黒褐色土 V層塊少量、焼土塊全体に極少量混入
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 焼土・炭化物極少量混入
 - 第3層 10YR3/4 暗褐色土 粘土塊混入
 - 第4層 10YR3/4 暗褐色土 粘土塊混入
- 第506号建物 外周溝Rライン**
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 II層起源、自然堆積土
 - 第2層 5YR4/6 赤褐色土 焼土(被熱)
 - 第3層 10YR2/1 黒褐色土 第507号外周溝堆積土

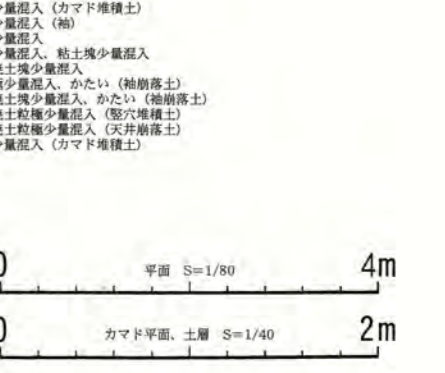


図22 第506号建物跡

第506号建物跡 (図22～25)

【概要】 竪穴部、掘立部の一部、外周溝から構成される。北側の一部は小屋の基礎により削平され、東側は町道により削平されているため、全体の約半分が不明である。

【位置・確認】 A区東端、BC～BH-38～42グリッドに位置する。IV～V層面で確認した。図示していないが、付近には農業用の配水管が埋設されていたため、攪乱が激しい箇所がある。

【重複】 第507号建物跡外周溝、第516号建物跡外周溝、第523号土坑と重複関係にある。本遺構が全ての遺構より新しい。

竪穴部

【形態・規模】 東側約1/4を削平されているため、全体形は不明であるが、南西辺6.4m、北東辺7.6m (推定) の長方形を呈すると考えられる。軸方向はN-135° - Eである。なお、竪穴部分は土層断面における観察と、上下2つの竈の検出状況から、上下2枚の床面が存在する事が判明したが、柱穴、周溝等がどちらの床面に伴うものかは調査段階では不明であった。

【壁・床面】 壁は北西辺と南西辺の一部で残存している。ほぼV層を床面としている。確認面からの深さは最大60cmである。土層断面に見られるように、壁面には段差が見られる。当初この段差が床面の一部ではないかと考えたが、段差の平坦面と床面とが一致しないため、性格等は不明である。床面は先述のとおり2枚確認された。上層の床面は13層上面と考えられるが、明確な硬化面や貼り床等は見られなかった。下層の床面についてはV層を床面としている。概ね平坦であるが、上層の床面同様硬化面ははっきりとしなかった。また、掘形は一部にしか見られなかった。下層床面の下位には第517号溝跡が確認された。幅約20～30cm、深さ約10cmの細長い溝が竈付近を取り囲むように配置されている。このような床面上あるいは床面下に確認される溝は、第201・208・215・312・318・319号建物跡等にも見られ、床面の下部構造の一部と考えられる。

【堆積土】 22層に分層された。3層は白頭山-苦小牧火山灰層である。厚さ約5cmでほぼ全面に層状に堆積している。2層より上位はII層起源の黒色土を主体とする自然堆積層である。4層以下は13層上面が上層の床面であり、19層上面が下層の床面である。したがって13層以下は人為堆積と考えられる。

【柱穴・土坑】 ピット1～5は主柱穴である。竈側のピット3・5は立て替えによる位置の変化と考えられる。竈対辺側の主柱穴は建て替え時に同じ場所が再利用されたと考えられる。柱穴間隔はピット1～2が4.8m。ピット1～3が3.52m。ピット1～5が4.8mである。壁際には壁周溝と柱穴が見られる。特に壁柱穴に関してはピット16等に見られるように、平面形が長方形を呈している。

【竈】 2つの竈がほぼ同位置に上下に重なって確認された。廃棄時の破壊により原形はとどめていないが、当然上層の竈の方が残りはよい。2つの竈は共に粘土を袖の構築材としている。上層の竈は両袖共に高さ10～15cmほど残存している。火床面は直径約40cmの範囲で確認され、厚さ約4cmで皿状に赤変している。下層の竈の袖は高さ約5～10cmで残存しており、火床面は直径約40cmの範囲で厚さ約4cmが皿状に赤変していた。共に支脚等は見られなかった。

【出土遺物】 覆土中より土師器杯・長胴甕・ミニチュア土器、須恵器杯・甕、土玉8個、土鈴破片、刀子、砥石、椀型滓等が出土した。また、図示し得なかったが、やや幅広の刀子(山刃?)も出土した。ほとんどの遺物が火山灰より下位で出土している。上下どの住居跡に伴うのかはここでは明らかにできないが、この竪穴部に関しては土製品類の出土が多いことが特徴として上げられる。66～68は第517号溝跡から出土している。

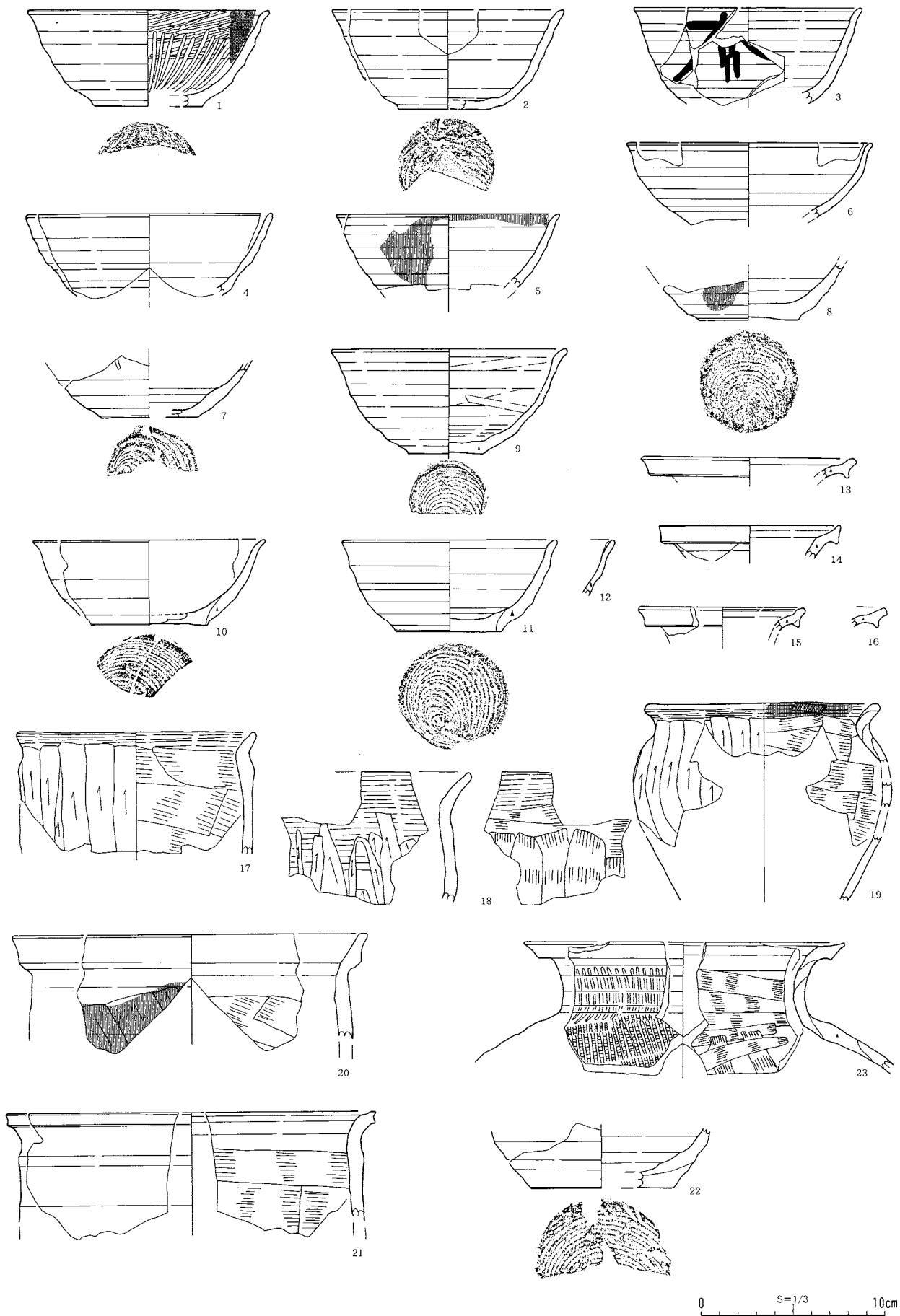


图23 第506号建物跡出土遺物（竪穴部①）

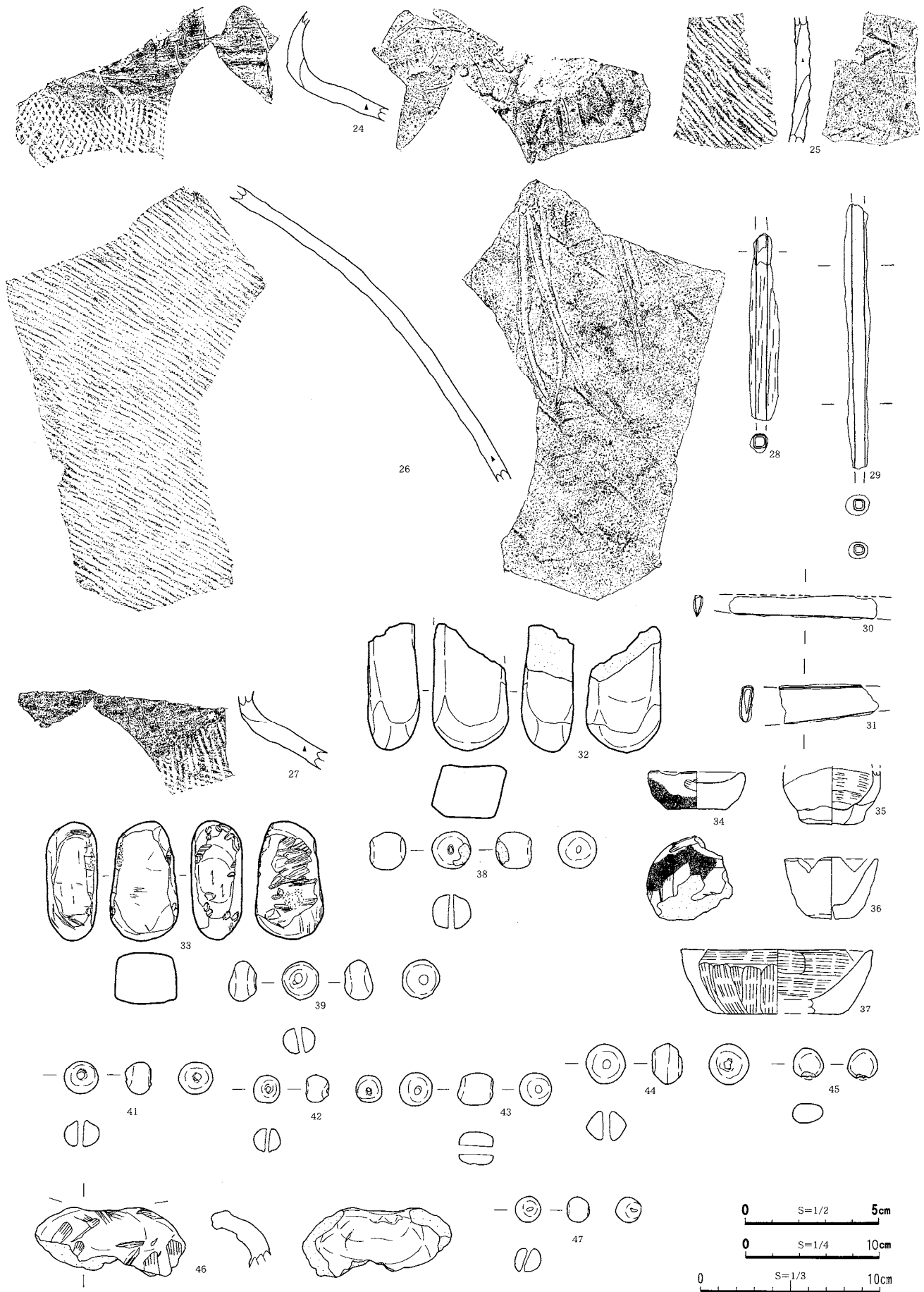


図24 第506号建物跡出土遺物 (竪穴部②)

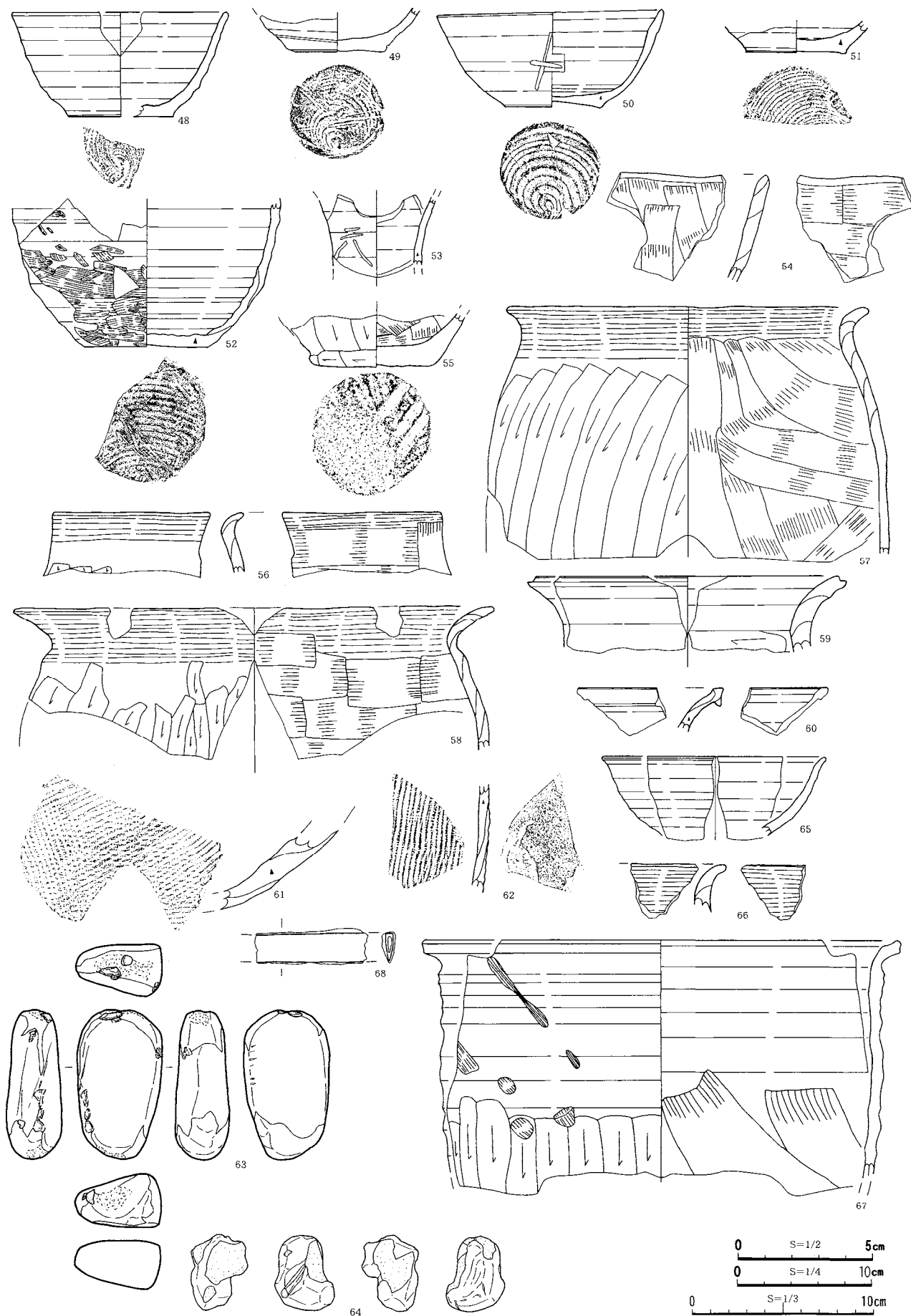


图25 第506号建物跡出土遺物（外周溝・517号溝部分）

掘立部

【形態・規模】柱穴が1本確認されただけである。

【堆積土】4層に分層された。

【付属施設】無し。

【出土遺物】無し。

外周溝

【形態・規模】残存部分のみでは竪穴の2辺を囲っているが、おそらく3方を囲い、南東側に開口しているものと考えられる。確認面からの深さは最大80cm・最小34cmである。北西辺～南西辺中央部までは深めであるが、南西辺中央部から先端部にかけては極端に浅くなっている。南西辺先端部では堆積土上面で焼土が確認された、直径約40cmの範囲が約2cmの厚さで皿状に赤変している。

【堆積土】覆土中位に白頭山－苫小牧火山灰が層状に堆積している。この層より上位はⅡ層起源の黒色土を主体とする自然堆積層と考えられる。火山灰層より下位については出土する遺物の量が増えるため、人為堆積と自然堆積の双方が混合していると考えられる。

【付属施設】無し。

【出土遺物】覆土中より土師器坏・長胴甕・埴？、須恵器坏・長頸壺・甕等が出土している。53は須恵器長頸壺の頸部破片であるが、外面には「六」等と読める刻書が見られる。

第507号建物跡 (図26・27)

【概要】竪穴部と外周溝で構成される。外周溝南側は第3次調査において第304号溝跡の一部として調査されている。

【位置・確認】BF～BI-40～42グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層面で確認した。付近の土層は通常のⅢ～Ⅴ層とやや異なり、砂質の土層が多く含まれている。

【重複】第506号建物跡外周溝、第516号建物跡外周溝と重複関係にあり、どの遺構よりも古い。

竪穴部

【形態・規模】主軸方向3.04m、横軸方向3.2mのほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-54.5°-Eである。

【壁・床面】床面近くでの確認のため、壁の残りは余り良くない。Ⅲ～Ⅳ層を壁面とし、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面はⅣ層起源のやや粘質のある土を材料にした掘形覆土を固めて構築されており、ほぼ平坦である。掘形はⅤ層まで掘り込んでいる。

【堆積土】9層に分層された。2層上面が床面であり、その他は1層が竪穴部堆積土、他は壁周溝・掘形の堆積土である。

【柱穴・土坑】4隅の壁際に柱穴が見られ、竈の付く辺の一部を除いて壁周溝がめぐっている。

【竈】破壊のため残りは良くない。一応両袖を確認したが、高さは5cm程度である。粘土を袖の構築材としている。火床面は壁から40cm内側に確認された。直径約40cmの範囲が厚さ約5～10cmの厚さで皿状に赤変している。

【出土遺物】堆積土中から須恵器坏・長頸壺・甕の破片が出土している。

外周溝

【形態・規模】竪穴部の3方を囲むように北東側に開口する。南東側では幅24cmの溝が南方向に枝分かれしている。確認面からの約60cmである。壁はⅣ～Ⅴ層であり、概ねV字状の断面である。

【堆積土】遺構付近のⅤ層の崩落土を中心とした砂質の層が最下層に堆積している。また、最上位の

野尻(1)遺跡V

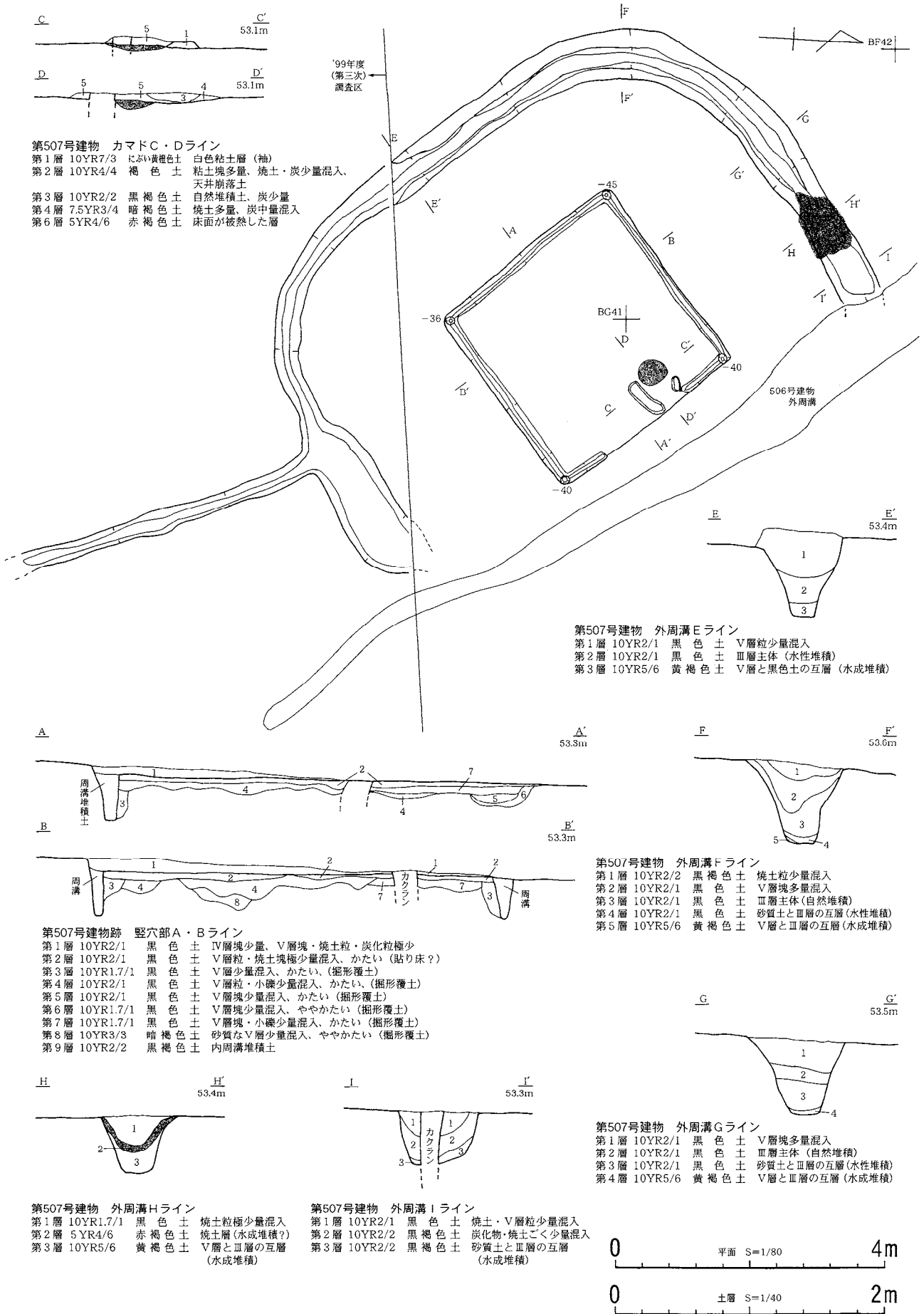


図26 第507号建物跡

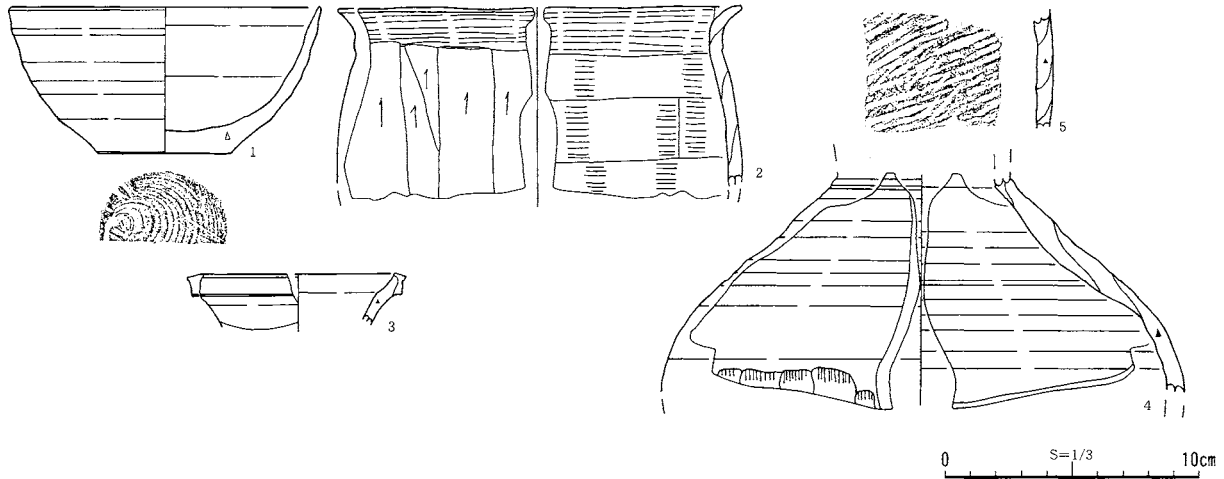


図27 第507号建物跡出土遺物

層はⅡ層起源の黒色土を主体とした層である。いずれも自然堆積と考えられる。なお、北側先端部付近では堆積土中に焼土が確認された。廃棄されたものというよりは、堆積土中で火を焚いたような状況であった。

【付属施設】無し。

【出土遺物】図示できる遺物は出土していない。

第508(8)号建物跡 (図28～31)

【概要】図中の直線より南側にあたる、第1次調査時の第8号建物跡と第18・22号溝跡の木調査部分を検出した。竪穴部と外周溝から構成される建物跡である。掘立部に関しては明確ではない。

【位置・確認】BE～BH-30～33グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。

【重複】第509(7)号建物跡と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。

竪穴部

【形態・規模】残存部分から、東西壁約6.0m×南北壁約5.0mで、やや東西に長い長方形になると推定される。主軸方位はN-127°-Eである。

【壁・床面】壁はⅣ～Ⅴ層を掘り込んでおり、ゆるやかに外傾して立ち上がる部分と、ほぼ垂直に立ち上がる部分とが見られる。床面はⅤ層を掘り込んだ極浅い掘形に充填した土を固めて構築している。概ね平坦である。

【堆積土】本調査分では7層に分層された。Aライン7層は掘形覆土である。第1次調査時と同じ状況なので詳細は『野尻(1)遺跡Ⅰ』の記述を参照されたい。

【柱穴・土坑】支柱穴（ピット1～4）が4本、壁柱穴は竪穴部の四隅とその中間、その他にも支柱穴付近等で数個が見つかっている。第1次調査では壁際に内周溝が確認されているが今回の調査部分では確認されなかった。支柱穴は竈側の2本が内周溝よりやや内側に配置され、竈対辺側の2本がやや床面中央寄りに配置されている。支柱穴の柱間寸法は3.4～3.7mである。ピット5・6は、建て替えによる支柱穴の移動を示している。堆積土は黒褐色土を主体とし、ロームブロックを多く含む。Ⅴ層を壁とし、Ⅵ層を底面とする。

【竈】第1次調査の報告書『野尻(1)遺跡Ⅰ』参照。

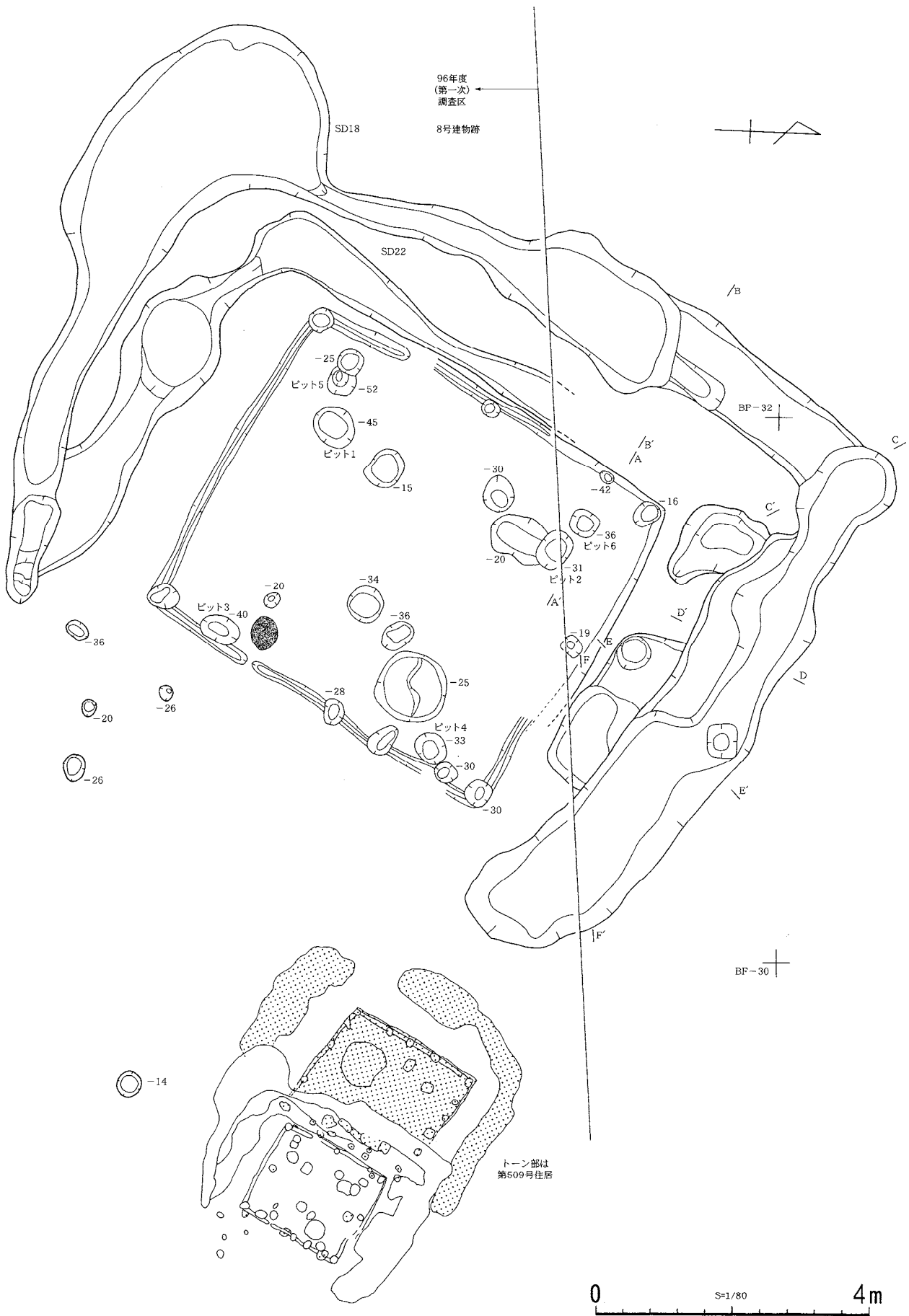


図28 第508号建物跡①

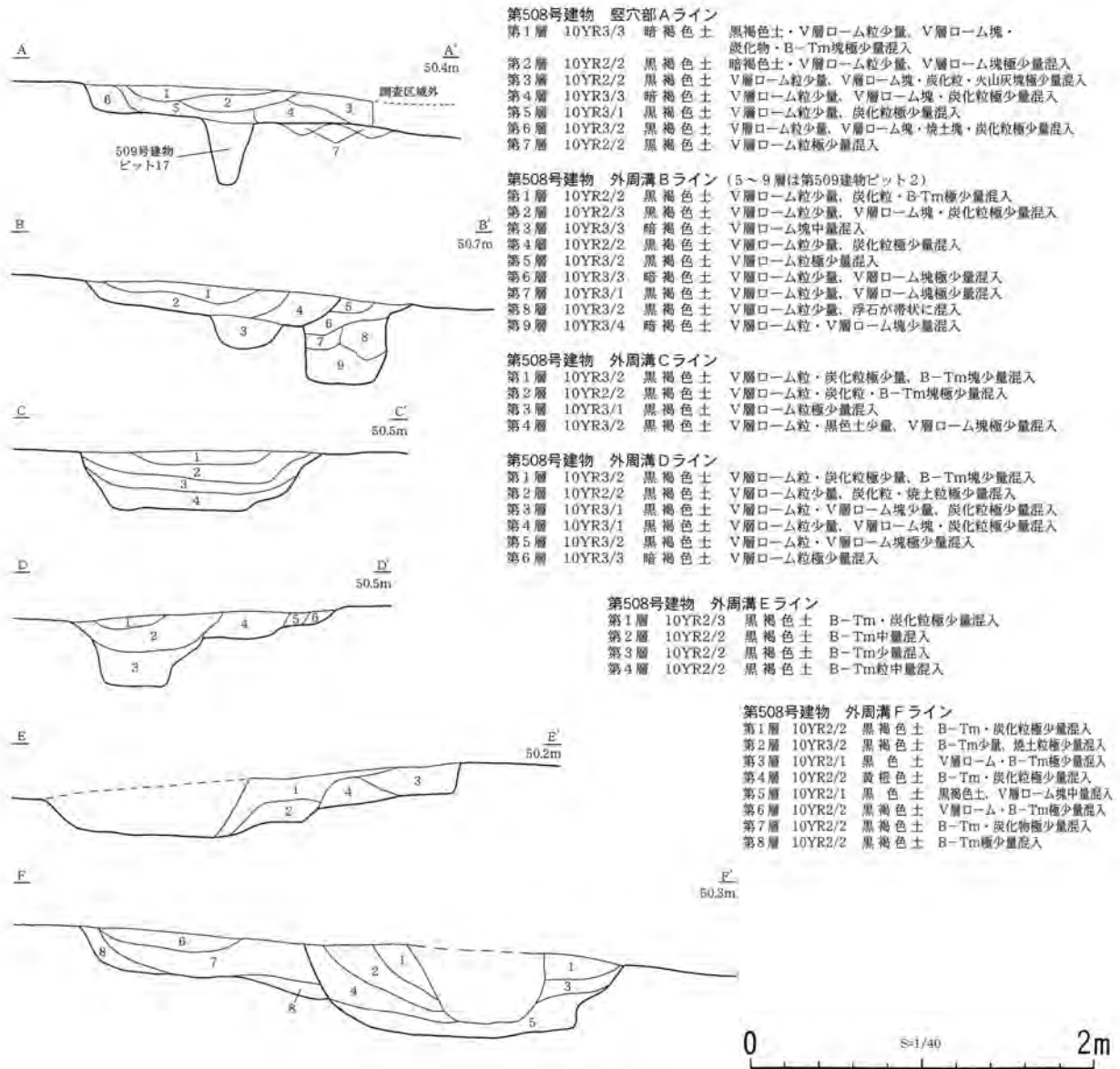


図29 第508号建物跡②

[出土遺物] 竪穴部から出土した須恵器片が外周溝のものと接合しているのので、外周溝の出土遺物の項で報告する。

掘立部

[形態・規模] 第1次調査の報告書『野尻(1)遺跡 I』参照。

[堆積土] 第1次調査の報告書『野尻(1)遺跡 I』参照。

[付属施設] なし。

[出土遺物] なし。

外周溝

[形態・規模] 竪穴部を取り囲み南東方向に開口する「コ」の字形の平面形である。新旧2本の外周

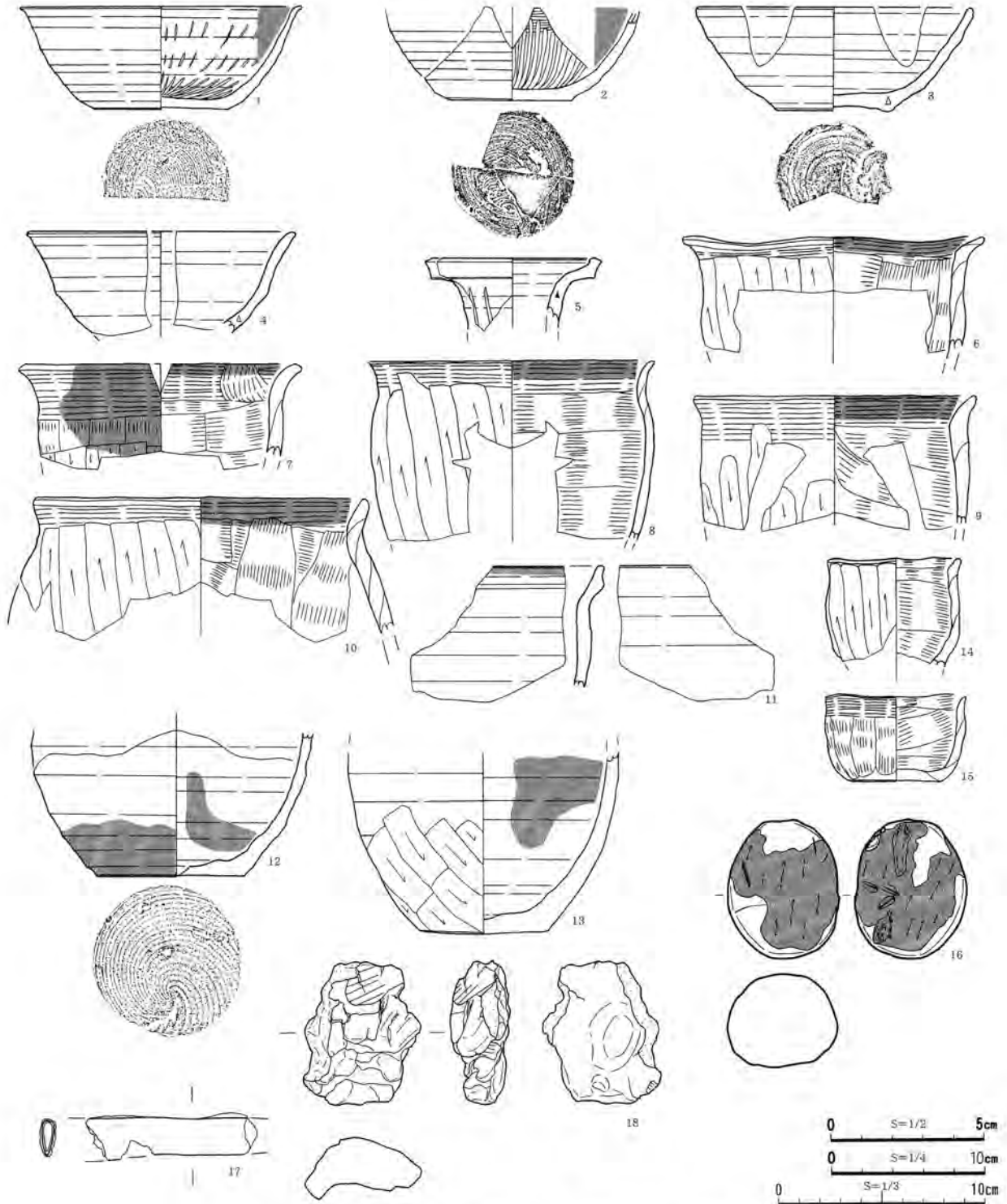


図30 第508号建物跡出土遺物（外周溝部分①）

溝（第1次調査ではSD-18・22）を持ち、内側→外側の順に作り替えが行われている。Bライン付近では細かった外周溝を浅く広く掘り返して拡張している。Dライン付近では逆に浅かったところを深く掘り返している。全体的に幅・深さが一定せず、底面には所々に段差が見られる。確認面の高さが調査年次により違うものの、幅は最大で2.2m、最小0.6mである。確認面からの深さが最も深

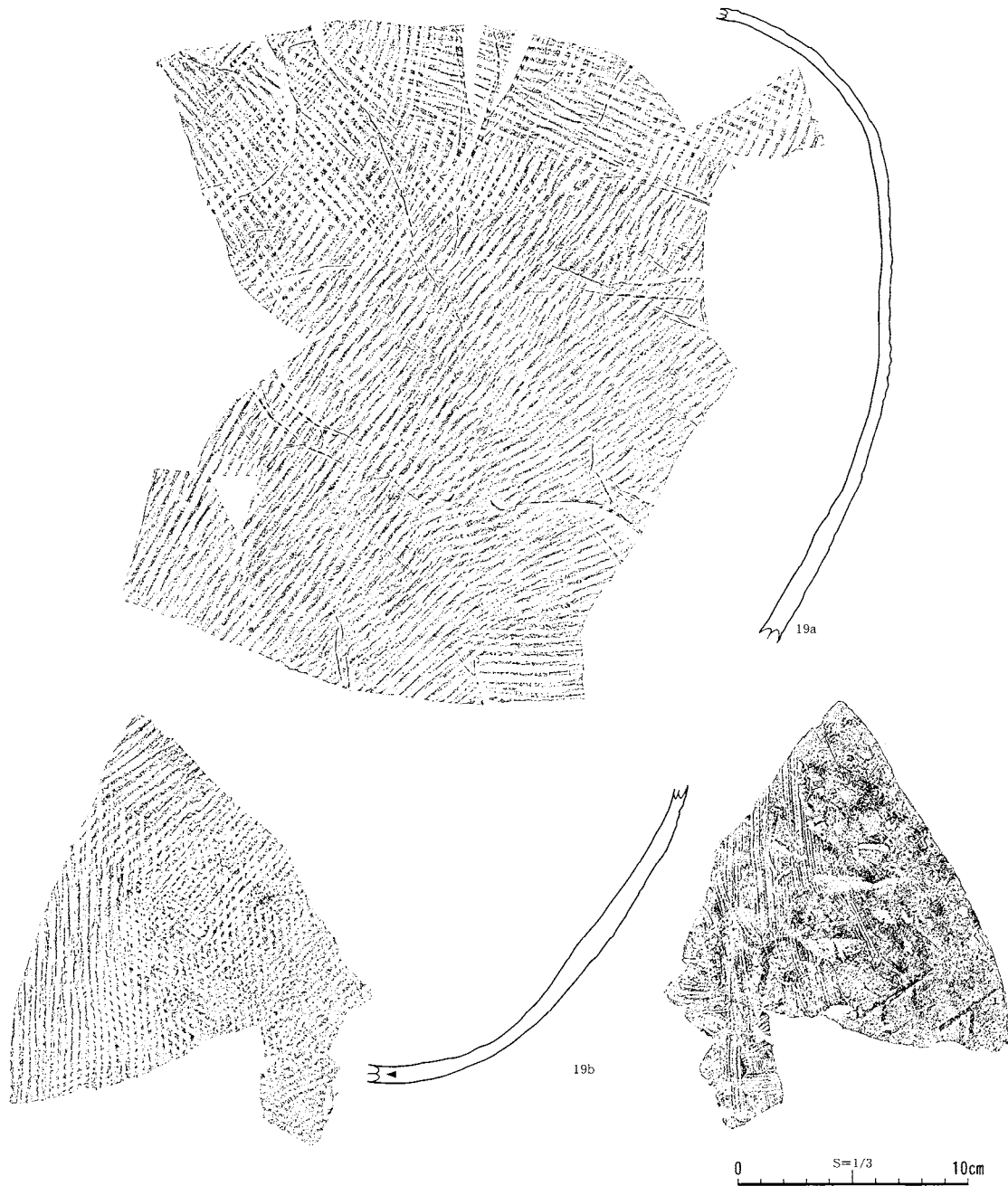


図31 第508号建物跡出土遺物（外周溝部分②）

かったのは北側先端部で底面の標高が49.40m、最も浅かったのがBライン付近で底面の標高が50.25mであった。本次調査区分では西側から斜面の下側になる東側先端部にかけて低くなっていくが、深さ50m前後で推移する。壁面はⅢ～Ⅳ層を掘り込み、底面からゆるく外傾して立ち上がる皿状の断面形を呈する所が多い。底面はⅤ層である。

【堆積土】 黒褐色土を主体とし、1層には白頭山-苦小牧火山灰を火山灰を極少量ブロック状に含む。人為堆積と自然堆積が混在している。

【付属施設】 なし。

【出土遺物】覆土中及び底面から土師器、須恵器、刀子、砥石、焼成粘土塊が出土した。図30-5は須恵器長頸壺の口縁～頸部で、刻書がみられる。図31-19a・bは主に底面から出土した同一個体の肩～底部付近である。19aは竪穴部から出土した破片と接合したもので、19bには第541号土坑出土の破片とも接合している。内面にヘラナデによる調整痕が見られる。図30-16は砥石で、両面に擦った痕のほか、深く溝状になった箇所もある。図30-17は両端の欠損した刀子である。図30-18は2つ折りにした平たい粘土を焼成したもので、片面はごつごつしナデの痕も残るが、片面はなめらかで指でくぼませたような凹みが2箇所見られるのみである。

第509(7)号建物跡（図32・33）

【概要】竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。第1次調査時に図中の直線より南側の部分が調査され、第7号建物跡、第17号溝跡とされている。今回は北側の未調査の部分を調査し、遺構の全容が明らかになった。

【位置・確認】B区西側、BD～BG-30～34グリッドに位置する。V層上面で確認した。

【重複】第508号建物跡・第517号土坑と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

竪穴部

【形態・規模】柱穴や残存する壁等から、東西壁約7.3m×南北壁約6.7mで、東西にやや長い方形になると推定される。主軸方位はN-127°-Eである。

【壁・床面】壁はⅢ～V層を掘り込んでおり、ゆるやかに外傾して立ち上がる。床面はV層を掘り込んだ掘形に充填した土を固めて構築しており、概ね平坦である。

【堆積土】黒褐色土を主体とし、掘形を含め9層に分けられる。1・3～5層には炭化粒を微量、V層塊は全体にそれぞれ混入する。セクションベルトにかからない地点で、覆土中位から十和田-八戸火山灰・白頭山-苫小牧火山灰がブロック状に検出されている。9層は掘形覆土であり、その上面が床面となる。貼り床・硬化面等は見られなかった。

【柱穴・土坑】ピット1とピット2が支柱穴であるが、竈対辺南側にあったと考えられる支柱穴は第517号土坑に壊されたと思われる。また、竈南脇にあるはずの柱穴も確認されなかった。柱間寸法は3.8mである。竪穴部の四隅と壁際には壁柱穴が見られた。柱穴の本数は各辺により一定しない。内周溝は前回調査分も含め、南～西壁にかけて確認された。一部の柱穴堆積土中には酸化鉄が沈着し、水の影響を示している。

【竈】第1次調査の報告書『野尻(1)遺跡I』参照。

【出土遺物】堆積土中から須恵器、土師器が出土している。図33-5は須恵器甕の胴～底部付近の破片で、内面底部付近に自然釉が見られる。図33-8は第517号土坑の覆土上位から出土した。体部に篋記号が見られる土師器杯の底部である。

第517号土坑

【形態・規模】長軸約2.42m×短軸約1.96mでほぼ円形の平面形である。確認面からの深さは約36cmである。【壁・底面】第509号建物跡竪穴部堆積土と床面を掘り込み、堆積土を壁に、V層を底面としている。底面は概ね平坦であり、そこから緩やかに外傾しながら壁が立ち上がる。【堆積土】黒褐色土を主体とし、4層に分層した。2層に炭化物を極少量含む。

【出土遺物】土師器の杯が出土している（図33-8・9）。8には体部中位から下位にかけてカーブを描く刻書が見られる。

掘立部

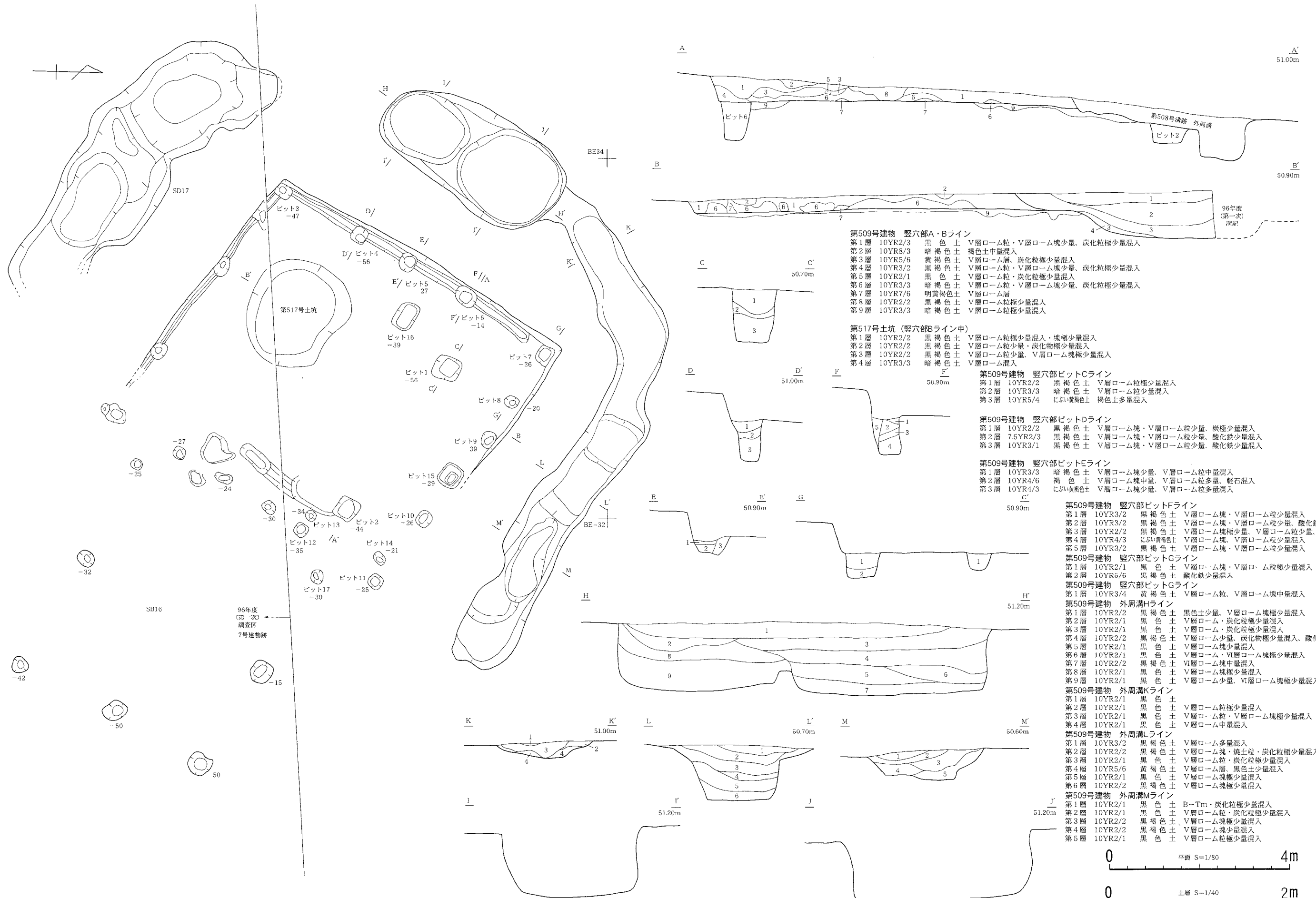


図32 第509号建物跡①

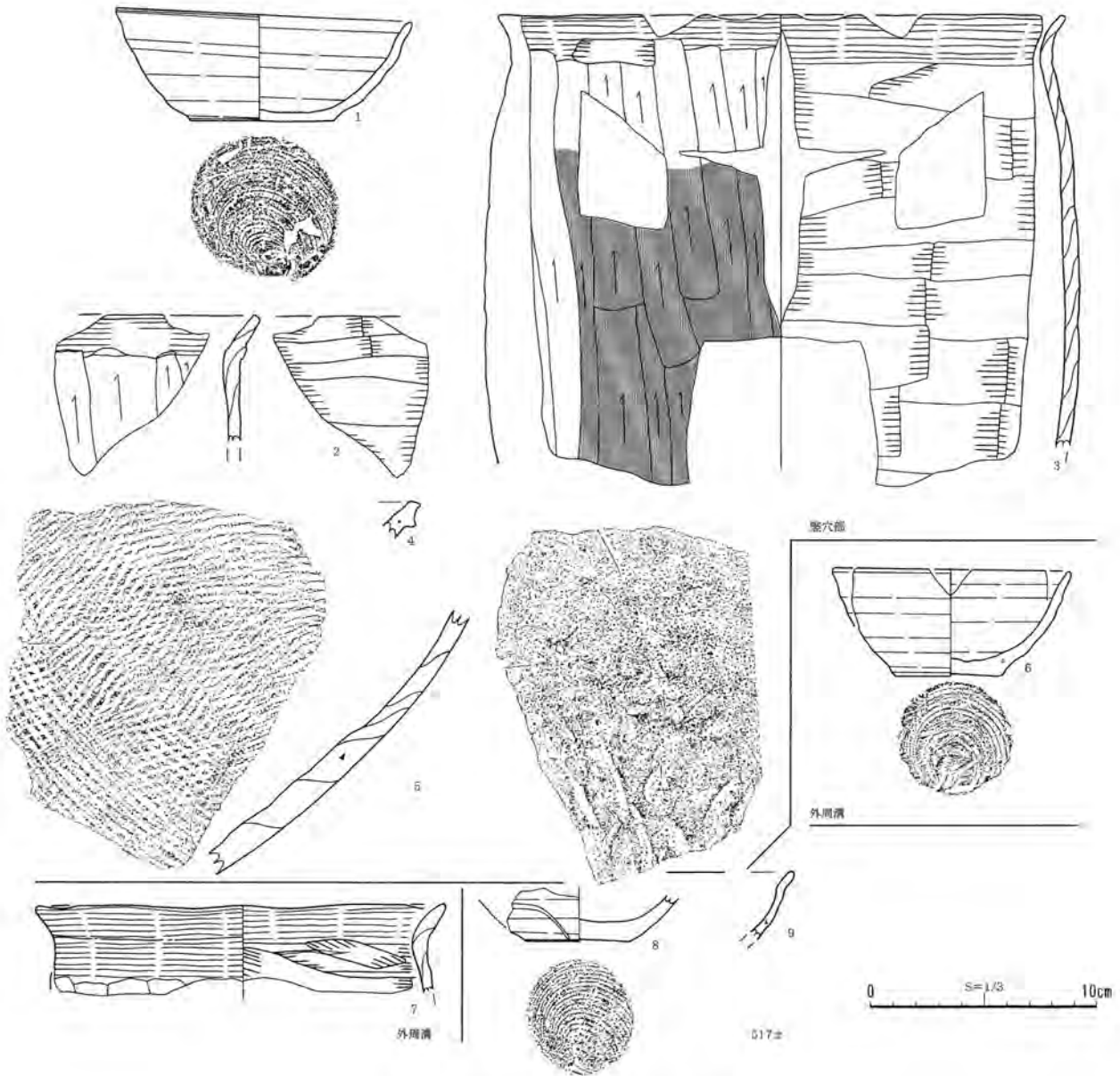


図33 第509号建物跡出土遺物

【形態・規模】 掘立部の大部分が第1次調査時に確認されているので、詳細の記述は譲るが、今回の調査でもピットが1基検出され、2間×2間の建物跡となることが確認された。V層を壁とし、VI層を底面とする。

【堆積土】 黒褐色土を主体とする。ローム粒を全体に含む。

【付属施設】 なし。

【出土遺物】 なし。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部を取り囲み、南東方向に「コ」の字形に開口する平面形である。竪穴部3辺に対応するように深い部分（土坑状）が見られ、各々をつなぐように浅い溝が配置されている。南西側ではとぎれているが、元々は浅い溝でつながっていたと思われる。西側の土坑状の掘り込みでは、

底面に2箇所の深い部分が見られる。土層断面の観察から、南側が埋まりきらない状態で北側が掘りこまれ、北側が埋まりきった頃にまた南側を浅く掘り返し、と何度も同じ場所を掘り直していることがわかる。確認面からの深さは、北側の先端部が最も深く底面の標高が49.89m、最も浅いKライン付近では底面の標高が50.71mであった。基本的には斜面の下側になる北側に向かって徐々に低くなっていくが、Kライン付近の他は概ね50m前後で推移していくようである。壁・底面共にV層を掘り込んでおり、概ね平坦な底面から緩く外傾して立ち上がっている。

【堆積土】 黒色土を主体とする。Mラインでは1層に白頭山-苫小牧火山灰ブロック状に含み、4層には酸化鉄が沈着している。

【付属施設】 なし。

【出土遺物】 覆土中から土師器の甕、須恵器の坏が出土している。

第510号建物跡 (図34・35、38～41)

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。第510A号建物跡とほぼ同じ場所に一回り大きな規模で構築されている。外周溝は第510A号建物跡のものを掘り返しまたは拡張によって使用していると思われる。掘立柱建物部は第510A号建物跡より柱穴の数が少ない2間×1間となる。

【位置・確認】 B区中央付近、BB～BE-23～28グリッドに位置する。Ⅲ層中で確認した。

【重複】 第510A号建物跡と重複する。第510A号建物跡の方が古い。

竪穴部

【形態・規模】 東西壁約5.4m×南北壁約5.7mで、南北にやや長い方形になると推定される。主軸方位はN-114° -Eである。

【壁・床面】 いずれの壁もゆるやかに外傾して立ち上がる。Ⅲ～Ⅳ層を壁面とし、V層を掘り込んだ掘形に充填した土を固めて概ね平坦な床面を構築している。

【堆積土】 掘形覆土(8層)を含めて8層に分層した。黒褐色土を主体とし、全体的にV層のブロックも含んでいる。2、3、6層には炭化物を微量に含む。

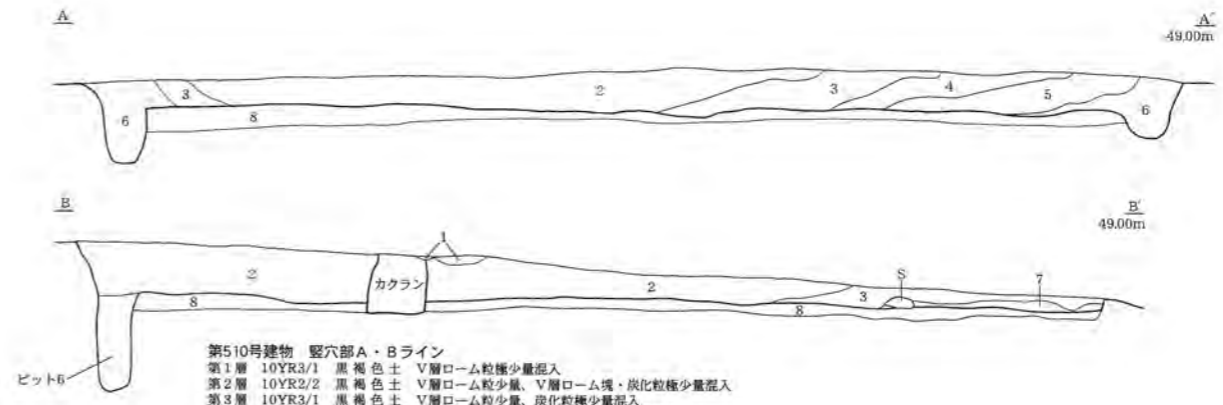
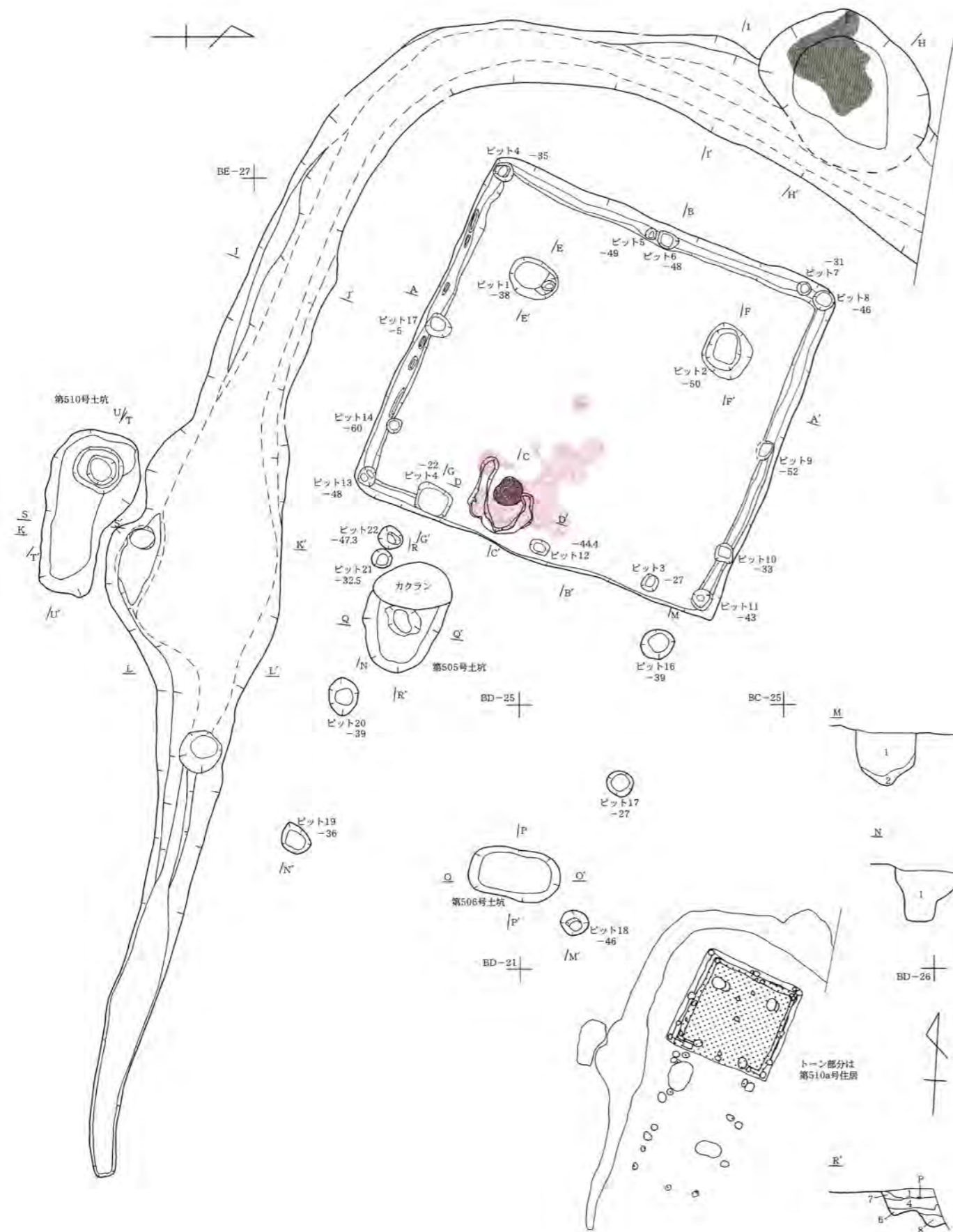
【柱穴・土坑】 ピット1～4は主柱穴と見られる。竈側のピット3・4はほぼ壁際に配置され、竈対辺側のピット1・2は床面中央寄りに配置されている。東西軸がやや長い配置になる。堆積土はロームブロックを多量に含み、人為堆積の様相を呈する。ピット3とピット2間の柱間寸法と、ピット1とピット4間の柱間寸法はともに約3.7mになる。壁際には内周溝と壁柱穴が見られる。壁柱穴は4隅とその中間に配置され、竈側の辺を除き、各々の柱穴間に内周溝が見られる。

【竈】 東壁の南寄りに位置している。崩落を免れた袖と火床面が確認された。袖は粘土を主な構築材としている。火床面を囲んで馬蹄形となっているが、おそらく崩落した天井を掘り残したまま図面をとったと考えられるため、煙道が竪穴外部に向かっていたと考えられる。火床面は長軸約46cm×短軸約40cmのいびつな円形で、8cmの深さまで床面が被熱している。

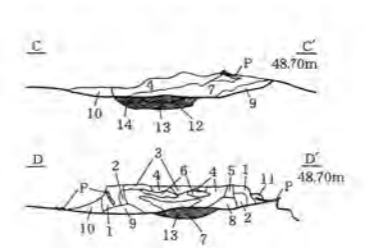
【出土遺物】 覆土中とカマド周辺から土師器、須恵器、礫石器が出土している。図38-3は須恵器の壺の胴～底部で、胴部中程で始めに縦、次に横・斜めのヘラナデでロクロの痕を消そうとしている。また、底部にナデによる調整痕と指頭圧痕が見られる。図38-4は須恵器長頸壺の胴～底部と思われる。この2つの長頸壺はカマドを含む竪穴部と外周溝から出土した破片が接合している。図39-19は敲き石で、ほぼ全周縁と広い面一面に敲打痕が残る。

掘立部

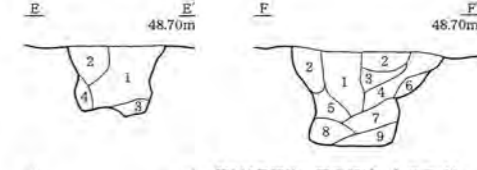
【形態・規模】 桁行2間×梁間1間となる。南北軸が約4.5mで一定、東西軸は4.4mと4.8mである。



- 第510号建物 竪穴部A・Bライン
- 第1層 10YR3/1 黒褐色土 V層ローム粒極少量混入
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒少量、V層ローム塊、炭化粒極少量混入
 - 第3層 10YR3/1 黒褐色土 V層ローム粒少量、炭化粒極少量混入
 - 第4層 10YR3/2 黒褐色土 V層ローム粒少量、V層ローム塊極少量混入
 - 第5層 10YR3/1 黒褐色土 V層ローム粒少量、V層ローム塊少量混入
 - 第6層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒少量、炭化粒極少量混入
 - 第7層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒少量、炭化粒極少量混入
 - 第8層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム塊、V層ローム粒少量、粘土塊、炭化粒極少量混入、かたたくしまる



- 第510号建物 竪穴部C・Dライン
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 粘土粒・微土粒・炭化粒極少量混入、遺物含む、かたたくしまる
 - 第2層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量混入
 - 第3層 7.5YR4/4 褐色土 焼土粒少量混入、弱く炭化する
 - 第4層 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量混入、弱く炭化する
 - 第5層 10YR2/3 黒褐色土 弱く炭化する
 - 第6層 10YR3/4 暗褐色土 焼土塊少量混入
 - 第7層 10YR4/4 褐色土 焼土塊少量混入
 - 第8層 10YR3/4 暗褐色土 焼土塊少量混入
 - 第9層 10YR2/1 黒褐色土 焼土粒極少量混入
 - 第10層 10YR2/2 黒褐色土 焼土・炭化物・ローム粒少量混入
 - 第11層 10YR3/3 暗褐色土 焼土・ローム粒少量混入、かたたくしまる
 - 第12層 5YR4/8 赤褐色土 焼土の層、かたたくしまる
 - 第13層 7.5YR4/4 褐色土 焼土の層、黒褐色土少量混入
 - 第14層 7.5YR2/3 極暗褐色土 焼土の層、やしまりない



- 第510号建物 竪穴部ピットEライン
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒・V層ローム塊中量混入
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒少量混入
 - 第3層 10YR2/1 黒褐色土 粘土少量混入
 - 第4層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒極少量混入

- 第510号建物 竪穴部ピットFライン
- 第1層 10YR3/1 黒褐色土 V層ローム粒極少量混入
 - 第2層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒少量混入
 - 第3層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒少量混入
 - 第4層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム塊中量混入
 - 第5層 10YR7/6 明黄褐色土 VI層ロームに黒色土少量混入
 - 第6層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層ローム粒少量混入
 - 第7層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒・粘土少量混入、かたたくしまる
 - 第8層 10YR7/6 明黄褐色土 VI層ロームに黒色土少量混入、かたたくしまる
 - 第9層 10YR7/4 じいり褐色土 VI層ロームに黒色土少量混入、かたたくしまる

- 第510号建物 竪穴部ピットGライン
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒・V層ローム塊少量、焼土極少量混入
 - 第2層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒・焼土粒少量混入

- 第510号建物 掘立部ピット16Mライン
- 第1層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒・赤褐色の焼土極少量混入
 - 第2層 10YR6/8 明黄褐色土 黒色土塊少量混入

- 第510号建物 掘立部ピット17Mライン
- 第1層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒極少量混入
 - 第2層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒少量混入

- 第510号建物 掘立部ピット18Mライン
- 第1層 10YR2/1 黒褐色土
 - 第2層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム下に層状に混入
 - 第3層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム中に層状に混入

- 第510号建物 掘立部ピット19Nライン
- 第1層 10YR2/1 黒褐色土
 - 第2層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム少量混入
 - 第3層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒少量混入

- 第510号建物 掘立部ピット20Nライン
- 第1層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒少量混入

- 第506号土坑 Q・Pライン
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 火山灰・焼土粒極少量混入
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 火山灰多量、炭化粒極少量混入
 - 第3層 10YR2/1 黒褐色土 焼土塊少量混入
 - 第4層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒・火山灰・焼土粒極少量混入
 - 第5層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層ローム粒少量混入
 - 第6層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層ローム塊少量混入

- 第505号土坑 Q・Rライン
- 第1層 10YR2/3 黒褐色土 V層ローム粒・焼土粒・炭化物極少量混入
 - 第2層 10YR2/3 黒褐色土 焼土多量、炭化物極少量混入
 - 第3層 7.5YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒極少量混入
 - 第4層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒・焼土粒・炭化物極少量混入
 - 第5層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒・焼土粒・炭化物極少量混入
 - 第6層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム塊少量混入
 - 第7層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム粒・焼土粒少量混入
 - 第8層 10YR2/1 黒褐色土 V層ローム塊中量混入

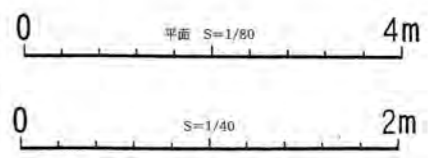


図34 第510号建物跡①

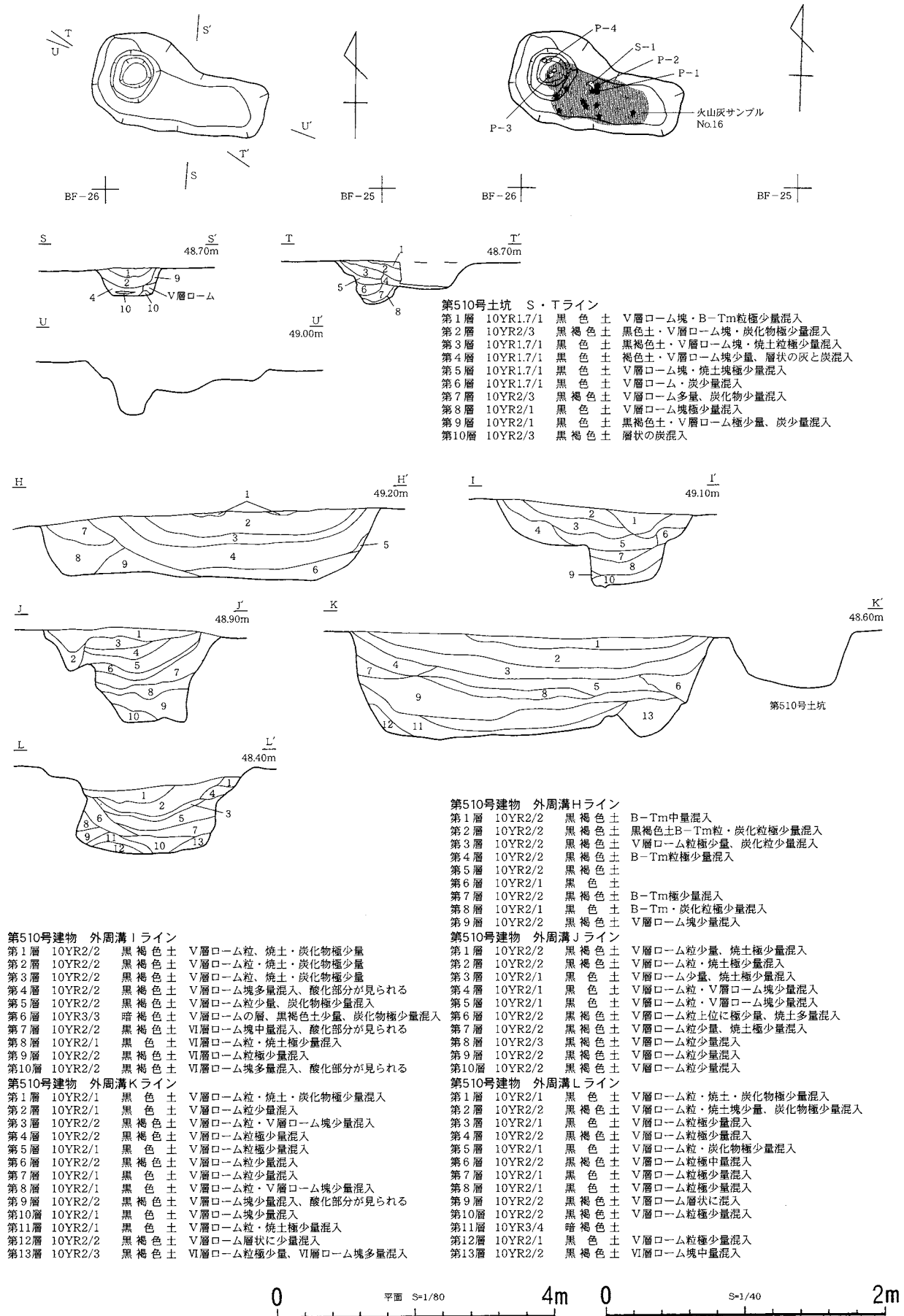


図35 第510号建物跡②

Ⅲ～Ⅴ層を壁、Ⅴ層を底面とする。

【堆積土】Ⅲ層起源の黒色土を主体とする。堆積状況は不明である。

【付属施設】第505・506号土坑が伴うと思われる。

第505号土坑

【形態・規模】一部風倒木痕により壊されているが、影響のない部分において長軸1.16m×短軸0.94mであり、当初は楕円形であったと考えられる。確認面からの深さは54cmである。

【壁・底面】中央に底面からの深さが約16cm円形の落ち込みがあり、起伏のある底面となっている。壁は底面から緩やかに立ち上がる。Ⅲ～Ⅴ層を壁、Ⅴ層を底面としている。

【堆積土】Ⅲ層起源の黒色土を主体とし、8層に分層した。堆積土中には焼土塊等が混入しており、人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】土師器片が出土したが、図示できるものではない。

第506号土坑

【形態・規模】平面形は長軸約1.35m×短軸約0.76mの楕円形である。確認面からの深さは28cmである。

【壁・底面】Ⅲ～Ⅴ層を掘り込んでいる。概ね平坦な底面を持ち、壁は緩やかに外傾し立ち上がる。

【堆積土】Ⅱ～Ⅲ層起源の黒色土を主体とし、6層に分層した。2層には白頭山ー苫小牧火山灰が塊状ではあるが多量に堆積している。概ね自然堆積と捉えられる。

【出土遺物】なし。

外周溝

【形態・規模】北側部分が調査区域外に延びているため全体形状は不明であるが、竪穴部・掘立部を取り囲み、南東方向に開口する「コ」の字形の平面形だと考えられる。外周溝の先端部は掘立部分のさらに先まで延伸している。第510A号建物跡の外周溝を拡張・掘り返しで引き続き利用したものと思われる。土坑が掘りこまれたHラインや幅の広がるKラインなどでは、底面から緩く外傾する皿状の断面形だが、幅の狭いI・Jラインなどでは垂直気味に立ち上がった後、中～上位にかけて外傾する。この部分では底面に鋤痕が見られる。Ⅲ～Ⅴ層を壁とし、Ⅵ層を底面とするが、掘り返し・拡張らしい箇所があることから、部分的に一度堆積した土を底面とすることもあったかと思われる。図36には土層断面図からこの掘り返し・拡張した結果の外周溝の形を示した。破線になっているのは下場の推定ラインである。

【堆積土】Ⅲ～Ⅴ層等が混合した人為堆積と判断される黒褐色土を下位に、上層には一部火山灰等も含む自然堆積と考えられる層がそれぞれ見られる。Hライン付近では外周溝が埋まりかけた時点で土坑状に掘り返しをしており、その部分では白頭山ー苫小牧火山灰が堆積土上位に層状に堆積している。

【付属施設】第510号土坑が伴うと見られる。

第510号土坑

【形態・規模】平面形は長軸1.52m×短軸1.33mの楕円形である。確認面からの深さは最深で64cm。

【底面】西側に底面からの深さが約16cmの円形の落ち込みが見られるが、それ以外の部分は平坦である。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。Ⅲ～Ⅴ層を壁、Ⅴ層を底面とする。

【堆積土】Ⅱ～Ⅲ層起源の黒色土を主体とし、10層に分層した。I層に白頭山ー苫小牧火山灰粒を極少量含む。堆積土上位層は黒色土主体であり概ね自然堆積の様相を呈する。4層より下位は人為堆

積の様相を呈する。4層は炭と灰を含む層である。底面東側から西側の落ち込み上部にかけて約3cm程度の厚さで堆積している。廃棄されたというよりは、土坑内で何かを燃やした結果残ったものである可能性が高い。5～8層はV層塊をやや多く含む層が主体となる。4層の分布からすると使用時には既に埋められていたと考えられるため、性格等は不明である。

【出土遺物】なし。

【出土遺物】外周溝出土の遺物に関しては第510A号建物跡外周溝に伴う遺物とは区別が付けがたく、ここで一括して報告することにした。覆土中から土師器、須恵器、土鈴、用途不明の土製品等が出土した。図39-20は土師器、24は須恵器の坏であるが、両者とも底部に刻書を有している。20は2本の線を交差させたもの、24は交差する斜位の線の中心に縦位の線を1本通し、さらに上下に横位の線を加える。図40-42は底部付近に細かいケズリを施す。図41-46・48は墨書のある土師器片である。いずれも文字の一部のようである。図41-47・49は土鈴の破片で、特に49には鈴口と見られる円形及びケズリの痕の残る直線的な切れ込みが見られる。図41-50は両端が丸い俵状の粘土の中間部分を指でくびれさせ、鉄アレイ状に仕上げたものである。両端部もある程度丸く整えられている。赤褐色の色素が付着しており、かつては全面に彩色されていた可能性もある。

【小結】堆積土に白頭山-苦小牧火山灰を含むことから外周溝と第506号土坑は近い時期にあるといえる。外周溝を伴う竪穴部ともまた時期は近いと思われる。また、竪穴部においては第510A号建物跡の柱穴・内周溝の配置をほぼ正確に踏襲する一方、掘立部においては個々の柱穴を大きくし、数を減じて形態と規模を変えている。

第510A号建物跡（図36～38）

【概要】竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。第510号建物跡の直下で検出された。竪穴部では床面と柱穴、竈由来のものと思われる焼土が残存する。

【位置・確認】BB～BE-23～28グリッドに位置する。第510号建物跡竪穴部調査中に床面直下で竪穴部を確認した。外周溝と掘立部に関しても同様に510号を調査中にそれぞれ確認した。

【重複】第510号建物跡と重複し、本遺構の方が古い。おそらく第510号建物跡の拡張前の姿である。

竪穴部

【形態・規模】平面形は東西壁約5.2m×南北壁約5.0mのほぼ正方形である。主軸方位はN-114°-Eである。

【壁・床面】IV～V層を壁、V層を掘形の底面とする。壁の大部分は、第510号住居構築の際に失われている。床面は掘形に充填した土を固めて構築されている。貼り床や明瞭な硬化面は確認されなかった。1・4層上面が床面である。

【堆積土】床面より上位の堆積土は第510号建物跡竪穴部構築の際失われている。掘形覆土は4層に分層された。全体にV層粒を含む。

【柱穴・土坑】床面には主柱穴・壁柱穴・内周溝の他に3基のピットが確認された。ピット1～4が主柱穴になると思われる。主柱穴の配置は第510号建物跡とほぼ同じだが、竈側の主柱穴2本は510号のものよりやや内側に入っている。住居の隅（北東隅には確認されず）とそのほぼ中間には壁柱穴が位置する。竈側を除く各壁柱穴の間には内周溝が巡っている。床面ほぼ中央部、ピット1・2間付近にも小穴が見られる。すべてIV～V層を壁、V層を底面としている。

【竈】竈起源と思われる焼土が竪穴部南東隅に分布していたが、袖・火床面等は確認できなかった。

【出土遺物】なし。

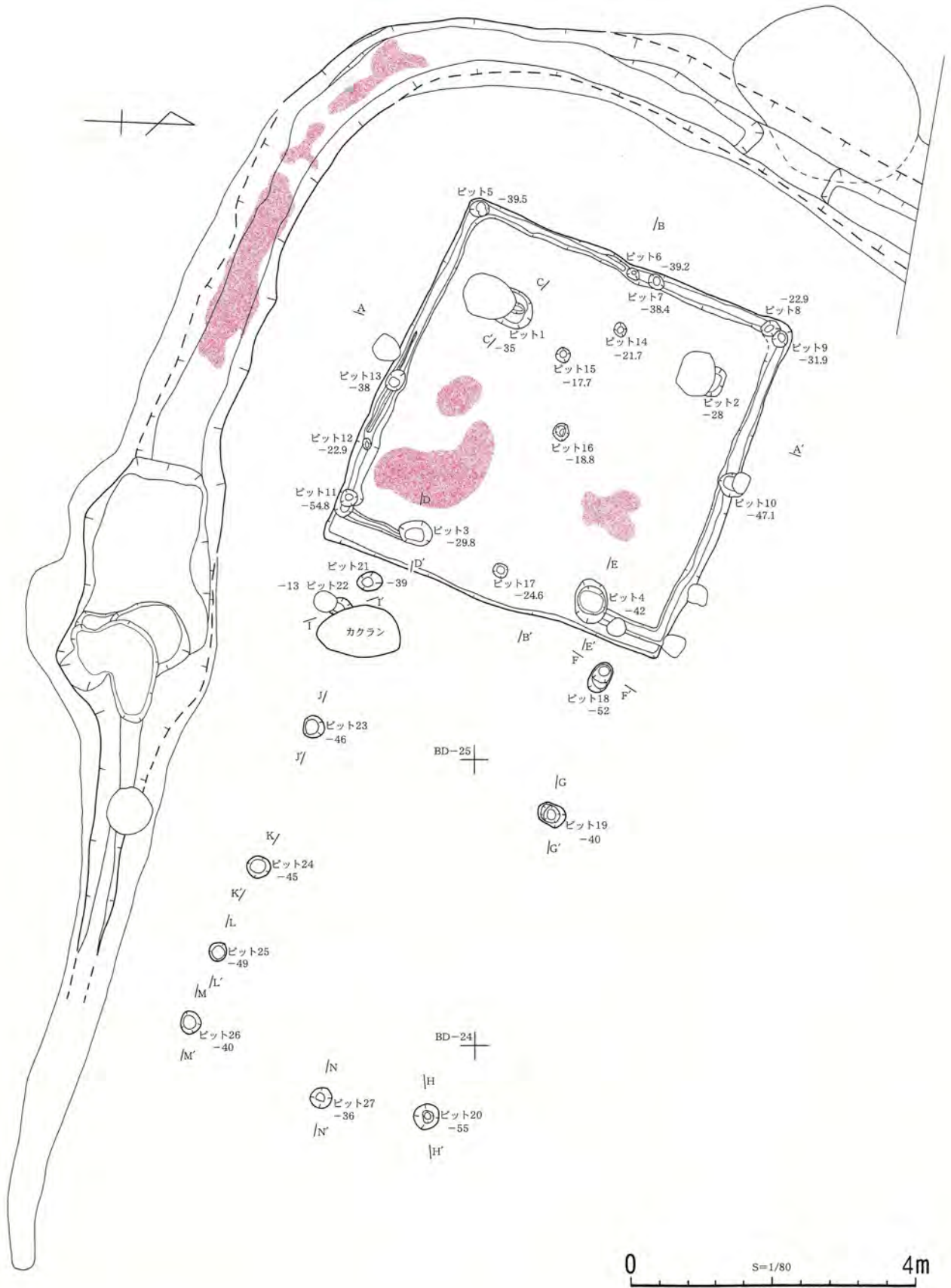


図36 第510A号建物跡①

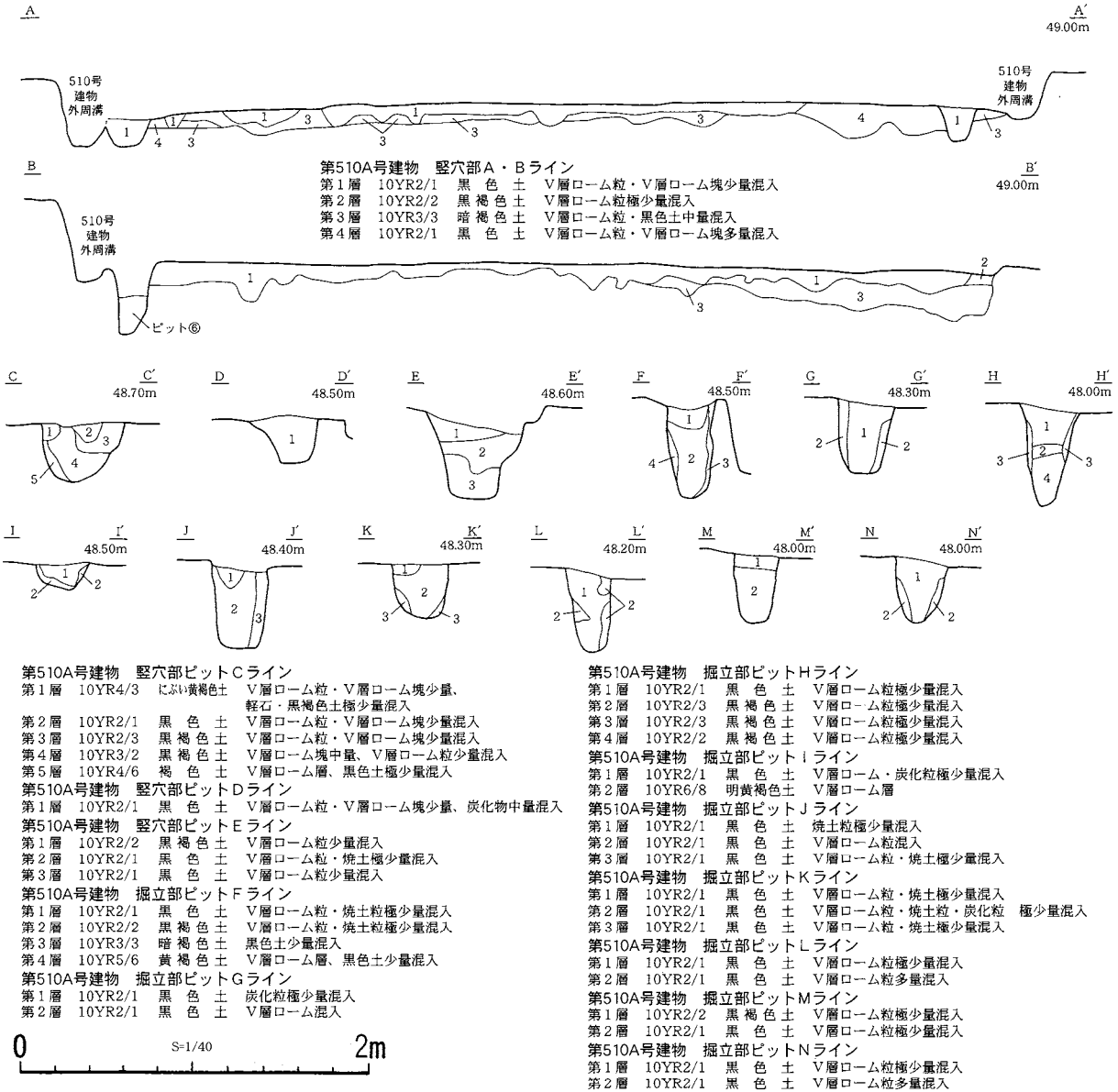


図37 第510A号建物跡②

掘立部

[形態・規模] 桁行3間×梁間2間となる。第506号土坑により柱穴が1基消滅していると思われる。また、ピット25に対応する柱穴も確認されなかった。南北軸は約3.6mで一定、東西軸も6.6mと6.9mとほぼ同じである。Ⅲ～V層を壁とし、V層を底面とする。

[堆積土] 全体にローム粒を含む。人為堆積土と考えられる。

[付属施設] なし。

[出土遺物] なし。

外周溝

[形態・規模] 平面形は竪穴部と掘立部を囲み南東方向に開口する、「コ」の字形である。南側が一

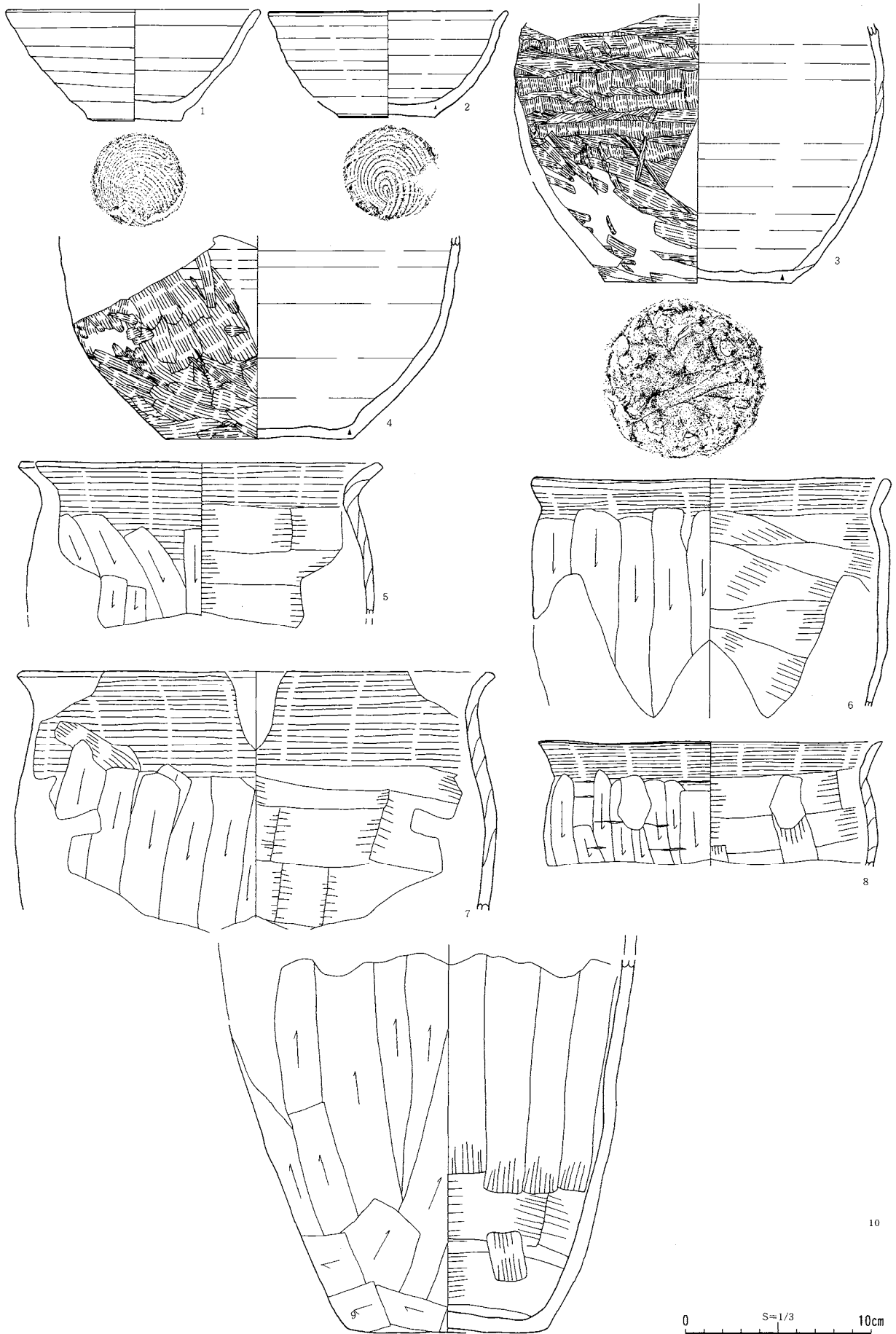


图38 第510号建物跡出土遺物 (竪穴部分①)

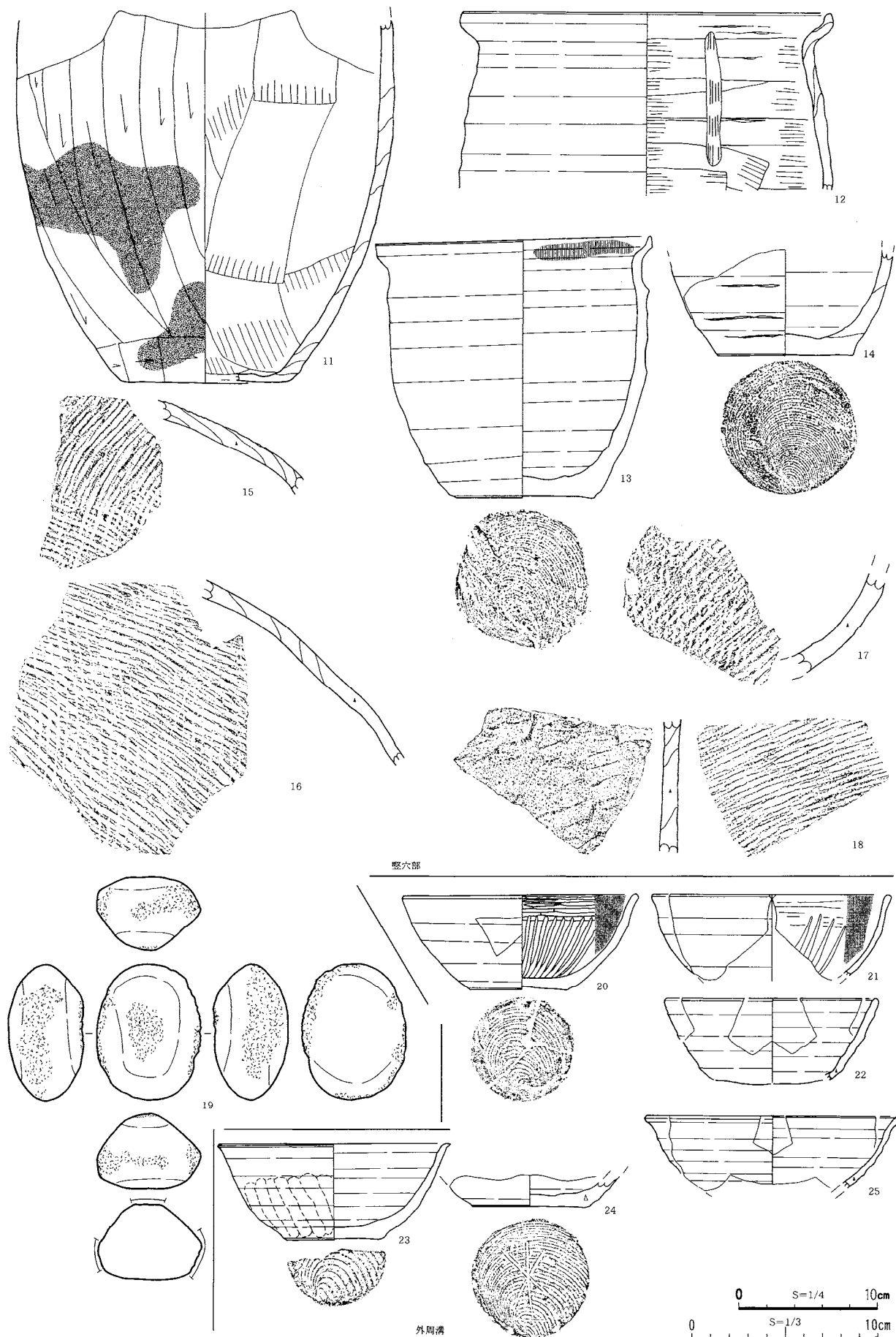


図39 第510号建物跡出土遺物（竪穴部分②・外周溝部分①）

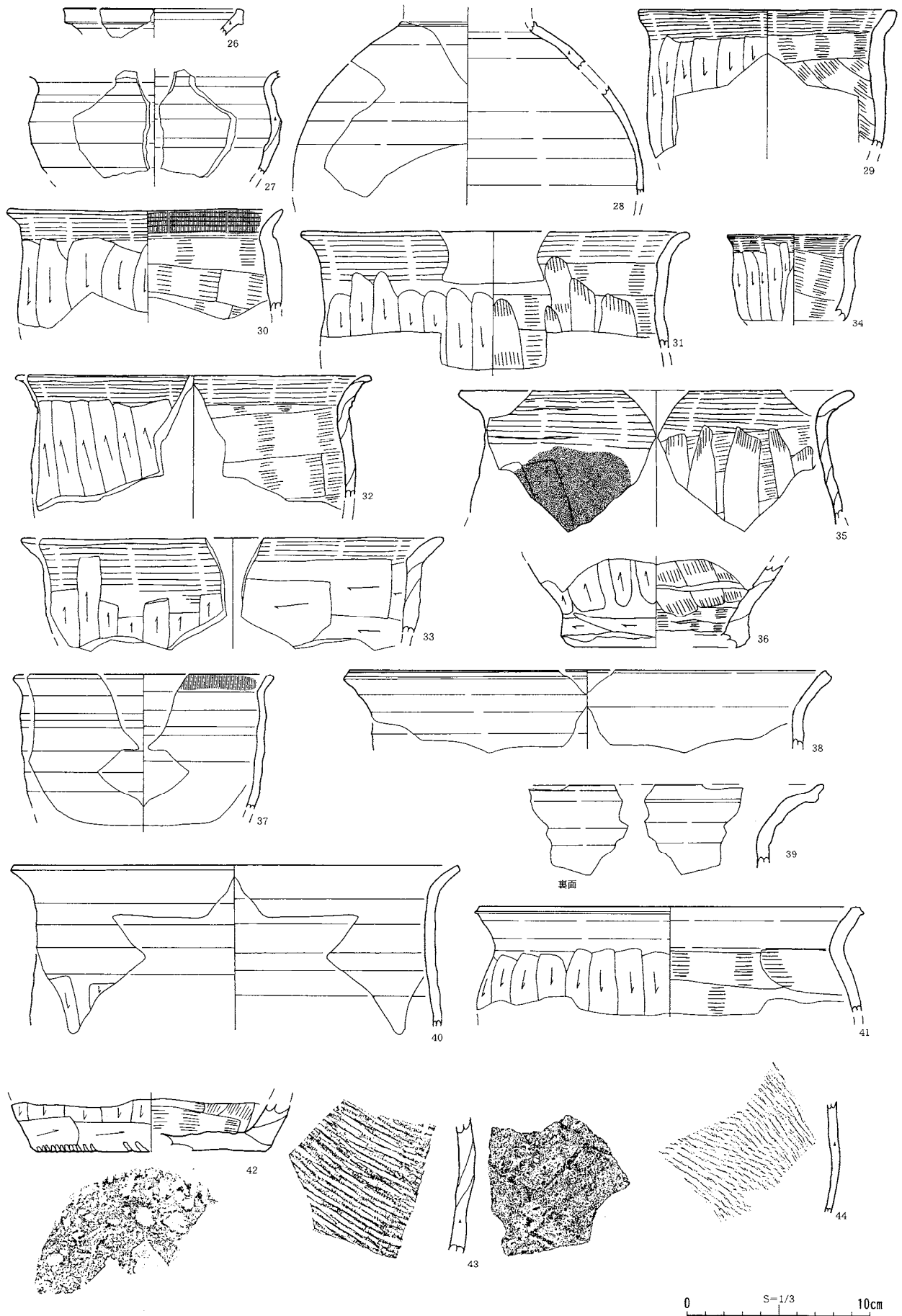


图40 第510号建物跡出土遺物(外周溝②)

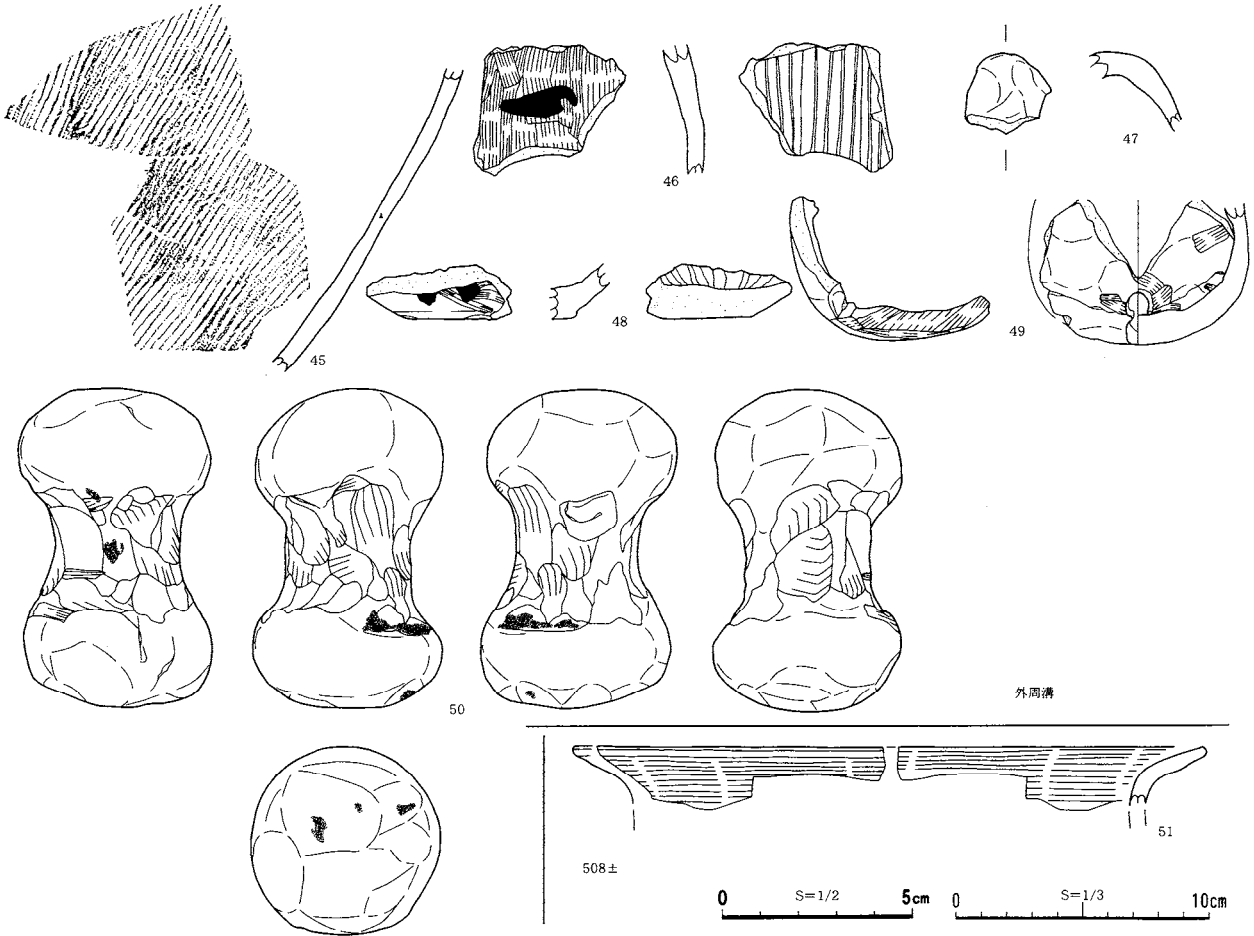


図41 第510号建物跡出土遺物（外周溝③・508号土坑）

部ふくらんでいる。第510号建物跡時の外周溝の影響のないと思われる部分を実線で示した。破線は壊された上場を推定したものである。確認面からの深さが最も深い部分は南側の幅が広がる所で底面の標高が48.52m、最も浅い部分は調査区際で底面の標高48.45mである。斜面の下側に当たる南側に行くに従い深くなっていくが、最深部に達した後は浅く幅も狭くなる。概ねⅢ～Ⅴ層を壁とし、Ⅵ層を底面とする。

【堆積土】 第510号建物跡外周溝により堆積土の一部を掘り返されている。影響の及ばない部分の土層では、J・Kライン付近で堆積土中位に焼土、粘土の廃棄層がみられる。Iラインでは堆積土中位以下に酸化鉄の沈着が見られる。K・Lラインでは、外周溝が土坑状になり規模を増している。下位層には水の影響による粒子の細かい砂質土の層状堆積やⅤ層塊・焼土等の混入した人為堆積土が見られる。

【付属施設】 なし。

【出土遺物】 第510号建物跡外周溝の項を参照。

第511号建物跡（図42～45）

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。調査区際で検出され、外周溝と竪穴部が一部区域

外に延びている。

【位置・確認】 B区東側、BB～BD-13～17グリッドに位置する。竪穴部・外周溝はⅡb層上面で、掘立部はⅢ層上面で確認した。

【重複】 第515号建物跡外周溝・第533～542号ピットと重複する。いずれよりも本遺構が新しい。

竪穴部

【形態・規模】 平面形は東壁約5.9m×南壁約5.5mの、東西にやや長い長方形になると推定される。主軸位向はN-123° - Eである。

【壁・床面】 東西壁はやや垂直に、南側の壁は外傾して立ち上がる。床面は掘形覆土の上面であり、概ね平坦である。主にⅡb層を壁とし、Ⅲ層および第515号建物跡の外周溝の覆土を掘形の底面とする。

【堆積土】 Ⅱ・Ⅲ層起源の暗褐色土を主体とし掘形まで含めると3層に分層される。1層に白頭山-苦小牧火山灰をブロック状に少量含む。Bラインの北側では2層に砂を多く含んでいた。

【柱穴・土坑】 床面には主柱穴・壁柱穴・内周溝が確認された。ピット5・6は主柱穴である。竈付近でピット5に対応するはずの柱穴は確認されなかった。竈側の柱穴（ピット5）は壁から少し離れた位置に存在する。竈対辺北側のピットは区域外に存在すると推定される。壁柱穴は床面の隅2確認された。内周溝は西壁直下と南壁の直下に部分的に確認されたのみであった。

【竈】 東壁の南寄りの位置に焼けた粘土の広がりを確認した。精査を進めると袖の一部・火床面・煙道の一部が残存していることがわかった。袖は粘土を主な構築材としている。火床面は長軸約66cm×短軸約46cmの範囲が、最深約8cmまで皿状に被熱している。火床面壁よりでは土師器坏が逆さになった状態で出土した。おそらく支脚として使われたと思われる。煙道は半地下式で、竪穴外部に向かって緩やかに昇っている。

【出土遺物】 土師器、須恵器、砥石、基石と見られる石が出土している。図44-6は須恵器長頸壺で底面にケズリによる調整痕を残す。図44-7a・bも同じく須恵器長頸壺で竪穴部南西隅の床面直上及び、外周溝北側先端部から見つかった破片が接合したもので、2箇所に分けて廃棄している点が注目される。底面に菊花状のナデ、内面の胴部中～下位に輪積み痕を残す。2点ともロクロの後に胴部中位を横位の、底部付近を斜位のヘラナデ、ヘラケズリで調整する。図44-12～16は基石と思われる石で、4個の内、黒が3個、白が1個である。形はやや平らな楕円形か隅丸の三角形である。重さは3.2～5.6gでばらつきがある。黒い石は全て頁岩、白い石は玉髓であった。図45-18は砥石で、全面にわたって使用痕が見られ、2側面が平坦になっている。

掘立部

【形態・規模】 確認された5基の柱穴から2間×1間の建物跡と推測される。

【堆積土】 黒褐色土を主体とする。ピット8の1層は焼土を含む粘土の層である。

【付属施設】 粘土を伴う焼土範囲を竪穴部の東側に確認した。第511号建物跡に壊される第515号建物跡の外周溝堆積土が被熱している。平面形は長軸約68cm×短軸約50cm不整形で最深約12cmまで皿状に被熱していた。廃棄された焼土ではないが、袖などを構築しているような状況は見られなかった。

【出土遺物】 柱穴からの出土はない。上記の焼土範囲の周囲では遺物が出土し、竪穴部出土の遺物と接合したものもあるが、その多くは第515号建物跡の外周溝に伴う遺物の可能性が高い。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部を南側で約半分取り囲み、南東方向に開口する「コ」の字形の平面形を呈する。

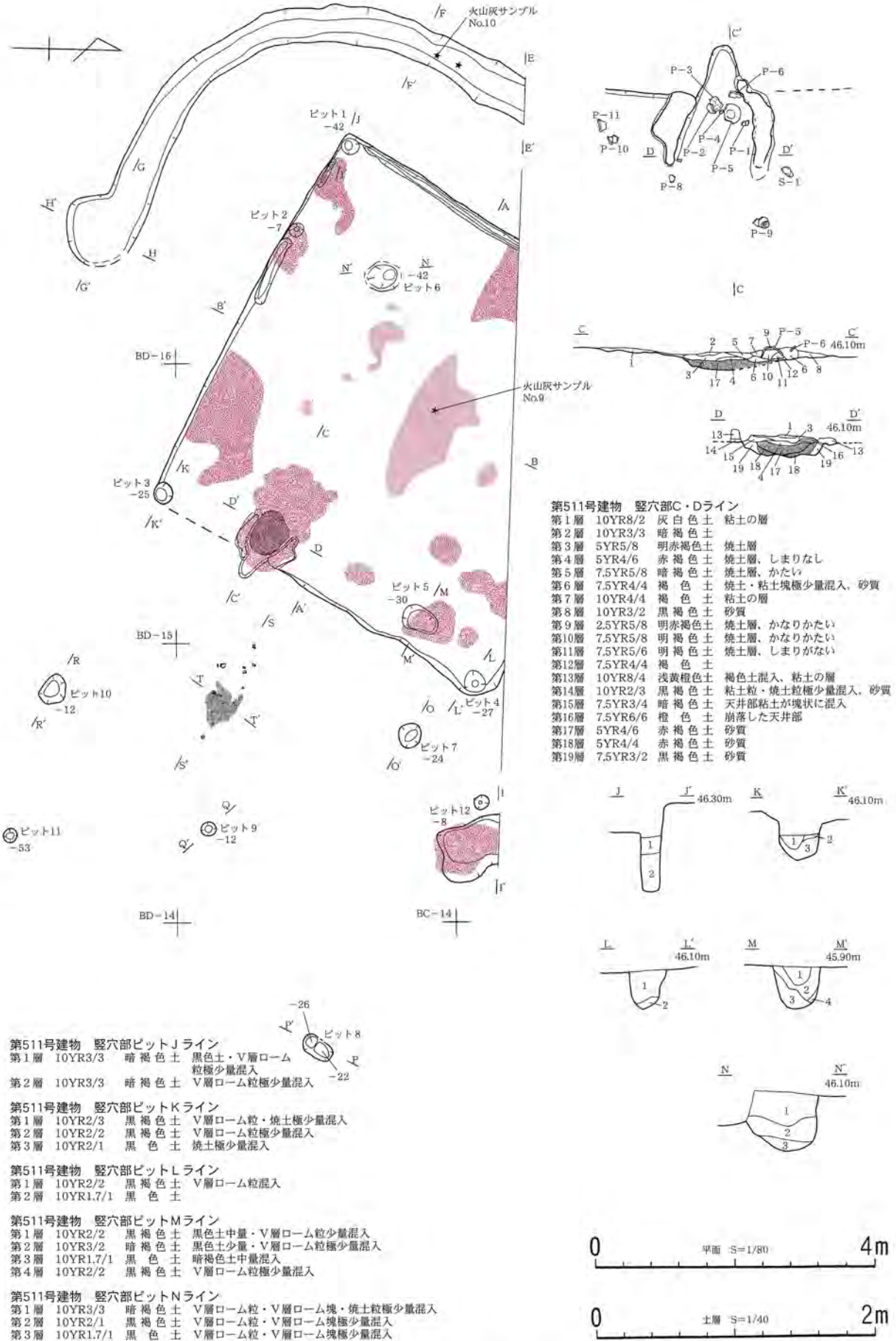


図42 第511号建物跡①

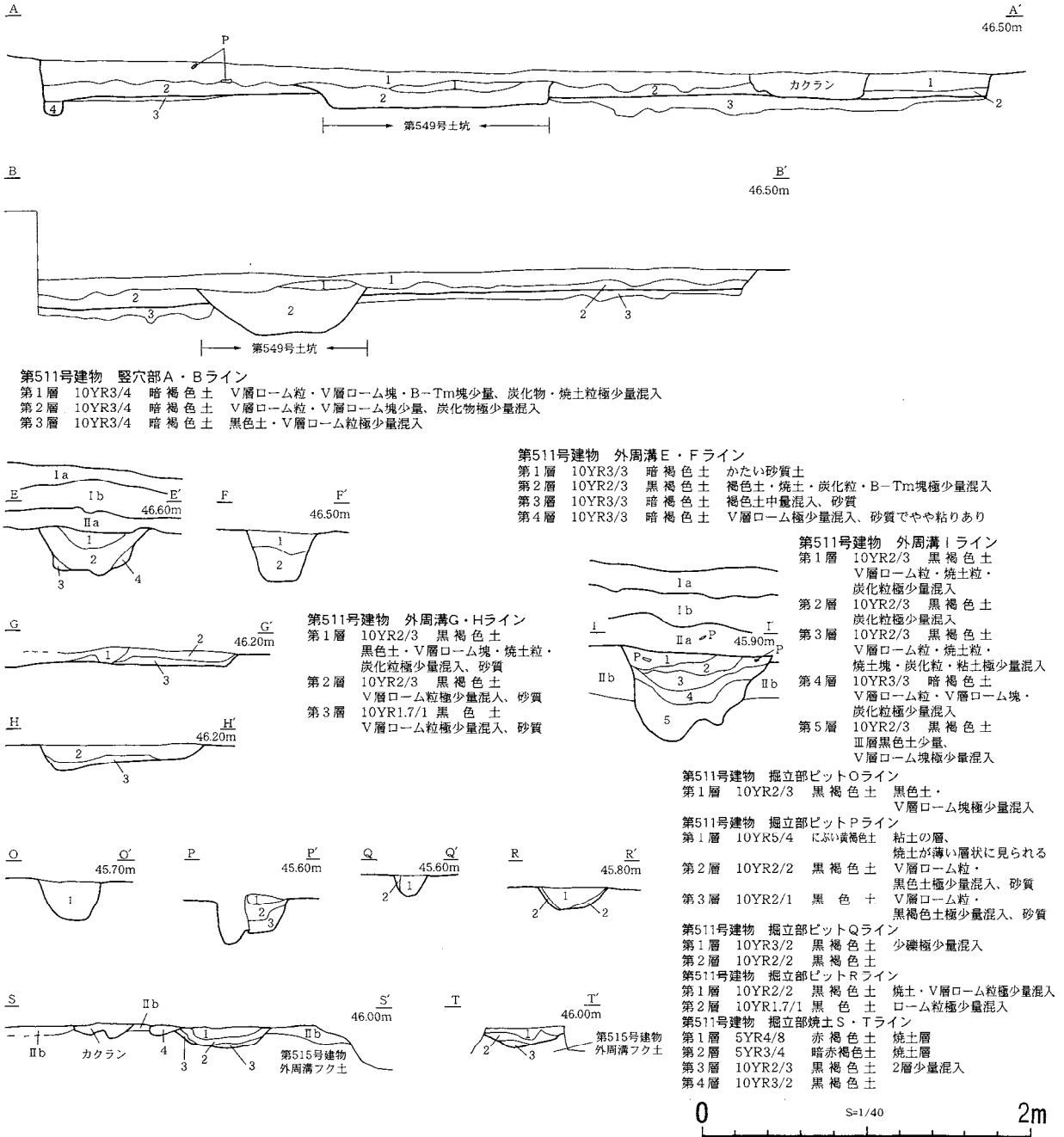


図43 第511号建物跡②

西端は丸くふくらんだ後もなお伸びていくことが想像されるが、確認できなかった。確認面からの深さが最も深い部分は東側先端部で底面の標高が45.41m、最も浅い部分は外周溝の南西部から南側先端にかけての部分で底面の標高は46.00mである。斜面の下側に当たる東側先端部が最も低くなる。壁は検出された限りにおいては底面からゆるやかに外傾しながら立ち上がっていく。底面は平坦である。

【堆積土】Ⅱ・Ⅲ層起源のやや砂質な黒褐色土を主体とする。Eラインの2層、Fライン1層には白頭山-苫小牧火山灰がブロック状に少量含まれる。東端のJラインは5層に分けられ、1~4層から竈起源の廃棄された焼土・粘土・遺物が出土する。

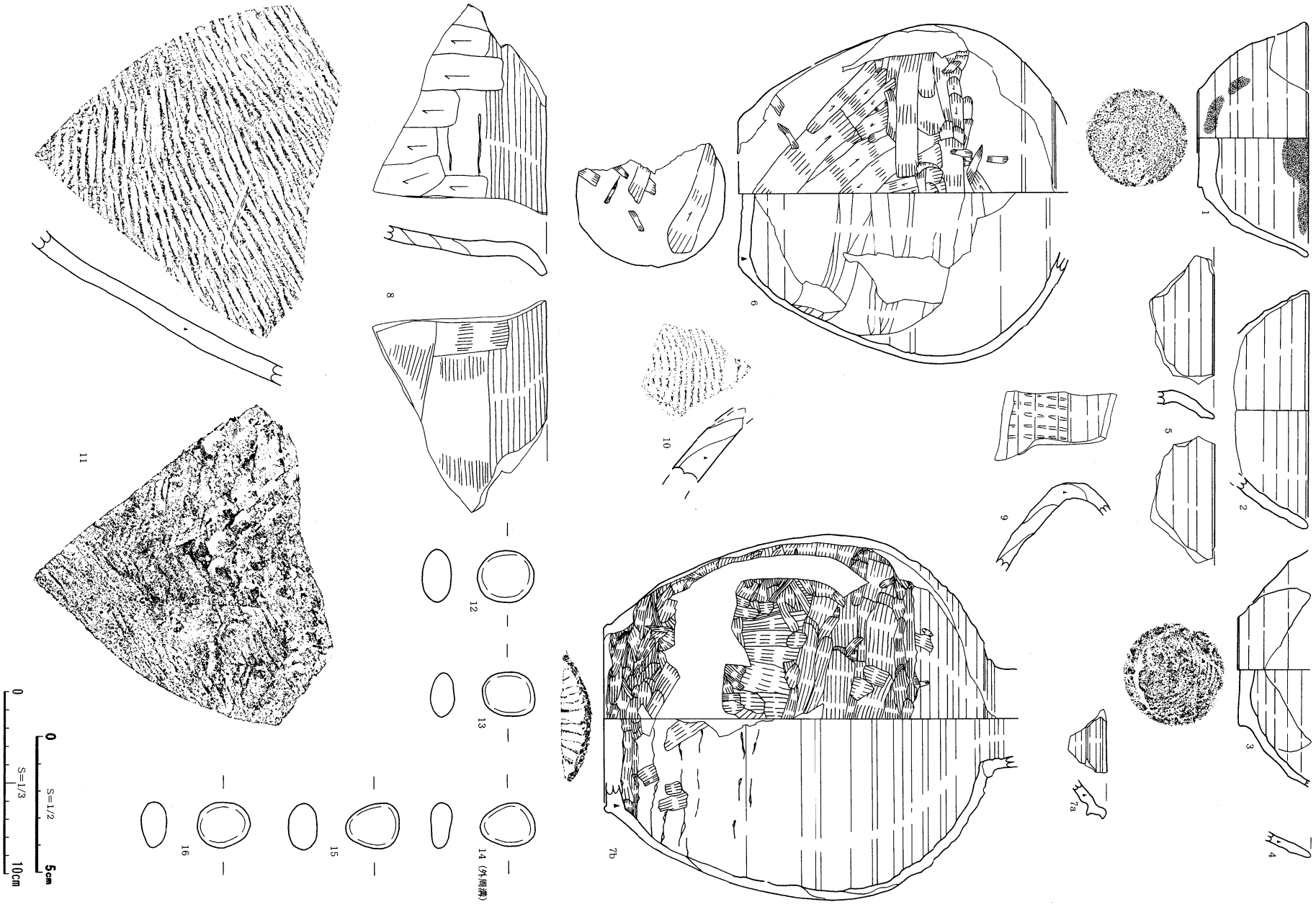


図44 第511号建物跡出土遺物 (竪穴部分①)

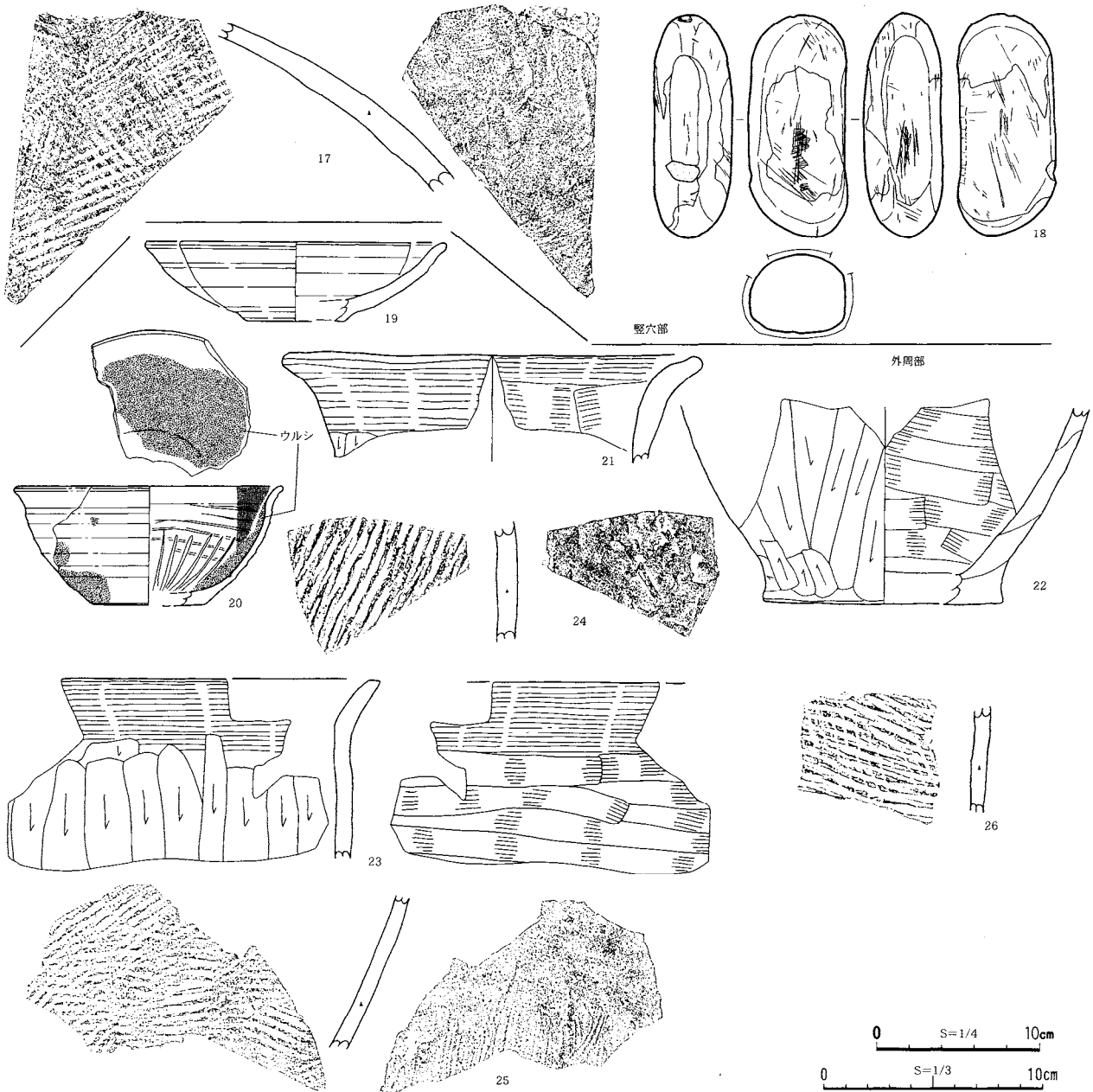


図45 第511号建物跡出土遺物（竪穴部分②・外周溝部分）

〔付属施設〕なし。

〔出土遺物〕覆土中及び東端先端部の焼土中などから土師器、須恵器、基石と見られる石が見つっている。図45-20は土師器坏の破片である。外周溝の西側で粘土塊や礫とともに出土した。全体の約1/4ほどが残存しており、内面には黒化処理が施されている。内側には厚さ0.5~1cmの厚さで黄褐色の物質が溜まっていたため、分析に出したところ漆液と判明した（第VI章参照）。漆液は坏内面がみがかれているためか、調査当初から既に坏から分離していた。残存状況はかなり良い。漆液は体部外面にも一部付着している。このように、容器内から漆液が出土した例は、青森市朝日山(2)遺跡（県埋分報350集）にも見られる。

第512号建物跡 (図46・47)

【概要】 竪穴部と掘立部で構成される。

【位置・確認】 A区中央部北端、BA～BC-47～49グリッドに位置し、IV層で確認した。

【重複】 第504号建物跡外周溝・第515号溝跡と重複関係にあり、第504号建物跡より古く、第515号溝跡より新しい。

竪穴部

【形態・規模】 平面形は軸方向3.12m、横軸方向3.2mのほぼ正方形を呈するが、竈側の辺がその対辺より若干長いため南東コーナーが第505号建物跡竪穴部のようにやや張り出す形となっている。主軸方位はN-101.5° - Eである。

【壁・床面】 壁はIV～V層で、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はV層を掘り込んだ掘形に詰めた土を固めて構築している。貼り床は確認されなかったが、床面中央部から竈付近にかけて硬化面を確認した。

【堆積土】 8層に分層された。7層上面が床面であり、7・8層は掘形覆土である。1～6層は竪穴部堆積土であるが、Ⅲ～IV層起源の黒色土とV層細粒の混土を主体とし、人為堆積と判断される。

【柱穴・土坑】 壁際に壁周溝が巡る他には確認されなかった。壁周溝は床面構築後に掘り込まれているようである。

【竈】 東壁北寄りに構築されている。今回調査の中では比較的残りが良いが、確認段階において竈周辺には粘土が散乱していたことから、建物跡廃絶時に竈を破壊していると考えられる。袖は全て粘土で構築されており、高さ約10cm程度が残存している。袖の内壁は被熱により赤変・硬化していた。火床面は壁から約40cm内側で確認された。直径約40cmの範囲で厚さ約4cmが皿状に赤変していた。竈調査終了後、下部から壁周溝が検出された。土層Cラインの6層は壁周溝の上位に竈煙道構築のために盛られた土層である。したがって、煙道は住居外にやや昇りながら続いていたと考えられる。

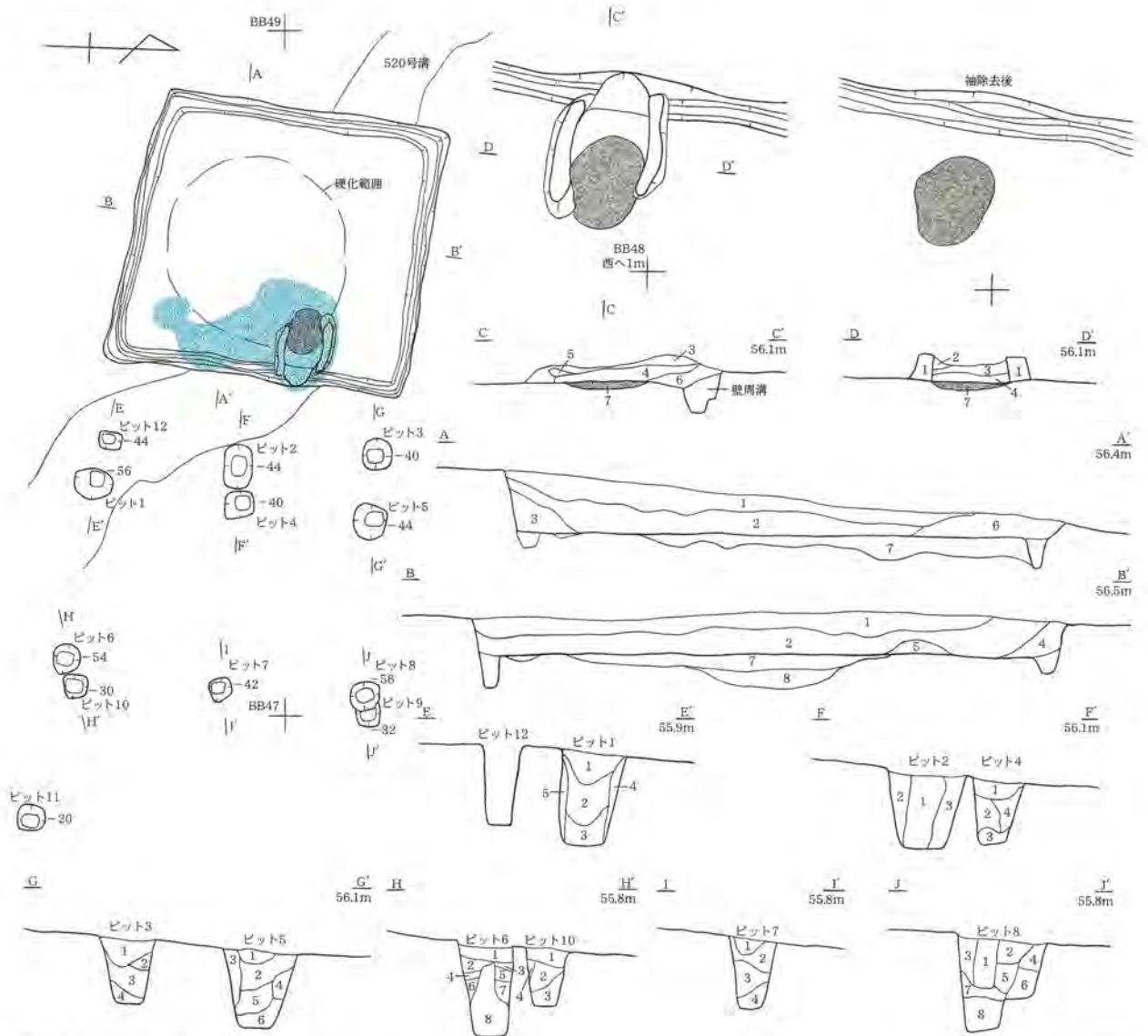
【出土遺物】 竈付近から土師器長胴甕が出土している。

掘立部

【形態・規模】 竪穴部東側に、12本の柱穴を確認した。ピット8で重複関係が見られることから、2棟の掘立柱跡が重複している。古段階はピット12・4・3・10・7・9により構成されるややいびつな1間×2間の掘立柱建物跡である。南北方向は約3.2mと、竪穴部と同様の規模である。東西方向は3.04mである。ピットの規模が新段階より小さく、断面に明確な柱痕が見られないため、建て替え時に埋め戻されたと考えられる。新段階はピット1・2・5・6・8・11により構成される1間×2間にピット11が飛び出した形態の掘立柱建物跡である。南北方向は古段階と同じ規模であり、東西方向はピット11を入れると4.0m、除くと2.0mである。各柱穴共に柱痕が明瞭であり、裏込め土も確認された。

【付属施設】 無し。

【出土遺物】 無し。



- 第512号建物跡 竪穴部A・Bライン**
- 第1層 10YR2/1 黒色土 V層粒・塊少量、炭化物極少量混入
 - 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒少量、V層塊・炭化物極少量混入
 - 第3層 10YR2/1 黒色土 V層粒・塊少量、(崩落土)
 - 第4層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒極少量混入
 - 第5層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊
 - 第6層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒少量、炭化物・焼土粒極少量混入
 - 第7層 10YR2/3 黒褐色土 V層塊の混入、かたい(掘形覆土)
 - 第8層 10YR2/1 黒色土 V層塊多量混入、かたい(掘形覆土)

- 第512号建物 竪穴部カマドC・Dライン**
- 第1層 10YR4/3 に近い黄褐色土 白色粘土主体V層粒・炭化物極少量、焼土塊中量混入(軸)
 - 第2層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒・炭化物・焼土塊極少量混入
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 V層・炭化物・焼土塊極少量混入
 - 第4層 7.5YR3/4 暗褐色土 粘土主体、V層粒・炭化物極少量、焼土塊少量混入(天井崩落土)
 - 第5層 10YR4/4 褐色土 V層粒・焼土塊極少量混入
 - 第6層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒・焼土塊極少量混入
 - 第7層 7.5YR4/6 褐色土 火床面

- 第512号建物 掘立部Eライン**
- 第1層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒少量、V層塊・炭化物極少量混入(1~3層柱底)
 - 第2層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・塊少量混入
 - 第3層 10YR2/1 黒色土 V層粒・塊極少量混入
 - 第4層 10YR5/6 黄褐色土 V層主体、裏込め土
 - 第5層 10YR5/6 黄褐色土 V層主体、裏込め土

- 第512号建物 掘立部Fラインビット2**
- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒・塊少量、炭化物極少量混入(柱底)
 - 第2層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・塊中量、炭化物極少量混入(裏込め土)
 - 第3層 10YR2/1 黒色土 V層粒・塊中量、炭化物極少量混入(裏込め土)

- 第512号建物 掘立部Fラインビット4**
- 第1層 10YR3/3 暗褐色土 V層粒・塊少量、炭化物極少量混入
 - 第2層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒極少量混入
 - 第3層 10YR2/2 暗褐色土 V層粒・塊中量混入(3・4層裏込め土)
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊中量混入

- 第512号建物 掘立部Gラインビット3**
- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒・塊極少量混入
 - 第2層 10YR2/1 黒色土 V層粒極少量混入
 - 第3層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・塊少量混入
 - 第4層 10YR3/3 黒褐色土 V層多量混入

- 第512号建物 掘立部Gラインビット5**
- 第1層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒極少量混入
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒・塊少量、炭化物極少量混入
 - 第3層 10YR3/4 暗褐色土 V層粒・塊少量混入
 - 第4層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒少量混入
 - 第5層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・塊少量、炭化物極少量混入混入
 - 第6層 10YR2/1 黒色土 V層粒少量、炭化物極少量混入

- 第512号建物 掘立部Hライン**
- 第1層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・塊少量混入
 - 第2層 10YR4/3 に近い黄褐色土 V層粒中量混入(2~7層裏込め土)
 - 第3層 10YR4/4 褐色土 V層主体、かたい
 - 第4層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒・炭化物極少量混入
 - 第5層 10YR3/3 暗褐色土 V層粒少量混入
 - 第6層 10YR3/3 暗褐色土 V層粒中量混入
 - 第7層 10YR4/4 褐色土 V層粒極少量混入
 - 第8層 10YR2/1 黒色土 V層粒少量混入(柱底)

- 第512号建物 掘立部Iライン**
- 第1層 10YR2/1 黒色土 V層粒極少量混入
 - 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒・塊中量混入
 - 第3層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒・塊少量、炭化物極少量混入
 - 第4層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・塊少量混入

- 第512号建物 掘立部Jライン**
- 第1層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・塊・炭化物極少量混入(ビット8柱底)
 - 第2層 10YR2/1 黒色土 V層粒少量、炭化物極少量混入(2~4層ビット8裏込め土)
 - 第3層 10YR3/3 暗褐色土 V層粒少量、炭化物極少量混入
 - 第4層 10YR3/3 暗褐色土 V層粒・塊少量混入
 - 第5層 10YR4/6 褐色土 V層主体
 - 第6層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒少量、炭化物極少量混入
 - 第7層 10YR3/2 黒褐色土 V層粒少量混入(7・8層ビット9堆積土)
 - 第8層 10YR1.7/1 黒色土 V層粒極少量混入

図46 第512号建物跡

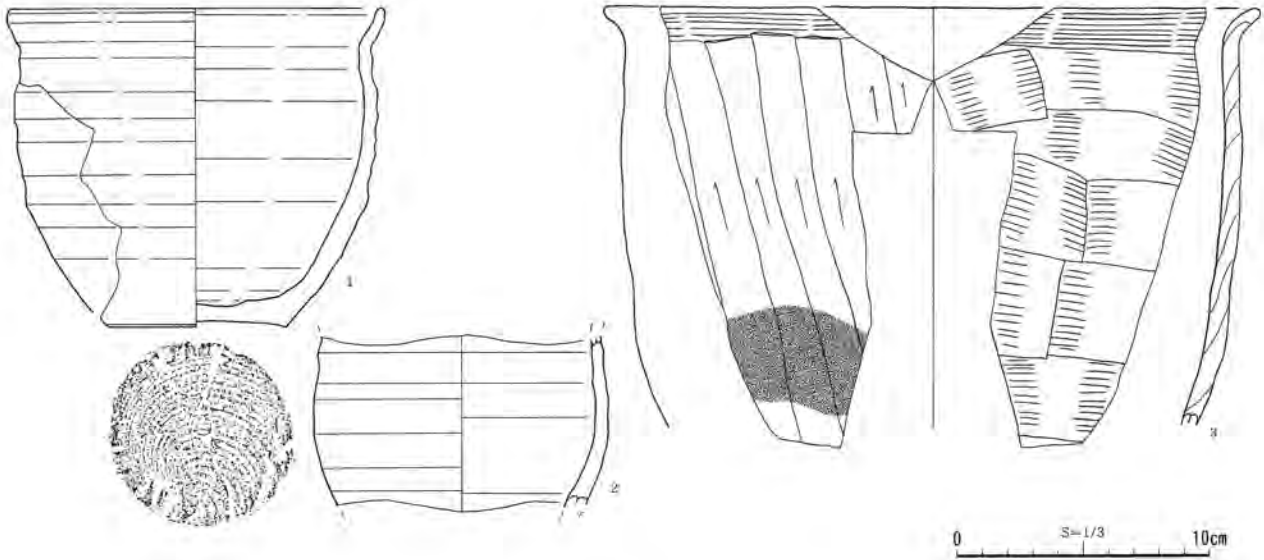


図47 第512号建物跡出土遺物

第513号建物跡 (図48～50)

【概要】 竪穴部に相当する掘立柱建物跡・掘立部・外周溝から構成される。

【位置・確認】 B区中央東側、BC～BF-17～21グリッドに位置する。外周溝はⅡb層上面で確認した。柱穴はⅢ層上面で確認している。外周溝には堆積土上位に白頭山-苦小牧火山灰が層状に堆積していたため、早い段階で確認することができたが、その他は砂を多量に含む土(Ⅱa～b層)のため、竪穴・掘立部の確認が困難であった。そこで中央付近に十字に土層観察用のベルトを設けてⅡ層を面的に掘り下げ、竪穴・掘立部の検出を試みた。図48のi・jライン図がこのときのものである。だが結局竪穴部の掘りこみや、竈の存在を示す粘土・焼土・火床面等は確認することができず、黒色土の上面(Ⅲ層上面)で多数のピットと土坑(513号土坑)・溝(527号溝跡)を確認した。

【重複】 第527号溝跡がピット2、15と重複するが、新旧は不明である。

竪穴部

【形態・規模】 竪穴部の立ち上がりは確認されなかったが、ピット1～13までを竪穴部の柱穴と捉えて記述する。柱穴の位置から、規模は東西軸で約4.5m×南北軸で約5.8mの2間×3軒の建物跡と推定される。主柱穴等は見られない。平面形は南北軸の長い長方形を呈する点で、他の竪穴とはやや異なる点が見られる。主軸方向はN-106°-Eである。

【壁・床面】 確認できなかった。

【堆積土】 確認できなかった。

【柱穴・土坑】 柱穴は前述のように主柱穴が見られず、壁柱穴が巡るだけの配置である。ピット9・10とピット11・12は、建物跡の南東辺で近接する2個のピットが主軸方向に沿って並んでいる。堆積土は全体に黒褐色土を堆積土の主体とし、Ⅲ～Ⅴ層を壁、Ⅴ層を底面とするものが多い。竪穴部のほぼ中心を緩く蛇行しながら第527号溝跡が、長さ約7.3m、深さは約10cmで走っている。竪穴部に伴うものかとも思われるが、本遺構の北側に建物跡と考えられる第520号土坑が隣接しており、外周溝の先端が本遺構の竪穴部まで延びてきているとも見ることもできる。しかしこの土坑と溝の付

近には外周溝らしき痕跡は確認されなかった。また位置的には第513号土坑が伴う可能性もある。

【竈】確認されていない。

【出土遺物】i・jラインでⅡ層から土師器の坏・甕が出土している（図50-2・6・7）。

掘立部

【形態・規模】ピット14～23までを掘立部とした。ピット14～22までなら東西壁約3.3m×南北壁約4.8mで2間×2間となる。ピット23を含めると東西壁約4.2mになるが、これに対応する両側のピットは見つからなかったため、このピットの性格については不明である。Ⅲ～Ⅴ層を壁、Ⅴ層を底面とする。竪穴部と同じく南北軸の方が長い長方形の配置だが、これも東西軸が長くなる他の住居の掘立部とは異なる。

【堆積土】ほとんどが黒褐色土を主体とする。

【付属施設】第527号溝跡がピット15と重複するが、新旧は不明である。

【出土遺物】なし。

外周溝

【形態・規模】平面形は竪穴部を囲み南東側に開口するコの字形を呈する。北東側の先端は溝が若干埋まったところで土坑状に深く掘り返されている。南端部は大きくふくらみ、中心部が後世の攪乱で破壊されている。この部分では起源は不明であるが（竈の可能性あり）廃棄された焼土・遺物が見つかり、Uラインでは外周溝の堆積土を壊す掘りこみが確認された。そこでセクションベルトを設け、堆積土から図中に示す数個の土坑の存在を確認した。掘り返しも含め、広く浅いものや小さく深いもの等がある。確認面からの深さは、最深で北東側の先端で底面の標高が45.77m、最浅で北側部分で底面の標高が46.59mであった。斜面の下側になる南側の方が深く掘りこまれている。断面形は西から南側にかけては壁が垂直気味に立ち上がった後、外傾する。北側の先端部に近いJライン付近では浅い皿状の断面形である。底面はほぼ平坦で、西から南側にかけての幅が狭い部分では鋤痕が見られた。Ⅲ～Ⅴ層を壁、Ⅴ層を底面とする。

【堆積土】bラインでは火山灰が上下2層に分かれて堆積していた。下位火山灰層（2層下部）は層状に、上位火山灰層（2層上部）はブロック状に堆積していた。これらの火山灰を含んだbラインの土層を火山灰の同定分析にかけた結果、3層以下には十和田-八戸火山灰の混入が見られ、2層下部はほぼ白頭山-苦小牧火山灰の単層、2層上部には白頭山-苦小牧火山灰と十和田-八戸火山灰が混入していることが判明した。また、南から西へかけて、最下位に黒色土にロームを多量に含む層が見られる。北側の先端では焼土と炭、南側の先端部Wライン付近では焼土と遺物が検出されている。

【付属施設】なし。【出土遺物】火山灰上などから土師器の坏・甕、須恵器の長頸壺が出土している。

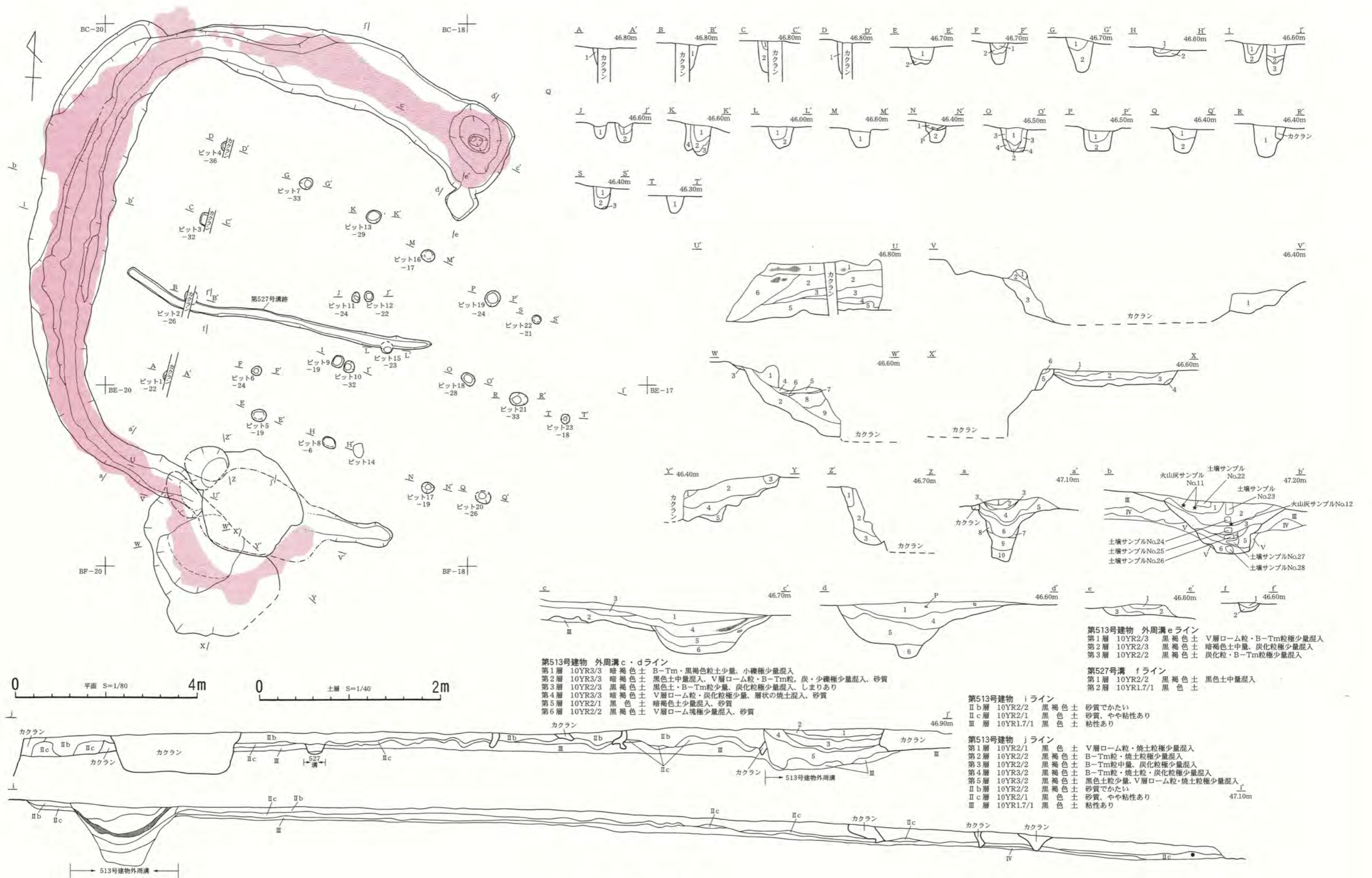
第514号建物跡（図11）

【概要・位置・確認】竪穴部のみ確認である。A区中央部、BB-49グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層面で確認した。【重複】第502号建物跡竪穴部と重複し、本遺構の方が古い。

竪穴部

【形態・規模】残存している範囲では北西辺2.4m、北東辺3.2mであり、おそらく正方形に近い形であると思われる。【壁・床面】双方ともに残存していない。特に床面は掘形を確認したのみである。

【柱穴・土坑】無し。【竈】確認されなかった。【出土遺物】無し。



第513号建物 外周溝 c・dライン
 第1層 10YR3/3 暗褐色土 B-Tm・黒褐色粒土少量、小礫極少量混入
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 黒色土中量混入、V層ローム粒・B-Tm粒、炭・少礫極少量混入、砂質
 第3層 10YR2/3 黒褐色土 黒色土・B-Tm粒少量、炭化粒極少量混入、しまりあり
 第4層 10YR3/3 暗褐色土 V層ローム粒・炭化粒極少量、層状の焼土混入、砂質
 第5層 10YR2/1 黒色土 暗褐色土少量混入、砂質
 第6層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム塊極少量混入、砂質

第513号建物 外周溝 eライン
 第1層 10YR2/3 黒褐色土 V層ローム粒・B-Tm粒極少量混入
 第2層 10YR2/3 黒褐色土 暗褐色土中量、炭化粒極少量混入
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 炭化粒・B-Tm粒極少量混入

第527号溝 fライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土中量混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土

第513号建物 iライン
 II b層 10YR2/2 黒褐色土 砂質でかたい
 II c層 10YR2/1 黒色土 砂質、やや粘性あり
 III層 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり

第513号建物 jライン
 第1層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒・焼土粒極少量混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 B-Tm粒・焼土粒極少量混入
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 B-Tm粒中量、炭化粒極少量混入
 第4層 10YR3/2 黒褐色土 B-Tm粒・焼土粒・炭化粒極少量混入
 第5層 10YR3/2 黒褐色土 黒色土少量、V層ローム粒・焼土粒極少量混入
 II b層 10YR2/2 黒褐色土 砂質でかたい
 II c層 10YR2/1 黒色土 砂質、やや粘性あり
 III層 10YR1.7/1 黒色土 粘性あり

図48 第513号建物跡

第513号建物 ビットAライン
 第1層 10YR2/1 黒色土 黒色土塊混入

第513号建物 ビットBライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 砂質

第513号建物 ビットCライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 砂質

第513号建物 ビットDライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 砂質

第513号建物 ビットEライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム粒混入

第513号建物 ビットFライン
 第1層 10YR3/2 黒褐色土 上位に砂質土混入
 第2層 10YR2/1 黒色土
 第3層 10YR2/1 黒色土

第513号建物 ビットGライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 上位に砂質土混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 上位にV層ローム粒極少量混入

第513号建物 ビットHライン
 第1層 10YR3/2 黒褐色土 V層ローム粒極少量混入、砂質
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒混入

第513号建物 ビットIライン (ビット9)
 第1層 10YR2/1 黒色土
 第2層 10YR1.7/1 黒色土

第513号建物 ビットIライン (ビット10)
 第1層 10YR2/1 黒色土
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム粒極少量混入
 第3層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム粒混入

第513号建物 ビットJライン (ビット11)
 第1層 10YR2/1 黒色土 焼土粒極少量、砂質土上位に混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 上位にV層ローム粒極少量混入

第513号建物 ビットJライン (ビット12)
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 砂質

第513号建物 ビットKライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 黒褐色土上位に混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土
 第3層 10YR2/1 黒色土 砂質、V層ローム塊混入
 第4層 10YR2/1 黒色土

第513号建物 ビットLライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 砂質
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土混入

第513号建物 ビットMライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 砂質

第513号建物 ビットNライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 砂質
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層ローム塊混入

第513号建物 ビットOライン
 第1層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒・炭化粒・B-Tm・
 V層ローム塊極少量混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム粒極少量混入
 第3層 10YR1.7/1 黒色土 下にV層ローム混入
 第4層 10YR6/6 明黄褐色土 黒色土混入

第513号建物 ビットPライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 炭化粒混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム塊混入

第513号建物 ビットQライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒・V層ローム塊・炭化粒
 極少量混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム粒少量混入

第513号建物 ビットRライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒混入

第513号建物 ビットSライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 炭化粒極少量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土
 第3層 10YR3/2 黒褐色土 V層ローム塊混入

第513号建物 ビットTライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 砂質

第513号建物 外周溝Uライン
 第1層 10YR2/1 黒色土 B-Tm塊状・層状に少量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層ローム塊少量混入、かたい
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 上位に砂混入
 第4層 10YR3/1 黒褐色土 V層ローム塊極少量混入
 第5層 10YR2/1 黒色土 粘土・V層ローム塊多量混入
 第6層 10YR2/1 黒色土 焼土塊・粘土塊混入

第513号建物 外周溝Vライン (西側)
 第1層 7.5YR4/6 褐色土 焼土層
 第2層 10YR5/4 にぶい黄褐色土 粘土層
 第3層 10YR1.7/1 黒色土 粘土塊混入

第513号建物 外周溝Vライン (東側)
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 明黄褐色土の粘土・焼土・V層ローム粒極少量混入

第513号建物 外周溝Wライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 VI層ローム塊混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 VI層ローム塊多量混入
 第3層 10YR2/2 黒色土 VI層ローム塊多量混入
 第4層 10YR2/1 黒色土 焼土、VI層ローム、炭化物混入
 第5層 10YR2/3 黒褐色土 焼土、VI層ローム、炭化物混入
 第6層 10YR2/2 黒褐色土 粘土粒多量混入
 第7層 10YR2/1 黒色土 粘土塊状に混入
 第8層 10YR4/4 暗褐色土 焼土が層状に混入、黒色土塊混入
 第9層 10YR4/4 暗褐色土 焼土が層状に混入

第513号建物 外周溝Xライン
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム塊混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 B-Tm混入
 第3層 10YR2/1 黒色土 粘土塊混入
 第4層 10YR2/2 黒褐色土 焼土、VI層ローム、炭化物少量混入
 第5層 10YR4/4 暗褐色土 焼土が層状に混入
 第6層 10YR4/3 暗褐色土

第513号建物 外周溝Yライン
 第1層 10YR2/1 黒色土 V層ローム塊・V層ローム粒多量、
 焼土粒極少量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒・焼土粒・炭化粒極少量混入
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒・焼土粒極少量混入
 第4層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム塊・V層ローム粒中量、
 炭化粒・焼土粒極少量混入
 第5層 10YR2/1 黒色土 V層ローム塊・V層ローム粒少量、焼土粒極
 少量混入

第513号建物 外周溝Zライン
 第1層 10YR3/1 黒褐色土 カクラン
 第2層 10YR3/1 黒褐色土 V層ローム塊混入
 第3層 10YR2/1 黒色土 V層ローム塊多量混入

第513号建物 外周溝aライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 火山灰・炭化粒極少量混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 火山灰・炭化粒極少量混入
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 火山灰極少量混入
 第4層 10YR2/2 黒褐色土 火山灰中量、炭化粒極少量混入
 第5層 10YR2/1 黒色土 火山灰少量混入、しまりあり
 第6層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム粒極少量混入、しまりあり
 第7層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム粒・炭化粒極少量
 第8層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム塊極少量混入、しまりあり
 第9層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒・V層ローム塊・炭化粒・焼土粒極
 少量混入
 第10層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒・V層ローム塊・炭化物極少量混入

第513号建物 外周溝bライン
 第1層 10YR2/3 黒褐色土 火山灰多量混入、砂質
 第2層 10YR2/3 黒褐色土 炭化粒極少量、火山灰中量混入、砂質
 第3層 10YR2/3 黒褐色土 V層ローム粒・火山灰極少量混入、砂質
 第4層 10YR3/3 暗褐色土 ローム塊中量混入
 第5層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム塊極少量混入
 第6層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム塊中量混入

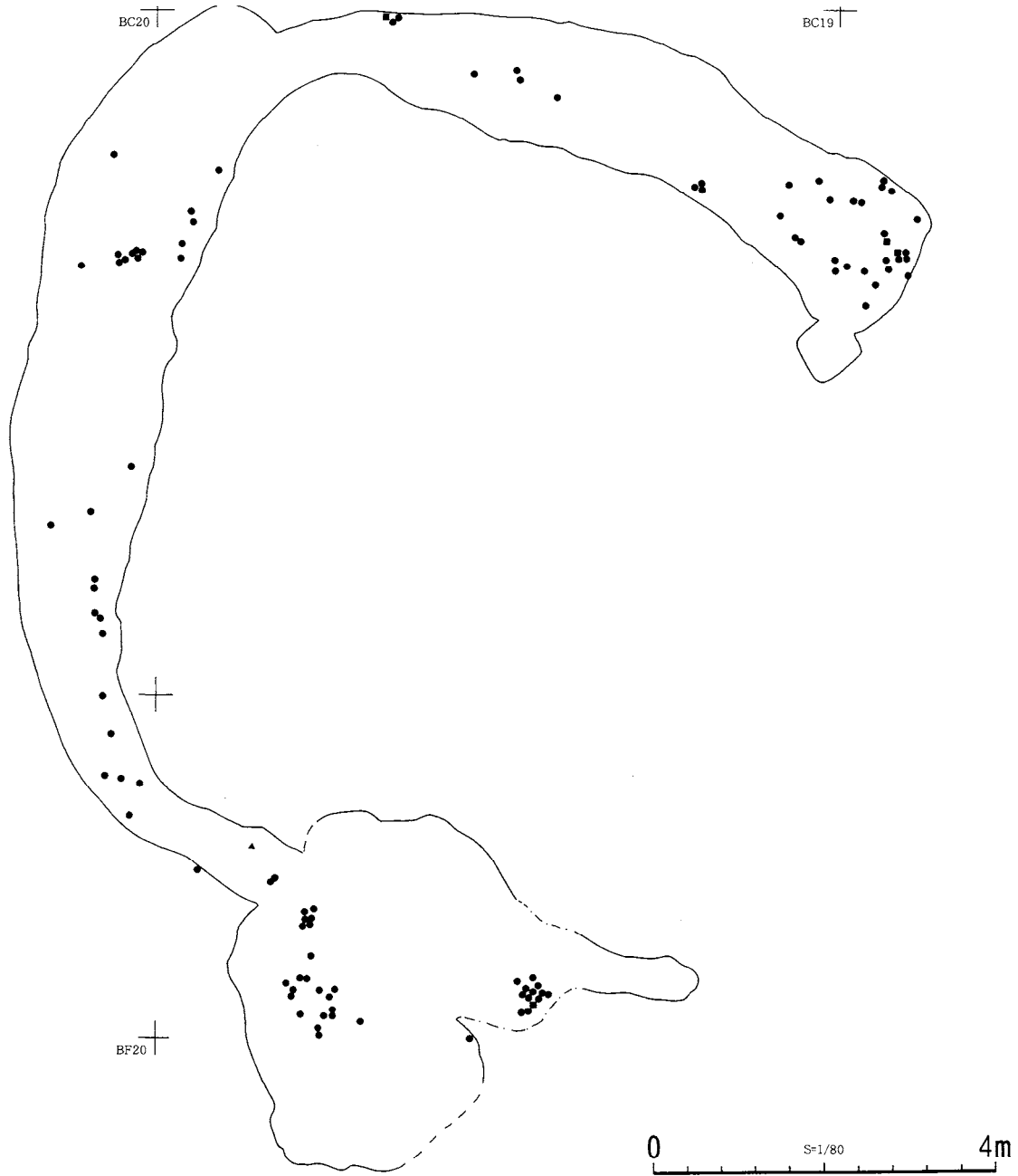


图49 第513号建物跡遺物出土状況

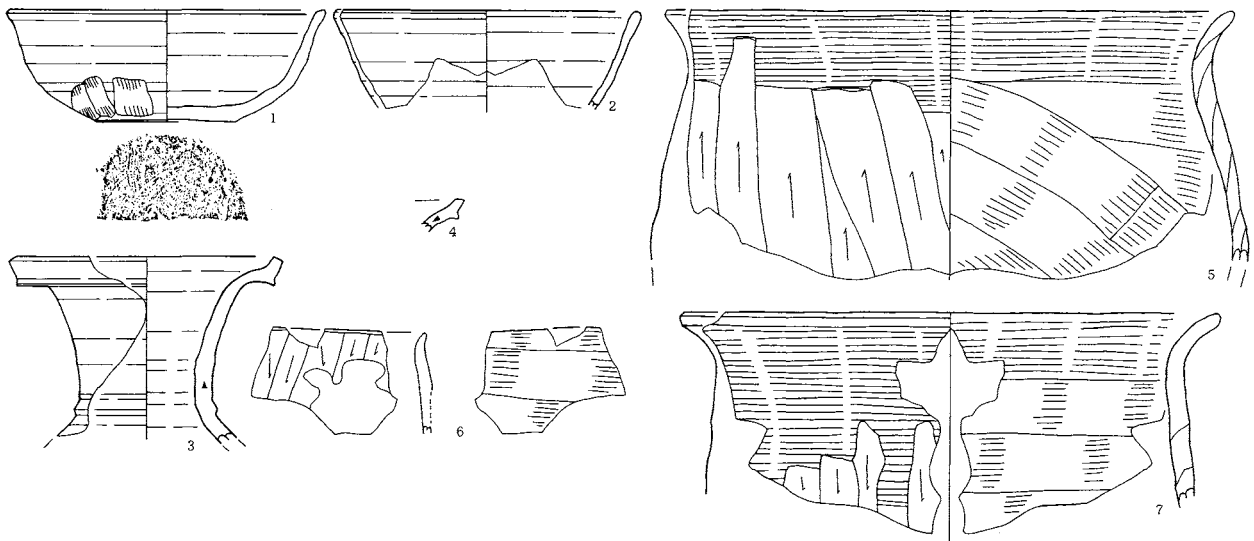
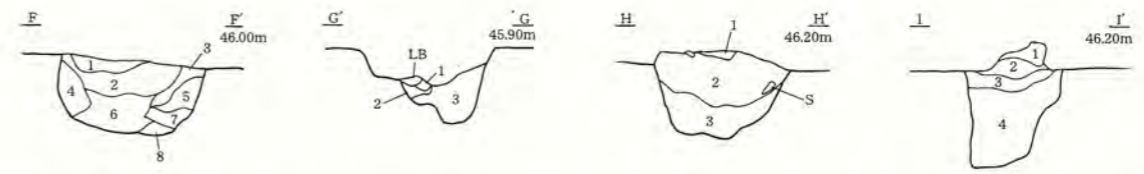
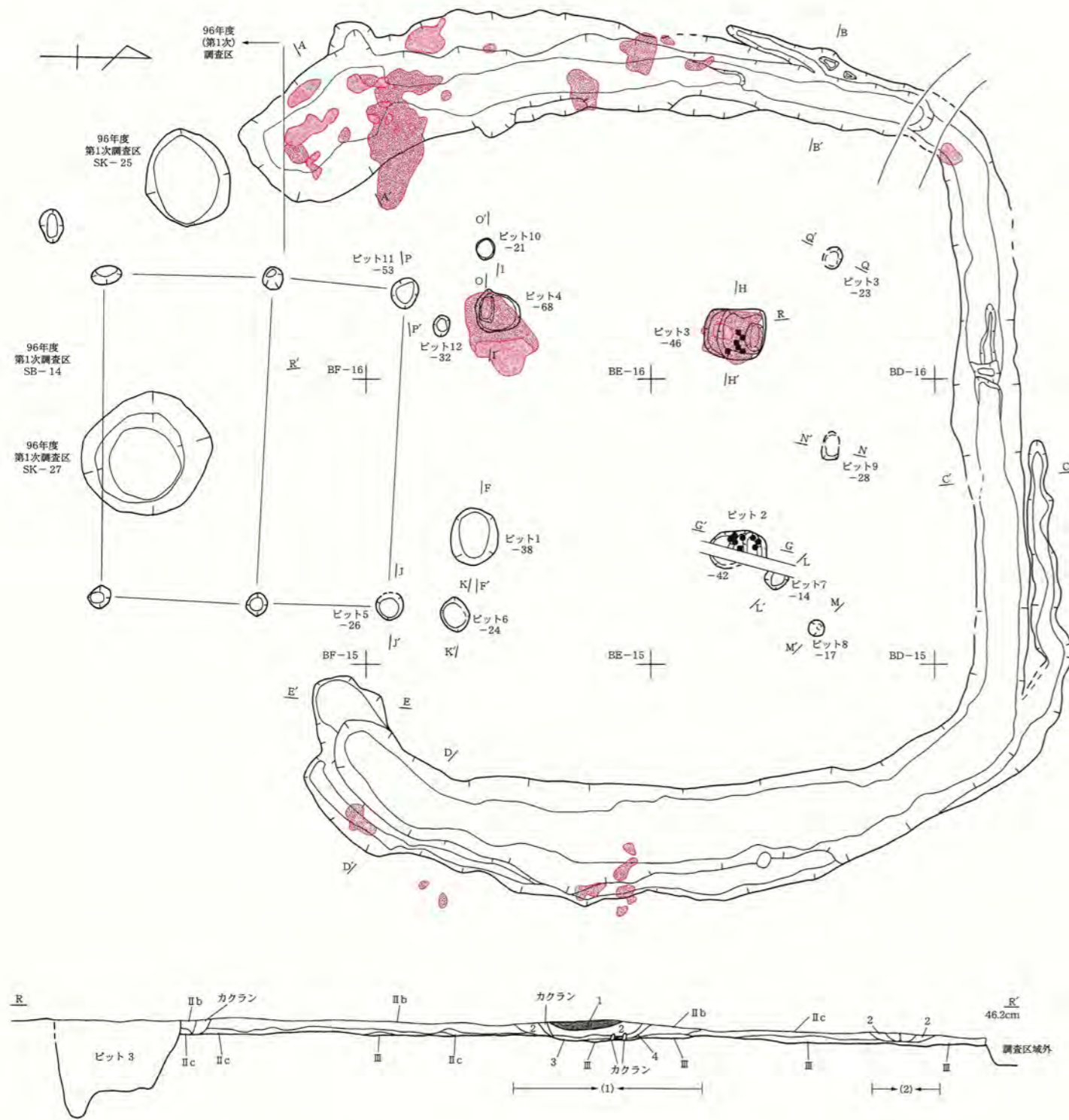
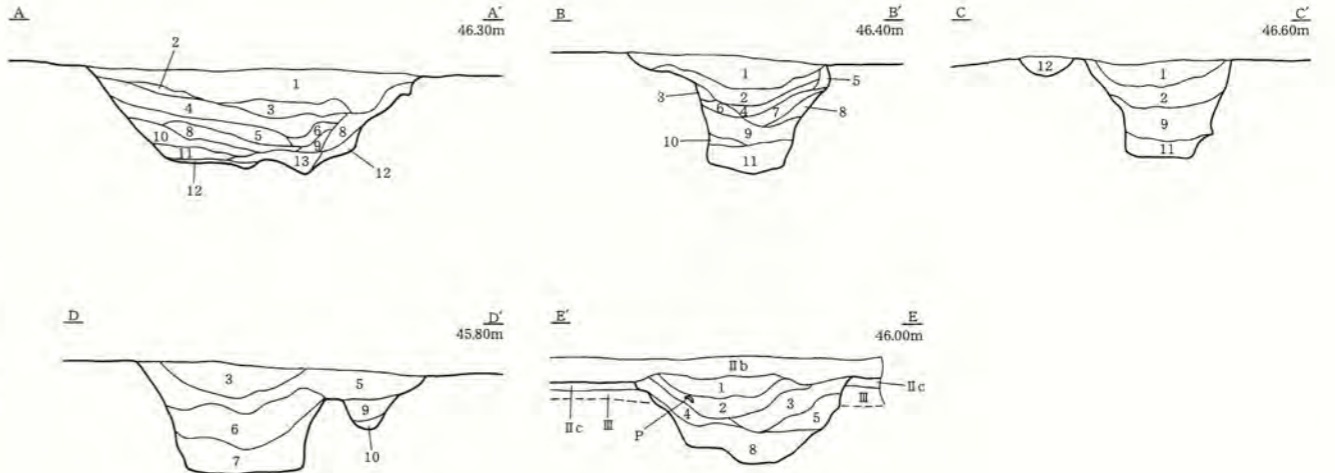
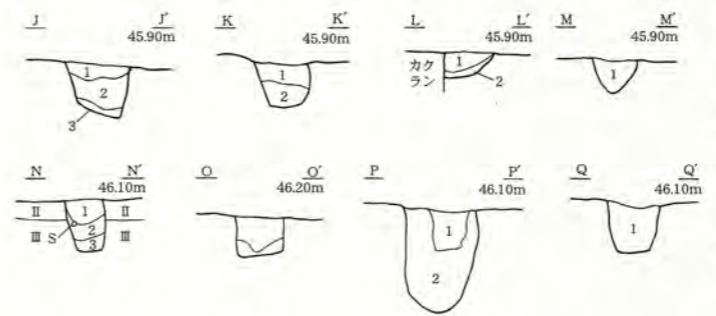


图50 第513号建物跡出土遺物



- 第515号建物 竪穴部Fライン**
 第1層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒・粘土粒多量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒・粘土粒・炭化物少量混入、砂質
 第3層 10YR2/1 黒色土 V層ローム・焼土極少量混入
 第4層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム・焼土少量混入
 第5層 10YR2/1 黒色土 V層ローム・砂と焼土粒極少量混入
 第6層 10YR4/4 褐色土 V層ロームの層
 第7層 10YR2/1 黒色土 砂少量混入
 第8層 10YR4/4 褐色土 V層ローム中量混入
- 第515号建物 竪穴部Gライン**
 第1層 10YR2/1 黒色土 V層ローム塊中量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒極少量混入
 第3層 10YR2/1 黒色土 V層ローム塊・炭化粒極少量混入
- 第515号建物 竪穴部Hライン**
 第1層 7.5YR3/4 暗褐色土 被熱した粘土層・暗褐色土少量混入、砂質
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 粘土・V層ローム少量、炭化物・焼土極少量混入
 第3層 10YR2/1 黒色土 粘土極少量、粘土・V層ローム粒少量混入

- 第515号建物 竪穴部Iライン**
 第1層 10YR3/2 黒褐色土 粘土中量、焼土・炭化物極少量混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 焼土・炭化物極少量、粘土少量混入
 第3層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物・焼土・粘土粒極少量混入
 第4層 10YR3/2 黒褐色土 焼土・炭化物極少量、粘土多量混入
- 第515号建物 竪穴部Jライン**
 第1層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒・焼土粒極少量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒極少量混入
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム塊・粘土塊多量混入
- 第515号建物 竪穴部Kライン**
 第1層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒・焼土粒極少量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層ローム塊極少量混入
- 第515号建物 竪穴部Lライン**
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・V層ローム粒少量混入
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム粒極少量混入
- 第515号建物 竪穴部Mライン**
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム少量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 V層ローム粒極少量混入
 第3層 10YR1.7/1 黒色土
- 第515号建物 竪穴部Nライン**
 第1層 10YR3/2 黒褐色土 V層ローム塊極少量混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム塊極少量混入
- 第515号建物 竪穴部Oライン**
 第1層 10YR3/2 黒褐色土 黒色土・V層ローム・炭化物極少量混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土・V層ローム粒極少量混入
- 第515号建物 竪穴部Pライン**
 第1層 10YR3/3 黒褐色土 V層ローム粒極少量混入
 第2層 10YR3/3 黒褐色土 黒色土・V層ローム粒極少量混入
 第3層 10YR1.7/1 黒色土 暗褐色土極少量混入
- 第515号建物 竪穴部Qライン**
 第1層 10YR3/2 黒褐色土 V層ローム粒極少量混入



- 第515号建物 竪穴部Rライン(1)**
 第1層 7.5YR3/3 暗褐色土 V層ローム粒・炭化粒・焼土粒極少量混入
 第2層 10YR2/3 黒褐色土 炭化粒・焼土粒極少量混入
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 V層ローム粒極少量混入
 第4層 10YR2/2 黒褐色土 炭化粒極少量混入

- 第515号建物 竪穴部Rライン(2)**
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒と炭化物極少量混入
 第2層 10YR2/1 黒色土 焼土粒と炭化物極少量混入

- 第515号建物 外周溝Aライン**
 第1層 10YR2/1 黒色土 焼土粒・炭化物・粘土粒多量混入
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 砂質
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・粘土粒極少量混入
 第4層 10YR2/1 黒色土 黒色土・焼土塊・粘土塊多量混入
 第5層 10YR2/1 黒色土 層状の焼土・粘土塊少量混入
 第6層 10YR2/2 黒褐色土 焼土少量混入
 第7層 10YR2/1 黒色土 粘土塊極少量混入
 第8層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土・焼土を層状に混入
 第9層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・粘土塊少量混入
 第10層 10YR2/1 黒色土 焼土塊・炭化物少量混入
 第11層 10YR2/1 黒色土 粘土塊多量混入
 第12層 10YR2/1 黒色土 粘土塊多量混入
 第13層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土・V層ローム塊少量混入

- 第515号建物 外周溝B-Eライン**
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物極少量混入
 第2層 10YR2/3 黒褐色土 砂質
 第3層 10YR2/3 黒褐色土 砂質
 第4層 10YR2/1 黒色土 砂質
 第5層 10YR2/2 黒褐色土 砂質
 第6層 10YR3/3 暗褐色土 砂質
 第7層 10YR1.7/1 黒色土 しまりあり
 第8層 10YR2/3 黒褐色土 V層ローム塊混入、しまりなし
 第9層 10YR2/3 黒褐色土 砂質、しまりなし
 第10層 10YR1.7/1 黒色土 砂質、しまりなし
 第11層 10YR1.7/1 黒色土 V層ローム塊多量混入
 第12層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土・褐色土極少量混入

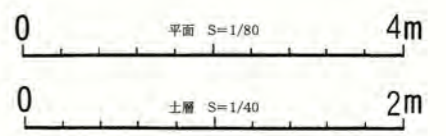


図51 第515号建物跡

第515号建物跡 (図51～55)

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。また、掘立部範囲内には井戸跡 (SK-27) が存在する。外周溝は第1次調査時に西側の先端が第36号土坑として報告されている。また、同じく第1次調査時に第14号掘立柱建物跡として報告された遺構は今回の成果とあわせた結果、この第515号建物跡の掘立部であることが判明した。よって、第5次調査結果と合わせた形で再報告する。

【位置・確認】 BC～BF-14～17の各グリッドに位置する。概ねⅢ層上面で確認した。確認の際に砂を大量に含む土 (Ⅱ層) により竪穴部の確認が困難と思われたため、ベルトを設けて砂質の層を面的に掘り下げていったが、Ⅲ層上面に至っても竪穴部の掘りこみは確認できなかった。しかしながらⅡ層面でピット3・4上部に堆積している焼土・粘土は確認できていたため、2層中あるいはその上位に床面が存在した可能性がある。

【重複】 第511号建物跡・第533～542号ピットと重複する。本遺構は第511号建物跡よりは古く、第533～542号ピットより新しい。

竪穴部

【形態・規模】 確認した柱穴の配置から、東西壁約5.4m×南北壁約5.5mでほぼ正方形になると推定される。主軸方位はN-183° -Wである。

【壁・床面】 上記の理由で確認されなかった。

【堆積土】 確認できなかった。

【柱穴・土坑】 ピット1～4が主柱穴である。4基のうちピット2～4が底面に長方形で底面からの深さ10cm前後の一段低い落ち込みを持つ。堆積土は黒褐色土及び黒色土を主体とし、ピット3・4には堆積土上位に粘土・焼土塊を含む。これらは竈構築材が廃棄されたものである可能性が高い。ピット6・8・9・10・13は壁柱穴と考えられる。ピット9以外は竪穴の4隅に配置されている。Ⅲ～Ⅴ層を壁、底面とする。

【竈】 ピット4の東側に80cm×50cmの範囲で焼土を検出した。最深8cmまで皿状に被熱しており、これが火床面と考えられる。

【出土遺物】 ピット3から礫が、ピット2から土師器の破片と砥石 (図55-54) が出土している。砥石は棒状の礫の平たい面や稜線を使用する。かなり深い擦痕が全面にわたって見られ、使用面は平坦になっている。

掘立部

【形態・規模】 第1次調査時の第14号掘立柱建物跡をあわせ、桁行2間×梁間1間となる。東西軸が約4.5mで一定するほか、南北軸のピットの配置もほぼ似たような間隔で並んでいる。

【堆積土】 黒色土・黒褐色土を主体とし、焼土・粘土粒を含むものもある。

【付属施設】 第1次調査時に第27号土坑が付随する可能性が指摘されている。この土坑の性格は井戸跡とされ、堆積土中には白頭山-苦小牧火山灰が層状に堆積している。第14号掘立柱建物跡はこの井戸にかけられた屋根と見られているが、建物跡掘立部内に構築された井戸跡である可能性が今回新たに指摘できた。

【出土遺物】 なし。

外周溝

【形態・規模】 平面形は竪穴部と掘立部の一部を取り囲み、ほぼ南に向かってコの字形に開口する。平面形は先端がやや弧を描くコの字形を呈する。北側東寄りと西側北寄りの位置に細い溝が枝分かれしている。完全に分離してはいないが、東側の先端部にも浅く細い溝が併存する。確認面からの

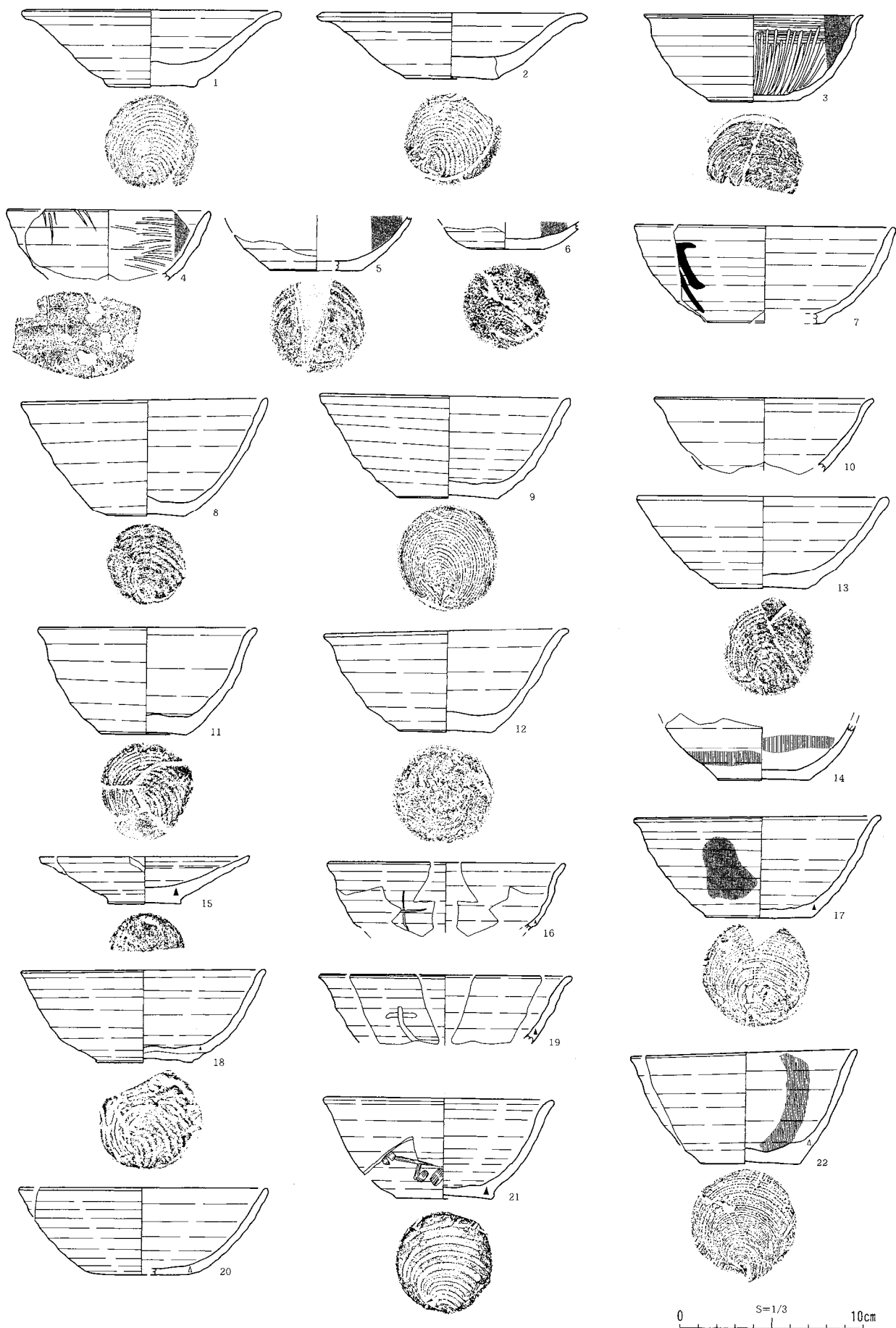


图52 第515号建物跡出土遺物①

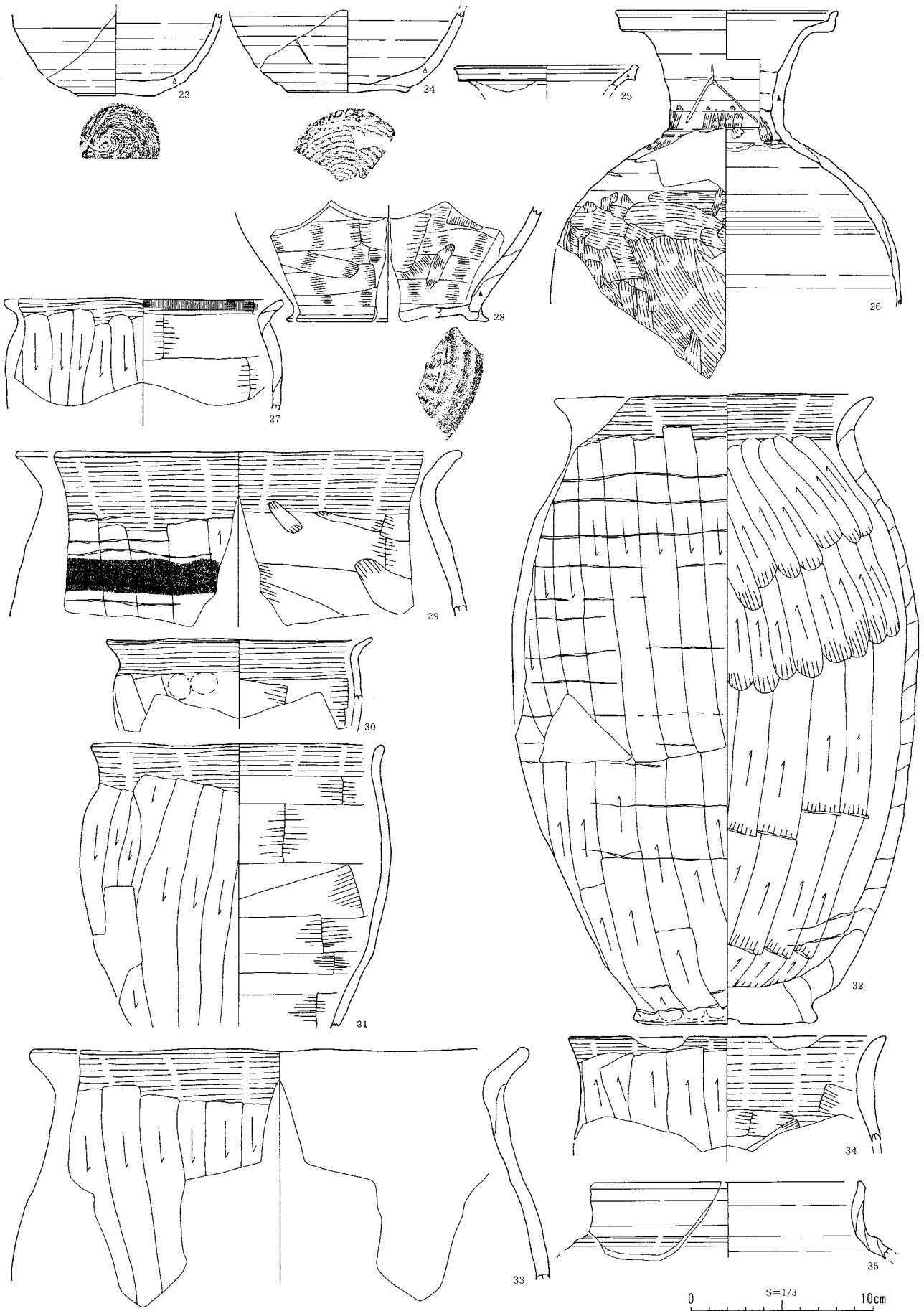


图53 第515号建物跡出土遺物②

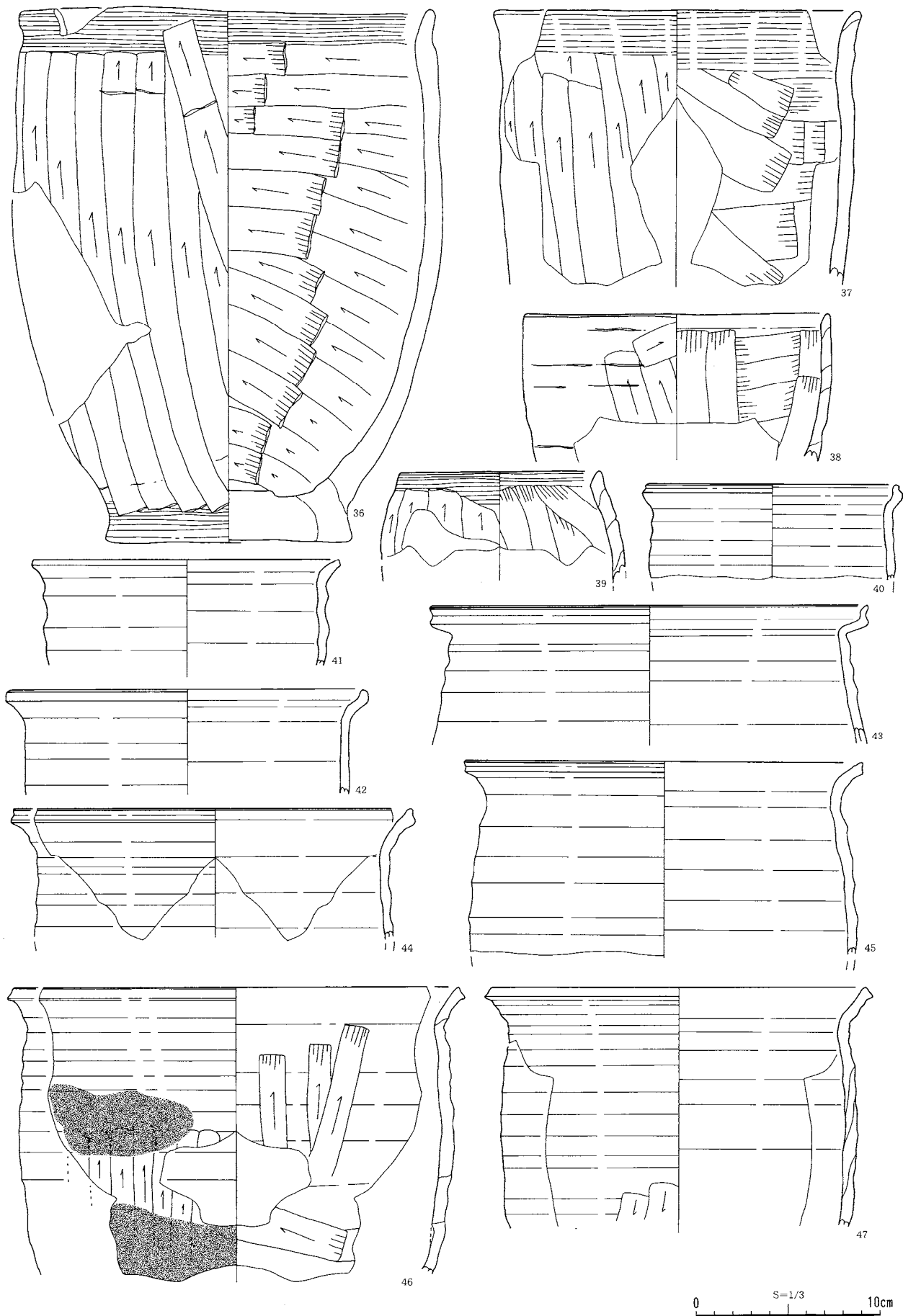


图54 第515号建物跡出土遺物③

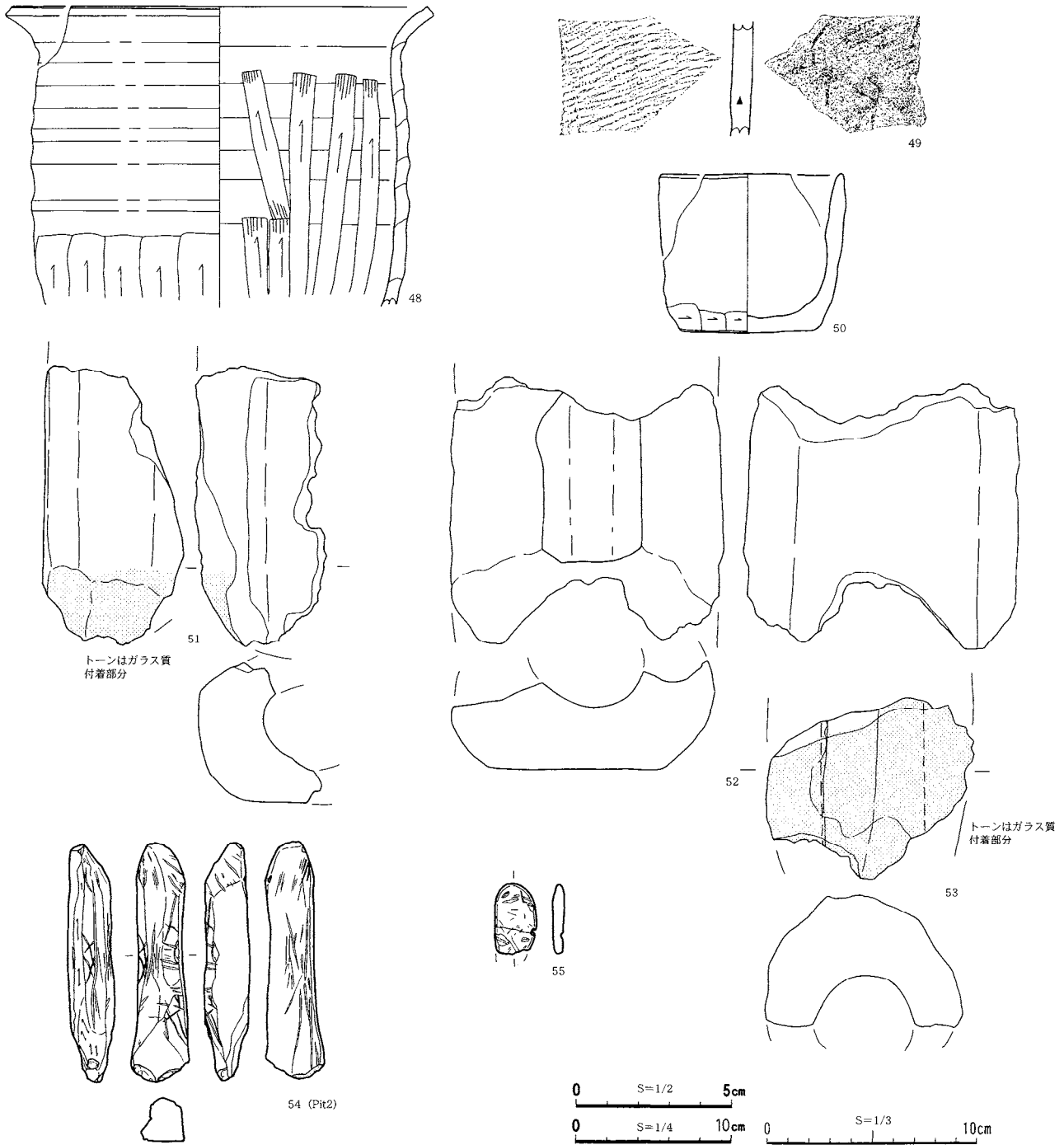


図55 第515号建物跡出土遺物④

深さが最も深い部分は、東側先端部で底面の標高44.96m、最も浅い部分は外周溝の北西隅で底面の標高45.80mである。先端部は深くなるが、全体的には斜面下方になる外周溝東側に向かって底面の標高は低くなっていく。壁は先端部付近は底面から外傾して立ち上がる。その他の部分では垂直気味に立ち上がった後、外傾する。北側部分など、幅の狭い部分では底面に鋤痕が見られる所が多い。Ⅲ～Ⅴ層を壁、Ⅴ、Ⅵ層を底面とする。

[堆積土] 黒色土と黒褐色土を主体とする。堆積土中位より上に竈起源と考えられる廃棄された粘

土・焼土、遺物を多量に含む。これより下の層は概ね自然堆積で、最下層には黒色土にV層塊を多量に含む層が見られる。

【付属施設】 第1次調査時の第25号土坑が外周溝西端部の先端付近に位置する。堆積土は焼土・炭化物・粘土を含む人為堆積と思われる。位置関係から本遺構に伴う可能性がある。

【出土遺物】 堆積土の中～上位にかけて粘土・焼土と一緒に、土師器・須恵器・小型土器・羽口・砥石・鉄製品椀型滓といった大量の遺物が出土している。図52-1・2は土師器の、図52-15は須恵器の皿である。15は蓋である可能性も捨てきれない。口端部を面取りするなど、坏には見られない特徴があるためである。内面は研磨により非常になめらかで一部に光沢も見られる為、転用硯だった可能性もある。同様の蓋は五所川原市MZ-6号須恵器窯跡でも出土している。図52-18の体部には縄の圧痕が残っていた。おそらく底部切り離しに用いた紐の圧痕である。撚りはRであり条の太さは2cm弱である。図52-7は土師器の坏で胴部に墨書が見られる。「木」のようだが欠損のため断定できない。図53-26は須恵器長頸壺である。色調は赤みを帯びる。口端形状はやや角張るのが特徴で口端下部への摘み出しは見られない。胴部の器壁は薄く、3mm程度である。頸部には「大」と読める刻書が見られる。頸部付け根から肩部にかけては緩やかに湾曲している。この個体は色調・口端形状等から、五所川原市犬走2号窯跡出土の長頸壺に類似している。図55-51～53は羽口の破片である。52は平坦面を持つカマボコ状の断面形を呈する。51・53にはガラス状物質の溶着が見られる。図55-55は小判形の薄い小礫だが、比較的深い擦痕も見られる。

【小結】 火山灰を堆積土の上位に含む第511号建物跡より古いので、火山灰降下前の構築と思われる。外周溝内の多量の遺物は竈起源と見られる焼土・粘土と礫が大量に、溝が半分ほど埋まった時点で廃棄されている。前述のように竪穴部の確認はできなかったが、II層中で竈由来と見られる焼土や粘土を検出していることから、竪穴部の掘りこみはII層中にあったと思われるが、かなり浅いものであった可能性が高い。

第516号建物跡 (図56・57)

〔概要〕 外周溝のみを確認した。調査時には第504号溝跡として登録している。

〔位置・確認〕 A区東端、BC~BE-40・41グリッドに位置する。Ⅲ層~Ⅳ層で確認した。主軸方向は不明であるが、概ね北西-南東方向である。

〔重複〕 第506号建物跡外周溝、第507号建物跡竪穴部・外周溝と重複関係にあり、第507号建物跡より新しく、第506号建物跡外周溝より古い。

外周溝

〔形態・規模〕 南東方向に開口する「コ」の字形を呈する。北西側と北コーナーでとぎれている。確認面からの深さは最大65cm、最小10cmである。南西辺は一段深くなっているが、中央部付近から先端は幅も深さも縮小している。北東及び南東辺底面では鋤痕が確認されている。

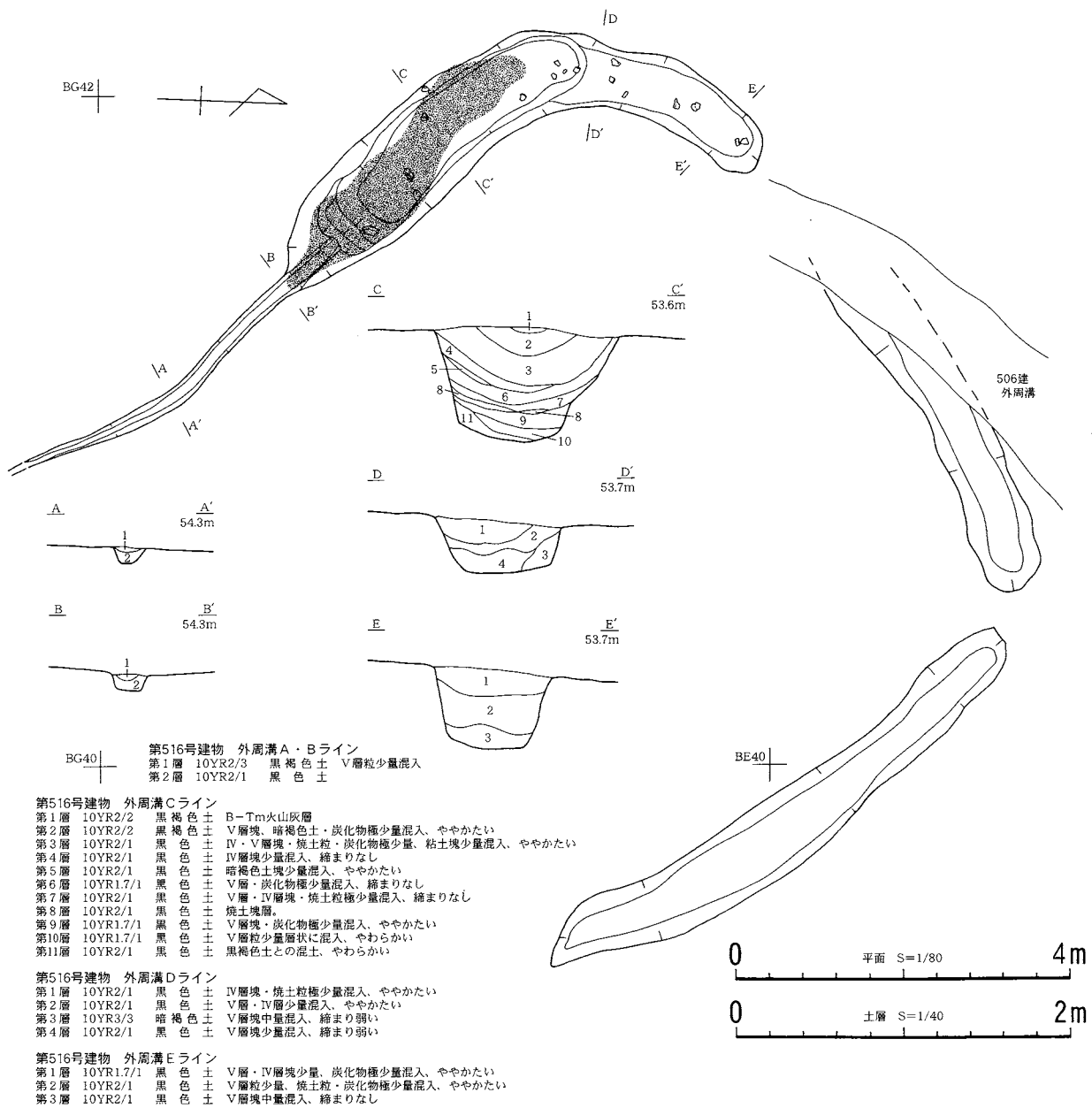


図56 第516号建物跡

【堆積土】 南西辺からは遺物がややまとまって出土している。また、遺物に伴って廃棄された焼土も確認された。この付近においては人為堆積と自然堆積が混合している様子である。

【付属施設】 無し。

【出土遺物】 9は土師器小型甕の破片である。内外面はロクロ整形である。胴部には先の尖った工具により何らかの意匠が描かれているが、一部分であるため性格は不明である。

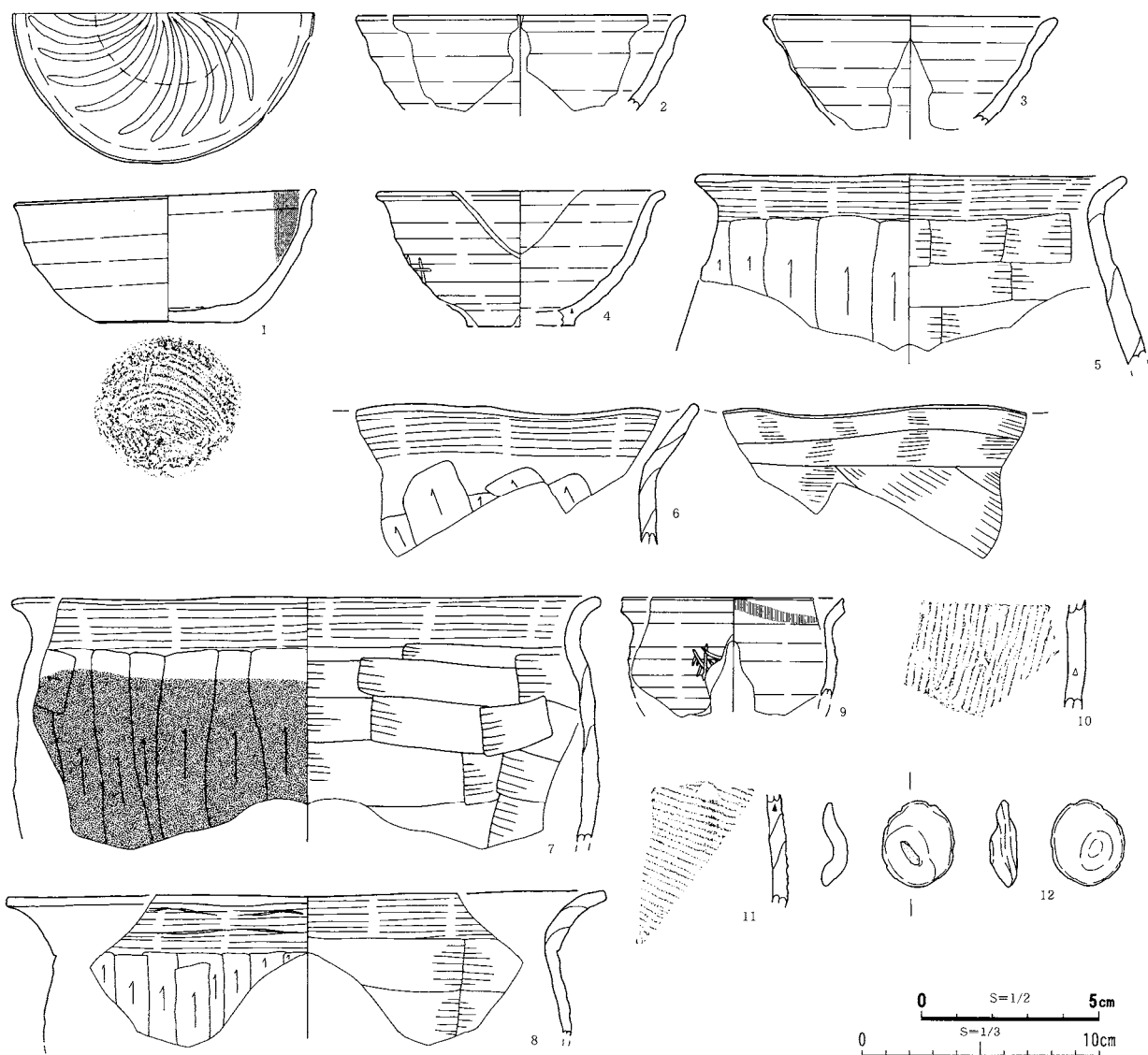


図57 第516号建物跡出土遺物

第517号建物跡（図58・59）

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。削平を受け、壁・床面が失われた状態で検出した。

【位置・確認】 C区中央南側CI～CK-25～27グリッドに位置する。V層上面で確認した。

【重複】 なし。

竪穴部

【形態・規模】 残存する柱穴と掘り方の範囲から、平面形は東西壁約3.6m×南北壁約3.3mの方形を呈する。主軸方位はN-105° - Eである。

【壁・床面】 削平の影響で壁と床面は確認できなかった。掘形底面はV層である。

【堆積土】 掘形覆土が確認された。

【柱穴・土坑】 竪穴の4隅には壁柱穴が確認された。西壁には内周溝が確認された。

【竈】 竈の痕跡は削平のため確認されなかった。

【出土遺物】 掘形覆土中から須恵器坏の破片が出土している。

掘立部

【形態・規模】 暗渠による攪乱の影響で2箇所ピットの消滅していると考えれば、2間×2間の総柱の掘立部になる。柱穴は全てV層を壁、底面とする。

【堆積土】 黒色土を主体とする。V層粒を含む。

【付属施設】 なし。

【出土遺物】 なし。

外周溝

【形態・規模】 平面形は竪穴部を取り囲み、丸くカーブを描くようにコの字形に南東方向に開口している。確認面からの深さが最も深い部分は外周溝北側の先端部で標高46.64m、最も浅い部分はHライン付近で標高46.98mである。先端付近の底面は一段低く土坑状に掘りこまれている。このあたりは建物跡の中でも斜面の下方に当たる。壁は底面から垂直気味に立ち上がり、その上位で外傾するようである。Hライン付近以外は、概ね底面は平坦であり、特に西側部分では底面に鋤痕が見られる。IV～V層を壁、V、VI層を底面とする。

【堆積土】 黒褐色土と黒色土を主体とする。ほぼ全体にわたってV層粒を含む。先端部のGライン付近では上位に炭化物と焼土を含む。おそらく竈起源の廃棄土だと考えられる。

【付属施設】 なし。

【出土遺物】 土師器・須恵器・鉄製品・礫石器が出土した。図59-11は擦り石で平たい面を使用する。図59-10は刀子の破片で両端が欠損している。

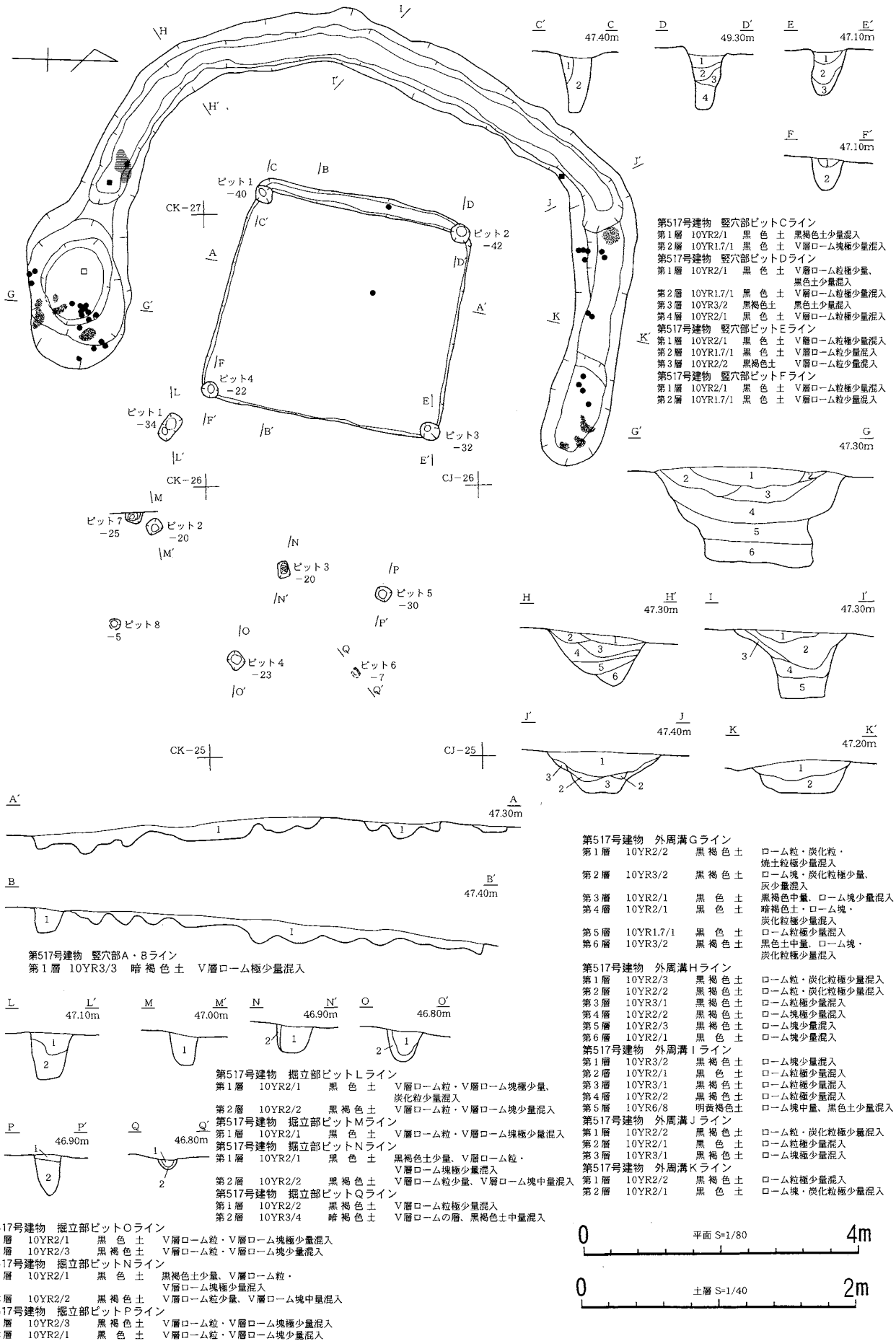


図58 第517号建物跡

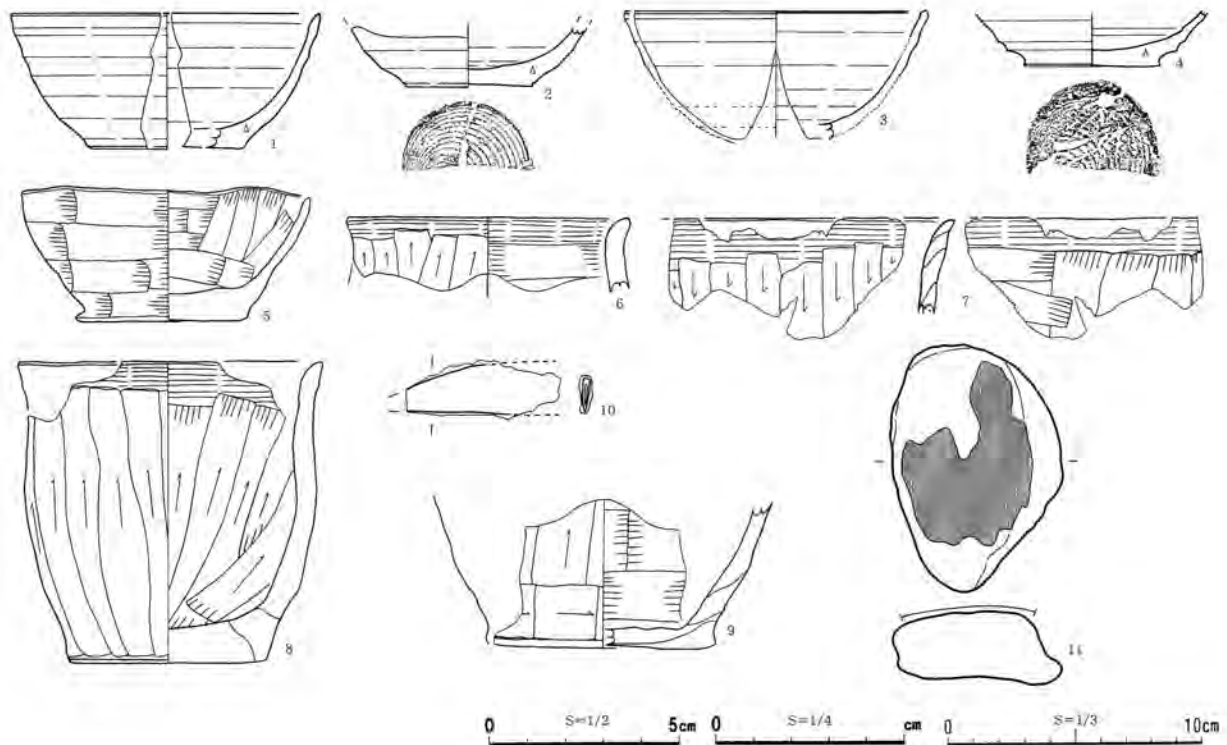


図59 第517号建物跡出土遺物

第518号建物跡 (図60・61)

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。竪穴部からは多量の炭化材が確認され、焼失建物と判断される。外周溝の北側部分は第1次調査において第25号溝跡として調査されている。

【位置・確認】 C区北西端、BU～BW-29～32グリッドに位置する。Ⅲ層～Ⅳ層で確認した。

【重複】 第519号建物跡外周溝・第519号溝跡、第538号土坑と重複関係にあり、本遺構が全ての遺構よりも古い。

竪穴部

【形態・規模】 平面形は軸方向4.4m、横軸方向4.64mのほぼ正方形を呈する。主軸方向はN-119.5°-Eである。

【壁・床面】 壁はⅢ層～Ⅳ層であり、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はⅤ層まで掘り込んだ掘形に詰められた土層を固めて構築されており、概ね平坦である。貼り床は見られなかった。床面北東部の一部分は焼失時の被熱により赤変しており、この部分が一番強く焼けているのが確認された。

【堆積土】 7層に分層された。1層はⅡ層の黒色土であり、自然堆積土である。2層は焼土層である。廃棄されたというよりは焼けた様な状況であった。その下位の3層中には炭化した建物上屋構築材が一部検出されている。炭化材は主に竪穴部北側において検出された。壁に平行して幅約30cm・厚さ約10cmの板材が数枚横たわり、その上下に約4cm角の角材が直行して横たわっていた。また、ピット4・8の直上においては約4cm角の角材がまっすぐ立った状態で検出されている(柱穴内部ではない)。したがって直立した材は柱材・横たわった板材は壁構築材・横たわった角材は壁構築材の押さえ、または柱材と推測される。同様の検出状況は、本遺跡第1次調査の第17号建物跡・同町内の松山遺跡第2号建物跡(県埋分報170集)、弘前市宇田野(2)遺跡第7号竪穴建物跡等でも確認され

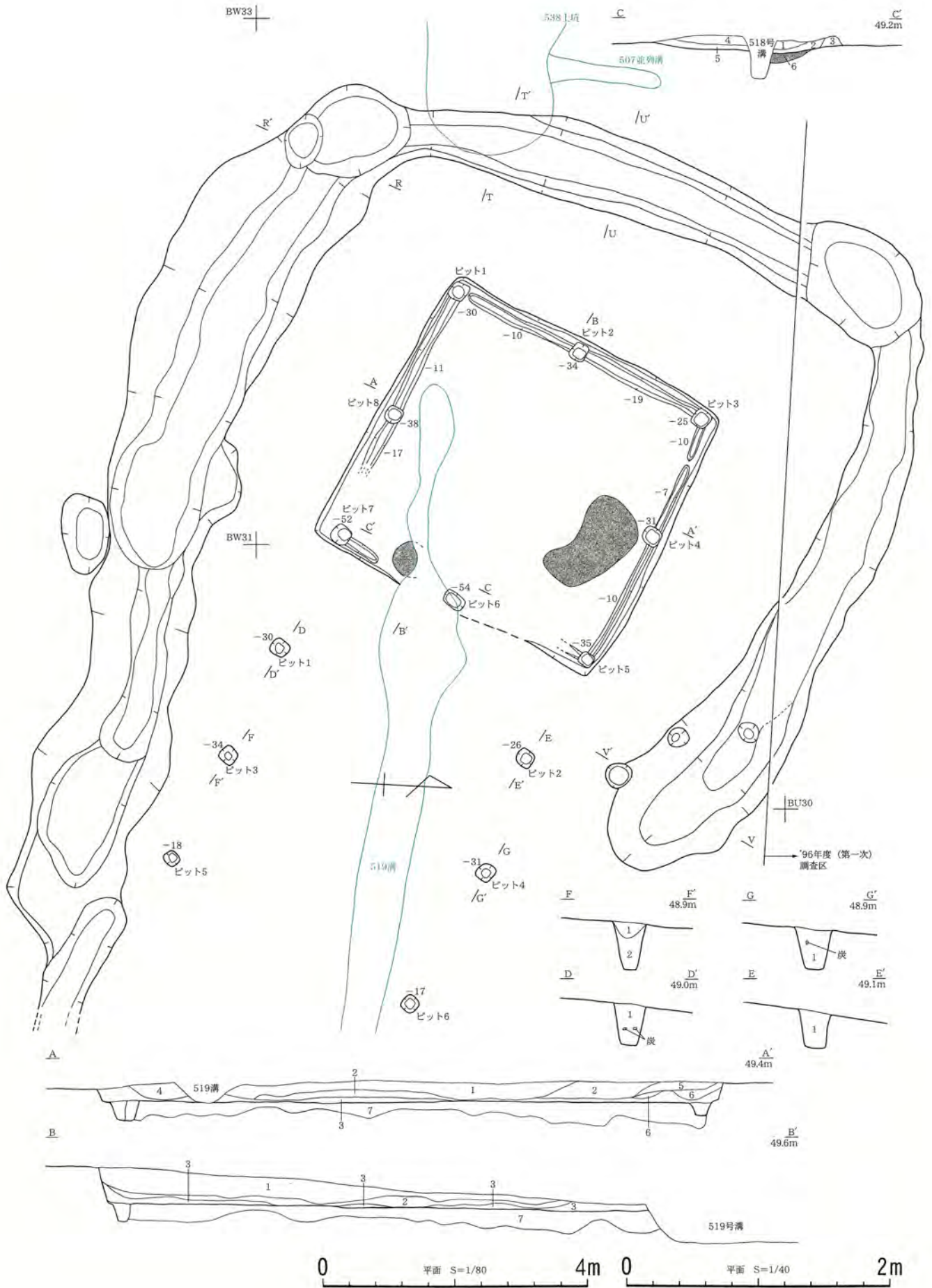


図60 第518号建物跡

第518号建物 竪穴部A・Bライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層塊多量、炭化粒少量混入、かたい (人為体積)
第2層	10YR3/3	暗褐色土	焼土層、炭化粒少量混入、締まり弱い
第3層	10YR2/1	黒色土	炭化材含む、しまりなし
第4層	10YR2/3	黒褐色土	焼土・炭化物少量混入、ややかたい
第5層	10YR1.7/1	黒色土	炭化粒極少量混入、かたい
第6層	10YR2/2	黒褐色土	焼土塊・V層塊極少量混入
第7層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊中量混入、かたい(樹形覆土)

第518号建物 掘立部Fライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入
第2層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒少量混入

第518号建物 掘立部Gライン

第1層	10YR2/1	黒色土	B-Tm塊少量、V層粒・炭化粒極少量混入
-----	---------	-----	----------------------

第518号建物 掘立部Dライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量、炭化粒極少量混入
-----	---------	-----	----------------

第518号建物 掘立部Eライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入
-----	---------	-----	----------

第518号建物 外周溝Pライン

第1層	10YR2/1	黒色土	B-Tm(層上位に)層状に堆積、締まり弱い (1~3層は519建物外周溝堆積土) V層粒・炭化物極少量混入、締まり弱い
第2層	10YR5/6	明黄褐色土	V層粒・焼土塊少量混入、やわらかい
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊中量、炭化物極少量混入、かたい
第4層	10YR2/1	黒色土	V層塊中量、炭化物極少量混入、かたい (4~7層518建物外周溝堆積土)
第5層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、ややかたい
第6層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、かたい
第7層	10YR3/3	暗褐色土	V層塊との混入、かたい

第518号建物 外周溝Rライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	B-Tm層状に体積、炭化物極少量混入、かたい
第2層	10YR2/1	黒色土	焼土塊少量、炭化物極少量混入、かたい
第3層	10YR1.7/1	黒色土	炭化物極少量混入、かたい
第4層	10YR2/1	黒色土	V層粒・炭化物極少量混入、かたい
第5層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒・炭化物極少量混入、かたい
第6層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊多量、炭化物極少量混入、かたい
第7層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊・焼土塊少量混入、かたい
第8層	10YR6/6	明黄褐色土	V層塊の層(崩落土)、かたい
第9層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、かたい
第10層	10YR1.7/1	黒色土	黒褐色土との混入、V層塊極少量混入、かたい
第11層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊中量混入、かたい
第12層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒・焼土粒・炭化物極少量混入、かたい
第13層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第14層	10YR1.7/1	黒色土	黒褐色土との混入、V層塊少量混入、かたい

第518号建物 外周溝Vライン

第1層	10YR2/1	黒色土	B-Tm塊状に混入
第2層	10YR2/1	黒色土	V層少量、焼土粒・炭化物極少量混入、 ややかたい
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒・炭化物極少量混入、かたい
第4層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量、炭化物極少量混入、かたい
第5層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊極少量混入、かたい

第518号建物 カマドCライン

第1層	5YR3/6	暗赤褐色土	焼けた粘土塊主体、焼土粒極少量混入、かたい
第2層	2.5YR4/6	赤褐色土	焼けた粘土塊主体、かたい
第3層	5YR4/8	赤褐色土	焼けた粘土塊主体、かたい(袖)
第4層	10YR3/4	暗赤褐色土	焼けた粘土塊主体、焼土塊少量混入(1層に近似)
第5層	10YR1.7/1	黒色土	Ⅲ層起源の土?やわらかい
第6層	7.5YR4/4	褐色土	床面被熱(火床面)

第519号建物 外周溝Mライン

第1層	10YR2/1	黒色土	かたくしまる
第2層	10YR2/1	黒色土	V層粒・炭化粒少量混入、かたい
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第4層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第5層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒中量混入、かたい

第519号建物 外周溝Nライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層塊・炭化物極少量混入、かたい
第2層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第4層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、かたい
第5層	10YR1.7/1	黒色土	Ⅳ・V層塊少量混入、ややかたい

第518号建物 外周溝Qライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	B-Tm層状に堆積、やややわらかい
第2層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量、炭化物・焼土塊極少量混入、 ややかたい
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒極少量混入
第4層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒・炭化物極少量混入、ややかたい
第5層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量混入、ややかたい
第6層	10YR2/1	黒色土	V層塊少量・炭化物極少量混入、ややかたい
第7層	10YR1.7/1	黒色土	V層・炭化物極少量混入、ややかたい

第518号建物 外周溝Tライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒・塊中量混入、ややかたい
第2層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、ややかたい
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第4層	10YR1.7/1	黒色土	黒褐色土層状に混入、V層粒・炭化粒極少量混入 (水成堆積)
第5層	10YR2/1	黒色土	V層中量混入、ややかたい
第6層	10YR5/8	黄褐色土	黒色土極少量混入、かたい(自然堆積)

第518号建物 外周溝Uライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入、やややわらかい
第2層	10YR2/1	黒色土	黒褐色土塊・V層粒少量混入、やややわらかい
第3層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第4層	10YR2/1	黒色土	V層少量、混入、ややかたい
第5層	10YR2/1	黒色土	V層・黒褐色土少量混入
第6層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第7層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、かたい
第8層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、かたい(8・9層は水成堆積)
第9層	10YR7/6	明黄褐色土	黒色土少量混入、かたい

ている。本遺跡例・松山遺跡例は外周溝・掘立部を、宇田野例は掘立部をそれぞれ伴う建物跡である。なお、これらの炭化材の一部は樹種同定と放射性炭素年代測定を行った。詳しい結果は第VI章を参照されたい。

【柱穴・土坑】壁の4隅とその中間に壁柱穴が、また、竈側の壁際の一部を除き、それらの柱穴をつなぐように周溝が検出された。

【竈】第519号溝跡が真横を通るため、また、竪穴廃絶時の竈破壊行為等により、袖は確認されなかった。火床面は壁際から16cmの位置に、直径約40cm・厚さ約10cmで被熱・赤変した範囲が確認された。

【出土遺物】堆積土中から須恵器鉢破片が出土している。

掘立部

【形態・規模】竪穴部の南東側に1間×2間の掘立柱建物跡を確認した。

【付属施設】無し。【出土遺物】無し。

外周溝

【形態・規模】竪穴部を取り囲むように「コ」の字形に南東方向に開口している。北西・南西コーナーでは一部土坑状の深い部分が見られる。南西辺中央付近から先端方向では溝の深さが浅くなって

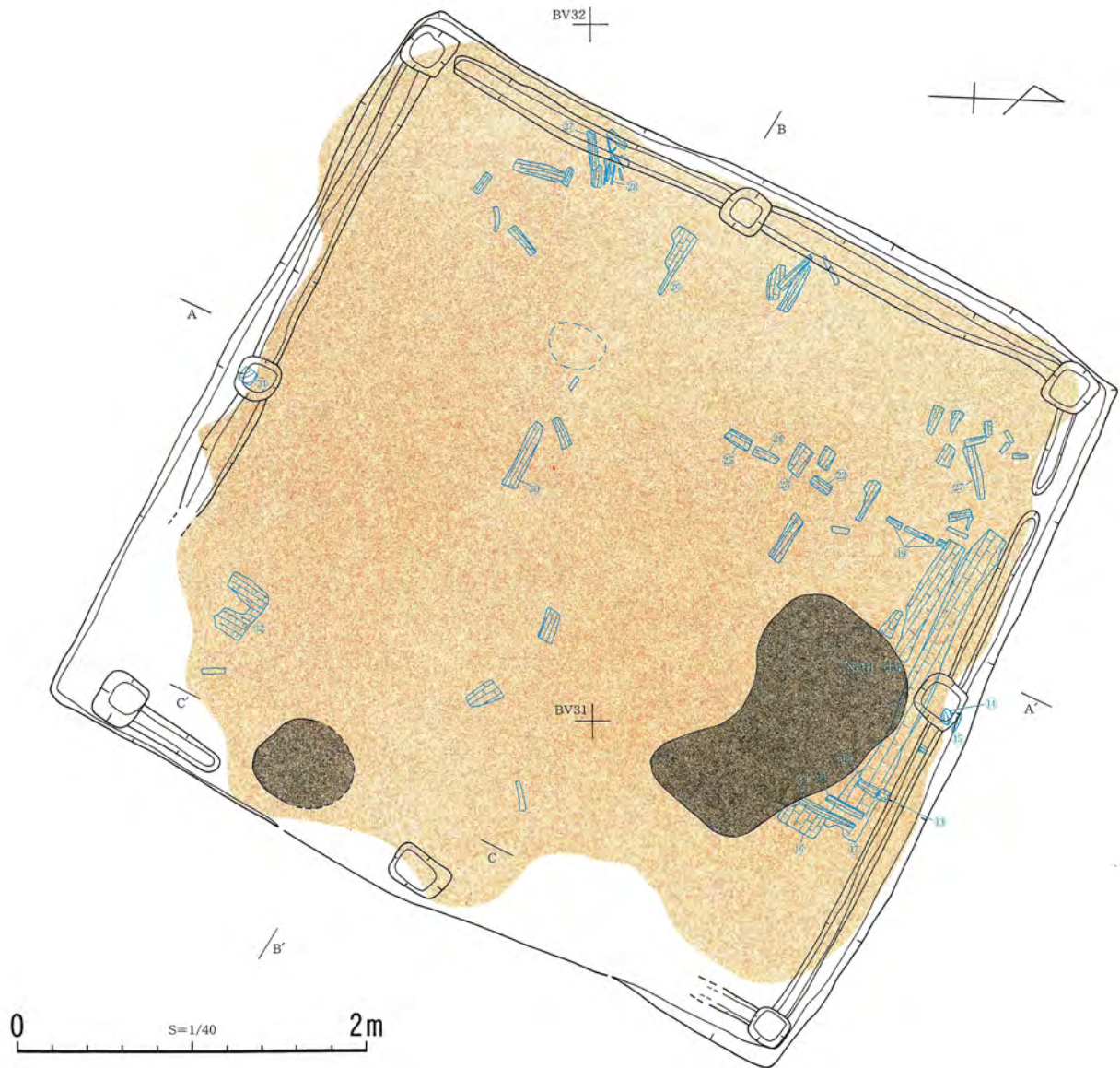


図61 第518号建物跡炭化材出土状況

いる。北西辺及び北東辺の底面には鋤痕が見られた。また、南西辺では、多量の遺物が出土した。遺物や同時に廃棄された粘土・焼土は第538号土坑南脇付近（第519号建物跡外周溝北側部分）から南西辺中央部付近までの範囲で確認できた。よってこれらの遺物は出土状況から第519号建物跡外周溝に伴うものと考えられる。したがって、この部分においては本遺構外周溝がある程度埋まった後にも第519号建物跡外周溝として利用されていたものと考えられる。

【堆積土】北東辺先端部付近では白頭山－苦小牧火山灰が堆積土中位に層状に堆積しているが、北西辺では確認されなかった。南西辺では遺物を包含している層の上位（ほぼ確認面）に白頭山－苦小牧火山灰が層状に堆積していた。なお、南西辺においては遺物と一緒に廃棄された粘土・焼土の層も確認されている。

【付属施設】無し。

【出土遺物】土師器・須恵器・石器等が出土したが、本遺構に確実に伴うもので図示できるものは

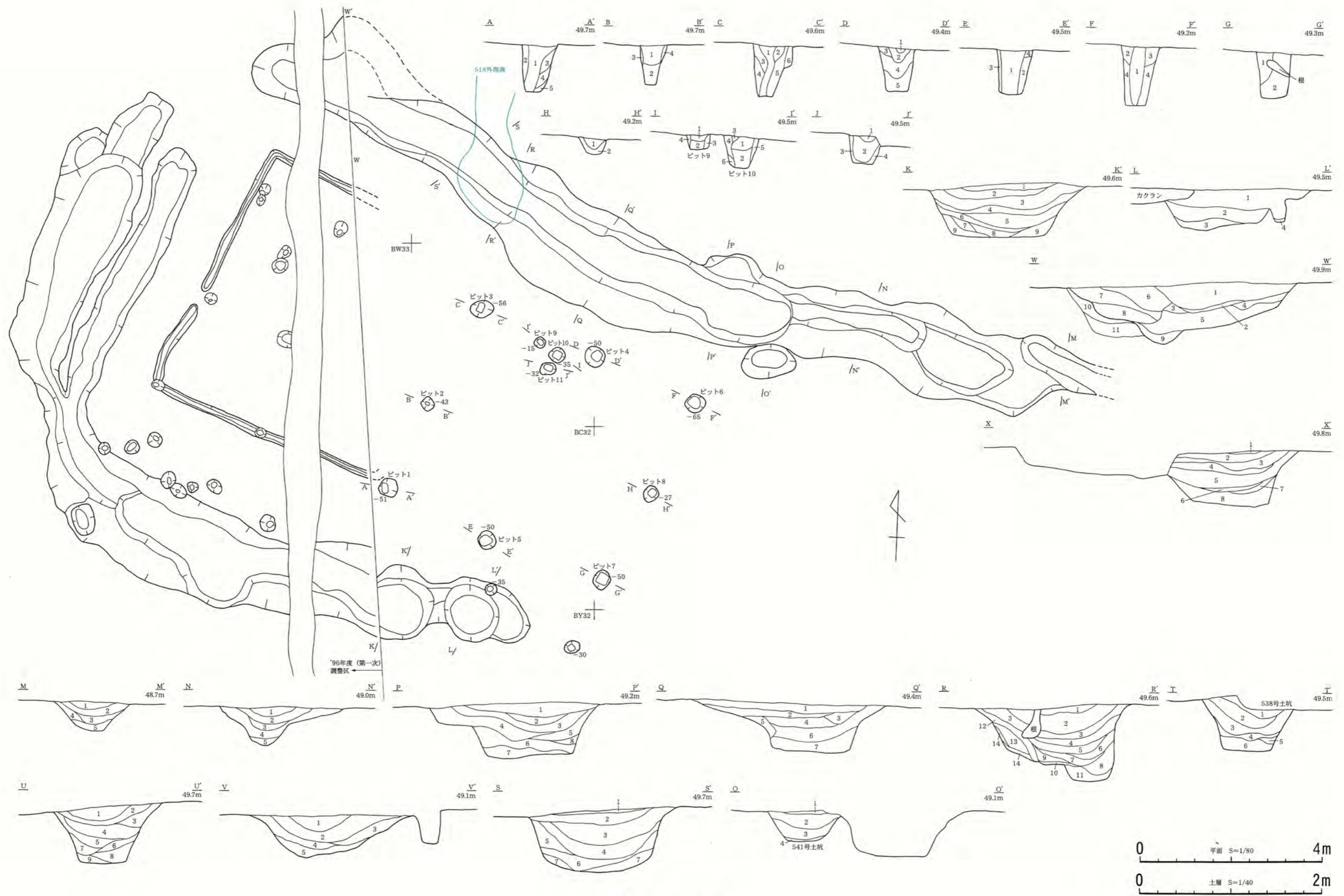


図62 第519号建物跡

ない。

第519号建物跡（図62～66）

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成される。西側半分以上は第1次調査時に第5号建物跡として調査されている。

【位置・確認】 C区BV～BY-29～34グリッドに位置する。Ⅲ層～Ⅴ層面において確認した。

【重複】 第518号建物跡外周溝・第2号溝跡・第538号土坑・第504号並列溝状遺構と重複関係にあり、前者より新しく後3者より古い。

竪穴部

【形態・規模】 平面形は主軸方向5.36m、横軸方向5.8mのほぼ正方形である。主軸方向はN-120.5°-Eである。

【堆積土】 第1回調査区では確認されなかった。第1次調査分は報告書を参照のこと。

【柱穴・土坑】 壁周溝と柱穴が見られる。特に北側では壁周溝より内側に柱穴が並ぶ柱穴配置である。

【竈】 確認されなかった。

【出土遺物】 今回調査部分では遺物は出土していない。第1次調査では土師器・須恵器等が出土している。図は第1次調査報告書参照。

掘立部

【形態・規模】 2間×2間の柱穴配置をもつ長方形の掘立柱建物跡である。軸方向5.2m、横軸方向4.56mを測る。南側のラインを竪穴部南側のラインと、北側のラインを竪穴部北東壁内側の柱穴列のラインと合わせている。ピット4付近には小穴が3つほど（ピット9～11）まとまって存在している。

【堆積土】 明瞭に柱痕と裏込め土が確認される柱穴が多い。

【出土遺物】 無し。

【付属施設】 第540号土坑が伴うものと考えられる。

第540号土坑

【形態・規模】 長軸1.2m、短軸0.72mのほぼ楕円形を呈する。

【壁・底面】 壁はⅤ層で、やや斜めに立ち上がっている。底面もⅤ層で、概ね平坦である。

【堆積土】 3層に分層された。自然堆積と判断される。1層は白頭山-苦小牧火山灰層である。

【出土遺物】 土師器片が出土したが図示し得ない。

外周溝

【形態・規模】 北西コーナーでとぎれているが、竪穴部を「コ」の字形に囲むように南東方向に開口している。南辺先端部には土坑状の深い部分が2箇所認められる。この部分からは遺物がややまとまって出土している。西辺においては溝が二股に分かれている。第518号建物跡外周溝部分でも触れたが、北辺は第518号建物跡外周溝南西辺が埋まりきらない状況で再利用していることが確認された。

【堆積土】 第1次調査区においては堆積土上位に白頭山-苦小牧火山灰の堆積が認められたが、今回調査区においても同様であった。白頭山-苦小牧火山灰層以下は人為堆積の可能性が高い。

【付属施設】 無し。

【出土遺物】 土師器・須恵器が出土している。特に外周溝北側部分では堆積土中～上位から焼土等に伴い多量の遺物が出土している。中でも特筆されるのは表面に「絵画？」のみられる土師器小型甕(34)である。おそらくロクロを使用して器体を成形した後、口縁部から胴部上半と口縁部内面に先

第519号建物 掘立部Aライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒少量混入(柱痕)
第2層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量混入、かたい(2~5層裏込め土)
第3層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒極少量混入、かたい
第4層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒少量混入
第5層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊少量混入

第519号建物 掘立部Bライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量混入、かたい
第2層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒少量混入
第3層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒極少量混入
第4層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量混入

第519号建物 掘立部Cライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入、柱痕
第2層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒・炭化物極少量混入
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒少量混入
第4層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒少量混入(裏込め土)
第5層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒少量混入(裏込め土)

第519号建物 掘立部Dライン

第1層	10YR3/2	黒褐色土	B-Tm塊状に混入
第2層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量混入
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒少量混入
第4層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量混入
第5層	10YR3/3	黒褐色土	V層塊中量混入

第519号建物 掘立部Eライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	柱痕
第2層	10YR2/1	黒色土	V層塊中量混入(2~4層は裏込め土)
第3層	10YR3/4	暗褐色土	V層塊中量混入
第4層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入

第519号建物 掘立部Fライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	しまりなし(柱痕)
第2層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒中量混入(2~4層は裏込め土)
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒中量混入
第4層	10YR2/1	黒色土	V層塊との混入

第519号建物 掘立部Gライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊中量混入(裏込め土)
第2層	10YR2/2	黒褐色土	しまりなし(柱痕)

第519号建物 掘立部Hライン

第1層	10YR2/3	黒褐色土	焼土粒・炭化粒少量混入
第2層	10YR2/1	黒褐色土	V層塊少量混入

第519号建物 掘立部IラインPit9

第1層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量混入
第2層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入
第3層	10YR2/2	黒褐色土	暗褐色土塊・V層粒少量混入(裏込め土)
第4層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒極少量混入(裏込め土)

第519号建物 掘立部IラインPit10

第1層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒少量、炭化粒極少量混入
第2層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒少量、炭化粒・焼土粒極少量混入、かたい
第3層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量混入
第4層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入、やわらかい(裏込め土)
第5層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい(裏込め土)
第6層	10YR5/6	黄褐色土	V層塊、かたい(裏込め土)

第519号建物 外周溝Xライン

第1層	10YR3/3	暗褐色土	B-Tm層状に堆積
第2層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊・炭化物極少量混入
第3層	10YR2/1	黒色土	焼土粒・炭化物極少量混入、やややわらかい
第4層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊・焼土塊少量・炭化物極少量混入、かたい
第5層	10YR2/1	黒色土	V層粒・焼土塊少量、炭化物極少量混入、ややかたい
第6層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊少量混入、かたい
第7層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊・焼土塊少量混入、かたい
第8層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊中量、焼土粒極少量混入、かたい

第519号建物 外周溝Sライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	B-Tm層状に堆積
第2層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒少量混入
第3層	10YR2/1	黒色土	V層塊・焼土粒・炭化粒極少量混入
第4層	10YR2/1	黒色土	V層(砂質・層状)・炭化粒極少量混入
第5層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量
第6層	10YR2/1	黒色土	V層粒・炭化粒極少量混入(水成堆積)
第7層	10YR2/1	黒色土	V層塊との混合土(自然堆積)

第519号建物 外周溝Wライン

第1層	10YR1.7/1	黒色土	やや砂質、しまりなし(1~8・11層は538号土坑堆積土)
第2層	10YR1.7/1	黒色土	Ia~II層主体しまりなし
第3層	10YR1.7/1	黒色土	炭化粒少量混入
第4層	10YR1.7/1	黒色土	粘土小塊層状混入、やわらかい
第5層	10YR3/1	黒褐色土	黒褐色土(砂質)との互層
第6層	10YR2/2	黒褐色土	B-Tm混入(掘り返し)
第7層	10YR2/1	黒色土	V層塊・炭化粒少量混入、やわらかい
第8層	10YR1.7/1	黒色土	炭化粒少量混入、かたい
第9層	10YR1.7/1	黒色土	暗褐色土(砂質)中量混入、かたい、(水成堆積)
第10層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊極少量混入、かたい(10・11層は519建物外周溝堆積土)
第11層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊中量、炭化粒少量混入、かたい

第519号建物 外周溝Kライン

第1層	10YR3/2	黒褐色土	B-Tm層状に堆積、V層粒・炭化粒極少量混入
第2層	10YR2/1	黒色土	V層粒・炭化粒・焼土塊極少量混入
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒・炭化物・焼土塊極少量混入
第4層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒少量混入、かたい
第5層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量、焼土粒・炭化粒極少量混入、かたい
第6層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊極少量混入
第7層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入
第8層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量混入、非常にかたい
第9層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊少量混入、固い

第519号建物 外周溝Lライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒・炭化粒・焼土粒極少量混入
第2層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒・焼土粒極少量混入
第3層	10YR1.7/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第4層	10YR4/3	にじみ黄褐色土	V層主体、黒色土少量混入、非常にかたい
第5層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒極少量混入
第6層	10YR2/1	黒色土	黒褐色土塊・V層粒・焼土粒極少量混入、かたい

第519号建物 掘立部Jライン

第1層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊少量混入
第2層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入、かたい
第3層	10YR3/2	黒褐色土	V層粒少量混入、かたい
第4層	10YR3/1	黒褐色土	V層塊少量混入、かたい

のやや尖った棒状の工具により何らかのモチーフが描かれている。同一個体が第521号建物跡外周溝からも出土している(図71-34)。2つの破片に描かれたモチーフは、連続した螺旋文様が特徴的である。特に口縁部内面の鋸歯状文様や図65-34の外面に描かれた文様に顕著にみられる。残りの文様については現時点では何をイメージしているものか不明である。このように土師器や須恵器の体部等に何らかの意匠が描かれているものは極少量ながらも存在している。本遺跡内でも、第516号建物跡外周溝から出土した土師器の小型甕破片の一部に何らかの意匠が描かれたものが出土している。また、本遺跡に隣接する浪岡町野尻(4)遺跡の平成13年度の調査では、体部にはっきりと馬の絵が描かれている土師器の小型甕が出土している。(浪岡町2002)五所川原市隠川(4)遺跡第6号建物跡においては土師器杯の体部に何らかの意匠が描かれた個体が出土している(青黒埋分報244集)。青森市朝日山(2)遺跡では、遺構外から出土した須恵器鉢の体部に、篋記号と「男根」状の意匠が描かれた個体が出土している。



图63 第518・519号建物跡出土遺物 (518竪穴部・518・518外周溝部分①)



図64 第518・519号建物跡出土遺物（外周溝部分②）

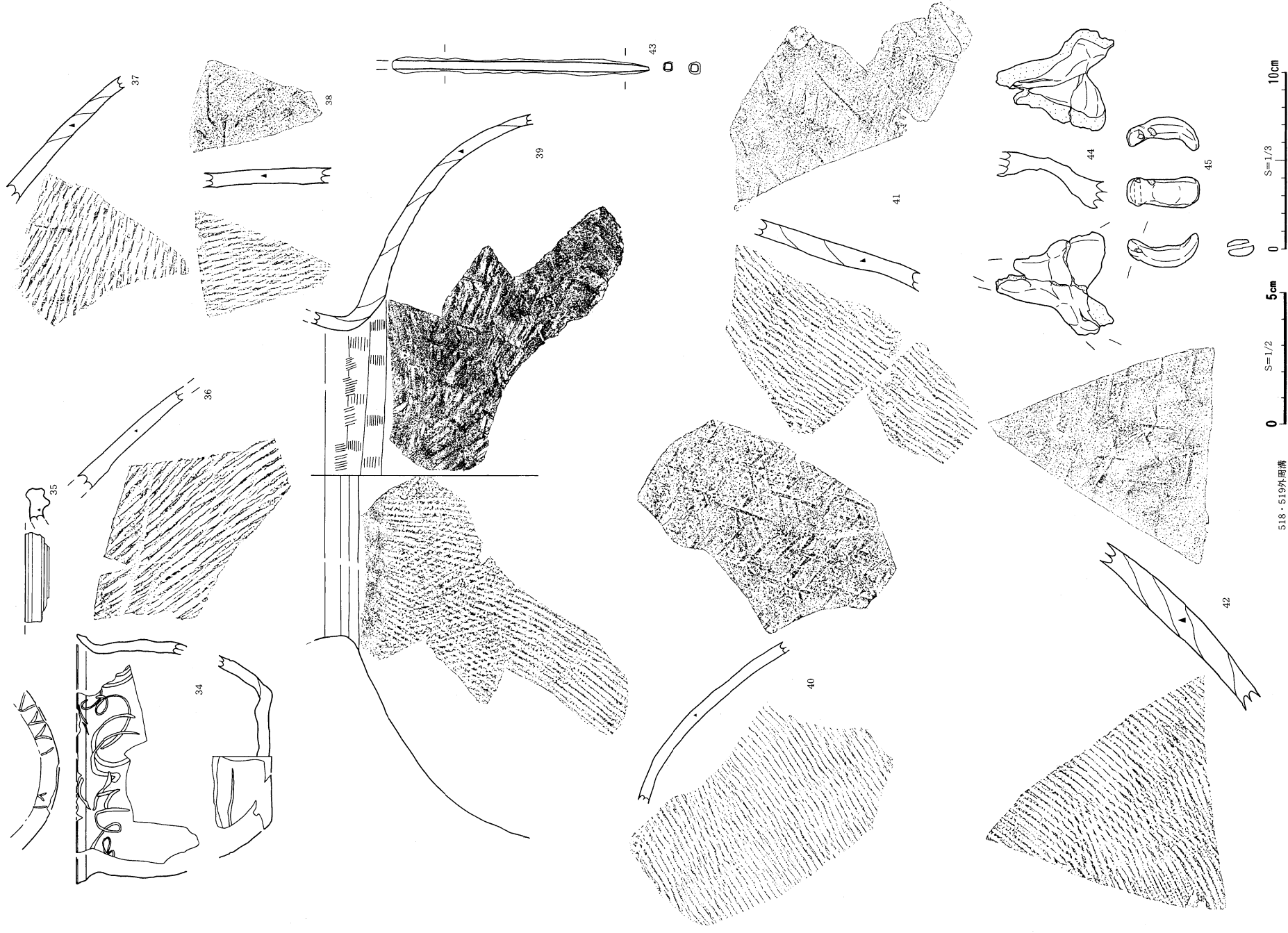


图65 第518・519号建物跡出土遺物（外周溝部分③）

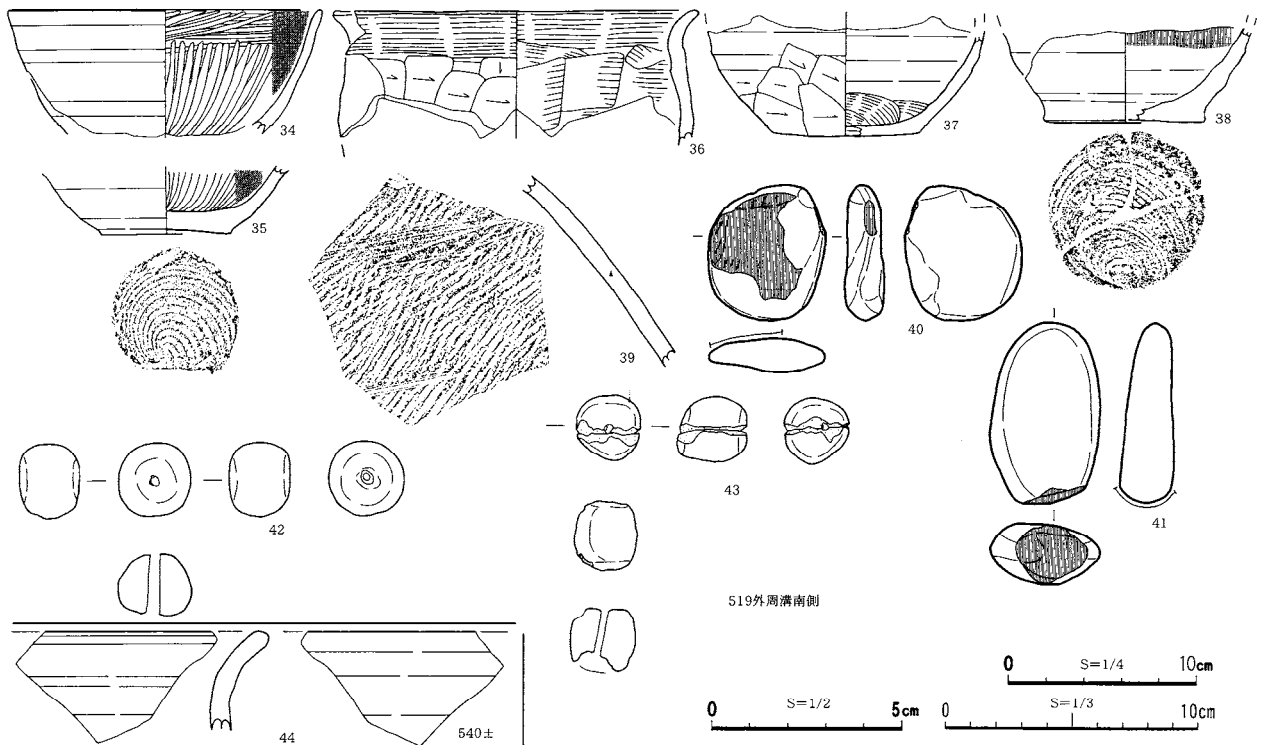


図66 第519号建物跡出土遺物（外周溝北側）

さらに県外に目を転じれば、やや時期は古いが、北海道千歳市ユカンボンC15遺跡のH-31から、須恵器の長頸壺（頸部は欠失）の頸部付け根付近にやはり何らかの意匠が描かれた個体が存在する。この須恵器についてさらにいうならば、内面と外面下半の整形にハケメ（擦文土器のハケメに類似）を使用している点も特異である。ここであげた他にもまだ類例があるだろうし、これらを全て同列に捉えていいものか疑問もあるが、今後古代人の精神世界を知る上で重要な資料となることに間違いはないと考える。

第520号建物跡（図68）

【概要】 竪穴部・外周溝で構成される。北側約半分は第1次調査時に第33号溝跡として調査された。

【位置・確認】 C区北端、BT～BV-25～27グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層面で確認した。

【重複】 第521号建物跡外周溝と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

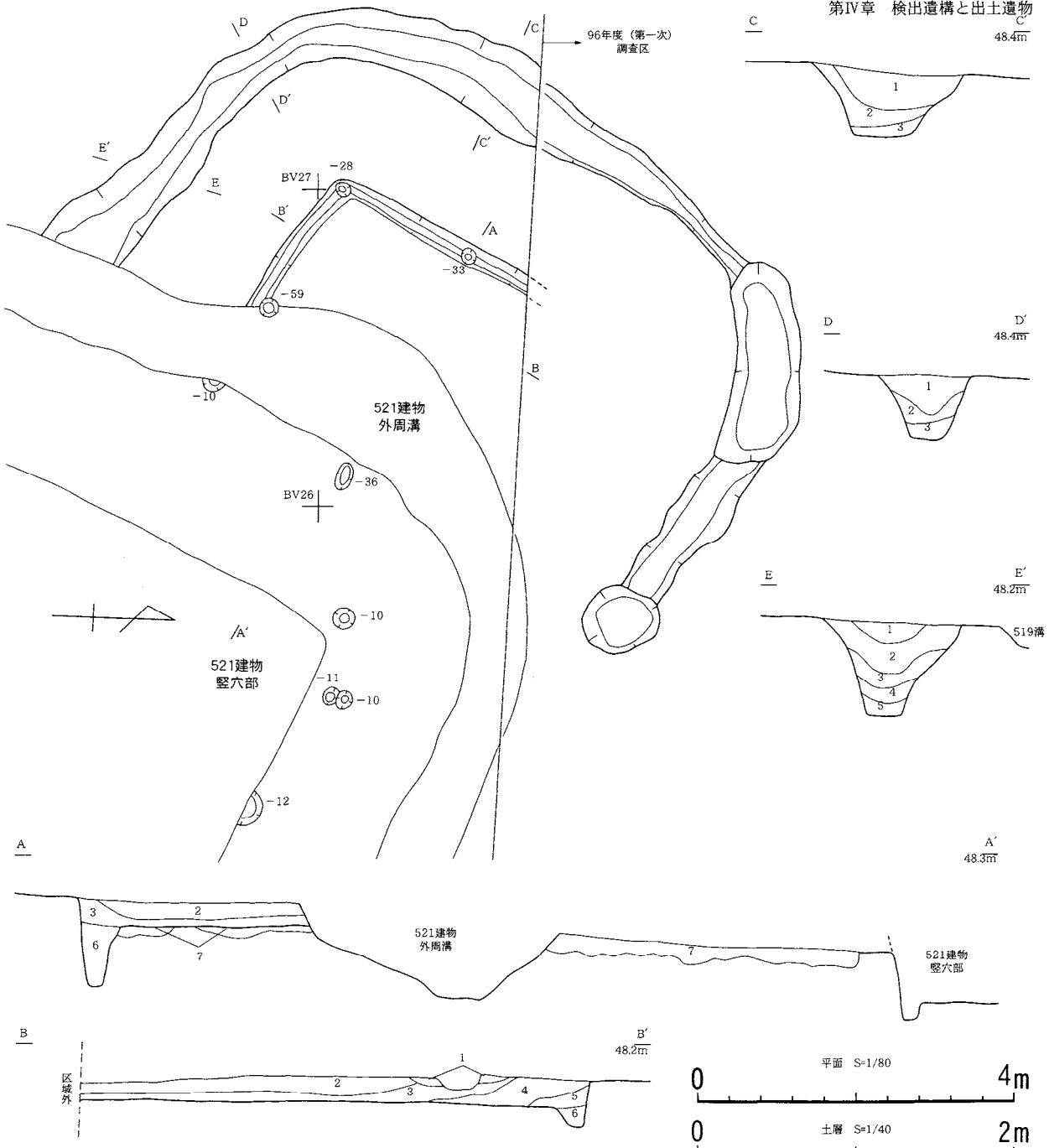
竪穴部

【形態・規模】 第1次調査区においては遺構確認面が低かったため、竪穴部が検出されなかった。今回はその一部を確認できたものの、第521号建物跡外周溝による破壊のため全体形を知ることはできなかった。竈が確認されていないため推定ではあるが、主軸方向はN-120.5°-Eである。

【壁・床面】 壁はⅣ層であり、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面はⅤ層最上面まで掘り込んだ掘形に詰めた土を固めて構築している。貼り床・硬化面は確認されなかった。

【堆積土】 7層に分層された。7層は掘形覆土でありその上面が床面、6層は壁周溝堆積土である。1～5層は概ね自然堆積と考えられる。

【柱穴・土坑】 壁際に周溝と壁柱穴が確認された。



第520号建物 竪穴部 A・Bライン

第1層	10YR5/3	にぶい黄褐色土	焼けた粘土塊層(カマド起源)
第2層	10YR2/3	暗褐色土	V層塊中量混入
第3層	10YR2/2	黒褐色土	暗褐色土塊との混土
第4層	10YR2/3	黒褐色土	V層粒少量、黒色土塊極少量混入
第5層	10YR2/2	黒褐色土	V層粒少量、黒色土との混土
第6層	10YR3/3	暗褐色土	しまりなし、内周溝堆積土
第7層	10YR2/3	黒褐色土	ややシルト質、黒色土との混土(掘形覆土)

第520号建物 外周溝 Cライン

第1層	10YR2/2	黒褐色土	焼土・炭化物極少量混入
第2層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒焼土粒・炭化物、極少量混入
第3層	10YR2/1	黒褐色土	V層粒極少量混入

第520号建物 外周溝 Dライン

第1層	10YR3/1	黒褐色土	V層粒・炭化粒・砂質粘土極少量混入、かたい
第2層	10YR2/1	黒色土	V層・炭化粒・砂質粘土極少量、一部酸化して赤みを帯びている、かたい
第3層	10YR2/2	黒褐色土	V層塊多量混入(自然堆積)

第520号建物 外周溝 Eライン

第1層	10YR2/1	黒色土	V層粒・砂質粘土極少量混入、一部酸化し赤みを帯びる
第2層	10YR2/1	黒色土	V層粒少量混入
第3層	10YR2/1	黒色土	V層粒極少量混入
第4層	10YR2/1	黒色土	V層粒・塊極少量混入
第5層	10YR1.7/1	黒色土	V層塊多量混入、(自然堆積)

図67 第520号建物跡

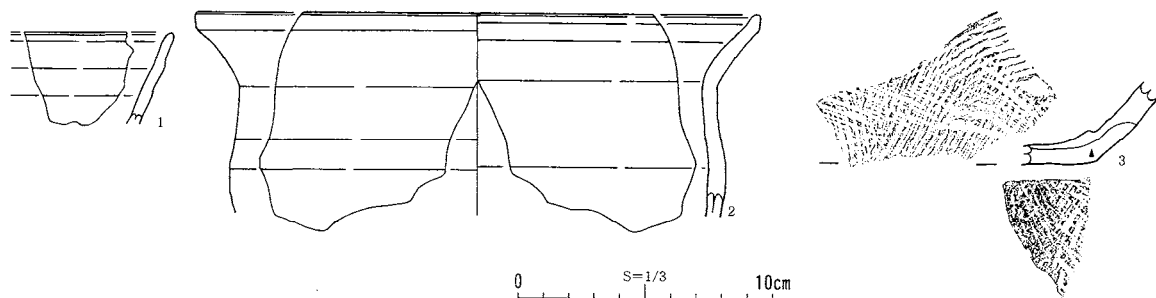


図68 第520号建物跡出土遺物

【出土遺物】土師器坏・土師器甕・須恵器大甕底部破片が出土している。3は須恵器大甕の底部破片である。平底を呈し、体部・底面の外面はタタキにより整形されている。内面は荒いヘラナデが施されている。甕の底部は通常丸底であることを考えると、本資料は非常に興味深い。同様の資料は五所川原市MZ-06須恵器窯跡より出土例がある。

掘立部

【形態・規模】 竪穴部南東側に4基の柱穴を確認した。これらが本建物跡の掘立部になるかどうかは不明である。

外周溝

【形態・規模】 竪穴部を「コ」の字に囲むように南東側に開口している。底面には鋤痕が確認されている。確認面からの深さは約42cm程度である。南西側は先端部に向かって底面がやや広がりながら深くなっている。

【堆積土】 付近に見られるⅡ～Ⅲ層起源の黒色土を主体としている。南西側先端部付近は酸化鉄の沈着が見られ硬く締まっている。最下層にはⅤ層ブロックと黒色土との混土が堆積している。ほぼ自然堆積土と考えられる。

【付属施設】 無し。

【出土遺物】 竪穴部出土遺物に同じ。

第521号建物跡（図69～73）

【概要】 竪穴部・掘立部・外周溝から構成されるが、第541号土坑・第524号溝跡も本遺構に伴うと考えられる。外周溝北コーナー部分は第1次調査において第34号溝跡として調査されている。

【位置・確認】 C区北端、BU～BY-22～26グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。

【重複】 第506号並列溝状遺構、第519号溝跡と重複関係にあり、いずれの遺構よりも古い。また、掘立部東端には農業用水の暗渠が掘られており、外周溝北側先端部には現代の井戸が残されていたためこの部分は破壊されている。

竪穴部

【形態・規模】 平面形は軸方向5.04m、横軸方向6.24mの方形である。主軸方位はN-118° - Eである。

【壁・床面】 壁はⅢ～Ⅳ層であり、ほぼ垂直に立ち上がっている。北東壁で約30cm残存しているが、南東壁では残存していない。床面はⅣ層を掘り込んだ掘形に詰めた土層を固めて構築しており、ほぼ平坦である。貼り床・明瞭な硬化面等は確認されなかった。

【堆積土】 6層に分層された。1層はⅡ層起源の黒色土である。2層には白頭山-苦小牧火山灰がブロック状に混入している。全体的に自然堆積の可能性が高い。

【柱穴・土坑】 主柱穴は竈側の壁に接して2本と、その対辺の壁から内側に寄った状態で2本の合計4本が確認された。ピット1と3の底面には、長方形・溝状に深い部分を確認された。ピット1の堆積土ではその痕跡と柱痕のラインが一致している。ピット3はカマド火床面のすぐ脇で確認されている。4隅の壁際には壁柱穴が確認され、竈側の辺を除き、それらをつなぐように壁周溝が確認された。床面中央部には長軸1.2m・短軸0.64m、深さ約50cmの土坑が確認された。

【竈】 南東壁南寄りに確認された。確認時は粘土が直径約1mの範囲で散乱していた。後世の削平及び竈廃棄時の破壊行為等により袖はほとんど残っていない。火床面右脇には土師器長胴甕が倒立状

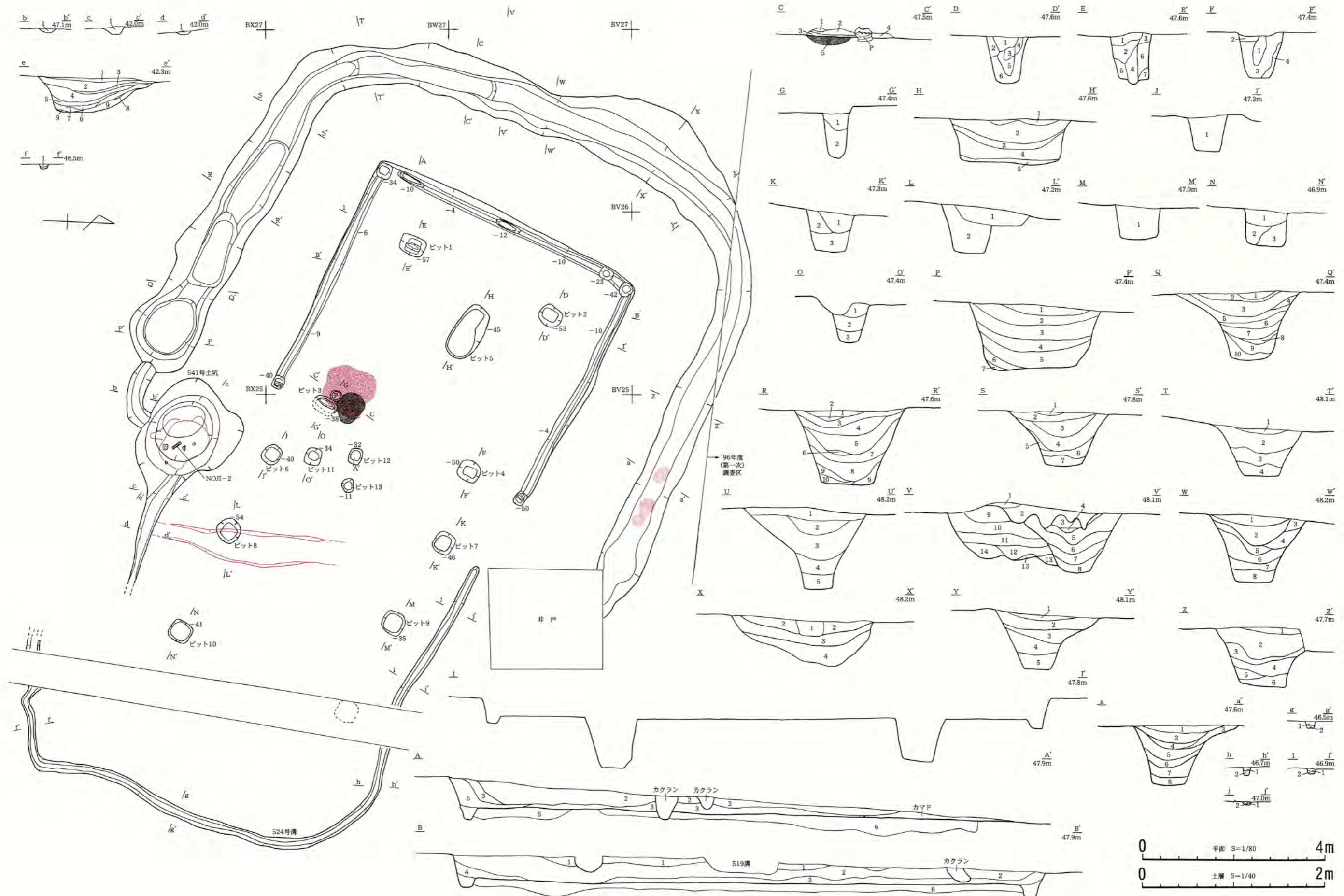


図69 第521号建物跡

第521号建物 竪穴部Aライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 B-Tm少量、塊状に混入、V層粒・焼土塊極少量混入
 第2層 10YR2/3 黒褐色土 V層粒少量、砂質粘土粒・焼土極少量混入
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒少量混入
 第4層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒・白色粘土極少量混入
 第5層 10YR2/1 黒褐色土 砂質粘土中量・V層粒少量混入
 第6層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒少量混入(掘形覆土)

第521号建物 竪穴部内ビットDライン
 第1層 10YR2/1 黒褐色土 しまりなし、柱痕
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒少量混入
 第3層 10YR2/3 黒褐色土 V層粒中量混入(裏込め土の崩落)
 第4層 10YR2/3 黒褐色土 V層塊混入、(裏込め土)
 第5層 10YR2/1 黒褐色土 しまりなし、柱痕
 第6層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊混入、かたい(裏込め土)

第521号建物 竪穴部ビットFライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒少量、柱痕
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 かたい、裏込め土
 第3層 10YR3/3 暗褐色土 V層塊と黒色土の混入(裏込め土)
 第4層 10YR2/1 黒褐色土 IV層崩落土

第521号建物 竪穴部ビットHライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層塊・粒少量、焼土粒・炭化物極少量混入
 第2層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層粒極少量混入
 第3層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊少量混入
 第4層 10YR4/6 褐色土 黒色土との混入(V層主体)

第521号建物 掘立部Kライン
 第1層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒・炭化粒・焼土粒極少量混入、かたい
 第2層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊・焼土粒・炭化粒極少量混入、ややかたい
 第3層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒・炭化物極少量混入、ややかたい

第521号建物 掘立部Oライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入、しまり弱い
 第2層 10YR3/1 黒褐色土 黒色土極少量混入、やわらかい
 第3層 10YR1.7/1 黒褐色土

第521号建物 外周溝Pライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 B-Tm層状に堆積、焼土粒極少量混入
 第2層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊少量、焼土粒極少量混入
 第3層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊少量混入
 第4層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊少量、炭化粒・焼土塊極少量混入
 第5層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層粒少量、炭化粒・焼土粒極少量混入、やわらかい
 第6層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊少量混入、かたい
 第7層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊少量、かたい

第521号建物 外周溝Rライン
 第1層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒・炭化物極少量混入、酸化鉄一部に沈着
 第2層 10YR3/1 黒褐色土 B-Tm塊状に混入
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 B-Tm層状に堆積
 第4層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒極少量混入
 第5層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層塊極少量混入
 第6層 10YR2/1 黒褐色土 焼土層状に堆積(廃棄土)、V層粒極少量混入
 第7層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒極少量混入
 第8層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層塊少量混入
 第9層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊少量混入、かたい(水成堆積)
 第10層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層塊少量混入、やわらかい(水成堆積)

第521号建物 外周溝Tライン
 第1層 10YR2/3 黒褐色土 B-Tm層状に堆積、鉄分沈着
 第2層 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒極少量混入、鉄分沈着
 第3層 10YR2/1 黒褐色土 焼土粒少量、炭化粒極少量混入
 第4層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊との混入(水成堆積)、炭化粒少量混入

第521号建物 外周溝Vライン
 第1層 10YR2/1 黒褐色土 II層の被覆
 第2層 10YR2/1 黒褐色土 II層の被覆、焼土粒極少量混入、鉄分沈着
 第3層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊極少量(3~8層は521建物外周溝堆積土)
 第4層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊極少量
 第5層 10YR2/1 黒褐色土 暗褐色土との互層
 第6層 10YR2/1 黒褐色土 暗褐色土との互層、V層粒極少量混入
 第7層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊少量混入
 第8層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊極少量混入
 第9層 10YR2/1 黒褐色土 暗褐色土塊・焼土粒極少量混入(9~14層は520建物外周溝堆積土)
 第10層 10YR2/1 黒褐色土 5YR4/8焼土1%、炭化粒少量混入
 第11層 10YR2/1 黒褐色土
 第12層 10YR2/1 黒褐色土 V層極少量混入
 第13層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊少量混入
 第14層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊との混入

第521号建物 外周溝Yライン
 第1層 10YR3/1 黒褐色土 B-Tm塊状に混入
 第2層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒・炭化粒極少量混入
 第3層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒極少量混入
 第4層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊・焼土粒極少量混入
 第5層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層塊・焼土塊極少量混入、かたい

第521号建物 外周溝aライン
 第1層 10YR2/1 黒褐色土 B-Tm層状に堆積
 第2層 10YR2/1 黒褐色土 褐色土少量、炭化粒極少量混入
 第3層 10YR2/1 黒褐色土
 第4層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒極少量混入、焼土層状に堆積(廃棄土)
 第5層 10YR2/1 黒褐色土 炭化粒極少量混入
 第6層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒・炭化粒極少量混入
 第7層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊極少量混入
 第8層 10YR2/1 黒褐色土 黒褐色土塊・V層塊少量混入

第521号建物 外周溝g~jライン
 第1層 10YR2/1 黒褐色土 砂質土中量混入、ややかたい
 第2層 10YR2/2 黒褐色土

第541号土坑 b~c・fライン
 1層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒少量混入

第521号建物 竪穴部カマドCライン
 第1層 10YR3/2 黒褐色土 炭化物・焼土粒少量混入
 第2層 7.5YR4/6 褐色土 袖崩落土、焼土塊少量混入、かたい
 第3層 7.5YR3/4 暗褐色土 黒色土極少量混入、焼土粒少量混入(カマド堆積土)
 第4層 10YR2/2 黒褐色土 炭化粒・焼土粒極少量混入(袖崩落土)
 第5層 5YR4/8 赤褐色土 火床面

第521号建物 竪穴部内ビットEライン
 第1層 10YR2/3 黒褐色土 V層粒少量混入
 第2層 10YR3/2 暗褐色土 焼土粒・V層粒中量混入(裏込め崩落土)
 第3層 10YR2/1 黒褐色土 砂質粘土層
 第4層 10YR2/1 黒褐色土 しまりなし、柱痕
 第5層 10YR3/3 暗褐色土 V層と黒色土の混入、かたい(裏込め土)
 第6層 10YR3/1 黒褐色土 IV層とIII層の混入、かたい(裏込め土)
 第7層 10YR3/1 黒褐色土 IV層塊主体

第521号建物 竪穴部ビットGライン
 第1層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒・焼土極少量混入、やわらかい
 第2層 10YR2/1 黒褐色土 V層極少量混入、やわらかい

第521号建物 掘立部Jライン
 第1層 10YR2/3 黒褐色土 上部にV層粒少量混入

第521号建物 掘立部Lライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入、かたい(溝堆積土)
 第2層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒・炭化粒極少量混入、かたい

第521号建物 掘立部Mライン
 第1層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒・炭化粒極少量混入

第521号建物 掘立部Nライン
 第1層 10YR2/3 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入、かたい
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒極少量混入、かたい
 第3層 10YR2/3 黒褐色土 V層粒・塊極少量混入、かたい

第521号建物 外周溝Qライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 506並列溝堆積土
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 B-Tm層状に堆積、一部酸化
 第3層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入、一部酸化
 第4層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層粒極少量混入
 第5層 10YR1.7/1 黒褐色土 IV層塊、炭化粒少量混入、焼土層状に堆積
 第6層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層粒極少量混入
 第7層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層粒極少量混入
 第8層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層塊少量混入
 第9層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層塊少量混入
 第10層 10YR1.7/1 黒褐色土 砂質のV層との混入(水成堆積)

第521号建物 外周溝Sライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 V層粒・B-Tm塊極少量混入、一部鉄分沈着
 第2層 10YR3/2 黒褐色土 B-Tm層状に堆積
 第3層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入、鉄分沈着
 第4層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊・焼土粒極少量混入、鉄分沈着
 第5層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入
 第6層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層塊少量混入
 第7層 10YR7/4 黄褐色土 V層主体、黒色土少量混入(水成堆積)

第521号建物 外周溝Uライン
 第1層 10YR1.7/1 黒褐色土 II層の被覆?
 第2層 10YR1.7/1 黒褐色土 B-Tm層状に堆積
 第3層 10YR1.7/1 黒褐色土 暗褐色土との互層、炭化粒少量混入
 第4層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層塊極少量混入混入
 第5層 10YR6/8 明黄褐色土 V層塊に黒色土混入(水成堆積)

第521号建物 外周溝Wライン
 第1層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・塊少量、焼土塊・炭化粒極少量混入、(1~2層塊状)
 第2層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊少量、焼土粒・炭化粒極少量混入
 第3層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入
 第4層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入
 第5層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入
 第6層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒極少量、鉄分沈着、かたい
 第7層 10YR3/1 黒褐色土 V層粒・炭化粒極少量混入、かたい
 第8層 10YR1.7/1 黒褐色土 V層塊少量、混入、かたい(水成堆積)

第521号建物 外周溝Xライン
 第1層 10YR3/2 黒褐色土 V層塊・焼土塊極少量混入、やわらかい
 第2層 10YR3/1 黒褐色土 B-Tm層状に堆積、V層粒極少量混入
 第3層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒・焼土粒極少量混入
 第4層 10YR3/1 黒褐色土 V層塊・焼土塊極少量混入、やわらかい

第521号建物 外周溝Zライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 B-Tm層状に堆積
 第2層 10YR2/1 黒褐色土 炭化粒極少量混入
 第3層 10YR2/1 黒褐色土 焼土塊少量混入(廃棄土)
 第4層 10YR2/1 黒褐色土
 第5層 10YR4/6 褐色土 崩落土
 第6層 10YR2/1 黒褐色土 V層塊との混入

第541号土坑 eライン
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 B-Tm層状に堆積
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 V層極少量混入
 第3層 10YR6/6 明黄褐色土 V層塊少量混入、焼けた粘土混入(カマド粘土起源の廃棄粘土層)
 第4層 10YR1.7/1 黒褐色土 黒褐色土極少量混入(自然堆積?)
 第5層 10YR2/1 黒褐色土 砂質土との互層(水成堆積)
 第6層 5YR4/4 赤褐色土 焼土層(廃棄土)
 第7層 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物極少量混入、ややかたい(水成堆積?)
 第8層 10YR2/1 黒褐色土 V層粒少量混入、かたい
 第9層 10YR4/6 褐色土 V層塊主体、黒色土少量混入、かたい

態でおかれていた。おそらく袖の芯材に使われたものと考えられる。火床面は壁ラインから約16cm内側にあり、直径約50cmの範囲が厚さ約10cmで皿状に赤変していた。

[出土遺物] 土師器坏・長胴甕・須恵器坏・壺・甕・筒状鉄製品・鉄鏃等が出土している。

堀立部

[形態・規模] 竪穴部南東側に8本の柱穴を確認した。そのうちピット6～10は形状・規模ともに類似しているので掘立柱建物跡を構成する柱穴であると判断している。東側を暗渠が走っているために、おそらく柱穴が1本欠落していると考えられる。したがって平面形はほぼ正方形を呈し、1間×2間の柱穴配置であると考えられる。ピット6・7間は4.24m、ピット6・10間は4.4mである。

[堆積土] 柱痕・裏込め土等は見られなかった。

[付属施設] 無し。

[出土遺物] 無し。

外周溝

[形態・規模] 竪穴部を「コ」の字形に取り囲むように南東側に開口している。南西側先端部では、土坑状の1段深い部分が見られ、さらにその先端には第541号土坑が位置している。外周溝先端部と第541号土坑は浅く狭い溝で連結されており、土坑の東側からも浅く狭い溝が流れ出ている。掘立部北～東側にかけては第524号溝跡が巡っている。この溝跡の北西端は竪穴部北東壁の内周溝を延長した位置で検出され、南端は暗渠により破壊されているため不明であるが、先述した第541号土坑東側に延びる溝に繋がる可能性がある。外周溝本体の底面には土坑状掘り込みの部分以外で鋤痕が見られた。

[堆積土] ほぼ全面の堆積土上位から中位に白頭山－苦小牧火山灰が層状に堆積している。白頭山－苦小牧火山灰層以下からは、特に北西辺・南西辺付近で遺物がややまとまって出土している。北東辺・南西辺先端部付近では廃棄された焼土層が見られる。したがってこれらの層は自然堆積と人為堆積の混合したものと考えられる。

[出土遺物] 土師器皿・坏・長胴甕・埴、須恵器坏・鉢・甕、中空土製支脚、鉄製品（刀子）等が出土している。土師器小型甕34は第519号建物跡外周溝出土の図65－34と同一個体である。口縁部内面と外面胴部には絵画的な意匠が描かれている。

[付属施設] 第541号土坑・第524号溝跡が本遺構に付属すると考えられる。

第541号土坑

[形態・規模] 土坑部分と溝部分からなる。土坑部分は上場で長軸2.96m、短軸2.4mのいびつな円形を呈し、下場で直径約1.2mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは約80cmである。溝部分は幅約20cm、確認面からの深さ約10～20cmである。

[底面] 断面形は壁際がやや丸みを帯びる鍋底のような形状であり、底面は概ね平坦である。

[堆積土] 土坑部分は9層に分層された。1層は白頭山－苦小牧火山灰層である。堆積土中位には竈起源の粘土・焼土・炭化物等が廃棄されており（3層）、その上位から多くの遺物が出土している。3層から出土した炭化物は放射性炭素年代測定にかけられ、補正14C年代で 1140 ± 40 ybpの値を得た。（第VI章1節参照）また、堆積土下位（6層）にも焼土が層状に堆積していた。

[出土遺物] 2層・9層から土師器坏・長胴甕、須恵器坏が出土している。

第524号溝跡

[形態・規模] 幅約30cm・深さ16cmの溝が掘立部の北～東側を取り囲むように位置している。北辺は竪穴部北東壁のラインの延長線上に位置している。

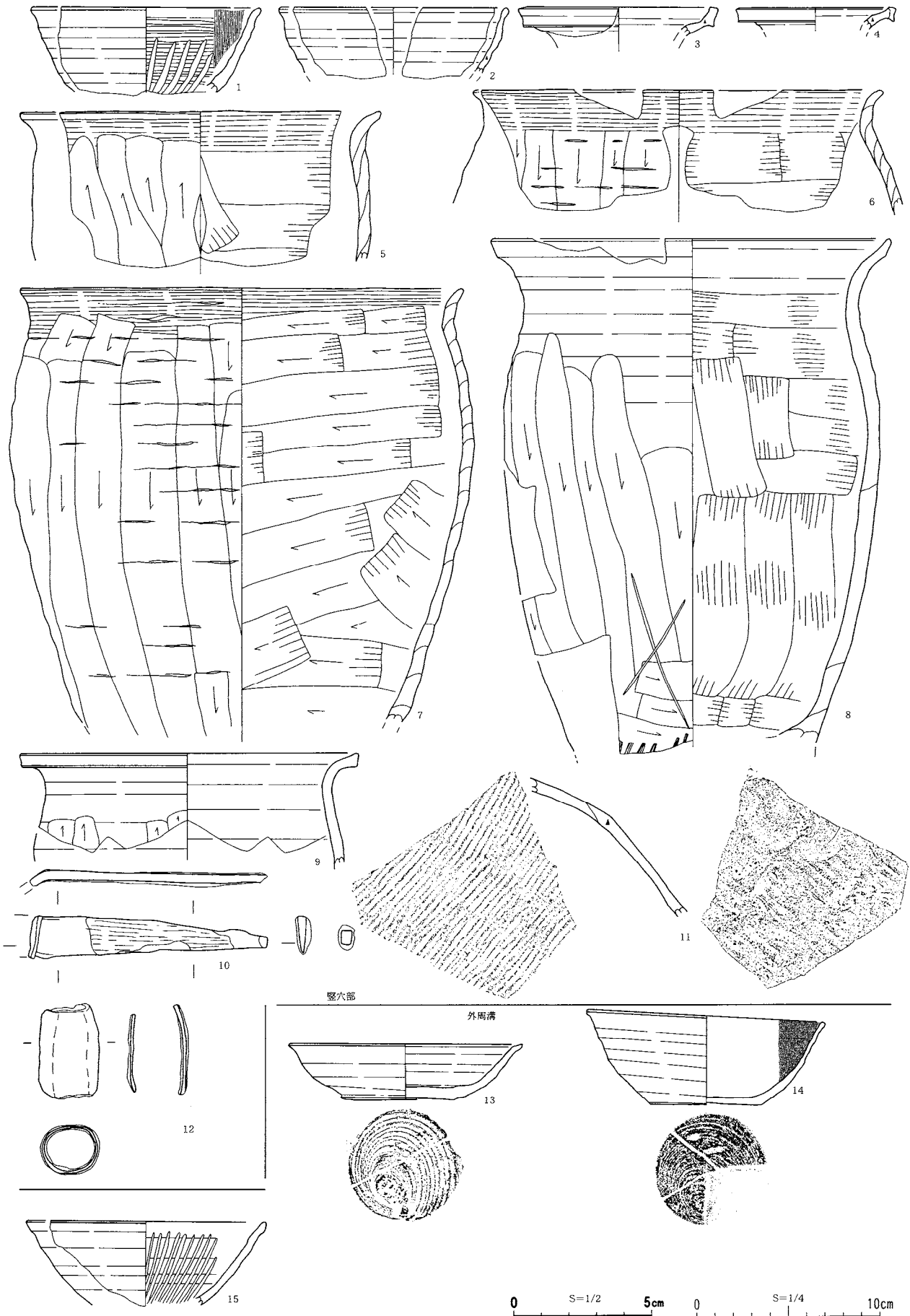


図70 第521号建物跡出土遺物（縦穴部①・外周溝①）

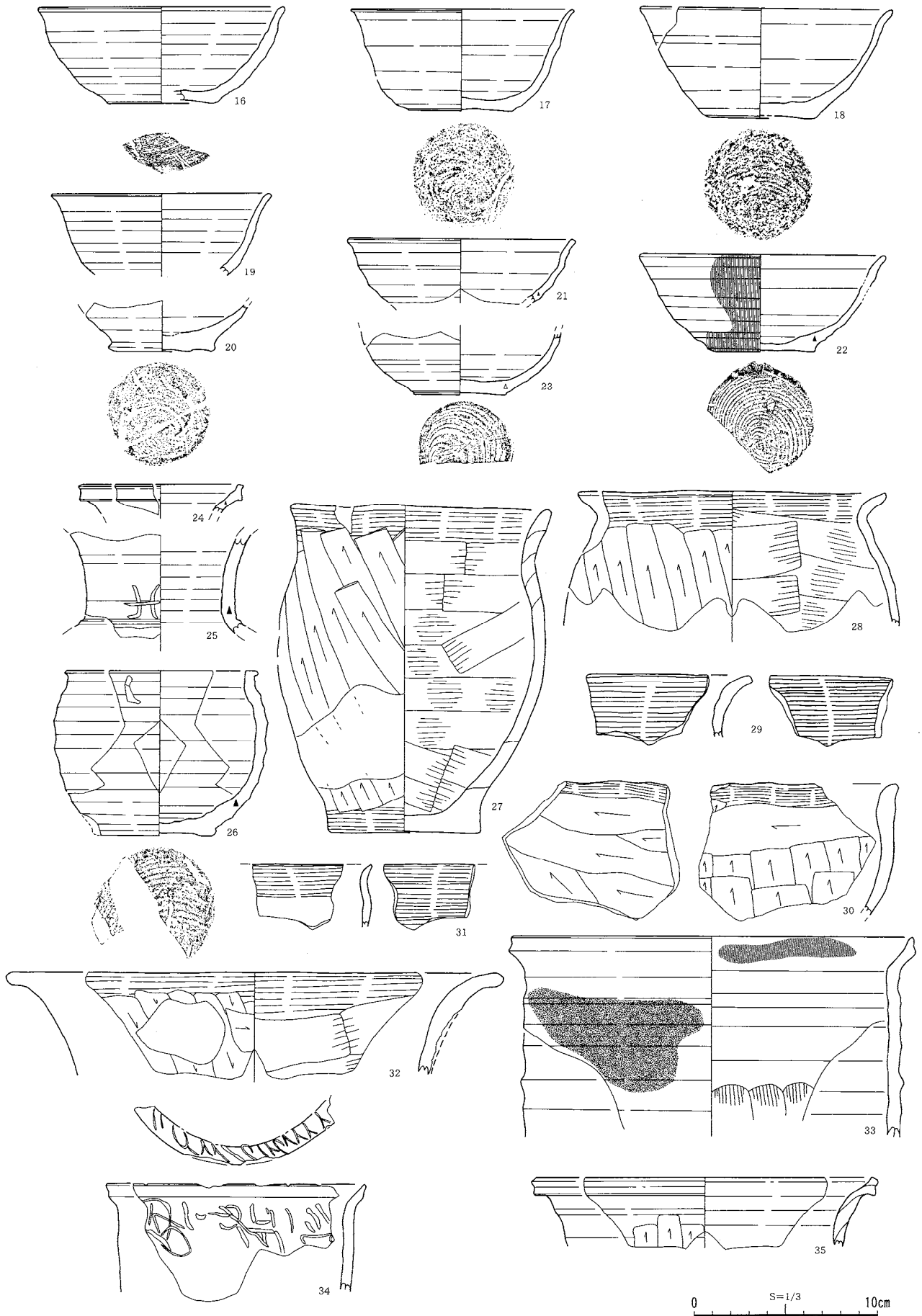


图71 第521号建物跡出土遺物（外周溝部分②）

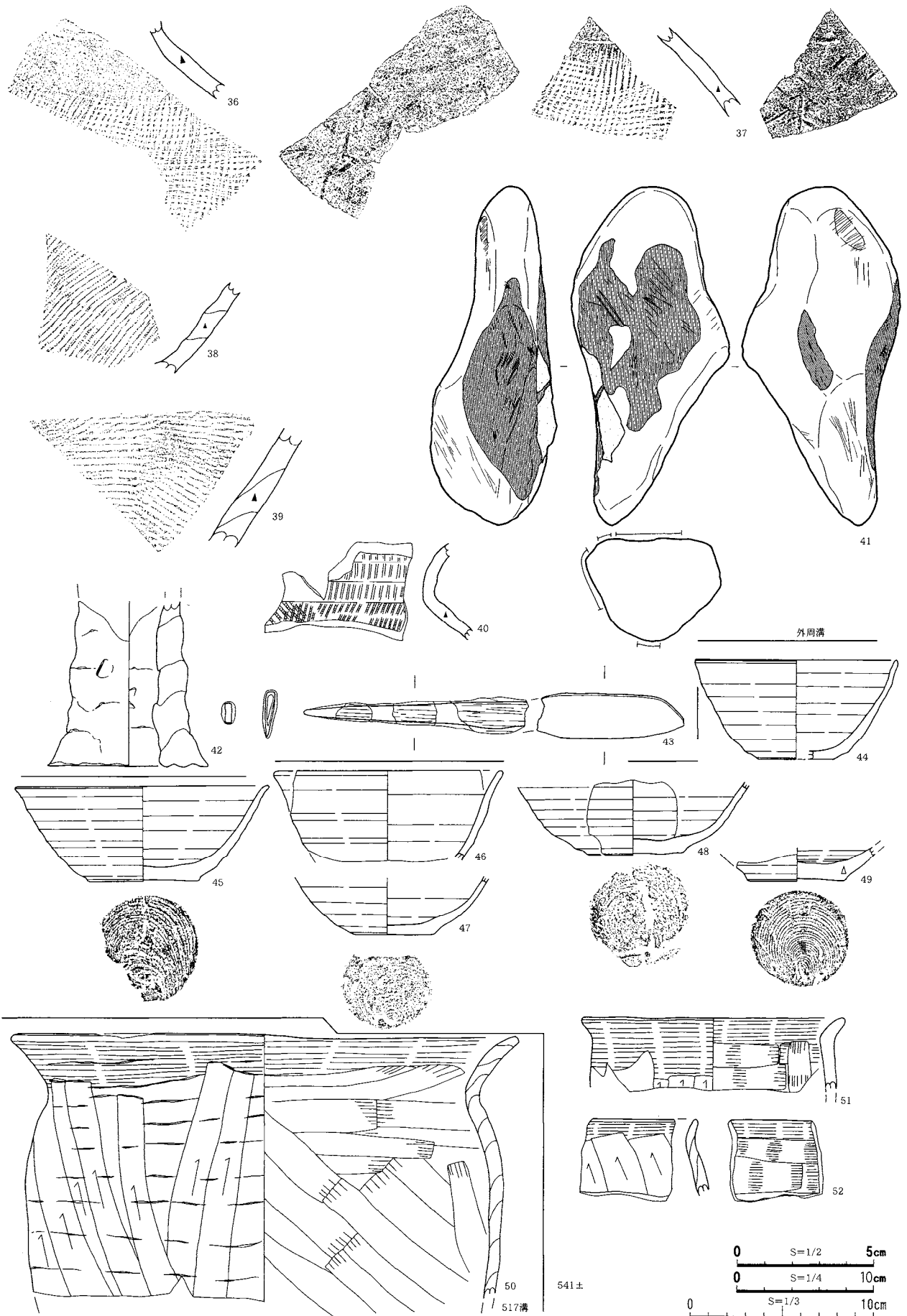


图72 第521号建物跡出土遺物（外周溝部分③・541号土坑①）

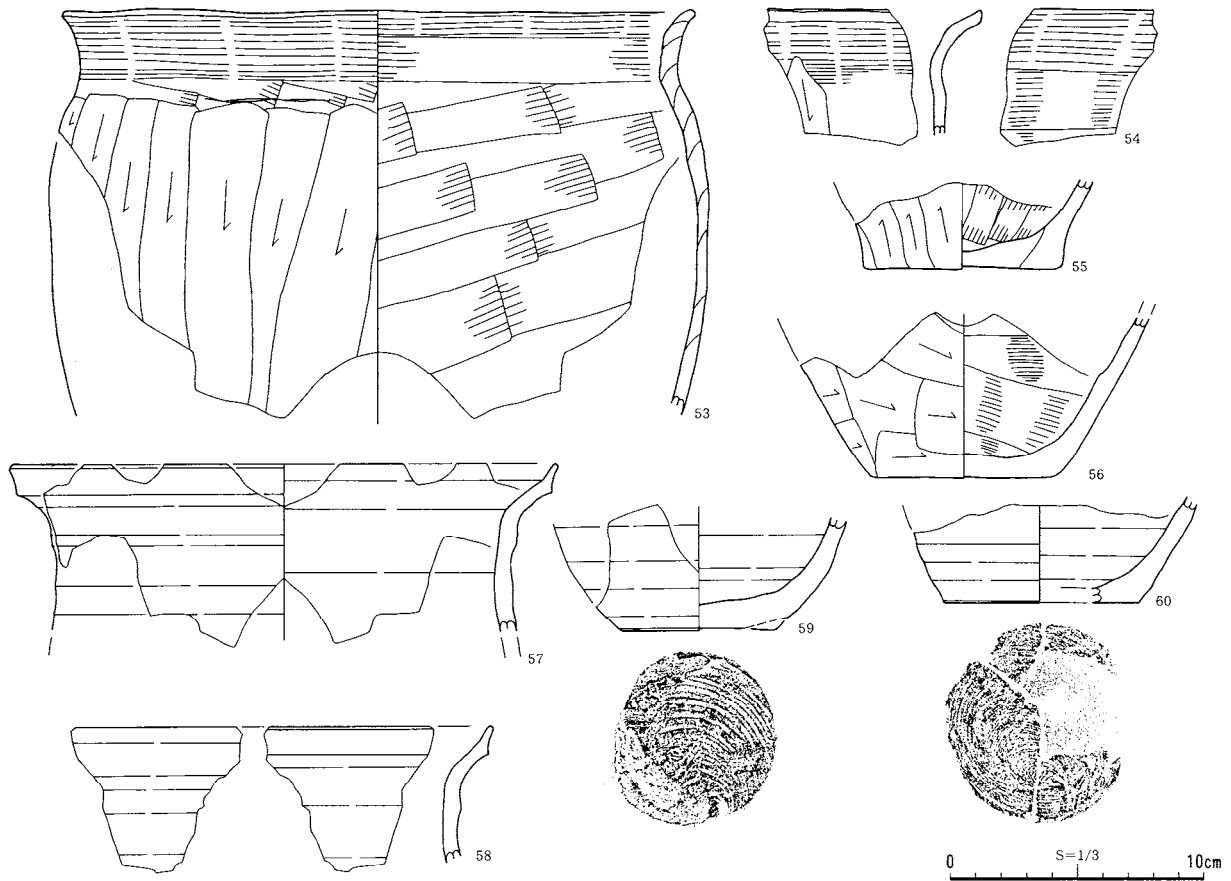


図73 第521号建物跡出土遺物 (541号土坑②)

[堆積土] Ⅲ層起源の黒色土を主体としている。自然堆積と考えられる。

[出土遺物] 土師器甕の破片が出土している。

2 土坑跡

第507号土坑 (図74)

【位置・確認】 BF-24グリッドに位置する。IV層中で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模】 長軸約1.4m×短軸約0.6mの楕円形を呈する。確認面からの深さは約15cmである。

【壁・底面】 壁は外傾しながら立ち上がり、底面は平坦である。底面付近で36×26cmの楕円形の範囲で炭が検出されている。IV層を壁、底面とする。

【堆積土】 II～III層起源の黒色土を主体とする単層である。自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】 なし。

【小結】 正確な構築時期は不明だが、第510・510A号建物跡に伴う可能性もある。

第508号土坑 (図74・78)

【位置・確認】 BF-25グリッドに位置する。IV層中で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模】 平面形は長軸約2.1m×短軸約1.5mのいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは約15cmである。

【壁・底面】 壁は外傾しながら立ち上がり、底面はおおむね平坦である。底面北側にピット2・3、南側にピット1が見られる。いずれもほぼ平坦な底面から、やや内湾して立ち上がる。

【堆積土】 黒褐色土を主体とし、3層に分層した。3層には炭化物・焼土が少量混入している。堆積状況は不明。ピット1は暗褐色土を主体とする単層で炭化物を少量含む。ピット2は黒褐色土を主体として4層に分層された。炭化物を少量含む。IV～V層を壁、底面とする。ピット部分は人為堆積の可能性が高い。

【出土遺物】 土玉が1点出土した (図78)。穿孔部分周辺が平らになる俵形を呈する。

【小結】 正確な構築時期は不明だが、第510・510A号建物跡に付随する可能性もある。

第511号土坑 (図74)

【位置・確認】 BF-24グリッドに位置する。IV～V層で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模】 平面形は長軸約1.5m×短軸約1.0mのいびつな楕円形を呈し、確認面からの深さは約30cmである。

【壁・底面】 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面には楕円形のくぼみがある。IV層を壁、IV～V層を底面とする。

【堆積土】 暗褐色土を主体として4層に分層した。堆積状況は不明である。

【出土遺物】 無し。

【小結】 正確な構築時期は不明だが、第510・510A号住居に付随する可能性もある。

第513号土坑 (図74・78)

【位置・確認】 BC-19グリッドに位置する。II層を掘り下げた後、III層上面で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模】 平面形は長軸1.1m×短軸0.8mのいびつな楕円形を呈する。確認面からの深さは20cm

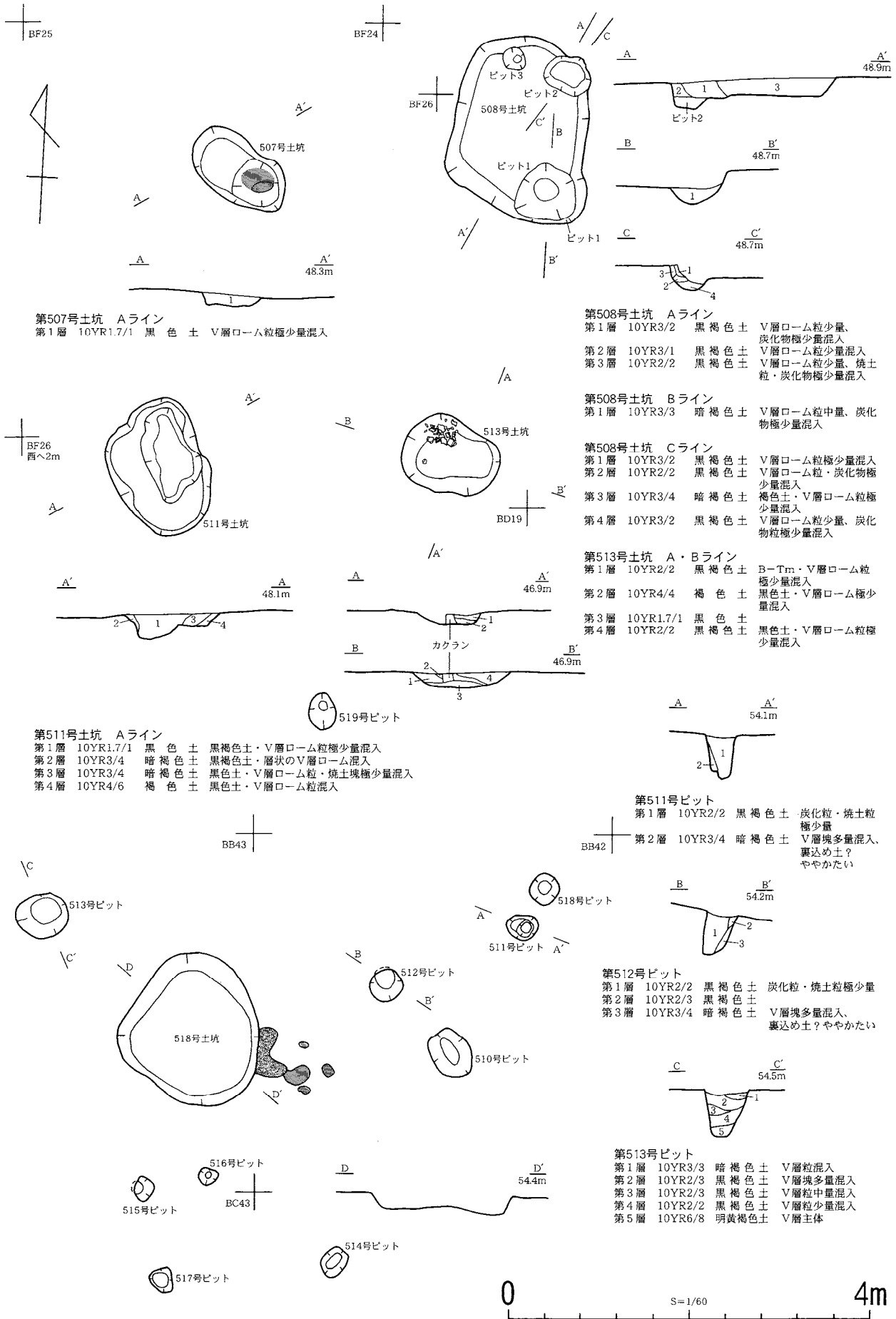


図74 第507・508・511・513・518号土坑、第510～519号ピット

である。

【壁・底面】壁は底面から外傾し、底面はほぼ平坦である。Ⅲ層を壁および底面とする。

【堆積土】黒褐色土を主体として4層に分層される。堆積状況は不明。

【出土遺物】底面北側で土師器甕が出土した（図78）。

【小結】確認状況などから、第513号建物跡に付随する可能性もある。

第518号土坑（図74・78）

【位置・確認】A区東側、BB-43グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層で確認した。

【重複】重複関係はないが、周辺には柱穴跡（510～519号）が存在する。また、土坑東縁には焼土が確認されている。

【形態・規模】土坑部分は1辺約1.5mのいびつな隅丸方形を呈する。確認面からの深さは約20cmである。焼土部分は30cm×40cmの範囲で不整形な広がりを見せる。周辺に展開する柱穴は規模、形態共に様々であり、さらに柱穴であるか疑問なものもある。ここでは図を提示するにとどめる。

【壁・底面】壁・底面はⅤ層を掘り込んでおり、断面形は底面に凹凸のある鍋底形である。

【堆積土】土層図は作成しなかった。堆積土中にはⅤ層のやや大きい塊が混入しており、人為堆積の様相を呈する。

【出土遺物】土坑部分堆積土中から土玉が1点出土している。また、第512号ピットからはアメリカ式石鏃に類似した石器が出土している。

第520号土坑（図75）

【位置・確認】BB-20グリッドに位置する。Ⅱ～Ⅲ層で確認した。

【重複】無し。

【形態・規模】残存部分での平面形は長軸約1.5m×短軸約1.4mの三角形を呈し、確認面からの深さは約40cmである。遺構の大部分は調査区外にある。

【壁・底面】壁は底面から若干外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。Ⅱ、Ⅲ層を壁とし、Ⅲ層を底面とする。南コーナー部分には柱穴が1基見られる。柱穴底面はⅤ層まで掘りこんでいる。

【堆積土】黒褐色土を主体とし、7層に分層した。2層は被熱した粘土層であり、竈由来の粘土に近似する。3層は竈の火床面、4層は竈堆積土、5層は掘形の覆土、と考えられるため、本遺構は建物跡の竈穴部である可能性が高い。南東隅のピットは壁柱穴と考えられる。

【出土遺物】土師器片が出土しているが図示しうるものはなかった。

【小結】全体形は確認できなかったが、平安時代の建物跡竈穴部の南東隅の可能性はある。

第522号土坑（図75・78）

【位置・確認】BD-15グリッドに位置する。第515号建物跡竈穴部北壁付近に存在する。Ⅱ層を取り除きⅢ層上面で確認した。

【重複】なし。

【形態・規模】平面形は直径約1.0mのいびつな円形を呈する。確認面からの深さは50cmである。

【壁・底面】東側に傾斜する底面から壁が外傾して立ち上がる。底面は狭く、平坦である。Ⅱb～Ⅳ層を壁、Ⅴ層を底面とする。

【堆積土】黒色土を主体とした3層に分層した。1層中に遺物が含まれていた。

【出土遺物】 土師器坏と須恵器長頸壺が出土している（図78-522土-1・2）。

第523号土坑（図75）

【位置・確認】 A区東端、BF-40グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。

【重複】 第506号建物跡外周溝と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

【形態・規模】 平面形は長軸1.68m、短軸0.84mのほぼ楕円形を呈し、確認面からの深さは65cmである。

【壁・底面】 壁はⅢ～Ⅳ層を掘り込み、底面ではⅤ層上面に達している。断面はフラスコ状に近く、底面は概ね平坦である。

【堆積土】 4層に分層された。Ⅲ層起源の黒色土を主体としており、一部に砂質土が層状に混入している。水の影響を受けた自然堆積の様相を呈する。

【出土遺物】 無し。

【小結】 本遺構は平安時代の建物跡外周溝に壊されているが、その堆積土の状況からあまり変わらない時期の所産であると考えられる。

第525号土坑（図75）

【位置・確認】 A区中央北側、BA-47グリッドに位置する。大半の部分は調査区域外に存在している。Ⅳ～Ⅴ層で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模】 方形の土坑状の遺構のコーナー部分を調査したと考えられる。確認面からの深さは約30cmである。また、東側約1mの位置に柱穴を確認した。柱穴の深さは確認面から約20cmである。

【壁・底面】 Ⅳ・Ⅴ層を壁とし、底面には凹凸が見られる。コーナー部分には柱穴が見られる。

【堆積土】 4層に分層された。3層は被熱した粘土層である。この粘土層は、竈構築土とよく似ており、本遺構は建物跡竪穴部の一部の可能性がある。したがって東側で確認した柱穴は掘立部を構成する柱穴である可能性が高い。

【出土遺物】 無し。

第526号土坑（図75・78）

【位置・確認】 BC-35・36グリッドに位置する。第526号溝跡調査時にその下部で確認した。

【重複】 第515号溝跡と重複する。第515号溝跡の方が新しい。

【形態・規模】 平面形は長軸1.5m×短軸1.25mの方形を呈し、確認面からの深さは55cmである。

【壁・底面】 壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。Ⅲ～Ⅴ層を壁とし、Ⅴ層を底面とする。

【堆積土】 最上位に隣接する第526号溝跡の覆土が被覆している。黒褐色土を主体とし、6層に分層した。堆積土中に焼土・粘土・Ⅴ層ブロック等を含むため、人為堆積の可能性が高い。

【出土遺物】 土師器の坏と甕の破片が出土した（図78-526土-1・2）。

第529号土坑（図76・78）

【位置・確認】 CL-26グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。攪乱で一部破壊されている。

【重複】 なし。

【形態・規模】 平面形は直径約0.88mのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは68cmである。

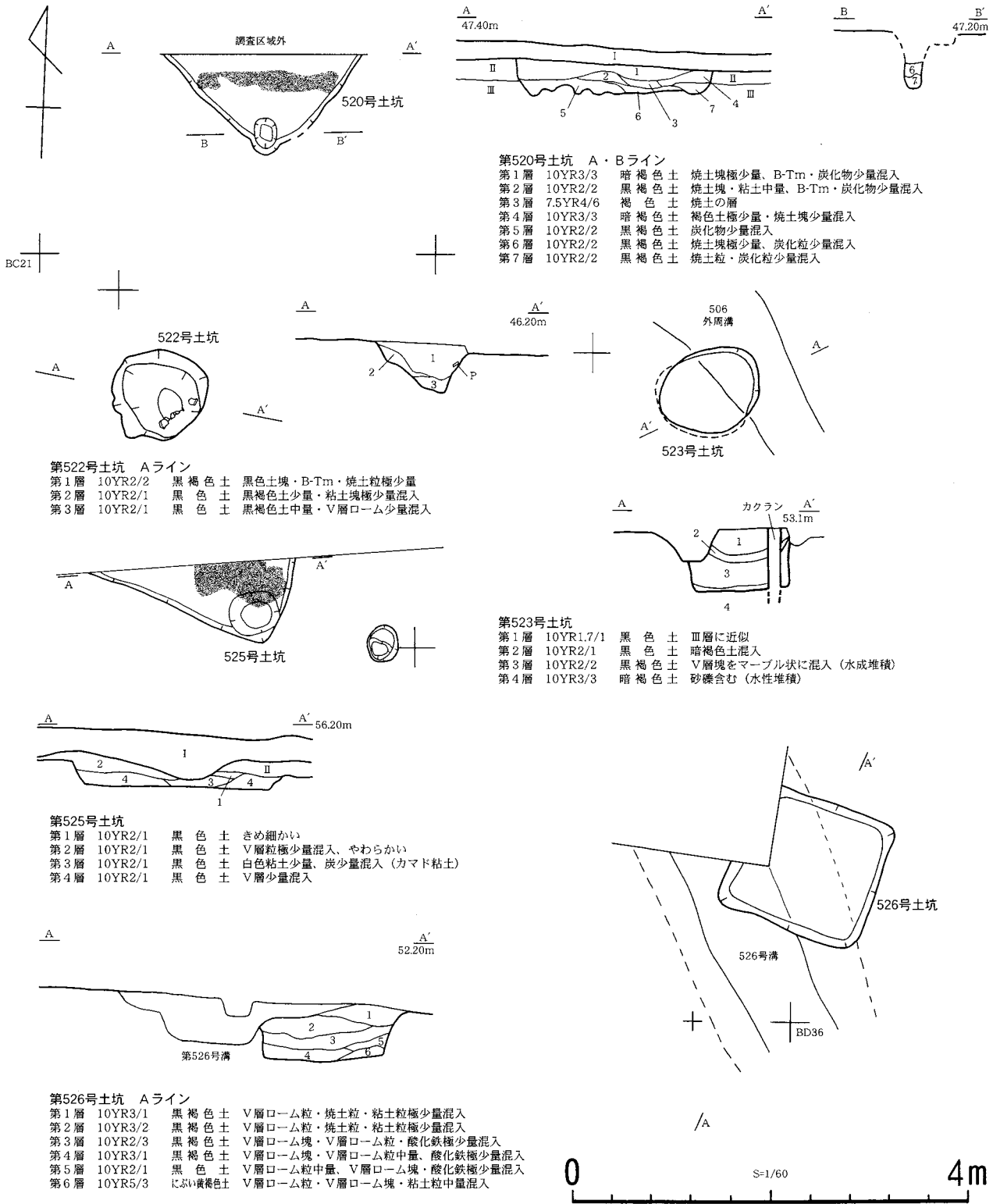


図75 第520・522・523・525・526号土坑

【壁・底面】断面はフラスコ状を呈する。底面は中央部がやや低い概ね平坦である。V層を壁・底面にしていく。

【堆積土】Ⅱ～Ⅲ層起源の黒色土を主体として6層に分層される。2層に白頭山－苦小牧火山灰が層状に堆積する。堆積土の上位に遺物を含む。概ね自然堆積と思われる。

【出土遺物】須恵器坏の底部破片が出土した（図78）。

第530号土坑（図76）

【位置・確認】CL-19グリッドに位置する。IV層上面で確認した。

【重複】なし。

【形態・規模】平面形は長軸1.4m×短軸0.9mの方形を呈し、確認面からの深さは65cmである。

【壁・底面】壁は外傾して立ち上がる。底面には2箇所の落ち込みがあり、その底面は平坦である。Ⅲ～V層を壁、V層を底面とする。

【堆積土】黒褐色土を主体とし、5層に分層される。2層に白頭山－苦小牧火山灰が層状に堆積する。概ね自然堆積と思われる。

【出土遺物】なし。

第531号土坑（図76・78）

【位置・確認】CJ-16グリッドに位置する。Ⅲ層下位で確認した。

【重複】なし。

【形態・規模】平面形は長軸2.1m×短軸1.7mの不整な方形を呈する。確認面からの深さは約30～45cmである。

【壁・底面】壁は緩やかに湾曲しながら立ち上がる。底面には第530号土坑同様に2箇所の落ち込みがある。Ⅲ～V層を壁、V層を底面とする。

【堆積土】黒褐色土と黒色土を主体とし4層に分層される。1層に白頭山－苦小牧火山灰がブロック状に堆積する。

【出土遺物】礫石器が1点出土した（図78）。角柱状の礫先端部を表裏から打ち欠いて鋭利にしている。裏面に強い擦痕が見られる。

第532号土坑（図76）

【位置・確認】CM-20グリッドに位置する。IV層下位で確認した。攪乱により西側の一部が破壊されている。

【重複】なし。

【形態・規模】平面形は長軸1.6m×短軸0.9～1.0mの長方形を呈し、確認面からの深さは60cmである。

【壁・底面】壁は外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。IV～V層を壁、V層を底面とする。

【堆積土】黒色土を主体とし7層に分層した。3層には白頭山－苦小牧火山灰が層状に堆積している。

【出土遺物】なし。

第533号土坑（図76・78）

【位置・確認】CN-18グリッドに位置する。IV層下面で確認した。

〔重複〕なし。

〔形態・規模〕平面形は長軸1.4m×短軸0.5mの長方形を呈し、確認面からの深さは50cmである。

〔壁・底面〕壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は第530号土坑等に見られるように、2箇所を平らに掘り下げている。IV・V層を壁、V層を底面とする。

〔堆積土〕黒色土を主体とし5層に分層した。2層には白頭山ー苦小牧火山灰が層状に堆積している。4層に遺物を含む。

〔出土遺物〕須恵器大甕（図78-533土-1・2）、礫石器（図78-533土-3）が出土した。礫石器は平坦面に擦った痕跡と凹みが見られる。

第537号土坑（図76・78）

〔位置・確認〕BY-21・22グリッドに位置する。II層中で確認した。

〔重複〕なし。

〔形態・規模〕平面形は長軸約1.5m×短軸約1.6mの円形を呈し、確認面からの深さは約170cmである。

〔壁・底面〕壁はほぼ垂直に立ち上がった後、確認面付近で大きく開く。この部分は崩落による変形と考えられる。底面は平坦である。III～VI層を壁、VI層を底面とする。

〔堆積土〕II～III層起源の黒色土を主体とし、10層に分層した。2・3・5層に炭化物と焼土を少量含む。1～3層に遺物を含む。

〔出土遺物〕土師器甕口縁部破片、須恵器大甕の口縁～頸部破片、釘と見られる鉄製品が出土した（図78-537土-1～3）。特に2の大甕は第1次調査の第16号建物跡SD16内SK1部分から出土した大甕と接合した。また、遺構確認の時点で1層上面に用途不明の鉄製品が見つかったが、もろいため取り上げの際に破損してしまった。図示はしていない。底面付近は湧水のため精査が困難であったが、ほぼ底面付近からは植物の繊維状の物質が出土している。取り上げの際に溶けてしまうほど脆かったため写真・図面等も作成し得なかった。

〔小結〕形状と深さ、湧水が見られたことから井戸跡と思われる。

第542号土坑（図77）

〔位置・確認〕C区中央西寄り、CB・CC-30グリッドに位置する。IV層で確認した。

〔重複〕西側約1/3を農業用水の暗渠によって破壊されている。

〔形態・規模〕平面形は長軸1.38m、短軸0.84m（残存部分で）の楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは18cmである。

〔壁・底面〕壁・底面共にV層を掘り込んでおり、底面には凹凸が見られる。

〔堆積土〕3層に分層された。最下層からは炭化物が多量に出土している。これらの炭化物の一部は樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種はモクレン属と判定され、補正14C年代は1290±40ybpという値がでていますが、帰属時期と直接結びつくかどうかは不明である。

〔出土遺物〕無し。

第544号土坑（図77）

〔位置・確認〕C区中央西寄り、CB-29グリッドに位置する。IV層で確認した。

〔重複〕無し。

CK19

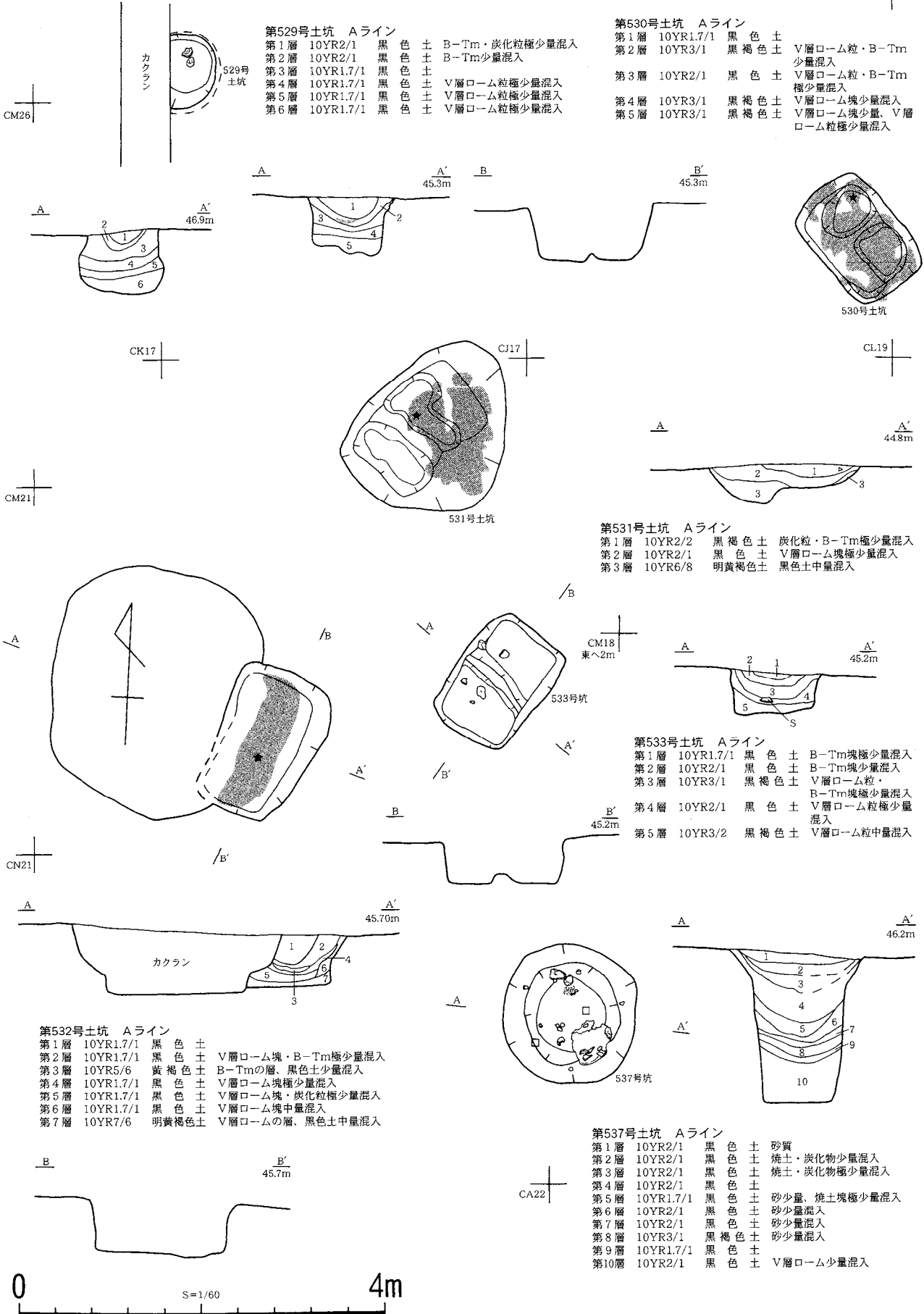


図76 第529～533・537号土坑

[形態・規模] 平面形は長軸1.32m、短軸1.14mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは18cmである。

[壁・底面] 壁・底面共にV層を掘り込んでおり、底面には凹凸が見られる。

[堆積土] 3層に分層された。最下層からは炭化物が多量に出土している。これらの炭化物の一部は樹種同定及び放射性炭素年代測定を行っている。樹種はヌルデ亜種と判定され、補正14C年代は 1210 ± 50 ybpという値がでているが、帰属時期と直接結びつくかどうかは不明である。

[出土遺物] 無し。

[小結] 本遺構及び第542号土坑は、底面から炭化物がまとまって出土するという共通した特徴を持つ。同様の遺構は第4次調査の第410号土坑等に見られる。相違点は第4次調査におけるこれらの土坑では、底面及び壁面が被熱していることである。これらの土坑の用途・性格はこれからの研究課題であるが、ここでは炭焼き用の窯としての機能を可能性としてあげるに留める。

第548号土坑 (図77)

[位置・確認] C区北側、BV-22・23グリッドに位置する。また、西側には第521号建物跡が位置している。V層上面で確認した。

[重複] 真ん中を農業用水の暗渠に破壊されている。

[形態・規模] 平面形は1辺約1.4mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは54cmである。

[壁・底面] 壁・底面はV層を掘り込んでおり、断面形は箱形である。底面は概ね平坦である。

[堆積土] 3層に分層された。最下層には粘土が堆積している。人為堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 無し。

[小結] 本土坑は堆積土の状況から平安時代のもと考えられるが、性格等は不明である。

第549号土坑 (図77)

[位置・確認] BB・BC-15・16グリッドに位置する。第511号建物跡の堆積土2層上面から掘り込み、住居の堆積土とⅢ～V層を壁、V層を底面とする。

[重複] 第511号建物跡縦穴部と重複し、本遺構が新しい。

[形態・規模] 平面形は長軸1.65m×短軸1.2mのいびつな円形を呈し、確認面からの深さは30cmである。

[壁・底面] 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

[堆積土] 黒色土を主体として2層に分層される。いずれもロームブロックを多量に含む。

[出土遺物] なし。

[小結] 第511号建物跡が半分ほど埋まったところで掘りこまれている。白頭山-苦小牧火山灰の混入する縦穴部堆積土第1層に覆われているので、火山灰降下以前の構築と思われる。

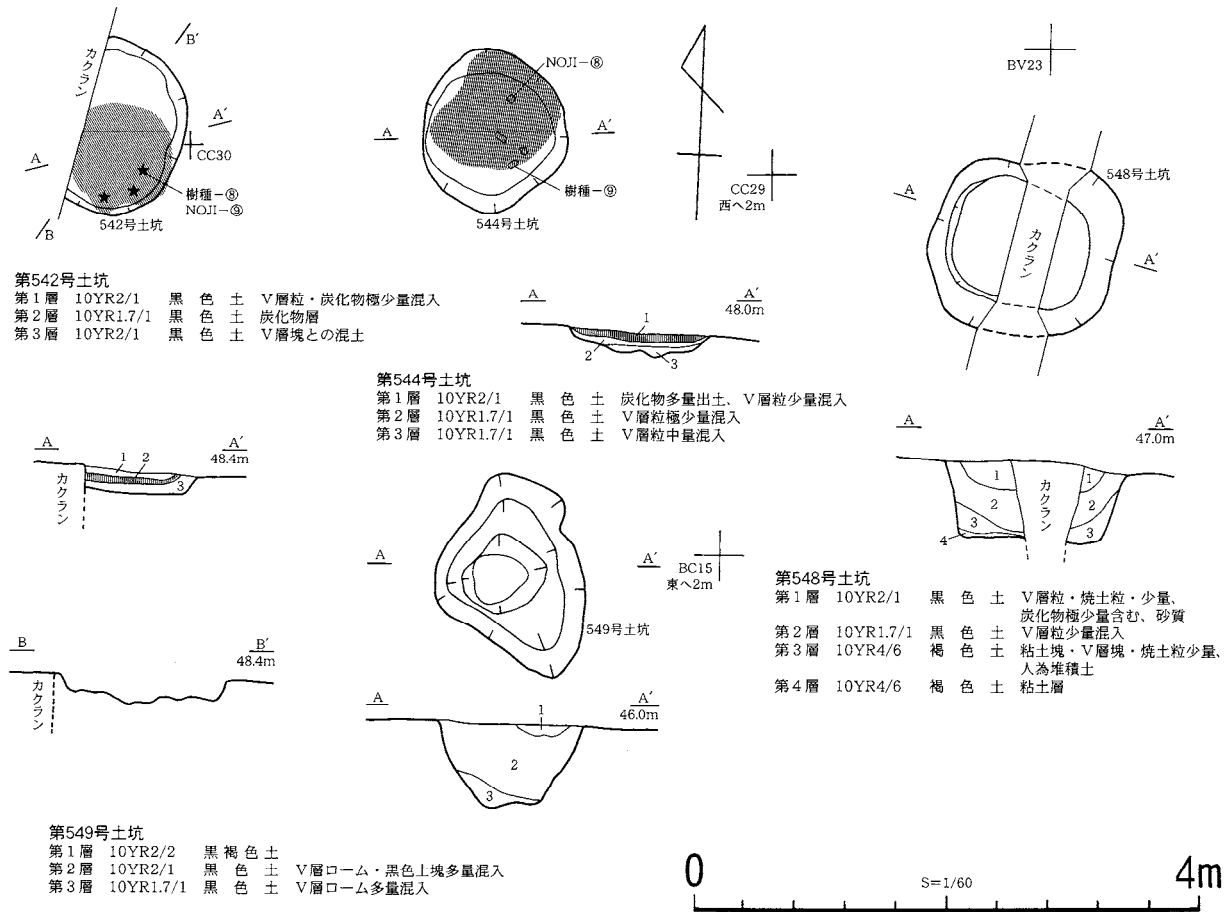


図77 第542・544・548・549号土坑

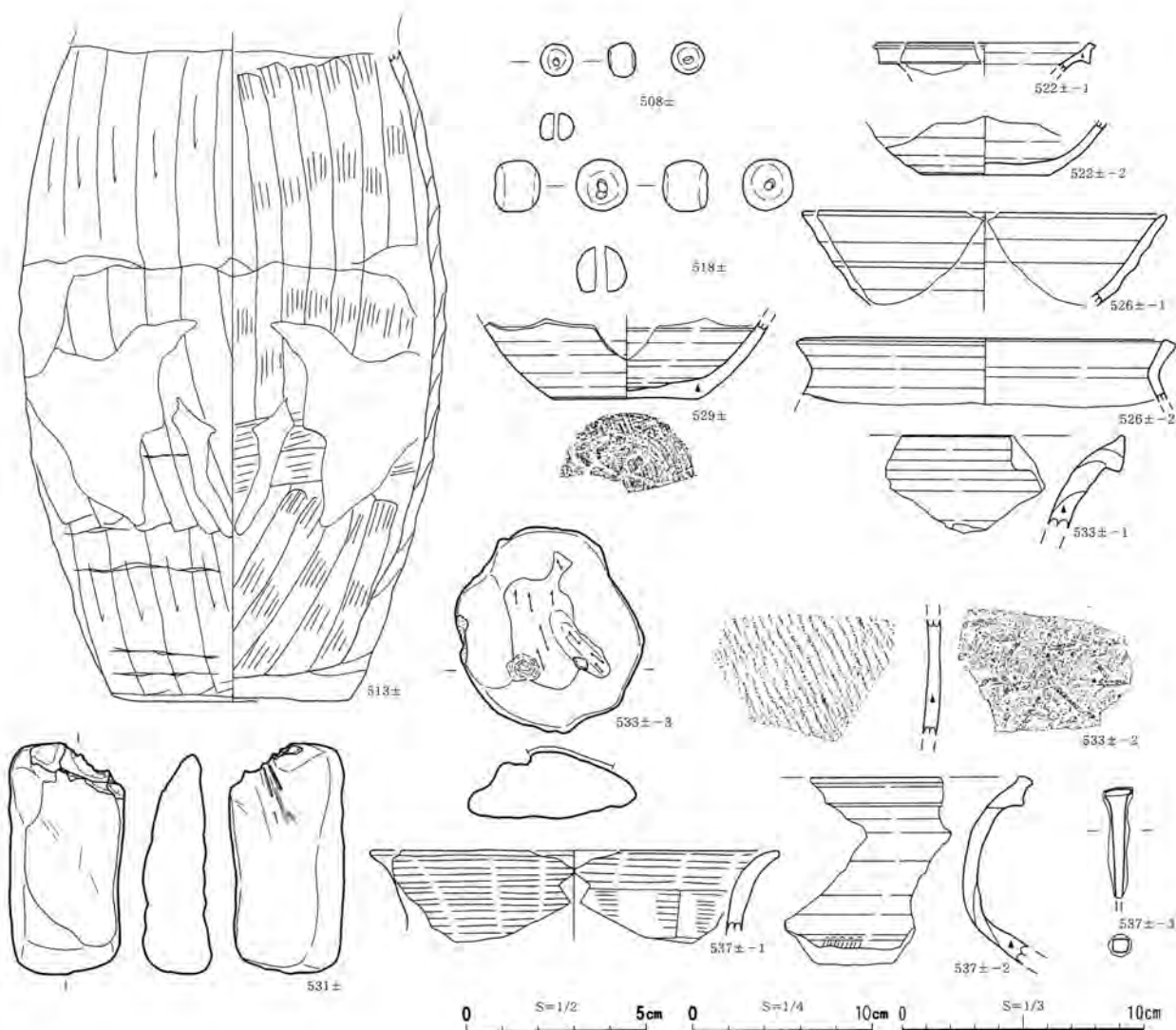


図78 平安時代の土坑出土遺物

3 溝跡

第513号溝跡 (図79・82・83)

【位置・確認】AY~BB-50~62グリッドに位置する。IV~V層で確認した。

【重複】第501号溝跡と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。

【形態・規模】幅約4~6m、確認面からの深さ1.5~2.3mの溝が西側から東側に約46m続いている。西側は調査区外に延びており、第4次調査区南側の沢(沢1)へと続くものと考えられる。東側も調査区外へ延びている。B区北側の沢地形に流れ込んでいくと推測される。

【壁・底面】壁・底面はV層より下位の白色粘土層(グライ化しているため緑~青色に変色している)からV層を掘り込んでおり、断面形は先端の角張るV字形である。底面は蛇行を繰り返している。

【堆積土】2箇所土層観察を行ったが、層位対比は困難であった。しかしながら、おおまかではあるが層位対比を行ったのが図79の土層注記である。それによると、本遺構は平安期、平安以降近代以前、現代の3時期が考えられる。以下Bラインの土層を元に話を進める。現代の層は1~5層で

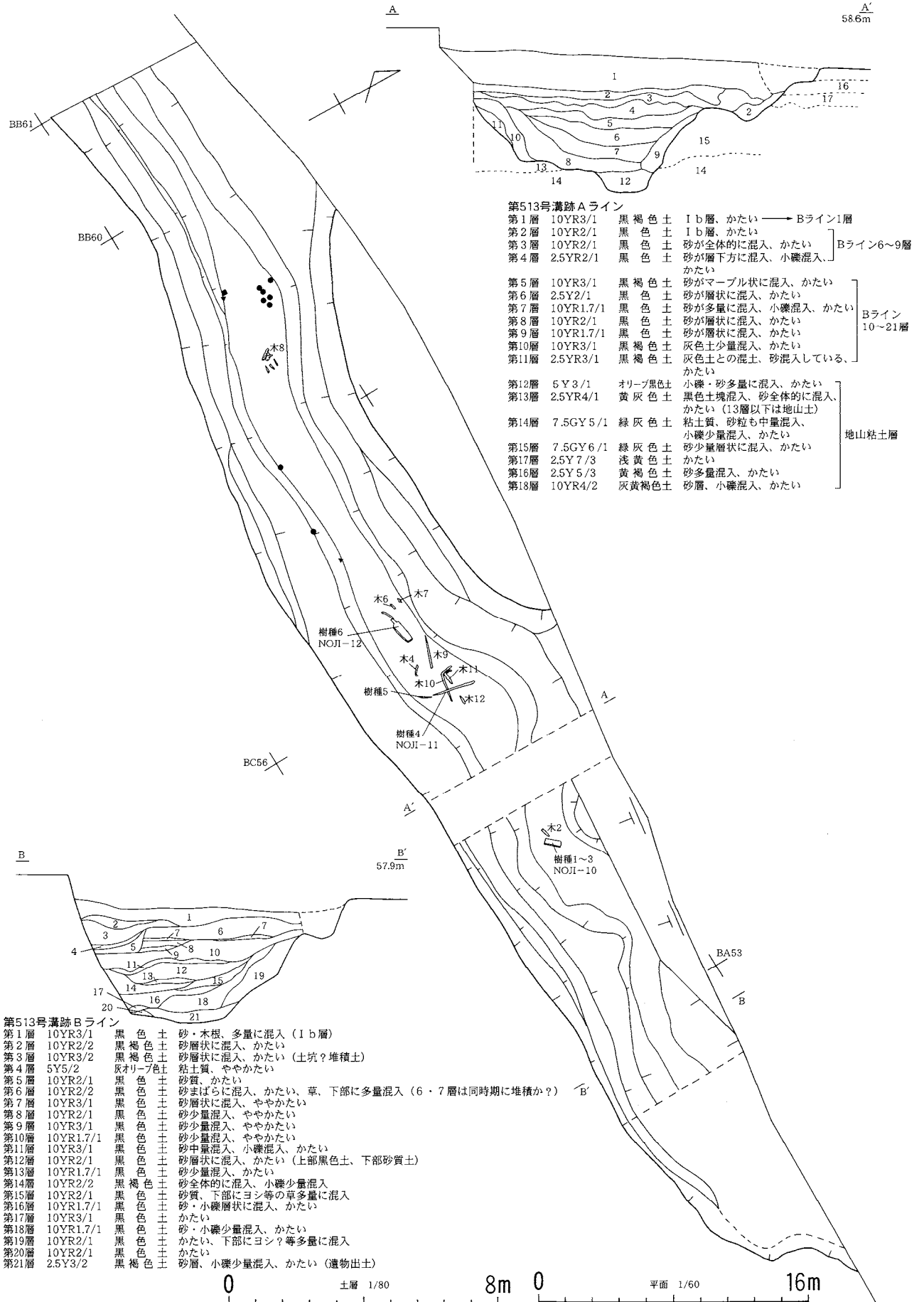


図79 第513号溝跡

ある。堆積土中には木の枝や根が多量に廃棄されていた。付近の住民によれば、昭和初期くらいに元々沢地形であったところをリング園に造成する際に周辺の雑木等を土と一緒に沢に廃棄し、その上にリング畑の土を造成したということらしい。平安時代以降近代以前は6～9層と考えられる。6層直下及び9層直下のほぼ水平なラインは断面図右上付近に見られる段差の底面とレベルがほぼ一致している。したがってこの層理面で当時何らか手を加えていた、もしくは使用していた可能性が高い。7層中に砂質土が層状に堆積している事から、水が流れていた可能性もある。平安期と捉えられる層は10層以下である。時期決定の根拠は底面より出土した土師器・須恵器と木製品（杭・板材等）の放射性炭素年代測定結果である。出土した遺物の時期はほぼこの遺跡で一般に出土するものと何ら変わらない。さらに、年代測定では一部で大幅に違う値が出たが、おおむね8世紀から9世紀という較正暦年代が出た。（第VI章第1節参照）

〔出土遺物〕 土師器坏・長胴甕・埴、須恵器坏・壺・甕・木製品等が出土している。土師器坏は内面黒化処理の有るものと無いものが見られる。5はロクロ成形後に体部・底部の外面にケズリによる整形を施している。6の底面もケズリによる整形が施される。これらの土師器坏は他のものより器壁が厚く、底径もやや大きめな特徴が見られる。11は須恵器坏の破片であるが、表面に刻書が見られる他、内面は硯として転用されている。また、破片縁辺は被熱しすすけている。12は須恵器壺の肩部である。外面には「奉」の刻書が見られる。19は土師器埴である。ロクロ成形後体部中下半にケズリ整形を施している。ケズリ方向は体部が上→下方向、底部付近は左→右方向である。

22～27は木製品である。状態は全て生木である。全て底面からの出土であるが、22・26については地山粘土層に食い込んで出土した可能性も否めない。もしそうだとすると基本土層VI層より下位（確認面（V層から約2m下位））の土層から出土したことになる。ちなみに22は先端部分（実測図下方）を北側に向けて出土している。22は杭？と考えられる。3箇所に孔が見られるが、これは節の抜けたものである。木取りは板目のように見えるが、元々断面の丸い棒状の材（自然木の可能性が高い）の約半分が何らかの要因で割れて残ったものであると考えられる。先端部（実測図下方）には鋭利な刃物で先端を加工したあとが見られる。この加工痕がいつ付いたものかによってこの個体の評価が変わってくるが、ここでは可能性を3つあげるに留める。①粘土層中に埋没していた木が、平安時代人による沢の掘削作業により先端部分だけ削られた。②粘土層中に埋没していた木を平安時代人が掘り起こし、先端部を加工して杭に使用した。③2万年以上前に何らかの形で加工された木が粘土層中に埋没していた。22からは樹種同定、放射性炭素年代測定の試料が採取され分析にかけられた。その結果樹種はイチイ属に同定され、補正14C年代は $27,880 \pm 300$ ybpの値を得た。

近隣の遺跡で同様の層位から木が出土した例としては、五所川原市隈無(8)遺跡のBSE003・004がある。BSE003では確認面から約3.5m下位から、BSE004では約4.4m下位の、いずれも壁面から生木が出土したと記述され、出土状況の写真も掲載されている。基本層序のどの層位にあたるかはっきりしないが、本遺跡例と近い出土状況である可能性が高い。これらの生木の出土状況は、埋没林の存在を伺わせるが、定かではない。しかしながら、今後注意すべき事象であることは確かである。

223～25・27は板材である。これらの木製品は樹種同定分析及び放射性炭素年代測定を行っている。それによると、樹種はクリ（24・25・27）、アスナロ（23）等が見られる。23は厚さ6cmとかなり厚みがある。上下両端が欠失している。表面は平滑であり、一部に加工時の刃物の痕跡も残る。木取りは柾目である。他は厚さ3～4cm程度と、薄く、23との用途の違いが想定できる。木取りはほぼ柾目である。24・25・27はおそらく同一個体である。表面は年輪の春材部分が摩耗し細かい凹

凸が見られる。表面には加工痕跡が部分的に見られる。なお、27の一部は炭化している。26は用途不明木製品である。出土状況と樹種（イチイ属）からは22と同一個体である可能性が指摘できる。僅かに蛇行するような平面形状であり、断面は滑らかである。木取りは板目状であるが、明確な加工痕は見られない。

【小結】本溝跡は、自然の沢に手を加えて溝状に構築されている。底面からの出土遺物から最初の構築時期は平安時代であると考えられるが、白頭山ー苦小牧火山灰等の火山灰は確認されなかった。

第515号溝跡・第516号土坑（図12・80）

【位置・確認】A区中央北側、BA～BC-47～49グリッドに位置する。V層上面で確認した。調査時には違う遺構として調査したが、調査終了後重複がないと判断し、同じ遺構と判断した。

【重複】第512号建物跡と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

【形態・規模】北側は調査区域外に延びているため全体形は不明である。溝の先端に土坑が付随する形態である。溝部分は幅約1m、深さ20cmであり、やや蛇行している。土坑部分は長軸2.22m、短軸1.68mのややいびつな楕円形である。確認面からの深さは約50cmである。

【壁・底面】壁・底面共にV層を掘り込んでいる。溝部分の断面形は浅い鍋形であり、底面には鋤痕が見られる。土坑部分の断面形は箱形である。底面は概ね平坦である。

【堆積土】溝部分は3層に分層された。ほぼ自然堆積の様相を呈する。土坑部分は6層に分層された。1～4層は溝部分と同様Ⅲ層起源の自然堆積土である。底面付近にはV層起源の土塊と遺物等が見られる。この部分においては人為堆積の可能性はある。

【出土遺物】土師器坏・甕等が底面から出土している。（図12）5点図示した。12の体部には墨書が見られる。この文字は「半」に似ているが、右下部にある点を考慮すると「半」ではなく「夫」（夫）とも解読可能と考えられる。15は刀子の柄部である。

【小結】本遺構は出土遺物から平安時代の溝跡と考えられるが、その性格としては土坑部分の遺物出土状況から建物跡の外周溝部分と推測される。ちなみに本遺構の東側には第525号土坑が位置し、その性格は建物跡竪穴部と掘立部である可能性が高い。したがってこれら2つの遺構はセットで建物跡を構成する可能性が高い。

第516号溝跡（図80）

【位置・確認】A区北側BA-46グリッドに位置する。V層上面で確認した。

【重複】無し。

【形態・規模】幅約0.6m、深さ約30cmであり、調査区域外から調査区域内に延び、逆くの字に屈曲している。

【壁・底面】壁・底面共にV層を掘り込んでいる。断面形は底面が丸みを帯びた逆台形状である。中央付近の底面には1段低い円形の落ち込みがある。

【堆積土】Ⅲ～V層を起源とする土層で構成される。概ね自然堆積と考えられる。

【出土遺物】無し。

第525号溝跡（図80）

【位置・確認】C区中央部、CB-27グリッドに位置する。第501号並列溝状遺構調査終了後、その下位のIV層上面で確認した。

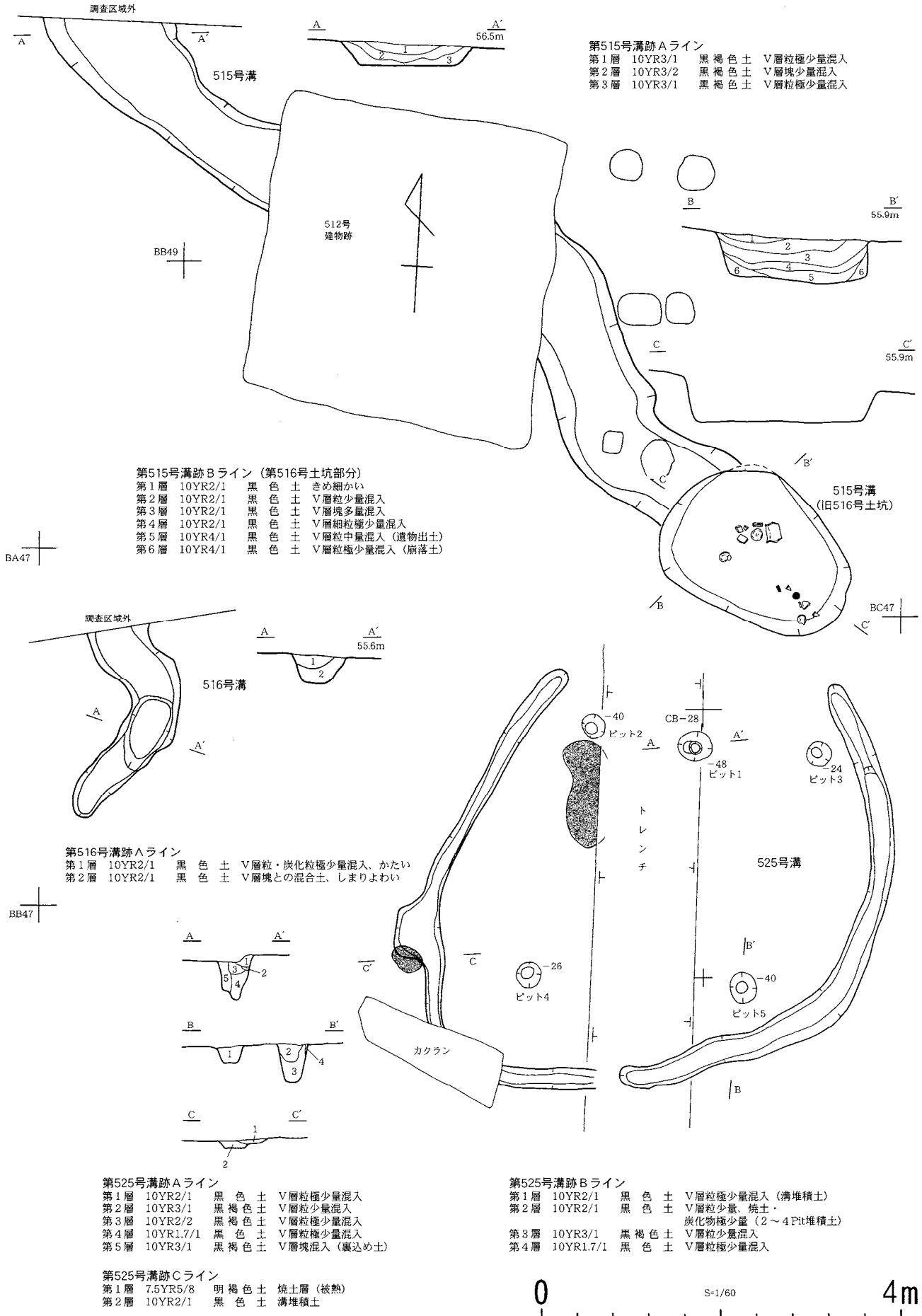


図80 第515・516・525号溝跡

【重複】 第501号並列溝状遺構と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

【形態・規模】 平面形は、北方向に開口する直径約5.1mのややいびつな円形を呈する。西側部分には廃棄された焼土が見られる。溝の幅は約24cm、確認面からの深さは約20cm程度である。溝の内側には5本の柱穴と1箇所の焼土が確認された。柱穴は長軸方向を溝の開口部と同方向に向けており、平面形は3.0m×2.5mの概ね正方形である。

【堆積土】 溝部分は単層である。Ⅲ層起源の黒色土を主体としている。自然堆積の様相を呈する。柱穴部分はピット1などで柱痕と裏込め土が見られた。また、第501号並列溝状遺構調査時には、確認面及び溝底面付近に白頭山－苦小牧火山灰の範囲が確認されている。この火山灰は本遺構の堆積土の一部と考えられるため、構築時期は白頭山－苦小牧火山灰降下以前である可能性が高い。

【出土遺物】 土師器甕破片が出土している。

【小結】 本遺構は内部に柱穴を伴う円形周溝遺構であると考えられる。円形周溝は近接する野尻(2)・(3)遺跡等でまとまって出土しているが、本遺跡例については、①溝の幅や深さが小規模であること、②内部に柱穴を伴うこと等の相違点が見られる。したがって本遺構はいわゆる埋葬施設としての円形周溝とは性格が異なる可能性がある。本遺跡例と類似した遺構は青森市朝日山(2)遺跡（青埋分報第324集）で出土している（第2号円形周溝）。報告では帰属時期を10世紀後半以降としている。

第526号溝跡（図81）

【位置・確認】 BC・BD-35・36グリッドに位置している。Ⅲ層下面で確認した。上部を削平されている。調査時には建物跡の外周溝としたが、整理の段階で溝跡に変更した。

【重複】 第502・第510号溝跡、第526号土坑跡と重複する。溝跡は本遺構より新しく、土坑跡は古い。

【形態・規模】 検出された部分では幅約0.4m、残存部分の長さは約5mである。

【壁・底面】 壁は底面から緩やかに外傾する。底面は概ね平坦。Ⅲ～Ⅴ層を壁、Ⅴ層を底面とする。

【堆積土】 黒褐色土を主体として7層に分層される。焼土の層（2層）には炭化物も含まれる。

【出土遺物】 土師器・須恵器の坏と甕の破片が出土している。図84-18は大甕の底部付近の破片で平行のタタキ目の上にヘラナデの跡が残る。

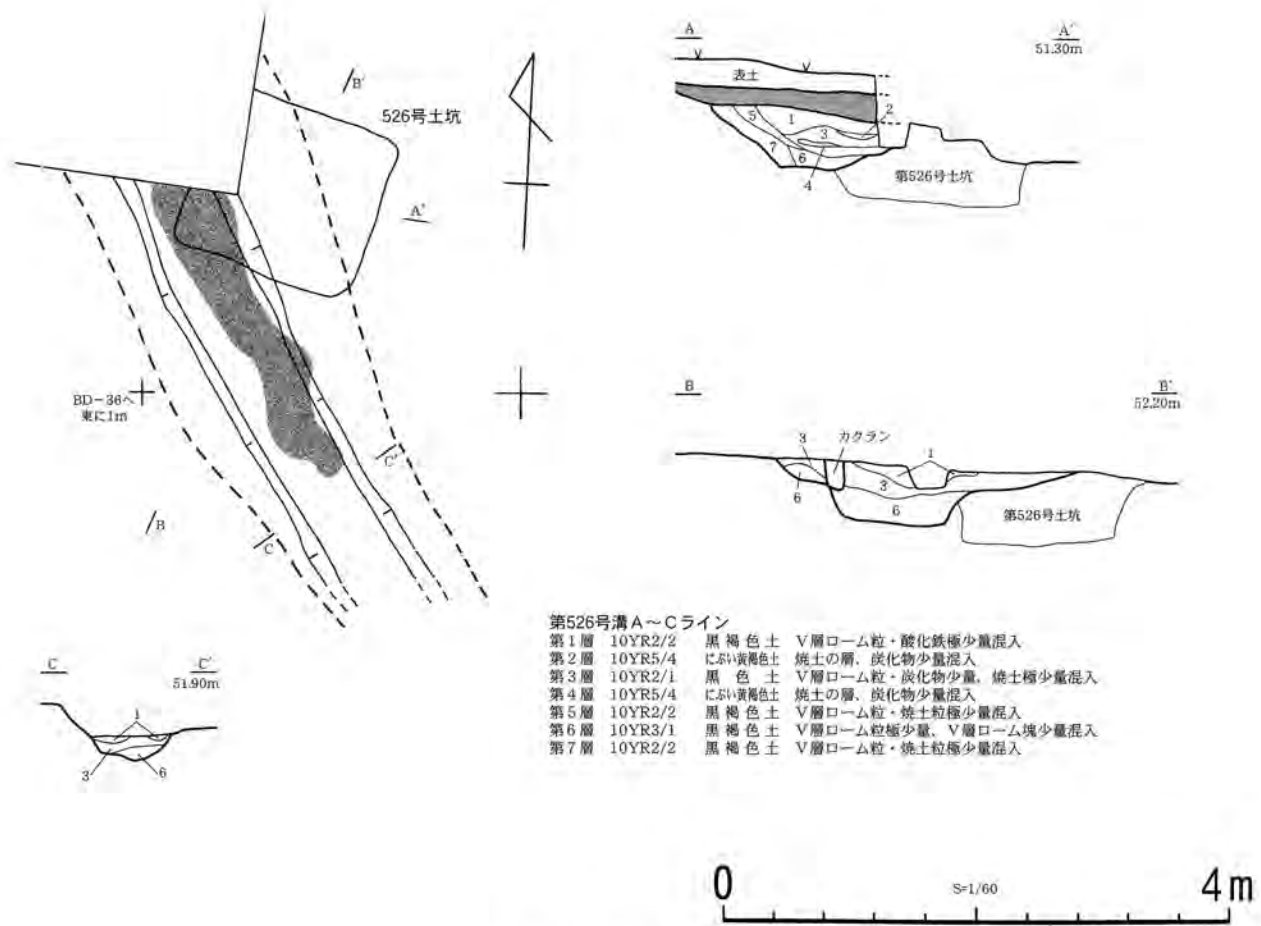


図81 第526号溝跡

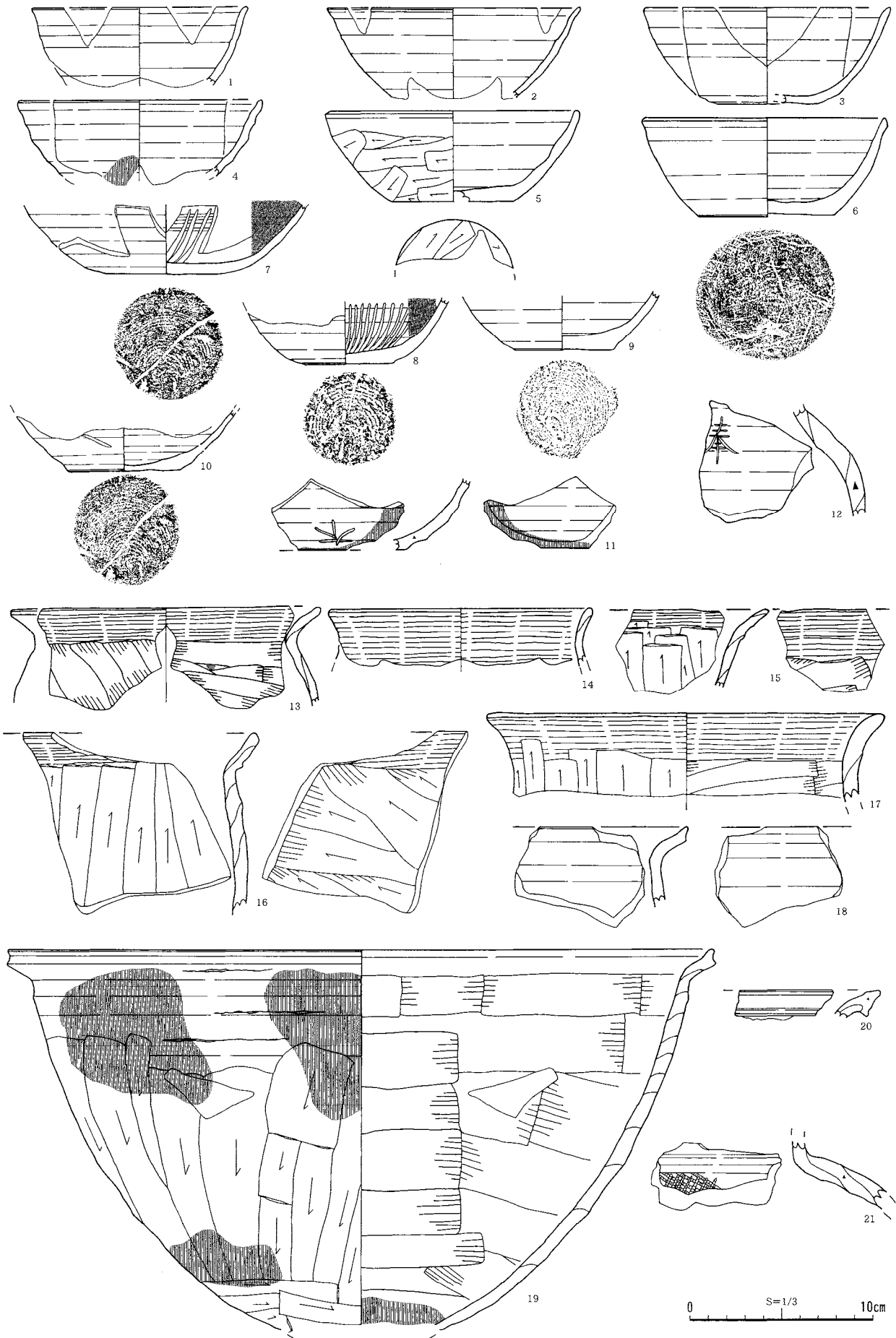


图82 第513号沟迹出土遗物①

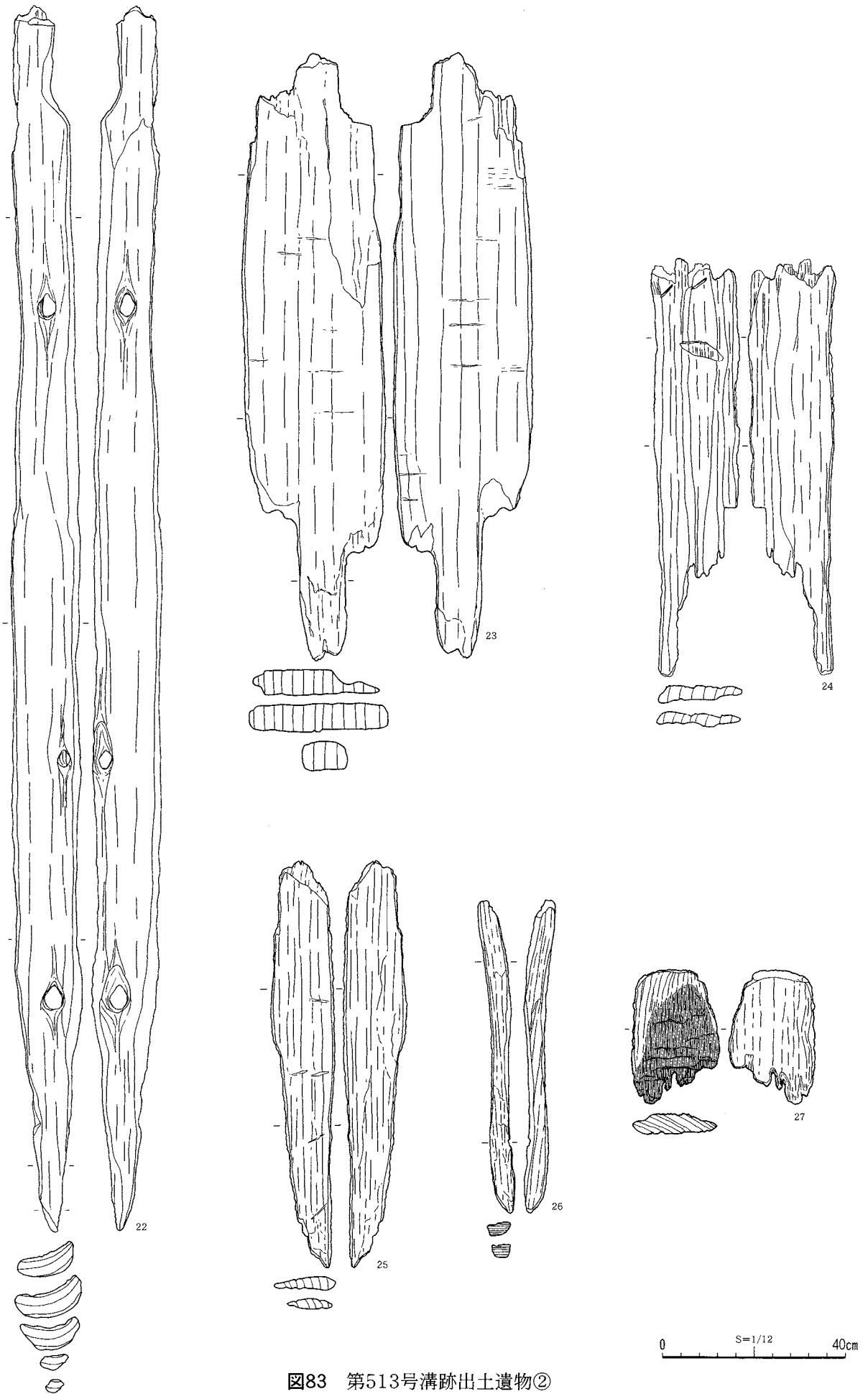
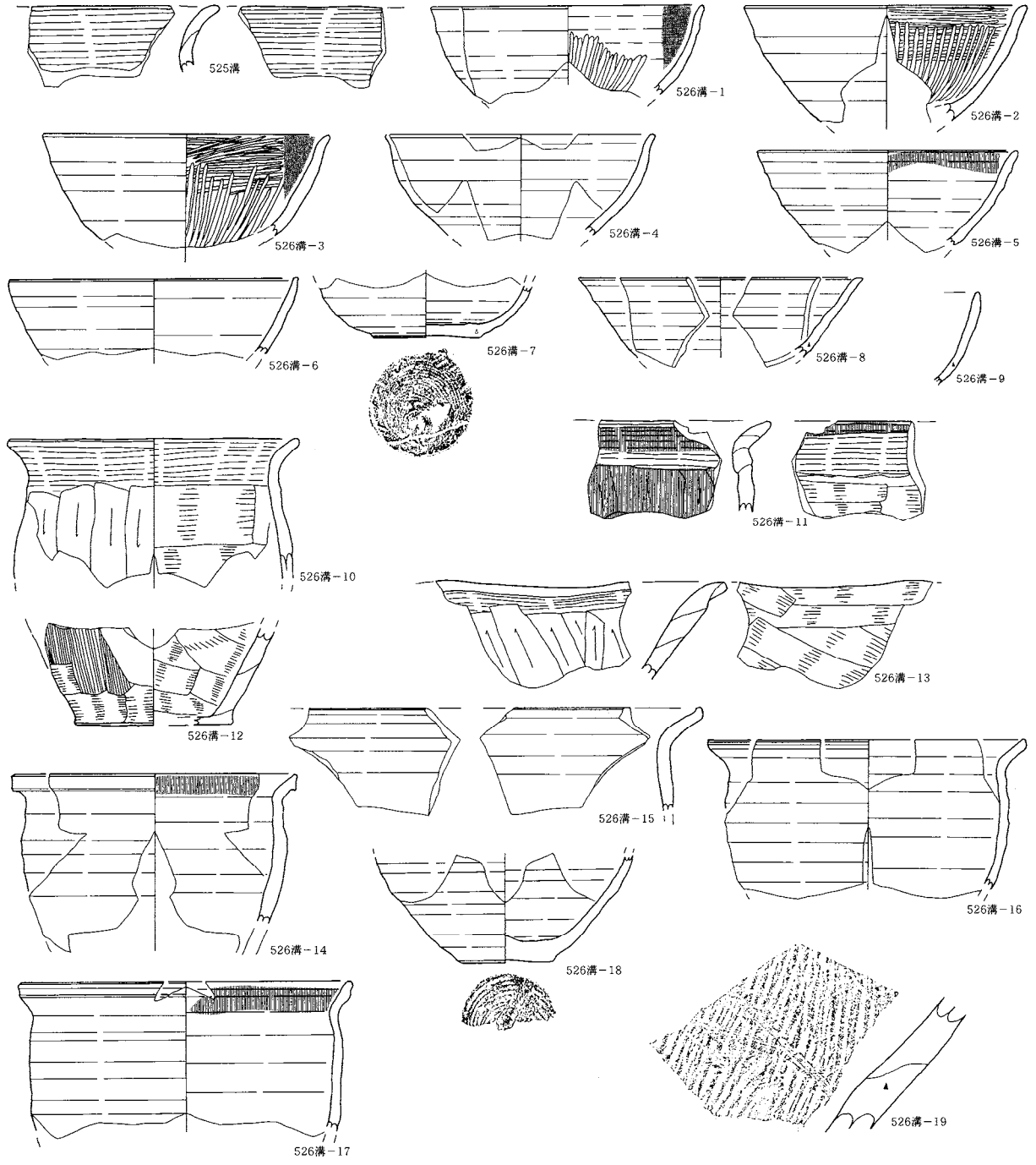
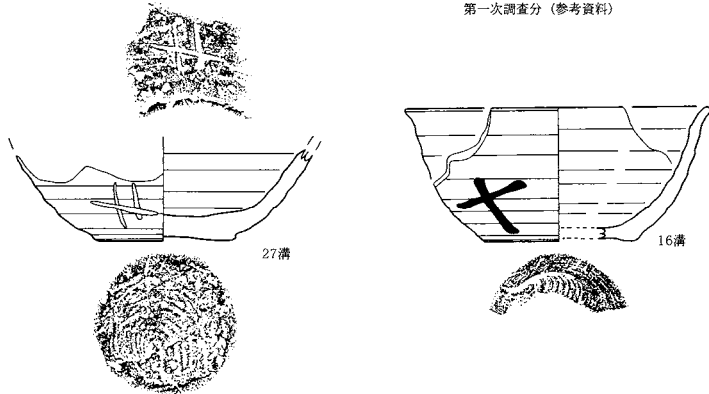


図83 第513号溝跡出土遺物②



第一次調査分(参考資料)



0 S=1/3 10cm

图84 第525・526号溝跡、第16・27号溝跡出土遺物

第3節 時期不明な遺構と遺物

1 土坑跡

第501号土坑 (図85)

[位置・確認] BC-16グリッドに位置する。Ⅱa層上面で確認した。

[重複] 第511号建物跡竪穴部と重複関係にある。本遺構が新しい。

[形態・規模] 長軸約1.4m×短軸約1.0mの長方形を呈する。深さは約50cmである。

[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。Ⅱa層とⅡb層を壁・底面とする。

[堆積土] 黒褐色土を主体とする単層である。人為堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[小結] 平安時代以降の構築と思われる。

第502号土坑 (図85-98)

[位置・確認] A区西側、BE-55グリッドに位置する。Ⅴ層上面で確認した。

[重複] 無し。

[形態・規模] 長軸1.8m、短軸1.68mのほぼ円形を呈する。確認面からの深さは36cmである。

[壁・底面] 底面から壁はⅤ層まで掘り込まれており、断面は皿状を呈する。

[堆積土] 単層であり、Ⅱ層起源の黒色土が主体となり、自然堆積の様相を呈する。

[出土遺物] 土師器甕口縁部の破片が出土している。

第519号土坑 (図85)

[位置・確認] BD-13グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。

[重複] 第505号溝跡と重複する。第505号溝跡の方が新しい。

[形態・規模] 長軸約0.9m×短軸約0.55mのいびつな楕円形を呈し、深さは約15cmである。

[壁・底面] 壁は底面から外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。Ⅲ層を壁・底面とする。

[堆積土] 黒褐色土・黒色土を主体として4層に分けられる。自然堆積だと思われる。

[出土遺物] 北側で土師器片が出土しているが図示しうるものではなかった。

[小結] 時期等詳細は不明である。

第524号土坑 (図85)

[位置・確認] A区中央北側、BA-49・50グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。北側の一部は調査区域外に広がっている。

[重複] 無し。

[形態・規模] 長軸4.2m、短軸(残存部分で)2.16mのややいびつな隅丸方形を呈する。

[壁・底面] 壁・床面はⅤ層を掘り込んでいる。底面は概ね平坦、壁は斜めに立ち上がっている。

[堆積土] 調査区の壁面で土層断面を観察した。掘り込み面はⅢ層上面と考えられる。3層は砂質土である。水の影響を受けて堆積したものと考えられる。

[出土遺物] 無し。

第536号土坑 (図85)

【位置・確認】BK-19グリッドに位置する。Ⅲ層中で確認した。

【重複】なし。

【形態・規模】長軸約0.95m×短軸約0.8mのいびつな円形を呈し、深さは約22cmである。

【壁・底面】壁はほぼ垂直に立ち上がった後、上位で大きく開く。底面は平坦である。

Ⅲ層を壁、Ⅳ層を底面とする。

【堆積土】第Ⅱ～Ⅲ層の黒色土を主体とする単層である。

【出土遺物】なし。

【小結】時期等詳細は不明である。

第538号土坑 (図60)

【位置・確認】C区北西端、BV-32グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。

【重複】第518・519号建物跡外周溝、第507号並列溝状遺構と重複関係にあり、本遺構が一番新しい。

【形態・規模】西側が調査区域外にかかっているため平面形は推定であるが、長軸2.2m（現存する範囲で）・短軸2.0mの不整な隅丸方形を呈する。

【壁・底面】Ⅲ層～Ⅴ層を壁としている。底面はⅤ層であるが、西側で第519号建物跡外周溝と重複しているためはっきりしない。

【堆積土】調査区域際の壁面で断面を観察した。Ⅱ層を掘り込んでおり、堆積土には砂とⅡ～Ⅲ層起源の黒色土を多量に含んで縞状になっている。したがって水の影響を受けた自然堆積と判断できる。この状況は第519号溝跡堆積土にも見られる。遺構の配置状況でも、両遺構は一直線上に並んでいる。したがって、本遺構に溜まった水が流れた跡が第519号溝跡である可能性が高く、両遺構は元々同一の遺構と捉えても良いものと判断できる。

【出土遺物】無し。

第539号土坑 (図85)

【位置・確認】BY-20グリッドに位置する。白頭山-苦小牧火山灰が混入するⅡ層を取り除いた後、Ⅲ層上面で確認した。

【重複】火山灰集中範囲、第506号焼土遺構と重複する。前者は本遺構より新しく、後者は古い。

【形態・規模】長軸約2.45m×短軸約1.1mの楕円形を呈し、深さは約60cmである。

【壁・底面】壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。Ⅲ層下面を壁および底面とする。

【堆積土】流れ込みのⅡb層を含め、黒褐色土を主体とする6層に分層される。図中ではⅡb層以外についての注記のみ掲載した。

【出土遺物】なし。

【小結】底面で確認された焼土は第506号焼土遺構に由来するものと思われる。火山灰降下前の構築と思われるが詳細は不明である。

第543号土坑 (図85)

【位置・確認】CC-28グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。

【重複】無し。

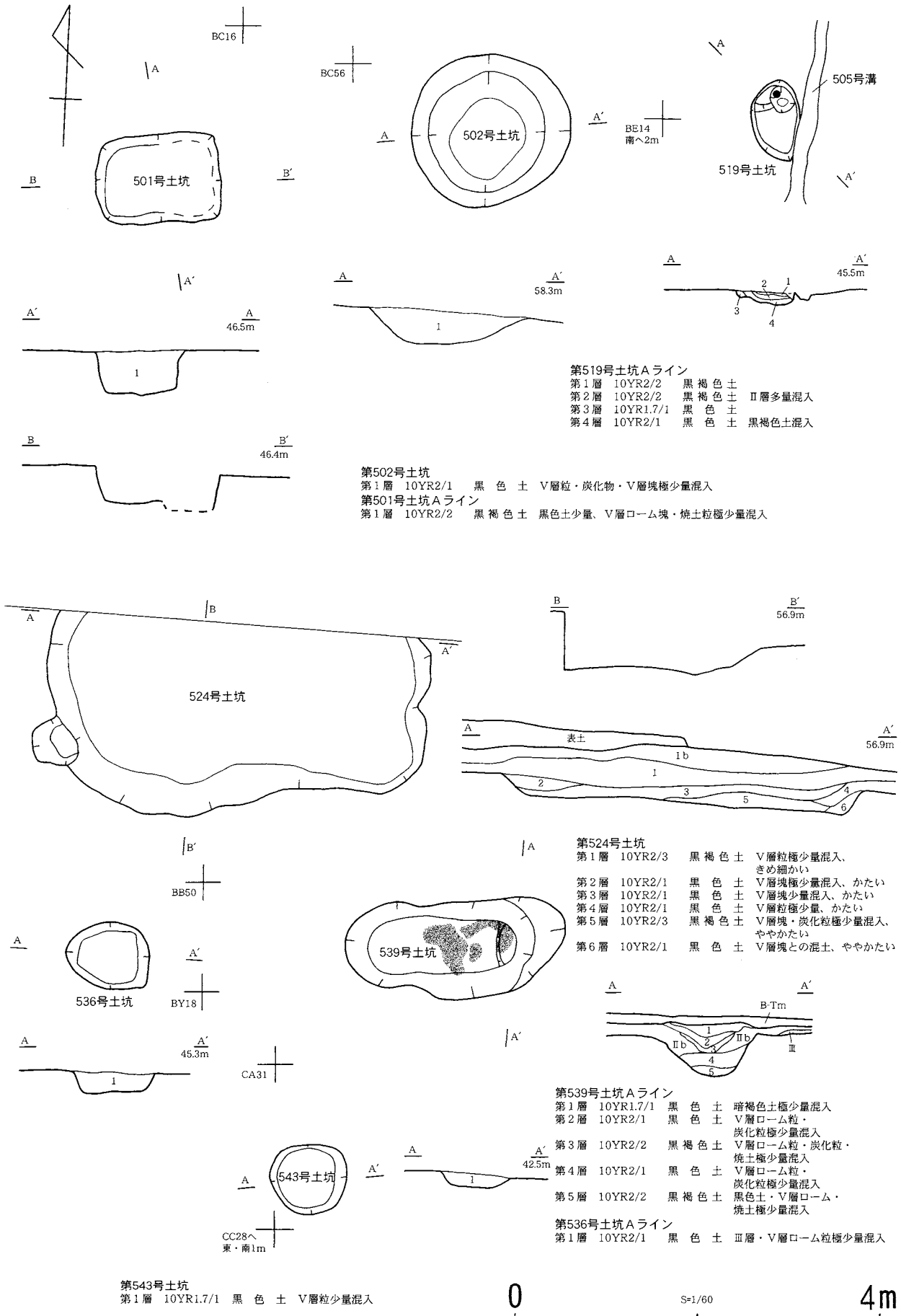


図85 第501・502・519・524・536・539・543号土坑

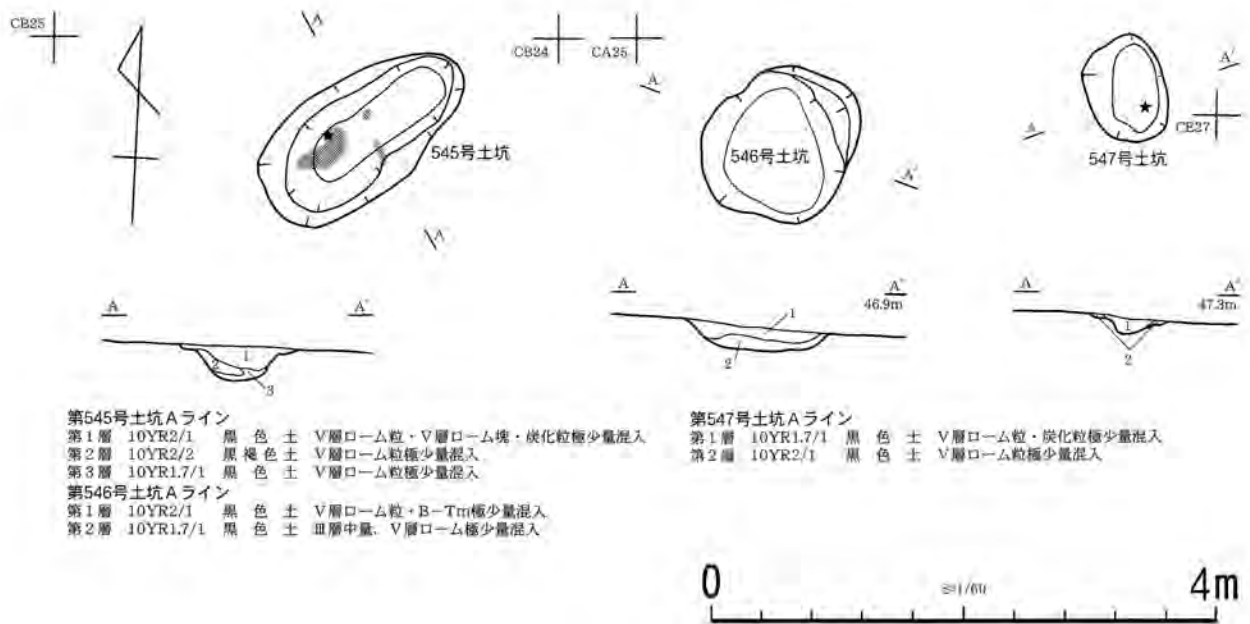


図86 第545～547号土坑

【形態・規模】 直径約0.8mのほぼ円形を呈する。

【壁・底面】 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。Ⅲ層下面を壁および底面とする。

【堆積土】 Ⅱ～Ⅲ層を主体とする黒色土で構成される。

【出土遺物】 なし。

第545号土坑 (図86)

【位置・確認】 CB-24グリッドに位置する。Ⅲ層中で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 長軸約1.8m×短軸約0.95mの楕円形を呈し、深さは約30cmである。

【壁・底面】 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。Ⅲ層を壁、底面とする。

【堆積土】 黒色土を主体として3層に分層される。1層に炭化物粒を含む。

【出土遺物】 なし。

【小結】 時期等詳細は不明である。

第546号土坑 (図86)

【位置・確認】 CA-24グリッドに位置する。Ⅲ層中で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 長軸約1.8m×短軸約0.95mの楕円形を呈し、深さは約30cmである。

【壁・底面】 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面は概ね平坦である。Ⅲ層を壁、底面とする。

【堆積土】 黒色土を主体とし、2層に分層される。1層に火山灰を極少量含む。

[出土遺物] なし。

第547号土坑 (図86)

[位置・確認] CD-27グリッドに位置する。Ⅲ層中で確認した。

[重複] なし。

[形態・規模] 長軸約1.8m×短軸約0.95mの楕円形を呈し、深さは約30cmである。

[壁・底面] 壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。Ⅲ層を壁・底面とする。

[堆積土] 黒色土を主体とし、2層に分層される。

[出土遺物] なし。

2 溝跡

第501号溝跡 (図87)

[位置・確認] A区西側、BB~BF-54グリッドに位置する。Ⅲ~Ⅳ層で確認した。

[重複] 第513号溝跡と重複関係にあり、本遺構の方が古い。第513号溝跡は複数の時期に機能していた可能性があるため、どの時期の溝跡との重複関係かは不明である。

[形態・規模] 幅約0.7m、深さ約60cmの溝が本調査区内を18mにわたって横断している。第2次調査の第209号溝跡、第3次調査の第305号溝跡と同一の溝跡である。

[底面] 鋤痕が見られるが概ね平坦である。

[堆積土] 最下層には砂とⅤ層の塊が混ざった層が堆積している。

[出土遺物] 図示しうる遺物は出土していない。

[小結] 第三次調査区等で平安時代の建物跡を掘り込んで構築されていることから、本遺構は平安時代以降の溝跡と考えられる。

第502号溝跡 (図87)

[位置・確認] BB~BD-35の各グリッドに位置している。Ⅲ層下面で確認した。

[重複] 526号溝跡と重複する。第526号溝跡の方が古い。

[形態・規模] 検出部分は幅約15~35cm、長さ約14.4mである。

[壁・底面] 壁は底面からやや垂直に立ち上がる。底面は北側では平坦だが、南側では丸くなる。Ⅳ・Ⅴ層を壁、Ⅵ層を底面とする。

[堆積土] 暗褐色土を主体として、6層に分層される。

[出土遺物] なし。

[小結] 位置関係から第1次調査の第2号溝跡と連続すると思われる。とすれば構築時期は火山灰降下後である。

第505号溝跡 (図87)

[位置・確認] BB~BF-13の各グリッドに位置している。Ⅱb層中で確認した。Ⅰ層に上部を削平されている。

[重複] 第519号土坑と重複する。第519号土坑の方が古い。

[形態・規模] 検出部分は幅約15~35cm、長さ約14.4mである。

[壁・底面] 壁は底面からやや垂直に立ち上がる。底面はおおむね平坦だが、南側には工具痕が残る。

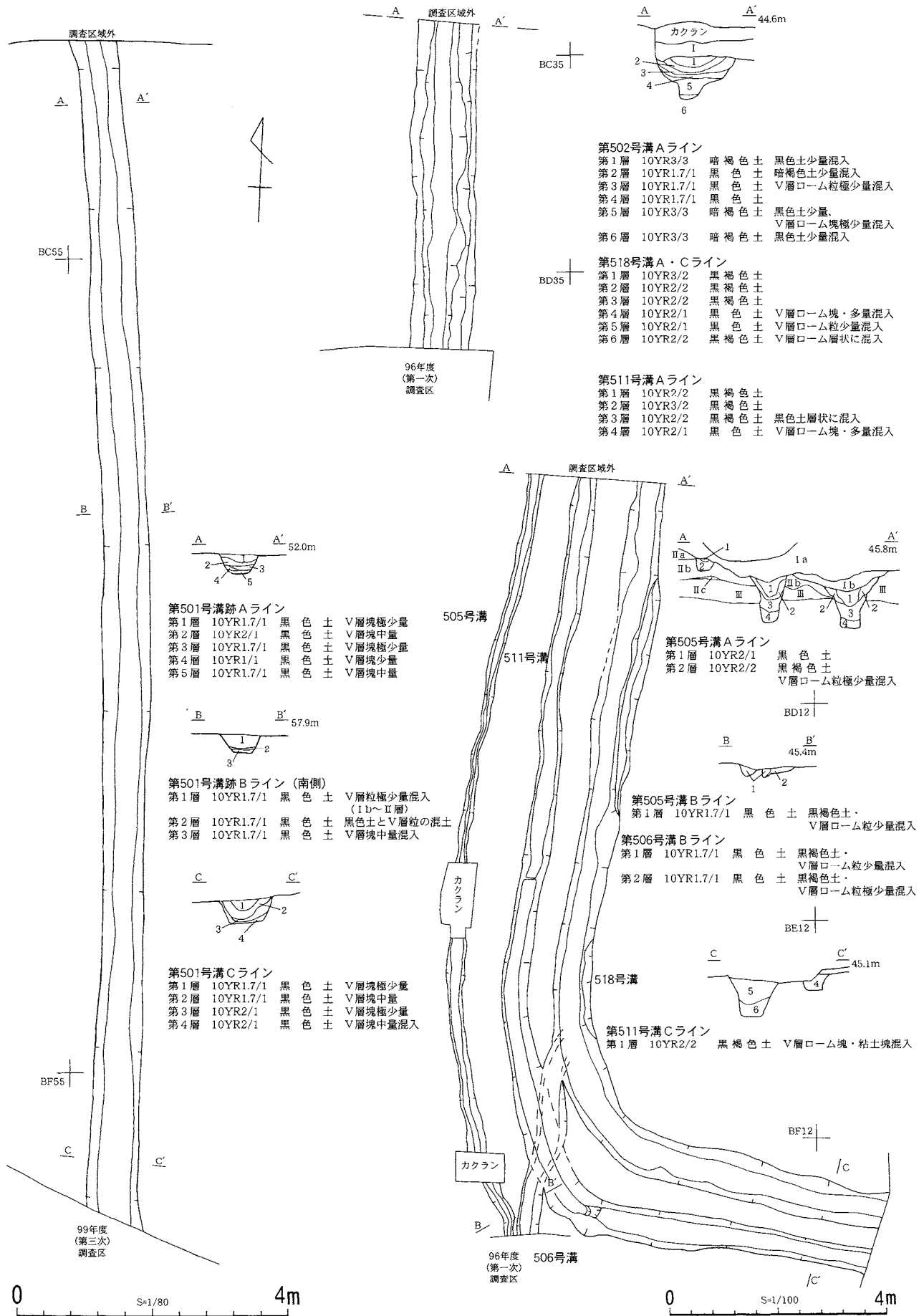


図87 第501・502・505・506・511・518号溝跡

IIb層を壁とし、IIb～V層までを底面とする。

【堆積土】 黒色土を主体とし、2層に分層される。

【出土遺物】 なし。

【小結】 遺構外に延びていることから全体像は不明だが、さらに南北へ向かってのびるとも、隣接する第511・518号溝跡ともに東方向に曲がって行くとも考えられる。構築時期は不明である。

第506号溝跡 (図87)

【位置・確認】 BE・BF-13の各グリッドに位置している。南側はV層上面で確認したが、北側は検出できなかった。

【重複】 第511・518号溝跡と重複すると思われる。堆積土から第511号溝跡とは同時期か本遺構の方が新しい構築と思われるが、第518号溝跡との新旧は不明である。

【形態・規模】 検出部分は幅約40cm、長さ約3.8mである。

【壁・底面】 壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は起伏がある。壁はV層か第511号溝跡の覆土である。底面はV層である。

【堆積土】 黒色土を主体として、2層に分層される。

【出土遺物】 なし。

【小結】 時期等詳細は不明である。

第510号溝跡 (図89)

【位置・確認】 BC-35・36の各グリッドに位置している。III層上面で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 検出された部分では幅約30cm、長さ約2.6mである。上部は削平されている。

【壁・底面】 底面から外傾するように立ち上がる。底面は丸い。III層を壁、IV層上面を底面とする。

【堆積土】 黒色土を主体とする単層である。

【出土遺物】 なし。

【小結】 時期等詳細は不明である。

第511号溝跡 (図87)

【位置・確認】 BB～BF-13、BF-11・12の各グリッドに位置している。I層により上部が削平されている。III層上面で確認した。

【重複】 第506号溝跡と重複する。本遺構より新しいと思われる。

【形態・規模】 検出された部分では幅約30～70cm、長さ約18.4mである。調査区際で東方向に向かって曲がっていく。

【壁・底面】 壁は垂直気味に立ち上がった後、上部で外傾する。底面は平坦である。III～VI層を壁とし、VI層を底面とする。

【堆積土】 黒褐色土を主体として4層に分けられる。4層は黒色土とV層ブロックの混土である。

【出土遺物】 なし。

【小結】 堆積土・形態が似ているため、第518号溝跡とセットで機能していた可能性がある。構築時期は不明である。

第514号溝跡 (図89)

【位置・確認】 A区東側、BF・BE-42グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模】 幅約20cm、長さ3.4m、深さ約6cmの狭く浅い溝である。

【底面】 Ⅲ層を底面とし、ほぼ平坦である。

【堆積土】 Ⅱ層起源の黒色土であり、自然堆積と考えられる。

【出土遺物】 無し。

第518号溝跡 (図87)

【位置・確認】 BB~BE-12、BE-12・13、BF-11・12の各グリッドに位置している。Ⅰ層により上部が削平されている。Ⅲ層上面で確認した。

【重複】 第506号溝跡と重複すると思われる。新旧は不明である。

【形態・規模】 検出された部分では幅約50~90cm、長さ約17mである。調査区際で東方向に向かって曲がっていく。第511号溝跡よりやや大きく、掘り込みも深い。

【壁・底面】 壁は垂直気味に立ち上がった後、上部で外傾する。底面は平坦である。Ⅲ~Ⅵ層を壁とし、Ⅵ層を底面とする。

【堆積土】 黒褐色土を主体とし、6層に分けられる。Aラインの最下層は黒色土とⅤ層ブロックを多量に含む。

【出土遺物】 土師器坏の破片が出土している (図98)。

【小結】 堆積土・形態が似ているため、第511号溝跡とセットで機能していた可能性がある。構築時期は不明である。

第519号溝跡 (図88)

【位置・確認】 C区北側BV-24~31グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。

【重複】 第518・520・521号建物跡と重複関係にあり、本遺構が新しい。また、東側ではビニルハウスの柱穴と思われる小穴と重複関係にあり、本遺構の方が古い。

【形態・規模】 幅1.32m~0.48m、深さ15~25cmの溝が東西方向に約27m続いている。

【壁・底面】 壁・底面共にⅢ~Ⅳ層を掘り込んでいる。断面形は底面が丸みを帯びた逆台形状である。全体的に底面には鋤痕等による凹凸は見られない。

【堆積土】 Ⅱ~Ⅲ層を起源とする砂質土層を主体とする。水の影響による自然堆積と考えられる。

【出土遺物】 堆積土中から土師器小片等が出土したが、図示しうるものはない。

第520号溝跡 (図88)

【位置・確認】 BW-15、BW~CG-16、CG~CL-15の各グリッドに位置している。北側をⅢ層下面で、南側をⅤ層上面で確認した。上部をⅠ層により削平されている。

【重複】 第506号焼土遺構と重複する。第506号焼土遺構の方が古い。

【形態・規模】 幅約40cm、残存部分の長さは約54.2mである。

【壁・底面】 壁は垂直気味に立ち上がった後、上部で外傾する。底面は平坦である。Ⅲ~Ⅴ層を壁、Ⅴ層を底面としている。

【堆積土】 黒色土を主体とし、6層に分けられる。第6層は黒色土に量に差はあるが、ロームブロッ

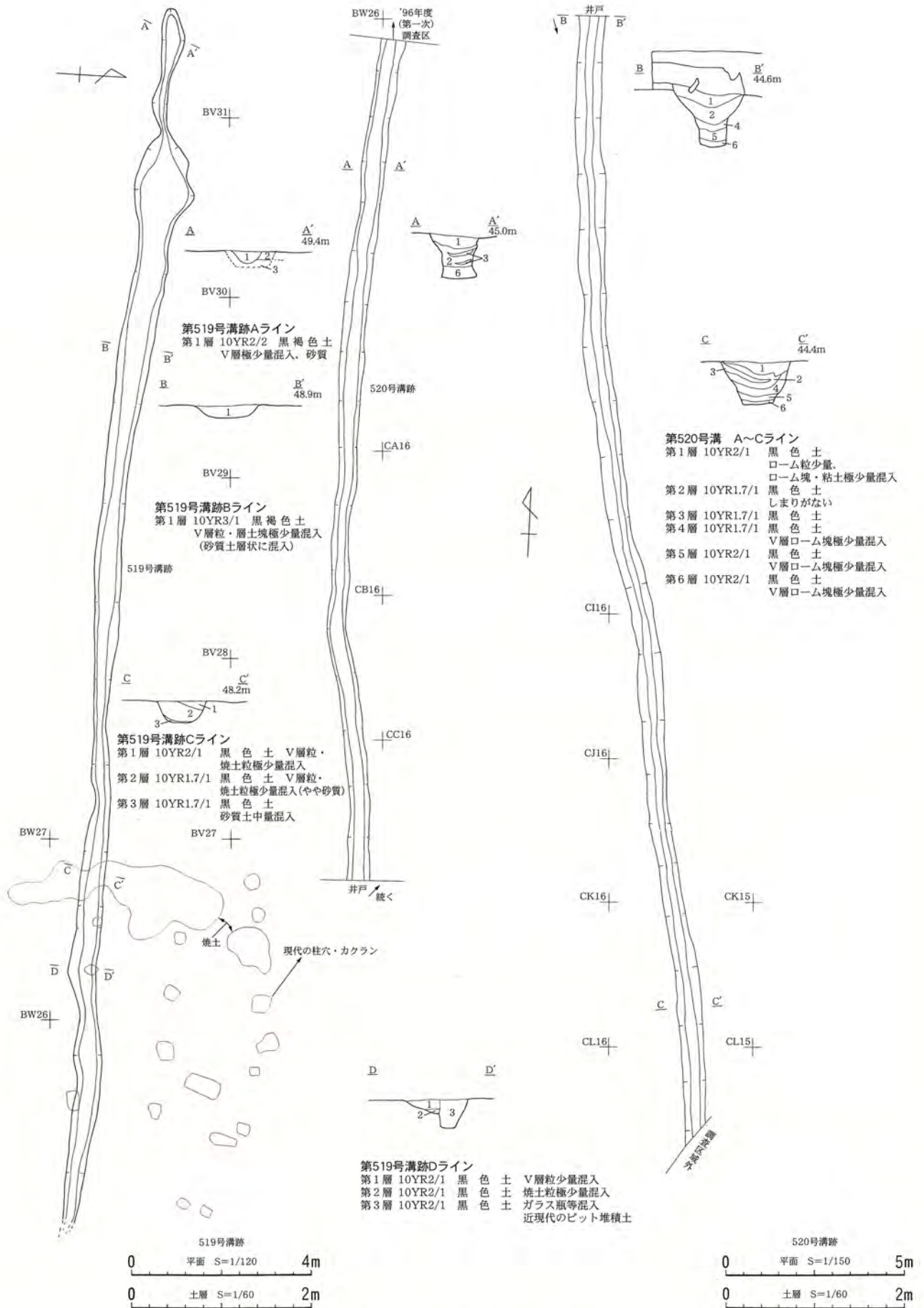


図88 第519・520号遺跡

クが混じっている。

[出土遺物] 土器片が出土しているが、図示しうるものではなかった。

[小結] 第1次調査時の第13・32号溝跡につながるとされる。構築時期は不明である。

第521号溝跡 (図89)

[位置・確認] BY～CC-25、CC～CG-26の各グリッドに位置している。Ⅲ層中で確認した。

[重複] 重複はしないが第522号溝跡と連結する。新旧は不明である。

[形態・規模] 幅約35～80cm、残存部分の長さは約37.8mである。

[壁・底面] 壁は底面からゆるやかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。Ⅲ層を壁、Ⅲ、Ⅳ層を底面とする。

[堆積土] 黒色土を主体とし、2層に分けられる。

[出土遺物] 土師器甕の口縁～胴部が出土している (図98)。

[小結] 時期等は詳細不明だが、第523号溝跡につながるとされる。

第522号溝跡 (図89)

[位置・確認] CC-24・25、CD-21～24、CE-17～20、CF-16・17の各グリッドに位置している。Ⅲ層中で確認した。

[重複] 重複はしないが第522号溝跡と連結する。新旧は不明である。

[形態・規模] 幅約35～65cm、残存部分の長さは約26.4mである。

[壁・底面] 壁は底面からゆるやかに外傾して立ち上がる。底面は平坦である。Ⅲ～Ⅳ層を壁、Ⅴ層を底面とする。

[堆積土] 黒色土を主体とし、3層に分けられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期等詳細は不明である。

第523号溝跡 (図89)

[位置・確認] BV～BX-24の各グリッドに位置している。Ⅱ層中で確認した。

[重複] 第521号住居跡と重複する。第521号住居跡の方が古い。

[形態・規模] 幅約40cm、残存部分の長さは約7.4mである。

[壁・底面] 壁は底面からゆるやかに立ち上がる。底面は平坦もしくは丸みを帯びる。Ⅱ層を壁とし、Ⅲ層を底面とする。

[堆積土] 黒色土を主体とし、2層に分けられる。

[出土遺物] なし。

[小結] 時期等詳細は不明だが、第522号溝跡につながるとされる。

3 焼土遺構

焼土遺構は全部で12基検出されている。概ね火を焚いた跡であると判断できるものが多いが、第506号焼土遺構のように沢地形の浅い窪地に広範囲に広がりを持つものなどはその成因が何であるのか明確ではない。なお第1次調査区や周辺の遺跡においてもこのような現象が確認されている。

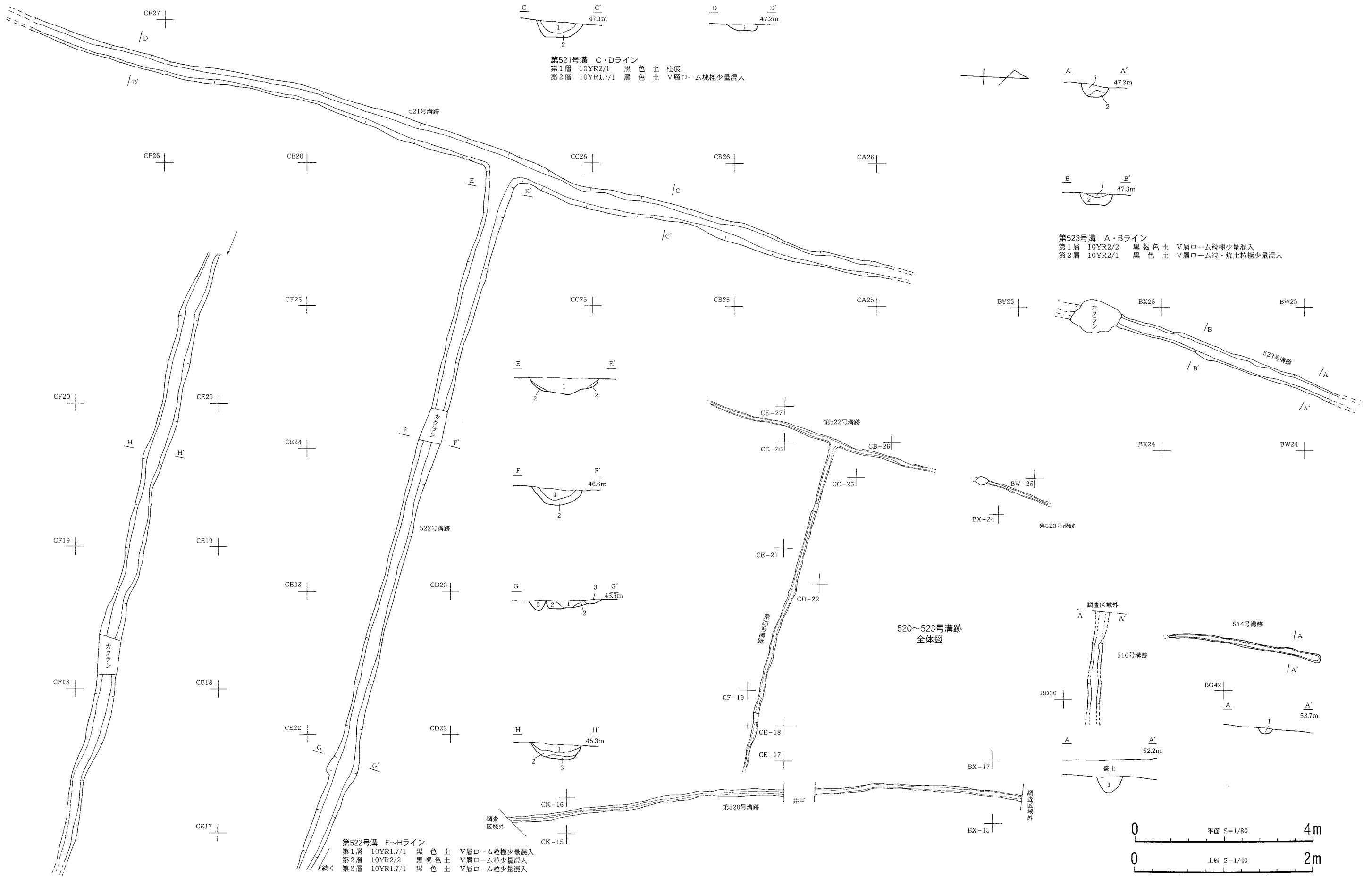


図89 第510・514・521~523号溝跡

第501号焼土遺構 (図90)

【位置・確認】 AY-58グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 長軸1.75m×短軸0.9mの不整な円形を呈する範囲が約6センチの厚さで皿状に被熱していた。

【堆積土】 Ⅲ～Ⅳ層が被熱している。

【出土遺物】 なし。

第502号焼土遺構 (図90)

【位置・確認】 BB-50グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 長軸0.75m×短軸0.3mの不整な円形を呈する範囲が最深約10cmの厚さで被熱している。

【堆積土】 Ⅲ～Ⅳ層が被熱している。

【出土遺物】 須恵器甕の破片が出土している。

第503号焼土遺構 (図90)

【位置・確認】 BE-54グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 長軸0.4m×短軸0.3mのほぼ円形の範囲が最深約4cmの厚さで被熱している。

【堆積土】 Ⅲ～Ⅳ層が被熱している。

【出土遺物】 なし。

第504号焼土遺構 (図90)

【位置・確認】 BE-53グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 長軸0.35m×短軸0.30mの円形の範囲が最深約2cmの厚さで被熱している。

【堆積土】 Ⅲ～Ⅳ層が被熱している。

【出土遺物】 なし。

第507号焼土遺構 (図91)

【位置・確認】 CG～CH-31・32グリッドに位置する。Ⅳ層上面に断続的に広がる焼土を確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 攪乱により一部破壊されているが、長軸2.2×短軸1.6mの不正な円形を呈する範囲が最深約7cmの厚さで被熱していた。

【堆積土】 被熱度合いにより2層に分層した。

【出土遺物】 なし。

第508号焼土遺構 (図91)

【位置・確認】 CD-21グリッドに位置する。第522号溝跡の底面を精査中に確認した。

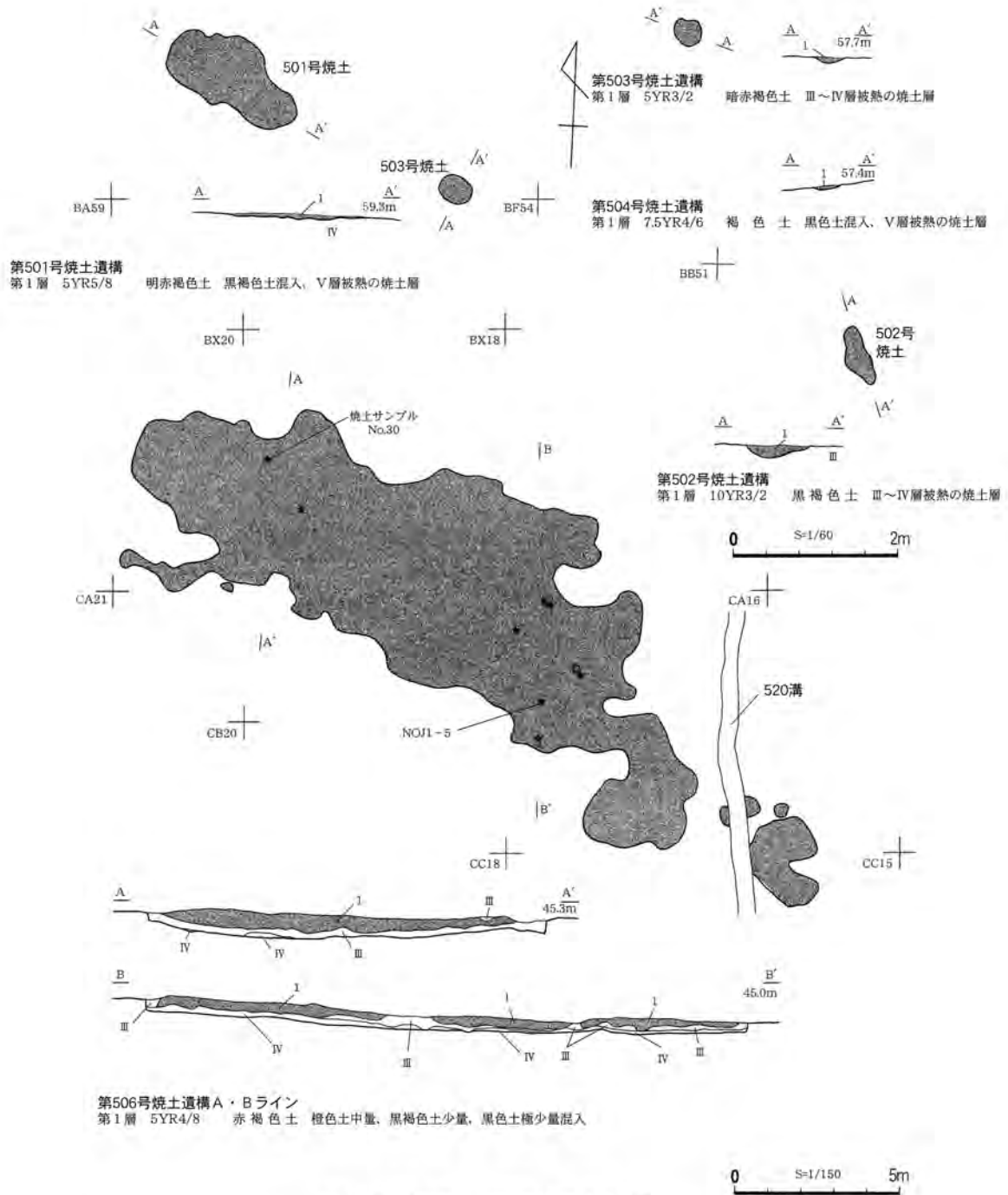


図90 第501~506号焼土遺構

〔重複〕 第522号溝跡と重複する。溝跡と同時期か溝跡より新しい。

〔形態・規模〕 長軸0.6m×短軸0.4mの不正な円形を呈する範囲が最深約5cmの厚さで被熱していた。

〔堆積土〕 V層が被熱している。炭化物を含む。

〔出土遺物〕 南側で土師器片が出たが、溝跡に帰属する可能性が高い。

第509号焼土遺構 (図91)

【位置・確認】 CE-18グリッドに位置する。第522号溝跡の精査中に底面から壁にかけて被熱した範囲を確認した。

【重複】 第522号溝跡と重複する。新旧関係は不明である。

【形態・規模】 長軸2.0m×短軸0.7mの不整な円形を呈する範囲が最深約6cmの範囲で被熱している。

【堆積土】 Ⅲ～Ⅳ層が被熱している。

【出土遺物】 なし。

第510号焼土遺構 (図91)

【位置・確認】 CE・CF-21グリッドに位置する。Ⅳ層上面で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 長軸3.42m×短軸1.95mの不整な円形を呈する範囲が最深約7cmの厚さで被熱している。

【堆積土】 Ⅲ層が被熱している。

【出土遺物】 なし。

第511号焼土遺構 (図91)

【位置・確認】 CH-15グリッドに位置する。Ⅳ層上面で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 長軸1.4m×短軸1.15mの不整な円形を呈する範囲が最深約10cmの厚さで被熱している。

【堆積土】 黒褐色土を主体とする単層である。

【出土遺物】 なし。

第512号焼土遺構 (図91)

【位置・確認】 BY-31グリッドに位置する。Ⅲ層中で確認した。

【重複】 なし。

【形態・規模】 長軸0.7m×短軸0.45mの不整な円形を呈する範囲が最深約5cmの厚さで被熱している。

【堆積土】 Ⅲ～Ⅳ層が被熱している。

【出土遺物】 なし。

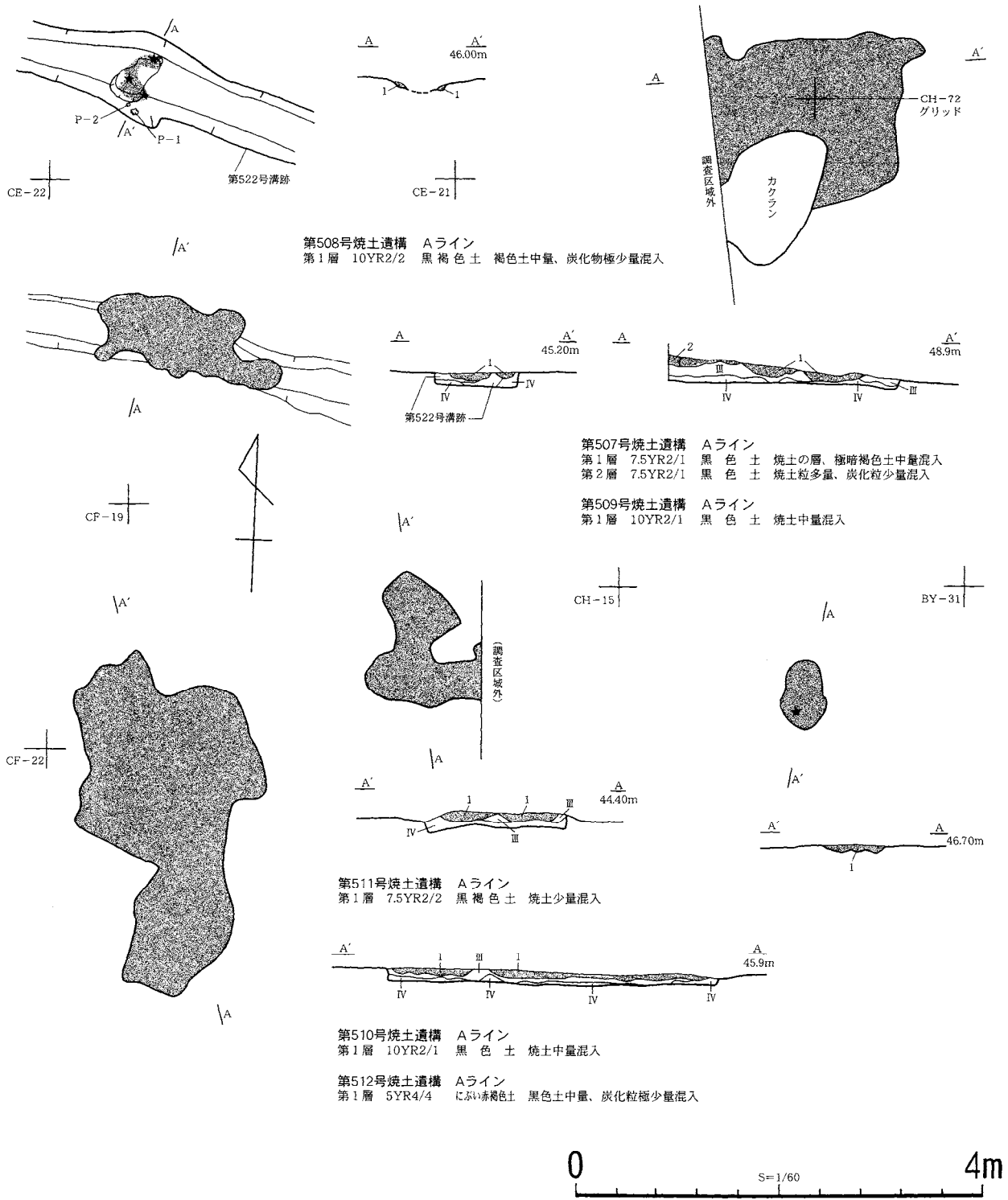


図91 第507～512号焼土遺構

4 並列溝状遺構

【概要】 第5次調査においては7箇所の並列溝状遺構が確認された。C区からその全てが出土している。遺構検出面は全てⅢ層の黒色土上面である。検出段階でまとまりを見極めた後、遺構番号を付し、さらに個々の溝にも番号を付している（○番号）。全体的なあり方としては軸方向を南北方向にして斜面の傾斜に対して直行するように配置されている。第501号などにおいては軸方向が傾いているが、この付近には沢状の地形（沢4）があるため、水の流れをせき止め、土が流れないように軸方向を変化させたものと考えられる。本種の遺構の帰属時期であるが、第504号並列溝状遺構が第519号建物跡掘立部の上面で検出されたこと、第506号並列溝状遺構が第519号建物跡外周溝に堆積した白頭山－苦小牧火山灰を掘り込んでいること等から、平安時代以降（10世紀初頭以降）の遺構であることは確実である。

第501号並列溝状遺構（図92・98）

【位置】 C区中央やや北寄り、CA・CB-25・26グリッドに位置する。

【規模・形態】 12本の溝跡により構成されているが、全て平行に並んでいるわけではなく、④～⑥、⑦～⑨、⑩～⑭のまとまりで僅かに軸方向を変えて並んでいる。軸方向は概ね北西－南東方向である。溝は幅24～40cm、長さ0.92m～2.8m、深さ6～20cmと規模にばらつきがあるが、深さに関しては軸方向のまとまり毎にある程度一定であるように見える。

【重複】 第525号溝跡と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。

【堆積土】 Ⅱ層起源の黒褐色土を主体とし、炭化物、土師器片なども含んでいる。本遺構及び溝間から採取した土壌サンプルからはプラント・オパールが検出され、畝跡であった可能性が示唆されている。（第VI章参照）また、堆積土中から採取された炭化物は放射性炭素年代測定にかけられたが、推定される遺構の年代と大きくかけ離れた値がでていたため、これらの炭化物は基本土層中に含まれていたものが耕作等により巻き上げられたものと考えられる（第VI章参照）。

【出土遺物】。溝⑫から土師器甕口縁部破片が出土している。

第502号並列溝状遺構（図92）

【位置】 C区中央やや西寄り、CF-28・29グリッドに位置する。

【規模・形態】 長さ0.8m～1.6mの6本の溝跡で構成される。ほぼ全て平行に並んでおり、軸方向は概ね南北方向である。

【重複】 無し。

【堆積土】 Ⅱ層起源の黒褐色土を主体としている。

【出土遺物】 図示できる様な遺物は出土していない。

第503号並列溝状遺構（図92）

【位置】 C区北西側、BY-30・31グリッドに位置する。

【規模・形態】 長さ1.7m～2.4mの4本の溝で構成される。ほぼ全て平行に並んでおり、軸方向は概ね南北方向である。

【重複】 無し。

【堆積土】 Ⅱ層起源の黒褐色土を主体としている。

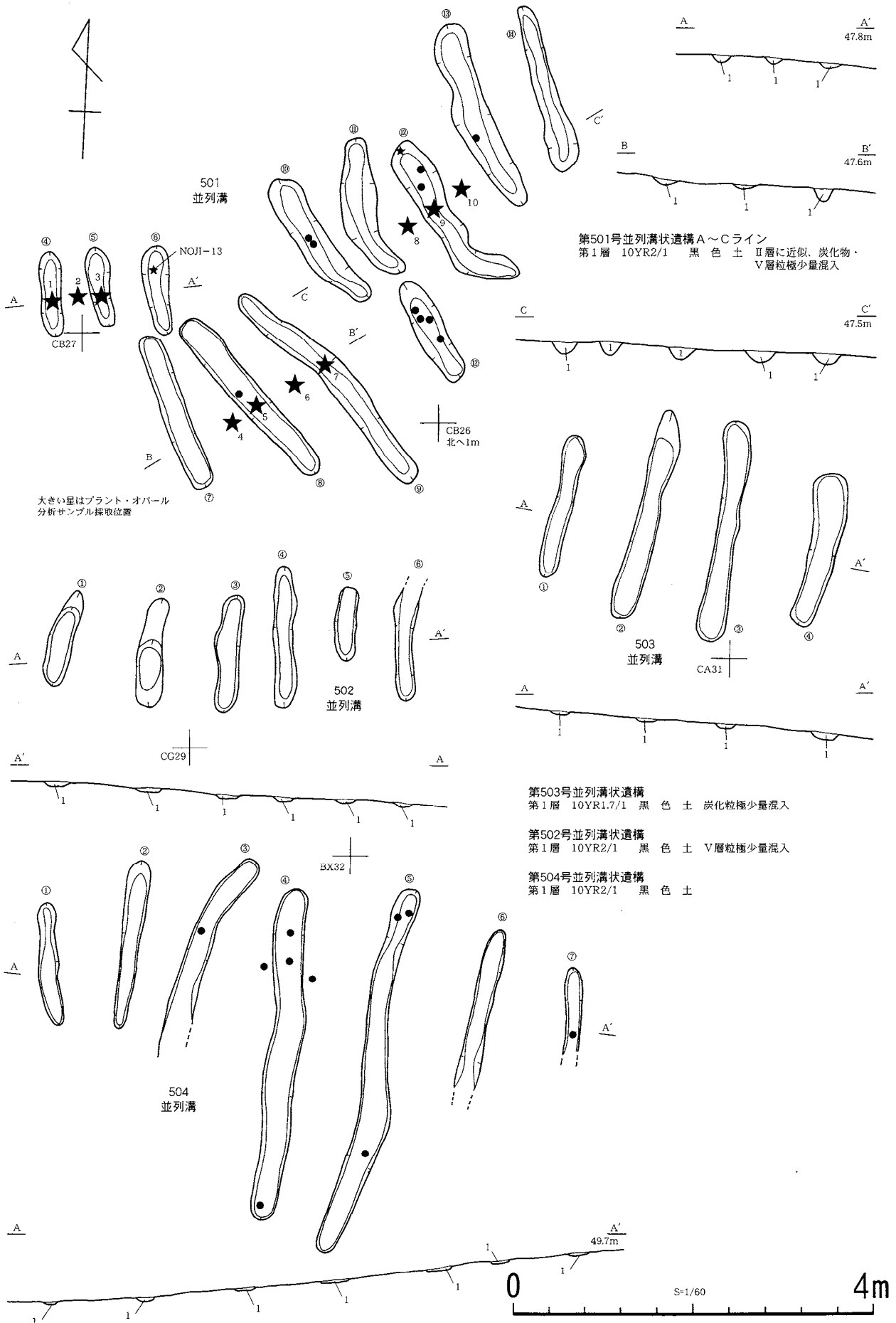


図92 第501~504号並列溝状遺構

【出土遺物】 図示できる様な遺物は出土していない。

第504号並列溝状遺構（図92）

【位置】 C区北西側、BX-31・32グリッドに位置する。

【規模・形態】 長さ1.4m～4.2mの7本の溝から構成されている。ほぼ全て平行に並んでおり、軸方向は概ね南北方向である。

【重複】 無し。

【堆積土】 II層起源の黒褐色土を主体としている。

【出土遺物】 図示できる様な遺物は出土していない。

第505号並列溝状遺構（図93）

【位置】 C区中央西寄り、CD-27～29グリッドに位置する。

【規模・形態】 長さ1.2m～3.1mの8本の溝から構成されている。一部を攪乱により失っている。ほぼ全て平行に並んでおり、軸方向は概ね南北方向である。

【重複】 無し。

【堆積土】 II層起源の黒褐色土を主体としている。

【出土遺物】 図示できる様な遺物は出土していない。

第506号並列溝状遺構（図93）

【位置】 C区北側、CW・CX-26・27グリッドに位置する。

【規模・形態】 長さ2.5mほどの5本の溝から構成されている。ほぼ全て平行に並んでおり、軸方向は概ね南北方向である。

【重複】 第521号建物跡外周溝に堆積した白頭山-苦小牧火山灰を掘り込んで構築しているため、同建物跡より本遺構の方が新しいことがわかる。

【堆積土】 II層起源の黒褐色土を主体としている。

【出土遺物】 図示できる様な遺物は出土していない。

第507号並列溝状遺構（図93）

【位置】 C区北西端、BU-32グリッドに位置する。

【規模・形態】 長さ1.6m程の2本の溝から構成されている。平行に並んでおり、軸方向は概ね南北方向である。

【重複】 第538号土坑と重複関係にあり、本遺構の方が古い。第538号土坑は、第519号溝跡と同様の堆積土が見られることから、同時期の遺構と考えられる。さらに第519号溝跡は第521号建物跡上面に確認された近現代の柱穴に壊されていることより、本遺構は平安時代以降近現代以前の時間幅に収まると考えられる。

【堆積土】 II層起源の黒褐色土を主体としている。

【出土遺物】 図示できる様な遺物は出土していない。

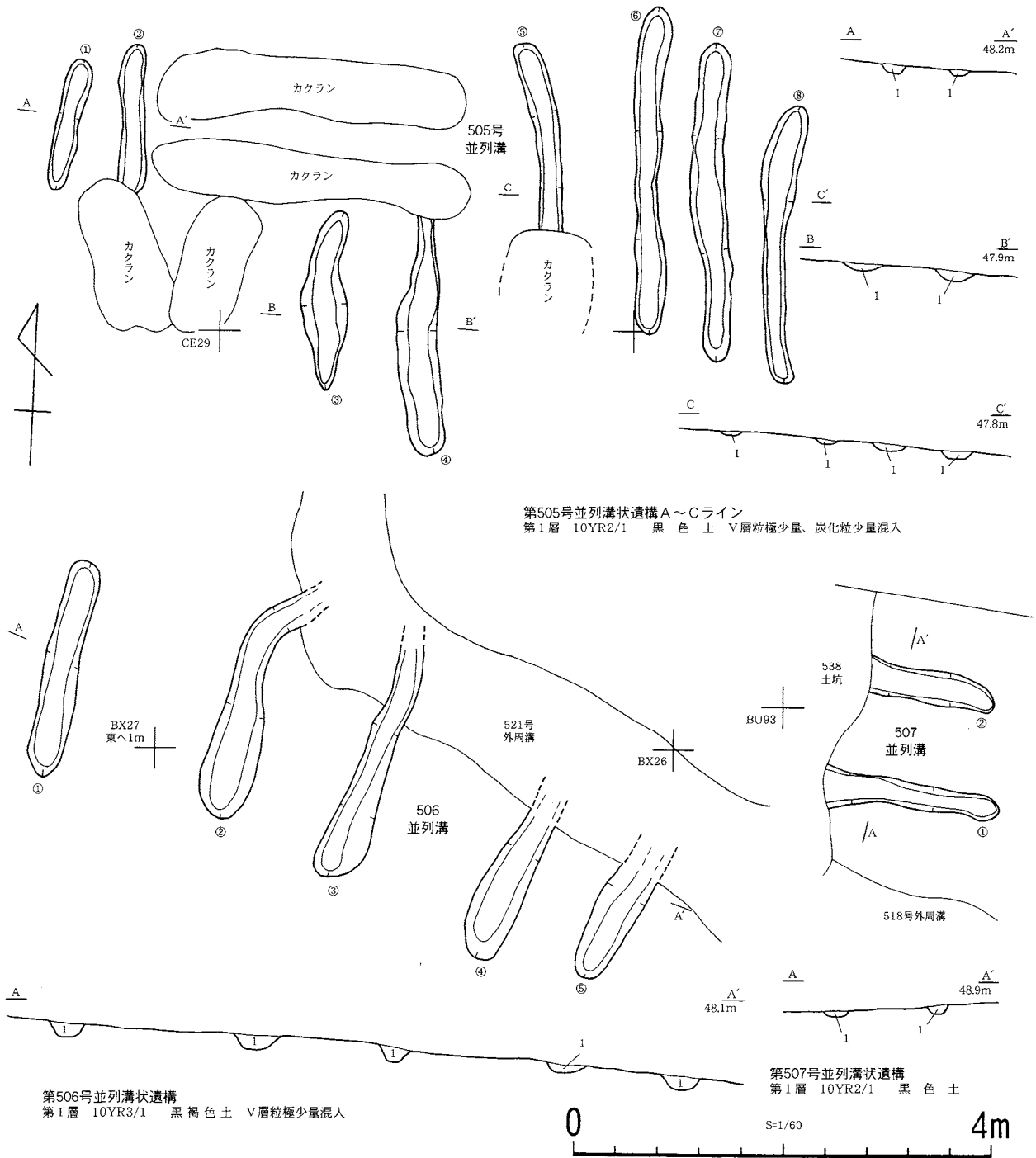


図93 第505~507号並列溝状遺構

5 柱穴跡（ピット）

第501～505号ピット

【位置・確認】 A区西側、BD-56・57グリッドに位置する。V層面で確認した。

【重複】 無し。

【形態・規模・底面】

5本の柱穴が確認されている。ピット501～503は平面形がほぼ正方形から長方形であり、残りの2本は円形に近い。前三者はほぼ直角に配置されており、特にピット501・502の底面には長方形の深い部分が見られる。したがって本来的に掘立柱を構成する可能性があるのは前三者であると考えられる。

【堆積土】 Ⅲ層起源の黒色土を主体とする。柱痕等は見られなかった。

【出土遺物】 無し。

【小結】 本遺構は遺物の出土を見ないため帰属時期については不明であるが、ピット501等の底面に

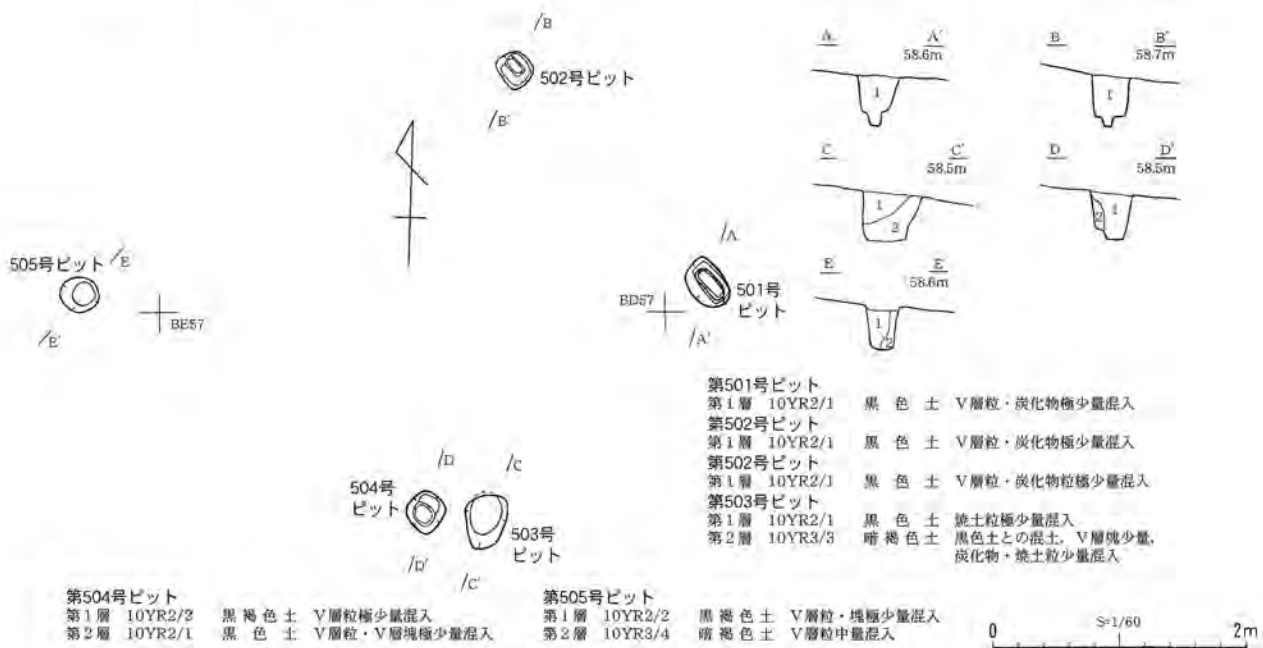


図94 第501～505号ピット

見られる長方形の掘り込みは、本遺跡平安時代の建物跡支柱穴等によく見られる構造である。

第522～525、530～532号ピット（図95）

【位置・確認】 BC・BD-33・34グリッドに位置する。全てⅢ層下面で確認した。【重複】 他の遺構との重複はないが、第524号ピットは重複する3つのピットに1つの番号を付している。南側の小さなピットは隣接するピットより古いが、大きな2つのピットの新旧は不明である。【形態・規模】 以

	ピット522	ピット523	ピット524	ピット525	ピット530	ピット531	ピット532
長軸×短軸	34cm×30cm	48cm×38cm	40～42cm×38～40cm	30cm×26cm	30cm×28cm	32cm×28cm	30cm×28cm
深 さ	70cm	26cm	52～64cm	48cm	20cm	26cm	70cm

下に個々のピットの計測値を示す。深さは約20～70cmである。

【壁・底面】壁は底面から外傾して立ち上がるもの（522、525、530、531、532）と、ほぼ垂直に立ち上がるもの（523、524）とがある。底面は平坦なもの（523、525）、平坦だが一箇所細く落ち込むもの（524）、かなりせまくなっているもの（522、532）、丸くなるもの（530、531）がある。IV、V層を壁、V層を底面とする。【堆積土】黒褐色土・暗褐色土を主体とする。第522・524・525号ピットは堆積土に微量の炭化物を含む。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細は不明。配置に規則性は見られない。

第526号ピット（図95）

【位置・確認】BC-21グリッドに位置する。Ⅲ層上面で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸30cm×短軸25cmの円形を呈する。深さは約18cmである。【壁・底面】壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。Ⅲ層を壁・底面とする。【堆積土】黒色土を主体として、3層に分けられる。自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細は不明である。

第527号ピット（図95）

【位置・確認】BB-19グリッドに位置する。Ⅲ層中で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸20cm×短軸20cmの円形を呈する。深さは約32cmである。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。Ⅲ層を壁・底面とする。【堆積土】黒褐色土を主体として2層に分けられる。自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細は不明である。

第528・529号ピット（図95）

【位置・確認】BB-23グリッドに位置する。Ⅲ層下面で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸46～52cm×短軸36cmの円形を呈する。深さは約26～38cmである。以下に個々のピットの計測値を示す。IV・V層を壁、V層を底面とする。底面は第528号ピットで東側が低くなり、第529号ピットでは平坦である。【堆積土】第528号ピットは黒色土を主体とする単層、第529号ピットは黒色土を主体とした4層に分層した。いずれも自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細は不明。

	ピット528	ピット529
長軸×短軸	52cm×36cm	46cm×36cm
深 さ	38cm	26cm

第543号ピット（図96）

【位置・確認】CK-31グリッドに位置する。IV層下面で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸22cm×短軸16cmの方形を呈する。深さは約72cmである。【壁・底面】壁はほぼ垂直に立ち上がった後上部で外傾する。底面は平坦で、IV・V層を壁、V層を底面とする。【堆積土】黒褐色土主体の3層に分層した。自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細は不明である。

第544号ピット（図96）

【位置・確認】CM-29グリッドに位置する。IV層下面で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸32cm×短軸22cmの方形を呈する。深さは約28cmである。【壁・底面】壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。IV、V層を壁、V層を底面とする。【堆積土】黒褐色土を主体として2層に分けられる。自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細は不明である。

第545号ピット (図96)

[位置・確認] CK-27グリッドに位置する。IV層下面で確認した。[重複] なし。[形態・規模] 長軸30cm×短軸24cmの楕円形を呈する。深さは約64cmである。[壁・底面] 壁は狭い底面から外傾しながら立ち上がる。IV、V層を壁、V層を底面としている。[堆積土] 黒褐色土を主体として2層に分けられる。自然堆積と思われる。[出土遺物] なし。[小結] 時期等詳細は不明である。

第551号ピット (図96)

[位置・確認] CJ-24グリッドに位置する。V層上面で確認した。[重複] なし。[形態・規模] 長軸24cm×短軸18cmの楕円形を呈する。深さは約58cmである。[壁・底面] 壁は屈曲しながら立ち上がり、底面は東側が低くなる。V層を壁・底面とする。[堆積土] 黒色土を主体とし2層に分けられる。自然堆積と思われる。[出土遺物] なし。[小結] 時期等詳細は不明である。

第552号ピット (図96)

[位置・確認] CJ-24グリッドに位置する。V層上面で確認した。[重複] なし。[形態・規模] 長軸28cm×短軸26cmの方形を呈する。深さは約50cmである。[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。V層を壁・底面とする。[堆積土] 黒色土を主体とする単層である。自然堆積と思われる。[出土遺物] なし。[小結] 時期等詳細は不明である。

第554号ピット (図96)

[位置・確認] CK-16グリッドに位置する。III層下面で確認した。[重複] なし。[形態・規模] 長軸28cm×短軸20cmの長方形を呈する。深さは約20cmである。[壁・底面] 壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。IV、V層を壁、V層を底面とする。[堆積土] 黒褐色土を主体とする単層である。自然堆積と思われる。[出土遺物] なし。[小結] 時期等詳細は不明である。

第555号ピット (図96)

[位置・確認] BX~CA-21・22グリッドに9個のピットが位置する。IIb層下面で確認した。[重複] ピット5が第537号土坑跡と重複する。新旧は不明である。[形態・規模] 以下に計測値を示す。[壁・底面] 壁はほぼ垂直か外傾して立ち上がり、底面は平坦である。IIb・III層を壁、III層を底面とする。[堆積土] ピット7を除き、全て黒色土主体の単層である。ピット7は2層に黒褐色土を含む。自然堆積と思われる。[出土遺物] なし。[小結] 時期等詳細は不明である。配置に規則性は見られなかった。

	ピット1	ピット2	ピット3	ピット4	ピット5	ピット6	ピット7	ピット8	ピット9
長軸×短軸	24cm×24cm	25cm×24cm	29cm×26cm	27cm×27cm	22cm×22cm	20cm×20cm	30cm×20cm	20cm×17cm	28cm×26cm
深 さ	18cm	20cm	10cm	26cm	15cm	10cm	9cm	20cm	11cm

第558号ピット (図97)

[位置・確認] CG-23グリッドに位置する。V層上面で確認した。[重複] なし。[形態・規模] 長軸30cm×短軸24cmの円形を呈する。底面が開口部の真下から東にずれる。[壁・底面] 壁はごくせ

まい底面から斜めに立ち上がる。V・VI層を壁、VI層を底面とする。【堆積土】Ⅲ層に由来する黒色土を主体とする。自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細は不明である。

第559号ピット (図97)

【位置・確認】CF-21グリッドに位置する。V層上面で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸28cm×短軸24cmの円形を呈する。【壁・底面】壁は外傾して立ち上がり、底面は平坦である。V・VI層を壁、VI層を底面とする。【堆積土】Ⅲ層に由来する黒色土を主体とする。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細は不明である。

第560号ピット (図97)

【位置・確認】CG-16グリッドに位置する。V層上面で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸28cm×短軸26cmのいびつな円形を呈する。【壁・底面】壁は斜めに立ち上がり、底面は狭く平坦である。底面は開口部の真下から北にずれる。V・VI層を壁、VI層を底面とする。【堆積土】Ⅲ層に由来する黒色土を主体とする。自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細については不明である。

第561号ピット (図97)

【位置・確認】CG-20グリッドに位置する。V層上面で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸24cm×短軸22cmの円形を呈する。【壁・底面】壁は斜めに立ち上がり、底面は狭いが平坦である。底面は開口部の真下から西にずれる。V・VI層を壁、VI層を底面とする。【堆積土】Ⅲ層に由来する黒色土を主体とする。自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。【小結】時期等詳細は不明である。

第562号ピット (図97)

【位置・確認】BY-18グリッドに2個のピットが位置する。Ⅲ層中で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸22～24cm×短軸20～22cmの円形を呈する。深さは約8～12cmである。以下に個々のピットの計測値を示す。【壁・底面】いずれも壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。IV層を壁、V層を底面とする。【堆積土】ピット1は黒色土を主体とする単層、ピット2は暗褐色土を主体とする単層で焼土を少量含む。いずれも自然堆積と思われる。

	ピット1	ピット2
長軸×短軸	24cm×22cm	22cm×20cm
深さ	8cm	12cm

【出土遺物】なし。

【小結】時期等詳細は不明である。

第563号ピット (図97)

【位置・確認】BC-27グリッドに2個のピットが位置する。Ⅲ層中で確認した。【重複】なし。【形態・規模】以下に個々の計測値を示す。【壁・底面】ピット1はほぼ垂直に、ピット2は外傾して立ち上がる。

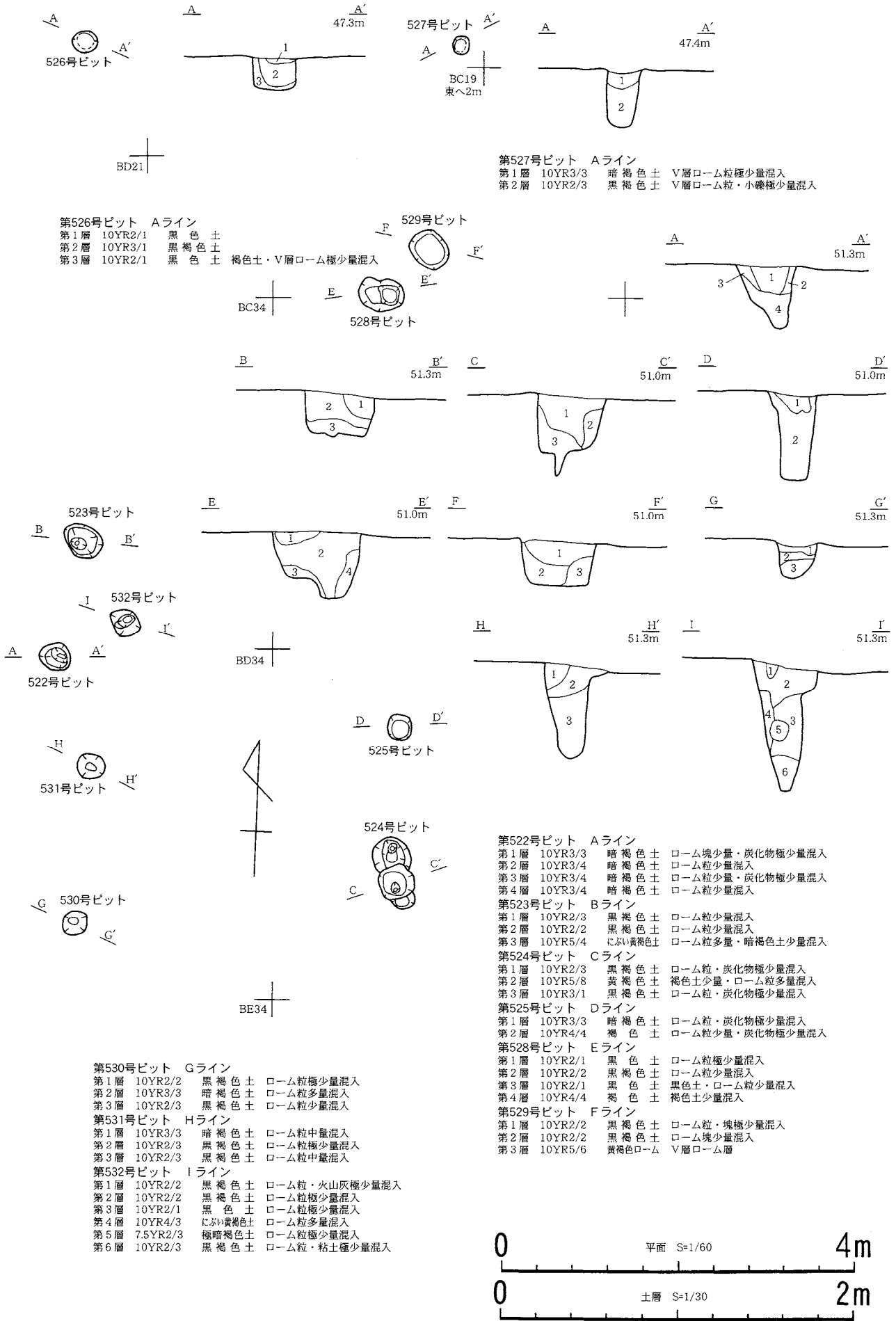


図95 第522～524・526～531号ピット

野尻(1)遺跡V

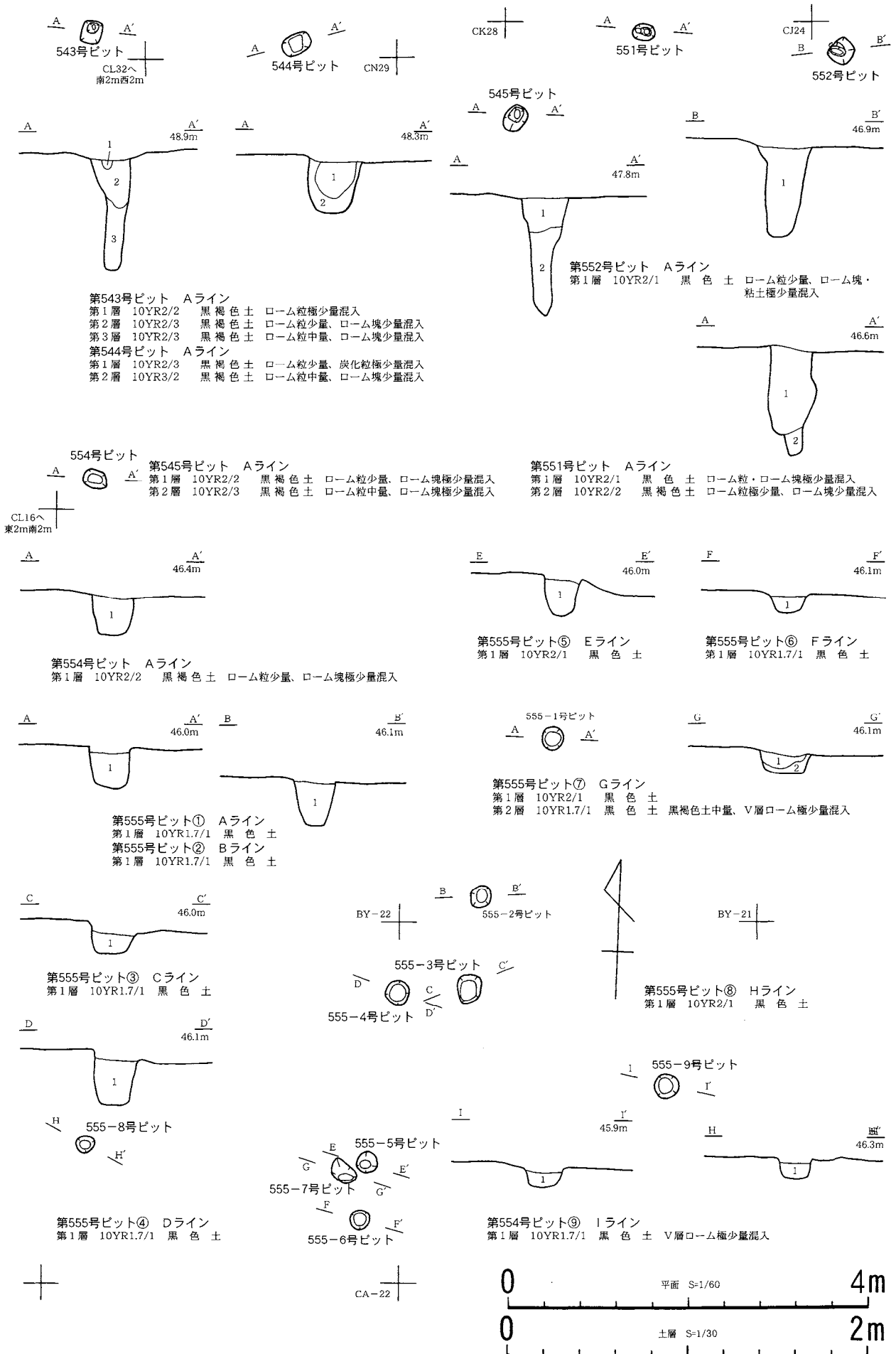


図96 第543~545・551・552・554・555号ピット

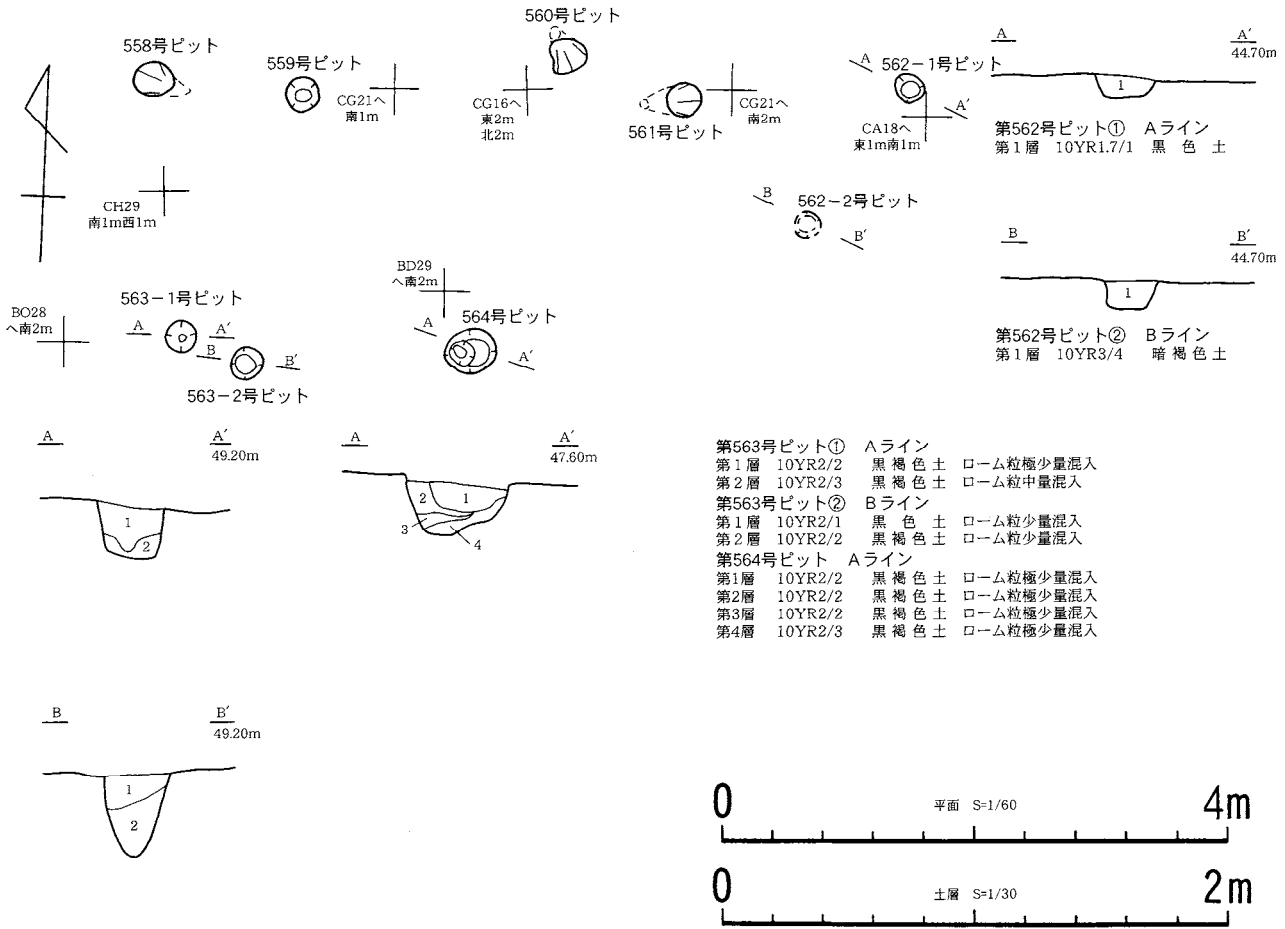


図97 第558～564号ピット

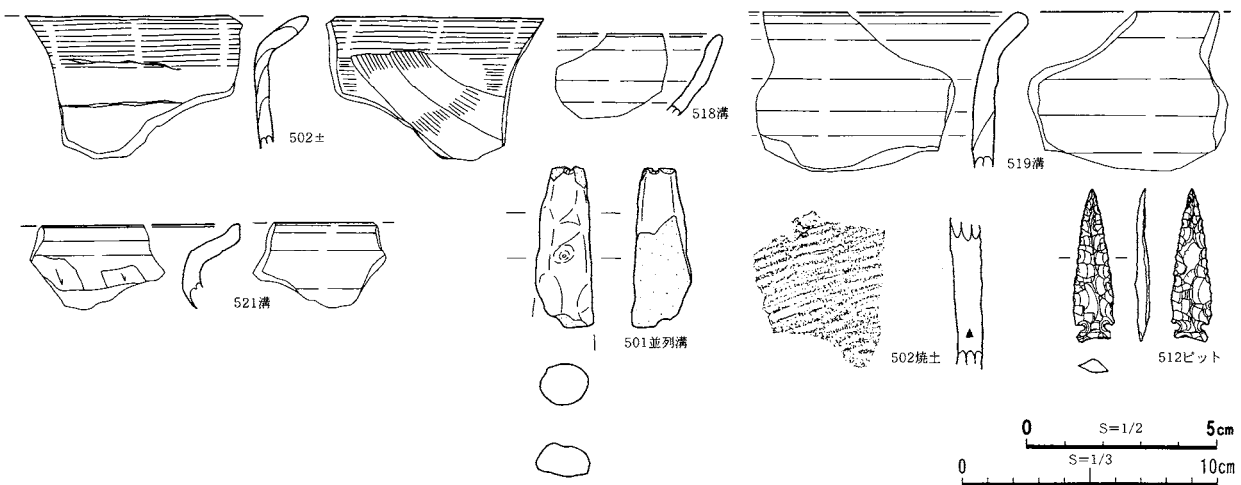


図98 古代以降の遺構出土遺物

また、ピット1の底面は平坦だが、ピット2の底面は先細りになる。いずれもⅢ層を壁、Ⅴ層を底面とする。【堆積土】いずれも黒褐色土を主体とし、2層に分けられる。自然堆積である。

	ピット1	ピット2
長軸×短軸	24cm×23cm	24cm×25cm
深さ	24cm	42cm

【出土遺物】なし。【小結】構築時期は不明だが、第510・510a号住居跡に付随する可能性がある。

第564号ピット (図97)

【位置・確認】BD-22グリッドに位置する。Ⅲ層中で確認した。【重複】なし。【形態・規模】長軸40cm×短軸35cmの楕円形を呈する。深さは約30cmである。【壁・底面】壁はほぼ外傾して立ち上がり、底面は東側で低くなる。Ⅲ層を壁、Ⅴ層を底面とする。【堆積土】4層に分けられる。自然堆積と思われる。【出土遺物】なし。【小結】第510・510a号住居跡に付随する可能性がある。

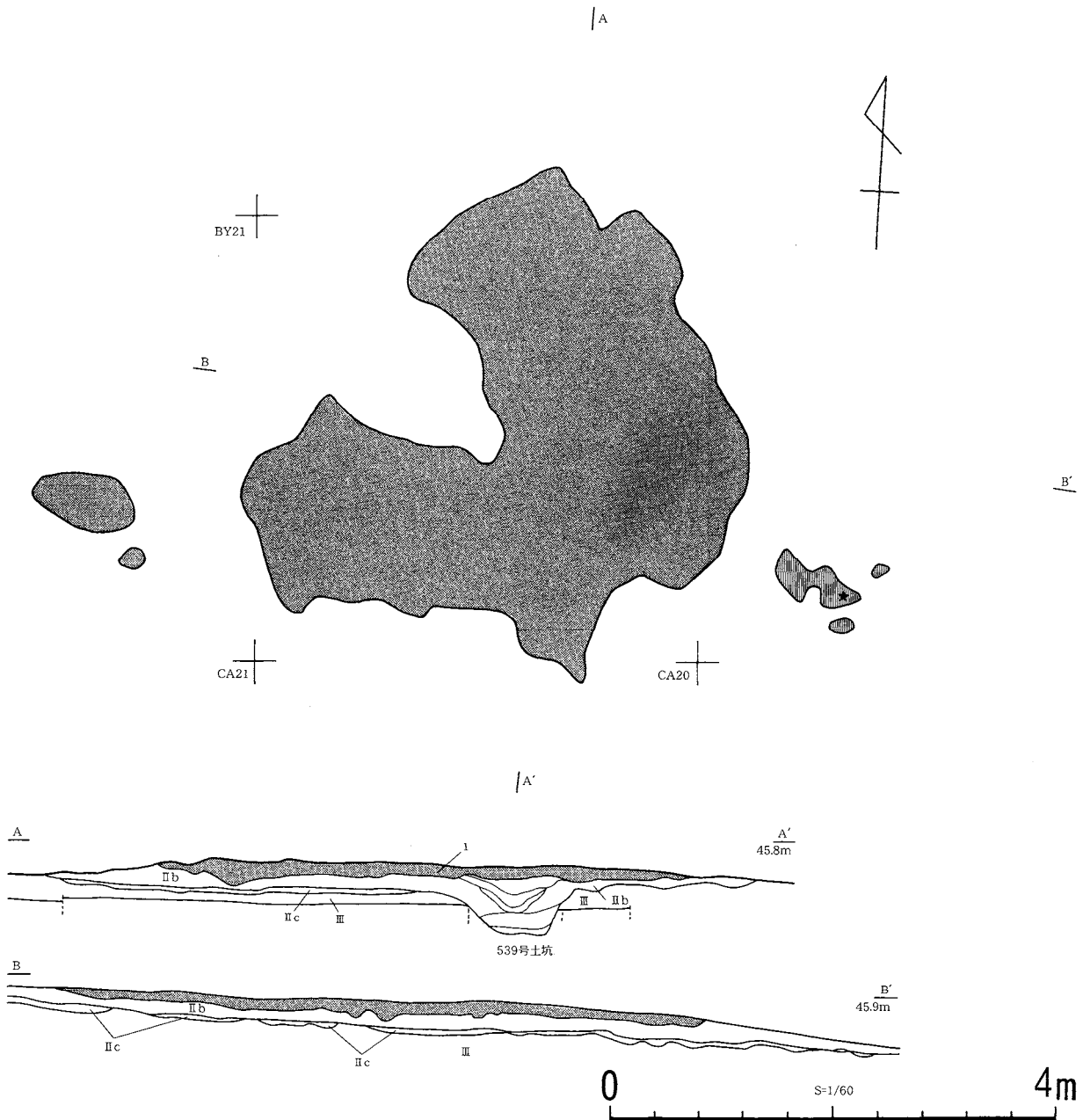


図99 第C区火山灰 (B-Tm) 範囲

第V章 遺構外出土遺物

調査区内の遺構外からは段ボール箱にして約10箱分の遺物が出土した。出土した遺物の時期は縄文時代前期初頭～近代までと幅が広いが、主体を占めるのは縄文時代と平安時代の遺物である。以下に各時期の遺物について紹介する。

第1節 縄文時代の遺物

前期初頭、前期中葉、中期末葉、後期前半、晩期の各時期の遺物が出土している。中でも後期前半の十腰内1b式相当の土器群がその大半を占める。

1はC区CF-29グリッドⅢ層最下部からⅣ層上面で出土した。胎土に繊維を多く含む丸底深鉢形土器であり、全体の約1/2が残存している。口唇端部は平らに面取りされ、やや外側に傾いている。口縁部は概ね平縁である。外面には太めのLRとRLが横位に回転施文され、羽状縄文を描出している。回転施文の際には原体上方の端部を意識して施文している。時期的には縄文時代前期初頭、長七谷地Ⅲ群土器に並行するものと考えられる。本遺跡の周辺では、松山遺跡等で同時期の遺物が少量出土している。

2・3は円筒下層a～b式土器の底部破片である。胎土中には繊維を含んでいる。4は縄文時代中期末葉の土器である。RLを縦方向に回転施文している。輪積み痕は外傾している。5・6は縄文時代晩期の深鉢形土器破片である。輪積み痕は内傾している。7以降は縄文時代後期前半の土器である。第Ⅳ章で先述したようにB区でまとまって出土している。全部で32個体分図示した。全ての土器に共通なことは、①粘土紐の輪積み痕が外傾していること。②胎土に砂粒を多く含むこと。の2点である。7はA区BC-57グリッドから出土している。深鉢形土器の胴部破片である。外面には渦巻き状のモチーフの一部に磨消縄文が見られる。沈線は、先の丸いやや太めの工具で描かれている。第3次調査報告書図82-8・9と同一個体であり、大津第7群土器に比定されている。8はB区BC-32グリッド付近より出土している。小型の鉢形土器と考えられるが破片のみであるため不明である。外面には先が尖り気味な工具を使用した幅の細い沈線が描かれている。口縁部付近では平行に胴部上半では楕円状のモチーフが描かれている。胎土・焼成共に良い。9はB区BE-24グリッド付近で出土している。やや胴部中～下半の膨らむ深鉢形土器である。口縁は波状を呈する。外面文様の沈線は8と同様の工具で描かれている。口縁部下位～胴部下半の広い範囲には入り組み状の文様が横方向に展開している。胎土、焼成共によい。10・11はB区BC-23グリッド付近で出土している。2点とも小型の壺形土器と考えられる。外面の沈線に使用される工具は8・9と同様である。ここまででわかるように、8～11は①先の尖った工具で断面がほぼ三角形の沈線が描かれる。②沈線施文後に器面をミガキ整形して粘土のはみ出し等を無くしている。③沈線のみで文様構成である。という共通の特徴を持っている。また、9に見られるように、胴部最大径の位置が器体中央から下半にあり、それに合わせて文様帯幅も広くなる特徴もうかがえる。

6～36はB区Ⅲ層の遺物集中地点1～4から出土した土器群である。これらに共通する点は、①包含状況のせいかもしれないが、胎土が砂っぽく、ざらついている。②深鉢形土器の胴部最大径は器体上半部にあり、口縁部が外反するいわゆる甕形の器形を呈する。③沈線の工具は先端が丸く、やや太めの工具である。(例外もあり)④磨り消し縄文(縄文施文後沈線縁取り)手法が見られるものが多い。⑤沈線間に条線が見られるものがある。等である。以下に特徴的な個体について記述する。

20は集中3出土である。口縁部は平縁であるが、3つ1単位の刻みがおそらく4単位つけられていたと推測される。沈線の工具は先端のやや尖る細いものであり、主文様には入り組み状の文様が描かれる。文様帯下端は器体の半分よりやや上の部分である。16は深鉢形土器の胴部から底部付近

の破片である。接合こそしなかったが、同一個体と考えられる。甕形の器形を呈すると思われる。胴部にはやや幅の広い沈線で方形渦巻き状のモチーフが描かれていると考えられる。沈線間には条線が見られるところと見られないところがあり、磨消縄文風の効果を描出している。26は壺形土器と思われるが定かではない。屈曲部(26a)には太めの沈線が横方向に描かれており、その下位に磨消縄文と円形刺突が見られる。円形刺突は沈線に沿ってそのやや内側にやや間隔をあけながら連続して施文されている。工具は極細な管状工具である。刺突方向は器面に対し垂直である。27はやや大きめの壺形土器と考えられる。色調は黒色であり、他の土器が灰色から肌色に近いのと比べるとやや異質である。文様は幅約5cmの細い粘土紐を貼り付けて描いている。粘土紐は器面に押しつけられた後に両裾を棒状の工具でなでつけている。剥落が激しいためどのようなモチーフを描いているのか判然としないが、27dにみられるようにいわゆるカニ文に類似するようなモチーフや、梯子状のモチーフなどが見られる。18～36はいわゆる大津第7群土器に比定される。28には胴部文様帯に崩れた乙字文が多段に施文されている。31の口縁は頂部には表裏に貼付が施されている。35は壺形土器である。頸部には2本の沈線が平行しており、その下位には乙字文が見られる。接合していないが、その下位と見られる破片には磨消縄文による渦巻き状もモチーフも見られる。これら大津第7群に類似する土器では、第2次調査で出土した資料に見られるような文様割付の下書き手法は見られなかった。

37はC区第518号建物跡外周溝から出土している。肩の角張る壺形土器と考えられる。口縁部は波状を呈し、波頂部内面には半円状のモチーフが沈線で描出されている。頸部には波頂部から平行沈線が縦位に垂下し、その下位にはクランク文が見られる。頸部に垂下する沈線の内側とクランク文の内側には条線が見られ、それ以外の部分には縄文が施文される。39はC区CE-15グリッドからの出土である。口縁直下には4.6cmとやや広めの無文帯を有する。その下位には磨消縄文による3角形基調のモチーフが描かれている。器厚は約0.4cmと薄い。40～52はB区遺物集中地点からの出土である。40は土器片利用の円盤状土製品である。表面には沈線による施文が見られる。41はキノコ形土製品である。42は土偶である。表裏面には細い竹管状工具の垂直刺突が見られる。脚の部分と頭部、左腕部分が欠損している。43・44は石鏃・45は二次加工のある剥片、46は磨製石斧、47以降は礫石器類である。53から59はその他の遺構外出土石器である。53は円筒下層式に伴うと考えられる石鏃である。表裏面共に押圧剥離により整形されている。54は石匙である。正面左側縁の剥離は53の石鏃のものによく似ている。素材剥片は縦長剥片であり、打点側を整形し摘み部としている。55は石鏃様の石器である。裏面には素材剥片の剥離面を残しており、特にバルブ周辺の整形が顕著である。正面両側縁は直接打撃により急角度に仕上げられている。57は搔器の刃部付近と考えられる。浅い角度の押圧剥離により刃部が半円状に整形されている。59は剥片である。整形された打面に直接打撃を加えて縦長な剥片を剥離している。ハンマーの材質が比較的軟らかかったためかバルブはあまり発達しない。両側縁には微細な剥離痕が見られる。

第2節 古代の遺物 (図104～106)

○遺物の出土状況

平安時代の遺物は主に遺構周辺のグリッドから出土しているため、本来的には各遺構の堆積土中に入ったものが、後世の削平及び遺構確認のための掘り下げ等により遺構と遊離してしまったものが大半を占める。ここでは特徴的なものを列記するにとどめる。

60は皿、61～65は土器器坏であり、61～63は内面が黒化処理されている。61と64には墨書が見られ、63には刻書が見られる。61は「田」と読めるが64は不明である。66～68は須恵器坏である。68の底面には数条単位で交差する沈線が見られる。このような状況は遺構内から出土した須恵器・土器器の坏や土器器長胴甕の底面にも見られる。底面中央部がやや上げ底になっているとその部分

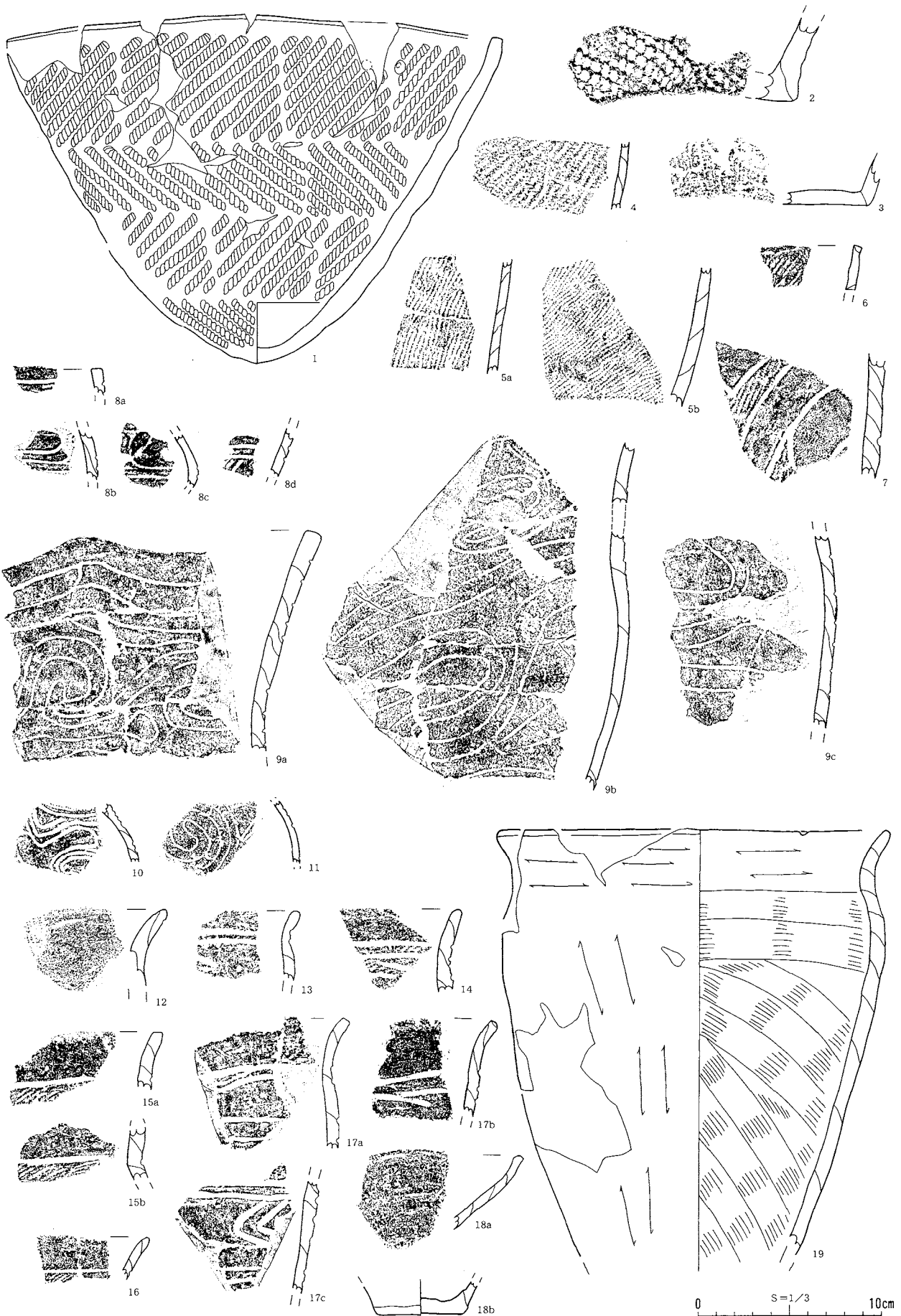


图100 遺構外出土遺物①

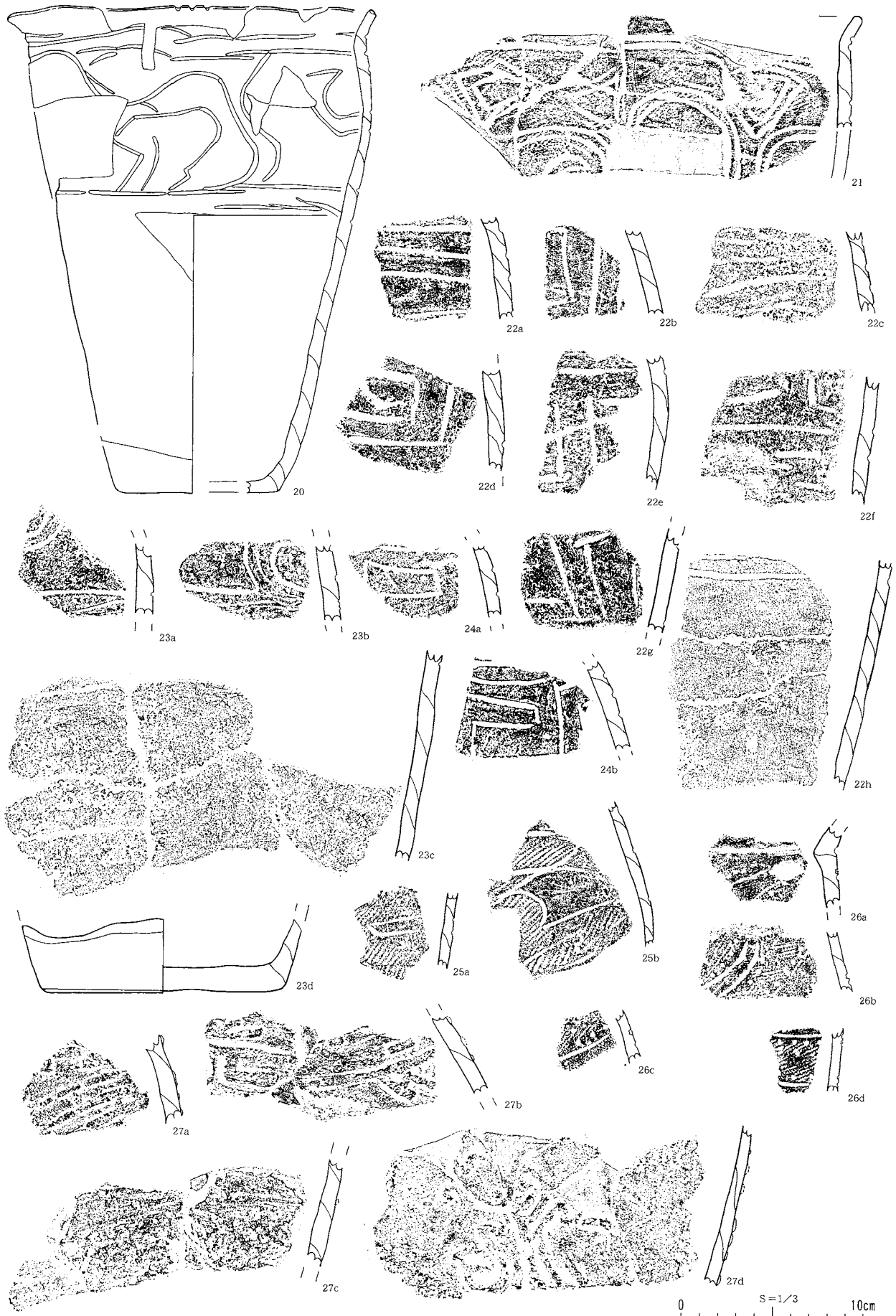


图101 遺構外出土遺物②



图102 遺構外出土遺物③

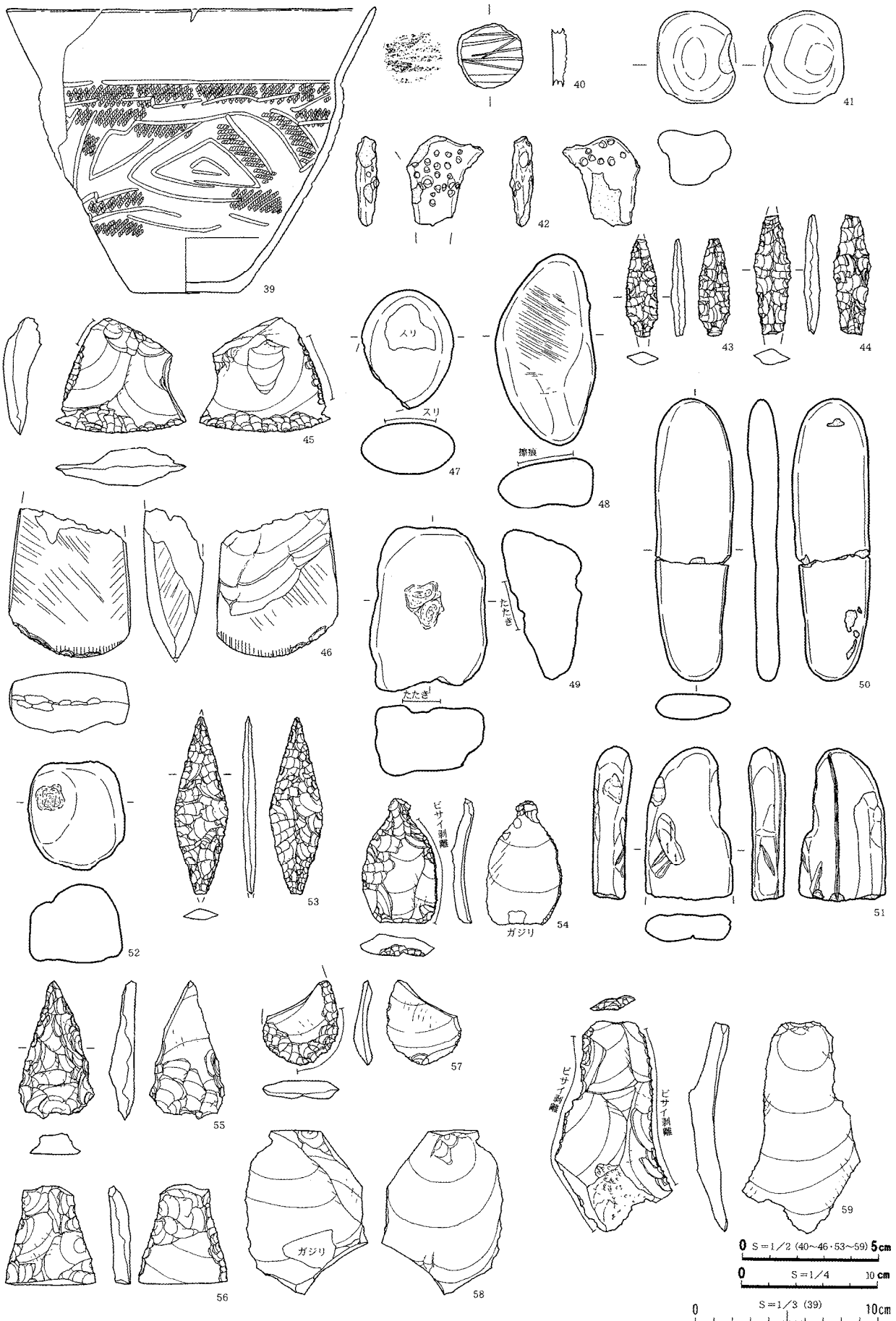


図103 遺構外出土遺物④

には見られないことがあるなど、これらは刻書とは明らかに違い意図的につけられたものではない可能性が高い。可能性としては器体製作終了後、乾燥段階で底面の乾燥を補助するために下に敷いた編み物や木片？の圧痕があげられる。

69は須恵器蓋の破片である。口端部は横方向に鋸状につまみ出され、下方は内面口端部と共にミガキにより整形されている。2次成形技術はロクロ成形である。体部は湾曲しながら下降している。頂部付近は欠失しているが残存部には火櫨様の変色部分があり、重ね焼きが行われていた可能性がある。頂部に摘みが付いていたかどうかは不明である。

70～78は須恵器長頸壺、79・80は須恵器短頸壺である。79は第506号建物跡外周溝出土遺物の52と同一個体である。81は鉢である。82～86は土師器長胴甕、88～96は須恵器甕である。

土製品 (図105-97～106-112)

遺構外からは土製品が16点出土している。内訳は土玉1点、ミニチュア土器7点、土鈴3点、焼成粘土塊2点、用途不明土製品が1点である。

○ミニチュア土器 (図105-97～105)

全て破片での出土である。97は鍋で、器体中程に見られる3本の線は調整時についたものと思われる。98は口縁～頸部と思われる。99は底部片である。底部付近はロクロなでにより算盤玉状に仕上げられている。土師器蓋の摘み部の可能性もある。102は手捏ねの土器の口縁部で、指頭圧痕が残る。

○土玉 (図105-106)

完形で穿孔部分の周囲を平らに整形し、俵形になっている。玉自体の形がゆがみ、穿孔位置が表裏でずれているので穴が斜めに貫通している。

○土鈴 (図105-108～106-110)

全て破片での出土である。土玉は全て手づくねにより成形されている。一般の土師器と比べるとやや硬質であり、混入物の量も少ないように感じられる。108・109は紐～体部である。109は紐部と体部の境目に数条の線が見られるが整形時に爪などがあたった痕跡と思われる。110は土鈴の体部と思われる。

○焼成粘土塊 (図106-111・112)

土師質であるが、土製品のように意図的に成形されていないものをまとめた。112はくの字に折れ曲がり、両端が欠損する。ナデの痕跡が残る。111は部分的に亀裂が走り、全体に弱く被熱している。

○用途不明土製品 (図105-107)

形状から、名称を仮に帯状土製品としておく。薄い帯状でゆるく湾曲し、片面にはナデの痕跡が残る。上下端とも丸く仕上げられており、上端には赤い色素が若干付着している。

砥石 (図106-113～116)

114は両端を除く全ての面を使用し、段がついて連続する縦位の擦痕が残る。幅の広いものを縦方向に引いた痕かと思われる。また、何力所か剥離しているが、縁が擦れて丸くなっているものとそうでないものがある。前者から、故意か過失かは不明だが使用面が剥離した後も使い続けたことがわかる。113・116は残存する全ての面に使用痕がある。116では側面には幅広で浅い筋状の凹みが残るほか稜線部分も使用し、深い擦痕が残る。115は四角い棒状の礫の一面を使用している。稜線部に剥離が見られる。他の3点に比べると使用面の数・使用頻度は少ない。

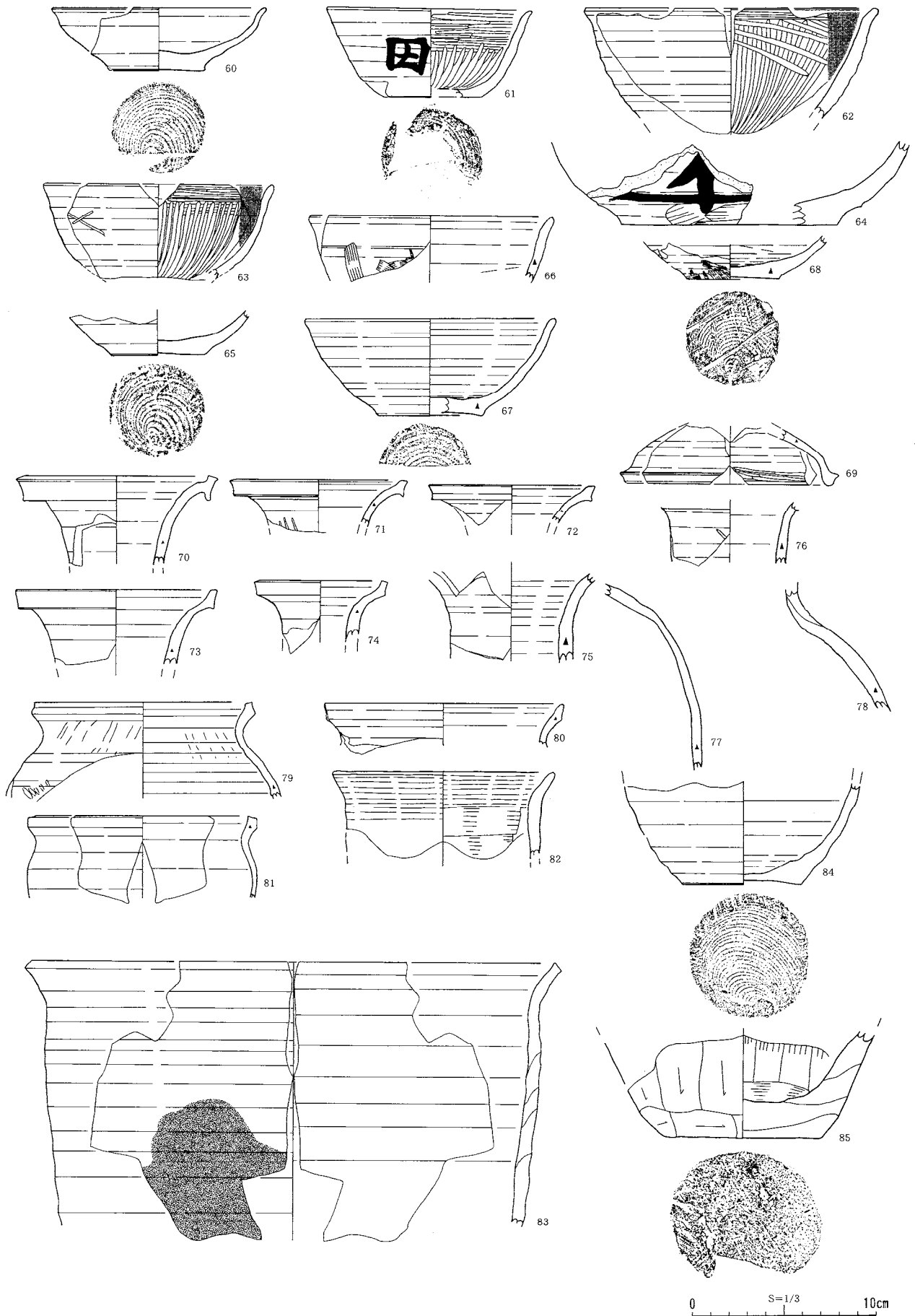


图104 遺構外出土遺物⑤

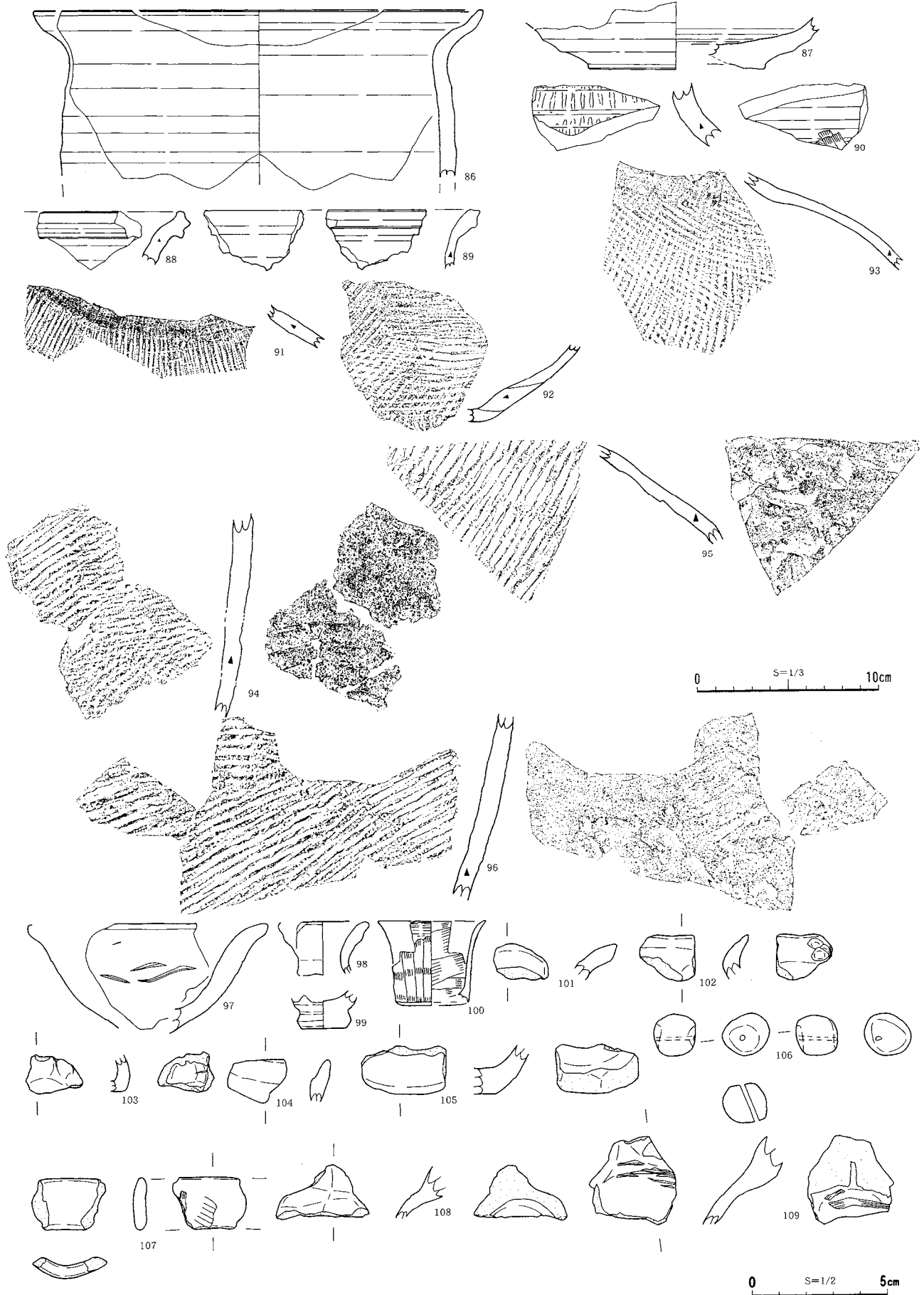


图105 遺構外出土遺物⑥

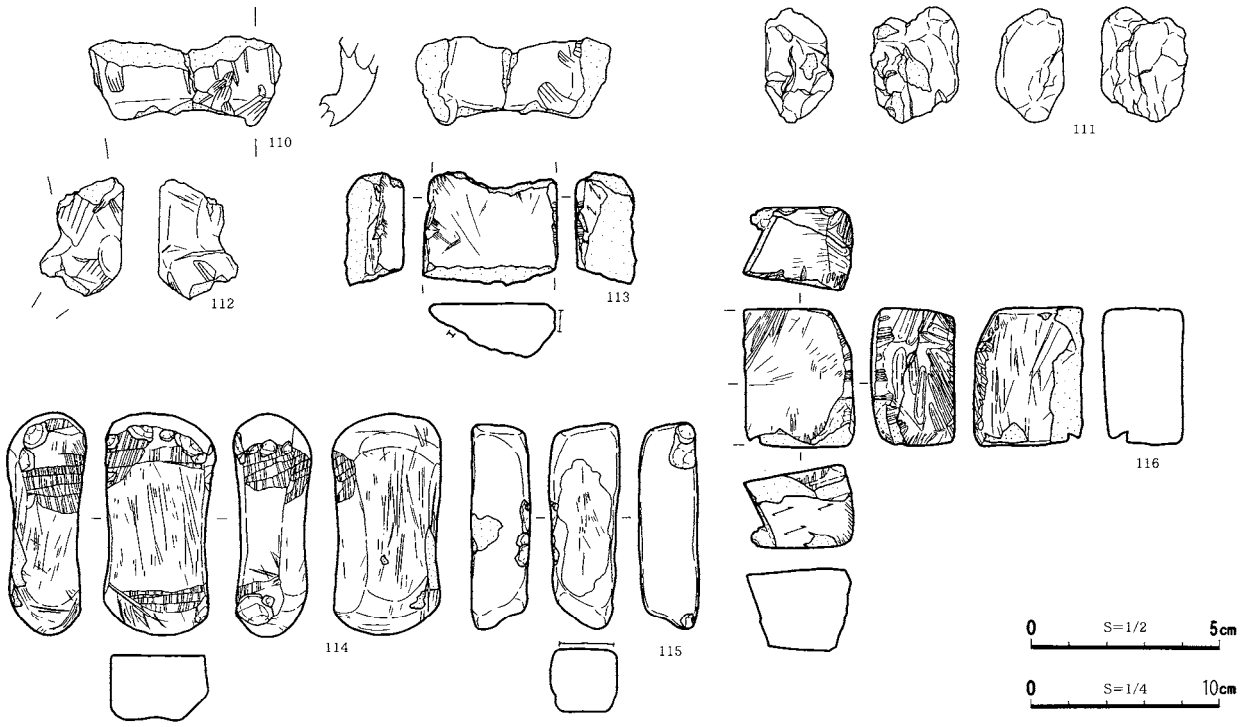


図106 遺構外出土遺物⑦

第VI章 自然科学的分析結果

第1節 放射性炭素年代測定結果

(株) 地球科学研究所

1. 報告内容の説明

- 14C age (yBP) : 14C年代測定値
試料の14C/12C比から、単純に現在(1950年AD)から何年前(BP)かを計算した年代。
半減期はリビーの5568年を用いた。
- 補正14C age (yBP) : 補正14C年代値
試料の炭素安定同位体比 (13C/12C) を測定して試料の炭素の同位体分別を知り
14C/12Cの測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。
試料の13C値を-25 (‰) に標準化することによって得られる年代値である。
暦年代を得る際にはこの年代値を用いる。
- δ 13C (permil) : 試料の測定14C/12C比を補正するための13C/12C比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質(PDB)の同位体比からの千分偏差(‰)で表現する。

$$\delta 13C(\text{‰}) = \frac{(13C/12C) [\text{試料}] - (13C/12C) [\text{標準}]}{(13C/12C) [\text{標準}]} \times 1000$$

ここで、(13C/12C) [標準] = 0.0112372である。

- 暦年代 : 過去の宇宙線強度の変動による大気中14C濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の14Cの測定、サンゴのU-Th年代と14C年代の比較により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。最新のデータベース (INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration” Stuiver et al., 1998, Radiocarbon 40(3)) により約19000yBPまでの換算が可能となった。*

*但し、10,000 yBP以前のデータはまだ不完全であり今後も改善される可能性が高いため、補正前のデータの保管を推奨します。

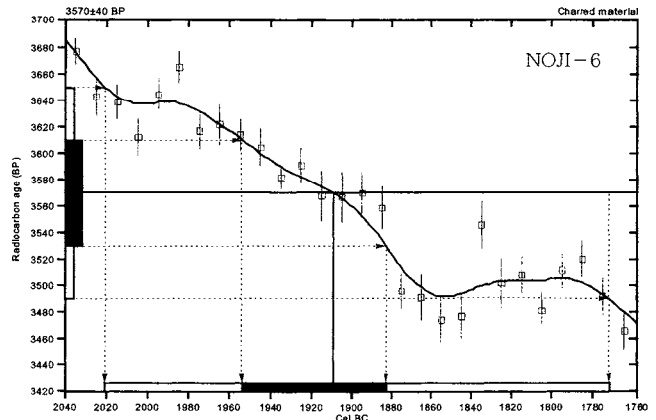
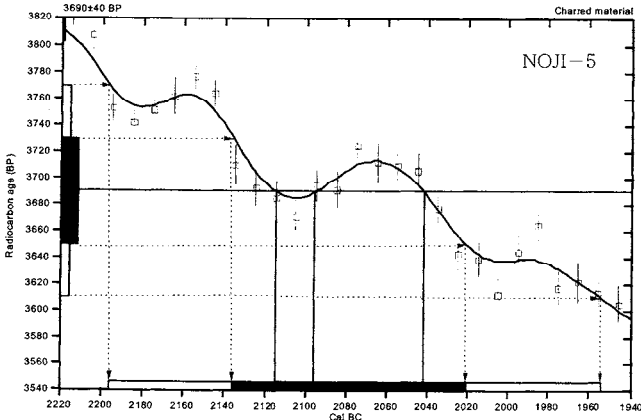
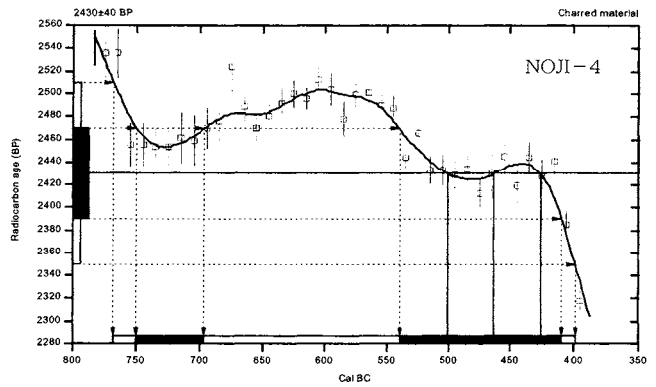
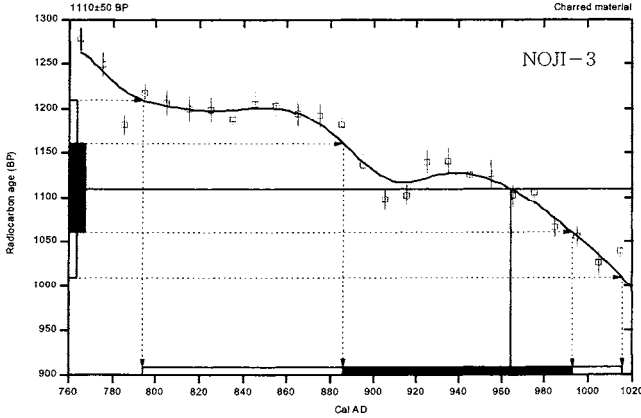
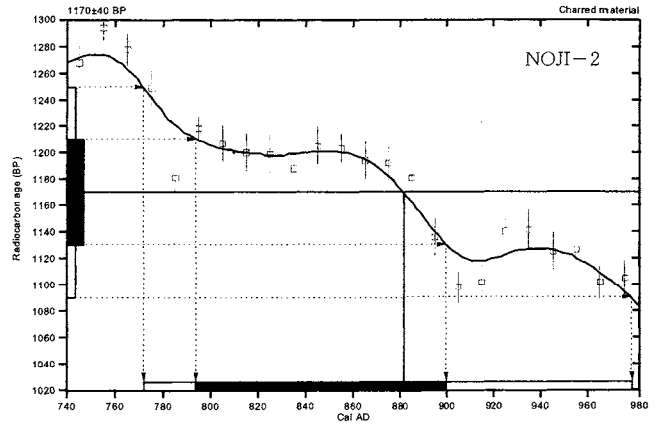
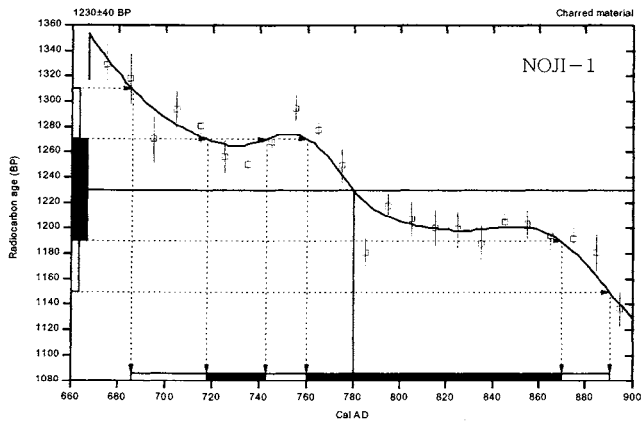
“The calendar calibrations were calculated using the newest calibration data as published in radiocarbon, Vol. 40, No.3, 1998 using the cubic spline fit mathematics as published by Talma and Vogel, Radiocarbon, Vol. 35, No.2, pg317-322, 1993 : A simplified approach to Calibrating C14 Dates. Results are reported both as cal BC and cal BP. Note that calibration for samples beyond about 10,000 years is still very subjective. The calibration data beyond about 13,000 years is a “best fit “ compilation of modeled data and , although an improvement on the accuracy of the radiocarbon date, should be considered illustrative. It is very likely that calibration data beyond 10,000 years will change in the future . Because of this, It is very important to quote the original BP dates and these references in your publications so that future refinements can be applied to your results. ”

2. 測定方法などに関するデータ

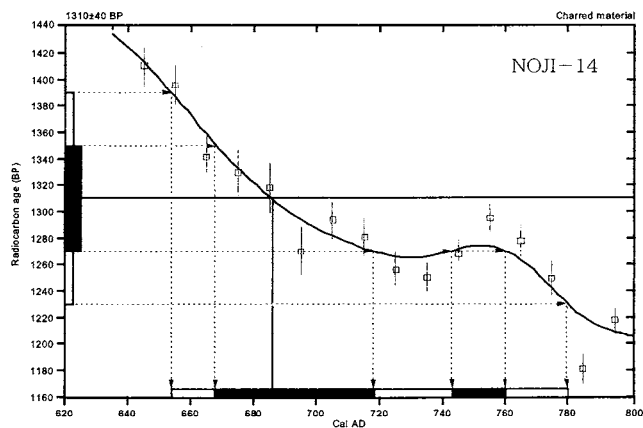
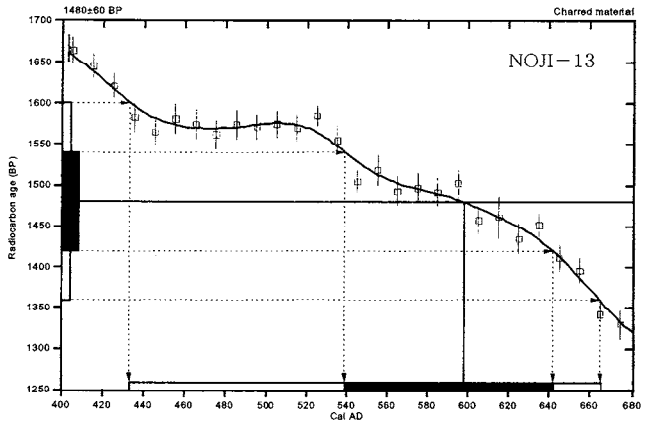
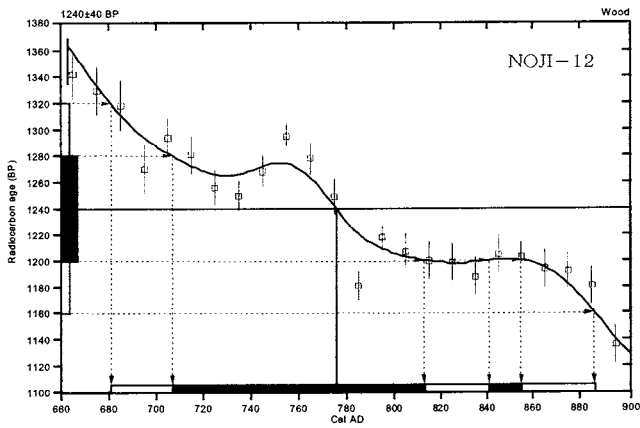
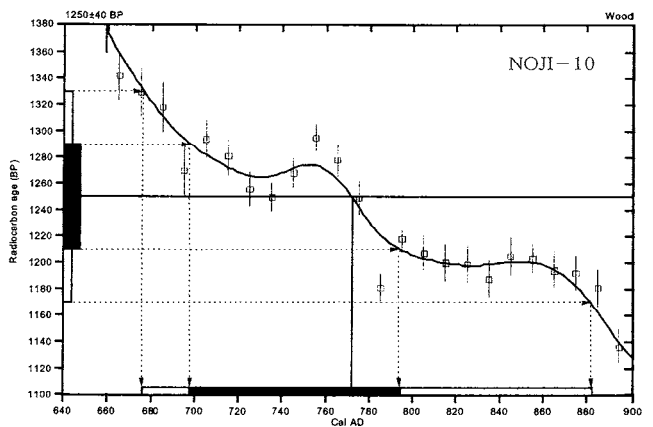
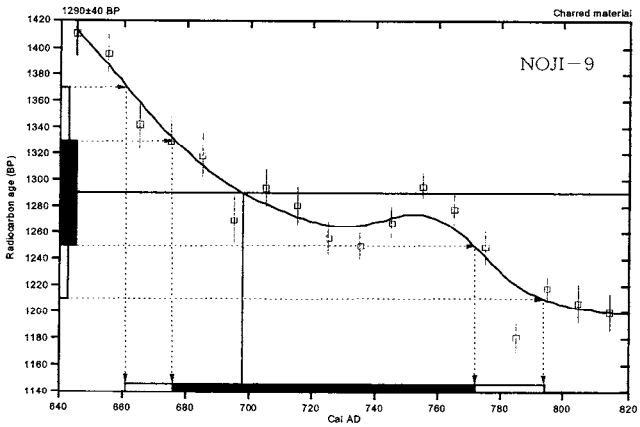
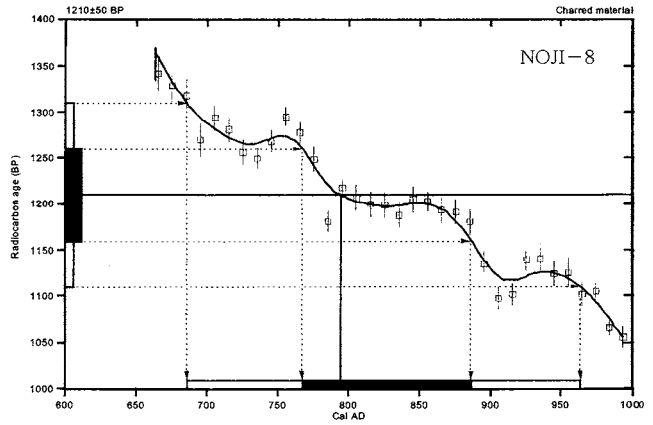
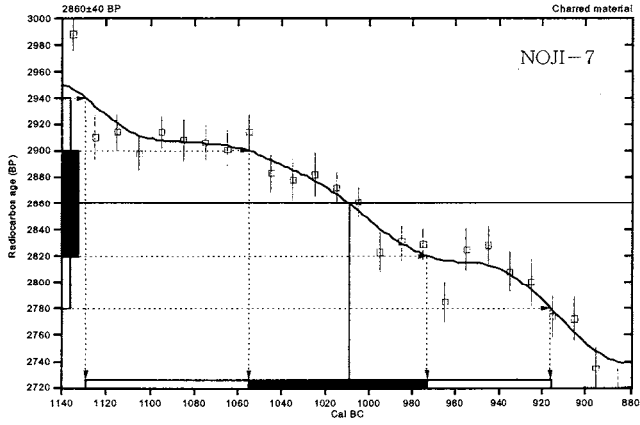
- 測定方法 AMS : 加速器質量分析
Radiometric : 液体シンチレーションカウンタによるβ-線計数法
- 処理・調整・その他 : 試料の前処理、調整などの情報
- 前処理 acid-alkali-acid : 酸-アルカリ-酸洗浄
acid washes : 酸洗浄
acid etch : 酸によるエッチング
none : 未処理
- 調整、その他
Bulk-Low Carbon Material : 低濃度有機物処理
Bone Collagen Extraction : 骨、歯などのコラーゲン抽出
Cellulose Extraction : 木材のセルロース抽出
Extended Counting : Radiometricによる測定の際、測定時間を延長する。
- 分析機関 : BETA ANALYTIC INC.
4985 SW 74 Court, Miami FL, U.S.A33155

3. C14年代測定結果

測定方法はすべてAMS-Standard。試料種は表に記載。前処理は酸-アルカリ-酸洗浄である。
年代値はRCYBP(1950A.D.を0年とする)で表記。モダン リファレンス スタンダードは国際的な慣例としてNBS Oxalic AcidのC14濃度の95%を使用し、半減期はリビーの5568年を使用した。エラーは1シグマ(68%確率)である。



サンプル名	遺構名	取上No	時期等	状態	ラジウムNo(Beta)	C14年代 (y b p)	σ 13C	補正C14年代 (y b p)	校正暦年代 (2Sigma・確率95%)	補正C14年代の校正曲線における中間値	校正暦年代 (1 Sigma・確率68%)
NOJI-1	SI-518	C-10	平安時代	炭化材	162470	1230±40	-24.8	1230±40	CalAD690to890	CalAD780	CalAD720to740 CalAD760to870
NOJI-2	SK-541	C-2	平安時代	炭化物	162471	1180±40	-25.8	1170±40	CalAD770to980	CalAD880	CalAD790to900
NOJI-3	SK-512	C-1	平安時代	炭化物	162472	1120±50	-25.9	1110±50	CalAD790to1020	CalAD960	CalAD890to990
NOJI-4	BC-14		縄文時代	炭化物	162473	2430±40	-25.0	2430±40	CalBC770to400	CalBC500&460&430	CalBC750to700 CalBC540to410
NOJI-5	SN-506	C-7	縄文時代後期	炭化物	162474	3720±40	-27.1	3690±40	CalBC2200to1950	CalBC2120&2100&2040	CalBC2140to2020
NOJI-6	Pit539	C-1	縄文時代後期	炭化物	169643	3570±40	-25.3	3570±40	CalBC2020to1770	CalBC1910	CalBC1950to1880
NOJI-7	SK-527	炭②	縄文時代	炭化物	169646	2920±40	-28.4	2860±40	CalBC1130to920	CalBC1010	CalBC1060to970
NOJI-8	SK-544	C14用	平安時代	炭化物	169647	1190±50	-23.6	1210±50	CalAD690to960	CalAD790	CalAD770to890
NOJI-9	SK-542	炭③	平安時代	炭化物	169648	1280±40	-24.6	1290±40	CalAD660to790	CalAD700	CalAD680to770
NOJI-10	沢	W-1⑥	平安時代	生木	169649	1280±40	-26.6	1250±40	CalAD680to880	CalAD770	CalAD700to790
NOJI-11	沢	W-3①	平安時代	生木	169650	27860±300	-23.8	27880±300	—	—	—
NOJI-12	沢	W-5	平安時代	生木	169651	1220±40	-23.6	1240±40	CalAD680to890	CalAD780	CalAD710to810 CalAD840to860
NOJI-13	501倉	②C-4	平安～中世	炭化物	169652	1480±60	-24.9	1480±60	CalAD430to660	CalAD600	CalAD540to640
NOJI-14	501倉	③C-3	平安～中世	炭化物	169653	1340±40	-26.8	1310±40	CalAD650to780	CalAD690	CalAD670to720 CalAD740to760



第2節 野尻（1）遺跡出土材・炭化材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は非炭化材（以下材と表記）7点（No.1～7）と炭化材25点（No.8～32）の計32点である。いずれも平安時代？のものとされ、確定していない。材は「沢」から検出された用途不明の加工材で、一部の試料には焼痕が認められる。No.8,9はそれぞれSK-542とSK-544土坑から検出されたものである。No.10～32はSI-518竪穴住居跡から検出されたもので、垂木や腰板などの可能性があると考えられる住居構築材である（表1参照）。

遺跡は大釈迦川右岸の丘陵に立地し、尾根部分（標高約60-90m）では縄文時代後期・晩期や弥生時代後期の遺構・遺物が、緩斜面部分（標高約40-60m）では平安時代中期（9世紀末～10世紀）の集落跡などが確認されている。「沢」はA区、土坑と住居跡はC区から検出されている。

2. 方法

プレパラートの作製には、調査担当者の立ち会いのもとで筆者が遺物から採取した小材片を用いた。材試料は剃刀の刃を用いて、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）3面の徒手切片を作製し、これをガムクロラルで封入したプレパラートを生物顕微鏡で観察・同定した。炭化材は試料を室内で自然乾燥させたのち、試料3面の徒手切片プレパラートを作製し生物顕微鏡で観察する方法^{註1)}（・橋 2002）と、3断面を走査型電子顕微鏡（SEM, 加速電圧 10kV）で観察する方法を併用し同定した。併せて各分類群1点の顕微鏡写真図版を作成した（図版1, 2）。SEM観察にあたっては（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。なお、作製したプレパラートと残った炭化材、ネガ・フィルムは木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料は以下の6分類群（ここでは亜科・属・種の異なった階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、学名と配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」（佐竹ほか 1989）にしたがい、県内での自然分布については「北本州産高等植物チェックリスト」（上野 1991）を参照した。また、一般的性質については「木の事典 第1・4・6・7・10巻」（平井 1979-1981）も参考にした。

・アスナロ (*Thujaopsis dolabrata*) ヒノキ科 No.6,15

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔は小型のヒノキ型(Cupressoid)～スギ型(Taxodioid)で、1分野に1-6個、上下に配列することが多い。放射組織は単列、1-10細胞高。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。県内には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）(*Thujaopsis dolabrata* var. *hondai*) とともに自生する。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・イチイ (*Taxus cuspidata*) イチイ科 No.4,5

早材部から晩材部への移行は緩やかで年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1-2個。放射組織は単列、1-20細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

イチイは北海道から九州に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工は容易、保存性とくに耐水性に優れる。材質は緻密で光沢があり、仕上がりは美しい。笏や鉛筆など特殊な用途のほか、彫刻・細工物・建築装飾材・器具・家具・機械・楽器材など各種の用途が知られている。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No. 1, 2, 3, 7, 10, 11, 12, 13, 14, 16, 17, 18, 20, 21, 23, 26, 27, 29, 30, 31, 32

環孔材で孔圏部は1～多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形～円形、小道管は単独および2～3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫓木などに用いられる。

・モクレン属 (*Magnolia* sp.) モクレン科 No. 8, 19, 22, 24, 25

散孔材で、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。年輪界はやや明瞭。

モクレン属は国内に6種あるが、県内にはホオノキ (*Magnolia obovata*)・コブシ (*M. praecocissima*)・タムシバ (*M. salicifolia*) の3種が自生する。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工はきわめて容易で欠点が少ないことから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途も知られている。コブシの材はホオノキに準じた使われ方をする。

・ヌルデ類似種 (cf. *Rhus javanica* var. *roxburghii*) ウルシ科 No. 9

環孔材で孔圏部は多列、孔圏外で急に管径を減じたのち漸減する。大道管は横断面では楕円形、単独、小道管は横断面では楕円形～やや角張った楕円形で2～3個～塊状に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅。柔組織は周囲状。年輪界はやや不明瞭。小道管内壁のらせん肥厚が確認できないため類似種とした。

ヌルデは北海道から琉球の山野に普通の落葉小高木である。材は軽軟～中程度で、加工は容易、耐朽性は高い。器具材や旋作・薪炭材として用いられるほか、杭や浮子としての用途も知られる。

・イネ科タケ亜科 (*Gramineae* subfamily *Bambusoideae* sp.) No. 28

中空の桿の基本組織の中に維管束が散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科(タケ・ササ類)には多数の種が含まれるが、解剖学的特徴のみでは区別できない。

以上の同定結果を検出遺構などとともに一覧表で示す(表1)。

4. 考察

土坑検出の炭化材はモクレン属(SK-542)とヌルデ類似種(SK-544)に同定された。この遺構や試料の性格がわからないため単純な比較になるが、昨年の調査で検出された土器焼成土坑^{注2)}(・橋 2002)や、五所川原市隠川(12)遺跡^{注3)}(高橋 1999a)、弘前市十腰内(1)遺跡^{注4)}(高橋 1999b)からも土坑検出のモクレン属炭化材の報告がある。また、青森市朝日山(3)遺跡の908号土坑底面からはホオノキが認められている(鳴倉 1995)。一方、筆者の手元の資料では、津軽地方の平安時代の土坑検出炭化材の中にヌルデは見あたらない。

SI-518竪穴住居跡から検出された炭化材のうち、およそ4割が同定対象とされた。垂木?とされているものが多いが、いずれも同住居の構築材とみられているものである。クリ(17点)が多く、モクレン属(4点)、アスナロ、タケ垂科も認められた。この住居は1辺が5m弱のほぼ方形のものであるが、その北側を中心に炭化材が残存している。垂木?とされるモクレン属4試料(No.19,22,24,25)はほぼ一直線に並んで出土していることから、同一材が分割したものかもしれない。試料数の多いクリ材の中にも同じ推測のできそうなものがある。このように、炭化材が遺構の一方に偏って出土していること、出土材の一部を検討したにすぎないこと、同一材を複数点検討した可能性もあることなどの問題点が指摘できる状況ではあるが、今回の結果からは、この住居はクリを主体とした木材で構築されていたとはいえそうである。

同じ傾向は、青森市岩渡小谷(2)遺跡^{注5)}(高橋 2001)や浪岡町源常平遺跡^{注6)}(嶋倉 1978a)、同町山本遺跡^{注7)}(嶋倉 1987)試料からも窺える。一方、黒石市板留(2)遺跡^{注8)}(嶋倉 1980)や尾上町李平下安原遺跡^{注9)}(嶋倉 1988)試料ではクリも多いが最多ではなく、黒石市高館遺跡^{注10)}(嶋倉 1978b)試料のように特定の樹種に偏った組成を示さない例もある。したがって、この時期の津軽平野地域で、住居構築材が特定の樹種(中でもクリ)に集中していたとまでは言いきれない(・橋 2001)ようである。

〈注〉

1): これは(従来のセロイジン包埋法の簡便法とされる)アロンアルファを用いた方法(林 1988)を筆者が改良したものである。切削には熟練を要するほか、写真撮影のできるプレパラートを作製することはほとんど望めないなどの欠点もあるが、SEM観察よりはるかに簡便に同定ができ、観察したプレパラートが保存されるなどの長所がある方法である。

2): 3基の土器焼成土坑からモクレン属(10点)とクリ(2点)、ハリギリが認められている。

3): 第4号土坑の覆土中からモクレン属(1点)が認められている。

4): 4基の土坑から検出された各1点の炭化材からモクレン属(2点)とイヌガヤ、ブナ属が認められている。

5): 2基の住居跡の床面と床直から検出された材からクリ(8点)とアスナロが認められている。なお、この報告の著者は筆者であるが、名前の表記が違っていることに始まって、本文・表ともに誤植・誤記が散見されるので注意されたい。

6): 6住居跡からクリ(9点)、コナラ(2点)、スギ、キハダが認められている。これらの中には腰板、柱、屋根材?とされるものもあるが半数は用途が記載されていない。

7): 5住居跡からクリ(12点)、ブナ(2点)、ホオノキ、カエデ?が認められている。

8): 7号住居跡から検出された丸太・板・角材・梁または桁などとされている炭化材はカツラ(48点)が最多数を占め、クリ(37点)がこれに次ぎ、ホオノキ?(11点)、カエデ類(6点)、ブナ(3点)も認められている。

9): 奈良～平安時代とされる29住居跡から検出された柱や板はスギ(15点)が最多で、クリ(14点)、クルミ(10点)、コナラ(9点)、ニレ・ホオノキ・カツラ・カエデ類(各5点)などが認められている。

10): 16住居跡から検出された建材とされる39点から、クルミ・ヤチダモ(各6点)やスギ(5点)、ホオノキ(4点)、サクラ類(3点)など14分類群が認められている。

[引用文献]

林 昭三 1988 「セロイジン包埋法」、『日本の遺跡出土木製品総覧』(島地・伊東 編), pp.21-23, 雄山閣。

平井信二 1979-1981 『木の事典』 第1・4・6・7・10巻, かなえ書房。

佐竹義輔・原 寛・亙理俊次・富成忠夫(編) 1989 『日本の野生植物 木本I・II』, 平凡社。

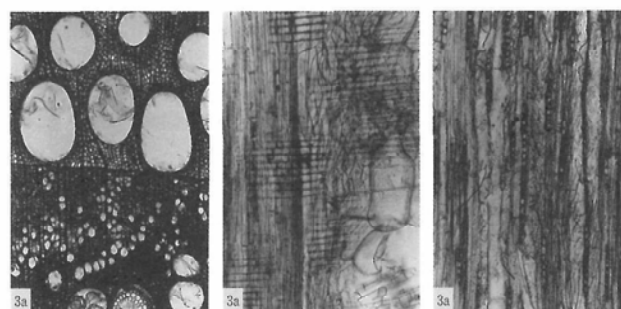
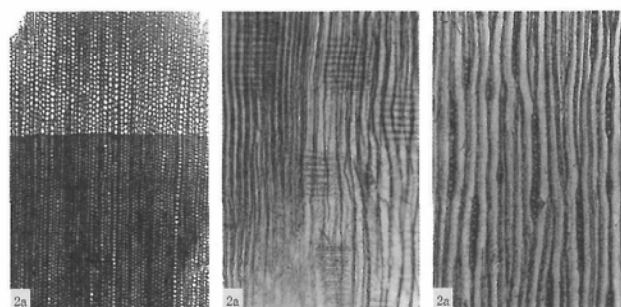
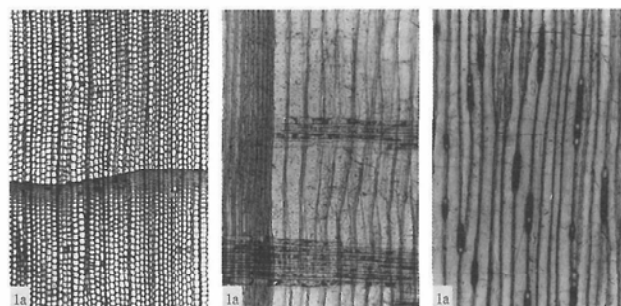
嶋倉巳三郎 1978a 「昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種について」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第39集 『源常平遺跡発掘調査報告書』, 388-389, 青森県教育委員会。

嶋倉巳三郎 1978b 「昭和51年度青森県内の遺跡から出土した炭化材の樹種について」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第40集

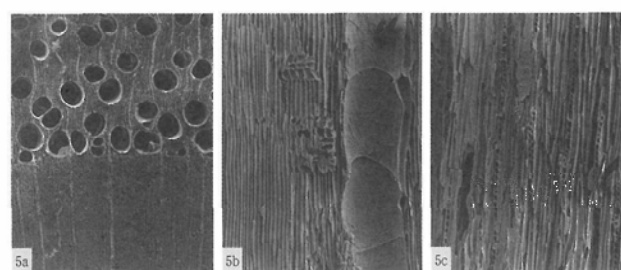
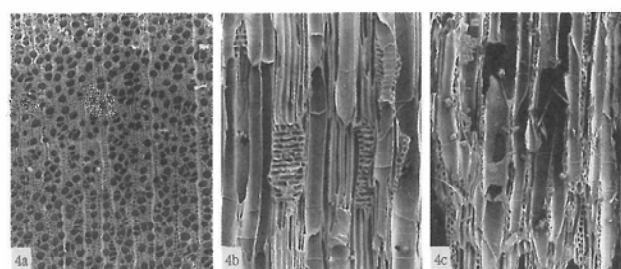
- 『黒石市高館遺跡発掘調査報告書』, 313-322, 青森県教育委員会.
- 嶋倉巳三郎 1980 「板留(2)遺跡から出土の炭化材の樹種」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第59集
『板留(2)遺跡発掘調査報告書』, 付編1-2, 青森県教育委員会.
- 嶋倉巳三郎 1987 「山本遺跡出土の炭化木」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第105集 『山本遺跡』, 203-204, 青森県教育委員会.
- 嶋倉巳三郎 1988 「李平下安原遺跡出土の炭化材」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第111集 『李平下安原遺跡』, 497-506, 青森県教育委員会.
- 嶋倉巳三郎 1995 「朝日山(3)遺跡出土炭化材の樹種」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第167集 『朝日山(3)遺跡』, 102-105, 青森県教育委員会.
- 高橋利彦 1999a 「炭化材の樹種同定(隠川(11)・(12)遺跡)」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第260集
『隠川(11)遺跡Ⅰ・隠川(12)遺跡Ⅱ』, 145-146, 青森県教育委員会.
- 高橋利彦 1999b 「弘前市十腰内(1)遺跡出土炭化材の樹種」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第261集
『十腰内(1)遺跡』, 152-155, 青森県教育委員会.
- 高橋利彦 2001 「青森市岩渡小谷(2)遺跡出土材の樹種」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第300集 『岩渡小谷(2)遺跡』 84-88, 青森県教育委員会.
- 高橋利彦 2002 「浪岡町野尻(1)遺跡出土炭化材の樹種」, 青森県埋蔵文化財調査報告書第320集 『野尻(1)遺跡』, 65-67, 青森県教育委員会.
- 上野雄規(編) 1991 『北本州産高等植物チェックリスト』, 東北植物研究会.

表 1 野尻(1)遺跡出土材の樹種

試料番号	検出遺構・遺物番号	用途・形状	種名
1	沢木-1①	板材	クリ
2	沢木-1②	板材	クリ
3	沢木-1③	板材(焼痕)	クリ
4	沢木-3①	杭?	イチイ
5	沢木-3②	板材	イチイ
6	沢木-5	板材	アスナロ
7	沢樹種①	板材(焼痕)	クリ
8	SK-542 炭①		モクレン属
9	SK-544 樹種3		ヌルデ類似種
10	SI-518 C-1	垂木?	クリ
11	SI-518 C-2	垂木?	クリ
12	SI-518 C-3	垂木?	クリ
13	SI-518 C-4	垂木?	クリ
14	SI-518 C-6	垂木?	クリ
15	SI-518 C-7	腰板?	アスナロ
16	SI-518 C-8	板材	クリ
17	SI-518 C-9	板材	クリ
18	SI-518 C-10	板材	クリ
19	SI-518 C-15	垂木?	モクレン属
20	SI-518 C-21	垂木?	クリ
21	SI-518 C-27	垂木?	クリ
22	SI-518 C-29	垂木?	モクレン属
23	SI-518 C-30	垂木?	クリ
24	SI-518 C-31	垂木?	モクレン属
25	SI-518 C-32	垂木?	モクレン属
26	SI-518 C-37	垂木?	クリ
27	SI-518 C-39	垂木?	クリ
28	SI-518 C-40	屋根材?	イネ科タケ亜科
29	SI-518 C-43	板材?	クリ
30	SI-518 C-50	垂木?	クリ
31	SI-518 C-51	垂木?	クリ
32	SI-518 C-52	板材	クリ

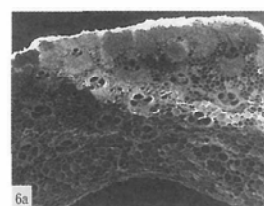


図版 2



図版 1 1. アスナロ No.6
2. イチイ No.4
3. クリ No.2

図版 2 4. モクレン属 No.24
5. ヌルデ類似種 No.9
6. イネ科タケ亜科 No.28



a:木口×40 b:柁目×100 c:板目×100
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上
(6aを除く)、柁目では左から右。

第3節 野尻（1）遺跡出土鉄関連資料の金属考古学的調査結果

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

青森県浪岡町に立地する野尻（1）遺跡は、国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴い平成13年および14年の2ケ年に渡り青森県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査された遺跡である。調査の結果、平安時代に比定される住居跡から刀子、鉄鏃、環状鉄器などが見出され、溝跡からは遺跡内またはその周辺で鉄に関する生産活動が行われていたことを示す流状滓、塊状滓、椀状滓が検出された¹⁾。

検出された製品鉄器の組成を調べその結果に基づき資料分類すること、および鉄滓の成因を推定することを目的として、出土鉄関連遺物の金属考古学的調査を行った。その結果、製品鉄器はいずれも鋼製で、化学組成上2つに分類することができた。検出された鉄滓のうち塊状滓および椀形滓については、銑鉄を脱炭して鋼を製造する精錬操作の過程で生成した可能性を、流状滓については製錬または精錬過程での生成を考えることができた。平安期にはほぼ同時代、あるいは時代の経過とともに、複数の地域から遺跡内に製品鉄器または製品鉄器を製作するための素材として使用された原料鉄がもたらされたものと推定された。以下に金属考古学的調査結果を報告する。

2 調査資料

金属考古学的調査を行なった資料は鉄器8点および鉄滓6点である。表1に検出遺構、遺物番号、および推定時期を示す。

3 調査試料の摘出

鉄器については保存処理の過程でダイヤモンドカッターを装着したハンドドリル（以下、ハンドドリルという）を使い、資料の外観形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、0.05～0.1gの試料を摘出した。鉄滓についてはハンドドリルで深さ約2cmの切り込みを入れ、一方の切り込み面から約1gの試料を切り取った。鉄器および鉄滓から摘出した試料をさらに2分し、大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。鉄器の中で、No.8については刃（Eg）および棟（Rg）の2箇所から試料を摘出し、それぞれを分析に供した。試料摘出位置は図1～図7に示すとおりである。

4 調査方法

組織観察用試料はエポキシ樹脂に埋込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。研磨面を金属顕微鏡で観察し、地金を分類する上で重要と判断された鉄器に残存する非金属介在物、鉄滓の成因を推定する上で重要と判断された鉱物相を、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）で分析した。

化学分析用試料は表面に付着する土砂、錆をハンドドリルで丹念に削り落とし、エチルアルコール、アセトンで超音波洗浄した。試料を130℃で2時間以上乾燥した後、ほぼメタルからなる試料、またはメタルと錆が混在した試料については直接、錆および鉄滓についてはメノウ乳鉢で粉碎した後テフロン分解容器に秤量し、マイクロウェーブ分解装置を使って溶解した。溶液を蒸留水で定溶とし、T.Fe（全鉄）、Cu（銅）、ニッケル（Ni）、コバルト（Co）、マンガン（Mn）、リン（P）、チタン（Ti）、けい素（Si）、カルシウム（Ca）、アルミニウム（Al）、マグネシウム（Mg）、バナジウム（V）の12元素を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-OES法）で分析した。

5 調査結果

5-1 鉄器から抽出した試料の化学組成

表2に鉄器から抽出した試料の化学成分分析結果を示す。9試料のT.Feは57～67%で、錆化が進んだ試料が分析されたことがわかる。No.4、No.5、およびNo.7を除く6試料には0.01%を上回るCuが、No.5およびNo.7を除く7試料には0.01%を上回るNiが含有されていて、9試料全てから0.01%を上回るCoが検出された。0.01%(100ppm)を超えるCu、Ni、およびCoが土壌中に含有される可能性は乏しい²⁾。上記9試料から検出されたCu、Ni、およびCoのほとんどは、製作に使用された鋼そのものに含有されていた可能性が高い。

No.1を除く8試料からは0.1%を上回るPが検出されている。Pについては埋蔵環境から富化される可能性があることが報告されている³⁾。8試料は錆化が進んでいるため、検出された全てのPが製作の素材となった地金に含有されていたことを主張することは難しい。ここでは上記8試料に0.1%を超えるPが含有されていた可能性があることを述べるにとどめる。

表2下段には、朝日山(2)遺跡および安田(2)遺跡において採取された砂鉄の化学組成を示した。金属考古学的調査を行った9点の鉄器に比べ、NiとCo含有量比が異なる。

5-2 鉄器から抽出した試料片の組織観察結果

No.1から抽出した試料にはいたるところに空隙や亀裂がみられる。マクロ組織領域R₁内部のEPMAによる組成像(COMP)には、金属光沢を呈する線状結晶(Cm)またはその欠落孔によって構成される島状領域が観察される。これまでに行われた組織観察結果に基づけば、パーライト[フェライトとセメンタイト(Fe₃C)の共析組織]中のフェライトが錆化し、セメンタイトが抜け落ちることによって生成した組織と推定される³⁾⁴⁾。この島状領域をパーライトとし、錆化による結晶の膨張を無視すると、錆化前のメタルは0.2～0.3%と推定される(図1a₁-c₁)。同様の組織はNo.2およびNo.8Rgにも見出され、いずれも0.1～0.2%Cの鋼と推定された(図2c₂、図3)。

No.1マクロ組織領域R₂には、灰色角状のFe-Ti-Al-Mg-V-O系化合物(XT)からなる非金属介在物が見出されている(図1d₁-₂)。No.5にはFe-Ti-Al-Mg-O系のチタン化合物が観察され、No.8Eg、およびNo.8RgからはそれぞれFe-Ti-Al-Mg-V-O系化合物(XT)とガラス化し微細な化合物が混在した領域(M)(図2c₁)によって構成される非金属介在物、Fe-Ti-Al-Mg-V-O系化合物(XT)、FeO-MgO-SiO₂系化合物(Fa)[マグネシウムを固溶した鉄かんらん石: 2(Fe,Mg)O・SiO₂と推定される]、および微細な化合物が混在するガラス化した領域(M)によって構成される非金属介在物が検出されている(図2d₁)。No.2からは灰色の粒状をしたウスタイト(Wü: 化学理論組成FeO)、No.6からは灰色の粒状をしたウスタイト(Wü: 化学理論組成FeO)とガラス化し微細な化合物が混在した領域によって構成される非金属介在物が観察された(図3)。No.3・4・7からは錆化前の地金の組織を推定できる組織および非金属介在物を見出すことはできなかった。

5-3 鉄滓の化学組成

No.10Sa₁、No.11、No.12、およびNo.13のT.Feは44～65%、Al、Siはそれぞれ1～4%、5～11%で、Tiはいずれも1.6%未満にある。粘土状物質と酸化鉄を主成分とする鉄滓が反応し生成したものと推定される。

No.9・14のT.Feはそれぞれ30.51%、29.69%、Tiはそれぞれ13.6%、10.3%、Siはそれぞれ10.9%、13.3%、Alはそれぞれ3.62%、3.43%含有されている。No.9・No.14のT.FeはNo.10Sa₁、No.11、No.12、およびNo.13に比べ低レベルにある一方、Tiは約10倍と高レベルにある。No.9・14の成因はNo.10Sa₁をはじめとする上記4試料とは異なるものと推定される。

No.10の凸部付近から抽出した試料(No.10Sa₂)は、No.10の凹部から抽出した試料(No.10Sa₁)に比べFeが低レベルにある反面、Si、Alが高レベルにある。鉄滓に粘土状物質の占める割合が増したものと推定される。

5-4 鉄滓の組織観察結果

No.9から抽出した試料は、Fe-Ti-Al-Mg-O系のチタン化合物(XT)と微細な化合物を内包するガラス化した領域(M)によって構成される(図5)。No.14から抽出した試料もNo.9とほぼ同様の組織からなる(図7)。No.13から抽出した試料片にはいたるところに空隙がみられた(図6 a₁・b₁)。マクロ組織領域R_{1・2}内部(図6 b₁)は、灰色のウスタイト(Wü)、Fe-Ti-Al-O系化合物(XT:少量のTiを含む磁鉄鉱と推定される)、および暗灰色のFeO-MgO-SiO₂系またはFeO-MgO系化合物[Fa:マグネシウムを固溶する鉄かんらん石:2(Fe,Mg)O・SiO₂、または鉄かんらん石2FeO・SiO₂と推定される]が微細な化合物を内包するガラス化した領域(M)によって取り囲まれた組織によって構成されている(図6 c_{1・2}・d_{1・2})。

No.10の凸部は酸化ケイ素(Q)とガラス化した領域(S)、その内側はチタン化合物(XT)とガラス質ケイ酸塩(S)からなる領域(図7)、試料の中心部分No.13領域R_{1・2}内部とほぼ同じ鉱物組成をとる。No.11・12はウスタイト(Wü)、FeO-MgO-SiO₂系またはFeO-MgO系化合物[Fa:マグネシウムを固溶する鉄かんらん石:2(Fe,Mg)O・SiO₂、または鉄かんらん石2FeO・SiO₂と推定される]、および微細な化合物を内包するガラス化した領域(M)からなる(図7)。

6 考察

6-1 鉄器の分類

金属考古学的調査を行った鉄器の中で、No.1、No.2、No.5、No.6、およびNo.8は鋼製鉄器で、亜共析鋼(炭素量0.8%未満の鋼)の使用が確認された。調査した資料は錆化が進んでおり、メタルの残存はみられない。資料断面の全体構造が不明なため、炭素量の異なる鋼が配されていたかどうかは不明である。

調査した鉄器に残存する非金属介在物の鉱物組成には明瞭な差異がみられた。それぞれの鉄器の素材となった鋼の製造過程において、非金属介在物組成とほぼ同じ鉱物組成、または同じ鉱物組成をとる鉄滓と鉄とが接触した状態が存在したことは確実で、非金属介在物組成の差異は主として鋼製造法が異なっていたことに起因すると推定される。

後述するように、古代には複数の鋼製造法があり、いずれの方法が用いられたとしても多段階の工程を経て目的とする鋼が作り出されたものと考えられる。同一の製鉄原料を用いたとしても、製造条件や製造に使用する設備・道具によって、組成の異なる鋼が作り出される。従って、表2の分析結果を単純に比較する方法では、実態に整合する分類結果を得ることは難しい。

表2の中で、Cu、Ni、Coの3成分は鉄よりも錆にくい金属のため、一度メタル中に取り込まれた後はそのほとんどが鉄中にとどまると推定される。従って、合金添加処理が行われていなかったとすると、その組成比は鋼製造法の如何に係わらず製鉄原料の組成比に近似すると推定される。

図8 aはNiが100ppm未満であるNo.5、No.7を除く7試料の(mass%Co)/(mass%Ni)、(mass%Cu)/(mass%Ni)、図8 bは9試料の(mass%Ni)/(mass%Co)、(mass%Cu)/(mass%Co)を求めプロットしたものである。なお、図8 a・bでは非金属介在物中にチタン化合物が見出された鉄器を黒丸(●)、見出されなかった鉄器を白丸(○)、非金属介在物を見出すことができなかった鉄器を白三角(△)で示した。また、図8 bには青森県朝日山(2)遺跡、安田(2)遺跡から採取された砂鉄もプロットしてある。図8 aではNo.2、No.4、およびNo.8 Eg・Rgが左下に、No.1、No.3、No.6が図の中

中央下に分布する。図8bではNo.1、No.3、No.5、No.6、およびNo.7が図の左下に、No.2、No.4、およびNo.8 Eg・Rgが前記No.1をはじめとする5試料に近接して分布する。朝日山(2)遺跡および安田(2)遺跡から採取された砂鉄は図8bでは左方にプロットされ、9点の鉄器とは離れた位置にある。

図8a・bに基づけば、No.1、No.3、およびNo.6の3試料、No.2、No.4、およびNo.8 Eg・Rgの4試料はそれぞれ3成分比がほぼ同じ鋼を素材として製作されたとみることができる。No.1、No.3、およびNo.6の中で、No.1の非金属介在物にはチタン化合物が残存するが、No.6の非金属介在物にはチタン化合物が見出されなかった。Cu、Ni、Coの3成分比がほぼ同じ試料の非金属介在物組成に差異がみられるという事実は、鋼の製造状態が局所的に異なっていた可能性が高いことを示しているが、同時に以下の2つの可能性を考えることもできる。

① 鋼製造の素材となった原材料は同じであっても、それを鋼に加工する方法が異なっていた

② 製品鉄器または製品鉄器を製作するための素材として使用された原料鉄の獲得ルートが複数存在した

なお、図8bにおいて、No.5もNo.1、No.3、およびNo.6とほぼ同じ位置に分布する。No.5もNo.1をはじめとする3資料と同じ組成の地金を用いて製作された可能性がある。また、朝日山(2)・安田(2)両遺跡から採取された砂鉄とNo.7を除く8試料に含有されるNiの間に約10倍もの差異がみられること、砂鉄と上記8試料の図8bにおける分布状況が大きく異なることを加味すると、No.1、No.3、No.5、およびNo.6の4資料、No.4とNo.8の2資料またはそれらの素材となった原料鉄は、それぞれ別の地域からもたらされた可能性が高いとみることができる。

6-2 推定される古代の鋼製造法

古代の鋼製造法については幾つかの方法が提案されており、見解の一致をみるにいたってはいない。その主因は、原料鉱石（砂鉄もしくは鉄鉱石⁹⁾）を製錬して得られる主生成物の組成についての見解の相違にある。

製錬産物である鉄は炭素量に応じ、鋼と銑鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力鋼部分を摘出し、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そのようにして製造された鋼を使って、製品鉄器が製作されたとする見方がある⁷⁾。製錬炉で直接に鋼が作り出されるという意味で、この方法は近世たたら吹製鉄における押法⁸⁾によって生産された鉄塊を純化する操作に近似する。また、この方法によって得られた鉄[炭素量が不均一で鉄滓が混在した鉄（主に鋼からなるが銑鉄も混在すると考えられている）]を精製し目的とする鋼に変える操作は、精錬鍛冶⁷⁾と呼ばれている。古代において鋼を熔融する技術は未確立であったと考えられるので（熔融温度は炭素量によって異なるが、炭素量0.1～0.2%の鋼を熔融するためには炉内温度を1550℃以上に保つ必要がある⁹⁾）、主として鋼から成る鉄から鉄滓を分離・除去する際の基本操作は加熱・鍛打によったと推定される。組成が不均一な鉄から純化された鋼を得る操作に精錬鍛冶という用語が用いられたのは、上述の理由によるものと推察される。

一方、おびただしい数の鉄仏や鉄鍋、鉄釜をはじめとする鑄造鉄器の普及が示すように¹⁰⁾¹¹⁾、遅くとも9世紀には銑鉄を生産する技術、すなわち銑鉄を炉外に流し出す製錬法が確立されていたとする見方が出されている¹²⁾。得られた銑鉄を溶解し鑄型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器が製作される。また、生産された銑鉄を脱炭することによって鋼の製造も可能となる。この方法による鋼製造法は、銑鉄を経由して鋼が製造されるという意味で、間接製鋼（鉄）法¹³⁾に位置づけられる。

銑鉄を脱炭する方法の一つとして、近世たたら吹製鉄における大鍛冶⁹⁾がよく知られている。たたら

ら吹製鉄には銑押法と 押法の2つの方法がある。後者における生産の主目的物は鉄（主として鋼からなる鉄塊）、前者は炉外に流し出される銑鉄で、副生成物として炉内に鉄もできる。銑押法において鉄は操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すようつとめたという。このようにして生産された銑鉄は鍛冶場に運ばれる。そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に銑鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭で覆った後底部に点火する。積み重ねられた銑鉄は内部にあるものから熔融し、滴下する。この時、羽口付近の酸化性火焰にふれ酸化され、鋼（左下鉄）となる。ここまでの操作は「左下」と呼ばれる。左下鉄は製錬時の副生成物である鉄とともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にして脱炭が図られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上にのせ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。上記の「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法が大鍛冶と呼ばれている¹⁴⁾。上述から明らかなように、大鍛冶における「本場」の操作内容は出発物質こそ異なるものの、基本的に先に述べた精錬鍛冶とほぼ同じとみることができる。

大鍛冶では空気酸化により局所的に銑鉄の脱炭が図られるが、溶銑（熔融した銑鉄）を準備し、大鍛冶と同じ原理によって脱炭する方法が古代に行われていたとする見方が出されている¹⁵⁾¹⁶⁾。この方法の場合、溶銑の確保とそれを脱炭するための設備・道具が不可欠であり、現在その点についての検討が進められている。

以上の説明から明らかなように、鉄に関する生産設備として少なくとも①製錬炉、②溶解炉、③精錬炉、④鍛冶炉の4つがあった可能性がある。さらに、製錬炉としては主として銑鉄を生産するための炉と鋼を生産するための炉が、精錬炉については銑鉄を局所的に熔融し脱炭するための炉と溶銑を準備した後それを脱炭して鋼を製造する炉が、鍛冶炉については精錬鍛冶のための炉と小鍛冶のための炉があった可能性がある。検出された炉跡の残存状況と出土資料の形状でただちに炉跡の機能を決定することはきわめて危険である。以下では、この点に留意し、考古学の発掘調査結果と出土鉄滓の金属考古学的解析結果を基に、出土鉄滓の成因について検討することとする。

6-3 出土鉄滓の成因

No.10、No.12、およびNo.13はいずれも椀形滓で、木炭の噛み込みや固着はみられない。粘土状物質に酸化鉄または酸鉄を主成分とする鉄滓が反応し生成した資料と推定され、外観形状を加味すると、精錬鍛冶または精錬のいずれかの操作に伴って生成したとみることができる。

精錬鍛冶における出発物質は主として鋼からなり、相当量の鉄滓が混在した組成が不均一な鉄である。木炭の燃焼熱による炉内到達可能温度を考慮すると、主として鋼からなる鉄を熔融することは困難であり、純化の操作は基本的に加熱・鍛打によったとみななければならない。この操作では鉄塊に付着または鉄塊中に混在する鉄滓が破碎され除去される。その過程で飛散した鉄滓が炉内に入り、炉材粘土と反応しながら熔融もしくは部分熔融した後、炉底にたまり固化する。検出された炉跡が精錬鍛冶に使用されたという見方に立てば、金属考古学的調査を行った資料No.10、No.12、およびNo.13は、炉底部において生成したとみる必要がある。鉄滓が炉底部で生成した場合、熱源である木炭が共存しているので、鉄滓中にある程度木炭が噛み込まれるはずである。既述のとおり、上記3点の鉄滓には木炭の噛み込みや固着はみられない。熱源である木炭と反応サイトとが分離された状況下において生成した鉄滓の可能性があり、精錬鍛冶では金属考古学調査を行った3点の鉄滓の形状を説明することが難しい。

① 鉄滓が椀形を呈すること、②木炭と反応サイトとが離れた位置にあった可能性が高いことを考え合わせると、粘土状物質を用いて製作された椀形を呈する容器の中に溶銑を造り、空気酸化によ

って溶銑を脱炭し鋼を製造する操作（精錬）の過程で生成した鉄滓の可能性が高いと筆者は考える。No.10、No.12、およびNo.13椀形滓中に見出されたウスタイト、鉄かんらん石、およびチタン化合物は、溶銑の再酸化物質と粘土状物質との反応生成物とみることによって、その残存を説明することができる。No.10の凸部表面から中心部に向かうに従って、酸化鉄と酸化チタンからなる化合物、鉄かんらん石、ウスタイトが濃密に分布するようになるが、このことも上述を支持している。

3点の椀形滓が精錬過程において生成したという見方に立った場合には、形状も組成も椀形滓とはまったく異なるNo.9およびNo.14流状滓の成因が問題となる。No.9およびNo.14の形状は、ほぼ熔融状態にある鉄滓が固化した可能性が高いことを示している。製錬または何らかの熔融操作の過程で生成した鉄滓と推定され、製錬の場合、始発原料は鉄チタン磁鉄鉱とみることができ、精錬の場合には、溶銑を準備する過程での生成を想定する必要がある。遺跡内では鋳型やとりべは未検出のため、鋳造の実施を主張することは難しい。銑鉄を熔融するための炉が用意されていて、そこで生成した溶銑が炉外のるつぼ状容器の中に排出された後、空気酸化によって脱炭され鋼に換えられたという見方をとることによって、出土遺物の形状と組成の説明が可能となる。No.9およびNo.10流状滓は溶銑を準備する過程で生成したもので、鉄滓中のチタンは炉壁または炉床部に使用された素材に起因すると考えられる。

精錬を想定した場合、銑鉄の入手方法が問題となる。精錬鍛冶の出発物質である組成が不均一な鉄はしばしば「荒鉄」と呼ばれる¹⁹⁾が、最近の文献資料の研究によってそれは「銑鉄」であり、その流通は平安末まで遡る可能性のあることが指摘されている¹⁵⁾¹⁶⁾。野尻(1)遺跡に比べやや時代は下がるが、東京都多摩市別所遺跡や岩手県平泉町柳之御所遺跡では銑鉄塊が見いだされ、金属考古学的調査によってそれらは他地域からもたらされた可能性が高いとする見解が提示されている²⁰⁾。

野尻(1)遺跡では異なった地域で生産された原料鉄を素材として製造された鋼を用いて製作された鋼製鉄器が使用された可能性が高く、それらが同時期に使用されていたとすると、前代に使用された鉄器の再利用、または複数の地域から原料鉄あるいは製品鉄器の供給を受けていたことが想定される。異なった時代に使用されたものであるとすると、時代経過とともに原料鉄または製品鉄器の供給地域が変化したことを考える必要がある。原料鉄と製品鉄器の流通、利用不能となった製品の再利用を考慮に入れ、鉄・鉄器製作とその使用を検討することにより、古代東北地方北部における鉄器普及の実態に迫ることができるものと思われる。

註

- 1) 青森県埋蔵文化財調査センター茅野嘉雄氏からのご教授による。
- 2) 岩手大学教育学部土谷信高助教授からのご教授による。
- 3) 佐々木稔、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、1984、pp.27-33。
- 4) Knox, R. "Detection of carbide structure in the Oxide remains of ancient steel", *Arcaeometry*, Vol.6, 1963, pp.43-45.
- 5) 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含チタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの淘汰集積作用などで濃縮したものが砂鉄鉱床といわれている⁶⁾。従って、砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別することは岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された磁鉄鉱および含チタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。
- 6) 『鉄鋼便覧』日本鉄鋼協会編、1981年。
- 7) 大澤正己「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」季刊考古学、8、1984、pp.36-40。
- 8) 河瀬正利「中国地方におけるたたら製鉄の展開」『たたらから近代製鉄へ』平凡社、1990年、p.11。
- 9) 『鉄鋼の顕微鏡写真と解説』丸善株式会社、1968年。

- 10) 五十川伸矢「古代・中世の鉄製物」国立歴史民俗博物館研究報告第46集、1992、pp.1-79。
- 11) 五十川伸矢「古代から中世前半における鉄製物生産」季刊考古学、57、1996、pp.57-60。
- 12) 関清「古代末の北陸-富山湾岸部の遺跡群」季刊考古学、57、1996、pp.30-32。
- 13) 空気酸化により鉄中の炭素を脱炭した場合、ただちに α Feに近い組成の鉄が得られた可能性もある。古代の鋼製鉄器によく使用される垂共析鋼が鉄を精錬しただちに得られたかどうか不明なため、本論では間接製鋼(鉄)法という表現をとった。
- 14) 村上英之助「村上・中沢の往復書簡」たたら研究、36・37、1996、p.78-88。
- 15) 福田豊彦「近世における『和鉄』とその技術-中世の『和鉄』解明のために-」『製鉄史論文集 たたら研究会創立四十周年記念』たたら研究会、2000、pp.195-228。
- 16) 福田豊彦「近世前期、和鉄の生産と流通の基本形態」たたら研究、39、1999年、pp.15-24。
- 17) 赤沼英男「みちのくの地から中世の鉄をみる」ふえらむ、Vol.2 No.1、社団法人日本鉄鋼協会、1997年、pp.44-51。
- 18) 赤沼英男・福田豊彦「鉄の生産と流通からみた北方世界」国立歴史民俗博物館研究報告、72、1997年、pp.1-40。
- 19) 精錬鍛冶を実施するためには出発物質である相当量の鉄滓が固着した組成が不均一な鉄塊を必要とする。野尻(1)遺跡内で精錬鍛冶を実施するためには、当時そのような組成の鉄が広域的に流通していた、あるいは、野尻(1)遺跡直轄の製錬所が発掘調査区域外に確保されており、そこで生産された組成不均一な鉄塊が遺跡内に供給されていたことを前提として、はじめてその実施が可能となる。流通品は価値換算を容易に行えるよう、組成や形状が規格化されている必要がある。組成が不均一で形状が不定形な鉄が商品として広域的に流通していたとは考えにくい。野尻(1)遺跡直轄の製錬所が確保されていたことを前提として精錬鍛冶の実施が可能となると筆者は考える。この立場に立った場合、6-1で述べた組成の異なる鋼を素材とする鉄器の検出を説明することが難しい。
- 20) 赤沼英男、佐々木稔、伊藤薫「出土遺物からみた中世の原料鉄とその流通」『製鉄史論文集』たたら研究会編、2000年、pp.553-576。

表1 調査鉄器の概要

No.	検出遺構		遺物番号	資料名	推定年代
	遺構名	層位			
1	SI-504	-	1	環状鉄製品	9C末から10C初
2	SI-505Pit4	-	2	刀子	9C末から10C初
3	ISD518	1~2層	4	鉄鏃	9C末から10C初
4	SK-516	-	5	刀子	9C末から10C初
5	ISD-521	火山灰下	13	刀子	9C末から10C初
6	SI-521	3層	17	筒状鉄製品	9C末から10C初
7	SI-506	覆土	18	刀子	9C末から10C初
8	SI-518	1層	19	刀子	9C末から10C初
9	SI-504	-	20	流状滓	9C末から10C初
10	SD-503 BE-14	粘土下	21	椀形滓	9C末から10C初
11	SD-503 BD-17	粘土下	22	鉄滓	9C末から10C初
12	ISD-506	火山灰下	23	椀形滓	9C末から10C初
13	SD503	粘土下	24	鉄	9C末から10C初
14	SK-512	覆土	25	流状滓	9C末から10C初

注) 検出遺構、遺物番号、資料名、推定年代は青森県埋蔵文化財調査センター茅野嘉雄氏による。

表2 分析結果

No.	Sa	検出遺構		資料名	化学組成(mass%)											ミクロ組織	nmi	
		遺構名	層位		Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg			V
1	-	SI-504	-	環状鉄製品	57.54	0.012	0.010	0.030	0.004	0.07	0.038	2.33	0.110	1.00	0.035	0.001	Cm(0.2-0.3)	XT
2	-	SI-505Pit4	-	刀子	65.55	0.020	0.030	0.041	0.001	0.15	0.016	0.90	0.007	0.167	0.003	0.001	Cm(0.1-0.2)	W
3	-	ISD518	1~2層	鉄鏃	64.26	0.022	0.014	0.038	0.010	0.15	0.111	1.35	0.034	0.421	0.041	0.001	no	no
4	-	SK-516	-	刀子	56.48	0.007	0.013	0.022	0.004	0.24	0.068	2.43	0.053	0.740	0.031	0.001	no	no
5	-	ISD-521	火山灰下	刀子	62.06	0.008	0.009	0.024	0.004	0.16	0.028	1.56	0.031	0.362	0.017	0.001	no	XT
6	-	SI-521	3層	筒状鉄製品	58.85	0.016	0.010	0.032	0.004	0.14	0.010	0.03	0.039	1.33	0.034	0.383	no	W_M
7	-	SI-506	覆土	刀子	65.89	0.004	0.004	0.020	0.003	0.14	0.081	0.80	0.001	0.031	0.008	0.001	no	no
8	Eg	SI-518	1層	刀子	66.58	0.011	0.018	0.033	0.002	0.11	0.030	0.67	0.001	0.048	0.006	0.001	no	XT_M
9	Rg	SI-504	-	流状滓	63.22	0.019	0.037	0.065	0.005	0.22	0.033	0.52	0.006	0.026	0.015	0.004	Cm(0.1-0.2)	XT_FaM
10	-	朝日(2)	-	砂鉄	51.07	0.002	0.002	0.024	0.417	0.04	7.91	3.35	1.50	0.401	1.34	0.177	-	-
11	-	安田(2)	-	砂鉄	58.00	0.003	0.002	0.027	0.585	0.05	9.83	0.80	0.890	0.104	0.960	0.218	-	-
12	-	SK-512	覆土	流状滓	60.58	0.002	0.001	0.021	0.465	0.05	6.66	0.81	0.940	0.117	0.782	0.220	-	-

注1) Noは表1に対応。Saはサンプル検出位置。化学成分分析はICP-OES法による。

注2) Cmはセマンタイトまたはその欠落孔。括弧内の数値はミクロ組織から推定される炭素量。noは見いだされず。

注3) nmiは非金属介在物組成。W: ウスタイト(化学理論組成FeO)。Fa: FeO-MgO-SiO₂系化合物。XT: 主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物。S: ガラス質けい酸塩。M: マトリックス。

表3 分析結果

No.	Sa	検出遺構		資料名	化学組成(mass%)											鉄物組成		
		遺構名	層位		Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si	Ca	Al	Mg		V	
9	-	SI-504	-	流状滓	30.51	0.002	0.001	0.023	0.692	0.17	13.6	10.9	1.97	3.62	2.18	0.145	-	XTM
10	1	SD-503 BE-14	粘土下	椀形滓	54.26	0.055	0.033	0.033	0.153	0.01	0.185	8.87	0.850	2.77	0.296	0.001	(XT)SXW_XTFaM	
10	2	SD-503 BE-14	粘土下	椀形滓	24.89	0.002	0.001	0.007	0.078	0.17	0.353	13.2	1.58	5.93	0.453	0.001	-	-
11	-	SD-503 BD-17	粘土下	鉄滓	64.02	0.003	0.002	0.011	0.030	0.17	0.188	5.65	0.452	1.58	0.151	0.001	-	W_FaM
12	-	ISD-506	火山灰下	椀形滓	44.70	0.006	0.005	0.017	0.043	1.11	0.149	10.4	2.64	3.09	0.446	0.001	-	W_FaM
13	-	SD503	粘土下	椀形滓	57.87	0.002	0.000	0.005	0.120	0.35	1.59	6.99	1.32	1.72	0.536	0.028	-	W_XTFaM
14	-	SK-512	覆土	流状滓	29.69	0.001	0.001	0.018	0.656	0.08	10.3	13.3	1.37	3.48	1.76	0.129	-	XTM

注1) Noは表1に対応。Saはサンプル検出位置。化学成分分析はICP-OES法による。

注2) W: ウスタイト(化学理論組成FeO)。Fa: FeO-MgO-SiO₂系化合物。XT: 主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物。S: ガラス質けい酸塩。M: マトリックス。は分析せず。

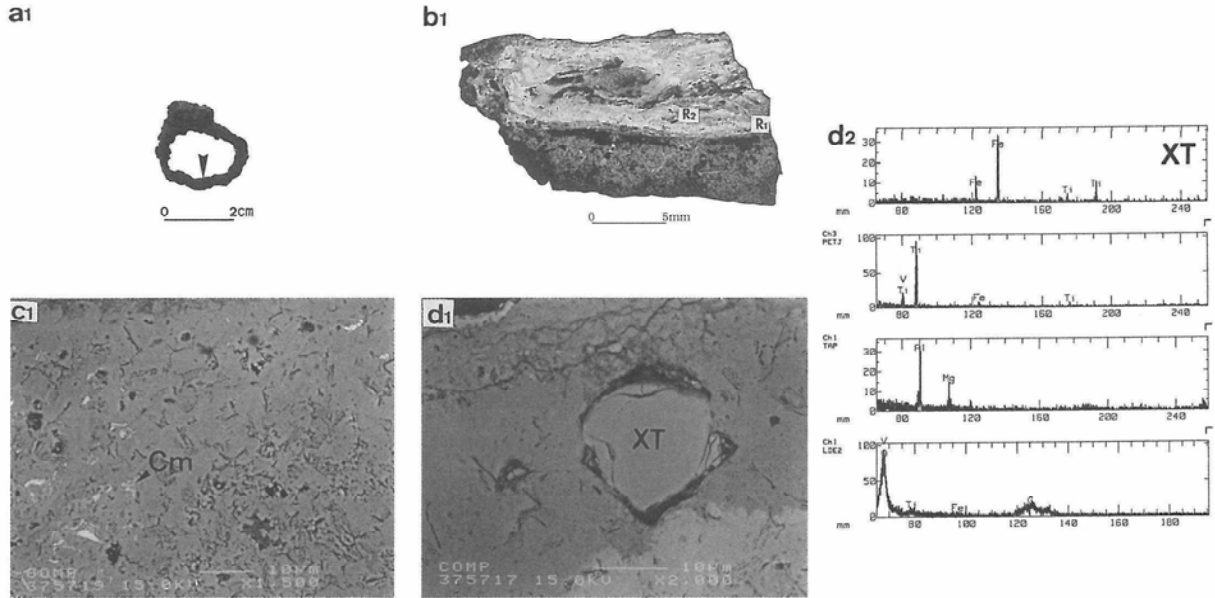


図1 No.1の外観と抽出した試料片の組織観察結果
 a1: 外観、矢印は試料片抽出位置。b1: 抽出した試料のマクロ組織。c1: b1領域R1内部のEPMAによる組成像 (COMP)。Cmはセメンタイト (Fe₃C) またはその欠落孔。
 d1: b1領域R2内部に残存する非金属介在物のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果。XT: Fe-Ti-Al-Mg-V-O系化合物。

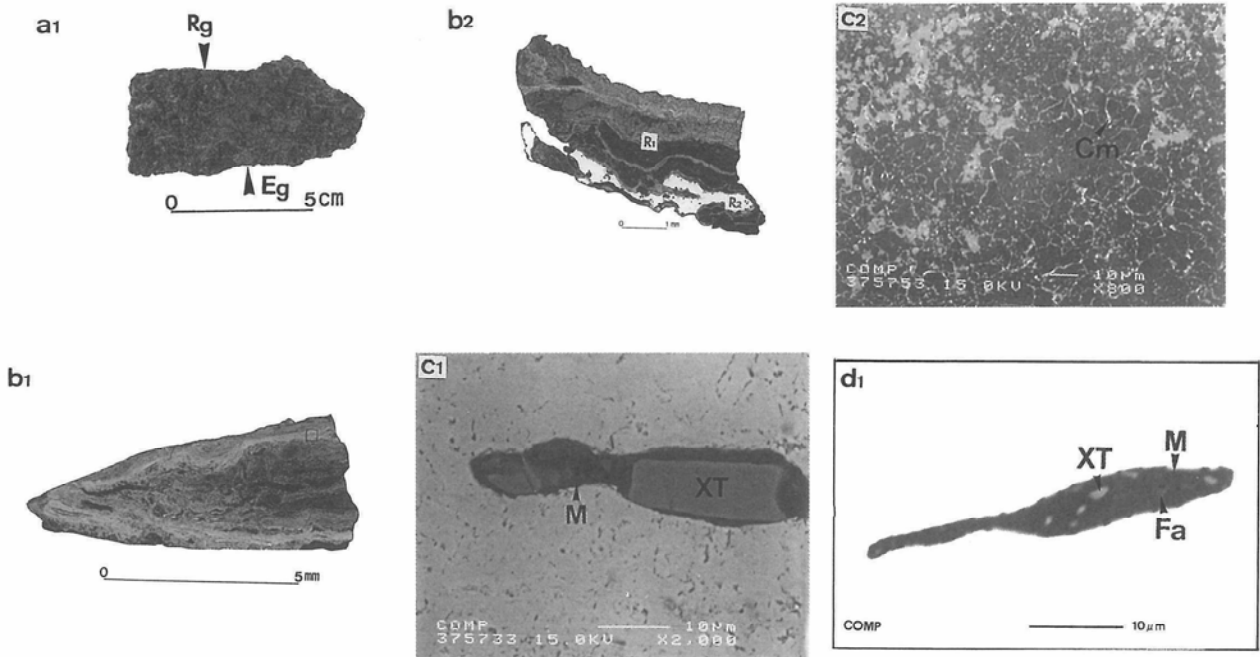


図2 No.8の外観と抽出した試料片の組織観察結果
 a1: 外観、矢印は試料片抽出位置。b1: Egから抽出した試料片のマクロ組織。c1: b1に残存する非金属介在物のEPMAによる組成像 (COMP)。XT: XT: Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、M: マトリックス。b2: Rgから抽出した試料片のマクロ組織。c2: b2領域R1内部のEPMAによる組成像。Cmはセメンタイトまたはその欠落孔。d1: b1領域R1内部に残存する非金属介在物のEPMAによる定性分析結果。XT: Fe-Ti-Al-Mg-V-O系化合物、Fa: FeO-MgO-SiO₂系化合物、M: マトリックス。

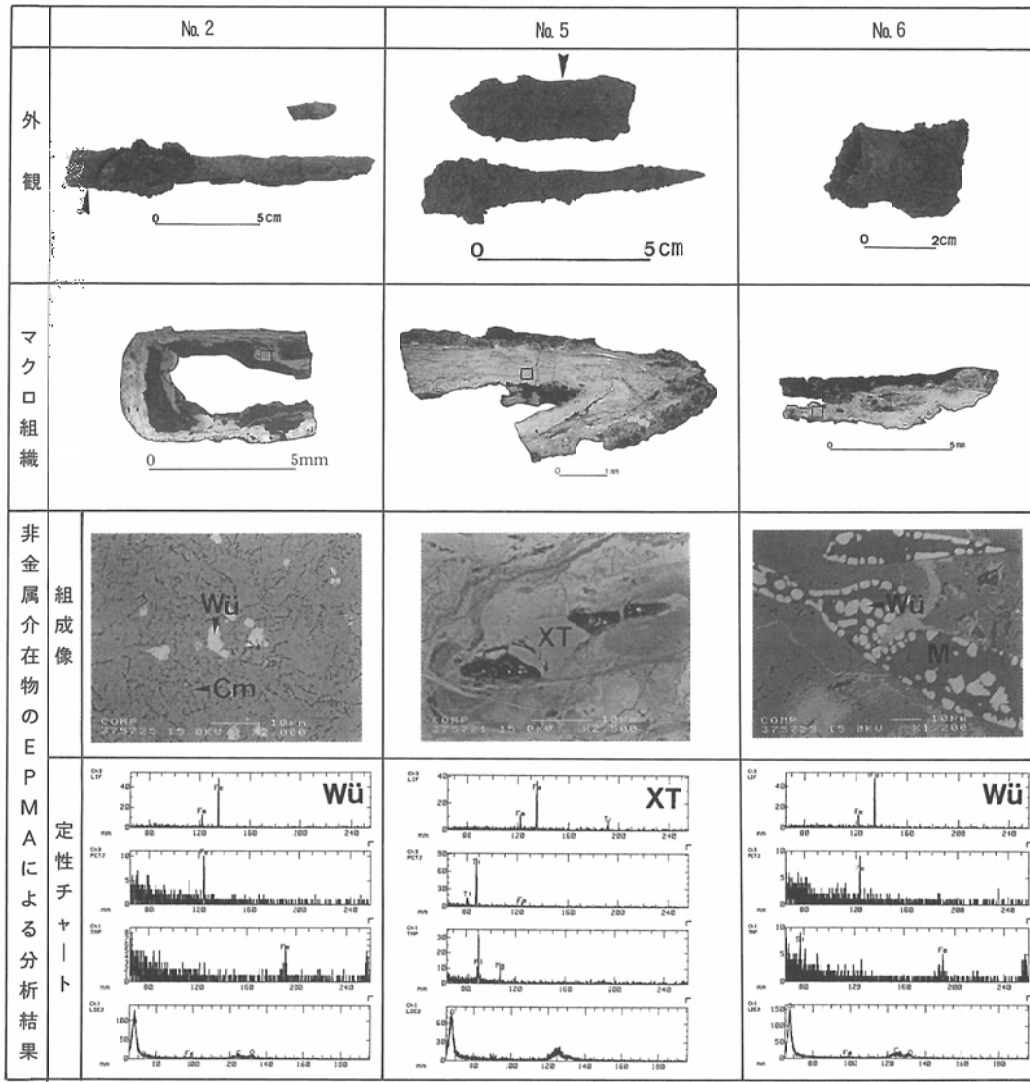


図3 No.2・5・6の外観と抽出した試料片の組織観察結果
 外観、矢印は試料片抽出位置。Wü：ウスタイト（化学理論組成FeO）XT：Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、M：マトリックス。Cmはセメントイトまたはその欠落孔。

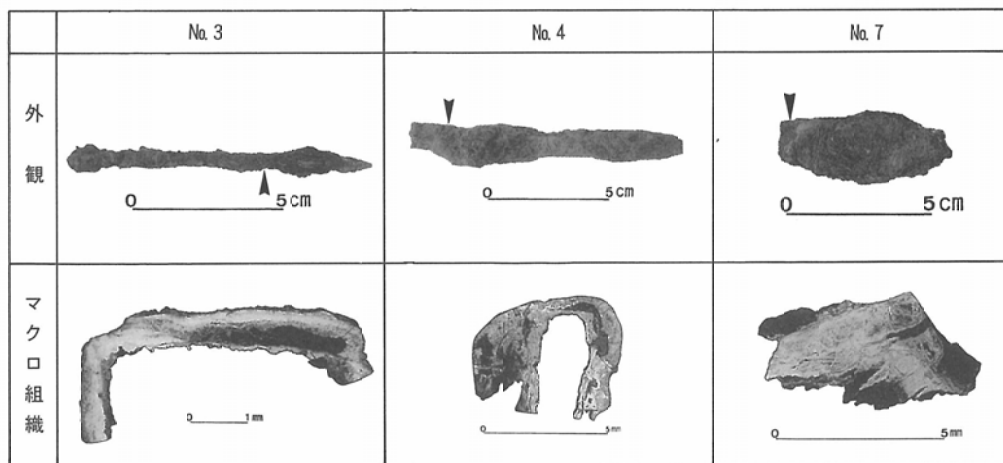


図4 No.3・No.4・No.7の外観と抽出した試料片のマクロ組織
 外観の矢印は試料片抽出位置。

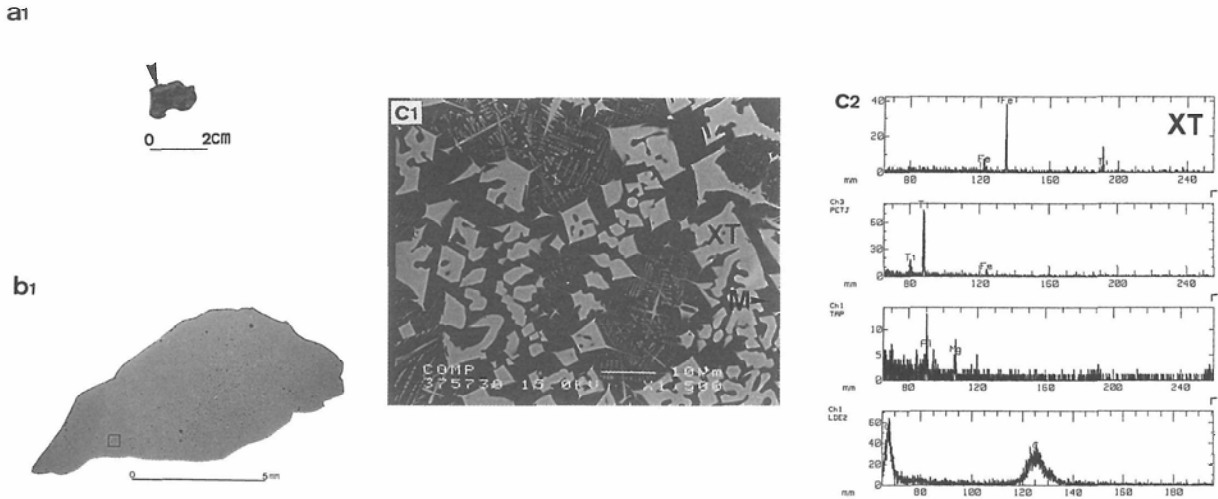


図5 No.9の外観と抽出した試料片の組織観察結果
 a₁: 外観、矢印は試料片抽出位置。b₁: 抽出した試料片の macros 組織。c₁・2: b₁に残存する非金属介在物のEPMAによる分析結果。XT: Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、M: マトリックス。

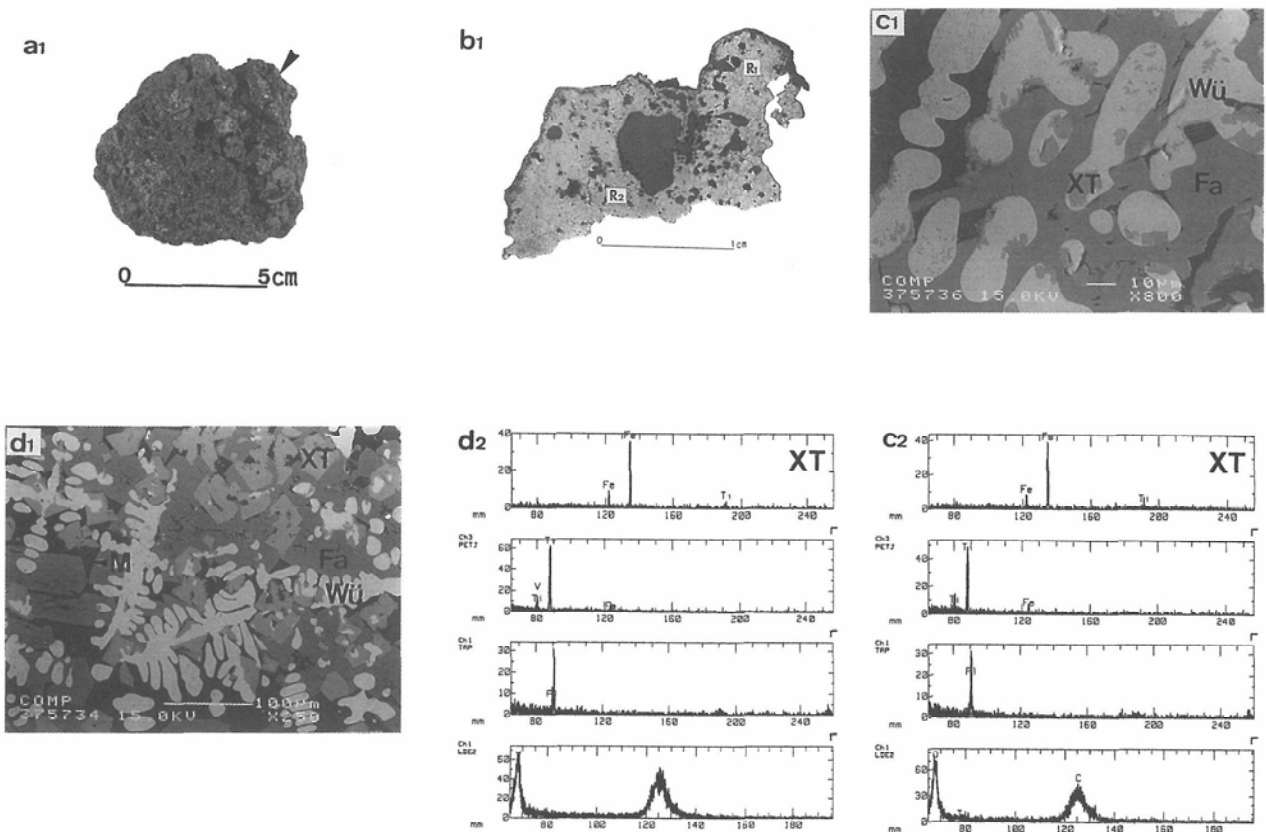


図6 No.13の外観と抽出した試料片の組織観察結果
 a₁: 外観、矢印は試料片抽出位置。b₁: 抽出した試料片の macros 組織。c₁・2: b₁領域R₁内部に残存する非金属介在物のEPMAによる分析結果。Wu: ウスタイト、XT: XT: Fe-Ti-Al-O系化合物、Fa: FeO-MgO-SiO₂系化合物、M: マトリックス。d₁・2: b₁領域R₂に残存する非金属介在物のEPMAによる分析結果。Wu: ウスタイト、XT: XT: Fe-Ti-Al-V-O系化合物、Fa: FeO-SiO₂系化合物、M: マトリックス。

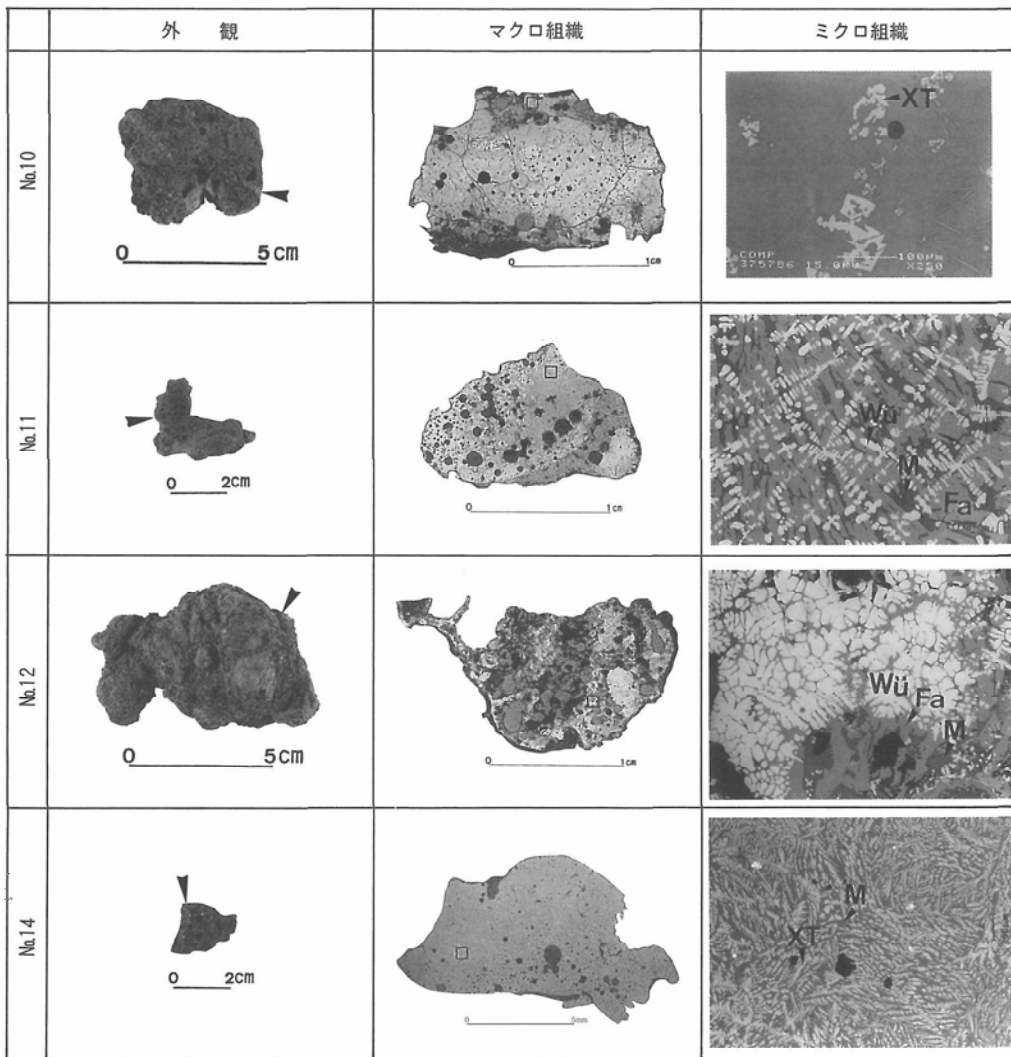


図7 No.10・11・12・14の外観と摘出した試料片の組織観察結果
 外観の矢印は試料片摘出位置。マクロ組織の枠内部をミクロ組織観察。Wü：ウスタイト、XT
 : Fe-Ti-Al-Mg-O系化合物、Fa：FeO-MgO-SiO₂系化合物またはFeO-SiO₂系化合物、Q：
 酸化ケイ素、M：マトリックス

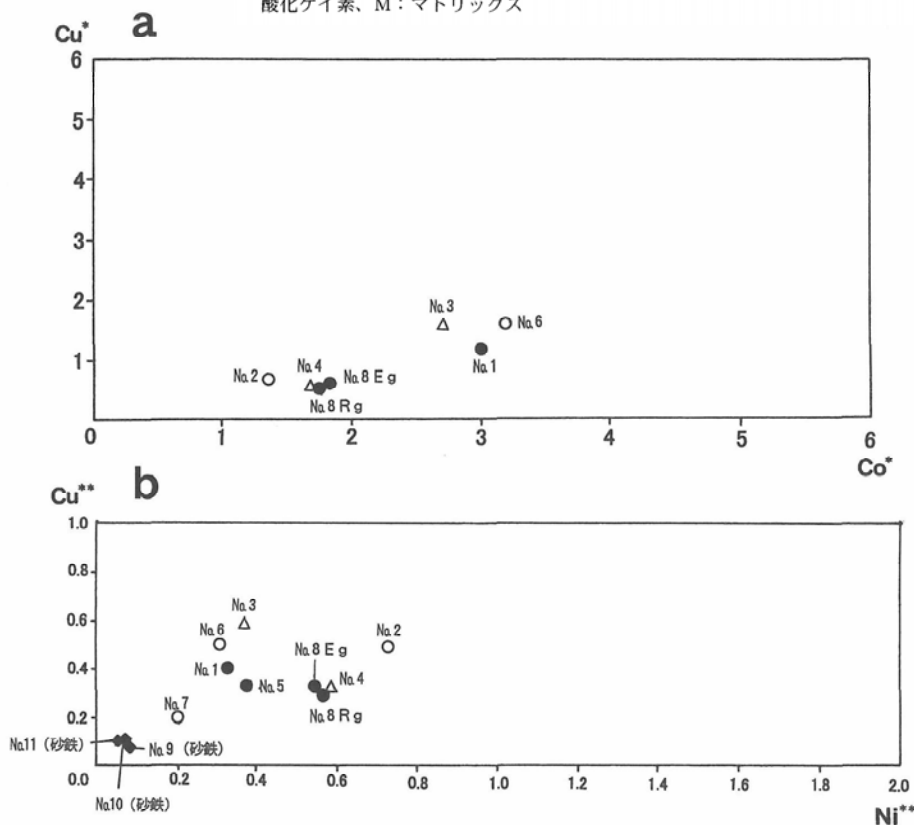


図8 出土鉄器に含有されるCu、Ni、Co三成分比
 Co*：CoをNiで規格化した値 [(mass%Co)/(mass%Ni)]
 Cu*：CuをNiで規格化した値 [(mass%Cu)/(mass%Ni)]
 Ni**：NiをCoで規格化した値 [(mass%Ni)/(mass%Co)]
 Cu**：CuをCoで規格化した値 [(mass%Cu)/(mass%Co)]

図のNo.は表1、表2に対応。
 ●：非金属介在物中にチタン化合物が見出されたもの。
 ○：非金属介在物中にチタン化合物が見出されなかったもの。
 △：非金属介在物が見出されなかったもの。

第4節 青森県浪岡町野尻（1）遺跡出土漆の科学分析

漆器文化財科学研究所 四柳嘉章

I. はじめに

野尻（1）遺跡の平成13年度調査時に、第511号建物跡外周溝部分から出土した漆液容器（9世紀末～10世紀）の分析をおこなったので、その結果を報告する。

II. 分析の方法

漆液の分析方法は色々であるが、今回はフーリエ変換赤外分光分析（FT-IR）とエネルギー分散型蛍光X線分析、実体顕微鏡観察を行った（後述）。

III. 分析結果

表面観察(図版1)

フラットな底部から内湾ぎみに立ち上がり、外反する口縁部を有する内面黒色土師器の内面全体に固化した漆液が付着する典型的な漆液容器。漆液の最大厚は5cmほどで、全体に縮み状態が著しい。体部外面にも付着している。漆液は茶褐色を呈するが、褐色で肌荒れした部分も多く劣化した状態である。

赤外分光分析

分光学（Spectroscopy）は「光と物質との相互作用によって生じる光の強度やエネルギー変化を調べる学問」¹⁾と定義され、固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて赤外線照射してゆくと、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収され、分子構造に応じたスペクトルが得られる。このスペクトルから分子構造を解析する方法を赤外線吸収スペクトル法（Infrared Absorption Spectroscopy）という²⁾。

漆塗膜の分析にはフーリエ変換赤外分光法（Fourier Transform Infrared Spectroscopy FT-IR）を用いた。赤外光は近赤外（波数14000～4000 cm^{-1} 、波長700nm～2.5 μm ）、普通赤外（波数4000～400 cm^{-1} 、波長2.5～25 μm ）、遠赤外（波数400～10 cm^{-1} 、波長25 μm ～1mm）に分けられるが、ここでは普通赤外光を用いる。波数は1cm当たりの波の数で、振動数を光速で割ったものであり、波長の逆数である。

FT-IRは普通赤外の場合は波数4000～400 cm^{-1} の光を2つの光束に分割し、1つは固定し（固定鏡、ミラーA）、他方の光路長は可動ミラー（可動鏡、ミラーB）を用いて変化させる。つまり干渉計から位相の異なる光が出るわけで、2つの光束間の距離が変化すると干渉の結果、加え合わさった部分と差し引かれた部分の系列が生ずることによって、強度の変化が起こる。すなわち干渉図形が得られる。フーリエ変換という数学的操作を行うと、干渉図形は時間領域から振動数領域のスペクトル点の1つに変換される。ピストンの長さを連続的に変化させ、ミラーBの位置を調節し、光束Bの光路を変化させる。この変化させた各点において、次々とフーリエ変換を行うと完全な赤外スペクトルが得られる³⁾。このようにして得られたスペクトルをあらかじめ得られている基準のスペクトルと比較検討することによって、塗装液及び顔料の同定ができる。

分析用試料は1～2mgを採取しKBr（臭化カリウム）100mgとともにメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形したものをを用いた（錠剤法）。条件は分解能4 cm^{-1} 、積算回数16、アポダイゼーション関数Cosine。こうして測定した赤外線吸収スペクトルを図1に掲載した（ノーマライズ）。縦軸は吸光度（Abs）、横軸は波数（カイザー）である（測定機器は日本分光製FT-IR

R420)。

図1は野尻(1)遺跡の分析データ(③)のほかに、同定の基準データとして岩手県浄法寺産生漆塗膜(①、1990年作製)と、10世紀の劣化漆である青森県浪岡町山元遺跡(②)⁴⁾、新潟県田上町道下遺跡(④)⁵⁾の赤外線吸収スペクトルを重ねたものである。①以外のスペクトルは全体がブロードとなり、とくに1070~1030 cm^{-1} 付近(多糖・ゴム質)の吸収が著しく劣化漆の特徴が見られる。野尻(1)遺跡の分析データ(③)は山元遺跡(②)と近似し、田上町道下遺跡(④)はさらに劣化した例である。全体として3400 cm^{-1} (フェノール性-OH)、2925 cm^{-1} 、2850 cm^{-1} 、1720~1718 cm^{-1} (カルボン酸)、1650~1630 cm^{-1} (糖タンパク)、1465 cm^{-1} (活性メチレン基)、1280 cm^{-1} (フェノール)の吸収が認められるので漆と同定される。

エネルギー分散型蛍光X線分析

蛍光X線分析は試料にX線を当てると、元素特有のX線(特性X線ないし固有X線)が発生(放出)する。この波長と強度を測定することによって元素の定性や定量分析を行う(図1)。分析条件は下記の通り。

使用機器：PHILIPS/PW4025、エネルギー分散型蛍光X線分析装置。

使用管球：RHターゲット9W。

検出器：高分解能電子冷却Si半導体検出器。

測定条件：30kV、20 μ A、フィルター Kapton、100sec。

測定室雰囲気：大気。測定部分の径1cm。

主なものは Fe_2O_3 61.6%、CaO 12%、CuO 11%である。

IV.小 結

以上の分析から野尻(1)遺跡出土の内面黒色土師器は内面全体に固化した漆液が付着する漆液容器で、赤外分光分析結果によるとかなり劣化が進行した生漆と判断される。古代遺跡から出土する漆器や漆工具の解明は、遺跡の性格を把握する上での重要な要素であり、このほかに漆桶や工具、漆器が検出されれば官衙関連遺跡との推定も成り立つ⁶⁾。しかし野尻(1)遺跡からは掘立柱建物や墨書土器、木簡などは検出されていないようであり、この漆液は漆器製作よりも接着用として用いられた可能性が強い。

なお分析にあたっては青森県埋蔵文化財調査センター茅野嘉雄文化財保護主事から何かと便宜をはかっていただいた。記して御礼申し上げたい。

註

- 1) 尾崎幸洋『分光学への招待』産業図書、1997
- 2) 山田富貴子「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき』化学同人、1988
- 3) SILVERSTEIN・WEBSTER、荒木峻・益子洋一郎ほか訳『有機化合物のスペクトルによる同定法—MS、IR、NMRの併用 第6版』東京化学同人、1999
- 4) 四柳嘉章「青森県浪岡町山元(3)遺跡出土漆器の科学的分析」青森県教育委員会、1994
- 5) 試料は新潟県田上町教育委員会田畑弘氏提供
- 6) 玉田芳英「漆付着土器の研究」『文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版、1995
四柳嘉章「輪島市釜屋谷B遺跡出土の古代漆器—古代漆器生産と出土遺跡の性格をめぐって」『輪島市釜屋谷B遺跡』石川県輪島市教育委員会、1997
四柳嘉章「古代~近世漆器の変遷と塗装技術」『石川考古学研究会々誌』第34号、1991
四柳嘉章「北陸・東北における古代・中世漆器の髹漆技術と画期」『石川考古学研究会々誌』第35号、1992

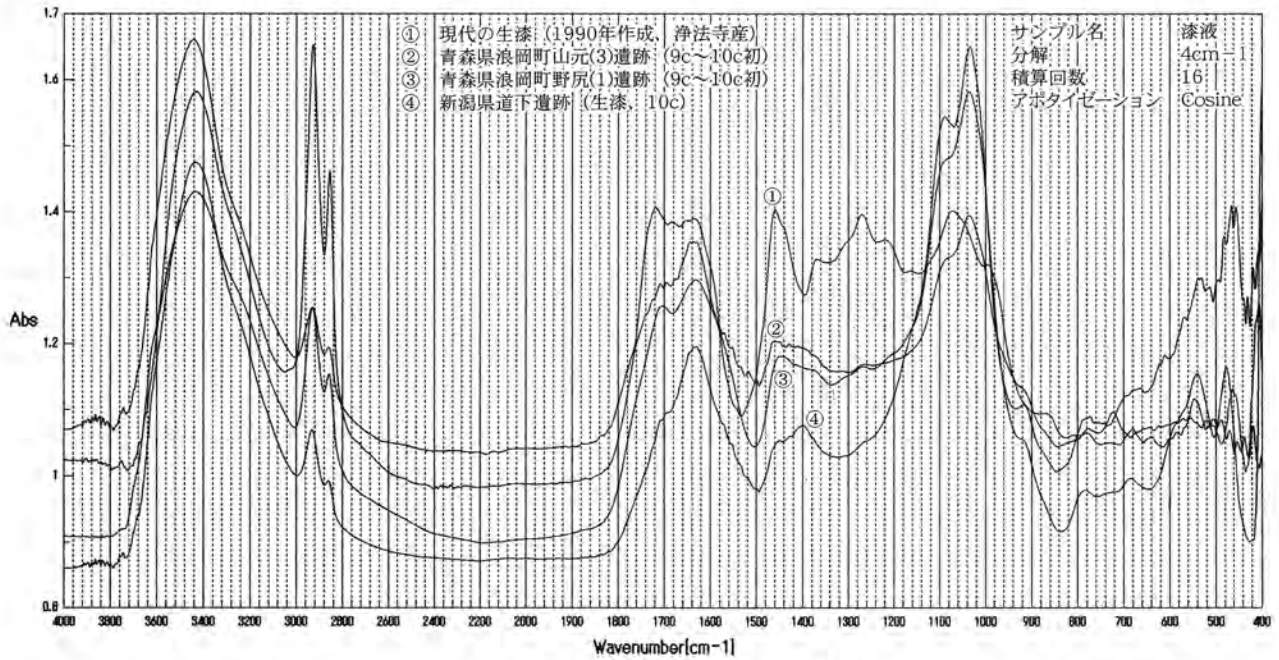


図1 漆液の赤外線吸収スペクトル

08-Jul-2002 15:22:20

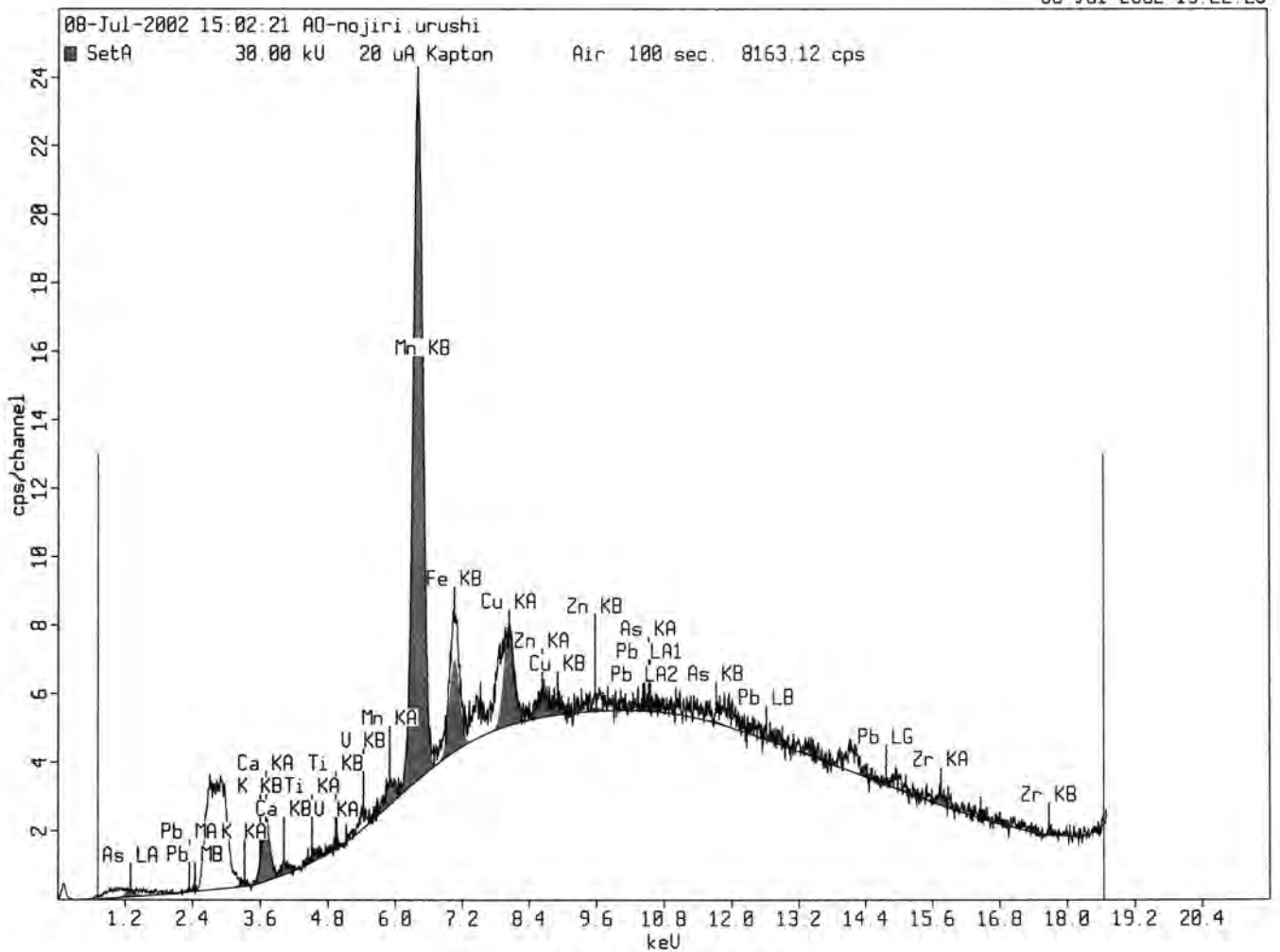


図2 蛍光X線走性分析スペクトル

第5節 青森県浪岡町、野尻（1）遺跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

2. 試料

分析試料は、平安時代中期（9世紀末～10世紀前半）以降の畑と見られる第501号連続溝状遺構から採取された試料1～試料10の計10点である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ヒエ属型、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属な

ど)、ウシクサ族B (大型)、シバ属

[イネ科-タケ亜科]

クマザサ属型 (チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型 (おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

5. 考察

(1) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめムギ類、ヒエ属型 (ヒエが含まれる)、エノコログサ属型 (アワが含まれる)、キビ属型 (キビが含まれる)、ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる)、オヒシバ属型 (シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはイネとヒエ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

1) イネ

イネは、試料2、5、7、9、10の5試料から検出された。密度は700~1,200個/gである。畑でイネを栽培する場合、連作障害や地力の低下を避けるために輪作を行ったり休閑期間をおく必要があり、耕作地におけるイネの植物珪酸体の密度は水田跡と比較してかなり低くなる。畑跡の場合、イネの密度は1,000~2,000個/g程度である場合が多い。以上のことから、同遺構で稲作が行われていた可能性が考えられる。

2) ヒエ属型

ヒエ属型は、試料5、8、9、10の4試料から検出された。密度は600~1,300個/gと低い値であるが、ヒエ属は葉身中における植物珪酸体の密度が低いことから、少量が検出された場合でも過大に評価する必要がある。ヒエ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別することは困難である (杉山ほか, 1988)。ただし、ここでは畑跡と見られる遺構から検出されていることから、栽培種に由来するものである可能性が高いと考えられる。

3) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。また、キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものも含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。なお、植物珪酸体分析で同定される分類群は主にイネ科植物に限定されるため、根菜類などの畑作物は分析の対象外となっている。

(2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、クマザサ属型やミヤコザサ節型が多量に検出され、キビ族型、ヨシ属、スキ属型、ウシクサ族Aなども検出された。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にクマ

ザサ属型が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、当時の調査区周辺はクマザサ属などの笹類を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども生育する草原的な環境であったと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。遺跡周辺にこれらのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

6. まとめ

植物珪酸体分析の結果、平安時代中期（9世紀末～10世紀前半）以降の畑と見られる第501号連続溝状遺構からはイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。また、ヒエ属（ヒエが含まれる）が栽培されていた可能性も認められた。

当時の調査区周辺はクマザサ属などの笹類を主体としてススキ属やチガヤ属、キビ族なども生育する草原的な環境であったと考えられ、ヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

[引用文献]

- 杉山真二（1987）「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号，p.70-83.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用－古代農耕追究のための基礎資料として－」『考古学と自然科学』20，p.81-92.
- 杉山真二（2000）「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社，p.189-213.
- 高槻成紀（1992）『北に生きるシカたち－シカ、ササそして雪をめぐる生態学－』，どうぶつ社.
- 藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9，p.15-29.

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	第501号連続溝状遺構									
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科 Gramineae (Grasses)											
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)		7			7		7		12	7
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type					13			13	6	7
キビ族型	Paniceae type	42	46	33	28	54	35	14	47	44	69
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	7	13	7	14	7	14	21	13	6	27
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	76	46	13	7	13	7	14	7	6	34
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	97	59	26	14	7	35	35	13	19	41
ウシクサ族B	Andropogoneae B type	14		7		13		7			
シバ属	<i>Zoisia</i>									6	
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)											
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	292	436	401	578	335	428	423	339	468	851
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	361	198	151	105	201	290	118	313	231	144
未分類等	Others	104	158	20	49	20	69	28	140	100	302
その他のイネ科 Others											
表皮毛起源	Husk hair origin	42	53	33	28	27	97	28	66	56	69
棒状珪酸体	Rod-shaped	722	720	414	446	348	656	458	632	506	687
茎部起源	Stem origin	7						7			
未分類等	Others	722	640	559	558	442	663	583	751	693	906
植物珪酸体総数	Total	2486	2377	1663	1826	1486	2299	1734	2334	2154	3144

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)		0.19			0.20		0.20		0.37	0.20
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type					1.12			1.12	0.52	0.58
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.44	0.83	0.41	0.88	0.42	0.87	1.31	0.84	0.39	1.73
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.95	0.57	0.16	0.09	0.17	0.09	0.17	0.08	0.08	0.43
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	2.19	3.27	3.01	4.34	2.51	3.21	3.17	2.54	3.51	6.38
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	1.08	0.59	0.45	0.31	0.60	0.87	0.35	0.94	0.69	0.43

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	<i>Pleiolabastus</i> sect. <i>Medake</i>										
ネザサ節型	<i>Pleiolabastus</i> sect. <i>Nezasa</i>										
クマザサ属型	<i>Sasa</i> (except <i>Miyakozasa</i>)	67	85	87	93	81	79	90	73	84	94
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Miyakozasa</i>	33	15	13	7	19	21	10	27	16	6

表1 青森県浪岡町、野尻(1)遺跡における植物珪酸体分析結果

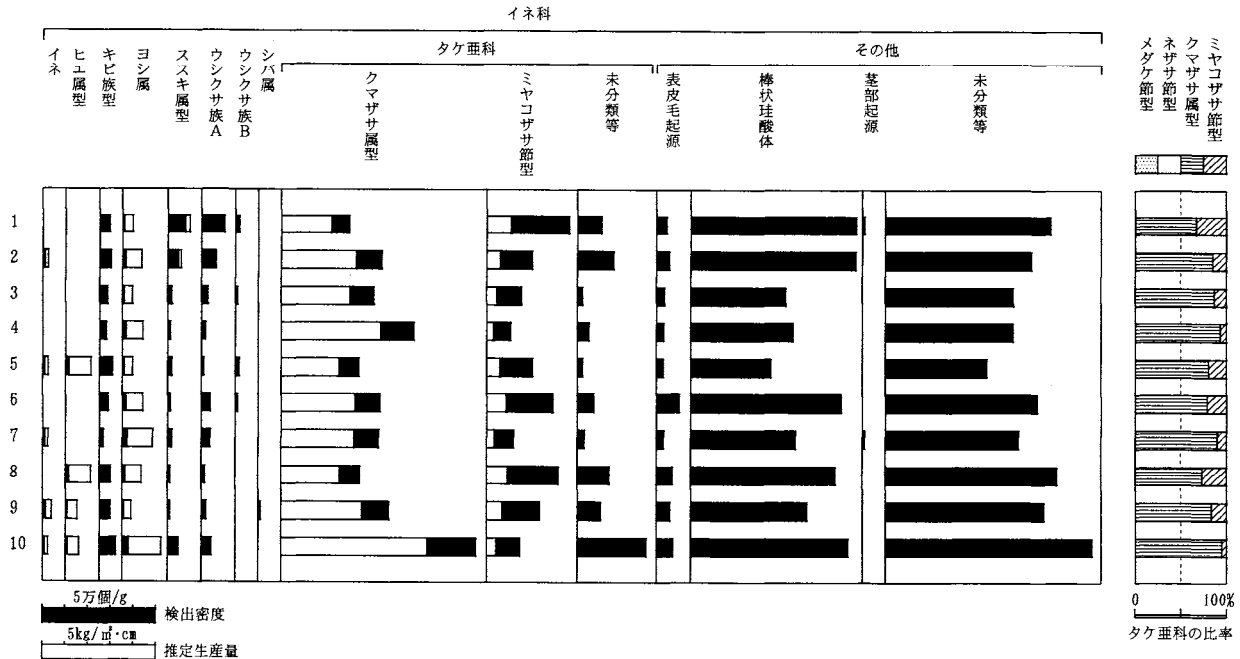


図1 野尻(1)遺跡、第501号並列溝状構造における植物珪酸体分析結果

第6節 野尻（1）遺跡出土火山灰の火山ガラス分析

弘前大学・理工学部・地球環境学科
教授 柴 正敏

野尻（1）遺跡より採集された、火山灰サンプル（21試料）、土壌サンプル（8試料）及び焼土サンプル（1試料）について、以下の観察・分析を行った。

偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察した。その結果を表1に示した。火山ガラスが存在する場合には、電子プローブマイクロアナライザー(EPMA)を用いて火山ガラスの化学組成を決定し、その科学的な特徴や供給源を検討した。なお、本報告では上記30試料のうち、代表的な12試料についてEPMA分析を行った。その結果を表2に示した。

ガラスの形態及びEPMAによる分析値により、次の試料は、主に、白頭山苦小牧テフラ起源のガラスよりなる：SI-501、SI-505、SI-506、ISD-508、ISD-509、ISD-510、SI-511、ISD-513①、ISD513②、SI-515、ISD-519、SK-506、SK-510、SK-529、SK-530、SK-531、SK-532、SK-533、(以上火山灰サンプル18試料)、ISD-513 (No.22、No.24) (以上2試料)。試料ISD-504からも少量であるが、白頭山苦小牧テフラ起源のガラスが見いだされた。(表2)。試料ISD-510及びISD-519からはヘデン輝石、試料SK-533からはエジリン普通輝石が認められた。表2から明らかのように、9成分の含有量について、既存の白頭山苦小牧テフラ起源のガラス組成(Machida, 1999; 柴ほか, 2000)と良く一致する。本遺跡に産する白頭山苦小牧テフラ起源のガラス組成は、既存のデータと同様、二つのクラスターを持つ。すなわち、バブルウォール型は、よりSiO₂に富みCaOやK₂Oなどに乏しい。一方、細粒・破片型は、バブルウォール型に比べ、SiO₂に乏しく、CaOやK₂Oなどに富んでいる。

以下の試料からは十和田八戸テフラ起源のガラスが見いだされた。ガラスの化学組成だけから十和田大不動テフラ起源のものとは区別するのは難しいが、柱状～針状のホルンブレンドがガラスと共に産出することから、十和田八戸テフラ起源のガラスと判断した：ISD-504、SI-509、ISD-511、SI-515、SK-506、SK-530 (以上火山灰サンプル6試料) ISD-513 (No.22、No.23、No.24、No.25、No.26、No.27、No.28、No.29) (以上土壌サンプル8試料)、遺構外 (No.30) (以上焼土サンプル1試料)。表2に示したように、既存のデータ (Machida, 1999; 青木・新井, 2000; 柴ほか, 2000) と良く一致する。

白頭山苦小牧テフラ起源のガラスを主とする試料でも、十和田八戸テフラ起源のガラスを混入する場合が多い。周囲の土壌には十和田八戸テフラ起源のガラスや軽石が広く分布することから、これらとの混合が考えられる。

火山灰サンプルISD-504及び土壌サンプルISD-513 (No.27) には海綿骨針が見いだされた。このことは、後背地の地層から移動・再堆積したものと考えられる。

[引用文献]

青木かおり・新井房夫(2000) 「三陸沖海底コアKH94-3、LM-8の後期更新世テフラ層序」 第四期研究 第39巻 107-120頁
Machida, H.(1999) 「Widespred tephrocatalog in ana around Japan: Recent progress」 第四期研究 第38巻 194-201頁

柴 正敏・重松直樹・佐々木 実(2000) 「青森県に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)」 弘前大学理工学部研究報告 第2巻 第1号 11-19頁

01 野尻 (1) 火山灰サンプル

No.	出土遺構	サンプル名	ガラス及び鉱物	ガラスの帰属	備考
1*	SI-501	火山灰サンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
2*	ISD-504	B-Tm火山灰サンプル	ガラス (bw,pm)、ホルンブレンド、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石	To-H, B-Tm	海綿骨針を含む
3	SI-505	火山灰範囲サンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
4	SI-506	B-Tmサンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
5	ISD-508	火山灰サンプル①	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
6*	SI-509	火山灰サンプル④	ガラス (bw,pm)、ホルンブレンド、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石	To-H, B-Tm	
7	ISD-509	火山灰サンプル①	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
8*	ISD-510	火山灰サンプル①	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石、ヘデン輝石	B-Tm	
9	SI-511	火山灰サンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
10*	ISD-511	火山灰サンプル②	ガラス (bw,pm)、ホルンブレンド、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石	To-H	
11	ISD-513	火山灰サンプル①	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
12	ISD-513	火山灰サンプル②	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
13	SI-515	火山灰サンプル①	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石、斜長石、石英、斜方輝石、	B-Tm, To-H	
14*	ISD-519	火山灰サンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石、ヘデン輝石	B-Tm	
15*	SK-506	火山灰サンプル①	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石、斜長石、石英	B-Tm, To-H	
16	SK-510	火山灰サンプル①	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
17	SK-529	火山灰サンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
18*	SK-530	火山灰サンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石、斜長石、石英	B-Tm, To-H	
19	SK-531	火山灰サンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
20	SK-532	火山灰サンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石	B-Tm	
21*	SK-533	火山灰サンプル	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石、エジリン普通輝石	B-Tm	

01 野尻 (1) 土壌サンプル

22	ISD-513	土壌サンプル①	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石、ホルンブレンド、斜長石、石英	B-Tm, To-H	
23*	ISD-513	土壌サンプル②上	ガラス (bw,pm)、ホルンブレンド、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石	To-H, B-Tm	
24	ISD-513	土壌サンプル②下	ガラス (bw,pm)、アルカリ長石、斜長石	B-Tm	
25	ISD-513	土壌サンプル③	ガラス (bw,pm)、ホルンブレンド、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石	To-H	
26	ISD-513	土壌サンプル④	ガラス (bw,pm)、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石	To-H	
27*	ISD-513	土壌サンプル⑤	ガラス (bw,pm)、ホルンブレンド、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石	To-H	海綿骨針を含む
28	ISD-513	土壌サンプル⑥	ガラス (bw,pm)、ホルンブレンド、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石	To-H	
29	遺構外	川層土壌サンプル	ガラス (bw,pm)、ホルンブレンド、斜長石、石英	To-H	

01 野尻 (1) 焼土サンプル

30*	遺構外	焼土サンプル	ガラス (bw,pm)、ホルンブレンド、斜長石、石英、単斜輝石、斜方輝石	To-H	
-----	-----	--------	--------------------------------------	------	--

bw=バブルウォール型、pm=軽石型、B-Tm=白頭山苦小牧テフラ、To-H=十和田八戸テフラ
 *=EPMA分析を行った試料

	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	FeO*	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	n	Total	EPMA
白頭山苦小牧テフラ												
No.1 SI-501(a)	67.940	0.382	14.636	4.717	0.039	0.158	1.211	5.578	5.339	12	99.847	WDS
No.1 SI-501(b)	74.734	0.244	10.660	4.146	0.042	0.030	0.359	5.314	4.473	15	98.873	WDS
No.6 SI-509(b)	74.068	0.125	10.433	4.119	0.141	0.000	0.279	5.084	5.751	1	98.816	WDS
No.8 ISD-510(a)	67.815	0.300	14.916	4.176	0.034	0.080	0.970	5.838	5.872	12	101.51	WDS
No.14 SI-515(a)	67.753	0.379	14.358	4.695	0.052	0.100	1.136	5.725	5.803	17	101.140	WDS
No.14 SI-515(b)	74.875	0.254	10.291	4.072	0.056	0.021	0.263	5.389	4.778	6	96.661	WDS
No.15 SK-506(a)	68.317	0.315	14.507	4.645	0.050	0.106	1.125	5.840	5.096	10	100.033	WDS
No.15 SK-506(b)	75.091	0.228	10.677	3.972	0.038	0.033	0.380	5.292	4.289	11	98.273	WDS
No.18 SK-530(a)	67.962	0.348	14.458	4.477	0.040	0.112	1.075	5.774	5.755	17	95.687	WDS
No.18 SK-530(b)	74.527	0.258	10.413	4.011	0.023	0.040	0.417	5.396	4.915	6	93.732	WDS
No.21 SK-533(a)	67.747	0.418	14.429	4.658	0.048	0.112	1.112	5.697	5.779	15	99.594	WDS
No.21 SK-533(b)	74.337	0.244	10.603	4.281	0.029	0.023	0.253	5.376	4.854	4	97.196	WDS
Machida(1999) (a)	68.4	0.4	14.8	4.5	0.1	0.1	1.0	5.4	5.3	15	—	WDS
Machida(1999) (b)	75.3	0.2	10.7	4.1	0.0	0.1	0.3	4.7	4.5	19	—	WDS
十和田八戸テフラ												
No.2 ISD-504	77.185	0.323	12.705	1.509	0.072	0.359	2.278	4.210	1.259	5	94.369	WDS
No.6 SI-509	77.102	0.336	12.758	1.667	0.043	0.408	2.040	4.288	1.357	14	94.488	WDS
No.10 ISD-511	77.658	0.243	12.077	1.666	0.076	0.230	1.824	4.477	1.748	3	96.022	WDS
No.18 SK-530	76.952	0.364	12.640	1.892	0.111	0.356	1.995	4.171	1.519	1	93.973	WDS
No.23 ISD-513	76.660	0.279	12.799	1.708	0.044	0.427	2.368	4.377	1.337	6	95.190	WDS
No.27 ISD-513	77.684	0.286	12.303	1.537	0.072	0.296	1.891	4.560	1.200	5	96.822	WDS
No.30 遺構外	77.843	0.251	12.622	1.529	0.000	0.334	2.160	3.587	1.672	3	97.584	WDS
青木・新井 (2000)	76.38	0.40	13.43	1.90	0.11	0.44	2.22	3.88	1.24	8	96.56	WDS
Machida(1999)	76.4	0.4	13.4	1.9	0.1	0.4	2.2	3.88	1.2	6	—	EDS

測定値は無水で100%になるように再計算した。FeO*は全鉄をFeOとして計算した。nは分析の点数、WDS及びEDSはそれぞれ、波長分散型及びエネルギー分散型EPMAを意味する。B-Tmテフラで、(a)はよりSiO₂に乏しくCaOやK₂Oに富むもの(クラスター)、(b)はよりSiO₂に富みCaOやK₂Oに乏しいもの(クラスター)。

表1: 01野尻 (1) 火山灰サンプルに産出する火山ガラスの形態及び共存鉱物

第Ⅶ章 考察とまとめ

第1節 縄文時代後期の土器群について

はじめに

第Ⅳ章・第Ⅴ章で述べたように、第5次調査区では、B区遺構外を中心に縄文時代後期前半期の土器群がまとまって出土している。また、第1～4次にわたる過去の調査でも、特に第2次調査において同様の土器群が出土している。それらは、現在の編年でいう十腰内Ib式の範疇で捉えられるものと、北海道松前町大津遺跡の第7群土器を標識とする、大津第7群土器を中心とした土器群にわかれる。第2次調査の報告においては、特に大津第7群土器について佐藤智生により考察がなされている（佐藤1999）。

十腰内I式土器の研究は、磯崎正彦等による弘前市十腰内遺跡の発掘調査およびその報告（磯崎1968）に始まり、葛西勳（葛西1979）・成田滋彦（成田1989）・鈴木克彦（鈴木1975）・本間宏（本間1987・1988）・金子昭彦（金子1994・1995）等による編年的細分等の論考を経て今日に至っている。現在、十腰内I式はIa式古段階・Ia式新段階・Ib式の大きく3つに分離するのが大方の見解であると思われる。また、大津第7群土器については、北海道松前町大津遺跡の報告により縄文時代後期十腰内I式・大湯式に並行するとされ、最近では北海道木古内町新道4遺跡の盛土における層位的出土資料を用いた遠藤香澄の分析（遠藤1988）により5段階の変遷が提示されている。

本稿では、こうした研究史をふまえ、野尻(1)遺跡で出土した該期の土器群について考察してみる。

1、遺跡内における該期土器群の出土状況

図107に過去の調査範囲を含めた遺構配置図を示した。該期土器群は、図107に示した範囲に分布しており、大きく4つの遺物集中地点と5つの小地点（単独出土等）に分かれている。それぞれにA～Iの番号を付した。

出土状況としては大きく2種類に分かれるようである。一つは第二次調査区西端（A地点）と第4次調査区中央部（E地点）にみられるように、丘陵や尾根の頂部付近に、土坑・土器埋設遺構等の遺構を伴って散発的に出土する例。もう一つは特に地点B（第2次調査区中央部）・地点D（第5次調査区東端）にみられるように、沢地形の付近にまとまって出土する例である。ちなみに地点A・E以外は皆後者に属するものと考えられる。

次に各地点の層位的な状況である。第Ⅳ章で触れたとおり、地点Dにおいて一部平安時代の遺構に掘り返されるも、良好な包含状態で出土している。しかしながら、他の地点では本遺跡における縄文時代の土層である第Ⅲ層が薄いため、良好な出土状況とは言えない。しかし、後世の掘り返しを受けたとしても、遺物の分布状況から考えると原位置から大きく動いているとは考えにくいので、本稿においては各地点をそれぞれ一括の遺物として扱うことにする。

2 出土遺物の特徴

各地点における遺物の特徴は、これも大きく分けて2種類が見られる。

一つは地点A・C・E・Fから出土している土器群である。これらの地点から出土する土器群は、①細めの（1～1.5mm程度）沈線が文様描出の主要な手法であり、施文後にはみ出した粘土を削るようにミガキ整形しているものがみられる。②沈線の施文工具は先端がやや尖り気味な棒状工具であ

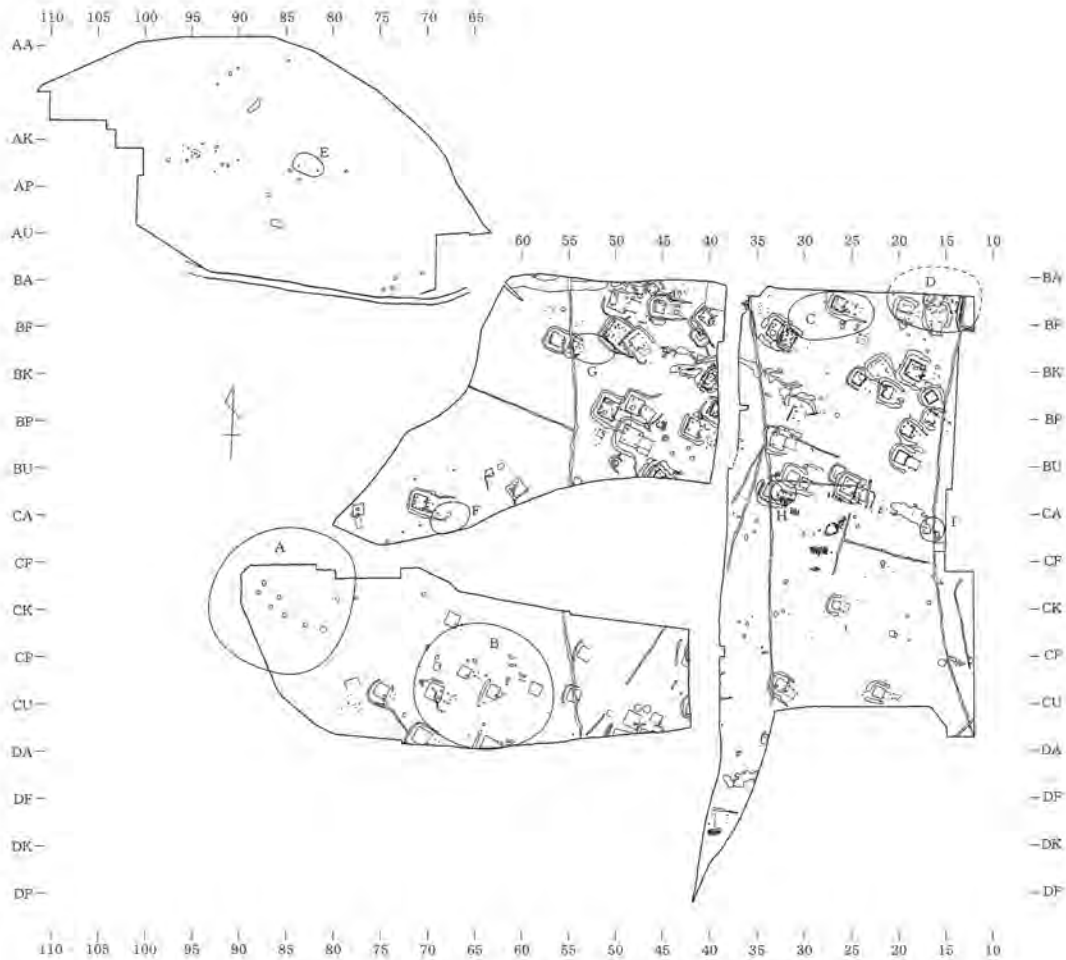


図107 縄文後期土器出土エリア

り、沈線の断面は三角形に近い。③胴部最大径が器体中央部かその下位付近にあり、胴部文様帯が幅広である。④横方向に展開する入り組み状の曲線文様や、沈線による網目状文様等が施文される。等の特徴が見られる。これら地点A・C・E・F出土土器群は概ね同一の特徴を持つまとまったグループとして捉えることが可能である。

もう一つは地点B・D・G～Iから出土している土器群である。これらの地点から出土する土器群には次の特徴がある。①太めの（2mm程度）沈線を主体とした文様構成であるが、それに付随して縄文・条線等の手法が見られる。これら付随する手法は沈線施文以前に施され、その後沈線で縁取りされている。いわゆる磨消縄文的な効果を表出している。②沈線の施文工具は先端が丸い棒状工具（竹管状の工具か？）であり、沈線の断面は丸い。③胴部最大径が口縁部直下にくるいわゆる甕形の器形が多く、胴部文様帯もそれに伴いほぼ器体中央より上位にとどまる傾向がある。④口縁部は波状を呈するものもあり、波頂部には刻み・表裏面への貼付文・半円状沈線文等が加飾されるものがある。⑤文様の種類は多様であるが、クランク状の文様・曲線・方形等の渦巻き状文様等は比較的多い。⑥⑤で触れた文様の中には、乙字文、カニのハサミ状文、花卉状文等の、特徴的な文様を施文するものがある。⑦文様を割り付ける際に櫛状工具による下書きを行うものがある。この櫛状工具による下書きであるが、十腰内Ib式によく見られる条線とは異質なものである。磨消縄文効果は、縄文や条線等を最初に施文した後（これらも下書きと取れるが）に、沈線・刺突などでその範囲を縁取るような手法をとる。櫛状工具による下書きは、縄文や条線が施文される前段階に施さ

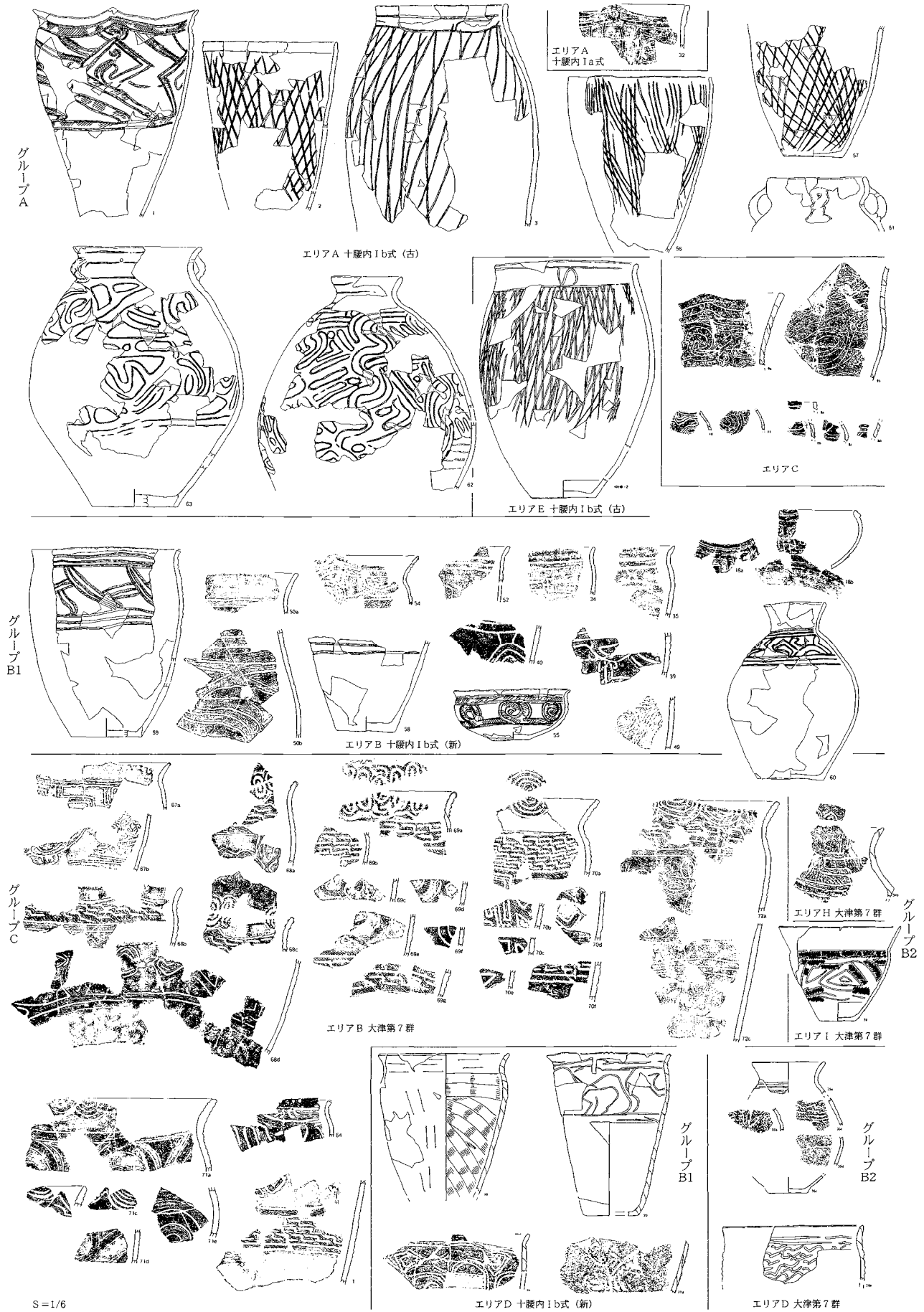


図108 野尻 (1) 遺跡における縄文時代後期の土器共伴関係図

れるものである事が注意される点である。これら7つの特徴のうち、全体にはほぼ共通するものは①、②、③、④の刻み、⑤等であるが、④の一部、⑥、⑦については、大津第7群土器に、さらにいうならば新道4遺跡盛土2類・3類に特徴的である。したがって地点B・D・G～I出土土器群は構成要素の組み合わせから少なくとも3つのグループが混在しているものと考えられる。また、地点A・C・E・F出土土器群も合わせ考えれば、4つのグループが該期の本遺跡内に存在する事がわかる。

3 出土状況および遺物の特徴から求められる該期土器群のグルーピング

グループA・・・在地色の強い十腰内Ib式の前段階と考えられる土器群。

地点A・C・E・Fから出土している(図108上段)。なお、地点C・Fは単独出土である。地点Fについてはおそらく地点Aの遺物が流れてきたと思われる。製作手法は同地点出土土器の特徴で触れたとおりである。器形は胴部最大径が器体中～下半にくる深鉢形を基本とするが、壺形も見られる。全体的に灰色っぽい色調であり焼成良好で、表面も滑らかに磨かれるものが多い。最上段右から2番目はこのグループ中でも、より十腰内Ia式に近いものと考えられる。最上段一番左はいわゆる甕形土器の範疇であり、磨消縄文効果も見られるが、文様帯の幅が広いことからこのグループに属すると考えられる。

グループB1・・・在地色の濃い十腰内Ib式土器群(グループAより新しい段階)。

地点B・D出土土器の一部分が相当する(図108中段上、下段中央)。製作手法は地点B・D・G～I出土土器群の特徴で述べた①～④(④は刻みのみが適用される)である。器形は胴部最大径が高い位置にある深鉢形を基本とし、胴部文様幅もそれに合わせるように上位に狭まっている。壺形土器・鉢形土器等も見られる。太めの沈線と磨消縄文効果による曲線や方形の入り組み状・クランク状文・渦巻き状文を主文様としている。59・60等は磨消縄文効果が見られないが、文様帯幅が狭いためこのグループに属するとした。図108下段中央の19のように無文のものもある。色調は褐色から灰褐色のものが多く、全体的に軟質な感じを受け器面が磨かれるものはない。

グループB2・・・グループCの文様・モチーフ等の、外観をまねてグループB1の製作手法で作られた、十腰内Ib式と大津第7群土器の融合した土器群。(図108下段右端)

地点Dの一部・G～Iにみられる。なお、地点G～Iは単独出土である。製作手法は器形は地点B・D・G～I出土土器群の特徴で述べた①～⑥である。深鉢形を基本とし、壺形土器も見られる。胴部最大径の位置や文様帯の幅等はグループB1と共通である。胎土等の表面上の特徴もB1群に類似している。地点Iから出土した深鉢形土器は、口縁部の無文帯の広さや、器形の面から、後続する十腰内II式に近いと考えられる。

グループC・・・製作手法等からも大津第7群土器そのものと捉えられる土器群。(図108下段左寄り)

地点Bのみから出土している。製作手法は地点B・D・G～I出土土器群の特徴で述べた①～⑦であり、特に⑦はこのグループのみに見られる特徴である。第2次調査報告書中及び新道4遺跡報告書中においては、この下書き手法が大津第7群土器に特徴的であり、十腰内Ib式土器には基本的に見られない手法であるとしている。器形はグループB同様に甕形の器形を基本とする。色調は黄

褐色系が多く、焼成は良好である。

4 各グループの編年的位置づけとまとめ

各グループの編年的な位置であるが、図108に示したとおり、グループA上段の32はほぼ十腰内Ia式に、それ以外のグループAは十腰内Ib式古段階に位置づけられる。グループB1は十腰内Ib式新段階に、グループB2とCはB1に相当し、木古内町新道4遺跡盛土2～3類に位置づけられる。グループB2の39等は新道4遺跡盛土4類に相当すると考えられる。

以上から、本遺跡の後期前半土器群においては、グループB・Cにみられるとおり、在地の製作手法で作られた土器、在地の手法で他地域の土器をまねて作った土器、他地域の製作手法で作られた他地域の土器そのもの、の3者が見られることがわかる。2番目に挙げたいいわゆる折衷型の土器群は第3次調査で少量出土しており、今回の調査で類似するまとまった資料を得た。ちなみに第2次・第3次調査の報告書では三辻利一が該期土器群の胎土分析を行っている。結果は本遺跡（に近い周辺地域）の土を使用して製作された可能性が高いものと、外来的なもの（遺跡外で制作された可能性）の2者がある可能性を指摘している。特に第2次調査では、本遺跡から出土した縄文時代早期～平安時代の土器と比較した結果、ほぼ全ての縄文後期土器が遺跡内および周辺で制作されたものと判断されている。この現象を報告者の佐藤智生は、大津第7群土器の移動ではなく製作技術を持った人の移動であると解釈している。第五次調査で得られた資料は、他地域からの人の移動に加えて、土器の模倣製作を裏付ける資料を提供した。

5 今後への課題

これらの成果をふまえ、今後の課題点を以下にあげておきたい。

- ①本遺跡内で捉えられたグループB・Cに共通した製作手法が、大津第7群土器・大湯式土器・青森県東部地域の該期土器を包括する十腰内Ib式土器群全般に共通しているかどうか。
- ②Cグループに見られる大津第7群土器に特徴的な手法は十腰内Ib式土器群の一地域における特殊な製作手法と見られるが、他の地域・型式にも同様にその地域に特徴的な（特殊な）製作手法が無いかどうか。

これらを明らかにすることで、はじめて十腰内Ib式土器群及び該期の北東北における統一的及び地域的な土器様相が明らかになると考えられる。

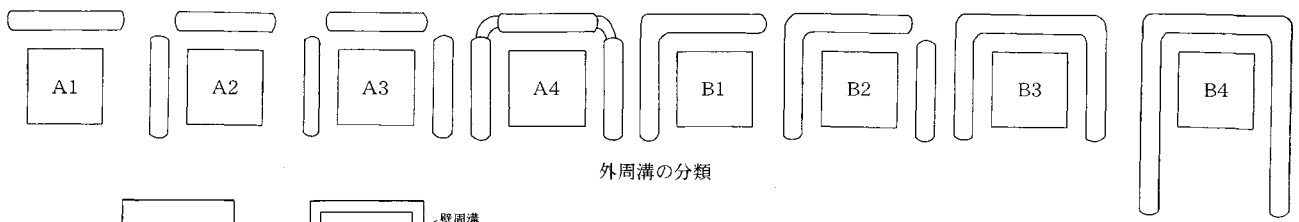
第2節 野尻(1)遺跡における平安時代の建物跡について

1 はじめに

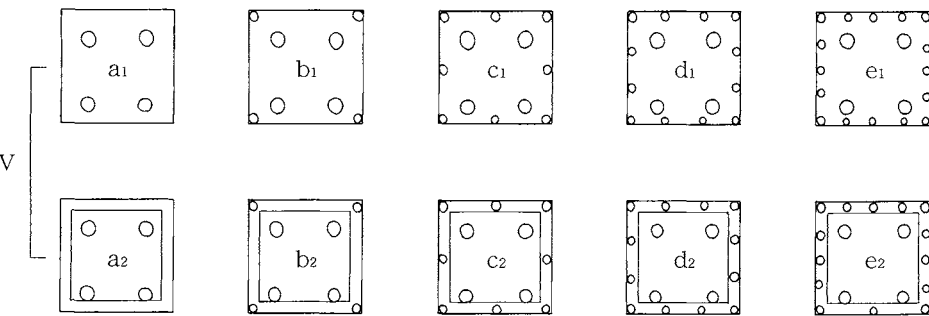
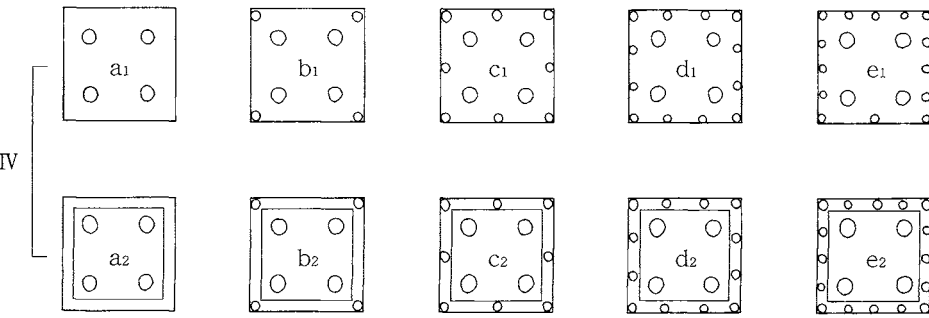
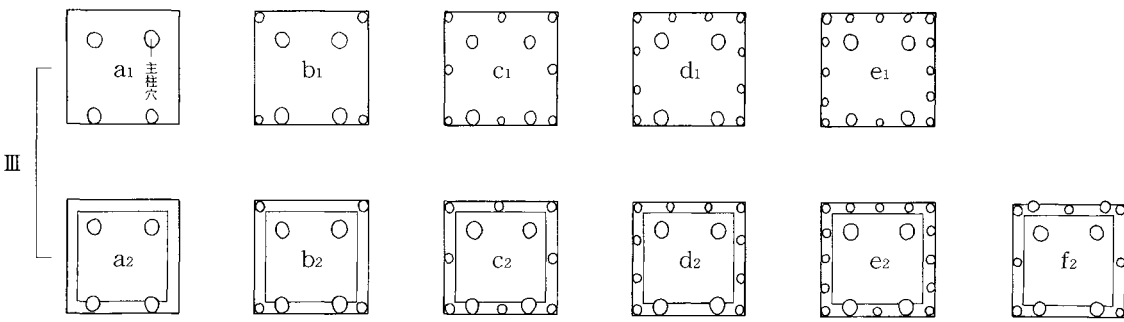
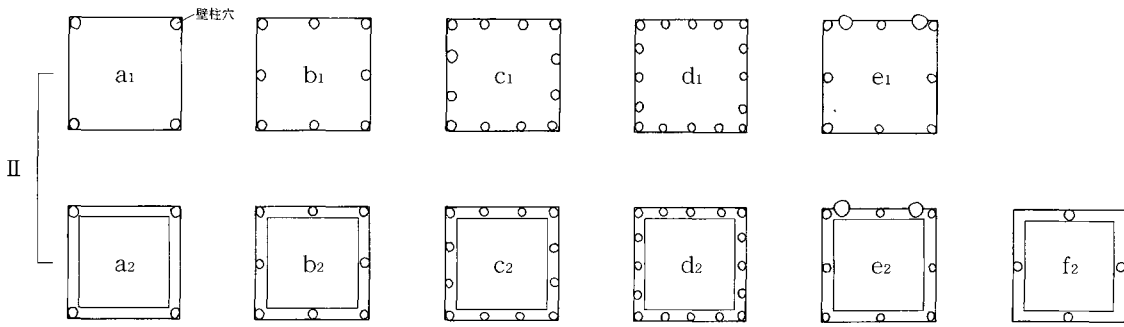
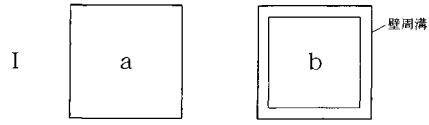
野尻(1)遺跡からは、第1次調査から第5次調査までで合計77基（建て替え・拡張分も計算に入れて）の建物跡が発見された。本遺跡における平安時代の建物跡とは、竪穴住居跡単体のものや、竪穴住居跡（竪穴部）・掘立柱建物跡（掘立部）・外周溝の3つの遺構の集合体の事を指している。ここでは、それらについて様々な角度から分析を加え、得られる傾向等を把握する。

2 建物跡の属性と分類

竪穴部を構成する要素は様々であるが、ここでは、竪穴の規模（辺の長さ）・軸方向・柱穴配置・竈の付く位置と構造・床面構築方・竪穴の深さ・外周溝の形状・火山灰の堆積状況等の諸属性

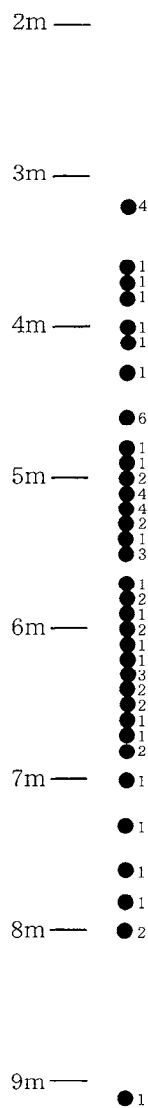


外周溝の分類



柱穴配置の分類

図109 建物跡の分類図



規模	I群	II群	III群	IV群	V群	a	b	c	d	e	f
0m台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1m台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
2m台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3m台	2	4	1	0	0	3	0	0	2	0	1
4m台	2	7	1	0	0	0	7	0	1	0	0
5m台	1	9	6	2	3	1	9	6	2	0	0
6m台	0	2	5	2	5	2	2	3	2	3	2
7m台	0	0	0	0	3	0	1	1	1	2	0
8m台	0	0	0	0	2	0	0	0	1	1	0
9m台	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0
10m台	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表2 竪穴部分類の規模別数量

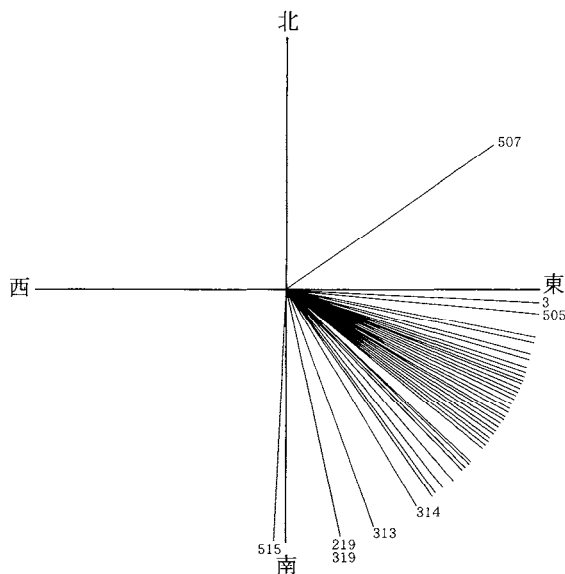


図111 竪穴部主軸方位の分布

図110 竪穴部の規模分布 (数字は数量)

の1と2は壁周溝の有無で分類している。)表2はI～V群について1m毎の規模別数量を調べたものである。それを見ると、以下のことがわかる。①I群は5例と少なく、この遺跡においてあまり一般的でない種類であることがわかる。規模は3～4m台に収まる。②II群は22例有り、3～6m台に収まるが、4・5m台にピークを持っている。③III群は13例有り、3～6m台に収まり、5・6m台にピークを持つ。④IV群は4例と少なく、この遺跡で一般的では無い種類だということがわかる。規模は5・6m台に収まる。⑤V群は14例有り、5～9m台に収まるが、6・7m台にピークを持つ。以上から、本遺跡においてはII群・III群・V群の柱穴配置がポピュラーなものであり、5m台以下のやや小さめなものにII群すなわち主柱穴を持たないタイプが多く、5mを越えるやや大きめな竪穴にIII・V群すなわち主柱穴を持つタイプが多いことがわかる。また、壁柱穴の配置状況についても、壁際に配される壁柱穴は規模が大きいものほど個数が多い事がわかる。同様な状況は、五所川原市隈無(8)遺跡(県埋分報313集)における平安時代の建物跡にも見られる。

・主軸方位

竈の構築される辺と平行する辺、及び平行して配置されている柱穴の中心部分を結んだ線などを

利用して軸を設定している。表1には設定した軸が真北から東方向に何度傾いているかを記載している。図111は主軸方位を表したものである。計測可能なもの72例の内実に70例がN-90°~180°-Eに集中していることがわかる。さらに範囲を狭めればN-101°~129°-Eの範囲に51例が集中する。これは全体の7割強を締めている。このことから、具体的な要因は定かでないが、本遺跡の建物跡は主軸方位において強い規則性を持っていることがわかる。

次にこれらの規則からはずれるものであるが、507・515号建物跡の2例がそれにあたる。507号に関しては竈の付く位置と外周溝の開口方向が約90°ずれている他は掘立部が無いこと等が特徴である。その他については515号が180°を超してほぼ真南を向いていることがわかる。この建物跡は、外周溝への遺物の大量廃棄もさることながら、竈穴部の掘り込みが見られないこと、掘立部に井戸跡が伴うこと、羽口等の鉄生産関連遺物が少量ながら出土していることなど、異彩を放つものである。また、主軸方位がN-90°~180°-E以内に入っているが319号建物跡も真南に近い主軸方位である。竈穴部堆積土からは内外面黒化処理がなされた土師器蓋等、祭祀的な用途が想定される遺物が出土している。

・竈の位置と構造について

竈が確認できたのは45例である。表1では竈の付く辺と位置を方角で表しているが、ここでは方角を考えずに、住居内部から竈のある壁を見たときに、どの位置に竈が付くのかを調べてみた。その結果、右寄りに竈があるものは40例、左寄りにあるものは6例である。また、第215号建物跡は竈の付け替えが行われており、右→左へ移動している。竈の構造はいわゆる半地下式のもの全てと考えられるが、竈側が斜面下方に位置する例がほとんどであり、削平により全体形を把握できるものは極僅かである。構築材としては粘土を使用するものが最もポピュラーである、というより芯材に礫等を使用する竈は存在しない。ただし、袖内部に羽口や土師器甕・すき入り粘土を構築材として混入する例は散見される。比較的残りの良い竈を見る限り、本遺跡の竈はごく短い煙道が竈穴外部に向かってなだらかに昇っていくタイプが多いと見られる。また、竈と他の竈穴部内施設（柱穴・周溝等）の関係からは、①竈の下に壁周溝が通るパターン、②壁周溝が竈の位置やその付近で途切れているパターンの2つが見られた。竈の残存状況は、後世の削平の影響も大きい、建物跡廃棄時における意図的な破壊行為によるものが大きいと考えられる。近年八戸市岩ノ沢平遺跡等でも、住居跡廃絶時の祭祀行為の一つではないかと注意されている。本遺跡では明確な破壊パターンは見られなかったが、破壊された竈の粘土、焼土・遺物などが外周溝に廃棄されている例が数多く見られた。ただし、外周溝にそのような状況の見られない場合、または外周溝の無い場合は竈穴部の竈付近に粘土が大量に堆積している状況が見られた。このような状況が祭祀的な行為に結びつくかどうかは別にして、今後注意しなければならない。

・床面の構築について

床面の構築については、ここではあまり詳しく扱えないが、おおよそ3つの構築方が見られた。A、地山を掘削してそのまま床面としているもの。9例確認できた。B、掘形を掘削した後土を充填し固めて床を構築しているもの。47例確認できた。C、掘形覆土の上に粘質土を薄く張り、床を構築しているもの。3例確認できた。したがって8割弱の竈穴において構築方Bがとられていることがわかる。その際土を厚く盛る場合と、へこんでいる部分にだけ充填する場合とが確認された。

・壁の残存状況について

壁の残存状況は現状で0~80cm（各竈穴で最も残りの良い部分で）であり、少しでも残っているものは54例確認された。なお、第1次調査区及び第3次調査区東端については、削平等により遺構

確認面そのものが低い場合、数値自体にあまり意味はないと考えられる。しかしながら、その中でも20～30cm台に約半分の25例とややまとまりが見られる。竪穴の深さは調査区斜面上方から下方に向かって浅くなる傾向がうかがえる。また、Ⅲ層黒色土が厚い部分においては第513号建物跡のように掘り込みが見られないものも存在する。

・外周溝の形状について

主に竪穴部を囲む位置等に注目し以下のように分類した。但し、ここでは516号建物跡外周溝先端部のような細く浅い溝については取り扱わない。

A群・・・外周溝が竪穴の周りを連続せず、各辺に対応するような形状で配置されているもの。

- 1、竪穴の1辺のみを囲うもの。2、竪穴の2辺を囲うもの。3竪穴の3辺を囲うもの。
- 4、3の各溝を浅い溝がつないでいるもの。

B群・・・連続する外周溝が竪穴を囲うもの。

- 1、竪穴の2辺を囲うもの。2、竪穴の2辺と、他の1辺を別に囲うもの。
- 3、竪穴の3辺を囲うもの。4、3の先端部がさらに延びたもの。

各分類毎における傾向等はあまりはっきりしなかった。第5次調査においては、A類やB1・2類が重複関係等において古手にやや多く見られたことは確かである。

外周溝については、平面形状もちろんであるが、従来から言われているように、先端部やコーナー部分に土坑状の深い部分が付属したり、底面が一様に平らではないなど、機能面と結びつきそうな属性が底面の状況に見え隠れしている。今回の報告では詳しくふれられなかったが、今後何らかの形で明らかにしたい。

まとめ

本遺跡の建物跡は大前提として白頭山ー苦小牧火山灰降灰以前に帰属するものが全てである。また、建物跡を構成するのは多くが竪穴部・掘立部・外周溝の3つの遺構であり、中には各要素が1つないし2つ欠落するものもある。

その中で、①主軸方位には強い規則性が見られた。②竈の位置は竪穴内部から竈の付く壁を見て右側に付くものが多い。③竪穴部の規模と柱穴配置には相関関係が見られた。④竈の構造は粘土を主要な構築材として用いた半地下式の煙道を持つものである。⑤竪穴部床面は掘形覆土を固めて床面としているものが多い。以上の傾向が見られた。この他にも建物跡の配置状況や変遷・同時期に何件存在したかなど検討課題は多い。今後明らかにしていければと思う。

第3節 第5次調査で出土した土師器・須恵器について

1、土師器・須恵器の特徴

はじめに

本項では、第5次調査で出土した土師器・須恵器について、形状・製作技術等の観点で分類を試みる。分類にあたっては、各個体に見られる様々な特徴を属性として抽出し、それらについて細分・比較検討をした。その結果、大まかに以下のような特徴が見られた。

①、土師器・須恵器を通じて、二次成形及び整形にロクロナデを使用しているものは全体の約6割程度である。なお、坏・皿・鉢・長頸壺では9割以上、長胴甕では4割弱が相当する。

②、皿・坏などの小型品は、一部を除き土師器と須恵器ともに同じ製作技術で作られている。

③、甕・長胴甕・壺・鉢では、須恵器製作技術と土師器製作技術が双方見られる。

以下ではこれらを具体的に明らかにしていく。

○ 土師器・須恵器に見られる各種属性について

遺物には様々な属性が見られる。本項で扱う属性とその種類については、図112と観察表の凡例に示した。ここではそれらの観察から得られた事実を器種毎に列記する。

皿・・・10点を図示した。土師器と須恵器双方が見られる。両者に共通するのは、1次成形に粘土塊引き上げ技術を使用する、底部切り離し技術に回転糸切りを使用する、二次成形と内外面整形技術は兼ねられており、ロクロナデによる整形を内外面に施している、の3点である。法量は須恵器が口径11cm台とやや小さめであり、土師器は11cm台から15cm台とばらつきが見られる。

○ 各機種毎の特徴について

坏・・・162点を図示した。須恵器と土師器双方が見られる。両者に共通する点は皿と同様である。皿と異なる点は1次成形に粘土紐輪積み成形が使用されるものがあること、器壁の整形にロクロナデ以外の、ヘラナデ・ケズリ等の技術を用いるものがあること、内面に黒化処理を施すものが見られることである。グラフ1は器形の指数を散布図にしたものである。坏と皿で異なった器形をとっていることと、坏自体では須恵器・土師器関係なくある程度のまとまりの中に収まることがわかる。グラフ2は種別毎の口径分布である。どの種別も12～13cmに口径のピークを持っていることがわかる。表3は種別毎の器形・口端部形状の数量を示したものである。器形の面では器壁が内湾しながら立ち上がるもの（器形1）が全体の約8割を占める。口端部形状では形状a・b・cの比率はほぼ等しい。特定の器形と口端部形状が結びついている様子はあまり見られないが、強いて言うならば内黒坏で形状a・bが卓越する程度である。

鉢・・・7点図示した。須恵器のみに見られた。全体形が復元できるものは2個体である。各個体に共通する点は、二次成形は内外面整形を兼ねており、ロクロナデにより行われていることである。一次成形ははっきりしないものが多い。しかし、幅広い間隔で接合痕が見られる個体もあることから、粘土紐輪積み成形と粘土塊引き上げ成形を融合したような技術が用いられている可能性がある。

短頸壺・・・5点図示した。土師器と須恵器双方が見られた。全体形の復元できるものは1点と少ない。一次成形技術は二種類が見られ、それによりそれ以降の製作技術が決定している。この器種にも鉢で見られた一次成形技術1と2の融合したものが用いられている可能性がある。

長頸壺・・・40点図示した。須恵器のみに見られた。全体形の復元できるものは無い。1次成形技術は鉢に見られた1と2の融合技術が用いられる。二次成形はロクロナデである。体部中～下半の外面整形はヘラナデまたはヘラケズリである。底面は多くの個体でヘラケズリであるが、一部に形骸化した高台と菊花状の成形痕が見られるものもある。口縁部付近の破片が比較的多いため、その部分において属性の分類をした。口端部の形状のみで判断するのは早計であるが、形状a・bは五所川原窯跡群MZ-6号窯出土長頸壺と、形状dは犬走2号窯出土長頸壺にそれぞれ類似している。本遺跡内にこれらの窯跡で焼成された製品が持ち込まれていた可能性は高い。

長胴甕・・・196点図示した。土師器のみに見られた。全体形の復元できるものは15点と少ない。グラフ3には口径の分布を示した。グラフには3つのピークが見られる。したがって、ここでは便宜的に0～9.9cmを長胴甕極小(ミニ)型、10cmから18cm台を長胴甕小型、それ以上を長胴甕大型と分類する。

長胴甕極小(ミニ)型・・・6点出土している。1次成形は粘土紐輪積み成形・手づくね成形が見られる。

長胴甕小型・大型・・・小型と大型に関しては一次成形に粘土紐輪積み成形を用いるものと、鉢に見ら

れた1と2の融合技術を用いるものがある。特に2次成形でロクロを使用するものに関しては後者の割合が高いと考えられる。表4には二次成形技術と器形・口端形状の関係を示した。また、表5には器形と口端形状の関係を示した。口端形状については、c・dがロクロ使用によるもので、aは非ロクロ成形によるものである。bはそれらの中間的なものと考えられる。表5からは、口端形状cと器形3、口端形状aと器形3・4のそれぞれの結びつきが強いことがわかる。また、表4からは、3b・3cと二次成形2、3a・4aと二次成形1との結びつきが強いことがわかる。

内外面の整形技術 二次成形1のものに関しては、口縁部内外がナデ、外面胴部はヘラケズリ、内面胴部はヘラナデという例が通例である。ヘラケズリ、ヘラナデ共に1単位の幅は2cm前後のやや広めなものが多い。また、内面のヘラナデには、幅の広い平滑な工具を使うもの、荒いハケメ状の痕跡が見られるもの等が見られたが、それらの属性については今後の課題としたい。二次成形2に関しては、口縁部内外はロクロナデ、外面胴部はロクロナデのみのもものとロクロナデ後にヘラケズリを施すものが見られる。内面胴部もロクロナデのみのもものと、ロクロナデ後ヘラナデを施すものが見られる。内外面共にロクロナデのみのもものは小型のものに多い。

使用痕跡 小型と大型で違いが見られた。双方共に被熱しているものがほとんどであるが、小型の口縁部内面付近には、幅約1cmほどで炭化物の付着が見られることが多い。また、被熱度合いも激しいものが多い。大型には、胴部上中半以下に被熱した粘土が付着する例がよく見られる。これら2つの異なる使用痕跡は、使用法の違いに起因することは明らかである。後者については、竈に据え付けた際、竈の粘土が付着したのと考えられるが、前者に関してはどのように使用したのか不明である。先にも述べたが、小型の被熱度合いは大型のそれより激しいものが多いという所にそのヒントが隠れているかもしれない。今後出土状況も考え合わせて解明しなければならない。

甕・・・74点図示した。須恵器のみに見られる。全体形がわかるものはほぼ皆無であるため、口縁部の残存しているものについては属性3により細分したが、その他に関しては特に細分はしなかった。

甕の製作技術 次のような特徴が見られた。①第1次成形には粘土紐輪積み技術を使用する。②第2次成形にはタタキを使用する。タタキは外面にタタキ工具の痕跡、内面にはあて具の痕跡が見られるものとナデのみが見られるものがある。③口縁～頸部付近はタタキによる二次成形の後、ロクロ（回転台の可能性もあり）ナデによる整形加工が加えられ、完成に至っている。④外面に見られるタタキ工具の痕跡は、溝が数本1単位で並ぶ、いわゆる平行タタキ目である。各溝の内部には溝に直行するような線が見られる。これは、柁目に木取りした板の表面に、年輪に直行するような溝を掘ってタタキ工具として使用したためだと考えられる。⑤内面に見られるあて具の痕跡には、外面と類似した平行タタキ目、鳥足状あるいは平行四辺形の模様等が見られる。

埴・・・4点図示した。土師器のみに見られる。全体形が復元できたものは1点のみである。1次成形は粘土紐輪積みであり、2次成形はロクロ成形と非ロクロ成形が見られた。底部形態は丸底と平底が見られた。

蓋・・・可能性のあるものも含め2点図示した。須恵器のみに見られた。形状から皿の器形2と1をひっくり返したようなものの2種類がある。前者は第515号建物跡外周溝から出土しているが、(図52-15)口縁端部がやや鋭角に面取りされている点が他の皿・坏には見られないため蓋と認識した。同様の皿は第1次調査の第15号建物跡外周溝からも出土しているが、五所川原市MZ6号窯跡からは類似した資料が出土している。後者は遺構外からの出土である(図104-69)。口縁端部には鐙状の張り出しを有し、内面口縁端部付近は細かい単位でのミガキ整形が施される。おそらく頂部には摘みが付いていただろうが、発見されなかった。胎土は外面が青灰色、断面内部が赤褐色を呈し、

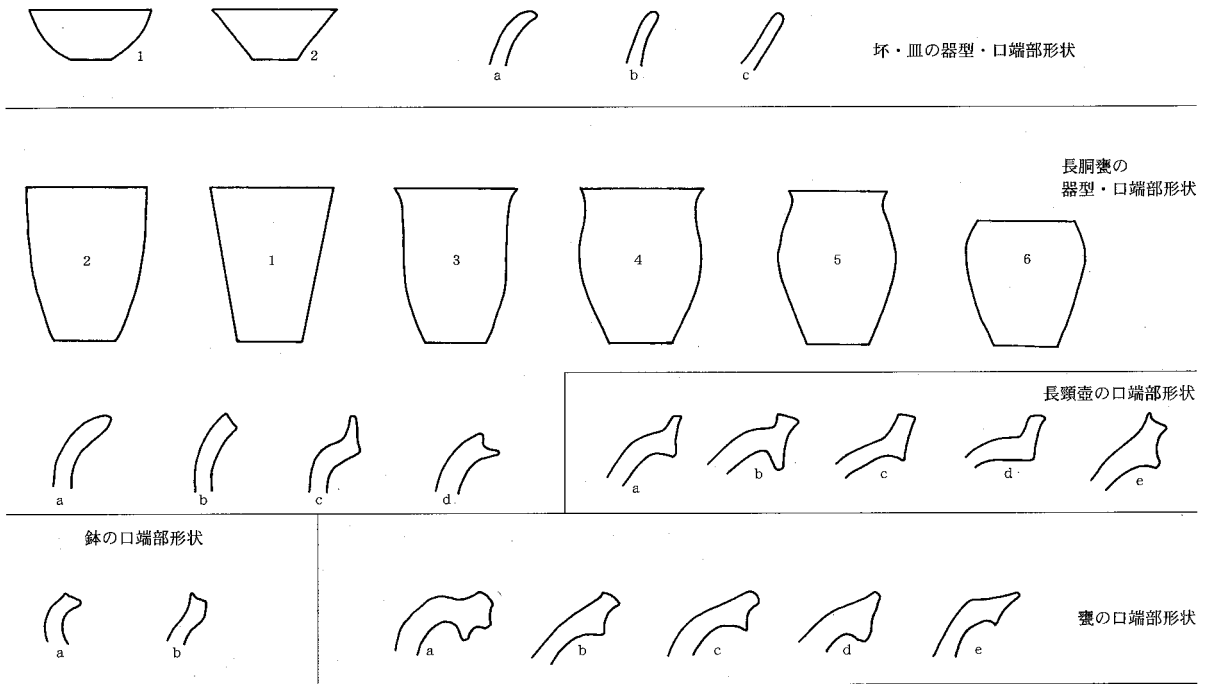
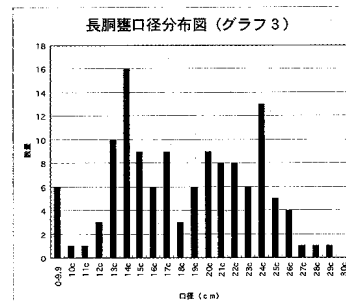
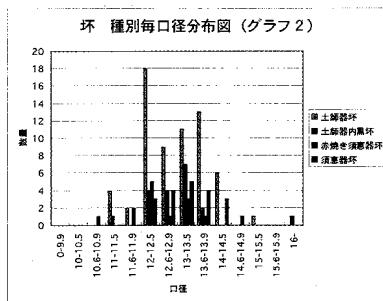
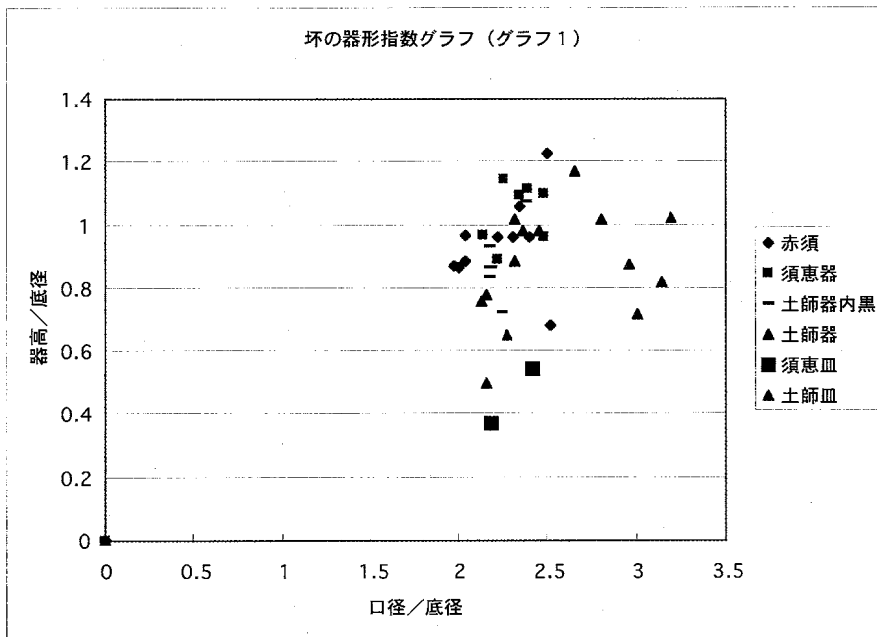


図112 土師器・須恵器の形状分類図



	土師	内黒	赤須	須恵
1a	22	8	1	4
1b	11	8	5	9
1c	20	1	6	4
2a	2	0	0	4
2b	2	0	0	1
2c	5	0	2	0

表3

二次成形\器形	1a	2a	3a	3b	3c	3d	4a	4b	4c	5a	5b	6a
1	1	5	13	6	1	0	21	8		7	3	2
2			3	11	18	1		3	4			
3						1						

表4

器形\口端形	a	b	c	d
1	1			
2	5			
3	16	17	20	1
4	21	11	5	
5	7	3		
6	2			

表5

肉眼では五所川原窯跡群での焼成ととらえられる。第1次調査の第11号建物跡外周溝からも類似したものが出土している（坏と報告されている）。青森県内においてこのような形状の蓋はあまり例が無く、もちろん五所川原窯跡群においても現時点で類例はみられないため、この蓋の出自については不明な部分が多い。

2 須恵器の遺跡内での分布状況について

室内整理作業において、第5次調査分のみに限って、特に須恵器にねらいを絞って遺構間における須恵器の接合を行った。また、接合しなかったものについても、表裏面の整形痕、断面の色調や胎土の観察から、可能な範囲で同一個体の識別作業を行った。その結果表6のように坏（皿を含む）59個体・壺（長頸壺・短頸壺）51個体・鉢7個体・大甕27個体が識別された。各個体により破片数は異なり、1片のみしか確認されないものも多数存在する。全体的には、1つの個体が複数の遺構に散らばるような状況ではなく、概ね1つの遺構とその周辺グリッド付近に収まる傾向を見せる。しかし、中には遺構間をまたいで接合または同一個体と識別されるものも見られた。以下では器種毎に特徴的な個体を取り上げてその傾向を説明する。

坏・・・59個体が識別された。そのうち3つ以上の破片が接合又は同一個体と識別されたものは5個体ある。

全体的には一つの遺構とその周辺にまとまる個体が多いが、坏19・20・22については遺構または離れた区域間に散らばっている。複数の遺構に散らばる場合、坏19では505・506号建物跡に、坏22では508・509・510号建物跡に、というように近傍の遺構に散らばる例が見られるのみである。

壺・・・51個体が識別された。坏と違い、原形が大きいので、同一個体に識別される破片数も多い。坏同様全体的には一つの遺構とその周辺にまとまる個体が多い。遺構間にまたがって同一個体が散らばっているのは壺2・5・6・9・10・13・15・43・46であるが、壺2・5・9・10では同一個体の内に1点又は数点が全くかけ離れた遺構及び区域の破片が含まれている。これらについては実際に接合している破片ではないこと、また、壺の体部破片のみの識別でもあることから、真に同一個体であるかどうか疑わしい所もある。他の個体については、坏同様に近傍の遺構間に散らばる傾向が見られた。

鉢・・・6個体が識別された。内3個体が破片1点のみでの識別である。複数の破片が接合したものの内、鉢1・2・6では遺構間で同一個体の散らばりが見られたが、いずれも近傍の遺構間に収まっている。

大甕・・・27個体が識別された。壺同様各個体の破片数は多い。また、同一個体と識別された中で、遠近を問わず遺構間への散らばりが他機種に比べて非常に多い。大甕も破片資料がほとんどであるため同一個体を誤って認識している可能性も否めない。しかし、壺に比べて表裏面の整形痕や断面の色調等に個性が強く見られること。個体の主体となる区域・遺構とかけ離れた場所から出土した破片が同一個体と認識される例が極希なのに対し、大甕の場合はそのような例が多数見られることから、個体認識の誤差と言うよりは実際に同一個体が複数の遺構間に広く散らばっている例が多いというのが実際と考えられる。ちなみに遺構間で接合及び同一個体が認識された個体は15個体（3～6・8・9・12・15～22）あるが、そのうち12個体（4・5・8・9・12・15～21）では近傍の遺構にとどまらず、離れた遺構間に広がりを持っている。特に大甕13・19・10では第502・503号建物跡と第521号建物跡の間で、実に約120mも離れた遺構間での広がりを持っている。

以上から、第5次調査の調査区内において須恵器各個体は、器種によりやや異なる分布状況を示す

Table with 6 columns: 号 (No.), 整理番号 (Inventory No.), 出土 (出土), 位置 (Location), 号 (No.), 整理番号 (Inventory No.), 出土 (出土), 位置 (Location), 号 (No.), 整理番号 (Inventory No.), 出土 (出土), 位置 (Location).

Main table with 6 columns: 号 (No.), 整理番号 (Inventory No.), 出土 (出土), 位置 (Location), 号 (No.), 整理番号 (Inventory No.), 出土 (出土), 位置 (Location), 号 (No.), 整理番号 (Inventory No.), 出土 (出土), 位置 (Location).

Table with 6 columns: 号 (No.), 出土 (出土), 位置 (Location), 号 (No.), 出土 (出土), 位置 (Location), 号 (No.), 出土 (出土), 位置 (Location), 号 (No.), 出土 (出土), 位置 (Location).

Table with 2 columns: 号 (No.), 位置 (Location).

表6 須恵器個体分類表

ことがわかる。以下に要点をまとめると、①坏・鉢・壺は複数遺構間にまたがるものも認められるが、概ね狭い範囲の遺構に分布することがわかった。②大甕については、約数近くの個体で遺構間に同一個体が広がる状況が見て取れたが、他機種と大きく違うのは広い範囲に分布する傾向が強い点である。

また、①について、坏・壺・鉢の同一個体が広がる遺構の位置関係を見ると以下のような傾向が見て取れる。

A、斜面の上下の位置にある遺構間で同一個体の広がりが見られることが多い。

B、Aの場合、斜面上位に位置する遺構が建物跡の場合、竪穴部からの出土が、斜面下位に位置する遺構が建物跡の場合、外周溝からの出土がそれぞれ多い。

C、斜面地の等高線に沿って並んだ遺構間に同一個体が広がることは少ない。

②について、大甕の同一個体が分布する遺構の位置関係を見てみると以下のような傾向が見て取れる。

A、同一個体が広がる遺構の位置関係に規則性等は見られない。

B、同一個体が広がる遺構の火山灰（白頭山—苦小牧火山灰）堆積状況には共通性が見られない。

C、個体の中での遺構毎の破片数の比率は、複数の遺構間でほぼ均等に分布する場合、ある遺構に偏る場合等様々であり、目立った規則性は見られない。

以上のような須恵器の分布状況からは次のような可能性が考えられる。

1、①のA・Bからは、廃棄後の自然作用等による遺物が移動した可能性があげられる。したがって坏・鉢・壺等の器種はある1つの遺構に最終的に廃棄されたものと考えられる。

2、①のC、②のAからは、人為的な廃棄により同一個体が複数遺構間に分布した可能性があげられる。

3、②のBからは、須恵器の廃棄が時間差を持って行われた可能性があげられる。

4、以上から、須恵器各器種による使用期間・廃棄行為の違いが可能性としてあげられる。

特に4については限られた調査区域の中のみでの可能性であることから、今後過去に調査された個体も含めてさらに追求していく必要がある。さらには、遺物の出土状態や、遺構の新旧関係なども絡めて、総合的な集落研究の一手段として高めていく必要性を感じる。

第4節 出土土師器・須恵器に見られる墨書・刻書について

今回の調査（第5次調査）では、出土した土師器・須恵器の中に墨書・刻書を有するものが見つかっている。ここでは第1～3次調査のものともあわせ、野尻(1)遺跡出土の墨書・刻書土器についてまとめることにした。なお、同じような文字・線刻が違う器種同士で見られることもあるので、器種は問わず、墨書・刻書の内容で分類することにした。また破片が多く、全体がわからないものが多いため、現在確認できる内容に基づき分類している。なお、文中の出土点数は第1～3次調査と今回の報告分とを合計したものである。また、集成図（図113～117）中のⅠ、Ⅱ、Ⅲはそれぞれ第一次調査、第二次調査、第三次調査の遺物であることを示す。

1 墨書

文字としてとれるものが多く、記号的なものは見られなかった。第5次調査では「田」「十」など一見して文字とわかるものと、図12-12など文字らしいが判読不明なものがあった。図41-48・46、Ⅲ図61-3は文字の一部と思われる。全て土師器で器種は坏が9点、甕が1点である。

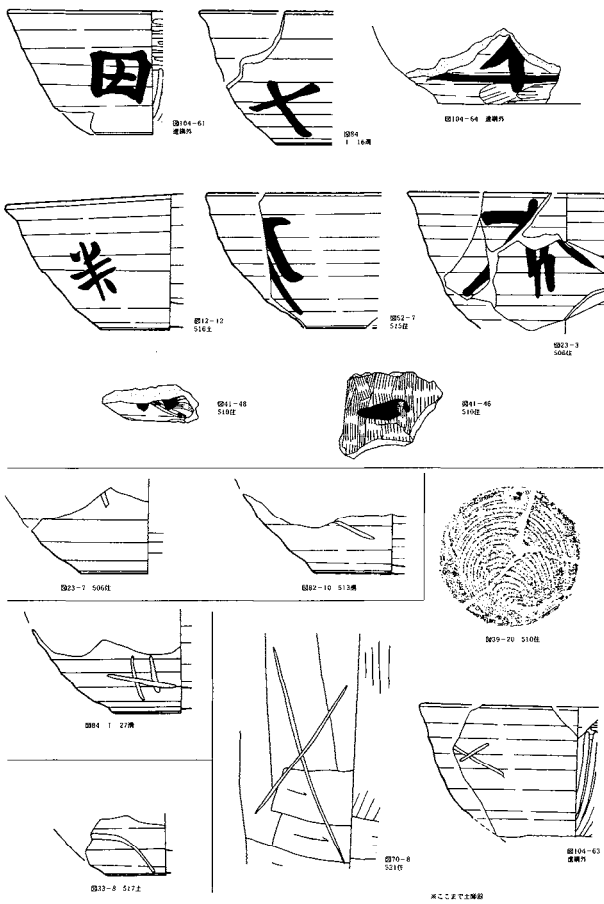


図113 墨書・刻書集成図① (第一〜三次調査分)

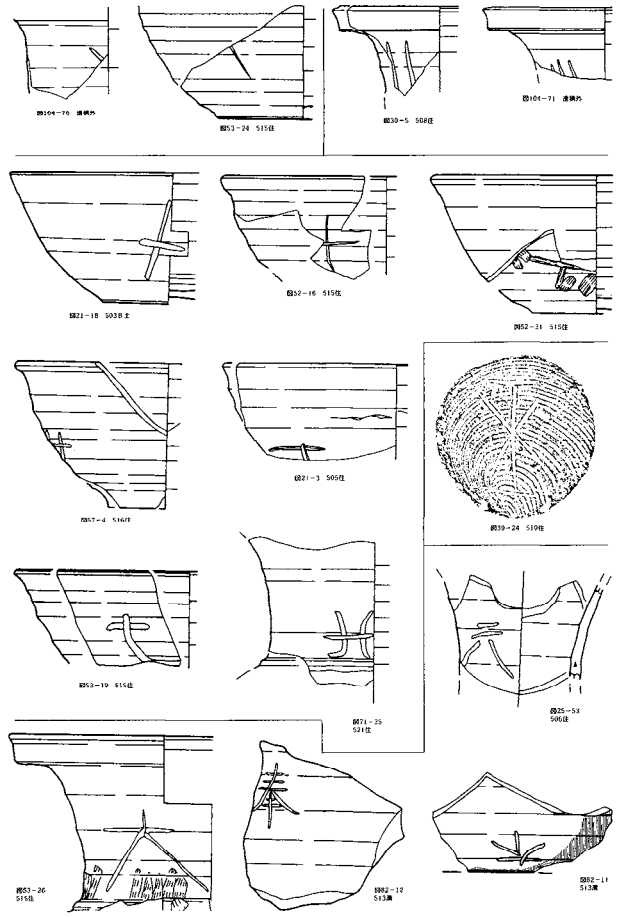


図114 墨書・刻書集成図② (第一〜三次調査分)

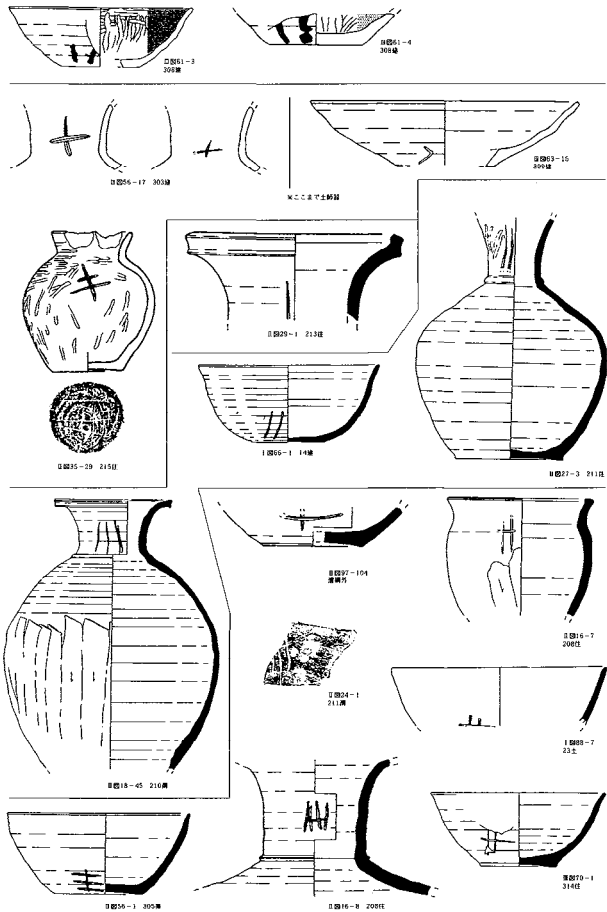


図115 墨書・刻書集成図③ (第一〜三次調査分)

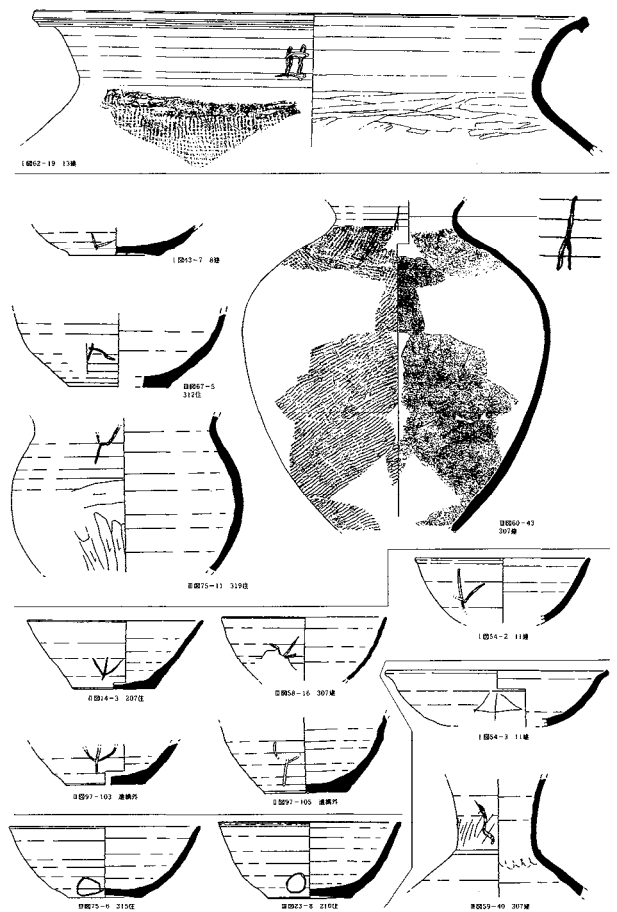


図116 墨書・刻書集成図④ (第一〜三次調査分)

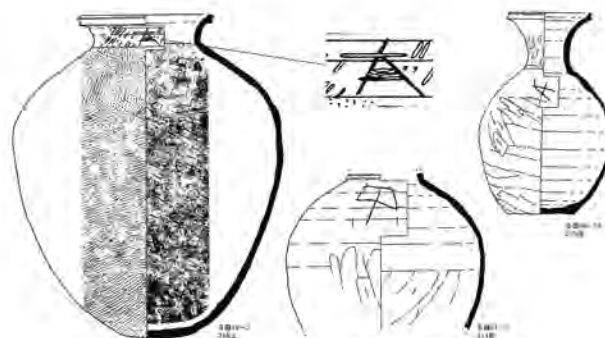


図117 罫書・刻書集成図⑤(第一～三次調査分)

2 刻書

直線や曲線で記号を構成するものと、文字ととれるものがあり、前者が多い。器種は土師器が坏7点、甕1点、長頸壺1点、小壺1点であり、須恵器が坏25点、長頸壺14点、甕5点であった。以下のように分類する。図版では土師器と須恵器をわけたが、分類はまとめて行う。

(1)記号を構成するもの

土師器・須恵器の両方に見られた。

①1本の直線のみで構成されるもの

確認できた限りで、1本の直線のみのもものをここに分類した。

②縦線のみで構成されるもの

縦線を1～複数本横に並べる。

③縦線・横線の組み合わせで構成されるもの

1～複数本の縦線を、1～複数本の横線が横切る。ほとんどが縦線の後に横線が入る。I図56-1、II図35-29は1本の縦線を2～4本の横線が横切るが、これらは横線のほうが先にひかれており、II図16-8などのパターンが90度横倒しになったものかもしれない。I図62-19の大甕頸部では、線位の線を2本ひいた後に横線を上下に入れて、「井」の字形にしている。また図51-19・25は縦線がカーブを描くもので、縦位と横線で構成されるもののパリエーションの一つとした。

④斜線が交差するもの

図39-20は土師器坏の底部に細く線を引くものである。図39-24は須恵器坏の底部で、交差する2本の斜線に中心に縦線、上下に横線が加えられている。

⑤線が二又を構成するもの

一本の線の途中からもう一本の直線ないし曲線が引かれるものである。

⑥線が三つ又を構成するもの

まず長めの線を一本引き、次に両側に2本の斜線を引く。斜線は直線的なものやや弧を描くものがある。

⑦線で多角形を構成するもの

複数の直線で五角形に近い形を作る(III図75-6)。

⑧円形を描くもの

一筆書きで一気に円を描く(II図23-8)。

⑨その他

I 図54-3は文字と認定できなかった。Ⅲ図59-40はS字状の、図33-8・Ⅲ図63-15はくの字状の曲線である。

(2)文字と見られるもの

一見して意味の通るものとそうでないものがある。前者は「大」と読めるものが2点、「女」「奉」と読めるものが各1点ずつ出土した。後者では、Ⅲ図27-2が「中」または「甲」と思われるが、縦線が四角の部分突き抜けていない。図25-53は「六」「二八」「元」のいずれとも読める。図82-11は「不」か。

今回まとめた第1次～第5次調査分で、墨書・刻書を有するのは土師器22点、須恵器44点、計66点である。

墨書は、土師器にのみ10点見られた（このうち8点が第5次調査で出土している）。ほぼ全て文字と思われ、記号的なものはない。器種別に見ると、10点中坏が9点、甕が1点である。また、墨書が見られる位置は坏は体部の中位から下位、甕は胴部である。

刻書が見られたのは土師器12点、須恵器44点である。刻書の線には幅の広いものと細いものがある。

土師器では最も多かったのは(1)-③縦線と横線の組み合わせで構成されるもので、刻書の有る土師器12点のうち5点、(1)-④斜線が交差するもので3点、(1)-①1本の直線のみで構成されるものが2点、(1)-⑨その他が2点である。次に器種別に見るとまず坏が最多で7点、次いで長頸壺と小壺が2点ずつ、甕が1点である。長頸壺と小壺は1つの土器に2箇所の刻書を持つ。刻書が見られる位置は、坏はほとんどが体部の中位～下位だが、底部に施されたものが1点ある。長頸壺は頸部、小壺は肩部と底部だった。

須恵器では、最も多かったのは(1)-③縦線と横線の組み合わせで構成されるもので、刻書を有する須恵器44点のうち15点、次に多いのは(2)の文字と見られるもので7点、次が(1)-②縦線のみで構成されるものと(1)-⑥線が三つ又を構成するもので5点ずつ、(1)-⑤線が二又を構成するもの4点、(1)-①1本の直線のみで構成されるものが3点と続く。器種別では坏が最も多く25点、次が長頸壺で14点、甕3点、壺2点と続く。刻書の位置は坏なら大部分は体部の中位から下位だが底部に施したものが1点、長頸壺は14点中11点が頸部で肩部に3点、壺は肩部、甕は頸部だった。刻書の見られた須恵器で、床面・床面直上からのものを抜き出したところ、1軒の住居で同じ刻書は出土せず第二次調査208号住居からは刻書土器が2点出土するも、違う記号であった。

以上をまとめると次のようなことが言える。

- ・刻書の種類で土師器・須恵器とも最も多かったのが(1)-③縦線と横線の組み合わせで構成されるものである。刻書を有する土師器・須恵器56点の36%にあたる20点に見られる。しかし次の順位では、土師器が(1)-④斜線が交差するもの、(1)-①1本の直線のみで構成されるものと記号的なものが続くが、須恵器は(2)の文字と見られるものが2番目に多く、この後に記号的なものが続く。

- ・器種別に見ると、墨書は大部分が土師器の坏、刻書は土師器・須恵器とも最も多いのが坏、次が長頸壺である。さらに刻書の場合、坏はどの分類も見られるが、長頸壺で見られる分類は(1)-②(4点)、(2)(7点)などの5つであった（他の器種に関してはそれぞれ1～3点の出土なので傾向を論ずることはしなかった）。

- ・墨書・刻書とも坏なら体部中～下位に、長頸壺は頸部、壺は肩部、甕は頸部に施される場合が多い。
- ・同じ遺構で全く同じ墨書・刻書が見られることはなかった。

- ・刻書に用いる工具が一樣ではない。
- ・1個の土器に2箇所の刻書を施す例も2点（Ⅲ図56-17、Ⅱ図35-29）見られた。第3次調査56-17では同じ記号、第2次調査35-24では違う記号が書かれていた。

以上が野尻(1)遺跡出土の墨書・刻書土器から得た見解である。今後は周辺遺跡の資料と比較検討することで、類似性や独自性を探っていく必要がある。

第5節 出土土製品について

今回の調査で出土した土製品は遺構内36点、遺構外17点であわせて53点であり、その内訳は土玉19点、ミニチュア土器18点、土鈴7点、用途不明のもの3点である。土玉とミニチュア土器だけで出土した土製品の約7割を占める。総数53点の中には製品とは言えないが焼成粘土塊としたものも4点含まれる。ここではまとめて出土した土玉・ミニチュア土器・土鈴の3種類に焦点を絞って見ていくことにする。

1 土玉

土玉は遺構内から18点、遺構外から1点出土している。黒色を呈するものと白または褐色を呈するものがあり、19点の内11点が黒色である。大きさは10mm以上15mm未満のものが8点、15mm以上のものが6点、10mm未満のものが3点である（大きさは長さと同幅のうち、長い方をとった）。断面形は球状のものがほとんどだが、側面に稜を持ち、そろばん玉のようなものが1点あった。さらに球状といっても、縦もしくは横方向につぶれ、扁平気味になる場合もある。第506号建物からはやや扁平で穿孔がないものも出土している。また、表裏で孔の位置がずれるため、玉に対して孔が斜めに貫通するものが2点ある。勾玉形のものが2点、第503建物・第518号建物外周溝から出土している。2点とも黒色を呈する。

2 ミニチュア土器

器高が6cm未満のものをミニチュア土器とした。遺構内・外から9点ずつ出土している。外・内面にケズリ・ヘラナデといった普通の土師器と同じ調整技法を用いたものと、手づくねのみで作られたものがあり、前者では30-14・34、105-100の甕、30-15の鉢がある。甕は口縁部の一部かと思われる破片も見られる（105-101など）。また、24-35は壺の胴～底部、24-37は杯（手づくねの後でナデによる調整を全体に施しているの前者に含めた）と思われる。これらはミニチュアとした中でも口径（6.0）cm～7.3cm、器高2.4cm～（5.3）cmと比較的大きい。一方、手づくねの方は21-24のように完全に手づくねのみで成形するものと24-34のように手づくねの後に部分的にヘラナデなどの調整を施す場合がある。大きさは、105-97の壺が口径（8.7）cm・器高（4.1）cmと大きめだが、残りは口径（1.4）cm～（3.6）cm、器高（1.4）cm～（2.6）cmと小さめであった。

3 土鈴

形状から土鈴ではないかとしたものまで含め、遺構内から4点、遺構外から3点出土している。全て破片での出土で、紐部と見られるものが1点（第501号並列溝状遺構）のほかは紐部～体部であり、完形のものはない。第501号並列溝状遺構出土のものは中央付近に小さな凹みを残し、穿孔を途中で止めた様な形跡が見られる。また、第510号建物外周溝から出土した破片に見られるように

鈴口に直線的な切り込みと丸い端部を形成し、現代の鈴と同じスタイルをとっている。内面にも調整痕を残すものが多いこと、105-109では紐部と体部の境目とみられる部分に調整痕を残すものがあることから、別々に成形した体部のパーツを接着後、ナデ・ケズリにより整形した後、最後に紐部を付けて完成させたのではないと思われる。

出土状況から見た傾向

今回の調査では遺構内の土製品がある程度まとまりをもって出土している。

遺構別に土製品の出土状況を見ると、最も多かったのは第506号建物跡で14点が出土、この内約8割が土玉（8点）とミニチュア土器（4点）である。土玉は新段階の竪穴部から5点、古段階の竪穴部から3点の計8点となる。色は黒3点、白5点である。この内半分は床面または床面直上からの出土である。位置は建物跡の西側から東側にかけて散発的なもので、これといって特徴は見いだせなかった。ミニチュア土器も外周溝を含めて計5点が第506号建物跡から出土した。また、第510号建物跡外周溝からは土鈴2点、ミニチュア土器1点、用途不明土製品1点が出土している。ちなみに第1・3次調査分も合わせると、第503（305）号建物跡からは土玉3点とミニチュア土器1点を含む計5点、第508号建物跡からは5点が出土し、その内4点はミニチュア土器である。また、出土遺物中の土製品の割合は、第510号建物で8%、第503号建物で12%、第508号建物16%、第506号建物では21%であった。第506号建物跡の土製品の出土量は出土遺物全体の量の多さに比例した結果とも考えられるが、同じように出土遺物の多い第510号建物跡・第515号建物跡の状況と比べると、第506号建物跡における土製品の割合はやはり高いと言える。遺構外での出土状況には際違った特徴はないが、第505号建物跡の北東側と第509号建物跡の北東側に若干のまとまりが見られる程度である。

このようにある遺構に出土遺物が偏る傾向については、本遺跡の近傍にある浪岡町野尻(4)遺跡・五所川原市隠川(12)遺跡等に見られる。野尻(4)遺跡例では出土土製品23点（ミニチュア土器含む）中16点が土玉でありかつ、第19号建物跡カマドからそのうち8点が弧状に並んで出土している。隠川(12)遺跡例では土製品33点中18点が土玉、さらにその土玉の内12点とミニチュア土器30点のうち4点が第2号住居跡から出土している。他の遺跡については寡聞にして知らないが、同時期における遺跡内における土製品類のあり方の一端を示すものと考えられる。しかしながら、その出土状況が使用時の状態を保っている例は少なく、ある遺構に他の遺物と共に廃棄されている状況が多いことを考えると、本遺跡のような出土状況が果たしてどのような意味を持つのかは、先に論じた須恵器の状況等も含め、一緒に廃棄された遺物の使用期間等を念頭に入れて慎重に考えねばならないだろう。

第4節 まとめ

野尻(1)遺跡は、梵珠山から南へ下る大釈迦川右岸に位置している。平成8年度から調査が進められ、平成13年度の調査で5度目の調査となる。第5次調査区は、平成10年度までの第1～3次にわたる調査のほぼ隣接地である。今回の報告でも、平安時代中期（9世紀末から10世紀初頭）の集落跡を主体とし、竪穴住居跡に外周溝と掘立柱建物跡が付随する特徴的な住居跡などが数多く検出された。それに加え、縄文時代前期初頭の土器・縄文時代後期前半期の土器・石器・土製品、古墳時代の土器が発見された。以下に本報告の概要を各時代毎に列記し、まとめとする。

○縄文時代前期～中期・・・縄文時代前期初頭（長七谷地第Ⅲ群）の土器が1個体出土した。全体

型がわかるものとしては津軽地方では貴重な資料である。また、円筒下層式土器、中期後半の大木式土器も破片で少量出土している。

○縄文時代後期…十腰内Ib式に比定される土器が遺構外からややまとまりを持って出土した。特にB区遺構外では当該期の遺物集中地点と柱穴跡が発見された。遺物の特徴としては在地形の十腰内Ib式土器群と、北海道系の大津第7群土器を模倣した土器群が主体である。第2次調査で発見された大津第7群土器群とは、制作技術に見られる特徴から、その担い手の違いが想定できる。

○古墳時代…古式土師器が1片出土した。詳細は不明だが、当地域での出土は極まれである。

○平安時代…竪穴部・掘立部・外周溝から構成される建物跡が多数発見された。そのすべてが白頭山-苫小牧火山灰降下以前のものであることが判明した。遺構の分布状況としては、調査区全域に均等に広がるのではなく、2~3軒がまとまりを作り、そのまとまりも地形等の要因により密集地と空閑地を持って存在していることが判明した。ほぼすべての建物跡で主軸方位を南東方向に向けて揃えている点などに規則性が見られた。竪穴部の柱穴配置と規模には相関関係が見られた。第4次調査で発見された製炭土坑と推測される土坑が今回の調査でも2基発見された。遺構内外からは土師器・須恵器が多量に出土した。土師器では、坏はもちろんのこと長胴甕においても器体成形にロクロ技術すなわち須恵器製作の技術を使用するものが多い。須恵器の個体識別作業からは、特に大甕が複数遺構間に広い分布を持つことが判明した。土師器・須恵器には墨書(土師器のみ)・刻書がみられた。

土製品では、ミニチュア土器、土鈴、土玉等が出土した。そのうち土玉に関しては、第506号建物跡から約半数が出土するなど出土遺構に偏りが見られた。

○自然科学的分析結果…●放射性炭素年代測定の結果では、第513号溝出土木製品の値の中で、2万年以上も前の値が測定された。おそらく古い時代の埋没樹木が露出したものと考えられる。●出土炭化材及び木材の樹種同定では、主に第518号建物跡竪穴部出土炭化材について樹種同定を行ったが、結果はクリを中心とする住居構築材の樹種組成であることが判明した。また、いわゆる焼成土坑(第542・544号土坑)出土炭化材の樹種は、モクレン属・ヌルデ亜種が見られた。第4次調査に続いてモクレン属が確認された。●出土鉄製品の分析結果からは、本遺跡周辺での鉄製品生産の可能性と、原料等の入手について複数の可能性が示された。●第511号建物跡外周溝出土土師器坏内部から出土した黄褐色物質は、分析の結果漆液の固化したものと判明した。●並列溝状遺構堆積土の土壌分析からは、当遺構において稲を栽培している可能性が提示されたが、本遺構の時期・機能等も含め再検討する必要がある。●遺跡内土壌のテフラ分析では、遺構内に堆積した火山灰の同定と、第506号焼土遺構の土壌分析を行った。火山灰に関しては、調査段階ではほぼすべて白頭山-苫小牧火山灰の純粋な堆積であると予想していたが、分析の結果白頭山-苫小牧火山灰と十和田-八戸火山灰が確認された。したがって、遺構内の多くの火山灰が二次的な堆積である可能性が高いことが想定される。また、第513号建物跡外周溝における火山灰の堆積状況では、白頭山-苫小牧火山灰が上下2層にわかれる可能性が提示された。焼土遺構の土壌分析では、同一層位(第Ⅲ層)の赤化していない土壌との比較を行った。その結果予想通り第Ⅲ層が赤化したものであることが判明したが、したがってこの種の焼土遺構は、沢状の地形に堆積した黒色土が赤化したものである、という事実が今回得られたが、その成因についてはまだ検討の余地が残る。

(調査担当者一同)

【引用・参考文献】

発行者・著者名	刊行年度	遺跡名・論文名	シリーズ番号・書籍名
青森県教育委員会	1978	源常平遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第39集
青森県教育委員会	1978	羽黒平遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第44集
青森県教育委員会	1978	杉の沢遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第45集
青森県教育委員会	1978	松元遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第46集
青森県教育委員会	1987	山本遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第105集
青森県教育委員会	1994	山元(3)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第159集
青森県教育委員会	1995	松山・羽黒平(1)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第170集
青森県教育委員会	1995	山元(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第171集
青森県教育委員会	1995	野尻(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第172集
青森県教育委員会	1996	野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
青森県教育委員会	1996	野尻(4)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
青森県教育委員会	1996	羽黒平(1)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第194集
青森県教育委員会	1996	実吉遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第207集
青森県教育委員会	1997	桜ヶ峰(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第208集
青森県教育委員会	1997	隈無(4)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第209集
青森県教育委員会	1997	隠川(3)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第210集
青森県教育委員会	1998	野尻(1)遺跡Ⅰ	青森県埋蔵文化財調査報告書第234集
青森県教育委員会	1998	隈無(1)・(2)・(6)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第237集
青森県教育委員会	1998	隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡Ⅰ	青森県埋蔵文化財調査報告書第244集
青森県教育委員会	1999	野尻(1)遺跡Ⅱ	青森県埋蔵文化財調査報告書第259集
青森県教育委員会	1999	隠川(11)遺跡Ⅰ・隠川(12)遺跡Ⅱ	青森県埋蔵文化財調査報告書第260集
青森県教育委員会	2000	野尻(1)遺跡Ⅲ	青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
青森県教育委員会	2000	隠川(11)遺跡Ⅱ	青森県埋蔵文化財調査報告書第295集
青森県教育委員会	2001	岩ノ沢平遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第295集
青森県教育委員会	2001	桜ヶ峰(1)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第299集
青森県教育委員会	2001	岩渡小谷(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第300集
青森県教育委員会	2002	隈無(8)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第313集
青森県教育委員会	2002	安田(2)遺跡Ⅲ	青森県埋蔵文化財調査報告書第321集
青森県教育委員会	2002	朝日山(2)遺跡Ⅳ	青森県埋蔵文化財調査報告書第324集
青森県教育委員会	2002	朝日山(2)遺跡Ⅴ	青森県埋蔵文化財調査報告書第325集
(財)北海道埋蔵文化財センター	1988	新道4遺跡	北海道埋蔵文化財センター発掘調査報告書第52集
青森市教育委員会	1998	小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ	青森市埋蔵文化財調査報告書第40集
五所川原市教育委員会	2001	隠川(2)遺跡外	五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
五所川原市教育委員会	2002	MZ6号窯跡	五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第23集
浪岡町教育委員会	2001	「野尻(4)遺跡発掘調査概報」	『平成12年度 浪岡町文化財紀要』Ⅰ
浪岡町教育委員会	2002	「野尻(4)遺跡発掘調査概報」	『平成13年度 浪岡町文化財紀要』Ⅱ
今井富士雄・磯崎正彦	1968	「十腰内遺跡」	『岩木山』岩木山刊行会
葛西 勳	1979	「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」	『北奥古代文化』11 北奥古代文化研究会
金子昭彦	1995	「十腰内Ⅰ式と大湯式における型式としての諸問題ー細分、組成、併行型式の問題ー」	岩手考古学7
鈴木克彦	1975	「第5節 縄文時代後期前葉の土器」	『中の平遺跡発掘調査報告書』青森県教育委員会
本間 宏	1987	「縄文時代後期初頭土器群の研究(1)」	『よねしろ考古』第3号 よねしろ考古研究会
本間 宏	1988	「縄文時代後期初頭土器群の研究(2)」	『よねしろ考古』第4号 よねしろ考古研究会
成田滋彦	1989	『入江・十腰内式土器様式』	『縄文土器大観4』小学館
岩田昭広	2001	「須恵器のロクロ技術を考える」	『研究紀要』第16号(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
木村 高	2000	「津軽地方における平安時代の住居跡」	『考古学ジャーナル』No.462, 2000年8月号

観察表凡例

○略号

整No-整理番号 ○○建-○○建物跡 TRE-トレンチ 須No-須恵器個体識別番号

○単位

長さ-土師器・須恵器・縄文土器・礫石器はcm。土製品・ミニチュア・剥片類はmm。重量-g

○属性項目

1、器種

皿・杯・鉢・短頸壺・長頸壺・長胴甕ミニ（長甕ミニ）・長胴甕小型（長甕小）・長胴甕大型（長甕大）・甕・埴・蓋。

2、器形

杯・皿-1：器壁が内湾し立ち上がるもの。-2：器壁がまっすぐ立ち上がるもの。

長胴甕-1：底部から口縁部までほぼまっすぐ立ち上がるもの。

2：底部から口縁部までやや内湾しながら立ち上がるもの。

3：口縁部直径より小さい胴部最大径を持ち、口縁部が外反または屈曲するもの。

4：口縁部直径とほぼ同じ胴部最大径を持ち、口縁部が外反または屈曲するもの。

5：口縁部直径より大きい胴部最大径を持ち、口縁部が外反または屈曲するもの。

6：口縁部が内湾気味なもの。

3、口端部の形状

皿・杯-a：口縁端部が外側につまみ出されているもの。

-b：口縁端部が弱く外反するもの。

-c：口縁端部がまっすぐなもの。

鉢 -a：口縁端部が平坦で、若干外に傾くもの。

-b：口縁端部内側が若干上方につまみ出されているもの。

長頸壺-a：口縁端部が上下につまみ出され、下方のつまみ出しが弱いもの。

-b：口縁端部が上下につまみ出され、上方は平坦に、下方は鋭角に強めにつまみ出されているもの。

-c：口縁端部が上下につまみ出され、上方は平坦で、下方のつまみ出しが弱いもの。

-d：口縁端部が上方のみにつまみ出され、端部が平坦になるもの。

-e：口縁端部が上下につまみ出され、上方端部内側がさらにつまみ出されているもの。

長胴甕-a：口縁端部が尖るもしくは丸みを帯びるもの。

-b：口縁端部がやや外向きに角張るもの。

-c：口縁端部が上方または上下につまみ出されるもの。

-d：口縁端部下方が鏝状につまみ出されるもの。

甕 -a：口縁端部外面に沈線状の面取りが施され、下向きに屈曲しているもの。

-b：口縁端部が上方につまみ出され、端部が平坦なもの。

-c：口縁端部が上下につまみ出され、上方は平坦、下方はやや弱く鋭角に仕上げられているもの。

-d：口縁端部が上下につまみ出されているもの。

-e：口縁端部が上下につまみ出され、特に上方端部が鋭角に仕上げられているもの。

4、種別

土師器・須恵器・赤焼き須恵器（胎土が須恵器に近似し、還元焰焼成に至っていないもの）

5、黒化処理の有無

黒化処理の有るものは土師器杯の内面のみ。その際内面の整形はヘラミガキである。観察表では整形の部分に敢えてミガキの項目を入れていない。

6、一次成形技術（一成）

1、粘土紐輪積み成形。2粘土塊引き上げ成形。（1と2の融合は分類していない。）

7、二次成形技術（二成）

1、非ロクロ成形。2、ロクロ成形。3、タタキ成形。

8、内外面整形技術

口縁部外面（外口）：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、指頭押圧

口縁部内面（内口）：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、指頭押圧

外面体部上半（外胴上）：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、タタキ。f、指頭押圧

外面体部下半（外胴下）：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、タタキ。f、指頭押圧

外面底部付近（外底近）：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、タタキ。f、指頭押圧

内面体部上半（内胴上）：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、タタキ。f、指頭押圧

内面体部下半（内胴下）：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ロクロナデ。d、ヘラケズリ。e、タタキ。f、指頭押圧

（内面のタタキはあて具痕のことを示す）

外底面（外底）：a、ナデ。b、ヘラナデ。c、ヘラケズリ。d、タタキ。e、無整形。

9、底部切り離し（底切）

：a、回転糸切り。b、砂底。c、圧痕。

10、使用痕

A、炭化物の付着位置：a1、外面上半。a2、外面下半。b1、内面上半。b2、内面下半。

B、粘土の付着位置：a1、外面上半。a2、外面下半。

C、被熱範囲：a1、外面上半。a2、外面下半

11、胎土の混入物

B：黒色粒子（マンガン）C：透明粒子（石英）H：浮石 N：海面骨針 R：赤色粒子 S：砂粒

W：白色粒子（長石） 繊維

12、備考…二次利用・火禱痕・同一個体等

Table with columns: 図 No, 層No, 出土位置, 層位, 須No, 口径, 高さ, 底径, 群種, 種類, 黒化, 器形, 口端, 一底, 二底, 外口, 内口, 外胴上, 外胴下, 外底面, 内胴上, 内胴下, 外底, 底切, 使用痕, 接合, 陶土, 備考. Rows list archaeological findings such as 505土罎, 506土罎, and 507土罎 with their respective measurements and classification codes.

図	No	番No	出土地点	時期	器種	口縁端部	外面口縁	外面胴部	外底面	内面口縁	内面胴部	胎土	沈線幅	接合	備考
100	1	1612	CF	29	縄文前期	尖底深鉢	面取り	LR・RL横回			ナデ	織維・C・B・R			長七谷地三群
100	2		BC	45	縄文前期	深鉢		RLR横回			ミガキ	織維・C・R		外傾	円筒下層 a
100	3	1520			縄文前期	深鉢		RL斜回			ミガキ	織維・C・H・R		外傾	円筒下層
100	4	1512	509建	腰穴部	縄文中期	深鉢		RL横回			ハラナデ	C・B		外傾	大木10並行?
100	5	1136	BA	43	縄文晩期	深鉢		RL斜回			ハラナデ	C・B・R		内傾	
100	6	1613	513建	外周溝	縄文晩期	深鉢		LR横回		ミガキ		C・B・R		内傾	
100	7	1964	BC	57	縄文後期	深鉢		LR回・入組状沈線		ミガキ		C・B・R・N		外傾	類大津7群
100	8		BC	32	縄文後期	壺?		無文	沈線	ミガキ	ミガキ	C・R・W・H	2.0	外傾	
100	9		BE	24	縄文後期	深鉢	面取り	無文	入組状沈線	ミガキ	ミガキ	C・B・R・S	1.5	外傾	
100	10		TRE	3	縄文後期	壺?			入組状沈線	ミガキ	ミガキ	C・B・R・W	2.0	外傾	
100	11	1905	S10建	外周溝	縄文後期	壺?			入組状沈線		ミガキ	C・B・R	1.5	外傾	
100	12	1956	BD	15	縄文後期	深鉢		無文		ミガキ		C・B・R		外傾	
100	13		BD	13	縄文後期	深鉢		無文	沈線	ミガキ		C・B・R・S	2.5	外傾	
100	14	1959	BE	12	縄文後期	深鉢		無文	LR回・沈線	ミガキ	ミガキ	C・B・R	2.5	外傾	
100	15	1958	BB	16	縄文後期	深鉢		無文	LR横回・沈線	ミガキ		C・B・R・S	3.5	外傾	
100	16	1518			縄文後期	深鉢		無文	LR横回・沈線	ミガキ		C・B・R・W	2.0	外傾	
100	17	1494	BC	14	縄文後期	深鉢	刻み	無文	クランク状沈線	ミガキ		C・B・R	3.0	外傾	
100	18	1965	BB	12	縄文後期	浅鉢		無文	無文	ミガキ	ミガキ	C・B・N		外傾	
100	19	1651	BC	13	縄文後期	深鉢		無文	無文	ミガキ	ミガキ	C・B・R・W		外傾	
101	20	1047	BD	12	縄文後期	深鉢	波長部に刻み	無文	沈線	ミガキ		C・B・R	2.0	外傾	
101	21	1522	BC	14	縄文後期	深鉢		無文	LR回・沈線	ミガキ		C・B・R・S	2.5	外傾	
101	22		BC	15	縄文後期	深鉢			クランク状沈線・櫛状ナデ		ミガキ	C・W・R	3.0	外傾	
101	23		BB	16	縄文後期	深鉢			入組状沈線?		ミガキ	C・B・R	3.0	外傾	
101	24		BC	14	縄文後期	深鉢			クランク状沈線		ミガキ	C・B・R	3.0	外傾	
101	25		BF	14	縄文後期	深鉢			LR回・入組状沈線?		ミガキ	C・B・R・W	2.0	外傾	
101	26		BD	11	縄文後期	深鉢			LR回・入組状沈線?・円形刺突		ミガキ	C・B・R・W	2.5	外傾	
101	27		BC	14	縄文後期	深鉢			細粘土紐貼付		ミガキ	C・B・R・S		外傾	
102	28		BC	14	縄文後期	深鉢		無文	LR回・平行・乙字沈線	ミガキ	ミガキ	C・B・R	4.0	外傾	類大津7群
102	29		BD	15	縄文後期	深鉢		無文	LR回・平行・乙字沈線	ミガキ	ミガキ	C・B・R	3.5	外傾	類大津7群
102	30		BD	15	縄文後期	深鉢		無文	乙字文	ミガキ	ミガキ	C・B・R	3.5	外傾	類大津7群
102	31		BC	14	縄文後期	深鉢	粘土紐貼付	無文	沈線・乙字文	粘土紐貼付・ミガキ	ミガキ	C・B・R・S	3.0	外傾	類大津7群
102	32		BD	15	縄文後期	深鉢		粘土紐貼付	沈線	ミガキ	ミガキ	C・B・R	2.5	外傾	類大津7群
102	33		BC	13	縄文後期	深鉢	粘土紐貼付	ミガキ		ミガキ		C・S・R		外傾	類大津7群
102	34	1903	BC	14	縄文後期	深鉢		LR横回・弧状沈線		ミガキ		C・B・S		外傾	類大津7群
102	35	1527	BD	14	縄文後期	深鉢		無文	沈線・乙字文・入組状沈線	ミガキ	ミガキ	C・R・W	3.0	外傾	類大津7群
102	36		BC	14	縄文後期	深鉢			LR回・乙字文・沈線	ミガキ	ミガキ	C・R・B		外傾	類大津7群
102	37		S19建	外周溝	縄文後期	壺?		沈線	LR回・クランク状沈線		ミガキ	弧状沈線・ミガキ	3.0	外傾	類大津7群
102	38	1961	518	溝	縄文後期	深鉢		無文	沈線	ミガキ		C・B・R・W	3.0	外傾	類大津7群
103	39	1709	CE	15	縄文後期	深鉢		ミガキ	LR回・乙字文・沈線	ミガキ	ミガキ	C・N・R	2.0	外傾	類大津7群
103	40		503	溝	縄文後期	土製円盤			沈線(櫛状)		ミガキ			外傾	
103	41		BD	13	縄文後期	キノコ形土製品								外傾	
103	42	1888	518	溝	縄文後期	土偶			円形刺突					外傾	

土坑

整番	図	番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
41	78	531±	531±	—	覆土	砥石	12.8	6.5	3.8	409.5	凝灰岩 上端部に敲打痕
51	78	533±	533±	—	覆土	擦り石	11.5	10.5	3.7	391.4	凝灰岩 擦り痕の方が新しい

遺構外

整番	図	番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
59	106	113	B W	29	II層	砥石	(5.9)	(7.1)	(2.7)	(128.9)	流紋岩 稜線部も使用
34	106	114	B C	15	II a	砥石	11.8	5.8	3.4	379.6	流紋岩 敲打後も使用、段状で幅広の擦痕
47	106	115	B D	43	II	擦り石	10.9	3.8	3.2	223.8	流紋岩 上下端部・側面に敲打。擦りとは新旧不明
58	106	116	B X	30	II層	砥石	(7.3)	(5.8)	(4.4)	(270.8)	流紋岩 稜線部も使用

図	番号	出土位置	層位	種類	木取り	加工痕	部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	補正 14c年代	備考
83	23	513号溝	底面	木製品?	板目?	斜削り刃物でカット	先端部	270.0	14.4	9.6	イチイ	27,880±300vbp	
83	23	513号溝	底面	板材	板目	削り	表面全域	134.4	30.0	6.0	アスナロ	1,220±40vbp	
83	24	513号溝	底面	板材	板目	削り	表面一部	92.4	19.2	3.6	クリ	1,280±40vbp	
83	25	513号溝	底面	板材	板目	削り	表面全域	90.0	13.2	2.4	クリ	—	
83	26	513号溝	底面	木製品?	板目?	不明		68.6	4.8	2.4	イチイ	—	
83	27	513号溝	底面	板材	板目	不明		30.0	19.2	4.8	クリ	—	一部炭化

図	番号	分析No	種類	層位	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
12	15	5	刀子		515号溝 土坑部分	17.0	1.4	0.6	
17	7	1	環状鉄製品		504建物跡 竪穴部	1.2	3.6	3.0	
21	12	16	鉄鏃	床面	505建物跡 竪穴部	10.0	0.8	0.8	
21	13	2	刀子		505建物跡 竪穴部h1+4	24.2	2.8	0.6	
21	13	11	刀子		505建物跡 竪穴部h1+4	9.4	2.4	0.5	
24	28	3	刀子	1	506建物跡 土坑1	10.6	0.6	0.7	
24	29	10	鉄鏃		506建物跡 竪穴部	14.8	0.6	0.6	
24	30	6	刀子		506建物跡 竪穴部	8.2	1.2	0.4	
24	31	14	刀子		506建物跡 竪穴部	5.4	2.0	0.5	
25	68	7	刀子	1	517号溝	6.2	1.4	0.4	
30	17	12	刀子		508建物跡 外周溝	8.2	2.0	0.5	
65	43	4	鉄鏃	1~2	519建物跡 外周溝	14.6	0.5	0.4	
70	10	8	刀子	床	521建物跡 竪穴部	13.0	2.2	0.2	
70	12	17	環状鉄製品	3	521建物跡 竪穴部	5.0	3.1	2.6	
72	43	13	刀子		521建物跡 外周溝	21.0	2.4	0.5	
78	537-3	15	釘?	1	537土坑	4.6	1.2	0.6	
-	-	18	刀子		506建物跡 竪穴部	8.4	4.0	0.7	実測図無し
-	-	19	刀子?	1	518建物跡 竪穴部	6.3	2.2	0.7	実測図無し
-	-	20	流注溝		504建物跡 竪穴部	-	-	-	実測図無し
-	-	21	掘製溝	粘土下	515建物跡 外周溝	-	-	-	実測図無し
-	-	22	鉄溝	粘土下	515建物跡 外周溝	-	-	-	実測図無し
-	-	23	掘製溝	火山灰下	506建物跡 外周溝	-	-	-	実測図無し
-	-	24	掘製溝	粘土下	515建物跡 外周溝	-	-	-	実測図無し
-	-	25	流注溝		512土坑	-	-	-	実測図無し

遺構外 (縄文)

図	番号	整理No	出土地点	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考
12	11	16	502建物跡 竪穴部	床面	石鏃	3.0	2.0	0.2	0.7	頁岩	S-5
15	25	28	503建物跡 外周溝	—	石鏃	6.2	2.8	0.7	3.5	頁岩	
103	44	11	518号溝	覆土	石鏃	4.9	1.4	0.6	2.7	頁岩	S-1
103	43	1	遺構外 BE-17	II b	石鏃	36.0	11.5	0.5	1.8	頁岩	
103	45	2	遺構外 BE-14	III層上面	磨片	5.5	4.4	2.2	64.1	緑色凝灰岩	S-X
103	45	3	遺構外 BC-11	III層上面	二次加工剥片	4.3	4.8	1.4	17	頁岩	P-424
103	56	13	遺構外 BC-28	I b	二次加工剥片	3.6	3.3	0.8	8.8	頁岩	
103	54	17	遺構外 CD-26	II	石鏃	4.6	2.8	0.8	6.9	頁岩	S-X
103	57	19	遺構外 BA-45	—	磨片	3.1	2.8	6.5	4	頁岩	
103	53	22	遺構外 CC-23	III層上面	石鏃	6.5	2.0	0.5	4.8	頁岩	S-X
103	59	24	遺構外 CH-14	III	使用痕有る剥片	7.7	4.3	1.5	22.1	頁岩	S-X
103	58	25	遺構外 TRE-4	—	剥片	6.0	4.5	1.3	29.4	頁岩	
103	55	27	遺構外 BB-30	I b	尖頭状石器	5.1	2.8	9.5	9.4	頁岩	

整番	図	番号	出土地点	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質	備考	
31	103	47	B C	13	III	擦り石	(8.8)	6.9	3.6	(288.1)	花崗岩	
54	103	48	B C	14	III	擦り石	14.0	7.3	3.7	442.2	流紋岩	
43	103	49	B D	15	III	凹み石	12.2	8.8	5.1	621.8	凝灰岩	2箇所の凹み
52	103	50	515鍵	—	II b	—	20.6	5.8	1.8	308.0	凝灰岩	
40	103	51	B D	16	II a	砥石	(11.2)	6.5	2.8	(127.9)	凝灰岩	幅約2mm深さ1~2mmの沈線状痕
50	103	52	B C	13	III	凹み石	8.0	7.1	5.7	365.4	流紋岩	



調査区 (A・B区) 全景 上空から



B区全景 E→



C区全景 上空から



B区IV層 縄文時代柱穴群完掘 N→



第533号ピット土層 S→



第534号ピット土層 S→



第540号ピット土層 N→



第527号土坑完掘 S→



第527号土坑土層 S→



第528号土坑完掘・遺物 S→



BE-24 縄文時代後期土器出土状態 NE→



第501号溝状土坑完堀 E→



B区東端Ⅲ層 縄文時代後期遺物出土状況(全体) W→



第511号建物下部Ⅲ層 縄文時代後期遺物出土状況 W→



第511号建物掘立部下層Ⅲ層 縄文時代後期遺物出土状況 S→



CF-29IV層 縄文時代前期初頭遺物出土状況 E→



第501号建物竪穴部土層Aライン S→



第501号建物竪穴部ピット1土層 S→



第501号建物完掘 SE→



第501号建物竪穴部ピット3土層 S→



第501号建物外周溝土層Lライン N→



第501号建物外周溝土層Oライン E→



第501号建物外周溝土層Qライン W→



第501A号建物完掘 SE→



第501A号建物跡カマド完掘 NE→



第501A号建物ピット4土層 S→



第501A号建物外周溝土層Hライン N→



第501A号建物外周溝土層Gライン S→



第501A号建物外周溝完掘 (西辺部) N→



第501A号建物外周溝内埋設土器確認 E→



第501A号建物外周溝内埋設土器土層Rライン E→



第502号建物土層Bライン S→



第502号建物完掘 E→



第502号建物完掘 W→



第502号建物西側掘形土層 (N-S) E→



第502号建物焼土1土層 S→



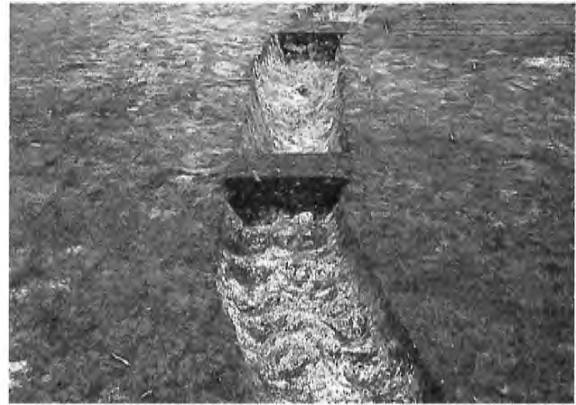
第502号建物ピット1土層 S→



第502号建物ピット4土層 S→



第502号建物掘立部ピット6土層 S→



第502号建物外周溝土層Iライン S→



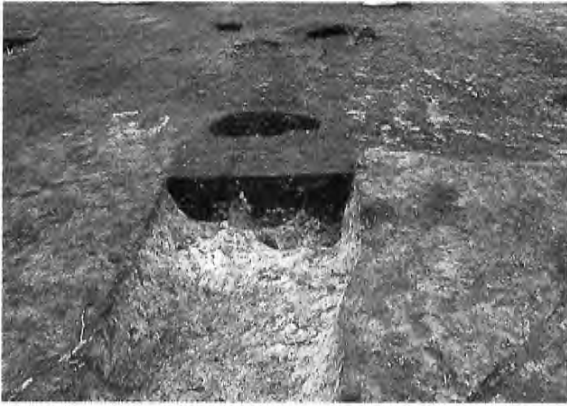
第515号土坑土層 S→



第515号土坑遺物出土状況 E→



第503号建物完掘 SE→



第503号建物外周溝土層Cライン E→



第503号建物外周溝土層Dライン E→



第503号建物外周溝土層Gライン S→



第504号建物完掘 N→



第504号建物土層Aライン S→



第504号建物掘形土層Bライン E→



第504号建物カマド完掘 N→



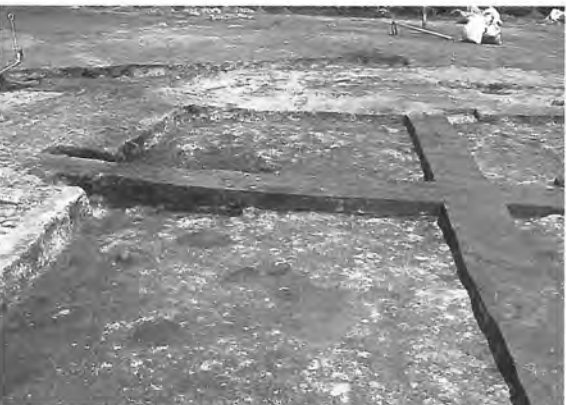
第504A号建物カマド確認状況 S→



第504号建物外周溝土層Fライン E→



第504号建物外周溝土層Gライン S→



第505号建物土層Aライン S→



第505・505A号建物完掘 E→



第505号建物完掘 NE→



第505号建物カマド完掘 W→



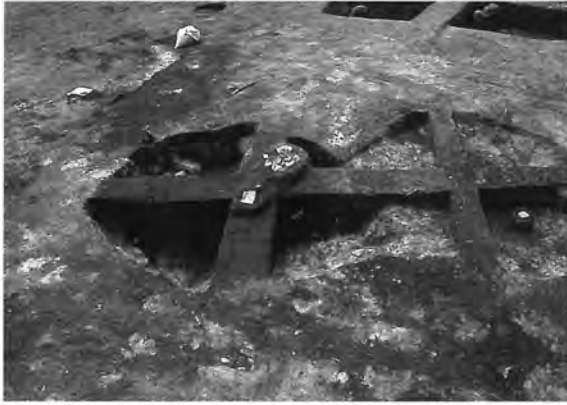
第505号建物外周溝土層Rライン N→



第505号建物外周溝・第512号土坑 土層 W→



第503B号土坑完掘 N→



第503号土坑土層 N→



第503A号土坑土層 SE→



第504号土坑完掘 E→



第504号土坑土層 (N-S) E→



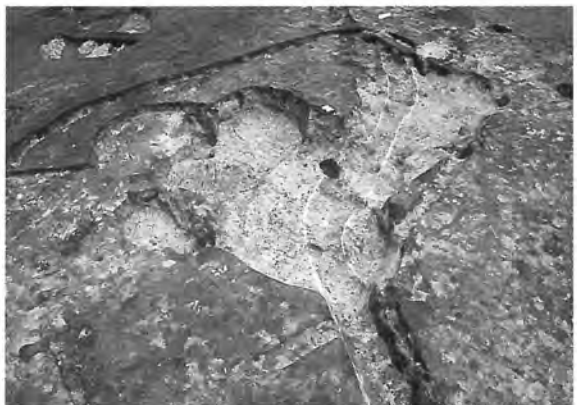
第509号土坑遺物出土狀況 E→



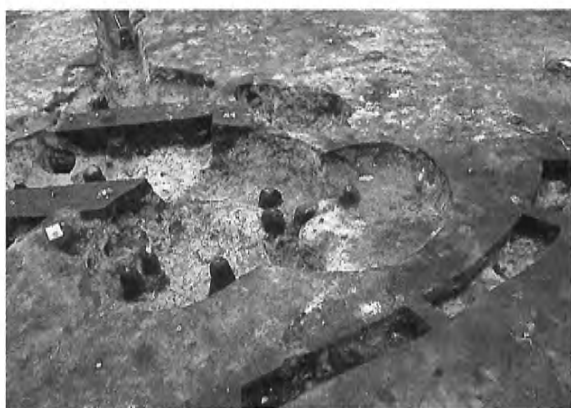
第509号土坑 双耳壺出土狀況 S→



第509号土坑土層 3 S→



第505号建物外周溝北側中央部完掘 N→



第512号土坑完掘 E→



第512号土坑土層 S→



第514号土坑完掘 N→



第514号土坑土層 SE→



第506号建物・507付近 N→



第506号建物土層Bライン W→



第506号建物土層Bライン W→



第506号建物新カマド完掘 SW→



第506号建物古カマド完掘 W→



第506号建物古カマド土層 S→



第506号建物ピット⑤完掘 S→



第506号建物完掘 W→



第506号建物外周溝北端完掘状況 SE→



第506号建物掘形完掘 NE→



第507号建物完掘 S→



第506号建物外周溝土層Qライン SW→



第507号建物掘形完掘 E→



第507号建物カマド完掘 W→



第506号建物外周溝土層Nライン S→



第506号建物外周溝土層Pライン S→



第507号建物外周溝土層Gライン W→



第506号建物外周溝土層(第523号土坑と切り合い)



第508号建物土層Aライン S→



第508号建物外周溝土層Bライン W→



第508号建物土層外周溝Cライン W→



第508号建物外周溝土層Dライン N→



第508号建物外周溝土層Eライン W→



第508号建物外周溝土層Fライン(西側) W→



第508号建物外周溝遺物出土状況 S→



第508・第509号建物完掘 SE→



第509号建物土層Aライン SW→



第509号建物土層Bライン SE→



第517号土坑完掘 S→



第517号土坑土層Bライン S→



第509号建物外周溝土層Hライン E→



第509号建物外周溝土層Kライン NE→



第509号建物外周溝西側完掘 S→



第509号建物外周溝土層Lライン E→



第509号建物外周溝土層Mライン W→



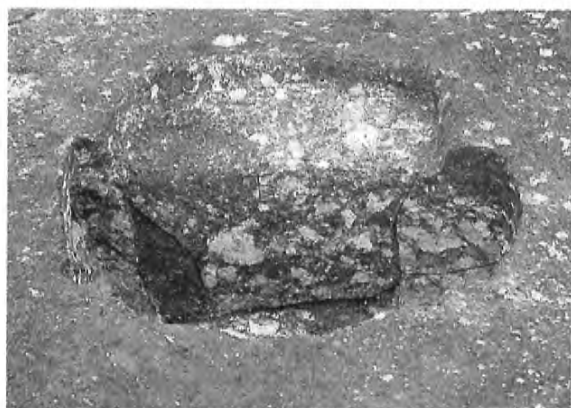
第510号建物完掘 N→



第510号建物カマド完掘 W→



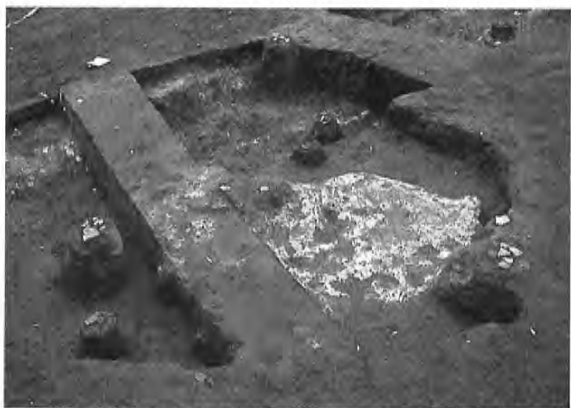
第510号建物完掘 W→



第510号建物土層Eライン S→



第510号建物土層Fライン S→



第510号建物外周溝火山灰検出状況 NE→



第510号建物外周溝土層Hライン付近 S→



第510号建物外周溝土層Iライン S→



第510号建物外周溝土層Jライン E→



第510号建物外周溝土層Kライン W→



第510号建物外周溝土層Kライン付近 W→



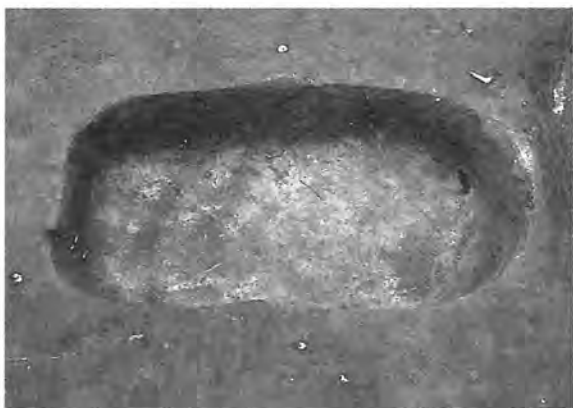
第510号建物外周溝土製品出土状況 E→



第510号建物外周溝土層Jライン付近 W→



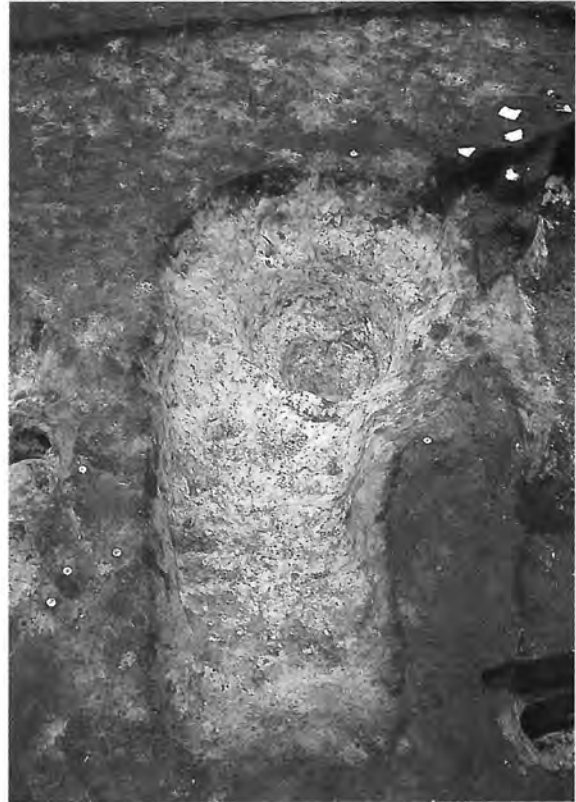
第505号土土層Qライン E→



第506号土坑完掘 E→



第506号土坑土層Pライン S→



第510号土坑完掘 E→



第510号土坑炭・灰検出状況 W→



第510号土坑土層Uライン S→



第510号土坑土層Sライン W→



第511号建物遺物出土状況 W→



第511号建物完掘 SE→



第511号建物カマド完掘（支脚あり） W→



第511号建物カマド土層Cライン S→



第511号建物ピット4完掘 NE→



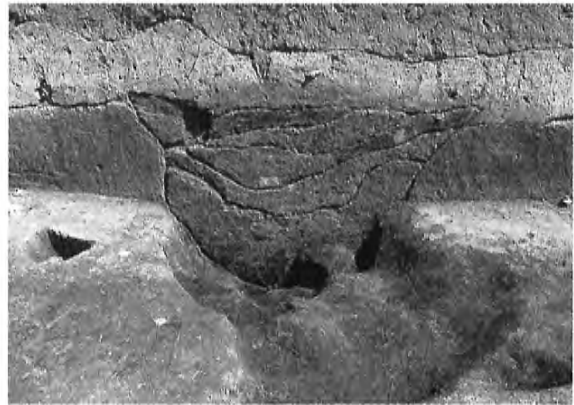
第511号建物ピット4土層Nライン NE→



第511号建物掘立部内焼土土層Sライン S→



第511号建物外周溝土層Fライン S→



第511号建物外周溝土層Iライン S→



第511号建物外周溝遺物出土状況（漆容器等） W→



第512号建物竪穴部完掘 E→



第512号建物竪穴部掘形完掘 E→



第512号建物Aライン土層 S→



第512号建物完掘 E→



第512号建物掘形土層 (E-W) S→



第512号建物カマド完掘 W→



第512号建物カマド遺物出土状況 W→



第512号建物カマド土層 S→



第512号建物掘立部ピット6土層 S→



第513号建物土層ライン E→



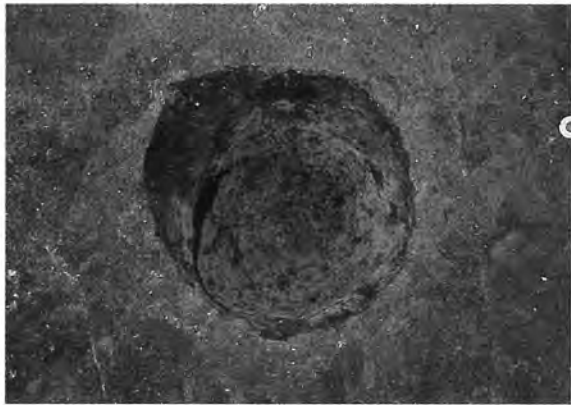
第513号建物完掘 SE→



第513号建物土層Lライン S→



第513号建物土層Oライン S→



第513号建物ピット20完掘 S→



第513号建物土層Qライン S→



第513号建物内ピット全景 E→



第513号建物外周溝B-Tm検出状況 N→



第513号建物外周溝土層bライン S→



第513号建物外周溝土層aライン E→



第513号建物外周溝土層Uライン N→



第513号建物外周溝土層Vライン S→



第513号建物外周溝南側完掘 SE→



第514号建物土層(完掘) E→



第527号溝跡完掘 E→



第515号建物完掘 S→



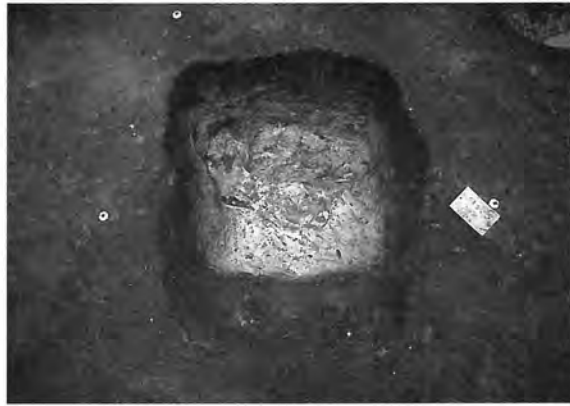
第515号建物竪穴部完掘 S→



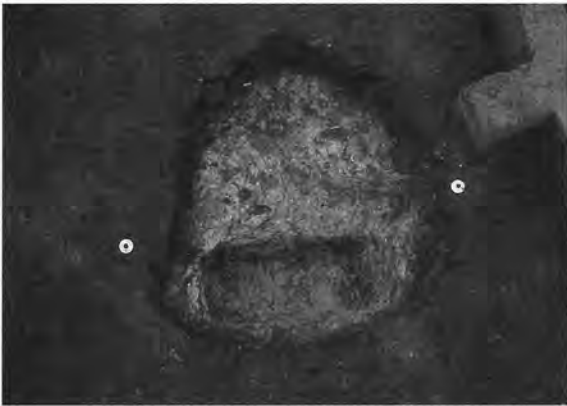
第515号建物土層Hライン S→



第515号建物ピット3礫出土状況 S→



第515号建物ピット3完掘 S→



第515号建物ピット4完掘 S→



第515号建物外周溝土層Dライン SW→



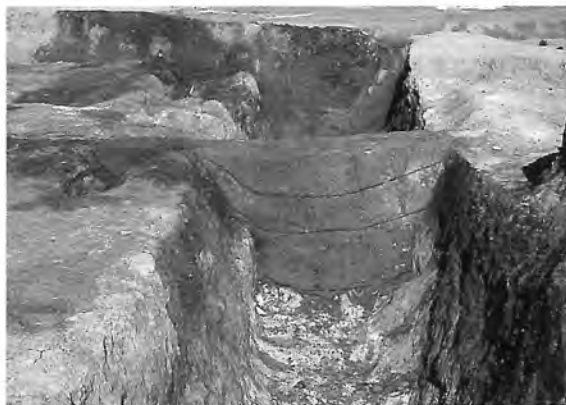
第515号建物外周溝土層Bライン S→



第515号建物外周溝土層Aライン S→



第515号建物外周溝遺物出土状況 S→



第515号建物外周溝土層Cライン W→



第515号建物外周溝土層Eライン E→



第516号建物外周溝南側完掘 N→



第516号建物外周溝土層Dライン S→



第516号溝跡土層(第506号建物床下) W→



第517号建物完掘 E→



第517号建物完掘（掘形） W→



第517号建物外周溝土層Gライン W→



第517号建物外周溝土層Iライン SW→



第517号建物外周溝土層Kライン W→



第517号建物外周溝遺物出土状況 E→



第518号建物竪穴部土層Bライン S→



第518号建物竪穴部土層Bライン S→



第518号建物竪穴部土層Aライン E→



第518号建物竪穴部土層Aライン E→



第518号建物竪穴部 炭化材検出状況 (板の下に角材)



第518号建物竪穴部カマド土層 W→



第518号建物外周溝土層Mライン W→



第518号建物外周溝土層Nライン W→



第518号建物外周溝土層Pライン W→



第518号建物外周溝土層Rライン W→



第518号建物外周溝土層Vライン W→



第518号建物外周溝土層Sライン NW→



第518号建物外周溝南側先端部遺物出土状況 E→



第518号建物外周溝南側遺物出土状況 E→



第518・519号建物外周溝遺物出土状況 S→



第519号建物掘立部ピット1土層 S→



第519号建物掘立部ピット3土層 S→



第518号建物完掘 E→



第519号建物完掘 E→



第519号建物掘立部ピット4土層 S→



第519号建物外周溝・538号土坑土層Wライン E→



第519号建物外周溝土層Kライン E→



第540号土坑完掘 E→



第520号建物西側完掘 SE→



第520号建物土層Aライン S→



第520号建物土層Aライン（掘形？） S→



第520号建物土層Bライン S→



第520号建物外周溝土層Cライン W→



第520号建物外周溝土層Dライン S→



第520号建物外周溝土層Eライン W→



第521号建物土層Aライン S→



第521号建物土層Bライン W→



第521号建物カマド土層 (N-S) W→



第521号建物ピット5完掘 W→



第521号建物ピット5土層 S→



第521号建物完掘 SE→



第521号建物外周溝土層Pライン W→



第521号建物外周溝土層Qライン E→



第521号建物外周溝土層Sライン E→



第521号建物外周溝土層Tライン SE→



第521号建物外周溝土層Vライン S→



第521号建物外周溝西側遺物・焼土検出状況 S→



第521号建物外周溝南側焼土検出状況 E→



第541号土坑完掘 S→



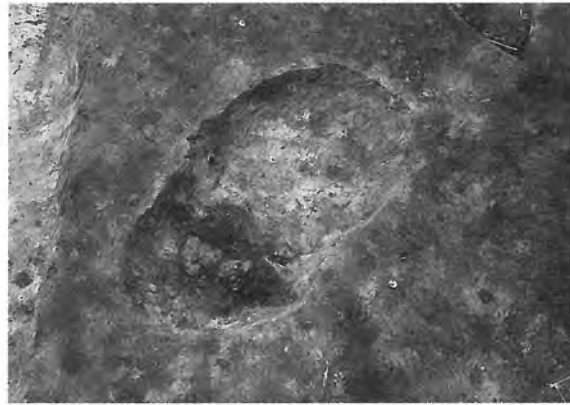
第541号土坑遺物・粘土検出状況 W→



第541号土坑土層 SW→



第541号土坑土層 SW→



第507号土坑完掘及び炭化物検出状況 E→



第508号土坑完掘 E→



第508号土坑土層Aライン W→



第511号土坑完掘 E→



第511号土坑土層Aライン NW→



第513号土坑遺物出土状況及び完掘 E→



第513号土坑土層Aライン E→



第520号土坑完掘及び焼土検出状況 S→



第520号土坑土層Aライン S→



第522号土坑完掘 S→



第522号土坑土層Aライン S→



第523号土坑完掘 N→



第523号土坑土層Aライン N→



第525号土坑完掘 S→



第525号土坑粘土検出状況 S→



第526号土坑完掘 SE→



第526号土坑土層Aライン E→



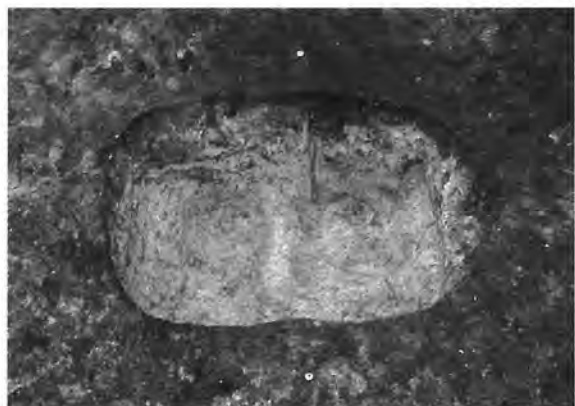
第529号土坑完掘 E→



第529号土坑土層Aライン E→



第529号土坑遺物出土状況 E→



第530号土坑完掘 SW→



第530号土坑土層Aライン S→



第531号土坑完掘 SW→



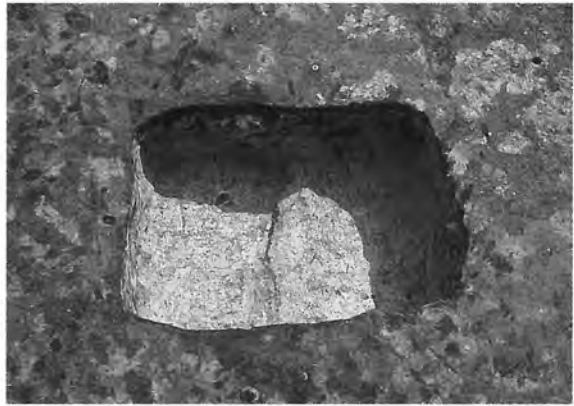
第531号土坑土層Aライン E→



第532号土坑完掘 S→



第532号土坑土層Aライン S→



第533号土坑完掘 W→



第533号土坑土層Aライン S→



第537号土坑完掘 W→



第537号土坑土層Aライン S→



第542号土坑完掘 S→



第542号土坑炭化物検出状況 NW→



第544号土坑完掘 S→



第544号土坑炭化物検出状況 S→



第548号土坑完掘 SE→



第548号土坑土層Aライン S→



第549号土坑完掘 S→



第549号土坑土層Aライン S→



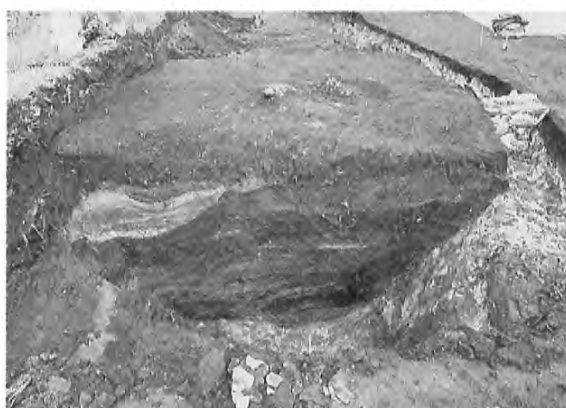
第513号溝跡土層Aライン W→



第513号溝跡完掘 W→



第513号溝跡土層Aライン底面付近 W→



第513号溝跡土層Bライン W→



第513号溝跡木製品出土状況 S→



第513号溝跡木製品出土状況 S→



第515号溝跡完掘状況 S→



第515号溝跡土層 S→



第515号溝跡（土坑部分）遺物出土状況 SE→



第515号溝跡土層（土坑部分） E→



第516号溝跡土層 S→



第525号溝跡完掘 NE→



第526号溝跡完掘 SE→



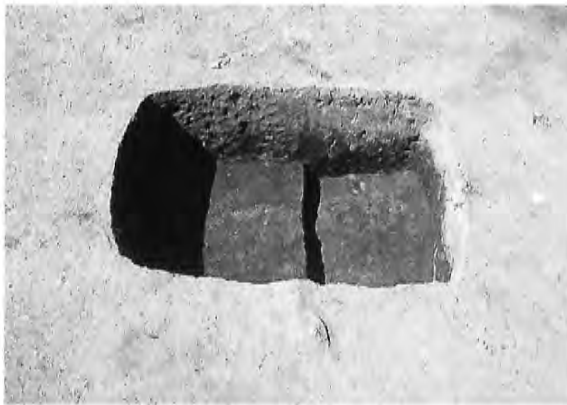
第526号溝跡土層Aライン S→



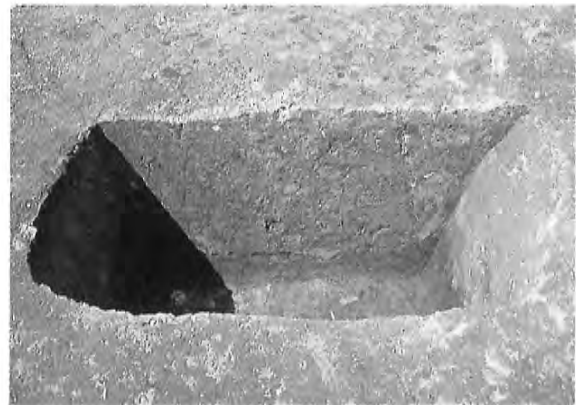
第526号溝跡土層Bライン SE→



第526号溝跡焼土・粘土検出状況 E→



第501号土坑完掘 N→



第501号土坑土層Aライン E→



第502号土坑完掘 S→



第502号土坑土層Aライン S→



第519号土坑完掘 S→



第519号土坑土層Aライン S→



第524号土坑完掘及び土層Aライン S→



第536号土坑完掘 S→



第536号土坑土層Aライン S→



第539号土坑完掘 S→



第539号土坑土層Aライン W→



C区BY-20・21グリッド B-Tm検出状況 W→



第543号土坑完掘 S→



第545号土坑土層Aライン及び炭化物検出状況 S→



第546号土坑完掘 E→



第546号土坑土層Aライン及び炭化物検出状況 S→



第547号土坑土層Aライン及び炭化物検出状況 S→



第501号溝跡完掘 N→



第501号溝跡土層Aライン S→



第502号溝跡土層Aライン S→



第506号溝跡完掘 S→



第511・518号溝跡完掘 S→



第511・518号溝跡土層Aライン S→



第514号溝跡土層・完掘 S→



第519号溝跡完掘 W→



第519号溝跡土層1 E→



第520号溝跡土層Bライン S→



第522号溝跡土層Gライン E→



第520号溝跡完掘 N→



第521号溝跡完掘 S→



第522号溝跡完掘 W→



第523号溝跡完掘 S→



第501号焼土遺構検出状況 NW→



第501号焼土遺構土層Aライン SW→



第502号焼土遺構検出状況 S→



第502号焼土遺構土層Aライン W→



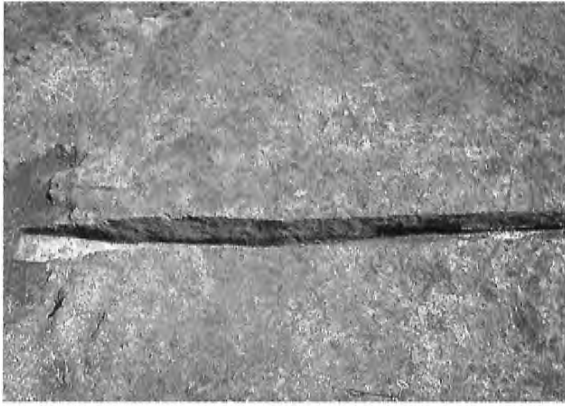
第503号焼土遺構土層Aライン W→



第504号焼土遺構土層Aライン N→



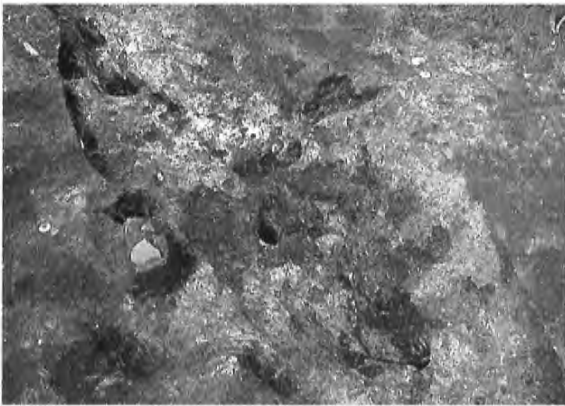
第506号焼土遺構検出状況 N→



第506号焼土遺構土層Aライン W→



第507号焼土遺構土層Aライン S→



第508号焼土遺構検出状況 E→



第509号焼土遺構検出状況 E→



第509号焼土遺構土層Aライン W→



第510号焼土遺構検出状況 N→



第511号焼土遺構土層Aライン W→



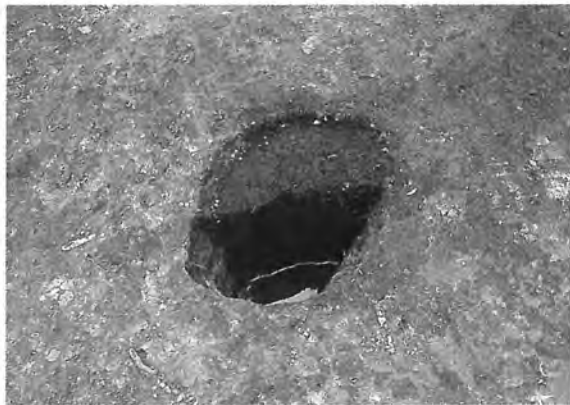
第512号焼土遺構土層Aライン E→



第501～505号ピット完掘 W→



第501号ピット完掘 SE→



第501号ピット土層Aライン S→



第503号ピット土層Cライン S→



第503号ピット遺物出土状況 W→



第522～525、528～531号ピット完掘 S→



第555号ピット群完掘 SE→



第501号並列溝状遺構検出状況 E→



第501号並列溝状遺構4~6土層 S→



第501号並列溝状遺構7~9土層 SE→



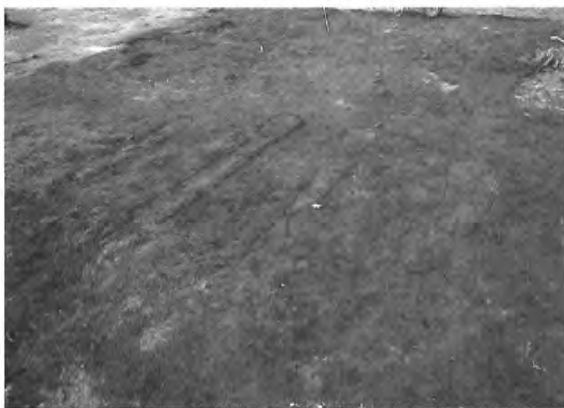
第501号並列溝状遺構10~14土層 SE→



第502号並列溝状遺構検出状況 E→



第502号並列溝状遺構土層 S→



第503号並列溝状遺構検出状況 S→



第503号並列溝状遺構土層 S→



第504号並列溝状遺構検出状況 S→



第504号並列溝状遺構土層 SE→



第505号並列溝状遺構検出状況 SE→



第505号並列溝状遺構完掘 SE→



第505号並列溝状遺構5～8土層 S→



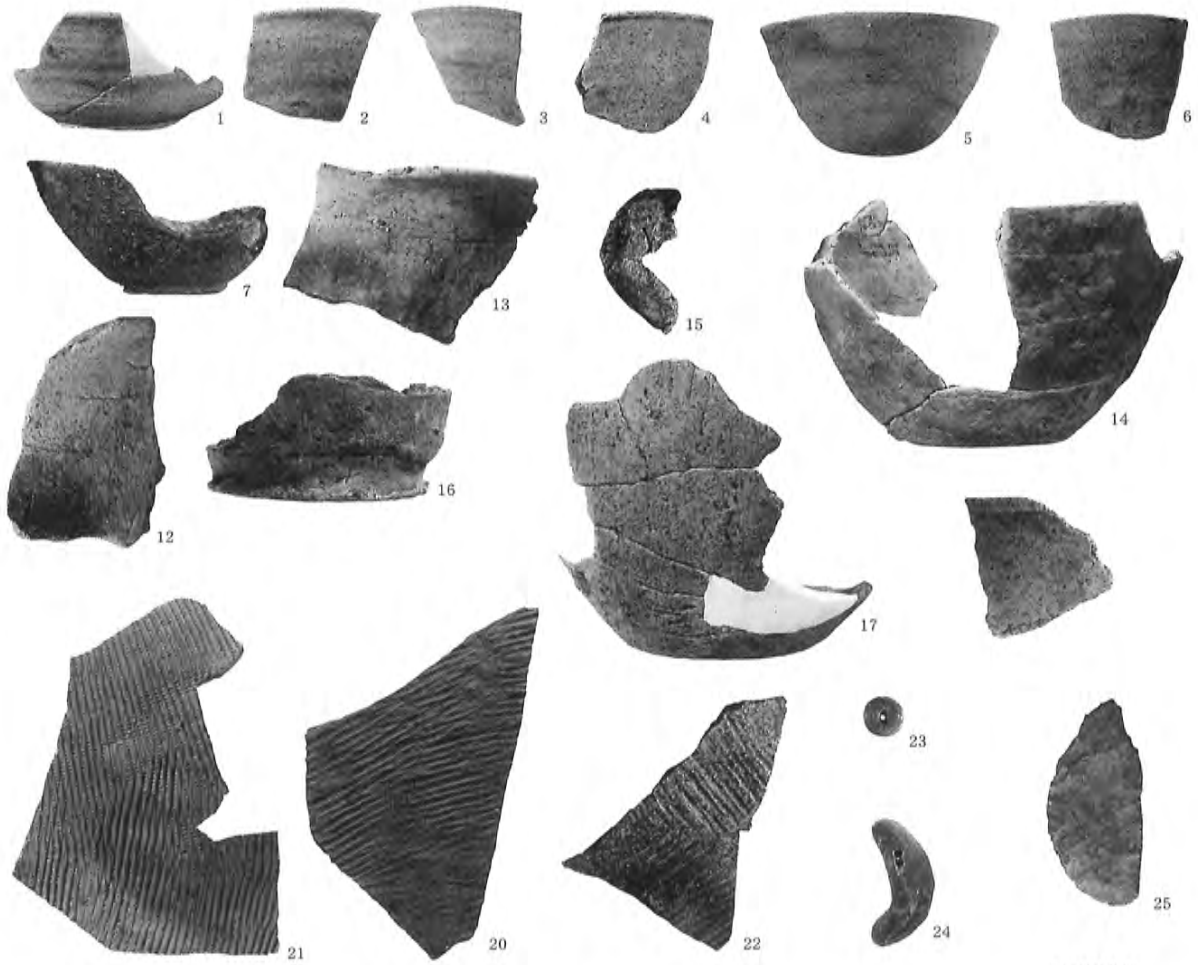
第506号並列溝状遺構完掘状況 W→



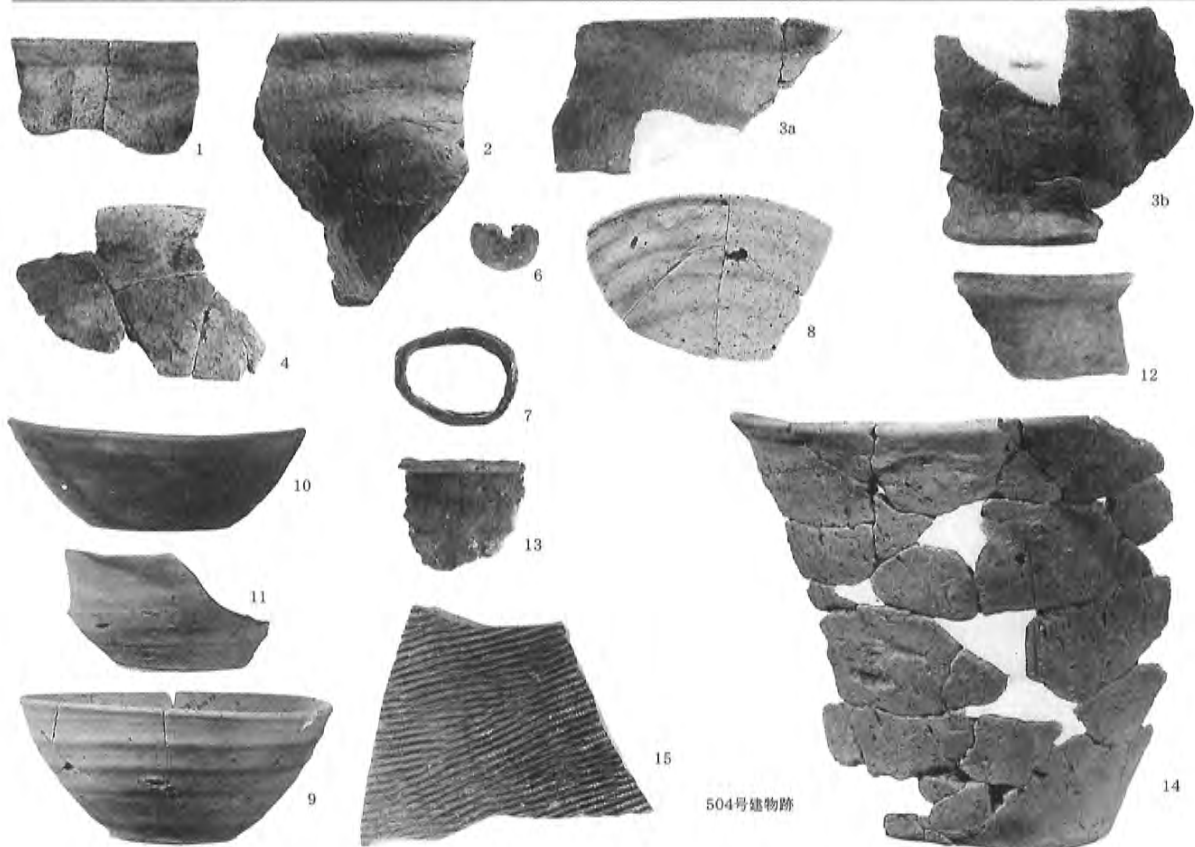
第506号並列溝状遺構口付近完掘 W→



第506号並列溝状遺構検出状況 S→

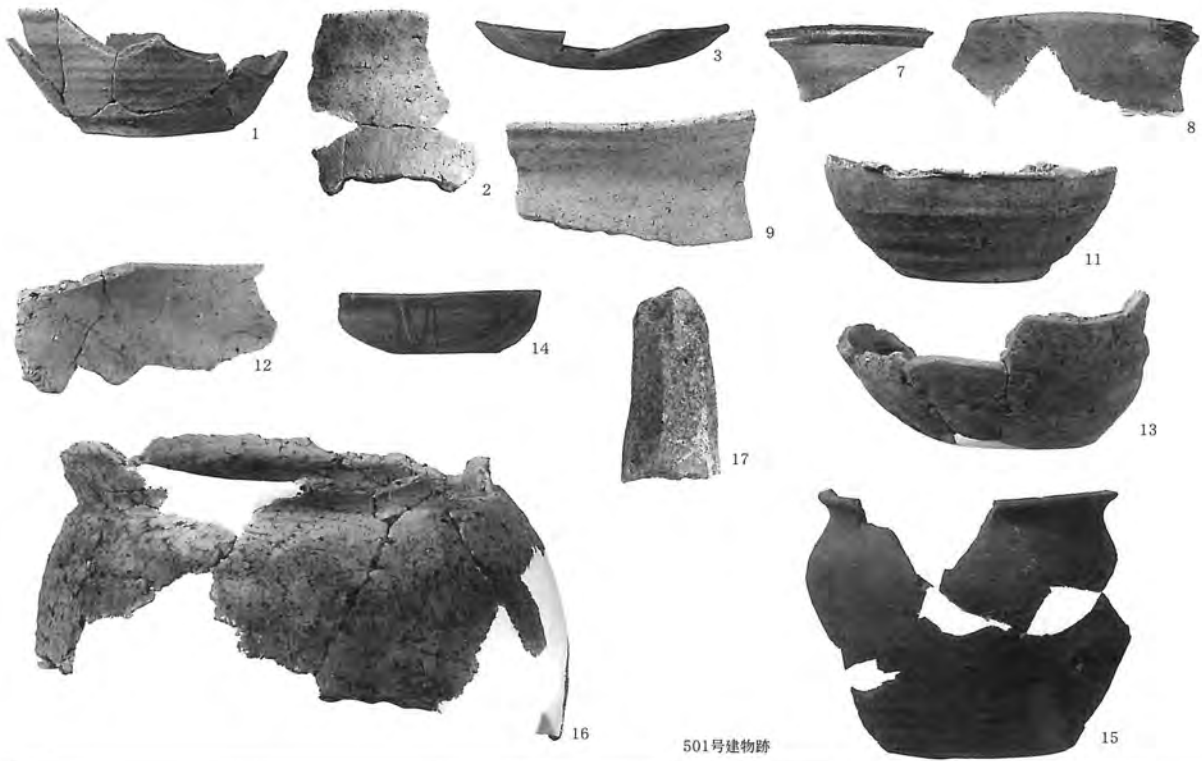


503号建物跡

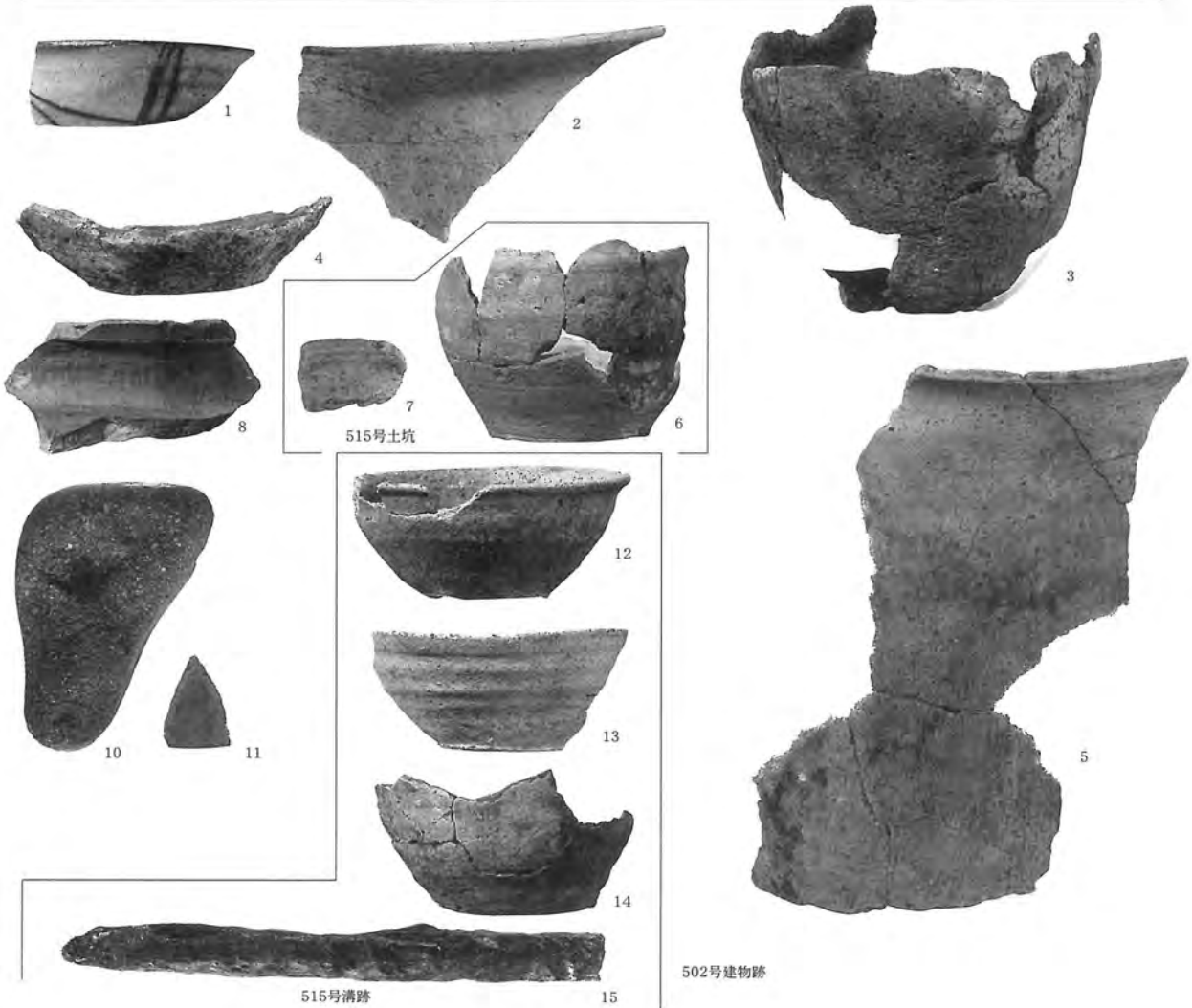


504号建物跡

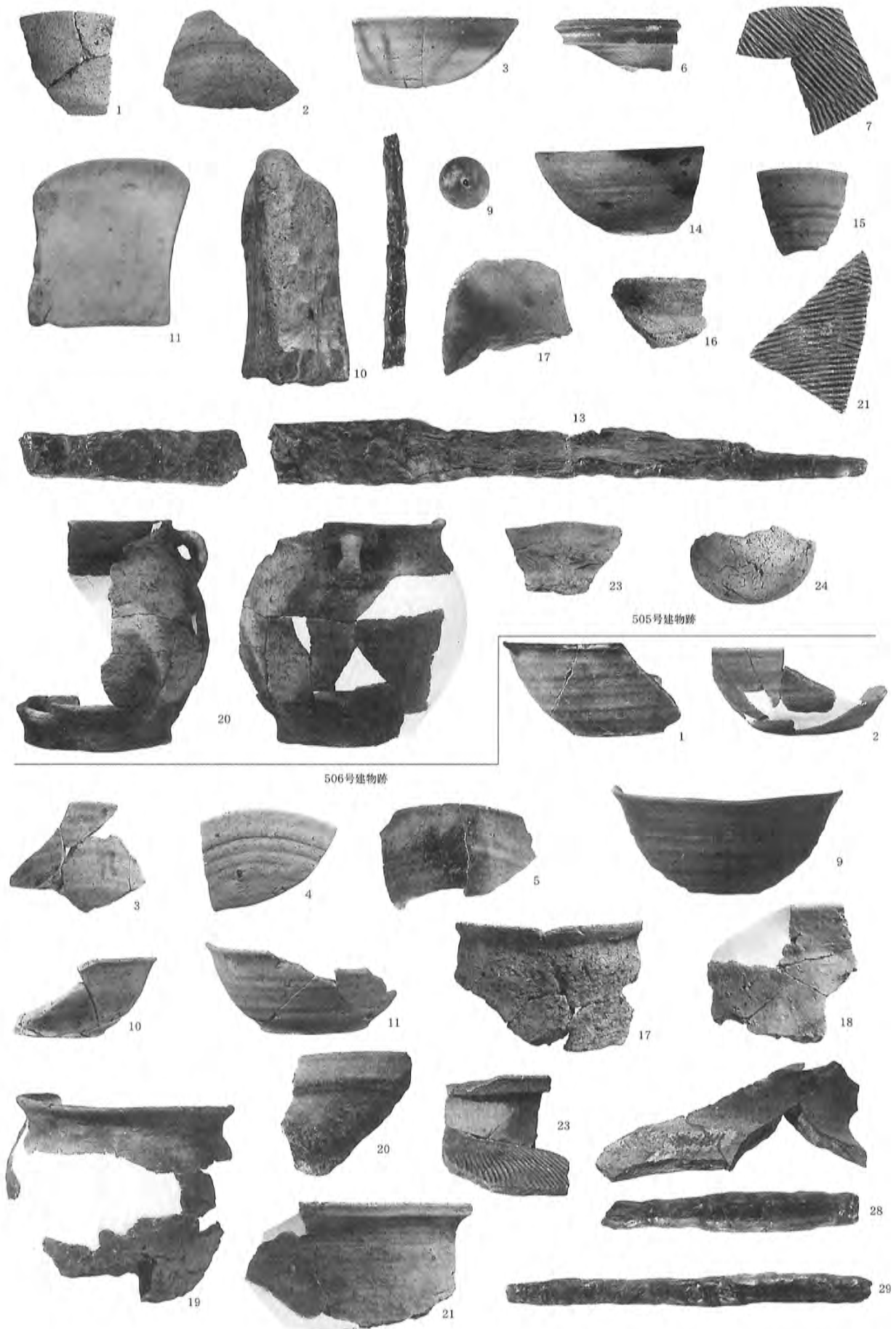
図版56 第503・504号建物跡出土遺物



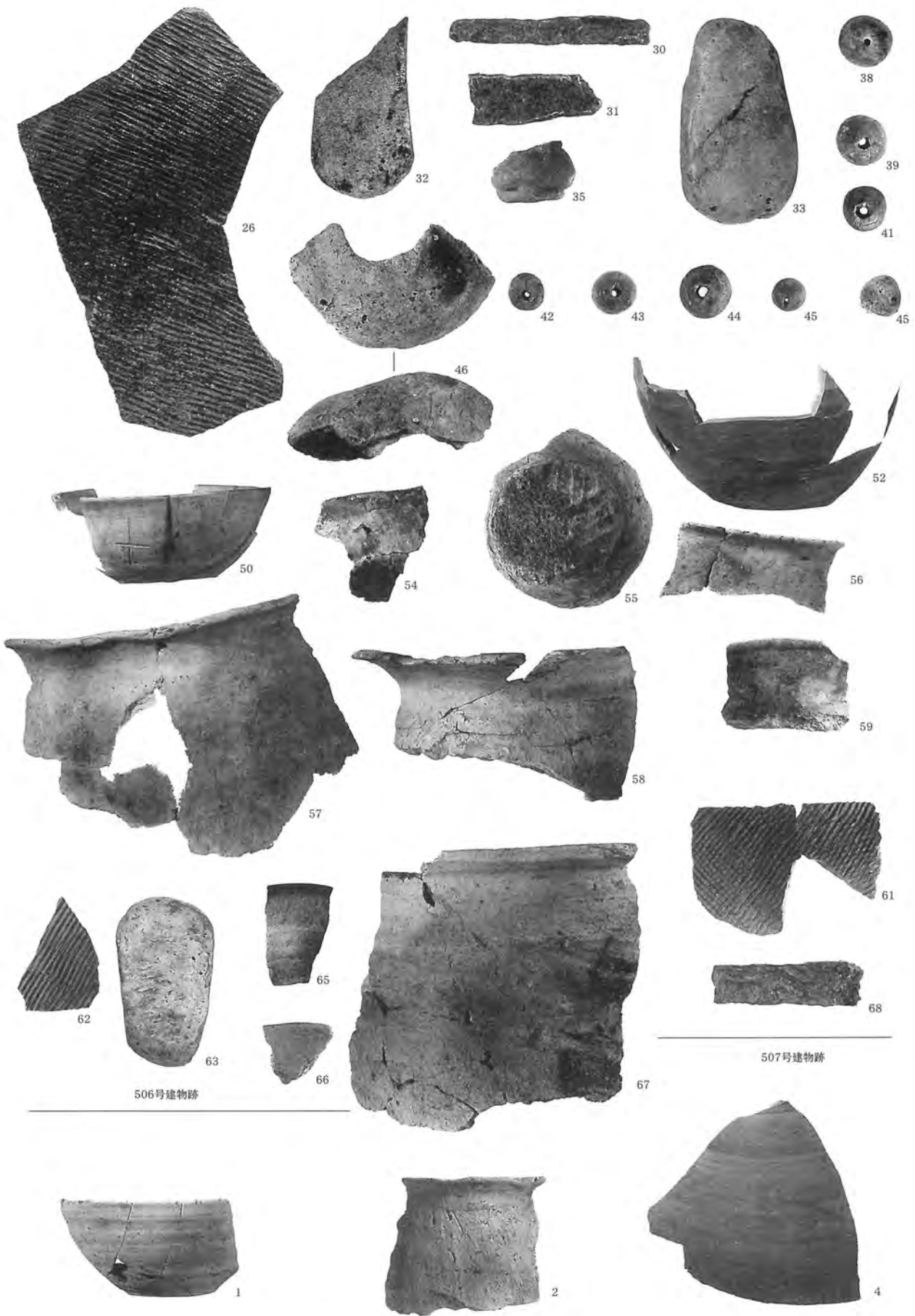
501号建物跡



图版57 第501·502号建物跡出土遺物



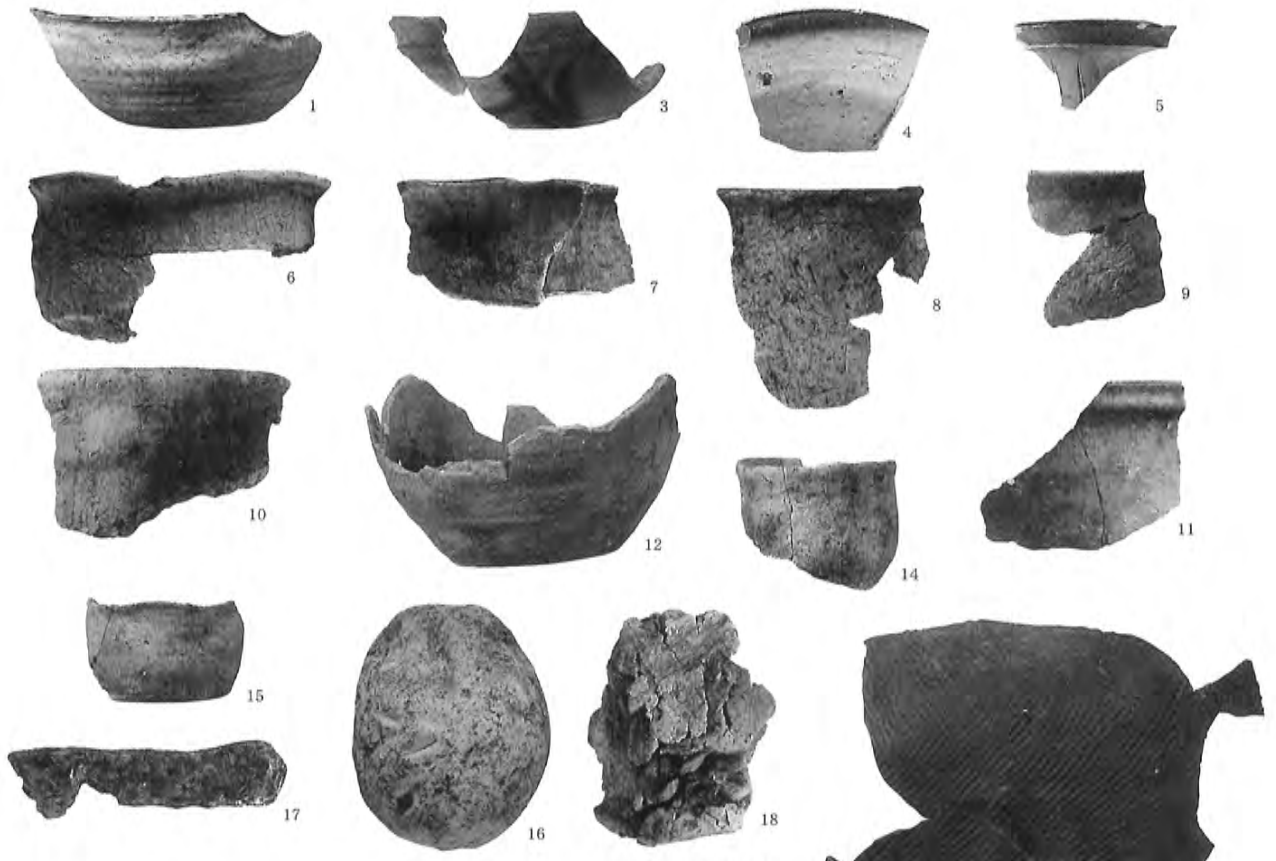
图版58 第505・506号建物跡出土遺物



506号建物跡

507号建物跡

图版59 第506・507号建物跡出土遺物



508号建物跡

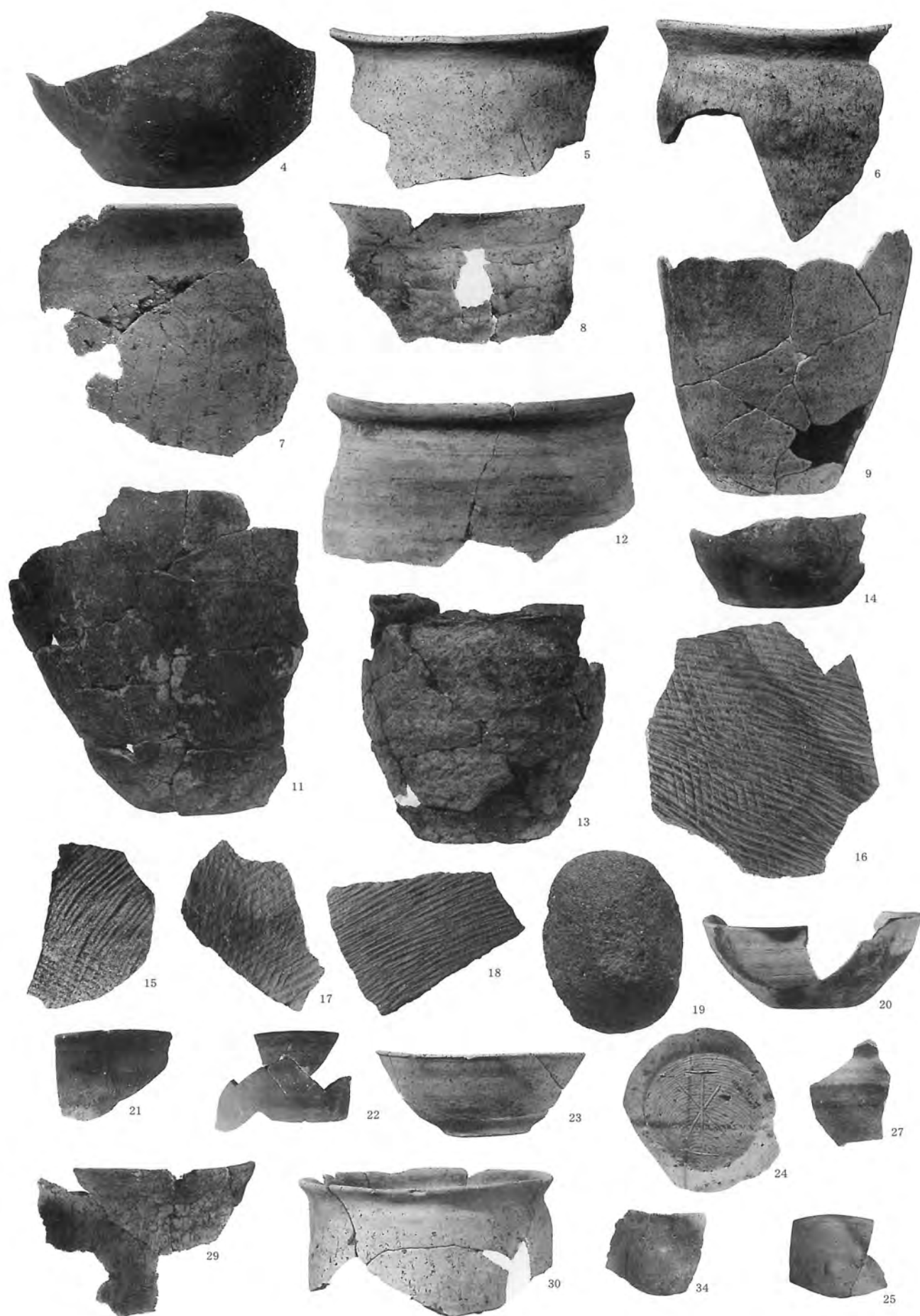


509号建物跡

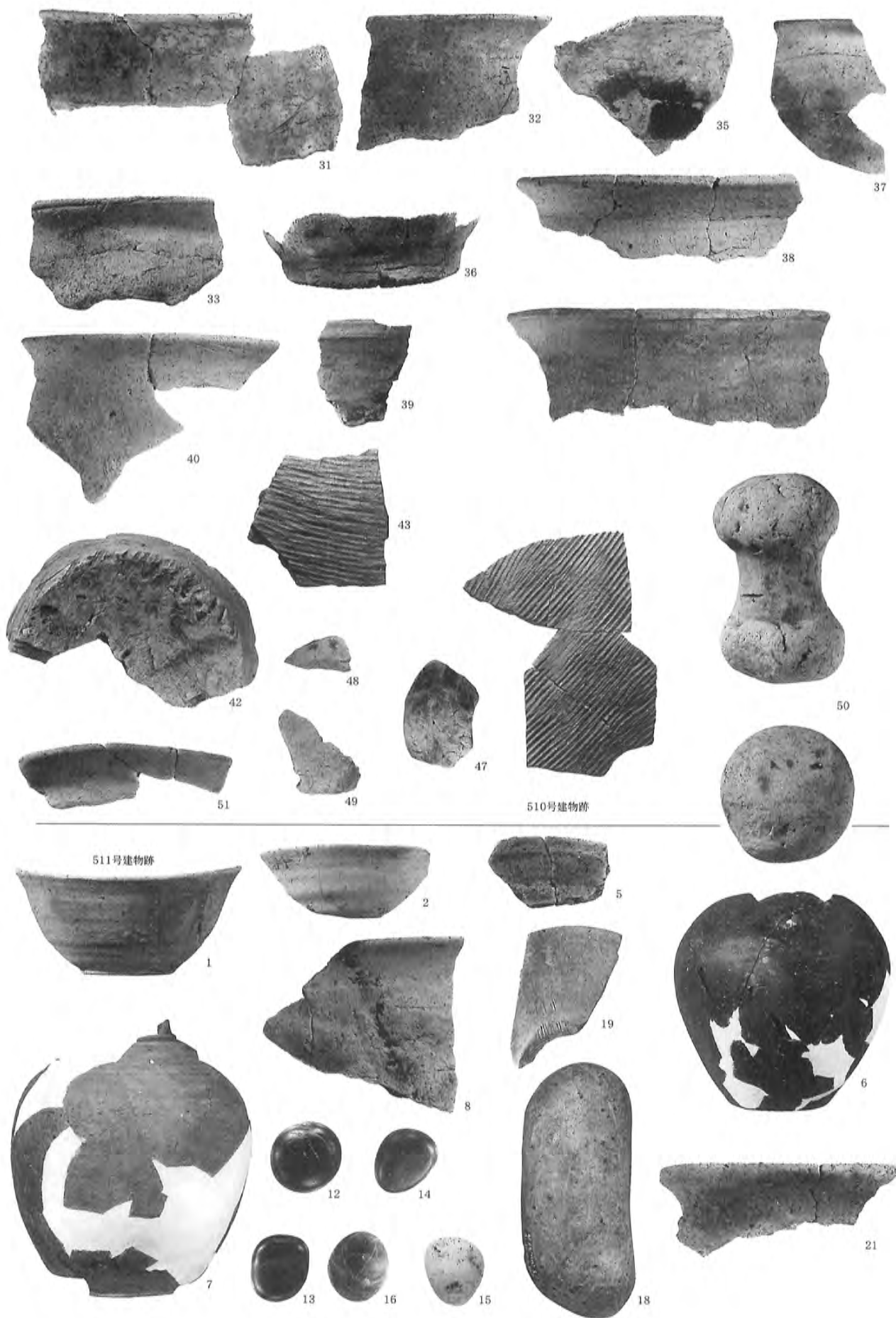
510号建物跡



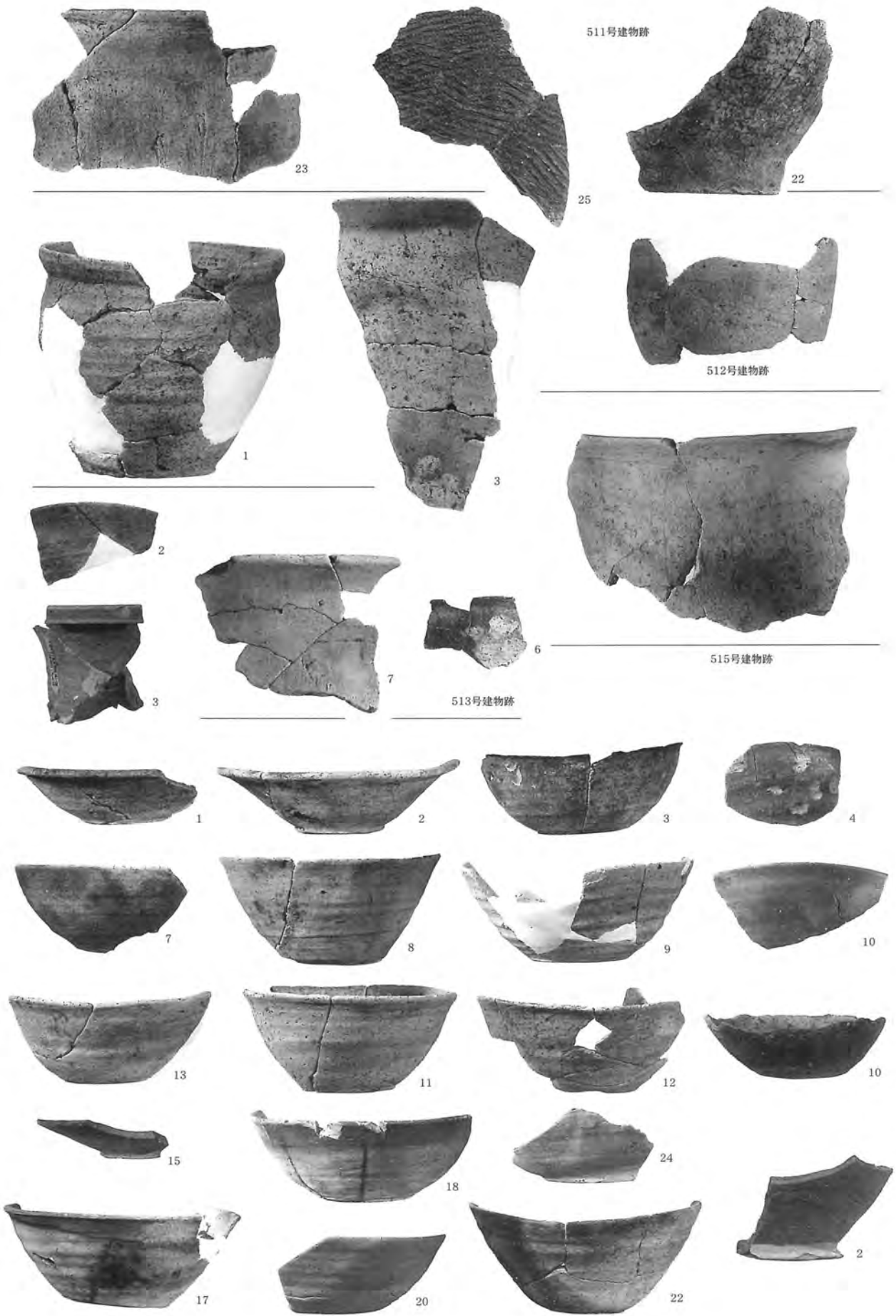
図版60 第508・509号建物跡出土遺物



图版61 第510号建物跡出土遺物



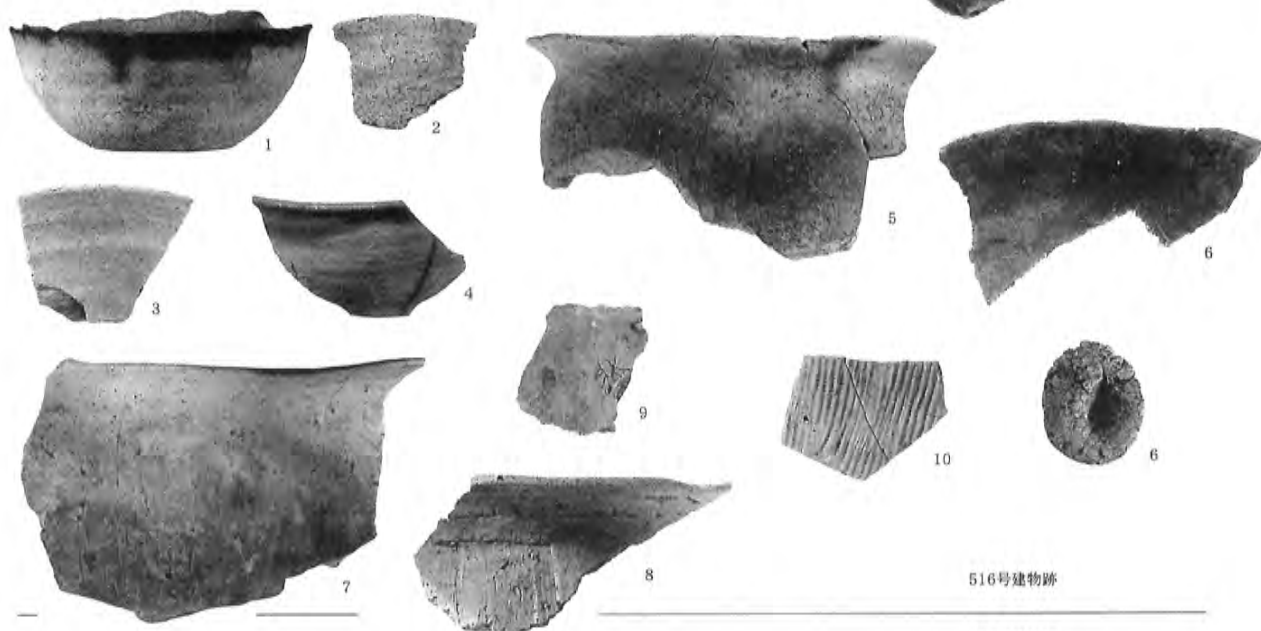
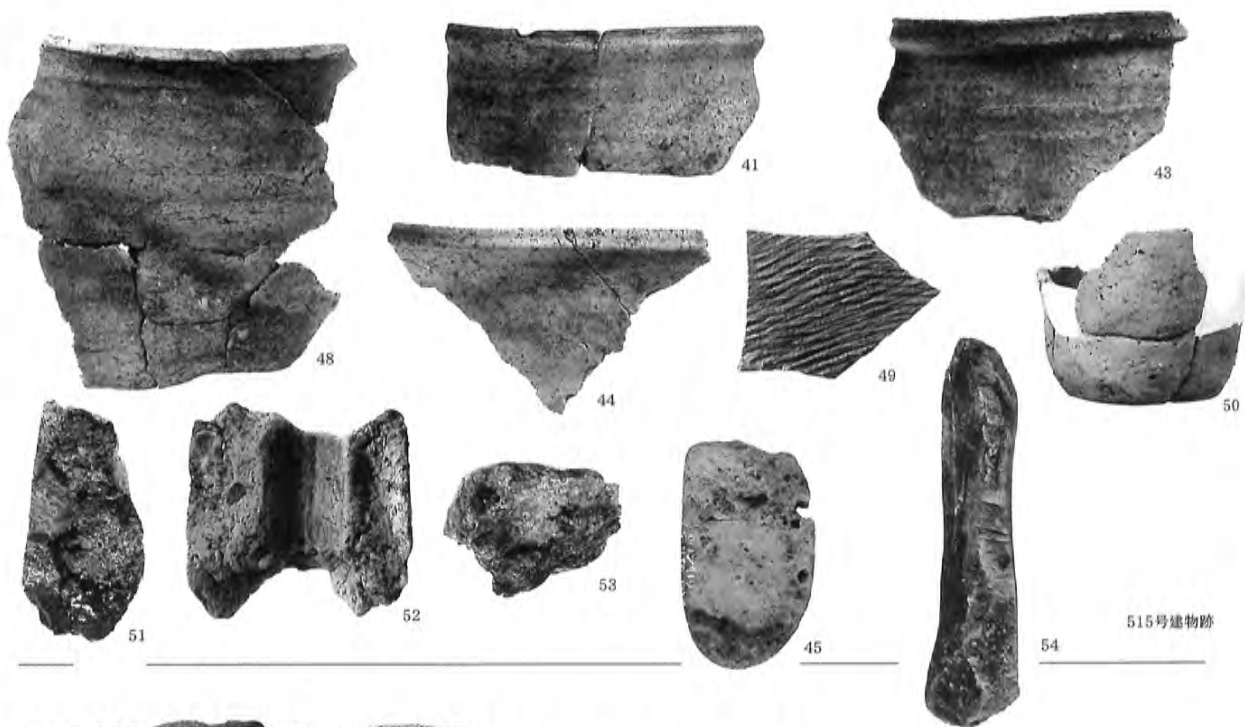
図版62 第510・511号建物跡出土遺物



図版63 第511・512・513・515号建物跡出土遺物



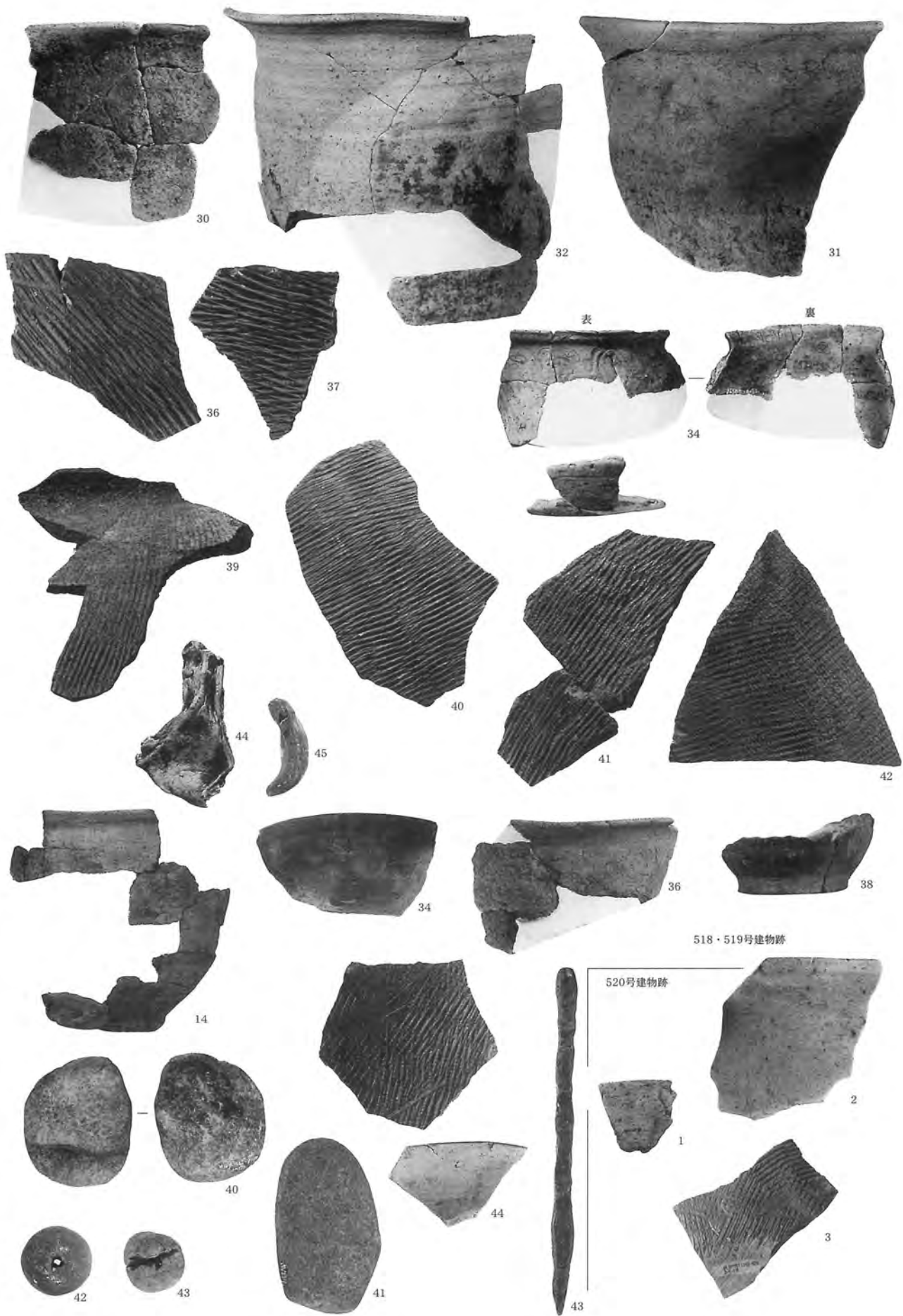
図版64 第515号建物跡出土遺物



图版65 第516·517号建物跡出土遺物



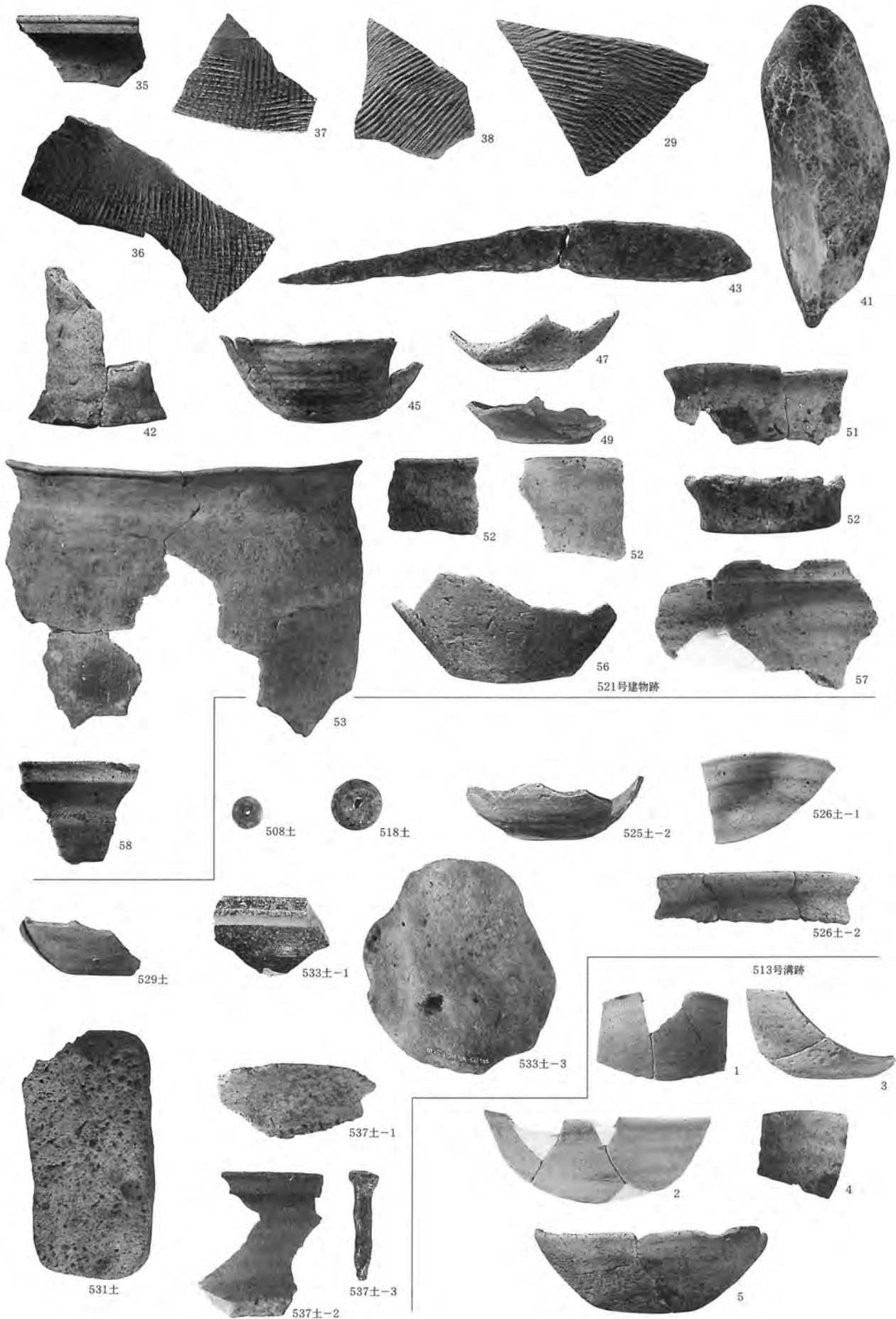
図版66 第518・519号建物跡出土遺物



图版67 第518·519·520号建物跡出土遺物



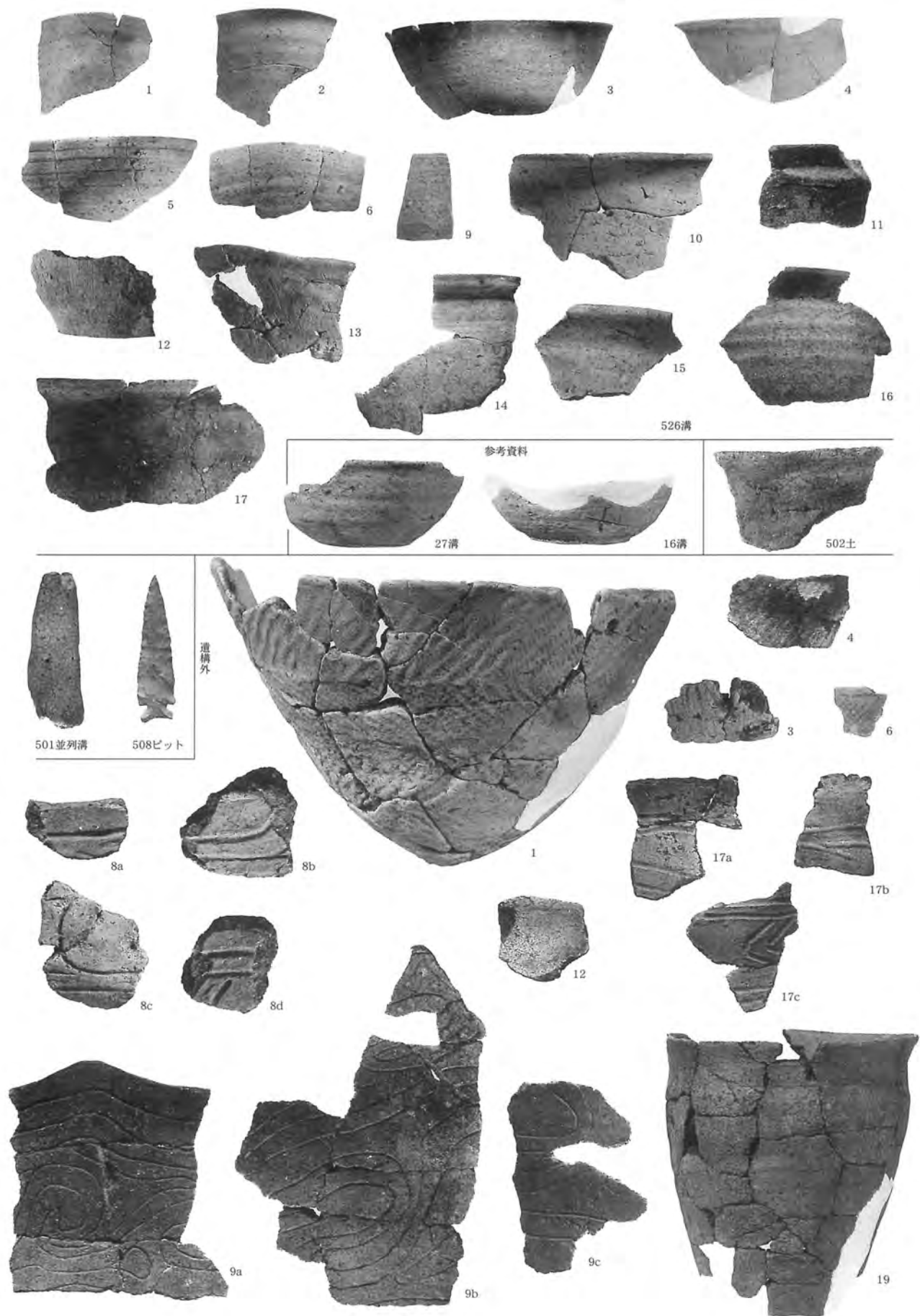
図版68 第521号建物跡出土遺物



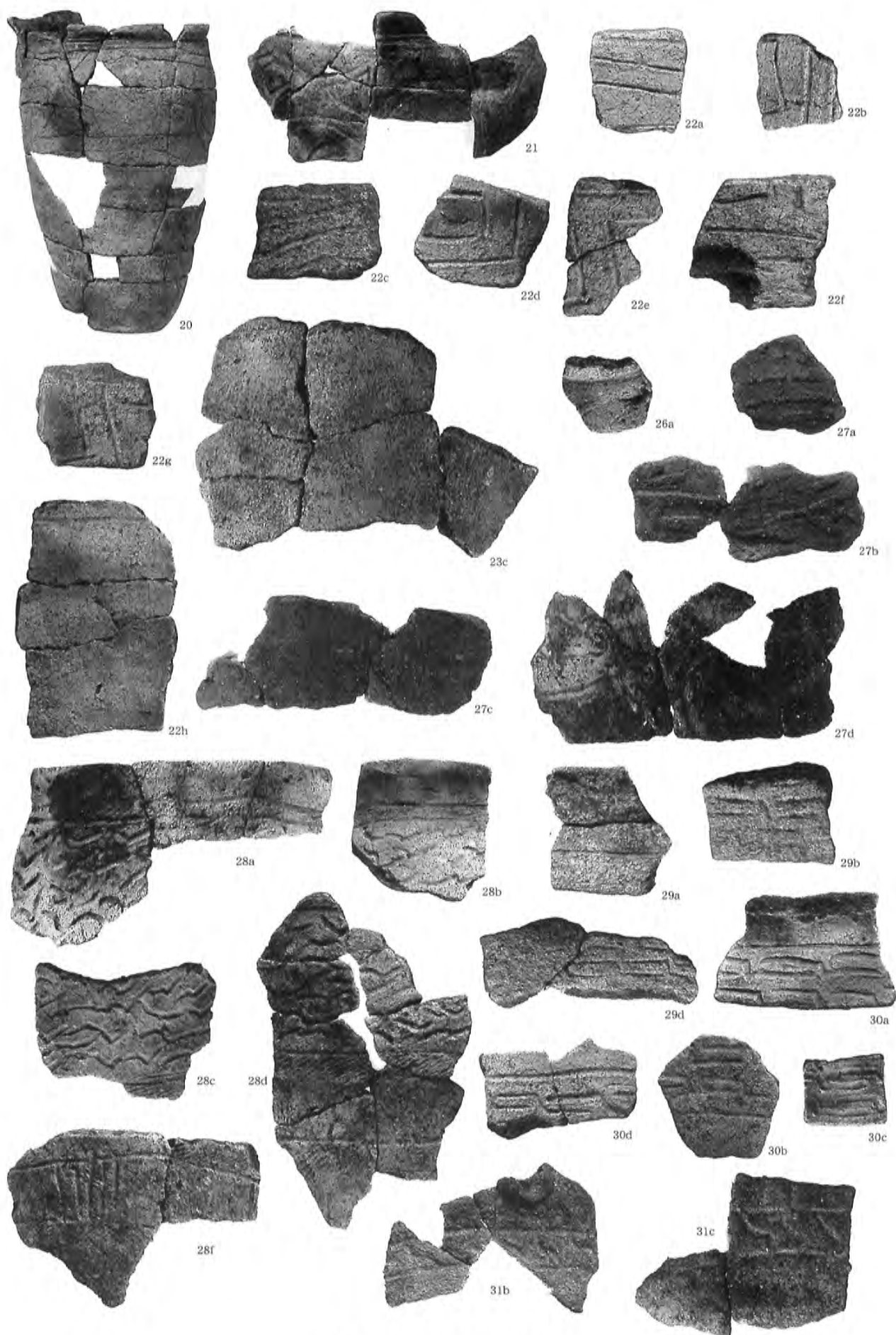
図版69 第521号建物跡・古代の土坑・溝跡出土遺物



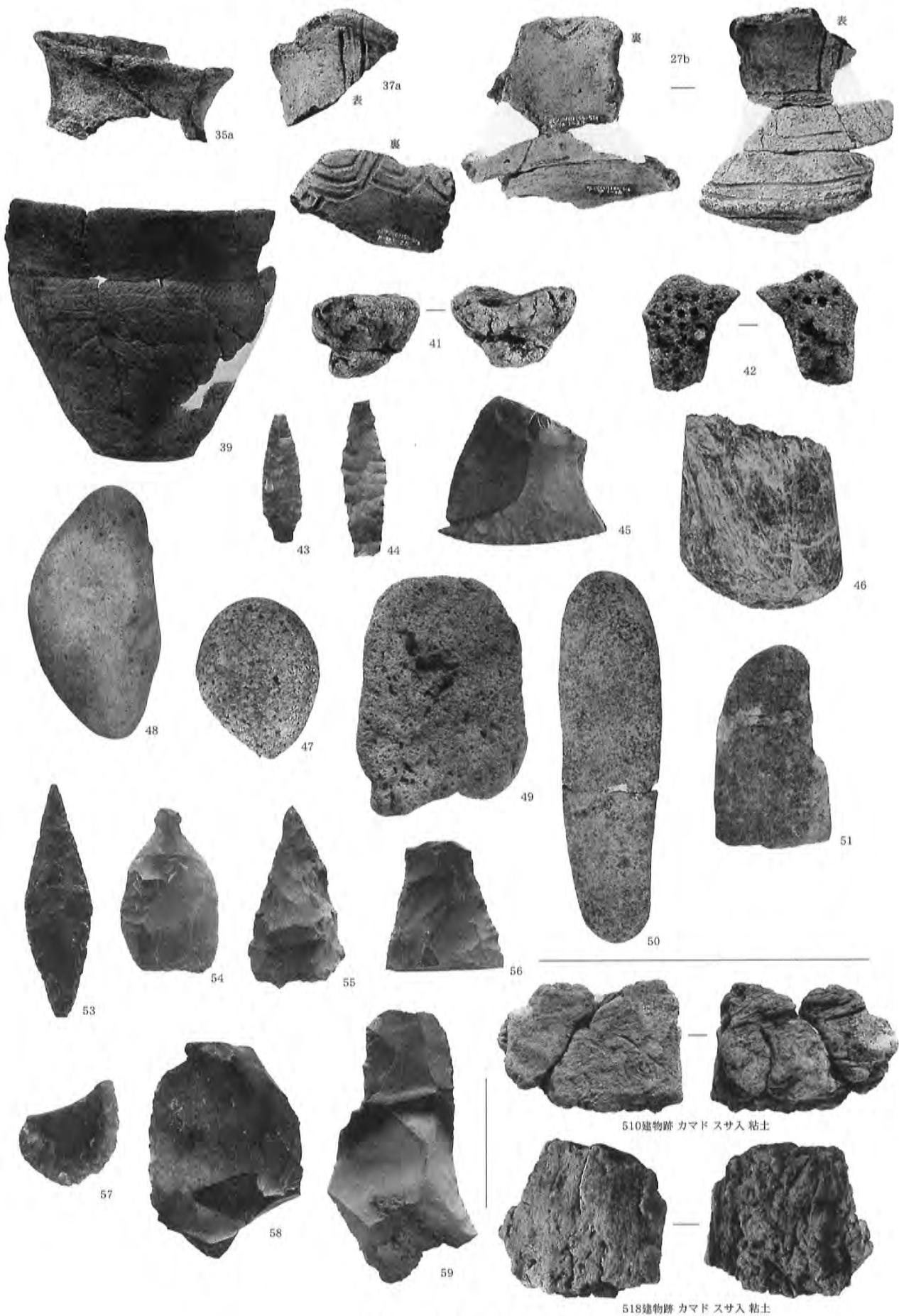
図版70 古代の溝跡出土遺物



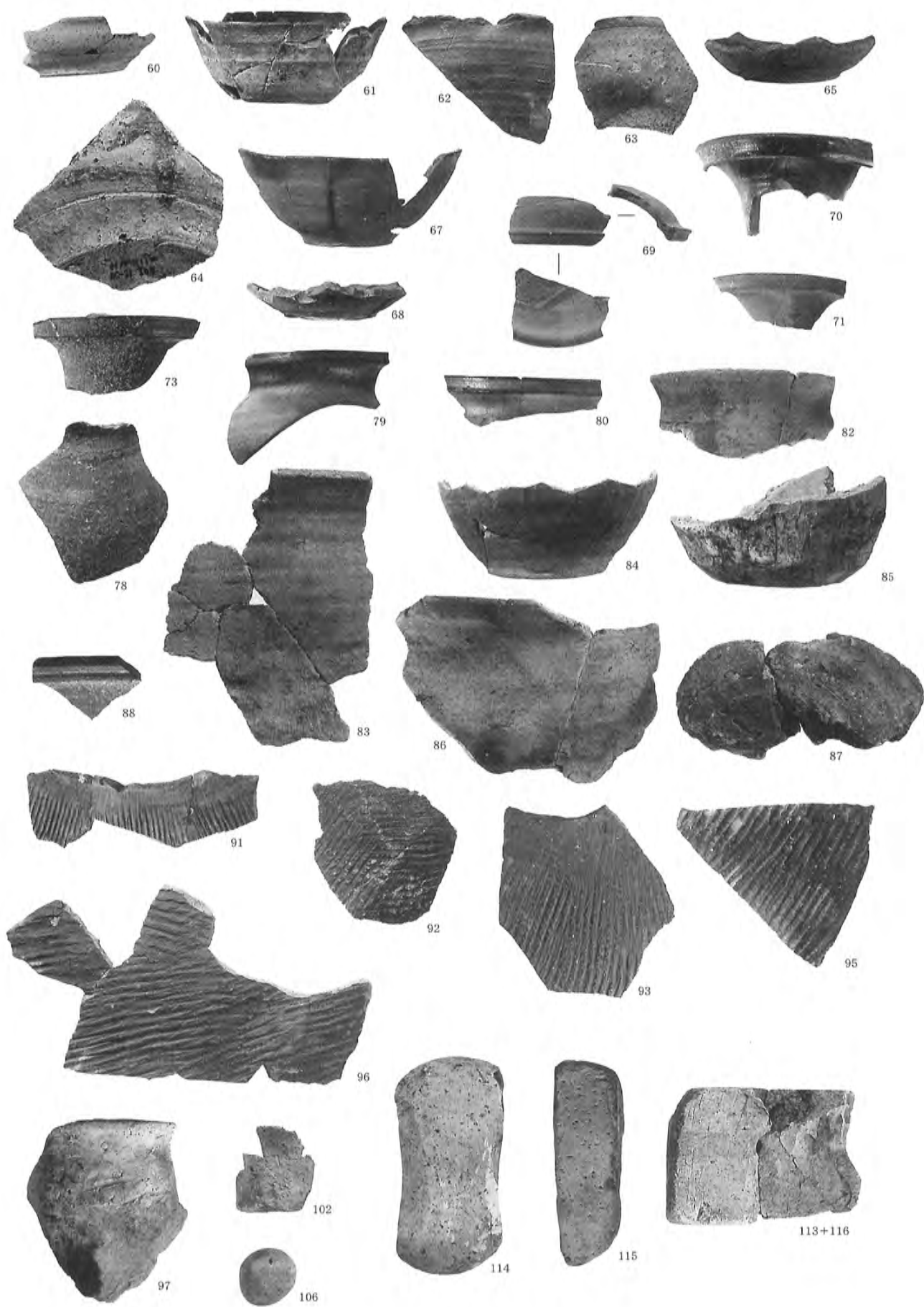
図版71 古代の溝跡・その他の遺構出土遺物・遺構外出土遺物



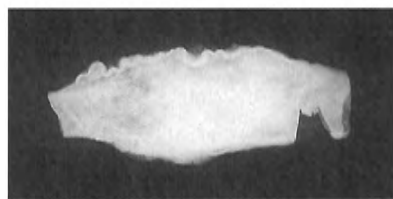
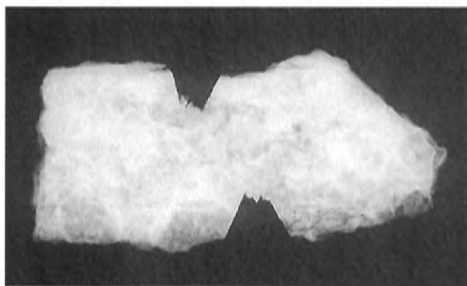
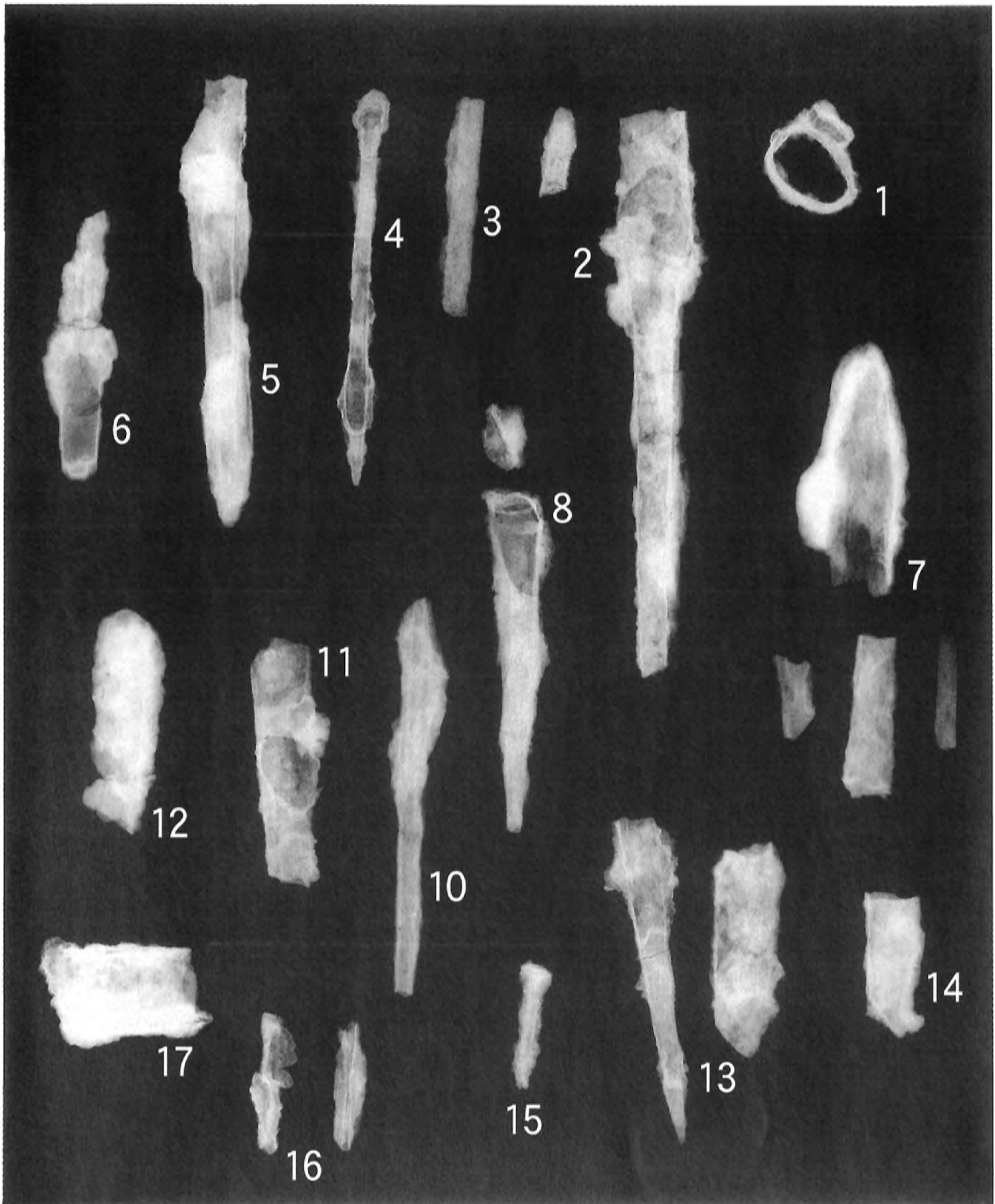
図版72 遺構外出土遺物



図版73 遺構外出土遺物



図版74 遺構外出土遺物



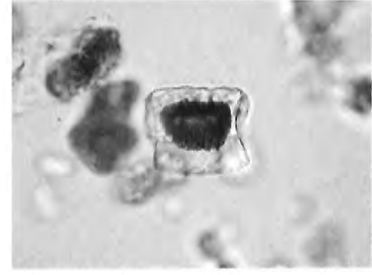
図版75 出土鉄製品のX線写真



イネ
試料9



イネ
試料10



イネ (側面)
試料5



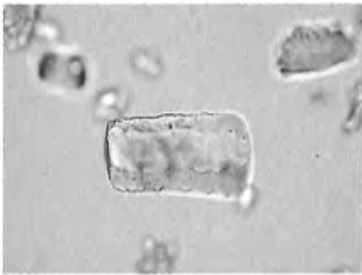
ヒエ属型
試料8



ヒエ属型
試料5



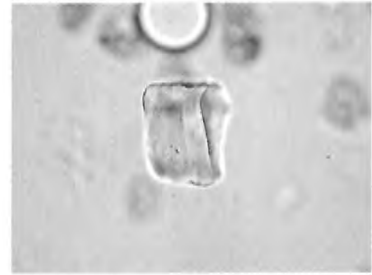
キビ族型
試料5



キビ族型
試料3



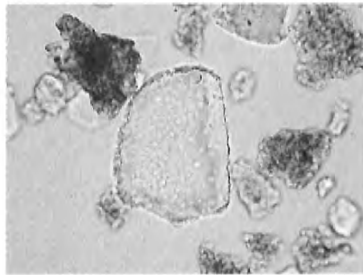
ヨシ属
試料6



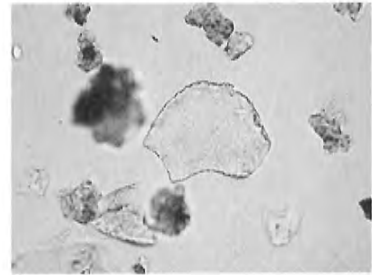
ススキ属型
試料7



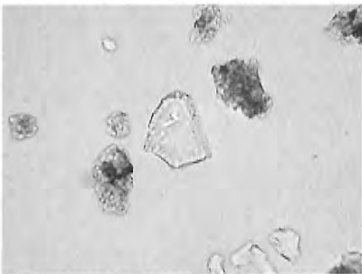
シバ属
試料9



クマザサ属型
試料7



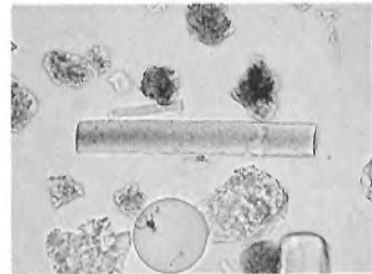
クマザサ属型
試料3



シヤコザサ節型
試料1



表皮毛起源
試料1



棒状珪酸体
試料10

植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

50 μm

報告書抄録

ふりがな	のじりかつこいちいせきご							
書名	野尻(1)遺跡V							
副書名	国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	青森県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第351集							
編著者名	茅野嘉雄・佐藤純子							
編集機関	青森県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒038-0042 青森県青森市新城市天田内152-15 TEL 017-788-5701							
発行年月日	西暦2003年(平成15年) 3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		旧日本測地系 (Tokyo Datum)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	北緯			
のじりかつこいちいせき 野尻(1)遺跡	あおもりけんみなみつがく 青森県南津軽郡 なみおかまちおおざ 浪岡町大字 とくさいし あざやまもと 徳才子字山本 ほか 155-4、他	02364	29060	40°	140°	20000418	9,400㎡	国道101号浪岡 五所川原道路建 設に伴う事前調 査
				44′	35′			
				40.1	2.9″	20001029		
				世界測地系 (JGD2000)				
北緯	北緯	40°	140°					
				44′	34′			
				49.7″	50.3″			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野尻(1)遺跡	集落跡	平安時代	建物跡	25軒	土師器・須恵器・石 器(砥石等)羽口・ 土玉・鉄製品・漆液	○堅穴・外周溝・堀 立部のいわゆる3 点セットで構成さ れる建物跡を多数 検出。	○土師器坯の内部に 溜まった漆を検出	○五所川原須恵器窯 跡群で製作された 須恵器多数出土
	散布地	縄文時代、他	遺物集中箇所	1箇所				
					遺物総量	89箱		

青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第351集

野尻(1)遺跡 V

—国道101号浪岡五所川原道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告書—

発行年月日 平成15年3月28日
発行 青森県教育委員会
〒030-8540 青森市新町二丁目3-1
編集 青森県埋蔵文化財調査センター
〒038-0042 青森市新城天田内152-15
TEL 017-788-5701 FAX 017-788-5702
印刷所 東北印刷工業株式会社
青森県青森市合浦一丁目2-12
TEL 017-742-2221



活彩あおり
—輝くあおり新時代—